岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 129

大田茶屋遺跡 2
大田障子遺跡　大田松山久保遺跡
大田大正開遺跡　大田西奥田遺跡

グリーンヒルズ津山建設に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 129

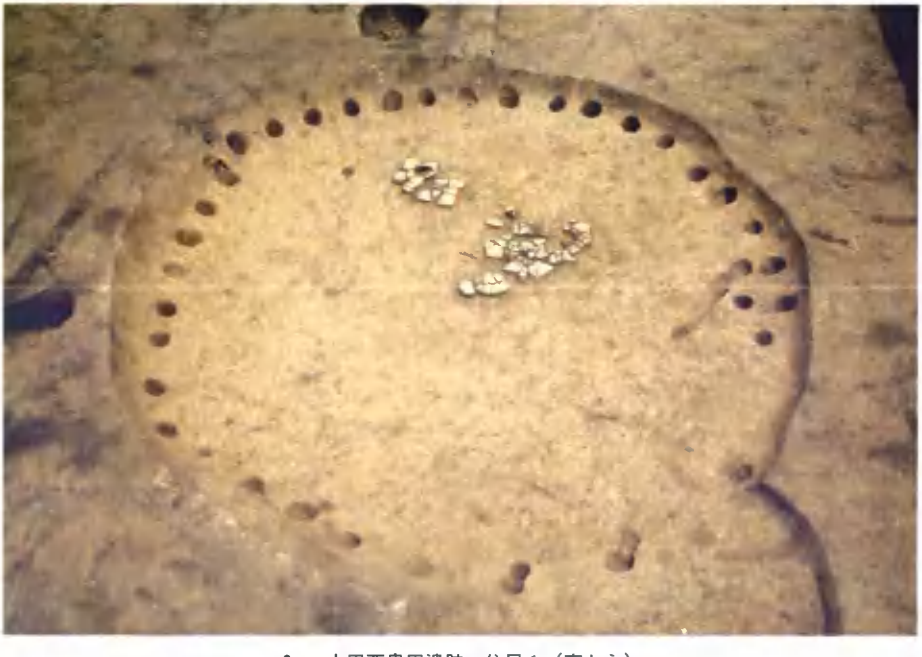
大田茶屋遺跡 2
大田障子遺跡　大田松山久保遺跡
大田大正開遺跡　大田西奥田遺跡

グリーンヒルズ津山建設に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

1 . 調査対象地鳥瞰（南から）



2 . 大田西奥田遺跡・住居 1 （南から）

巻頭図版 2

1．大田茶屋遺跡西地区古代建物群、柵１・２・３（上空から）

2．大田茶屋遺跡東地区古代末建物群・柵（南東から）

序

津山市は、奈良時代に美作国の国府が置かれ、その後は岡山県北部の中心都市として永らく栄えてきました。市街地の北から東になだらかに広がる丘陵上には、旧石器時代以来の人々の痕跡が多く残され、県下でも遺跡の密集した地域として知られています。その一角にある岡山県津山酪農試験場の跡地では、牧草に覆われた空閑地が広がり、のどかな緑の景観が市民にうるおいを与えていました。この跡地の利用について、岡山県と津山市は協議を重ねてきましたが、平成５年１月に、自然を生かした都市型リゾート施設「グリーンヒルズ津山」を建設することが発表されました。跡地内では過去に弥生土器が採集されていたため、遺跡の範囲を確認する発掘調査を実施しましたが、その結果、複数の地点で広範囲に遺跡の所在することが明らかとなりました。これらの遺跡の保存について、担当部局と協議を重ね、縄文時代早期の竪穴住居跡を検出した地区については、地下に影響を与えない形で整備をし、現地で保存することが決まりましたが、他の地区については、現地での保存が困難なため、やむをえず記録保存の処置をとることとしました。

記録保存のための発掘調査は２年間に及び、調査面積は約34,000㎡にのぼりました。検出された遺構・遺物は旧石器時代から近世までの各時代にわたり、あわせて500に近い数の住居・建物・墓などがみつかりました。前述の縄文時代早期の竪穴住居跡をはじめとして、弥生時代後期の掘立柱建物を主体とする集落跡や奈良時代の官衙跡、さらには古代末から中世にかけての大規模な柵列と中近世の集落跡など、注目される成果を次々と得ることができました。なかでも、縄文時代早期の竪穴住居跡はほぼ完全な形をとどめ、中国地方ではまれな例として重要視されますし、また、奈良時代の官衙跡からは美作国分寺と同じ軒瓦が出土し、かなりの広がりをもつと推定されることから、その立地も含めて今後注意される資料です。限られた紙数ではありますが、できるだけ多くの資料を提示することに努めました。ささやかではありますが、本書が地域の歴史の解明にいささかでも役立てられ、人々の古代に対する思いをさらに豊かにできれば幸いです。

調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめ、各研究機関の諸氏からご指導を賜り、岡山県企画部リゾート対策室ならびに、津山市都市計画課・津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターの諸氏にはご協力をいただきました。あらためて厚く感謝を申し上げます。また、地元の方々には発掘作業をはじめとし、さまざまなご援助にあずかり、円滑に事業を進めることができました。深謝申し上げます。

平成10年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　簸　本　克　之

例　　言

1．本書は、グリーンヒルズ津山の建設に伴って発掘調査を実施した、大田茶屋遺跡・大田障子遺跡・大田松山久保遺跡・大田大正開遺跡・大田西奥田遺跡の概要報告書である。各遺跡は津山市大田地内にあり、それぞれが所在する小字名をもって命名した。

2．発掘調査は、岡山県企画部リゾート対策室からの分任事業として、岡山県教育庁文化課が担当し、発掘実務については岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．発掘調査および報告書作成については、岡山県文化財保護審議会委員　近藤義郎氏・水内昌康氏に随時有益な指導・助言をいただいた。

4．発掘調査中、検出した遺構については奈良国立文化財研究所　山中敏史氏に現地指導をいただき、また、関連資料の提供を受けた。出土遺物では、石器石材については倉敷芸術科学大学　妹尾護氏に、鉄滓については九州テクノリサーチ　大澤正己氏に、近世磁器については佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二氏に鑑定の協力をいただいた。

5．発掘調査は、平成4年度の第1次調査から平成7年度の第4次調査まで4カ年に及び、延べ調査面積は43,624㎡にのぼる。それぞれの調査期間と担当者については第2章を参照されたい。

6．報告書の作成は平成8年4月1日から平成9年3月31日まで実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員　岡本寛久・伊東孝が担当した。

7．本書の執筆には岡山県古代吉備文化財センター職員　岡本寛久・岡本泰典・佐藤寛介・島崎東・易伯通・柳瀬昭彦・松本和男があたり、基本的にはそれぞれが担当した事項・事物について記し、項末に文責を示している。編集は岡本寛久が担当した。

8．出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センターに保管しているが、遺物については将来、津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに移管される予定である。

凡　　例

1．本書第3図「周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（津山東部）・（津山西部）を複製したものである。

2．調査にあたっては、国土座標第Ⅴ直角平面座標系にしたがって10m方眼を設定し、実測を行った。座標系と方眼との対応関係は第9・10図を参照されたいが、方眼のA01交点はX＝－100,940m　Y＝－30,180mに位置する。なお、各調査区（例：25M区）の呼称は北西角の交点の名称を採る。

3．遺構の番号については遺跡ごとに付したが、大田茶屋遺跡については『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96』の番号を継承した。なお、遺構名称の後の（　）内は発掘調査時の名称を示す。

4．遺物番号は遺跡の相違にかかわらず材質別の通し番号とし、土製品は番号のみ、石器にはS、金属器にはMを付した。

5．本書掲載図の北方位は真北であり、高度値は海抜高度である。

6．本書掲載図の縮尺は種別に統一を図っている。遺構については、柵は100分の1、住居・建物は80分の1、落とし穴・土壙・墓などは30分の1で一部に例外を含む。遺物では、土器は4分の1、石器・金属器・土錘は2分の1と一部1分の1である。

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　調査の経過 …… 7
　第１節　調査の契機 …… 7
　第２節　第１次調査の経過 …… 8
　第３節　第２次調査の経過 …… 9
　第４節　第３次調査の経過 …… 13
　第５節　第４次調査の経過 …… 17
　第６節　報告書の作成 …… 21
　第７節　調査の体制 …… 22
第３章　縄文時代以前の遺構と遺物 …… 27
　第１節　概要 …… 27
　第２節　大田西奥田遺跡 …… 28
　第３節　大田茶屋遺跡 …… 31
　第４節　大田障子遺跡 …… 42
　第５節　大田大正開遺跡 …… 44
第４章　弥生時代の遺構と遺物 …… 45
　第１節　概要 …… 45
　第２節　大田茶屋遺跡 …… 47
　第３節　大田西奥田遺跡 …… 81
　第４節　大田松山久保遺跡 …… 93
　第５節　大田大正開遺跡 …… 119
　第６節　大田障子遺跡 …… 134
第５章　古墳時代の遺構と遺物 …… 139
　第１節　概要 …… 139
　第２節　大田茶屋遺跡 …… 140
　第３節　大田茶屋古墳 …… 141
第６章　古代の遺構と遺物 …… 146
　第１節　概要 …… 146

第２節　大田茶屋遺跡 …… 149
第３節　大田障子遺跡 …… 183
第４節　大田大正開遺跡 …… 190
第５節　大田西奥田遺跡 …… 191
第７章　古代末から中世の遺構と遺物 …… 192
第１節　概要 …… 192
第２節　大田茶屋遺跡 …… 194
第３節　大田障子遺跡 …… 235
第４節　大田大正開遺跡 …… 240
第５節　大田西奥田遺跡 …… 244
第８章　近世の遺構と遺物 …… 246
第１節　概要 …… 246
第２節　大田茶屋遺跡 …… 248
第３節　大田障子遺跡 …… 291
第４節　大田大正開遺跡 …… 293
第９章　考察とまとめ …… 297
第１節　考察 …… 297
第２節　まとめ …… 305
報告書抄録 …… 314

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　調査対象地(編目部分)
周辺地形図 …… 2
第３図　調査対象地周辺遺跡分布図 …… 4
第４図　調査対象地地形図 …… 7
第５図　第１次・第２次調査トレンチ
配置図(1) …… 8
第６図　第１次調査第10トレンチ出土遺物
…… 9
第７図　第１次・第２次調査トレンチ
配置図(2) …… 10
第８図　第２次調査第12・14－20・36・37トレ
ンチ平面図 …… 12
第９図　大田茶屋・大田障子・大田大正開・大
田松山久保遺跡調査区位置図 … 13
第10図　大田西奥田遺跡調査区位置図 … 14
第11図　大田茶屋遺跡西地区(４－６・11区)
全遺構配置図 …… 15
第12図　大田茶屋遺跡東地区(７－10区)・大田
障子遺跡全遺構配置図 …… 19
第13図　大田茶屋・大田障子・大田大正開・
大田松山久保遺跡周辺地藉図 … 21
第14図　大田大正開遺跡全遺構配置図 … 23
第15図　第72トレンチ(T72)位置及び
遺構配置図 …… 28
第16図　住居１・出土遺物 …… 29
第17図　落とし穴１ …… 30
第18図　大田茶屋遺跡４区北東壁
土層断面図 …… 31
第19図　大田茶屋遺跡西地区(４－６・11区)

縄文時代主要遺構配置図 …… 32
第20図 大田茶屋遺跡東地区(7－10区)縄文時代主要遺構配置図 …… 33
第21図 大田茶屋遺跡5区北東壁土層断面図 …… 34
第22図 大田茶屋遺跡出土旧石器・押型文土器 …… 34
第23図 落とし穴1 …… 35
第24図 落とし穴2 …… 35
第25図 落とし穴3 …… 35
第26図 落とし穴4 …… 35
第27図 落とし穴5 …… 36
第28図 土壙26・出土遺物 …… 36
第29図 土壙27 …… 36
第30図 土壙28 …… 36
第31図 土壙29 …… 37
第32図 土壙30 …… 37
第33図 土壙31 …… 37
第34図 土壙32 …… 37
第35図 土壙33 …… 38
第36図 土壙34・出土遺物 …… 38
第37図 土壙35・出土遺物 …… 39
第38図 集石1 …… 40
第39図 集石2 …… 40
第40図 大田茶屋遺跡出土縄文土器 …… 40
第41図 大田茶屋遺跡出土石器(1) …… 40
第42図 大田茶屋遺跡出土石器(2) …… 41
第43図 大田障子遺跡出土遺物(1) …… 42
第44図 大田障子遺跡出土遺物(2) …… 42
第45図 大田障子遺跡出土遺物(3) …… 43
第46図 大田大正開遺跡出土遺物(1) … 44
第47図 大田茶屋遺跡西地区(4－6・11区)弥生時代主要遺構配置図 …… 46
第48図 大田茶屋遺跡出土弥生時代前期土器 …… 47
第49図 大田茶屋遺跡東地区(7－10区)弥生時代主要遺構配置図 …… 48
第50図 住居4・5・住居4出土遺物 … 49
第51図 住居6 …… 50
第52図 住居7 …… 50
第53図 住居8・出土遺物 …… 51
第54図 住居9・出土遺物 …… 52
第55図 住居10・出土遺物 …… 52
第56図 建物24・出土遺物 …… 53
第57図 建物25 …… 53
第58図 建物26 …… 53
第59図 建物27・出土遺物 …… 54
第60図 建物28 …… 54
第61図 建物29 …… 55
第62図 建物30 …… 55
第63図 建物31・出土遺物 …… 55
第64図 建物32・出土遺物 …… 56
第65図 建物33・出土遺物 …… 56
第66図 建物34 …… 56
第67図 建物34出土遺物 …… 57
第68図 建物35 …… 57
第69図 建物36 …… 57
第70図 建物37 …… 57
第71図 建物38 …… 58
第72図 柱穴列6～8 …… 58
第73図 土壙36・出土遺物 …… 59
第74図 土壙37 …… 59
第75図 土壙38 …… 59
第76図 土壙39 …… 59
第77図 土壙40 …… 59
第78図 土壙41・出土遺物 …… 60
第79図 土壙42・出土遺物 …… 60
第80図 土壙43・出土遺物 …… 61
第81図 弥生墓地1墓壙配置図 …… 62
第82図 墓10 …… 62
第83図 墓11 …… 62
第84図 墓12・出土遺物 …… 63
第85図 墓13 …… 63
第86図 墓14 …… 63
第87図 墓15 …… 63
第88図 弥生墓地2墓壙配置図 …… 64

第89図　墓16 …… 65
第90図　墓17 …… 65
第91図　墓18 …… 65
第92図　墓19 …… 65
第93図　墓20 …… 66
第94図　墓21 …… 66
第95図　墓22 …… 66
第96図　墓23 …… 67
第97図　墓24 …… 67
第98図　墓25 …… 67
第99図　墓26 …… 67
第100図　墓27 …… 68
第101図　弥生墓地3墓壙配置図 …… 68
第102図　墓28・出土遺物 …… 69
第103図　墓29 …… 69
第104図　墓30 …… 69
第105図　墓31 …… 69
第106図　墓32 …… 70
第107図　墓33 …… 70
第108図　河道1土層断面図 …… 71
第109図　河道1出土遺物(1) …… 72
第110図　河道1出土遺物(2) …… 73
第111図　河道1出土遺物(3) …… 74
第112図　河道1出土遺物(4) …… 75
第113図　河道1出土遺物(5) …… 76
第114図　土器溜まり1・出土遺物 …… 77
第115図　大田茶屋遺跡出土弥生土器 … 79
第116図　大田茶屋遺跡出土石器(3) …… 79
第117図　弥生時代主要遺構配置図 …… 81
第118図　大田西奥田遺跡2区調査区
南西壁土層断面図 …… 81
第119図　大田西奥田遺跡2区
全遺構配置図 …… 82
第120図　井戸1・出土遺物 …… 83
第121図　土壙1 …… 83
第122図　土壙2 …… 84
第123図　土壙3・出土遺物 …… 84
第124図　土壙4 …… 84
第125図　土壙4出土遺物 …… 85
第126図　土壙5・出土遺物 …… 85
第127図　溝1・出土遺物 …… 86
第128図　大田西奥田遺跡2区柱穴
出土遺物 …… 87
第129図　大田西奥田遺跡2区包含層
出土遺物(1) …… 88
第130図　大田西奥田遺跡2区包含層
出土遺物(2) …… 90
第131図　大田西奥田遺跡2区包含層
出土遺物(3) …… 91
第132図　弥生時代主要遺構配置図 …… 93
第133図　大田松山久保遺跡
全遺構配置図 …… 94
第134図　住居1・出土遺物 …… 95
第135図　住居2・出土遺物 …… 96
第136図　建物1 …… 97
第137図　建物2・柱穴遺物出土状態 … 98
第138図　建物2出土遺物 …… 99
第139図　建物3・出土遺物 …… 100
第140図　建物4・柱穴遺物出土状態・
出土遺物 …… 101
第141図　建物5 …… 102
第142図　建物6・出土遺物 …… 102
第143図　建物7 …… 103
第144図　建物8 …… 103
第145図　建物9 …… 104
第146図　建物10・出土遺物 …… 104
第147図　建物11・出土遺物 …… 105
第148図　建物12 …… 105
第149図　建物13 …… 106
第150図　建物14・出土遺物 …… 106
第151図　建物15・出土遺物 …… 107
第152図　建物16・出土遺物 …… 107
第153図　建物17 …… 108
第154図　建物18 …… 108
第155図　建物19 …… 109
第156図　建物20 …… 109

第157図　建物21 …… 109
第158図　建物22 …… 110
第159図　建物23・出土遺物 …… 110
第160図　建物24 …… 111
第161図　柱穴列１ …… 111
第162図　柱穴列２ …… 111
第163図　柱穴列３ …… 112
第164図　柱穴列４ …… 112
第165図　柱穴列５・出土遺物 …… 112
第166図　土壙１・出土遺物 …… 112
第167図　土壙２・出土遺物 …… 113
第168図　土壙３・出土遺物 …… 114
第169図　土壙４・出土遺物 …… 115
第170図　土壙５ …… 115
第171図　土壙６ …… 116
第172図　土壙７ …… 116
第173図　土壙８ …… 116
第174図　溝１ …… 116
第175図　大田松山久保遺跡柱穴・
　包含層出土遺物 …… 117
第176図　大田大正開遺跡２区中央土層
　断面図 …… 119
第177図　大田大正開遺跡１区北西壁土層
　断面図 …… 120
第178図　大田大正開遺跡弥生時代
　主要遺構配置図 …… 121
第179図　建物１ …… 122
第180図　建物２ …… 122
第181図　建物３・４・出土遺物 …… 122
第182図　建物５ …… 123
第183図　建物６ …… 123
第184図　墓１ …… 123
第185図　貯蔵穴１ …… 124
第186図　貯蔵穴１出土遺物(1) …… 125
第187図　貯蔵穴１出土遺物(2) …… 126
第188図　土壙１ …… 127
第189図　土壙１出土遺物(1) …… 127
第190図　土壙１出土遺物(2) …… 128
第191図　土器溜まり出土遺物(1) …… 130
第192図　土器溜まり出土遺物(2) …… 131
第193図　大田大正開遺跡
　出土遺物(2) …… 132
第194図　大田大正開遺跡
　出土遺物(3) …… 133
第195図　大田障子遺跡出土遺物(4) …… 135
第196図　大田障子遺跡出土遺物(5) …… 137
第197図　大田障子遺跡出土遺物(6) …… 138
第198図　大田茶屋遺跡東地区(７－10区)
　古墳時代主要遺構配置図 …… 139
第199図　土壙44 …… 140
第200図　土壙45・出土遺物 …… 140
第201図　大田茶屋遺跡出土
　古墳時代遺物 …… 141
第202図　大田茶屋古墳調査前地形
　測量図 …… 142
第203図　大田茶屋古墳トレンチ土層
　断面図 …… 142
第204図　大田茶屋古墳横穴式石室 …… 143
第205図　大田茶屋古墳遺物出土状態 … 144
第206図　大田茶屋古墳出土遺物 …… 145
第207図　大田茶屋遺跡西地区(４－６・11区)
　古代主要遺構配置図 …… 147
第208図　大田茶屋遺跡東地区(７－10区)
　古代主要遺構配置図 …… 148
第209図　住居11 …… 149
第210図　住居11出土遺物 …… 150
第211図　建物39 …… 150
第212図　建物40 …… 151
第213図　建物41 …… 152
第214図　建物42 …… 152
第215図　建物43・出土遺物 …… 153
第216図　建物44 …… 154
第217図　建物45 …… 154
第218図　建物47・出土遺物 …… 155
第219図　建物46 …… 156
第220図　建物48・出土遺物 …… 156

第221図　建物49 …… 157
第222図　建物50・出土遺物 …… 157
第223図　建物51・出土遺物 …… 158
第224図　建物52出土遺物 …… 158
第225図　建物52 …… 159
第226図　建物53 …… 160
第227図　建物53出土遺物 …… 161
第228図　建物53・塀１・塀２配置図 … 162
第229図　建物54 …… 162
第230図　建物55 …… 162
第231図　塀１ …… 163
第232図　塀２ …… 163
第233図　柱穴２ …… 163
第234図　柱穴３・出土遺物 …… 163
第235図　土壙46 …… 164
第236図　土壙47 …… 164
第237図　土壙48 …… 164
第238図　土壙49・出土遺物 …… 165
第239図　土壙50～52 …… 165
第240図　土壙53・出土遺物 …… 166
第241図　土壙54 …… 166
第242図　土壙55・出土遺物 …… 167
第243図　土壙55・56 …… 168
第244図　土壙56出土遺物 …… 170
第245図　溝８・出土遺物 …… 171
第246図　溝９ …… 171
第247図　河道２・出土遺物 …… 172
第248図　大田茶屋遺跡西地区出土
古代遺物(1) …… 173
第249図　大田茶屋遺跡西地区出土
古代遺物(2) …… 174
第250図　大田茶屋遺跡西地区出土瓦塔
…… 175
第251図　大田茶屋遺跡東地区出土
古代遺物(1) ……175
第252図　大田茶屋遺跡東地区出土
古代遺物(2) …… 176
第253図　大田茶屋遺跡出土軒丸瓦 …… 176
第254図　大田茶屋遺跡出土軒平瓦 …… 177
第255図　大田茶屋遺跡出土丸瓦 …… 179
第256図　大田茶屋遺跡出土平瓦(1) …… 180
第257図　大田茶屋遺跡出土平瓦(2) …… 181
第258図　奈良時代主要遺構配置図 …… 183
第259図　建物１・出土遺物 …… 183
第260図　大田障子遺跡調査区南東壁土層
断面図 …… 184
第261図　土壙１・出土遺物 …… 185
第262図　土壙２・出土遺物 …… 186
第263図　土壙３ …… 186
第264図　土壙４出土遺物 …… 186
第265図　土壙４ …… 187
第266図　土壙５・出土遺物 …… 188
第267図　溝１・出土遺物 …… 188
第268図　大田障子遺跡出土遺物(7) …… 189
第269図　大田大正開遺跡
出土遺物(4) …… 190
第270図　大田西奥田遺跡１・２区
出土遺物 …… 191
第271図　大田茶屋遺跡西地区(４－６・11区)
古代末～中世主要遺構配置図
…… 193
第272図　大田茶屋遺跡東地区(７－10区)
古代末～中世主要遺構配置図
…… 195
第273図　建物17 …… 196
第274図　建物56 …… 196
第275図　建物57 …… 196
第276図　建物59・出土遺物 …… 197
第277図　建物58 …… 198
第278図　建物61 …… 198
第279図　建物60 …… 198
第280図　建物62 …… 199
第281図　建物62出土遺物 …… 200
第282図　建物63・出土遺物 …… 200
第283図　建物64・出土遺物 …… 201
第284図　建物65 …… 201

第285図　建物66・出土遺物 …… 202
第286図　建物69・出土遺物 …… 203
第287図　建物67 …… 204
第288図　建物68 …… 204
第289図　建物70 …… 204
第290図　建物71 …… 205
第291図　建物73 …… 205
第292図　建物72・74・75・77 …… 206
第293図　建物76・78・79・80・81 …… 207
第294図　建物83・出土遺物 …… 208
第295図　建物82 …… 208
第296図　建物84 …… 209
第297図　建物86・出土遺物 …… 209
第298図　建物85 …… 210
第299図　建物87 …… 210
第300図　建物88・90・91・92・93・
　　建物91出土遺物 …… 211
第301図　建物89 …… 212
第302図　建物94 …… 212
第303図　建物96 …… 212
第304図　建物95・97・98・99・100 …… 213
第305図　建物101 …… 214
第306図　柵１ …… 215
第307図　柵３・出土遺物 …… 215
第308図　建物102・出土遺物 …… 217
第309図　建物103 …… 217
第310図　柵２・出土遺物 …… 219
第311図　柵４ …… 221
第312図　柵５ …… 223
第313図　柵７ …… 224
第314図　柵６(1) …… 225
第315図　柵６(2)・出土遺物 …… 227
第316図　柱穴列９～19 …… 229
第317図　柱穴列20～23 …… 230
第318図　土壙57・出土遺物 …… 231
第319図　土壙58 …… 231
第320図　土壙59 …… 231
第321図　土壙60 …… 232
第322図　土壙61・出土遺物 …… 232
第323図　土壙62 …… 232
第324図　溝10 …… 232
第325図　大田茶屋遺跡出土古代～中世
　　遺物(1) …… 233
第326図　大田茶屋遺跡出土古代～中世
　　遺物(2) …… 234
第327図　古代末～中世主要遺構配置図
　　…… 235
第328図　建物２・出土遺物 …… 236
第329図　建物３・出土遺物 …… 237
第330図　建物４ …… 237
第331図　柵１・２ …… 237
第332図　溝２ …… 239
第333図　大田障子遺跡出土遺物(8) …… 239
第334図　建物７ …… 240
第335図　建物８ …… 240
第336図　大田大正開遺跡古代末～中世
　　主要遺構配置図 …… 241
第337図　建物９・出土遺物 …… 242
第338図　建物10 …… 242
第339図　建物11 …… 243
第340図　大田大正開遺跡出土
　　遺物(5) …… 243
第341図　大田西奥田遺跡１区調査範囲
　　及びトレンチ位置図 …… 244
第342図　トレンチ89西壁土層断面図 … 244
第343図　大田西奥田遺跡１区
　　全遺構配置図 …… 245
第344図　１区柱穴群・出土遺物 …… 245
第345図　大田西奥田遺跡２区包含層
　　出土遺物(4) …… 245
第346図　大田茶屋遺跡西地区(４－６・11区)
　　近世主要遺構配置図 …… 247
第347図　建物104～107重複関係 …… 248
第348図　大田茶屋遺跡東地区(７－10区)
　　近世主要遺構配置図 …… 249
第349図　建物104 …… 250

第350図　建物105 …… 251
第351図　建物106・出土遺物 …… 252
第352図　建物107 …… 253
第353図　建物108 …… 254
第354図　建物109 …… 254
第355図　建物110 …… 255
第356図　建物112 …… 255
第357図　建物113 …… 255
第358図　建物111 …… 256
第359図　建物114・出土遺物 …… 256
第360図　建物115 …… 257
第361図　建物116 …… 257
第362図　建物118・出土遺物 …… 258
第363図　建物117・出土遺物 …… 259
第364図　建物119 …… 259
第365図　建物120 …… 260
第366図　建物121 …… 260
第367図　建物122 …… 261
第368図　建物123 …… 261
第369図　建物124・出土遺物 …… 261
第370図　建物125 …… 262
第371図　建物126 …… 262
第372図　建物127 …… 262
第373図　建物129 …… 263
第374図　建物128・130・131・132 …… 264
第375図　建物133 …… 265
第376図　建物134・出土遺物 …… 265
第377図　建物135 …… 266
第378図　建物136 …… 267
第379図　建物137 …… 267
第380図　建物138 …… 268
第381図　建物139 …… 268
第382図　建物140 …… 268
第383図　建物141 …… 269
第384図　建物142 …… 269
第385図　建物143 …… 269
第386図　建物144・出土遺物 …… 270
第387図　建物145 …… 270
第388図　建物146 …… 271
第389図　瓦窯1・排水溝 …… 271
第390図　瓦窯1本体・出土遺物 …… 272
第391図　池1・出土遺物 …… 273
第392図　穴蔵1 …… 274
第393図　穴蔵1出土遺物(1) …… 275
第394図　穴蔵1出土遺物(2) …… 276
第395図　穴蔵1出土遺物(3) …… 277
第396図　穴蔵1出土遺物(4) …… 278
第397図　穴蔵2・出土遺物 …… 279
第398図　穴蔵3 …… 280
第399図　墓34 …… 281
第400図　墓35・出土遺物 …… 281
第401図　墓36・出土遺物 …… 281
第402図　墓37 …… 282
第403図　墓38・出土遺物 …… 282
第404図　墓39・出土遺物 …… 283
第405図　土壙64・出土遺物 …… 284
第406図　土壙84・出土遺物 …… 284
第407図　土壙85 …… 285
第408図　土壙91・出土遺物 …… 285
第409図　土壙104・出土遺物 …… 285
第410図　土壙110 …… 286
第411図　土壙136 …… 286
第412図　土壙102・出土遺物(1) …… 287
第413図　土壙102出土遺物(2) …… 288
第414図　土壙102出土遺物(3) …… 289
第415図　近世主要遺構配置図 …… 291
第416図　建物5 …… 291
第417図　土壙6 …… 292
第418図　土壙7 …… 292
第419図　土壙8 …… 292
第420図　近世主要遺構配置図 …… 293
第421図　建物12 …… 294
第422図　建物13 …… 294
第423図　墓2・出土遺物 …… 295
第424図　土壙2 …… 295
第425図　溝1・2 …… 295

第426図　溝１出土遺物 …… 296
第427図　溝３・４ …… 296
第428図　津山盆地内出土石包丁時期別変遷図 …… 299

表　目　次

第１表　第２次トレンチ一覧表 …… 11
第２表　建物・柱穴列一覧表(1) …… 306
第３表　建物・柱穴列一覧表(2) …… 307
第４表　建物・柱穴列一覧表(3) …… 308
第５表　建物・柱穴列一覧表(4) …… 309
第６表　大田茶屋遺跡近世土壙一覧表 … 310
第７表　石器一覧表(1) …… 310
第８表　石器一覧表(2) …… 311
第９表　石器一覧表(3) …… 312
第10表　鉄滓鑑定結果一覧表 …… 312
第11表　近世磁器鑑定結果一覧表 …… 313

図　版　目　次

巻頭図版１
１．調査対象地鳥瞰(南から)
２．大田西奥田遺跡・住居１(南から)
巻頭図版２
１．大田茶屋遺跡西地区古代建物群、柵１・２・３(上空から)
２．大田茶屋遺跡東地区古代末建物群・柵(南東から)
図版１
１．調査地遠景(西から)
２．大田西奥田遺跡・住居１(南から)
３．大田茶屋遺跡・土壙35(北から)
４．同・落とし穴２(西から)
５．同・住居４・５(東から)
図版２
１．大田茶屋遺跡・住居８(北から)
２．同・河道１土層断面(北東から)
３．同・墓22(南東から)
４．同・墓28(東から)
５．同・土壙43(南から)
図版３
１．大田松山久保遺跡全景(北東から)
２．同・住居１・２(北から)
図版４
１．大田松山久保遺跡・建物群南半(東から)
２．同・建物１・６～８・18(南から)
３．同・建物２柱穴２(北から)
４．同・建物４柱穴３(南東から)
５．同・土壙３(南西から)
図版５
１．大田大正開遺跡・貯蔵穴１(西から)
２．同・土壙１(北から)
３．同・墓１(東から)
４．大田西奥田遺跡・土壙４(西から)
図版６
１．大田茶屋古墳横穴式石室(南東から)
２．同・遺物出土状態(南東から)
３．大田茶屋遺跡・住居11(南東から)
図版７
１．大田茶屋遺跡・古代建物群(北から)
２．同・建物52(北から)
３．同・建物47(東から)
４．同・建物49(北から)

図版８
１．大田茶屋遺跡・柵１(南東から)
２．同・柵２・３(南西から)
３．大田茶屋遺跡・西地区中世建物群(上空から)
４．同・建物62(南東から)
図版９
１．大田茶屋遺跡・東地区近世建物群(南上空から)
２．同・建物118(上空から)
３．同・建物104～107(上空から)
４．同・建物71・72(東から)
５．同・７区中・近世遺構群(北西から)
図版10
１．大田茶屋遺跡・池１(東から)
２．同・穴蔵１(北から)
３．同・瓦窯１(南西から)
４．同・墓38(東から)
５．同・墓39(東から)
図版11
１．大田西奥田遺跡・住居１出土縄文土器
２．大田茶屋遺跡出土縄文土器
３．大田茶屋遺跡出土縄文時代石器
４．大田障子遺跡出土縄文時代石器
図版12
１．大田障子遺跡出土縄文時代石器
２．大田大正開遺跡出土縄文時代石器
３．大田茶屋遺跡出土弥生時代石器
図版13
１．大田茶屋遺跡出土弥生時代石器・土器
図版14
１．大田西奥田遺跡出土弥生時代土器・石器
図版15
１．大田松山久保遺跡出土弥生時代土器・石器
２．大田大正開遺跡・土壙１出土土器
図版16
１．大田大正開遺跡出土弥生時代土器・石器
図版17
１．大田障子遺跡出土弥生時代石器
図版18
１．大田茶屋古墳・大田茶屋遺跡出土古墳時代～古代土器・石器・鉄器
図版19
１．大田茶屋遺跡出土奈良時代軒丸瓦・軒平瓦
図版20
１．大田茶屋遺跡出土奈良時代軒平瓦・瓦塔
図版21
１．大田茶屋遺跡出土土馬・平瓦、大田障子遺跡出土古代土器
図版22
１．大田障子遺跡・土壙５出土土器
２．大田茶屋遺跡出土中・近世鉄器・土器
図版23
１．大田茶屋遺跡出土近世軒瓦・雁振瓦・瓦質宝殿
図版24
１．大田茶屋遺跡・墓39・38・36出土遺物、大田大正開遺跡・墓２出土遺物

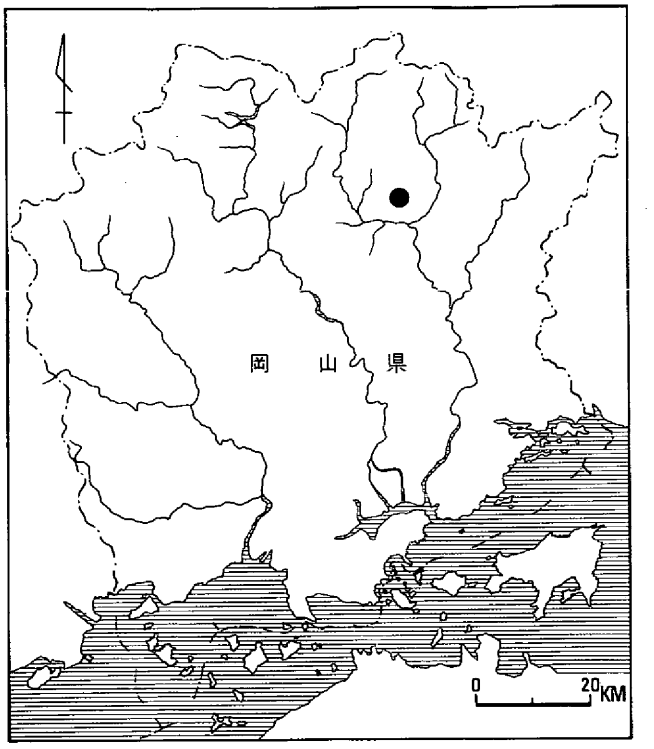
第１章　遺跡の位置と環境

津山市街地は、吉井川と宮川の合流地点を中心に開けた、東西1.2km、南北3.8kmの盆地に展開する。盆地の東から北にかけては海抜120～160m前後の低丘陵がなだらかなうねりをみせて広がり、幾筋もの舌状の尾根を派生している。盆地の西は海抜300m程度の小高い丘陵地帯となり、盆地からの立ち上がりはやや急峻な斜面となる。本書で報告する発掘調査の対象地となった、岡山県津山酪農試験場の跡地は盆地の北側の丘陵上にあり、もっとも西側の尾根筋とその斜面部分を占めていた。尾根筋は北東から南西に伸び、南西端の丘陵斜面の途中には広い平坦部が形成されている。尾根筋の先端は盆地の西側の丘陵地帯とほとんど接するまでに近づき、その間を宮川が流れている。市街地の盆地はこの狭隘部を北限とするが、狭隘部を越えて宮川を遡ると一宮の小盆地に入る。この小盆地は中国山地の南裾に位置し、四周を丘陵に囲まれ、南北1.8km、東西1.2kmの広さをもっている。

吉井川は津山市街地の周辺でいくつかの中小河川と合流しているため、川沿いに平野部が連続している。津山盆地と呼ばれるこの平野部の中心に位置しているのが津山市で、下流では加茂川、上流では皿川・香々美川・久米川によって形成された平野部と繋がっている。このため、津山市街地のある小盆地の密閉性は低く、水運なども考慮に入れれば、他地域に対しては開かれた空間といえる。加茂川沿いに加茂町を経て、鳥取県智頭町に至る道は因幡往来と呼ばれ、現在ＪＲ因美線が走る。また、宮川を上流に遡り、横野川との分岐点から下茅川に入り、利元峠を越えて加茂町へ至る道も存在する。吉井川本流は出雲街道として古くからの要路で、現在は国道179号線となっている。出雲街道を東へ上ると、作東町杉坂峠を越えて播磨国、兵庫県上月町に入り、やがて姫路を経て、都に至る。

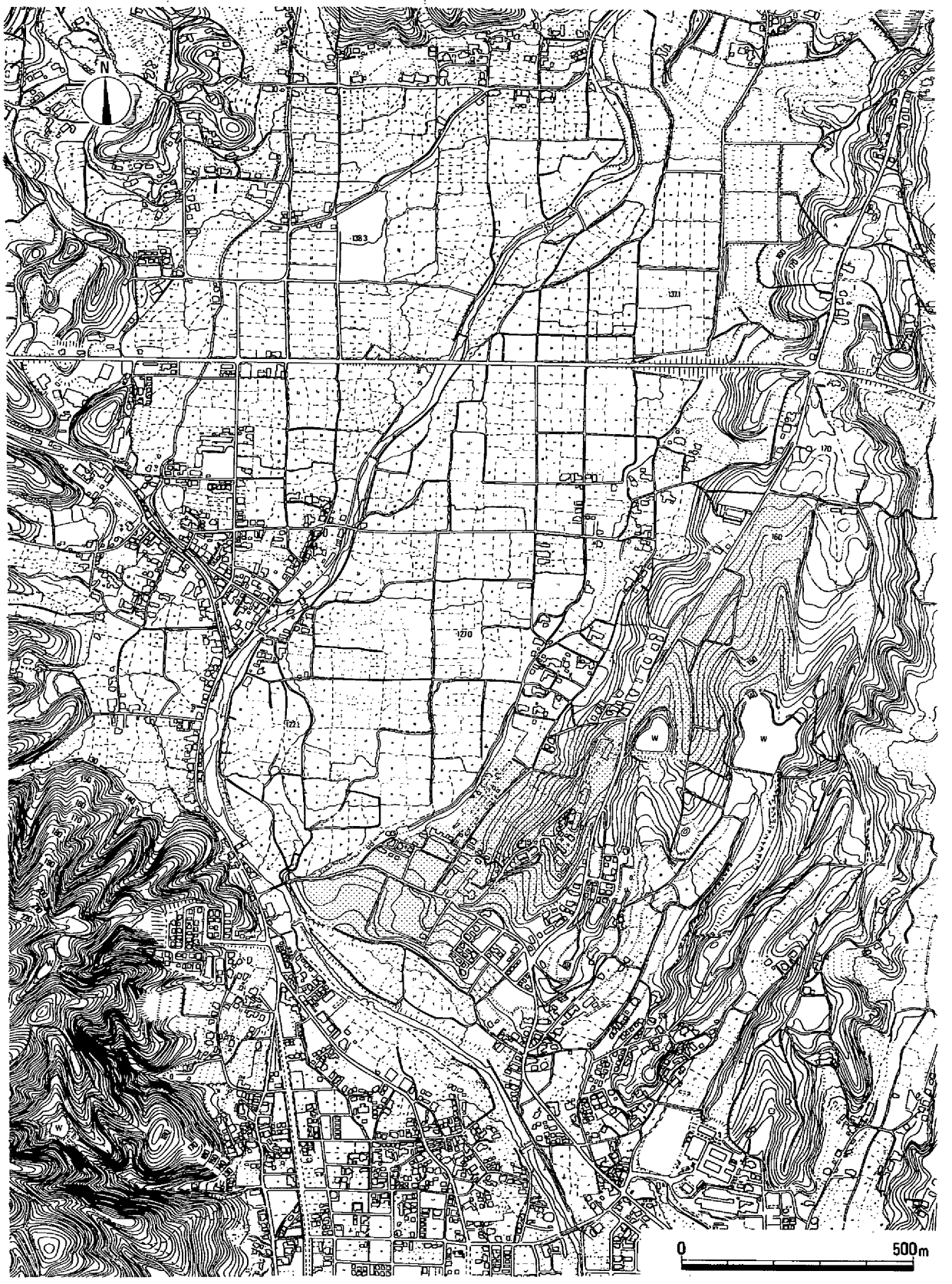
一方、山陽方面へは、まず吉井川の水運があり、大量物資の輸送に長く利用されてきた。高瀬舟が盛んに行き来した江戸時代、大量の物資は和気町でおろされ、南に山越えして備前市片上港から瀬戸内海へ積み出された。もう一つの道は現在も国道53号線として交通の動脈となっている。皿川沿いに遡って中央町から久米南町に入り、ここからは誕生寺川に沿って下り、建部町福渡で旭川に合流し、やがて岡山市街地に至る。

宮川流域の盆地周辺で、人間の活動の痕跡が明瞭になるのは旧石器時代末期で、本報告書で述べる大田茶屋遺跡から黒曜石製の細石刃と細石核らしい塊が出土した。これに続いて、縄文時代早期の押型文土器も同遺跡から出土し、さらに、やはり本書で述べる大田西奥田遺跡からは同期の竪穴住



第１図　遺跡の位置（黒丸）

居跡が１軒検出された。これに続く時代の遺跡はながらく途絶えることとなるが、縄文時代晩期に入り、一宮の盆地にある正善庵遺跡から少量の土器片が出土し（注１）、また、大田茶屋遺跡の県道新設部分の調査によって、同期の遺構・遺物が検出され（注２）、集落の存在が確定的となった。



第２図　調査対象地（編目部分）周辺地形図(1/12500)

弥生時代になると、宮川の流域では集落が点々と形成されるようになる。前期の遺跡としては一丁田遺跡（注３）や京免遺跡（注４）などがあり、前者は後期まで継続され、母集団の一つと考えられている。中期に入ると谷水田の開発の進行と相まって、盆地東側の低丘陵上に、かつて「単位集団」と捉えられた（注５）小住居群構造（注６）からなる遺跡が次々と立地するようになり、中期後葉に至って爆発的な遺跡の増大をみることとなる。この頃の遺跡としては、沼遺跡（注７）・沼Ｅ遺跡（注８）・紫保井遺跡（注９）などがある。後期に至って、宮川流域の低位部に大規模な環濠集落が形成される。京免遺跡がそれで、環濠の外には木棺墓群を伴っていた。大田十二社遺跡（注10）のような丘陵地の遺跡も後期に続いて存在していたが、環濠集落との格差は歴然で、弥生社会の中に不均等が生じていることを示している。後期の集団墓として下道山遺跡（注11）や権現山遺跡（注12）などがあり、下道山遺跡と上原遺跡（注13）からは特殊器台形土器が出土し、首長層の形成が知られる。

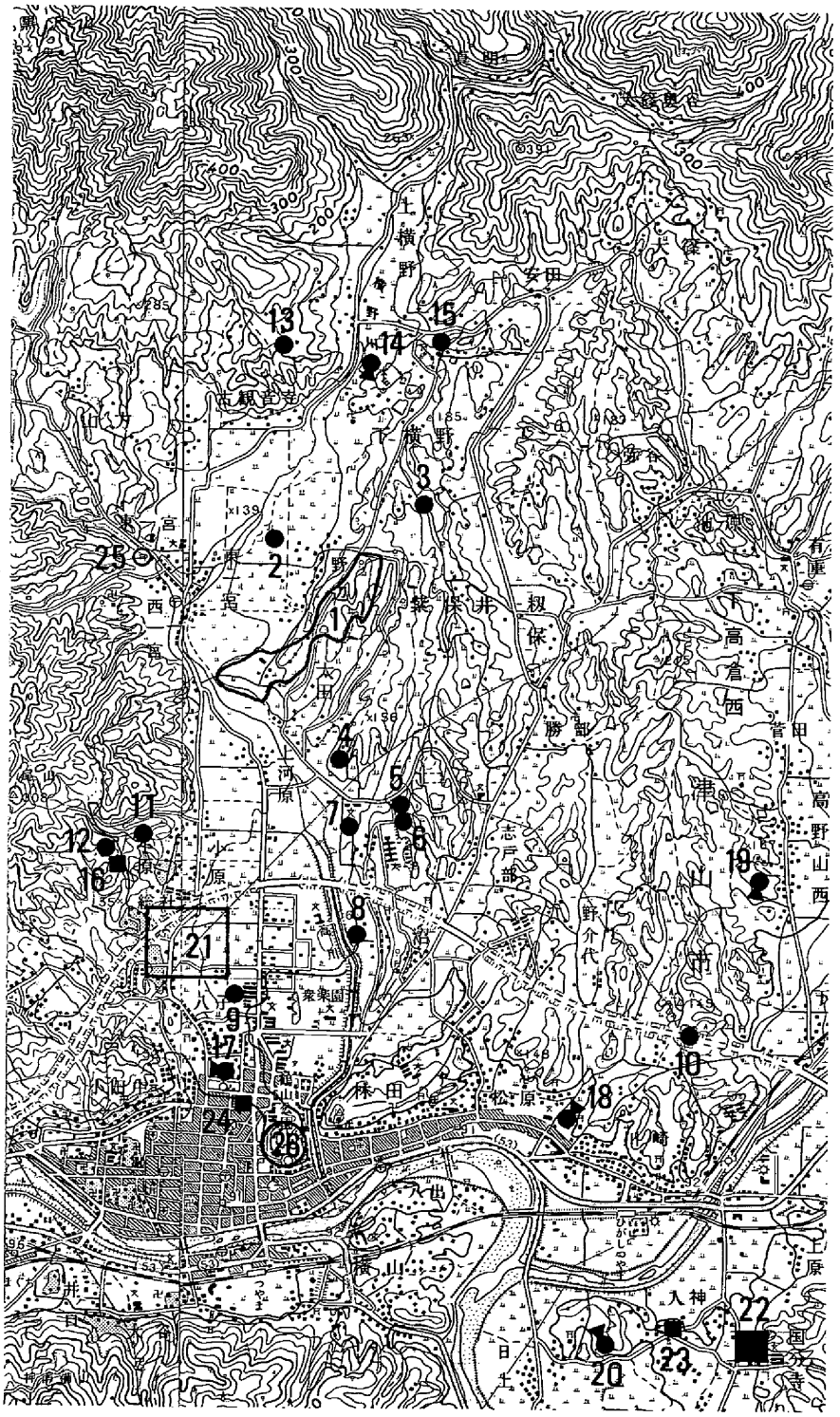
宮川流域の古墳としては、全長46ｍの前方後円墳である上横野小丸山古墳（注14）、６世紀中頃の帆立貝式前方後円墳の大野木塚古墳（注15）、方墳の下道山南古墳（注11）などがあるが、前期の古墳は確認されていない。近接した前期の前方後円墳として、初期の撥形の墳形をもつ日上天王山古墳（注16）や全長約80ｍの美和山古墳群１号墳（注17）などが存在する。宮川流域にあって、津山市街地の北部に位置する十六夜山古墳は、1994年から1996年にかけて発掘調査が実施され、全長約60ｍの前方後円墳で、二重の濠をもつことが確認された。濠から出土した円筒埴輪によって５世紀後葉とされ、同期の前方後円墳としては吉備地方最大の規模をもち、近畿地方に広く分布する石見型の盾形埴輪を出土している（注18）。後期古墳は宮川流域にも数基がまとまるような形で点々と造られているが、一宮の盆地周辺に多い。発掘調査されたものは下道山１～３号墳（注11）や本書の大田茶屋古墳など数例にすぎず、それらはいずれも７世紀前半で、小さな石室をもっていた。

古代国家の成立に伴い、律令制が整備され、地方行政組織としての国郡制が始まると、津山市域は備前国に属することとなった。そして、奈良時代に入ってすぐの和銅６年(713)、備前国の北６郡を割いて美作国が新たに設けられた。６郡とは英多・勝田・苫田・久米・大庭・真嶋郡で、宮川流域は苫田郡に含まれていた。美作国府は宮川流域の盆地、現在の津山市総社字南幸畑を中心とした一帯に造営された。美作国府跡の発掘調査は昭和45年の調査以来、すでに20次を越えるが（注19）、昭和61年から平成５年にかけて実施した範囲確認調査によって政庁の主要建物と考えられる遺構が検出され、前身の苫田郡（評）衙に伴うとみられる遺構も出土している（注20）。この郡衙と国府の重複関係について、苫田郡家を移転させ、国府政庁を新設したという提案がなされている（注21）。和銅７年(714)に美作国守となった津守連通は、天平７年(735)に阿部帯麻呂と交替するまで、長くその地位にあって新国の建設に全力を傾注したものと思われるが、国府創建瓦が平城宮所用瓦と同一の文様構成を採っていることからも知られるように、それは中央政府の強力な関与のもとになされたことでもあった。なお、美作国の成立と前後して、宮川上流域の一宮の盆地に美作国一宮の神格を与えられた中山神社が創祀される。中山神社は延喜式では名神大とされ、神階も平安時代末期までには正一位の極位を奉叙されている。古代においては軍神として尊崇されていたとされる（注22）。

平安時代前期の貞観５年(863)、苫田郡は苫東・苫西の２郡に分けられ、宮川流域は苫東郡に属することとなる。『日本三代実録』貞観８年９月の条に美作の兵庫が鳴動したという記事がみられるが、この月は中央で伴善男が配流となった応天門の変が起こっている。『続日本紀』天応元年(781)３月の条にも苫田郡の兵庫が鳴動したという記事があり、この年は光仁天皇が桓武天皇に譲位して死没した

という政変が起こっていることから、美作の軍事力はしばしば中央政府の政治抗争と密接な関係を持っていた可能性がある。後期には全国的に荘園が増大するが、宮川流域では中山神社の一宮領が『長講堂所領注文』に注進されている以外、荘園の存在は知られていない。美作国府は13世紀頃までは国衙機構が存在していたとされていて（注21）、その膝元である宮川下流域は国衙領として存在していたのであろうか。院政期に美作は白河法皇の知行国であったが、平氏が台頭すると平忠盛は美作守に任ぜられ、その子の清盛は美作の知行国主となり、美作は平氏の勢力基盤の一つとなった。

平氏が滅亡し、鎌倉幕府が成立すると、侍所別当の梶原景時が播磨・美作守護に任ぜられ、新たに守護所が設けられる。国衙機構は縮小し、その機構は守護所に移行していく。守護所は苫西郡にあり、現在の津山市院庄に所在する院庄館跡（注23）と推定されている。梶原景時は幕府の内乱に関与して敗死し、和田義盛が美作守護となるが、和田氏も北条氏に滅ぼされ、美作国は北条得宗領となる。



1．調査対象地　2．正善庵遺跡　3．紫保井遺跡　4．大田十二社遺跡
5．沼遺跡　6．沼Ｅ遺跡　7．京免遺跡　8．竹ノ下遺跡
9．一丁田遺跡　10．押入西遺跡　11．権現山遺跡　12．下道山遺跡
13．上原遺跡　14．上横野小丸山古墳　15．大野木塚古墳　16．下道山南古墳
17．十六夜山古墳　18．玉淋大塚古墳　19．山西正仙塚古墳　20．日上天王山古墳
21．美作国府跡　22．美作国分寺跡　23．美作国分尼寺跡　24．椿高下遺跡
25．中山神社　26．津山城跡

第３図　調査対象地周辺遺跡分布図(1/50000)

元弘の変で隠岐に流された後醍醐天皇は、元弘３年(1333)に隠岐を脱出し、幕府への反撃を開始した。美作の国人衆も大挙して陣営に加わったという。鎌倉幕府は滅亡し、建武の新政がなるが、新政府は武士層には冷たく、やがて、足利尊氏を中心とした反乱が起こる。足利氏は以前から美作にも勢力を浸透させていて、宮川流域の盆地と丘陵を隔てて西に隣接する田邑庄の地頭職を尊氏は保持していた。足利尊氏は室町幕府を建て、新たに光厳天皇を擁立した。建武政権は南の吉野に逃れ、ここに南北朝時代が始まる。さらに、幕府内も尊氏と弟の直義の対立が表面化し、美作においても三つ巴の戦いが繰り広げられることとなる。その主たる戦いは、伯耆に本拠をもつ反幕府の山名氏と、幕府方で播磨に本拠を置く赤松氏との戦闘であった。14世紀中頃には加茂川東部は赤松氏の勢力圏、西部は山名氏の勢力圏となっていたが、康安元年(1361)に山名氏は美作を制圧し、貞治２年(1363)には幕府に帰順し、山名義理が美作国守護となった。しかし、明徳２年(1391)の内乱で山名氏が瓦解し、美作守護職には再び赤松氏が任ぜられた。明徳３年に南北朝は合体され、混乱に終止符が打たれる。

嘉吉元年(1441)に赤松満祐が将軍足利義教を殺害するという嘉吉の変が起きる。赤松惣領家は壊滅し、美作は再び山名氏と赤松氏の抗争の場と化す。応仁元年(1467)、応仁の乱で細川勝元側についた赤松政秀は山名政清が守護を務める美作に討ち入り、美作を制圧した。文明２年(1470)に美作での応仁の乱は終結をみるが、こののち戦乱は慢性化し、美作の戦国時代が始まる。文明12年(1480)山名勢による赤松勢攻略が開始される。文明15年赤松氏に混乱が起こり、美作は山名氏に属することとなったが、長享元年(1487)山名氏においても内部分裂が起こり、赤松氏は美作に侵入して院庄を回復し、浦上氏を守護代として配置した。永正15年(1518)、美作守護代の浦上村宗は主家赤松義村に反旗を翻した。赤松義村は殺害され、浦上村宗は播磨・備前・美作の実権を掌握することとなった。

天文元年(1532)、尼子経久による美作侵攻が開始される。天文20年(1551)、尼子晴久はほぼ美作を制圧するが、尼子氏に反抗する苫田郷の国人や農民が中山神社境内に籠もって土一揆を企てた。尼子晴久は社殿に放火し、中山神社は灰燼に帰した。翌年の永禄２年(1559)に晴久は社殿を再興している。永禄５年毛利元就は全軍を挙げて出雲に侵攻し、永禄９年に尼子氏を滅ぼした。この前年、毛利氏は備中松山城主であった三村家親を先鋒として美作侵攻を企てている。尼子氏亡き後の美作は浦上宗景の被官であった宇喜多直家が支配していた。宇喜多直家は永禄９年に三村家親を暗殺し、永禄10年には三村元親や石川氏・荘氏らの備中勢を明善寺合戦で大いに破り、備中南部一帯を制覇し、永禄11年には備前の松田氏を滅亡させた。永禄から元亀年間にかけて美作では、美作西部は毛利氏、久米地方は宇喜多氏、美作東部は浦上氏が掌握するところとなった。天正元年(1572)浦上宗景は織田信長につき、播磨・備前・美作の所領安堵の朱印状を信長から得た。これを契機として、宇喜多直家は毛利氏と講和を結び、天正５年に浦上宗景の和気町天神山城を攻撃してこれを落とし、浦上宗景は播磨に逃れた。天正７年、宇喜多直家は織田信長の家臣羽柴秀吉に応じ、毛利氏と再び敵対することとなった。美作では宇喜多氏と毛利氏の激しい戦闘が繰り返されることとなる。天正10年、羽柴秀吉は備中高松城において毛利軍と対峙していたが、６月２日に主君の織田信長が京都本能寺において明智光秀に急襲されて自刃したことを聞き、急遽、毛利方と和議を結び、帰京した。和議の条件として高梁川以東を秀吉側へ割譲することがあり、これをもって美作は宇喜多氏に属することとなった。しかし、毛利方の撤退は進まず、羽柴秀吉が強圧的な対応姿勢をとるに及び、天正12年に至って美作全土は宇喜多秀家の支配の下に置かれることとなり、長かった戦乱に幕が下ろされた。

宇喜多秀家は豊臣政権の五大老の一人として重要な地位を占めていたが、秀吉の亡き後、慶長５年

(1600)に起こった関ヶ原の戦いに敗れ、伊豆八丈島に流された。慶長８年、森忠政が美作国18万6500石に入封し、津山藩が出現する。藩主は森氏４代の後に松平氏に替わり、明治に至る。（岡本寛久）

注

（注１）小郷利幸『正善庵遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告44　津山市教育委員会　1992年

（注２）岡本寛久『大田茶屋遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96　岡山県教育委員会　1994年

（注３）植月壮介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究－西地区－』津山郷土館考古学研究報告２　津山市　1957年。岡田博「岡山県立津山工業高等学校プール建設に伴う山北一丁田関連遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会　1983年

（注４）中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告11　津山市教育委員会　1982年

（注５）近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号　考古学研究会　1959年

（注６）中山俊紀「第４章　若干の考察－美作における弥生時代中期小住居群構造の解明にむけて－」『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告８　津山市教育委員会　1981年

（注７）近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究－西地区－』津山郷土館考古学研究報告２　津山市　1957年

（注８）中山俊紀・行田裕美『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告８　津山市教育委員会　1981年

（注９）中山俊紀「津山市紫保井遺跡と小住居群」『古代吉備』第15集　古代吉備研究会　1993年

（注10）中山俊紀・河本清・安川豊史・行田裕美『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10　津山市教育委員会　1981年

（注11）栗野克己・岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17　岡山県教育委員会　1977年

（注12）春名啓介・湊哲夫・安川豊史『図録　津山の史跡』津山市教育委員会　1978年

（注13）近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986年

（注14）平岡正宏「上横野小丸山古墳発掘調査報告」『年報　津山弥生の里』１　津山弥生の里文化財センター　1994年

（注15）小郷利幸「大野木塚古墳墳丘測量調査報告」『年報　津山弥生の里』３　津山弥生の里文化財センター　1996年

（注16）近藤義郎・倉林眞砂斗・澤田秀実・水野敏典・増田直人・中山俊紀・小郷利幸・坂本心平・行田裕美・高橋幸治・渡辺健治・安川豊史・平岡正宏『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告60　津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会　1997年

（注17）中山俊紀『史跡　美和山古墳群　保存整備事業報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告42　津山市教育委員会　1992年

（注18）尾上元規の教示による。桑田俊明「十六夜山古墳ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』24　岡山県教育委員会　1994年。尾上元規「十六夜山古墳関連遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』25　岡山県教育委員会　1995年。金田善敬「県立津山高校校舎改築に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』26　岡山県教育委員会　1996年

（注19）「美作国府」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６　岡山県教育委員会　1973年。岡田博「美作国府跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査（補遺編）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24　岡山県教育委員会　1978年。安川豊史『美作国府跡発掘調査報告－総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査－』津山市埋蔵文化財発掘調査報告15　津山市教育委員会　1984年。安川豊史『美作国府跡発掘調査概報』津山市埋蔵文化財発掘調査報告40　津山市教育委員会　1991年。岡田博「官衙」『吉備の考古学的研究』下　山陽新聞社　1992年。安川豊史・坂本心平『美作国府跡－日本生命社宅新築に伴う発掘調査－』津山市埋蔵文化財発掘調査報告56　津山市教育委員会　1995年

（注20）安川豊史『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告50　津山市教育委員会　1994年

（注21）湊哲夫『美作国府跡－埋もれた古代の役所－』津山郷土博物館特別展図録第８冊　津山郷土博物館　1995年

（注22）熊谷保孝「中山神社」『式内社調査報告』第22巻山陽道　皇學館大學出版部　1980年

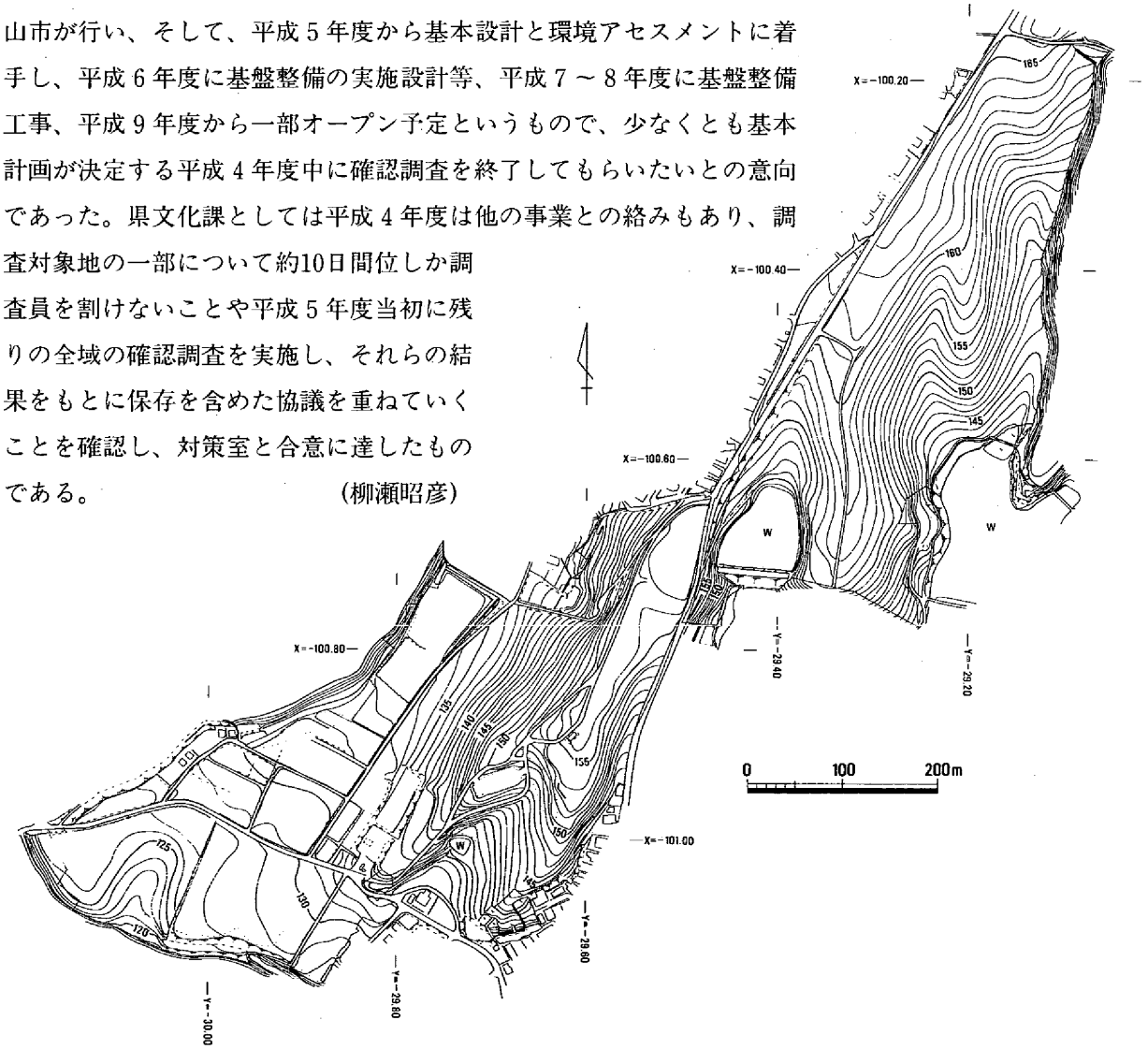
（注23）行田裕美『史跡院庄館跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告７　津山市教育委員会　1981年

古代・中世の歴史的事象については三好基之「第二章　律令時代」『津山市史』第一巻原始・古代　津山市　1972年、三好基之『津山市史』第二巻中世　津山市　1977年　を参照した。

第２章　調査の経過

第１節　調査の契機

平成元年４月に岡山県津山酪農試験場は旭町の岡山県総合畜産センターに移転したが、その跡地の利用について、岡山県企画部リゾート対策室（以下対策室）は、平成３年度に基本構想を策定し、平成４年度は基本計画の策定作業を進めてきた。そして、平成４年８月に対策室は、「蒜山美作リゾート構想」を国へ申請する事前準備として、文化庁から重点地域内の文化財の所在確認を求められた。その時点で対策室は酪農試験場跡地に弥生時代の遺跡の存在を周知し、県教育庁文化課にその対応を依頼した。酪農試験場跡地利用計画は、造成など基盤整備とアミューズメント（娯楽とスポーツ）ゾーンの施設整備および一部関連の県道津山加茂線の改良工事を県が、芸術文化ゾーンの施設整備等を津山市が行い、そして、平成５年度から基本設計と環境アセスメントに着手し、平成６年度に基盤整備の実施設計等、平成７～８年度に基盤整備工事、平成９年度から一部オープン予定というもので、少なくとも基本計画が決定する平成４年度中に確認調査を終了してもらいたいとの意向であった。県文化課としては平成４年度は他の事業との絡みもあり、調査対象地の一部について約10日間位しか調査員を割けないことや平成５年度当初に残りの全域の確認調査を実施し、それらの結果をもとに保存を含めた協議を重ねていくことを確認し、対策室と合意に達したものである。（柳瀬昭彦）



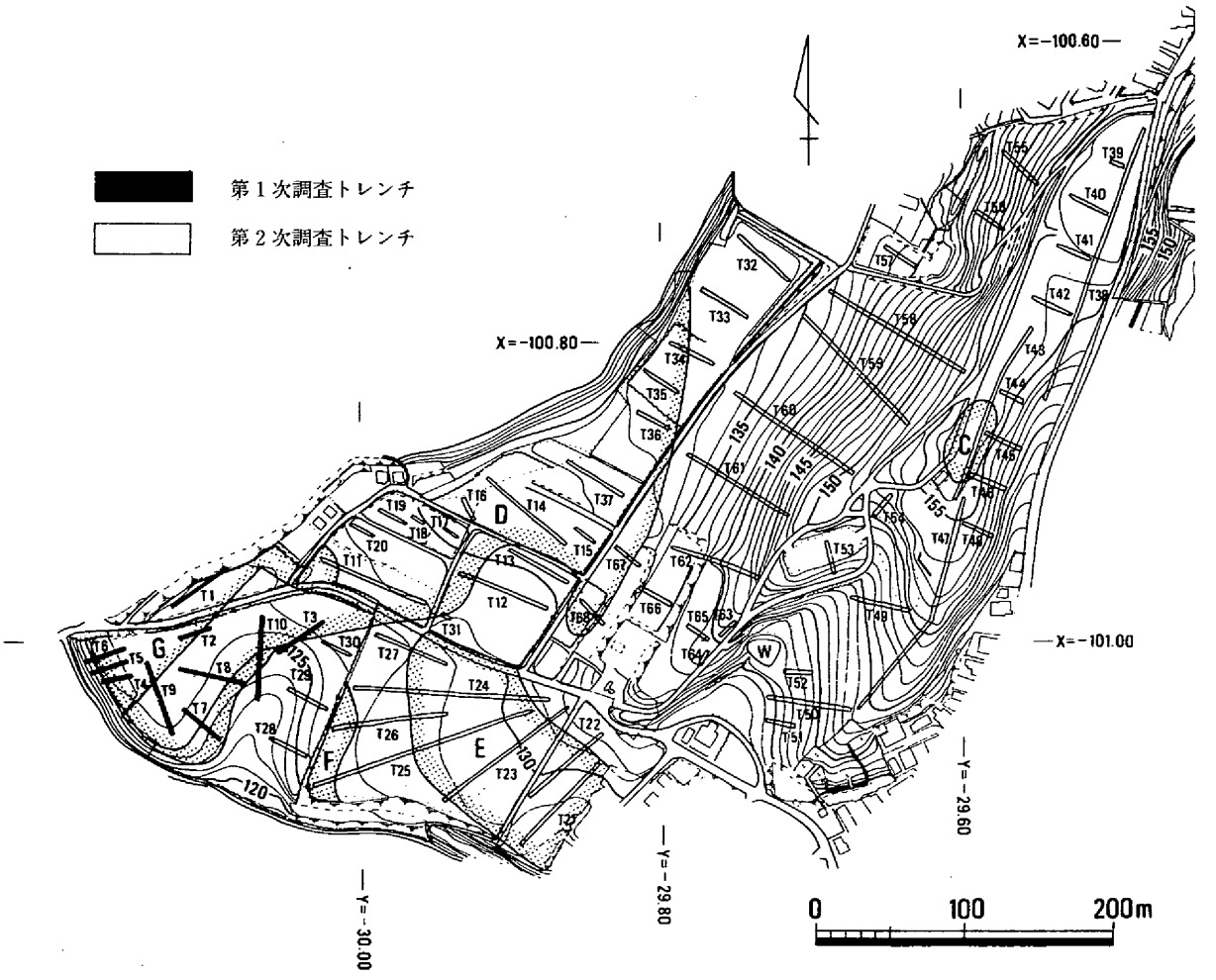
第４図　調査対象地地形図（1/7500）

第２節　第１次調査の経過

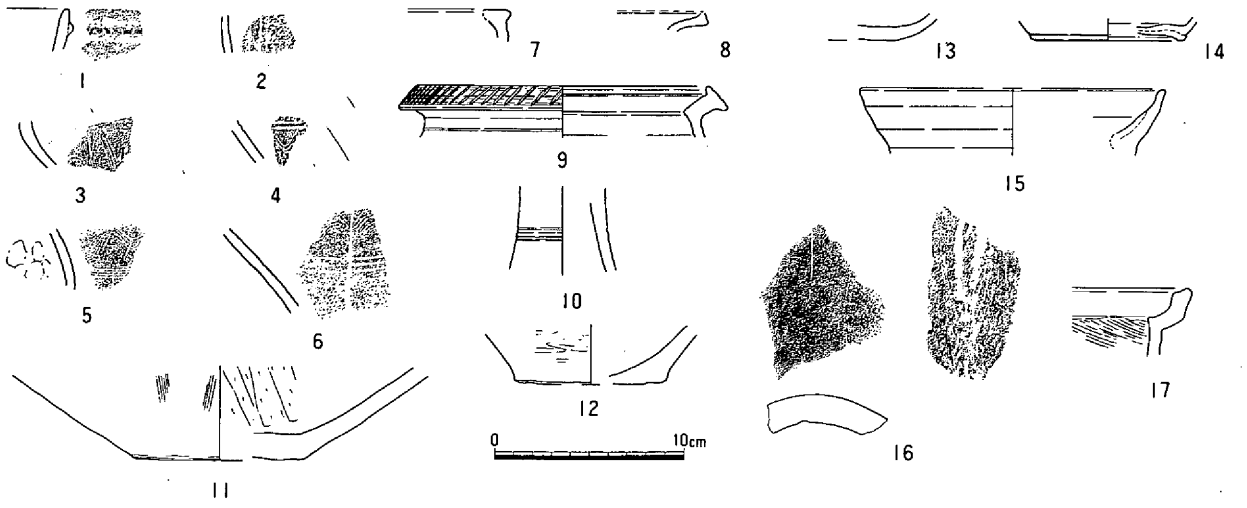
第1次調査は、平成５年３月１日から実施した。酪農試験場跡地の南西端部分には「県道津山加茂線」の建設がすでに予定されていたため、この丘陵南西端部分から確認調査を実施することとした。調査は県道調査範囲内に限らず、北東から南西方向に延びる丘陵端部全体に10本のトレンチを設定した。トレンチの位置は基本的に丘陵尾根部から斜面に向けて設定している。調査は重機によって幅２m、長さは地形に応じて20～55mの表土及び造成土を除去した後、遺構・遺物の有無について確認していった（第５図）。各トレンチの尾根部は酪農試験場造成によって、かなり削平を受けていたため、表土直下で地山が現れたが、斜面や谷部では旧表土が残存していた。遺構は第３トレンチを除くすべてのトレンチにおいて検出されたが、遺構の大部分は柱穴と土壙であった。

遺物は第10トレンチ以外ではほとんど出土がみられなかった。遺物はおもに旧表土である黒ボク層内から出土しており、もっとも古い土器は１・２で縄文時代晩期である。弥生時代は中期中葉を中心に古墳時代～中世までの遺物がみられた。

この結果、跡地内の南西端に位置する丘陵には丘陵尾根部を中心に縄文時代晩期から中世の集落跡が想定されるとともに、遺跡はさらに拡大することが予想された。　（松本和男）



第５図　第１次・第２次調査トレンチ配置図(１)(1/5000)



第６図　第１次調査第10トレンチ出土遺物(1/4)

第３節　第２次調査の経過

第２次調査は、おもに県道建設に対応して第１次調査を実施した、丘陵の南西端部分を除く酪農試験場跡地一帯を対象として、平成５年４月１日から実施した。ちなみに、跡地の全体面積は28.8haである。調査の目的は、広大な用地内全域において開発が予定されているため、過去に採集されている土器片から所在の確実視されている、遺跡の正確な広がりを把握することであった。調査は、重機によって幅２ｍのトレンチを掘り下げ、遺構の存在や遺物の出土の有無を確認していった。多くのトレンチでは、酪農試験場の造成のためか、造成土の下はすぐに地山が現れたが、傾斜面や谷部では旧表土の黒ボク層が残っていた。旧表土の残存部分では重機の掘削をその上面で止め、以下は人手で掘り下げた。トレンチは、丘陵部では、尾根筋に沿うものと斜面にあって等高線と直交して下るものを設け、平坦地では道路による区画に平行するように設定した（第５・７図)。第１次調査では10本のトレンチを設置したので、第２次調査ではトレンチ番号を11から始め、掘削した順番に番号を付けていった。設定したトレンチは78本、トレンチの総面積は9,097㎡である。遺構を確認したトレンチや旧表土の残存していたトレンチでは壁面の土層断面図を作成したが、造成土のみのトレンチでは地山上面の高度を記録するのみに止めた。検出した遺構については、年代と性格をつかむために完掘することとした。平面図については、遺構検出部分では20分の１の図を作成し、それ以外のトレンチについては100分の１の作図のみとした。なお、主要な遺構では10分の１で実測を行ったものもある。

第２次調査の結果は第１表のとおりであるが、とくに注目される成果について二、三簡単に述べてみたい。第11トレンチから第27トレンチにかけては、ほとんどのトレンチで遺構が確認され、遺物も出土した。遺物の年代は縄文時代から江戸時代まで通してみられ、なかでも奈良時代の土器が注目された。この丘陵先端に位置する平坦面から緩斜面にかけての一帯がきわめて長期間にわたる複合遺跡であることが判明した。なお、この地区の中央部に細い谷が入っていることも確認された。

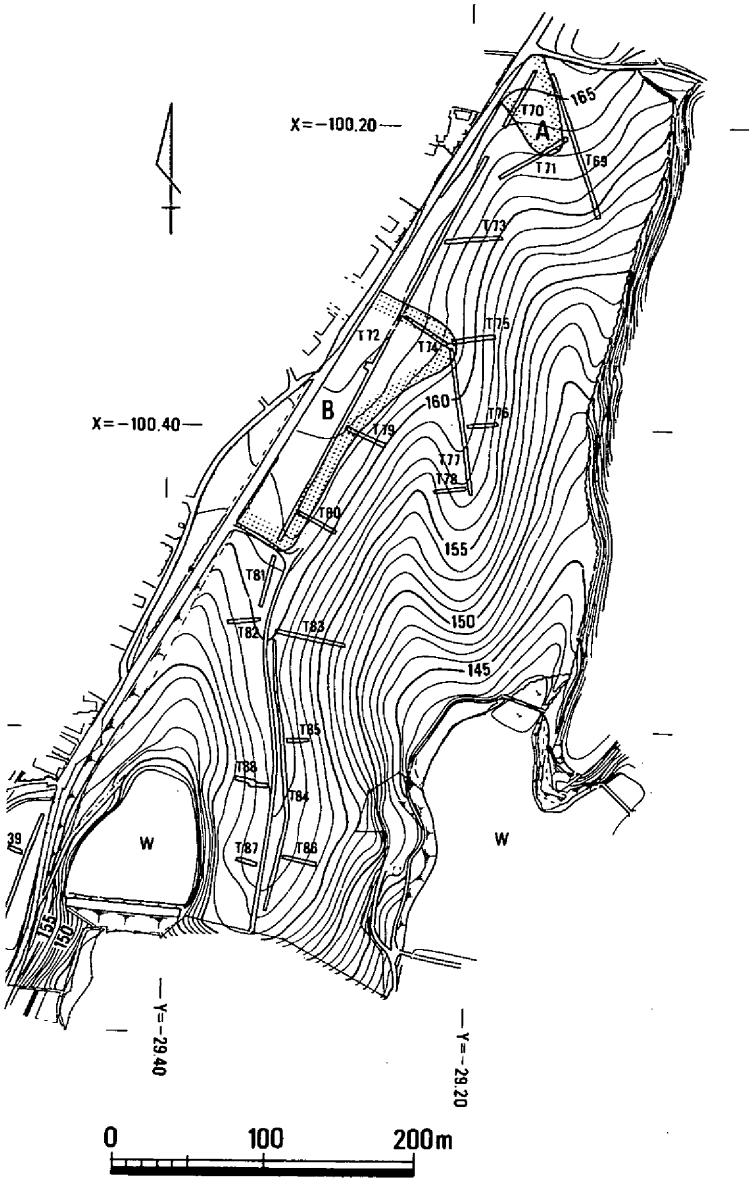
第43トレンチと第70トレンチからはともに弥生時代の遺構・遺物が出土し、小規模な弥生時代集落の存在が推定された。出土した遺物の年代をみると、前者が弥生時代中期後半から後期初頭にかけて

であるのに対し、後者は中期中葉と時期差がみられ、集落が移動した可能性を考えさせた。

第72トレンチの中央から縄文時代早期の竪穴住居跡が検出された。一部破壊されているものの、ほぼ完全な形で、床面からは倒れたような状態で土器も出土した。中国地方では稀であり、年代が確定されることからも貴重である。同トレンチの南端からは同時代のものとみられる落とし穴も検出され、第72トレンチを設定した丘陵平坦部に縄文時代早期の集落跡が存在しているものとみられた。

第12トレンチから第20トレンチまでと、第36・37トレンチについては第3次調査以後の全面調査範囲に含まれなかったので第8図に示した。ただ、第13トレンチでは遺構は検出されていない。

このような第2次調査の結果から、酪農試験場の跡地内において複数の遺跡の存在が確認され、その範囲は第5・7図に示す程度と推定された。それぞれの範囲にアルファベットの符号を付け、A地点・B地点と仮称することとした。



第7図　第1次・第2次調査トレンチ配置図(2)(1/5000)

各地点の面積と遺跡の性格は次の通りである。

A地点は1,680㎡で、弥生時代中期の集落跡と考えられた。丘陵の尾根筋は後世の削平によってほとんど遺構をみなかったが、谷に向かって厚い包含層が形成され、多くの土器片や石包丁が出土した。B地点は8,300㎡あり、縄文時代早期の竪穴住居跡が検出された。近接して同期の落とし穴も存在したことから、縄文時代早期の集落跡と推定された。これより新しい時代の遺構・遺物はほとんどなく、遺構の密度は低いと想定された。C地点は1,290㎡を測り、弥生時代中期の集落跡とみられたが、第43トレンチ以外では遺構は検出されず、その広がりは捉えにくい状況であった。D地点28,360㎡と県道津山加茂線の用地であるG地点5,490㎡は同一の遺跡である。弥生時代の集落跡と考えられたが、近世以降の遺構もみられ家屋の存在した可能性が高い。E地点は11,770㎡であり、弥生時代中期・古墳時代後期・中世の各期の遺物が出土し、断続的に集落が形成されていたと考えられた。F地点はE

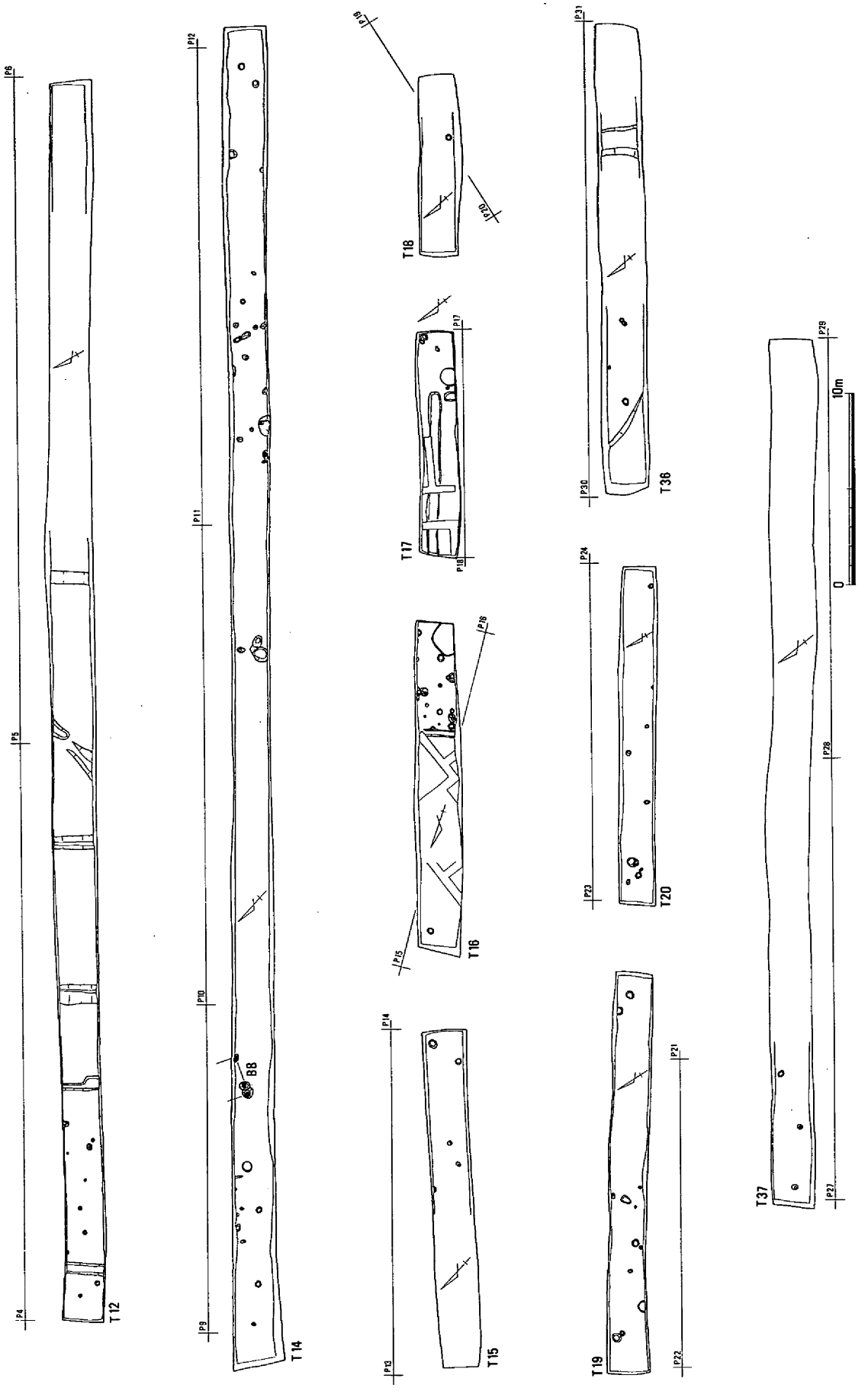
トレンチ番号	規模 (m)	深さ (cm)	実面積 (㎡)	遺構	遺物	遺物年代	備考	トレンチ番号	規模 (m)	深さ (cm)	実面積 (㎡)	遺構	遺物	遺物年代	備考
11	2 × 77.5	30～ 40	149.7	K1, D4, P5	土器片10	弥生・中世		50	2 × 57	10～ 80	128.2		土器片１	弥生	
12	2 × 64	30～ 70	140.1	P10	土器片５	弥生		51	2 × 20.5	30～ 80	45.5				
13	2 × 46	60～ 80	102.2					52	2.5× 18.5	10	44.2				
14	2 × 70	25～ 70	152.6	B1, K2, P32	土器片多量	弥生・近世	旧表土残存	53	2.5× 23	10～120	53.4				旧表土残存
15	2 × 17.5	40～ 50	38.5	P5			旧表土残存	54	2.5× 18	25～ 30	48.5				旧表土残存
16	2 × 17	15～ 35	38.0	K1, P19	土器片39	弥生・近世		55	2.5× 33.5	20～ 30	74.7				旧表土残存
17	2 × 12	15～ 25	23.3	K1, D2, P4	土器片19	弥生・古代・近世		56	2.5× 23.5	15～ 35	53.0				旧表土残存
18	2 × 9.5	30	19.1	P1				57	2 × 25	60～ 90	56.2				旧表土残存
19	2 × 21	15～ 35	39.4	P12	土器片28	弥生・近世		58	2.5×107	25～ 65	253.4				旧表土残存
20	2 × 17.5	20～ 50	32.5	P9				59	2.5×104	15～ 80	246.7				旧表土残存
21	2 × 75.5	30～ 60	151.1	K1, P17	土器片多量	弥生・古墳	包含層	60	2.5× 97.5	15～ 80	243.6				旧表土残存
22	2 × 63.5	25～ 60	126.1	P9	土器片多量	弥生・古墳・中世	含含層	61	2.5× 80	10～120	188.2				旧表土残存
23	2 ×103	20～ 30	209.1	K4, P13	土器片21	弥生		62	2.5× 63.5	30～120	150.4	P1	土器片14	弥生	旧表土残存
24	2 ×129.5	25～ 90	280.4	K2, P51	土器片多量	弥生・古墳・中世		63	2.5× 15.5	10～ 30	34.3				
25	2.5×153.5	25～ 50	376.9	K2, P72	土器片26	弥生～中世		64	2 × 12	15～ 25	25.5				
26	2.5× 77.5	20～ 35	173.3	H1, P16	土器片33	弥生		65	2 × 17.5	60～130	35.4				旧表土残存
27	2.5× 51.5	50～120	126.2	K1, P8	土器片多量	弥生	包含層	66	2.5× 25	60～180	61.2				旧表土残存
28	2.5× 28	10～ 90	67.0		土器片２	弥生・古墳	谷屑部	67	2 × 21.5	15～105	48.5	K1, P3	土器片多量	弥生	旧表土残存
29	2.5× 30.5	25～ 30	74.4		土器片１	中世	谷屑部	68	2.5× 22.5	35～100	51.5				旧表土残存
30	2.5× 20.5	40～115	46.4				谷屑部	69	2 ×101.5	20～210	232.3				谷屑部
31	2 × 7	60～100	14.4		土器片４	弥生・古墳	谷屑部	70	2.5× 43.5	50～130	100.6	K1, P5	土器片多量	弥生	包含層
32	2 × 46.5	10～ 25	97.4		土器片２	近世～		71	2.5× 52.5	30～170	120.4	P2	土器片１	弥生	谷屑部
33	2 × 37	35～130	82.6		土器片１	近世～		72	2.5×291.5	20～130	705.1	H1, K2, D1, P3	土器片多量	縄文・弥生・中世	
34	2 × 33.5	20～ 30	81.0					73	2.5× 38.5	25～180	100.3		土器片１	弥生	谷屑部
35	2 × 28.5	40～ 60	56.0					74	2 × 34	20～ 30	80.3				
36	2.5× 25	40～ 90	54.4	P4	土器片１	近世～		75	2.5× 30	15～ 30	76.7				
37	2 × 45.5	25～ 60	98.2	P3	土器片３	弥生・古墳・近世		76	2.5× 20.5	10～ 30	49.4				
38	2 ×193	20～ 70	449.6					77	2.5×100	15～ 40	239.2				
39	2.5× 10.5	30～ 50	25.0					78	2.5× 21	15～110	48.0				谷屑部
40	2 × 29.5	15～ 45	64.9				旧表土残存	79	2.5× 29.5	20～ 35	72.0				
41	2.5× 25.5	25～ 45	60.7				旧表土残存	80	2.5× 28	15～ 25	64.9				
42	2.5× 29.5	50～ 80	74.4				旧表土残存	81	2.5× 35.5	15～ 25	86.6				
43	2 ×126.5	25～ 50	307.6	A1, P6	土器片７	弥生	旧表土残存	82	2.5× 22	20～ 35	50.5				
44	2.5× 17.5	40～ 65	45.7				旧表土残存	83	2.5× 48.5	25～115	112.4				
45	2.5× 17.5	45～ 55	67.4				旧表土残存	84	2.5×181	10～ 40	414.5				
46	2.5× 27.5	35～ 40	64.1				旧表土残存	85	2 ×15.5	25～ 35	35.2				
47	2.5×162.5	10～ 45	370.5				旧表土残存	86	2 × 22.5	15～ 25	47.7				
48	2.5× 23.5	20～ 50	56.4				旧表土残存	87	2.5× 14.5	20～ 30	32.4				
49	2.5× 41	10～150	95.3				旧表土残存	88	2 × 27	20～ 40	54.6				谷屑部

遺構略号　H：住居　B：建物　A：柱穴列　K：土壙　D：溝　P：柱穴

第１表　第２次調査トレンチ一覧表

地点と同一の集落跡と考えられた。面積は1,230㎡である。両地点の間の空白部は砂礫の地盤になっていた。以上をまとめると、酪農試験場跡地内の遺跡の面積は総計で58,120㎡と推定された。このうち、県道津山加茂線の用地であるＧ地点5,490㎡を除く52,630㎡がグリーンヒルズ津山建設用地内に所在することとなる。

第２次調査の結果を踏まえて、担当部局と今後の開発計画についての協議を行った。そのなかで、Ｂ地点についてはとくに重要度が高いと判断されたため、全面を保存することとし、地下の遺構に影響を与えない範囲で整備を行うことが合意された。そして、竪穴住居跡を埋め戻した地点には、遺跡についての説明文を明示した碑を設置し、その周知をはかることとした。その他の地点については土地造成の関係で保存することが困難と判断され、掘削によって消滅する部分と大規模な土盛りを行う部分について記録保存の処置を執ることが決められた。　（岡本寛）

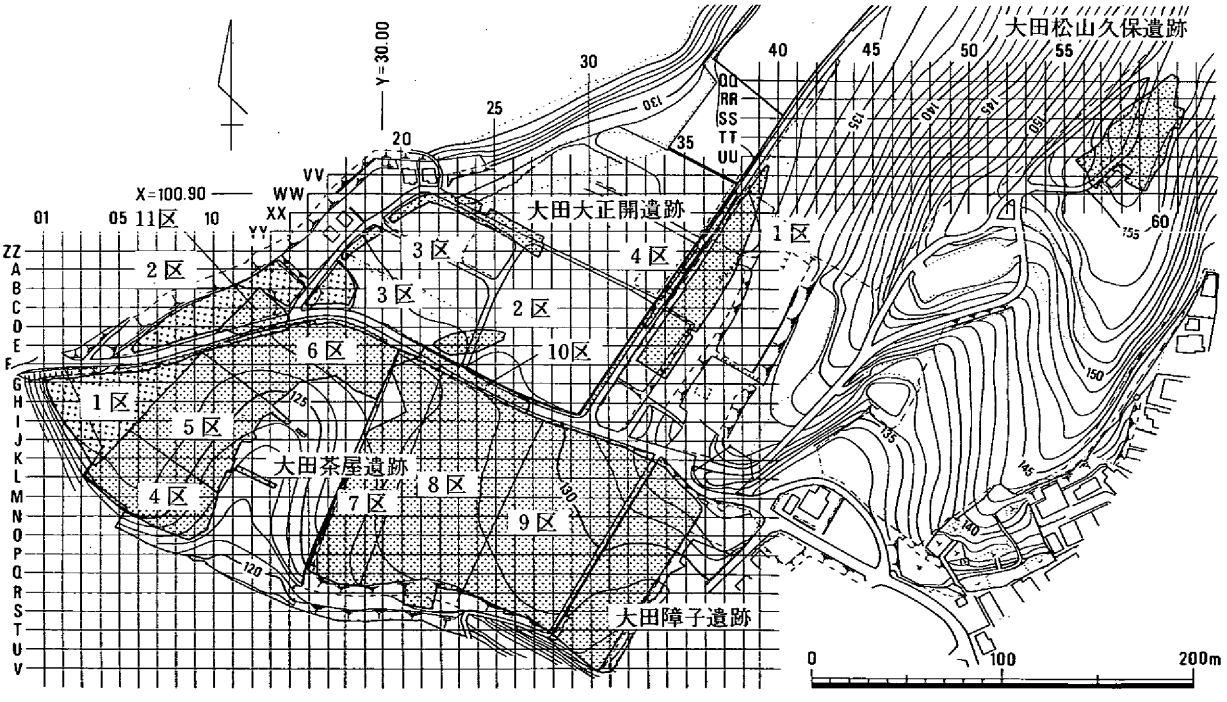


第８図　第２次調査第12・14－20・36・37トレンチ平面図(1/300)

第４節　第３次調査の経過

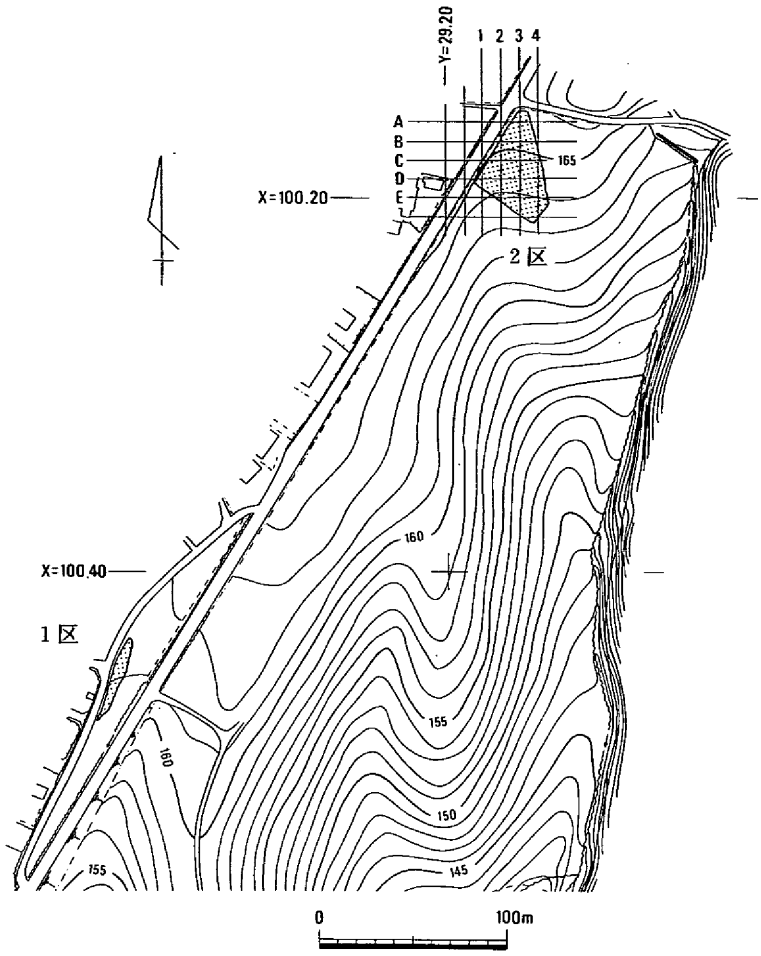
第３次調査は平成６年４月１日から開始した。調査は丘陵の南西端、県道津山加茂線の用地に隣接する部分から始めた。この調査に先立って、平成５年に県道用地の調査が実施され（注１）、大田茶屋遺跡の名で１区から３区までが設定された。第３次調査の開始部分は同じ遺跡であることから、最初に表土剥ぎを実施した地区を４区と呼称することとし、以後、新しく設定した調査区の順に５区、６区と名付けた。遺構名については検出した順に番号を付してNo.1、No.2と呼称し、この番号については調査区にまたがって連続させることとした。調査区は酪農試験場の造成により大規模な削平を受け、ほとんどの部分が地山の上には造成土がのるだけであった。このため、重機によって造成土を除去し、旧表土の黒ボクより下は人力で掘り下げた。調査範囲の設定にあたっては、確認調査の結果に従ったが、丘陵の南西端部分については立木や用地境の不分明な地点があったため、遺跡の推定範囲よりは少し内側に設けた。４区の遺構検出が終了した段階で、調査区南東端の丘陵斜面部では、近代以降の水田造成による段が確認された。この段差は大きく、それ以前の遺構を完全に破壊していると判断された。また、調査区の南西端でも、端から４～７ｍの間は遺構がなく、地山は砂礫層であったため、調査区より下方には遺構は存在しないものと考えた。よって、４区は当初に設定した範囲でよく、５区、６区については、丘陵斜面の近代以降の水田の段を調査区の端として調査を進めた。

４月中旬に、前節でＢ地点とした大田西奥田遺跡と市道を挟んで隣接する地区の確認調査が未了という連絡を対策室から受け、トレンチを３本設定した。一つのトレンチから中世と考えられる柱穴が検出された。対策室と文化課で協議の結果、記録保存の処置をとることとし、遺構のありそうな部分に調査区を設定し、発掘を実施した。大田西奥田遺跡１区と呼称する。



第９図　大田茶屋・大田障子・大田大正開・大田松山久保遺跡調査区位置図(1/4000)

大田茶屋遺跡の調査が６区まで進み、９月末には前節でＦ地点とした７区の表土剝ぎも終了した。この頃には古代の建物群が明らかとなってきた。このため岡山県文化財保護審議会委員　近藤義郎氏・水内昌康氏に現地において指導を受けるとともに、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター室長　山中敏史氏に現地指導をお願いした。10月22日には現地説明会を開催し、建物群の航空撮影を実施した。なお、７区の表土剝ぎの結果、前節のＥ地点とＦ地点の間にも遺構の存在する可能性がきわめて高くなり、この地区についても来年度の調査対象地とすることが対策室と文化課の間で合意された。



第10図　大田西奥田遺跡調査区位置図(1/4000)

大田茶屋遺跡４～６区で一部の遺構の調査を残すのみとなった12月上旬、大田大正開遺跡の調査を開始し、下旬からは大田松山久保遺跡の調査を開始した。小規模な遺跡と考えていたが、20棟を越える掘立柱建物がみつかった。しかも、一つの柱穴から出土した一片の古代末から中世にかけてのものとものとみられる須恵器片以外、弥生土器しか出土せず、さらに、建物の複数の柱穴からは大形の土器片が埋納されたような状態で検出されたことから、弥生時代の掘立柱建物群と判断した。このため、大田松山久保遺跡の調査に集中することとした。遺跡の南端にあったポンプ場より南は削平されていて、調査区の西縁も道路によって削られているため、残存していた遺構のほぼすべてを検出できたと考えている。大田松山久保遺跡についても航空撮影を実施した。

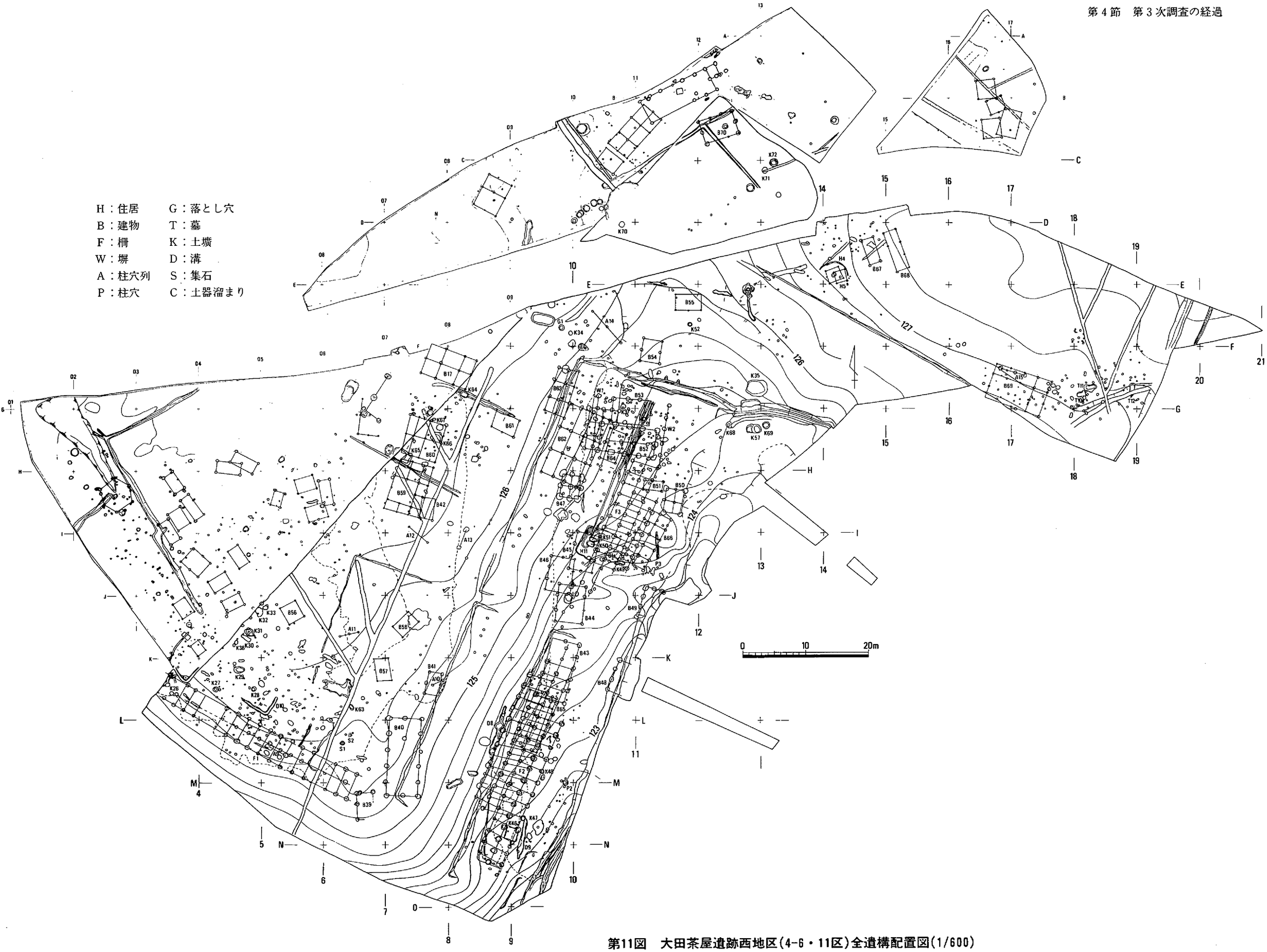
大田松山久保遺跡の掘り下げがほぼ終了した２月上旬、大田大正開遺跡の調査を再開するとともに、大田茶屋遺跡７区の調査にも精力を注いだ。また、５区の丘陵斜面下端で軒丸瓦を含む包含層が認められたため、この部分についても調査区を拡張し、遺物の採集に努めた。大田大正開遺跡は３月上旬には調査を終了し、以後、７区において今年度の予定面積分の調査を進め、３月31日をもって平成６年度の調査を終了した。調査面積は合計すると12,640㎡であった。　(岡本寛)

調査日誌抄

平成６年

４月１日　発掘器材点検・資材調達
４月６日　大田茶屋遺跡４区調査開始
４月22日　大田西奥田遺跡確認調査開始
４月28日　大田西奥田遺跡確認調査終了

H：住居　　G：落とし穴
B：建物　　T：墓
F：柵　　K：土壙
W：塀　　D：溝
A：柱穴列　　S：集石
P：柱穴　　C：土器溜まり



第11図　大田茶屋遺跡西地区(4-6・11区)全遺構配置図(1/600)

5月16日　大田茶屋遺跡5区調査開始
5月23日　大田西奥田遺跡1区調査開始
6月22日　大田西奥田遺跡1区調査終了
8月9日　大田茶屋遺跡6区調査開始
9月21日　大田茶屋遺跡7区調査開始
10月11日　山中敏史氏現地指導
10月13日　水内昌康委員現地指導
10月18日　近藤義郎委員現地指導
10月22日　現地説明会
11月10日　大田茶屋遺跡航空写真撮影
11月29日　大田茶屋遺跡5・6区調査区拡張。トレンチ掘削。
12月5日　大田大正開遺跡調査開始
12月14日　大田松山久保遺跡調査開始
12月22日　大田大正開遺跡調査中断

平成7年

1月17日　大田松山久保遺跡調査区拡張
2月8日　大田松山久保遺跡航空写真撮影
2月9日　大田大正開遺跡調査再開
2月24日　大田松山久保遺跡調査終了
3月8日　大田大正開遺跡調査終了
3月24日　大田茶屋遺跡4・5・6区調査終了
3月31日　写真・図面整理作業終了

第5節　第4次調査の経過

第4次調査では、当初第3次調査にひきつづき駐車場予定地である大田茶屋遺跡、大田障子遺跡、大田西奥田遺跡等が調査対象となっていたが、その後市道の県道への移管に伴い道路部分の調査が必要となり、新たに大田大正開遺跡が追加となった。この結果、第4次調査は、合計4遺跡21,177㎡を対象とする発掘調査となった。

調査は、大田茶屋遺跡の調査に伴って排出される土の置き場所の確保のため、先ず4月5日、調査対象地区東端部に位置する大田障子遺跡から着手した。大田障子遺跡は、大田茶屋遺跡と同じく明治43年と昭和16年の2回にわたる土地構造改善事業により既に基盤層まで削平が及んでおり、特に南半部においては顕著で耕作土直下が基盤という状態であった。このため、明瞭な状態での遺構の検出はできなかった。ただし、比較的残りの良い中央部分と北側丘陵部分には古代の柵列と掘立柱建物がわずかではあるが検出され、特に北側丘陵斜面においては第3次調査で検出した大形掘立柱建物と共通する規模の柱穴が柵列状をなしているのが確認された。この結果、柵列の並びが予想される当初調査予定地区外の北西地区についても調査の必要性が生じた。このためさらに調査区を拡張し、5月8日以降も調査を継続した。ただし、丘陵上位部分になると柱穴の遺存状態は徐々に悪くなり、途中から検出不可能となった。

大田茶屋遺跡は、調査対象面積15,000㎡を測る広大な調査区であった。調査区は、先述したように大規模な構造改善事業が実施され、多くの遺構は上半部が削平され比較的深度の深い柱穴、井戸、土壙墓などがわずかに確認される程度であった。また調査区は全体調査の終了後に空からの全景撮影を予定していたため、排土場所は調査区外の西側谷部と東側大田障子遺跡終了地点に限定させるしかなく、排土作業に困難した。調査は、前年度第3次調査において実施した7区が予定調査区の西端部に位置することもあって西側から開始し、翌年1月25日まで調査を継続させた。なお、調査途中の6月には、遺跡の南端部斜面において偶然、横穴式石室を内部主体とする古墳1基の存在が確認された。これについては、保存を図るべく検討を行ったが、その結果当該地点は盛土部分とあって保存は困難との結論に達し、さらに調査区の拡張をおこない追加調査を実施することとなった。また、同時に古

墳に近接する斜面部には古墳調査途中さらに近世の比較的大規模な道路跡が確認され、これについても調査区を一部拡張して実施することとなった。

前年度の調査区において検出された古代の大形掘立柱建物が美作国の軍団の可能性を示唆させるものであったため、第4次調査でも関連遺構の存在が予想されたが、同様の柱穴列からなる建物群が南端部において帯状に長く検出されたものの、広大な平坦部中央においては確認されなかった。この性格について、奈良国立文化財研究所の山中敏史氏からは第3次調査の際の軍団の可能性を残しながらも、新たに牧の可能性の提起がなされた。また、時期的にも従来奈良時代を中心とする古代と考えてきたが、大田障子遺跡との境において検出した建物群の柱穴が奈良時代の土壙を切り、また別の柱穴ではあるが、出土遺物に勝間田焼の甕等が含まれることが判明した。これにより、建物群の時期は奈良時代ではなく、古代の範疇でも中世に近い年代への変更が余儀なくされるようになった。

また、工事用道路仮設のための調査として、大田大正開遺跡2区の調査を実施した。

大田西奥田遺跡には10月6日に着手したが、大田茶屋遺跡の予定期日内での終了が困難な状況と判断されたため、急遽11月17日調査を中断して大田茶屋遺跡の調査に合流した。再開は、1月22日で翌2月23日に終了した。検出遺構には、弥生時代中期を中心とする土壙、柱穴、溝等があったが、竪穴住居跡等は確認されなかった。

一方、遺跡内に予定されている市道の県道化に伴い、途中で調査対象となった大田大正開遺跡3区、4区はいずれも既存生活道路と競合する部分が少なくないため、12月11日に地元5軒を対象に文化財センター、県企画部地域政策課、県開発公社、施工業者による説明会を開催した。そこでは、地元に対して工事工程と調査内容の説明をおこなった。これに対して地元からも工事工程と調査方法に対して、生活道の確保、夜間の安全管理、調査区内帯水除去のための排水管の埋設などが要望された。

また、大田茶屋遺跡調査終了後、工事用道路の開通をまって、既存道路下の調査区である大田茶屋遺跡10区の調査に着手した。ただし、既存道路脇に植栽していたポプラについては、現状で保存が図られたため、調査の対象から外された箇所も存在した。　（島崎　東）

調査日誌抄

平成7年

4月1日　調査機材等準備
4月5日　大田障子遺跡調査開始
5月8日　大田障子遺跡拡張区表土除去
5月18日　大田障子遺跡調査終了　大田茶屋遺跡7・8・9区調査開始
5月26日　大田大正開遺跡2区調査開始
6月6日　大田茶屋1号墳調査開始
7月13日　専門委員会開催
10月6日　大田西奥田遺跡調査開始
11月15日　大田茶屋遺跡11区調査開始
11月17日　大田西奥田遺跡調査中断
11月28日　大田茶屋遺跡11区調査終了
12月21日　大田茶屋1号墳調査終了

平成8年

1月18日　専門委員会開催
1月22日　大田西奥田遺跡調査再開
1月24日　大田大正開遺跡3区調査開始
1月25日　大田茶屋遺跡7・8・9区調査終了
2月23日　大田西奥田遺跡調査終了
2月28日　大田大正開遺跡3区調査終了
大田大正開遺跡4区調査開始
大田茶屋遺跡10区調査開始
3月11日　大田茶屋遺跡10区調査終了
3月19日　大田大正開遺跡4区調査終了
3月31日　図面整理作業終了

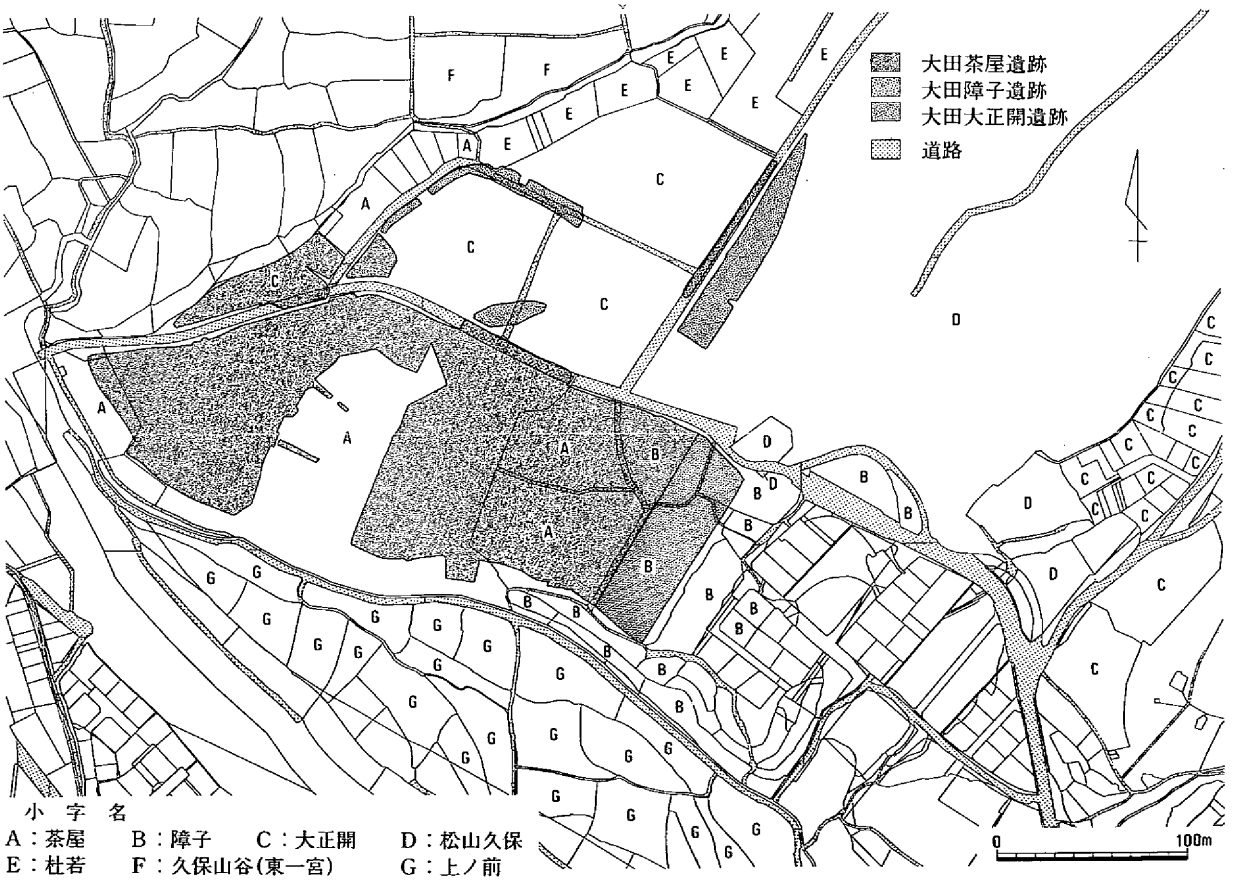
H：住居　A：柱穴列　L：池　T：墓　R：河道
B：建物　J：瓦窯　S：穴蔵　K：土壙　D：溝
F：柵　G：落とし穴

第12図　大田茶屋遺跡東地区(7-10区)・大田障子遺跡全遺構配置図(1/600)

第６節　報告書の作成

報告書の作成作業は平成８年４月１日から開始した。２名の調査員が１年間専従し、大田茶屋遺跡ほか４遺跡、総遺構数約480基、出土遺物114箱を処理することとなった。遺跡の名称は大字名の大田に小字名を付して命名したが、これは昭和49年度に津山市教育委員会が発掘調査を実施した大田十二社遺跡（注２）の例に従ったものである。ただ、第13図に示すように、実際の小字名と各遺跡の範囲とは多少食い違いがみられる。これは現地形、とくに道路によって調査区を便宜的に設定したためである。小字名に忠実に対応させると、調査記録の大幅な変更を必要とし、また、複数の遺構が二つの遺跡にまたがることも生じるため、それぞれの遺跡の中でもっとも広い面積を占める小字名を遺跡名に冠したと理解されたい。さらに、小字名は現在での区分であり、遺跡名が違っても、弥生時代などにおいては一連の生活域と捉えられていたこともありうる。とくに大田茶屋遺跡と大田障子遺跡、また、時には大田大正開遺跡も加わって一連の大遺跡を形成していたこともあったと考えている。

作成作業を開始するにあたっては二つのことを前提とした。一つは遺構掲載図の縮尺率であり、一つは掲載遺構を時代によって限定したことである。これらは遺跡の特徴によるもので、それは建物の数がきわめて多いことと、現代までのほとんどの時代に及ぶ遺構が検出されたことによる。建物の図は断面が多く、かなりの紙面をとる。このため、建物の縮尺率は１／80とし、さらに長大な柵については折り込みの関係から１／100に落とした。後者については、近代以降とみられる遺構は掲載しな



第13図　大田茶屋・大田障子・大田大正開・大田松山久保遺跡周辺地籍図(1/4000)

いこととし、近世の遺構でも紙数の関係によっては大幅な割愛を予定とした。第11・12・14図の全遺構配置図にあって、各時代の主要遺構配置図にない遺構については近代以後のものと考えている。

先の前提はあったものの、浄写はすべての遺構について実施した。これは遺構の年代、とくに建物については確定が困難であったことと、記録保存上から必要と判断した。遺物については、すべて復元作業を行い、包含層出土遺物もふくめ、土器約1500点、石器・金属器あわせて約200点を実測した。写真撮影については、土器では完形のものが少なかったため、それらと大形破片のみにとどめた。

報告書の作成にあたってもっとも困難したのは建物の時代決定であった。遺物を出土した建物は少なく、また、各時代にまたがる複合遺跡であったために、出土遺物の年代を単純にはあてはめることもできなかった。酪農試験場のものか、現代の掘立柱建物まで存在していたのである。そこで、おもに建物の棟方向に着目し、それに建物の企画や柱穴の規模を考えあわせて時代を推定した。とくに、弥生時代とした1×1間の掘立柱建物が多く、さらに、棟方向をそろえていることにいささか疑問もあったが、二三の類例もあり（注3）、現在の資料からは弥生時代とせざるをえない。

本文の章立ては時代順を優先させ、考古学の時代区分と歴史学の時代区分を使用した。これは、調査対象地の各時代における全体像を明瞭にするためである。ただ、旧石器時代と縄文時代は遺構・遺物が少ないため、頁数の配分上から1章とした。古墳時代と古代の境は7世紀中頃に置き、中世は12世紀後半以降、近世は16世紀後半以降、近代は明治時代以降とおおまかに捉えている。　（岡本寛）

第7節　調査の体制

グリーンヒルズ津山の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査及び報告書の作成作業は、岡山県企画部地域政策課から岡山県教育庁文化課へ分任され、実務作業は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。第1次調査を開始した平成4年度から、報告書作成作業を行った平成8年度までの岡山県教育委員会の体制は以下の通りである。　（岡本寛）

平成4年度（1992年度）

岡山県教育委員会

教育長	竹内康夫
教育次長	森崎岩之助

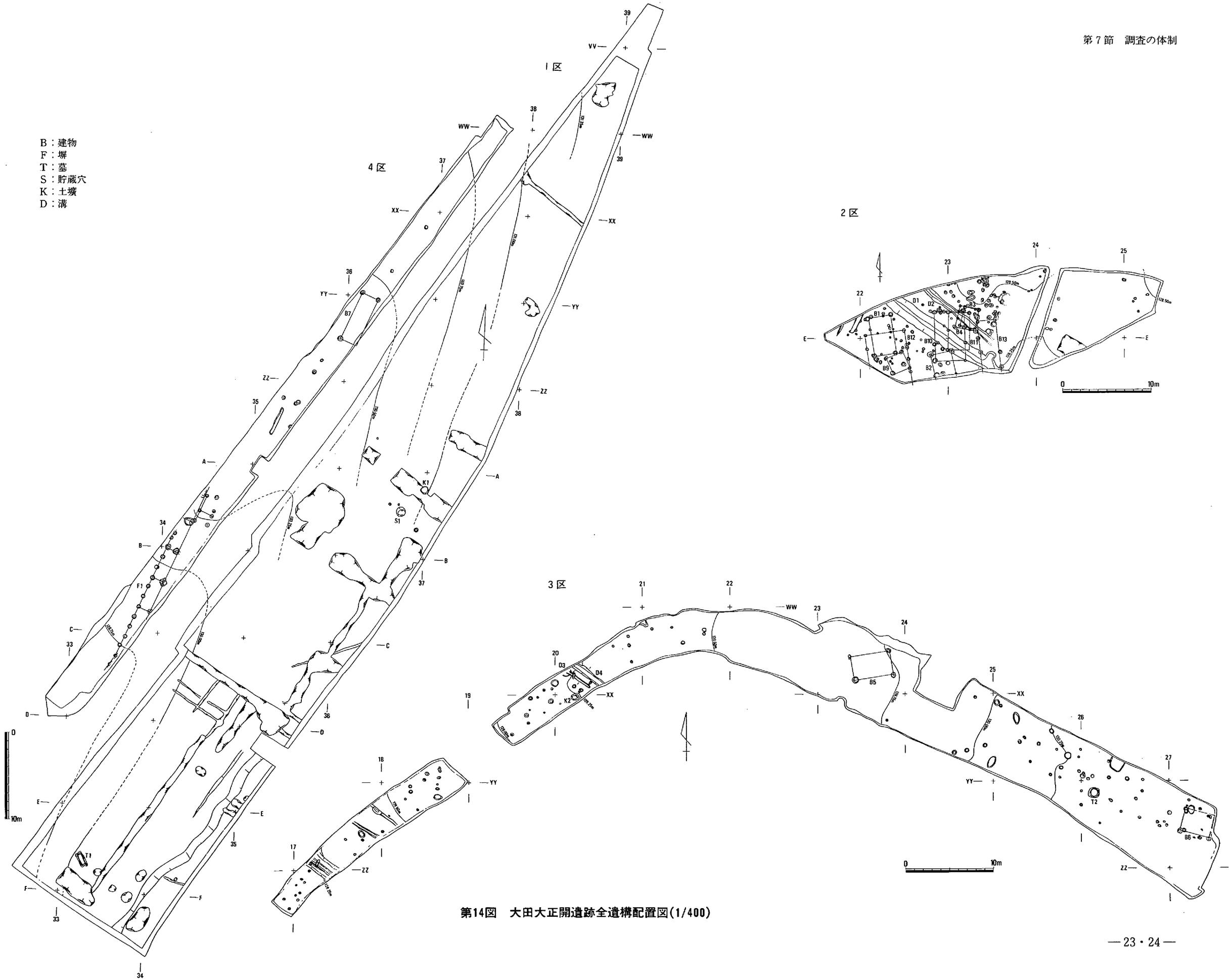
岡山県教育庁文化課

課　長	渡辺淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	柳瀬昭彦
主　査	時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山常實
次　長	河本　清
文化財保護参事	葛原克人
（総務課）	
課　長	北原　求
課長補佐（総務係長事務取扱）	小西親男
主　査	石井　茂
主　任	石井善晴
主　任	三宅秀吉
（調査第一課）	
課長事務取扱	葛原克人
文化財保護主幹	松本和男（調査担当）

B：建物
F：塀
T：墓
S：貯蔵穴
K：土壙
D：溝



第14図　大田大正開遺跡全遺構配置図(1/400)

平成５年度（1993年度）

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二

岡山県教育庁文化課

課　長	渡辺淳平

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山常實
次　長	葛原克人
（総務課）	
課　長	北原　求
課長補佐（総務係長事務取扱）	小西親男
主　査	石井　茂
主　査	石井善晴
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	高畑知功
主　査	時長　勇
主　任	三宅秀吉
（調査第一課）	
課　長	正岡睦夫
課長補佐（第三係長事務取扱）	岡田　博
文化財保護主査	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	山本昌彦（調査担当）
主　事	瀧川明徳（調査担当）

平成６年度（1994年度）

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二

岡山県教育庁文化課

課　長	大場　淳

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	河本　清
次　長	葛原克人
（総務課）	
課　長	丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）	杉田卓美
主　査	石井善晴
主　任	三宅秀吉
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	高畑知功
主　任	若林一憲
（調査第一課）	
課　長	正岡睦夫
課長補佐	松本和男（調査担当）（２月６日～３月17日）
第三係長	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主任	植月康雅（調査担当）
文化財保護主事	山本晋也（調査担当）（２月６日～３月17日）
主　事	樋口雅夫（調査担当）
主　事	岡本泰典（調査担当）

平成７年度（1995年度）

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	黒瀬定生

岡山県教育庁文化課

課　長	大場　淳
課長代理	樋本俊二
参　事	葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	高畑知功
主　任	若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　河本　清
次　　長　　高塚惠明
(総務課)
課　　長　　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）
井戸丈二
主　　査　　石井善晴
主　　任　　木山伸一
(調査第二課)
課　　長　　伊藤　晃
課長補佐（第二係長事務取扱）
福田正継
文化財保護主査　易　伯通（調査担当）
文化財保護主査　島崎　東（調査担当）
文化財保護主任　大柳　浩（調査担当）
（4月1日～8月31日）
文化財保護主任　植月康雅（調査担当）
文化財保護主任　可児　巧（調査担当）
（9月1日～3月31日）
主　　事　　岡本泰典（調査担当）
（4月1日～5月31日）
主　　事　　佐藤寛介（調査担当）
（6月1日～3月31日）

平成8年度（1996年度）

岡山県教育委員会

教育長　　森崎岩之助
教育次長　　黒瀬定生

岡山県教育庁文化課

課　　長　　大場　淳
課長代理　　松井英治
参　　事　　葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
平井　勝
主　　査　　若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　河本　清
次　　長　　高塚惠明
文化財保護参事　正岡睦夫
(総務課)
課　　長　　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）
井戸丈二
主　　査　　木山伸一
(調査第二課)
課　　長　　伊藤　晃
課長補佐（第二係長事務取扱）
山磨康平
文化財保護主幹　岡本寛久（整理担当）
文化財保護主任　伊東　孝（整理担当）

注

（注1）岡本寛久『大田茶屋遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96　岡山県教育委員会　1994年
（注2）河本清・中山俊紀・安川豊史・行田裕美『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10　津山市教育委員会　1981年
（注3）安川豊史『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告9　津山市教育委員会　1981年。行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告17　津山市教育委員会　1985年

第3章　縄文時代以前の遺構と遺物

第1節　概要

発掘調査によって検出された縄文時代以前の遺構・遺物は少なかったが、それらを出土した遺跡は酪農試験場跡のほぼ全域に及んでいた。時代的には旧石器時代末期から縄文時代早期にかけてと、縄文時代晩期の2期に分けられる。大田茶屋遺跡から縄文時代後期かとみられる破片が1片出土しているが、かならずしも明瞭ではない。それぞれの時期の遺構・遺物の分布状況をみると、旧石器時代末期から縄文時代早期にかけては、北部の大田西奥田遺跡から南部の大田茶屋遺跡まで、広い分布状況を示しているのに対し、縄文時代晩期では、南部の大田茶屋遺跡とその周辺に限られている。このことは、それぞれの時期の生業のあり方と関わっていると考えられる。

大田茶屋遺跡から黒曜石製の細石刃が1点出土し、同時に石核らしい剝片が伴っていた。この発掘調査で出土した遺物の中ではもっとも古く、この地域における人間の活動が旧石器時代末期まで遡って確認された。大田大正開遺跡でも黒曜石の剝片が出土している。大田茶屋遺跡では、それから少し時代の下った縄文時代早期前半になっても、小粒の楕円文や山形文をもつ押型文土器が出土し、人間の往来が継続している。このような押型文土器は岡山県北部の丘陵地ではしばしば認められるもので、この時代における広範な活動を知ることができる。大田茶屋遺跡の押型文土器は丘陵緩斜面の7区と9区の包含層から出土していて、南に向かって開けた水辺が憩いの場所であったことを思わせる。

大田西奥田遺跡では竪穴住居跡が1棟検出された。ほぼ完存に近く、床面からは土器が倒壊したような状態で出土して年代が確定できるため重要視される。土器の文様は押型文ではあるが、粗大な楕円文となり、文様のくずれが著しく、縄文時代早期の後半とみられる。住居跡を検出した地点から西に隣接する市道の拡幅工事に伴って津山市教育委員会が実施した発掘調査では、わずか1片の縄文土器片しか出土せず、遺跡の範囲は丘陵頂部に限定されることとなったが（注1）、一定期間ではあっても、住居を構えて落ち着く場所として選定されていたことが知られる。近接して落とし穴も検出された。南部の大田大正開遺跡でも縄文時代早期後半の黒曜石製の鏃が出土している。また、大田茶屋遺跡からは他地域からの搬入品かとみられる斜縄文の繊維土器も出土していて注目される。おそらくは、一定の領域の中で、狩猟のための移動ルートが確定していて、頻繁な来訪となるのであろう。

縄文時代晩期の遺構は大田茶屋遺跡の西半に集中していた。遺物は隣接する大田障子遺跡や大田大正開遺跡でも出土していて、とくに、大田障子遺跡では打製石鍬の出土が目立った。この石鍬は、県道部分として調査された1区では、焼石を含む多量の礫が入った土壙から谷尻式の土器を伴って出土していて、開墾のための道具とみられ、農耕の定着を示すものとされる（注2）。住居跡は未検出ではあるが、調査対象地の南西端に位置するこの丘陵頂部一帯が、縄文時代晩期後半には定住の地となっていたと考えたい。なお、柱穴から完形の石匙を出土した建物56が存在するが、棟の方向が隣接する中世とみられる建物群と等しいことから、縄文時代とは断定できなかった。出土した土器片には口縁端部に刻目をもたない突帯文土器が多く、谷尻式の他に沢田式も存在する。　（岡本寛）

第２節　大田西奥田遺跡

１．遺構配置

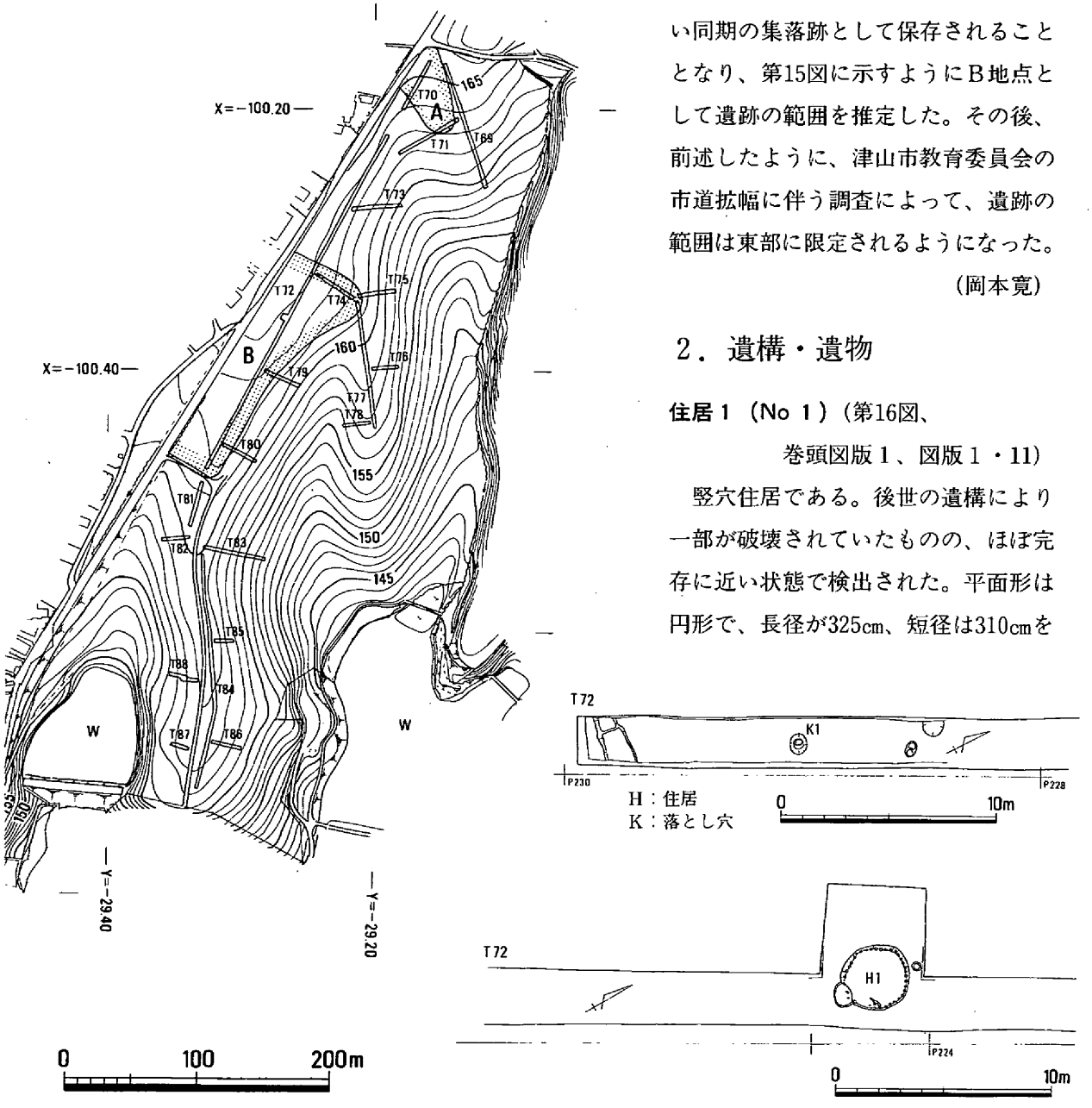
大田西奥田遺跡における縄文時代以前の遺構と遺物は、第２次調査で丘陵尾根筋の平坦部に設定した、全長291.5mの第72トレンチの南半から検出された。トレンチの中央からやや南寄りで竪穴住居跡が１軒発見され、全容を把握するために調査区を拡張した。さらに、住居跡から120m南で落とし穴も１基検出された。住居跡は頂部に、落とし穴は谷の肩部に位置していた。住居跡から出土した土器は縄文時代早期のもので、落とし穴も同時とみられ、類例のきわめて少ない同期の集落跡として保存されることとなり、第15図に示すようにB地点として遺跡の範囲を推定した。その後、前述したように、津山市教育委員会の市道拡幅に伴う調査によって、遺跡の範囲は東部に限定されるようになった。

（岡本寛）

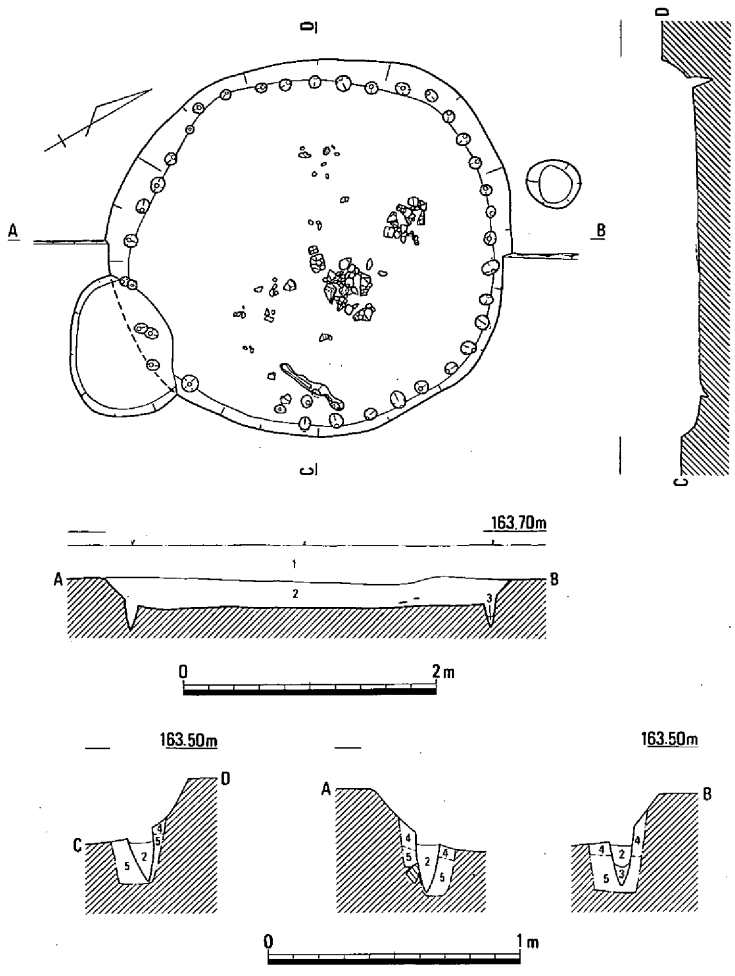
２．遺構・遺物

住居１（No１）（第16図、巻頭図版１、図版１・11）

竪穴住居である。後世の遺構により一部が破壊されていたものの、ほぼ完存に近い状態で検出された。平面形は円形で、長径が325cm、短径は310cmを



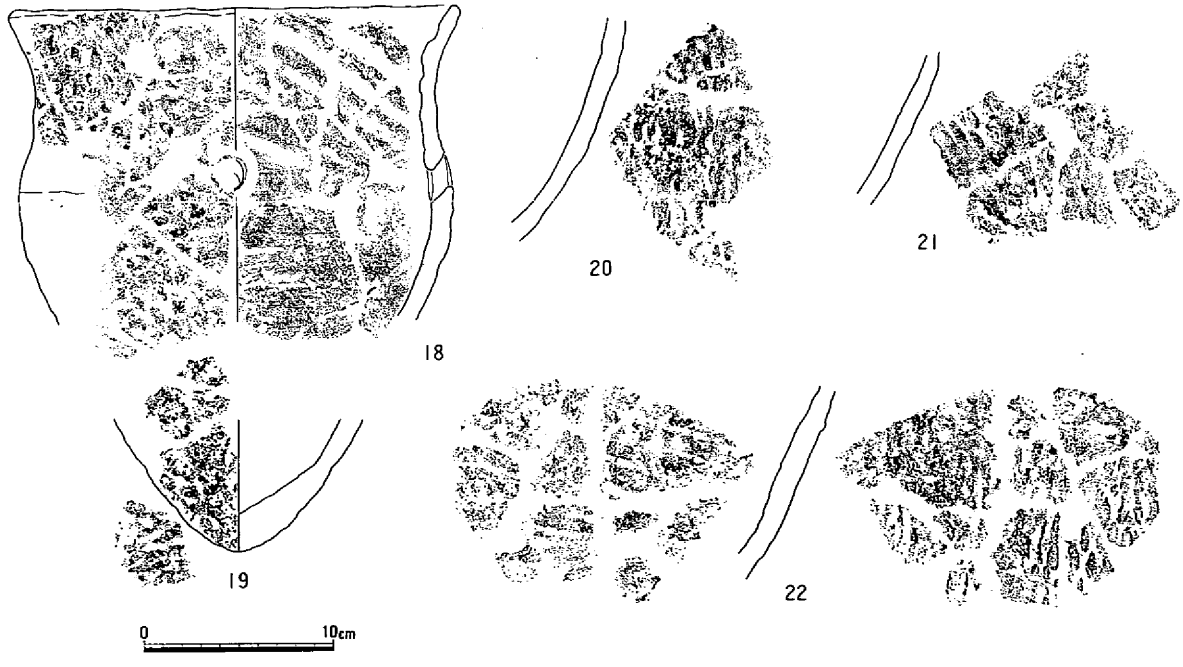
第15図　第72トレンチ（Ｔ72）位置及び遺構配置図（1/5000・1/300）



1．黒褐色土(灰黄褐色粘性砂質土小粒含)
2．暗灰褐色粘性砂質土斑灰褐色粘性砂質土(炭粒点々、焼土含)
3．淡灰褐色粘性砂質土
4．灰黄色粘性砂質土
5．黄色～黄褐色粘土(基盤)

測った。竪穴の深さは25cmであった。壁面の傾斜は緩く、底面との境は湾曲する感じが強かった。底面はほぼ平坦だったが、中央部分がもっとも低く、壁面の下端付近より10cmほど低い。底面は地山で、貼り床などはみられなかった。竪穴の埋土は１層で炭粒を点々と含み、焼土もわずかに認められた。床面にも炭粒が散らばり、長さが３～５cmのものもあったが、火処はなかった。

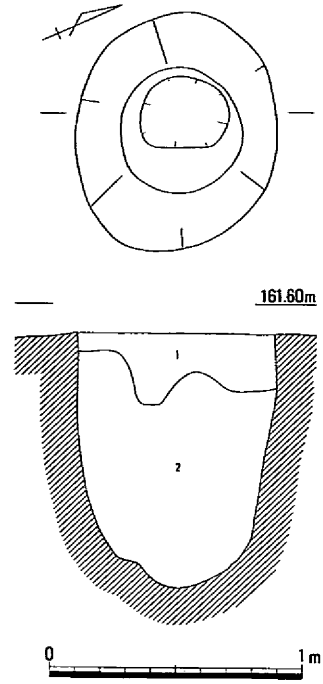
壁面の下端で、杭穴がぐるりと検出され、これがこの住居の構造上の大きな特徴である。杭穴は長径が７～14cmあり、心々間で20～40cmの間隔をもって床面を取り囲んでいた。南東側に一カ所間隔が96cmと広い所があり、出入口と関係するのではないかと考えている。杭の先端は尖らせていて、打ち込まれたものとみられるが、床面からの深さは10～20cmと浅い。ただ、



第16図　住居１（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）

地山の硬くて岩盤に近い部分までは達していた。第16図では杭の先端部分を小さな丸で表現しているが、それをみるとほとんどの杭は垂直に近く打ち込まれていた。このことから住居の上屋構造を想像すると、壁と屋根の二つの部分を組み合わせた構造がもっとも考えやすい

床面に密着した状態で土器片が集中して出土し、倒壊した土器が現位置を保っていたとみられる。このことから住居の年代を確定することができた。かなりの部分まで接合が進み、土器の遺存状態の悪さから判断すれば、完形品があった可能性が高い。土器片の胎土や焼成を観察すると、少なくても２個体は存在するようである。



１．灰褐色粘性砂質土(炭粒点々)
２．灰黄褐色粘質土（地山礫砕粒含）

第17図　落とし穴１(1/30)

第16図には土器の特徴がつかみやすい破片を掲載した。このうち、**20**と**21**は同一個体とみられ、**22**は別個体の可能性が高い。**18**と**19**は前者に似るが断定はできず、**18**と**19**の関係も同じである。ちなみに、**18**は北側の集中部分、**19**は中央部、そして**20**～**22**は**19**に近接した南側の集中部分にあった。いずれも深鉢の破片で、外面は長粒状の粗大な楕円の押型文で飾られ、胎土には砂粒を多量に含んでいる。焼成は甘いが、硬く締まった部分も認められ、焼き方にむらがある。**18**は半分強が接合され、底部は**19**のような尖底と考えられる。砲弾形の胴部から頸部がわずかに締まり、緩やかに外反する口縁部に至る。頸部から口縁部にかけての内面には指で描いたとみられる幅10㎜前後の斜行凹線を巡らせ、胴部の内面はナデて滑らかにしている。外面の押型文は磨滅が著しいためか、その形状さえ不明瞭だが、楕円の長軸方向が、口縁部から頸部にかけてと胴部下半では縦方向であるのに、胴部上半では横方向に観察される。頸部の下端に直径17㎜の孔が斜めに穿たれている。22の楕円はより細長く、内面には12㎜程度の間隔で横走する条痕が認められる。

住居１から出土した押型文土器は、その文様から押型文土器の後期に位置する高山寺式に併行し、その新段階に属するものと考えられる。住居１の年代は縄文時代早期の中葉末とみられる。（岡本寛）

落とし穴１（No ３）（第17図）

平面形は長径107㎝、短径80㎝の楕円形で、深さは102㎝を測った。壁は垂直に近く、底面西寄りに長径35㎝、深さ10㎝の窪みがみられた。埋土の上層は締まりのない土で炭粒を点々と含み、下層は固くしまって塊状の土が混合していた。水晶の小片が１個出土した。穴の形状や、埋土がきわめて固いこと、また、遺跡の縁辺に位置することなどから、住居と同期の落とし穴と判断した。　（岡本寛）

３．小結

大田西奥田遺跡から検出された竪穴住居跡は縄文時代早期中葉末と確定することができる。この時期の住居跡は中国地方では稀で、ほぼ完存し、上屋構造を想定することも可能で、その資料価値は高い。距離的に近接し、時代的には先行する鏡野町竹田遺跡の住居跡（注３）と類似することは注意される。落とし穴が伴い、同期の集落が存在した可能性が強い。季節的な一定期間であるかもしれないが、この地において定住生活の行われたことを物語る資料として評価したい。　（岡本寛）

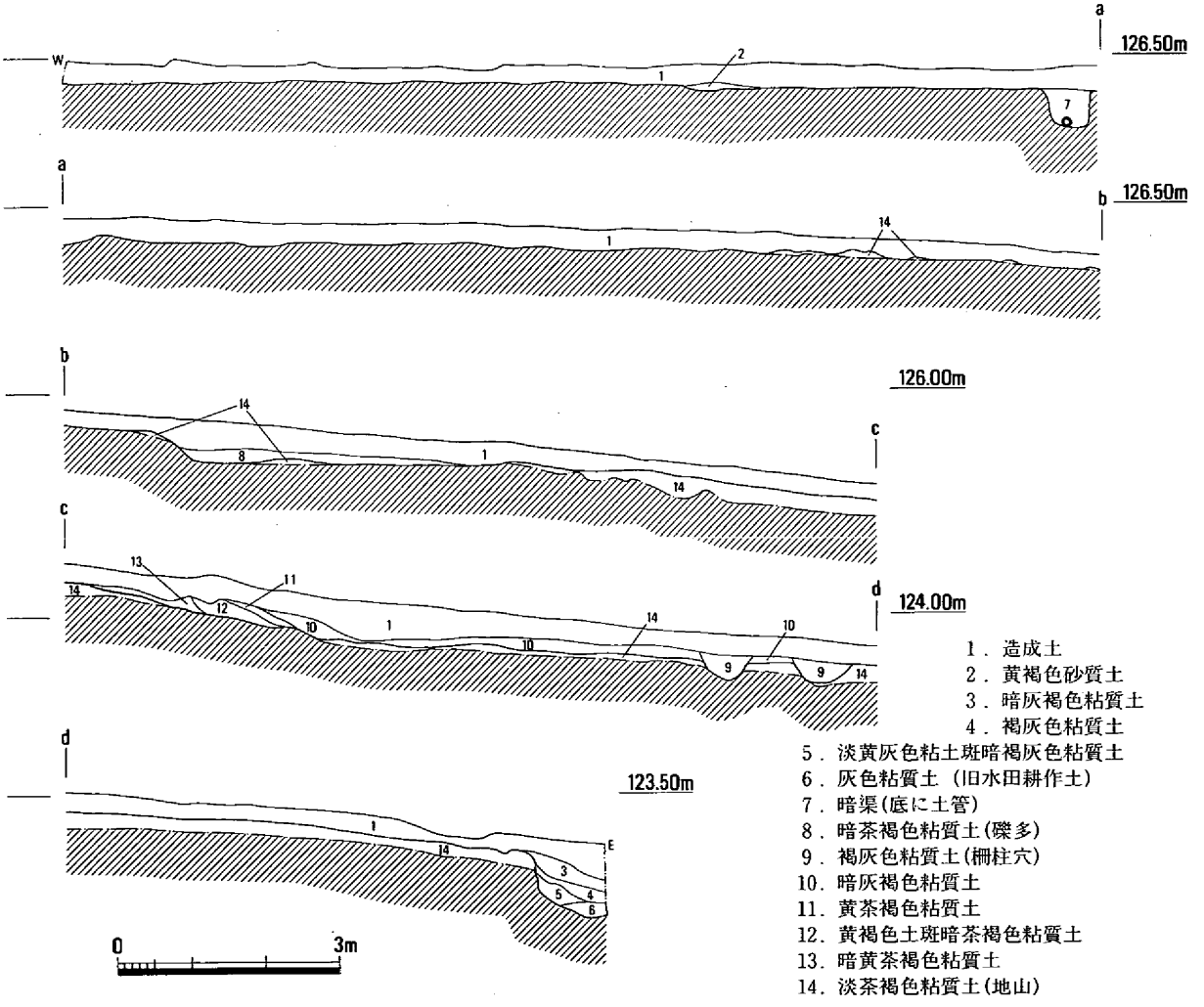
第３節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

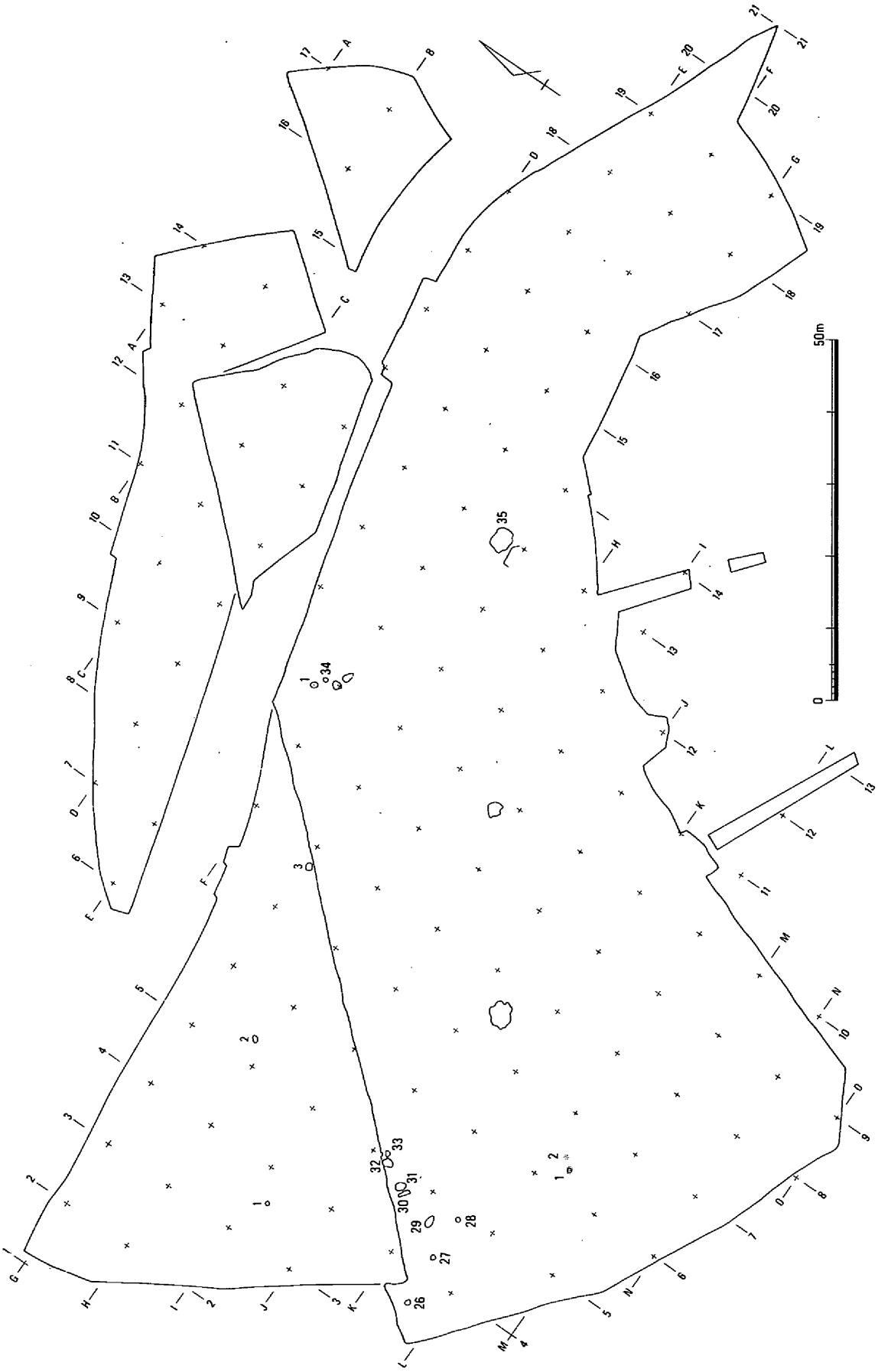
旧石器時代に属する遺構は検出されなかったが、包含層内から２点の石器が出土しており、大正開遺跡の石器とともに、この丘陵一帯における人間活動の開始時期を示す資料として重要である。

縄文時代の遺構は、西地区で落とし穴１基・土壙13基・集石２基（県道調査区の１区を含む）、東地区で落とし穴４基が検出された。ただ出土遺物のない遺構が多く、土質にも他時期との明確な相違点は見出せなかったため、時期決定は遺構の形状や、埋土と地山との境が不明瞭といった微妙な特徴に頼らざるをえず、正確さに欠ける点は否めない。判明する限りでは、早期の土壙１基以外は晩期に属する遺構であった。この他、土壙とするには躊躇される落ち込みや風倒木痕などは、遺構配置図に記載したのみで個別の説明は割愛した。

西地区の遺構は、１・４～６区に存在し、４区と１区の境界付近に特に集中するようだが、性格不明の土壙がほとんどで、住居や火処などは認められない。しかし一部の土壙埋土や包含層内から比較的大形の土器片が出土しており、付近一帯が生活の場であったことは確実であろう。



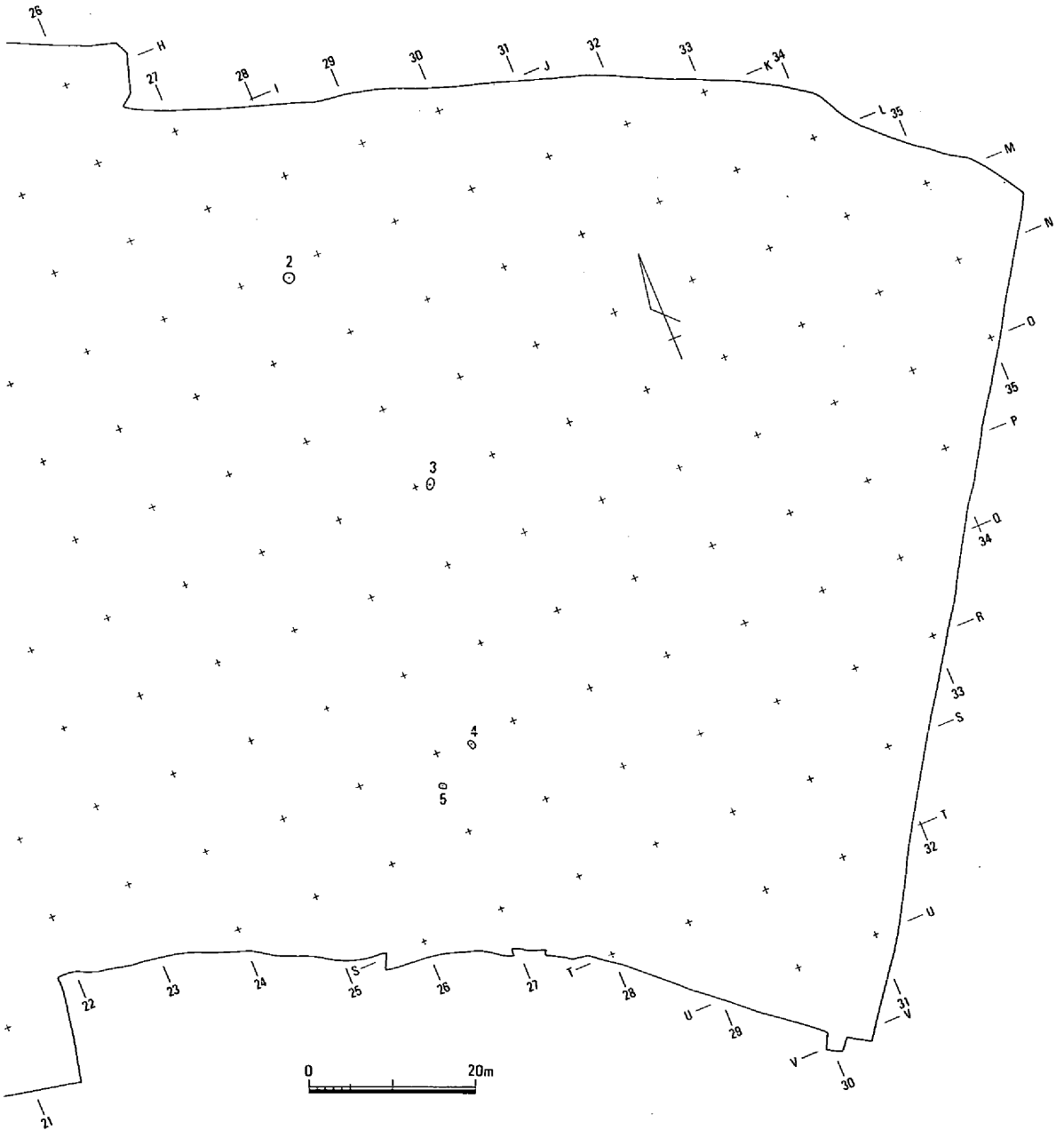
第18図　大田茶屋遺跡４区北東壁土層断面図(1/100)



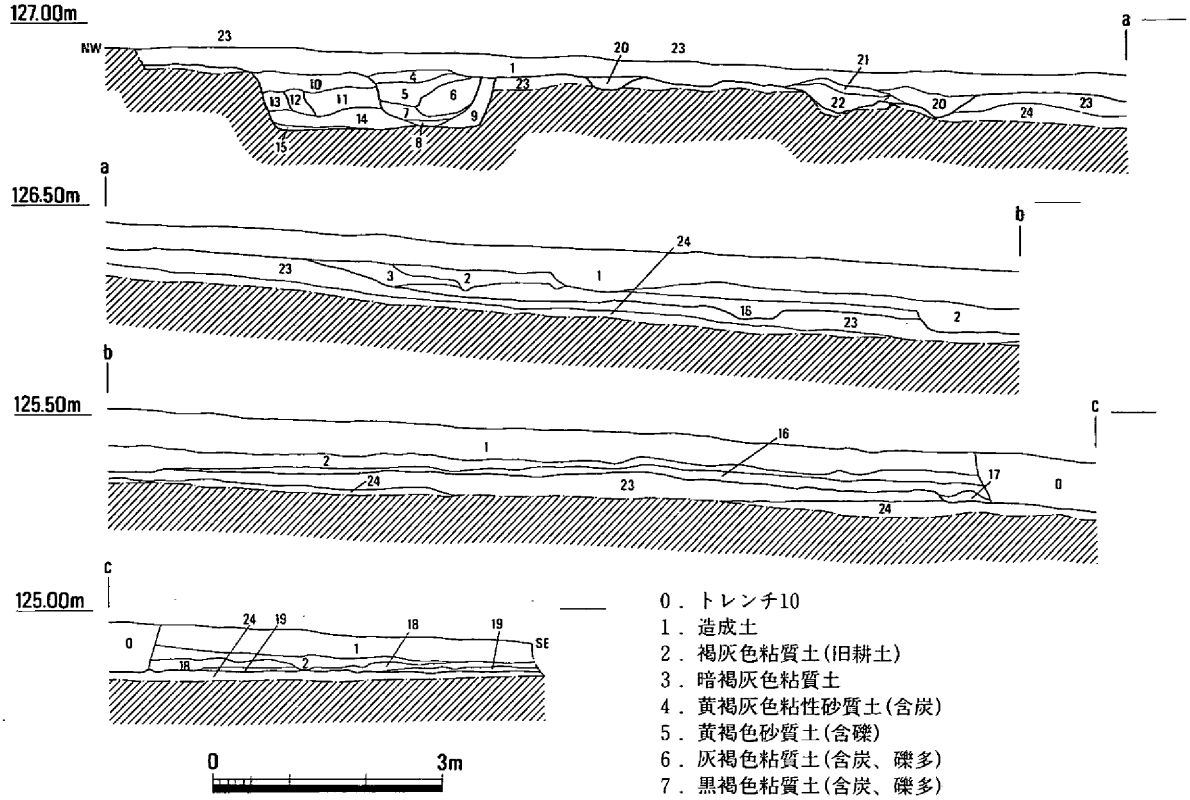
第19図　大田茶屋遺跡西地区(4-6・11区)縄文時代主要遺構配置図(1/800)

東地区には落とし穴４基が散在している。ほぼ南北方向に並んでいるが、同時期のものか、意図的な配置かどうかは判断しがたい。この他には遺構は全く認められず、生活空間と考えられる西地区とは対照的である。東西両地区を隔てる谷地形が自然の境界線となり、当時の集落は東地区までは及んでいなかったのであろう。東地区は落とし穴の存在にみるとおり、狩猟の場などとして利用された可能性が高い。

ここで調査区の層序についても触れておきたい。４・５区北東壁面での観察によると、削平により包含層の残りは悪く、表土の直下が地山面となり、遺構のほとんどはこの地山面で検出された。第18図にみられるように、地山を削り出した近世以降の畑の段が数条調査区内を走っており、地形の改変・削平の激しさを裏付けている。しかし、４区では段の埋土を古代末～中世初の柵の柱穴が切り込む箇所があることから、一概に全ての段が近世以降の造作とも断言できないようである。　（岡本泰典）



第20図　大田茶屋遺跡東地区(7-10区)縄文時代主要遺構配置図(1/800)

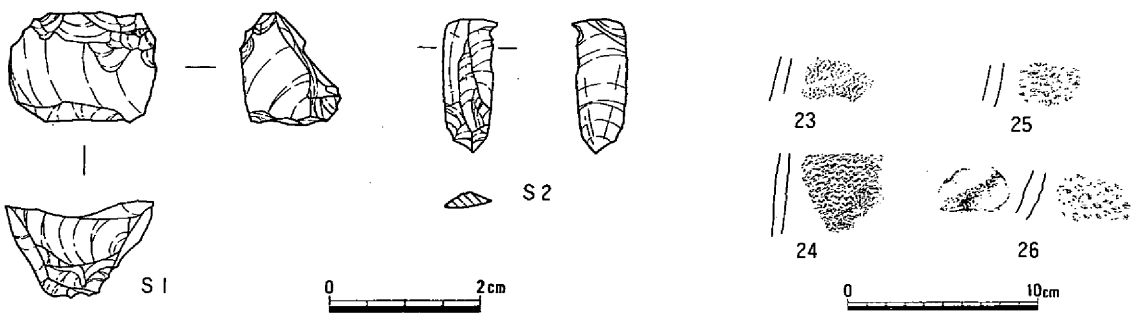


第21図　大田茶屋遺跡５区北東壁土層断面図(1/100)

２．遺構・遺物

旧石器（第22図、図版11）

包含層内から黒曜石製の旧石器が２点出土した。**Ｓ１**は石核と考えられ、最大長19.0㎜、同幅14.5㎜、同厚さ13.5㎜、重量3.0ｇを測る。剥離痕が不明瞭であるが、その形態からみて細石刃核の可能性がある。**Ｓ２**は細石刃で、最大長17.5㎜、同幅7.0㎜、同厚さ2.3㎜、重量0.3ｇを測る。一端が尖るが、意図的とは思われない。これらの石器は、遺構に伴わないとはいえ遺跡の存続期間の上限を定める重要な遺物といえる。　（岡本泰）



第22図　大田茶屋遺跡出土旧石器・押型文土器(1/1・1/4)

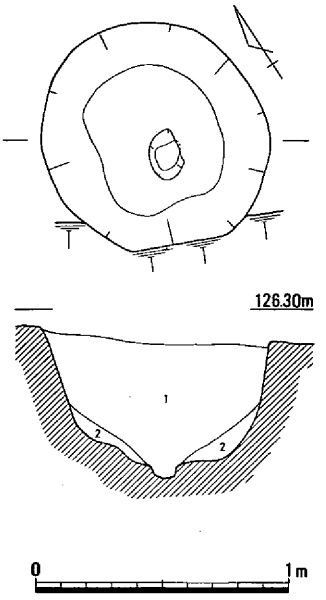
押型文土器（第22図）

縄文時代早期の押型文土器が包含層から４点出土しており、第22図に示した。いずれも深鉢の小片と思われる。外面は**23・24**では山形押型文、**25・26**では楕円押型文で装飾され、内面はナデで調整される。**26**の内面には斜行する凹線文があることから、口縁部付近と考えられる。　（岡本泰）

落とし穴１（No92）

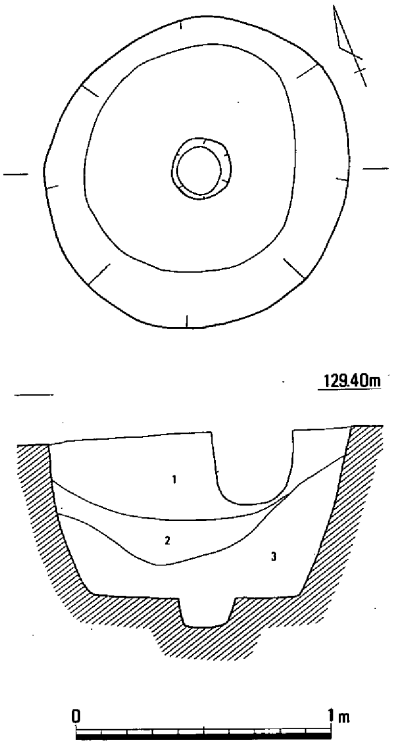
（第23図）

９Ｅ区に位置する。平面形は円形で、径90cm、深さ53cmを測り、壁面から底面への移行は緩やかである。底面の中央やや南寄りに深さ10cmの不整楕円形の小穴があることから落とし穴と考えたが、下層部の埋土は地山との区別が不明瞭で、小穴の検出も困難であったため、確実といえるものではない。遺物は出土していない。　（岡本泰）



１．茶灰褐色粘質土（礫含）
２．灰黄褐色粘質土（礫含）

第23図　落とし穴１（1/30）



１．暗褐色粘性微砂
２．褐色粘質土斑暗褐色粘性微砂
３．暗褐色粘性微砂・黄灰褐色粘性微砂互層

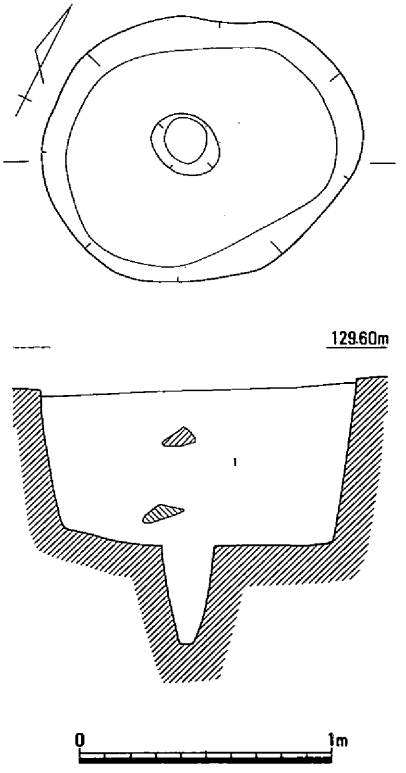
第24図　落とし穴２（1/30）

落とし穴２（No315）（第24図、図版１）

27Ｋ区の北部に位置する。平面形は直径約120cmの円形を呈し、検出面から底面までの深さは約60cmを測る。

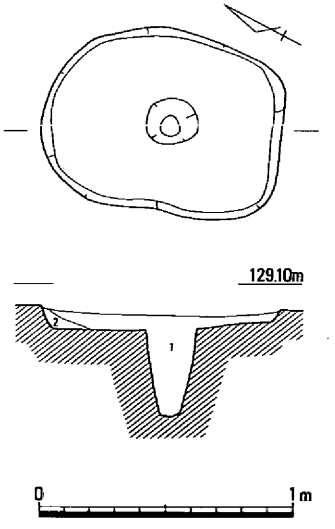
ほぼ平坦に掘削された底面の中央には径22cm、深さ10cmほどのピットがある。

土層では杭の痕跡などは確認できず、遺物も出土していないが、その形態から縄文時代の落とし穴と判断した。　（佐藤寛介）



１．黄色土斑黒灰色粘性微砂

第25図　落とし穴３（1/30）



１．暗褐色粘質土
２．礫混黄褐色粘質土

第26図　落とし穴４（1/30）

落とし穴３（No408）

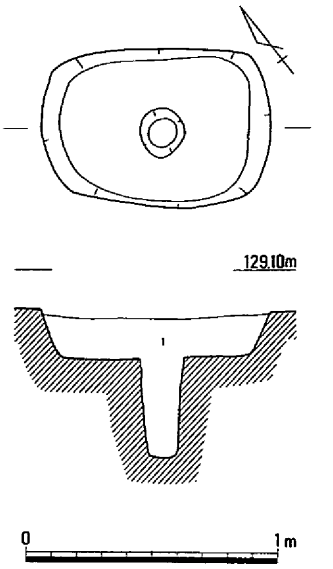
（第25図）

28Ｎ区の北西部に位置する。平面形は長径130cm、

短径60cmを測る。平坦に掘削された底面の中央には径20cm、深さ40cmほどのピットがある。土層では杭の痕跡などは確認できず、遺物も出土していないが、その形態から縄文時代の落とし穴と判断した。（佐藤）

落とし穴４（No349）（第26図）

27Q区の北部に位置し、南西６ｍには落とし穴５がある。平面形は長径90cm、短径70cmほどの隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。平坦に掘削された底面の中央には径20cm、深さ35cmほどのピットがある。土層では杭の痕跡などは確認できず、遺物も出土していないが、その形態から縄文時代の落とし穴と判断した。落とし穴５も含め、検出面から底面までの深さが浅く、後世の削平が著しいことを示している。（佐藤）



1．黄色土斑暗褐色粘質土

第27図　落とし穴５(1/30)

落とし穴５（No351）（第27図）

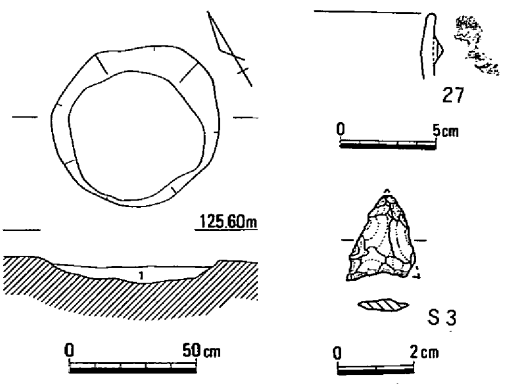
27Q区の西部に位置し、北東６ｍには落とし穴４がある。平面形は長径90cm、短径60cmほどの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。ほぼ平坦に掘削された底面の中央には径20cm、深さ40cmほどのピットがある。土層では杭の痕跡などは確認できず、遺物も出土しなかったが、その形態から縄文時代の落とし穴と判断した。（佐藤）

土壙26（Ｐ２）（第28図、図版11）

３Ｋ区の中央、南西に伸びる丘陵の先端に位置する。平面形は直径60cmほどの円形を呈し、検出面からの深さは削平が著しかったためか10cmほどである。出土遺物には深鉢の口縁部とサヌカイト製の石鏃がある。これらの遺物から土壙26の時期は縄文時代晩期後半と考えられる。（佐藤）

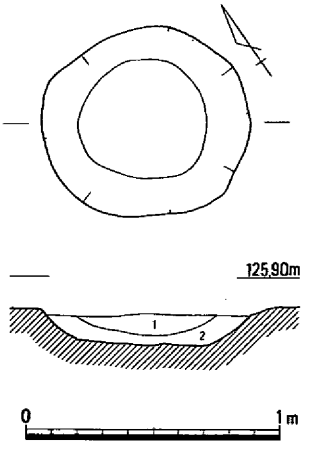
土壙27（No20）（第29図）

４Ｋ区に位置する円形の土壙である。長径83cm、短径74cm、検出面からの深さは14cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土の色調は同時期の他の遺構に比べて明るい。埋土中から縄文時代晩期の土器片が少量出土しており、土壙の時



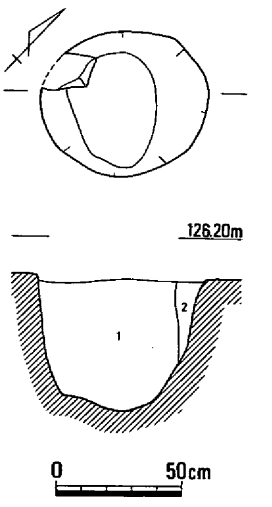
1．暗茶褐色粘質土
（礫・炭含）

第28図　土壙26(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)



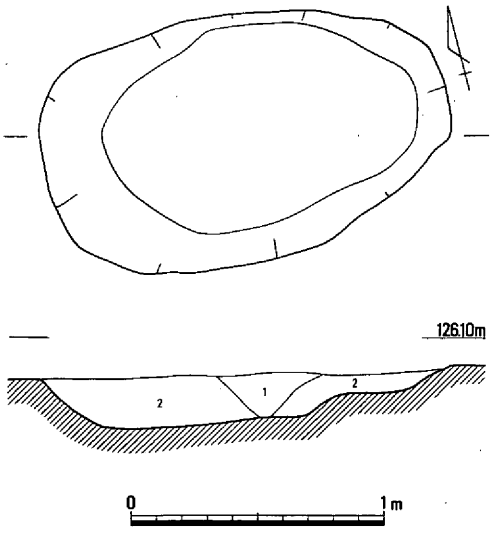
1．淡灰褐色粘質土
2．淡灰黄褐色粘質土

第29図　土壙27(1/30)



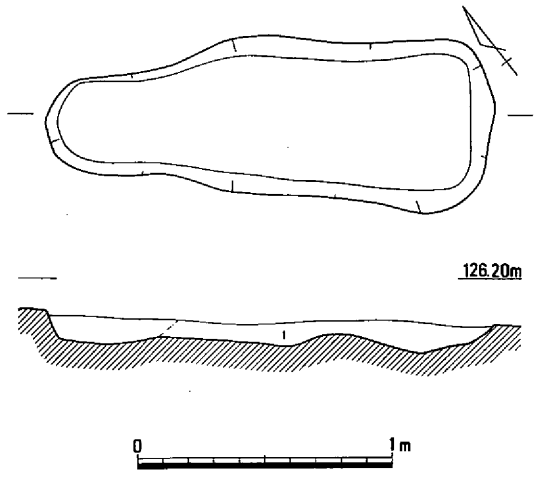
1．暗茶褐色粘質土(礫含)
2．暗黄褐色粘質土

第30図　土壙28(1/30)



１．暗灰黄褐色粘質土
２．暗茶灰褐色粘質土

第31図　土壙29(1/30)



１．暗茶灰褐色粘質土

第32図　土壙30(1/30)

期も同様と考えられる。　（岡本泰）

土壙28（No54）（第30図）

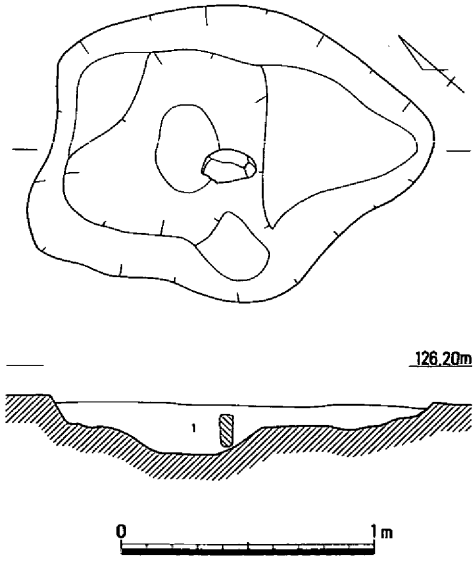
４Ｋ区に位置する楕円形の土壙で、長径67cm、短径56cm、深さ52cmを測る。壁面の一部に地山の礫が露出している。土器小片が少量出土しており、時期は縄文時代晩期と考えられる。　（岡本泰）

土壙29（No51）（第31図）

４Ｋ区に位置する楕円形の土壙である。長径162cm、短径99cm、深さは最大21cmを測り、底面には段差がある。遺物は出土していないが、縄文時代晩期と考えられる。　（岡本泰）

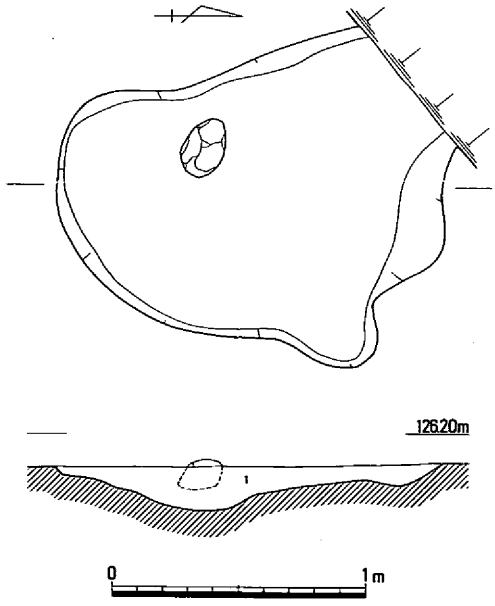
土壙30（No49）（第32図）

４Ｊ区に位置する不整長方形の土壙で、長径175cm、短径64cm、深さ13cmを測る。すぐ北側に土壙31が隣接する。遺物は出土していないが、縄文時代晩期の遺構と思われる。　（岡本泰）



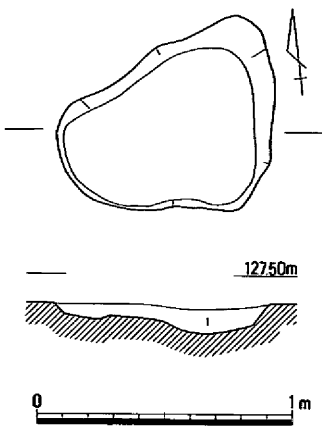
１．黄褐色粘質土斑暗茶灰褐色粘質土

第33図　土壙31(1/30)



１．黄褐色粘質土斑暗茶灰褐色粘質土

第34図　土壙32(1/30)



1．黄灰褐色粘質土斑茶灰褐色粘質土

第35図　土壙33(1/30)

土壙31（No50）（第33図）

４Ｊ区に位置し、土壙30に隣接する不定形の土壙である。長径152cm、短径117cm、深さ最大23cmを測り、底面には著しい凹凸がある。遺物はないが、縄文時代晩期と考えられる。　（岡本泰）

土壙32（No48）（第34図）

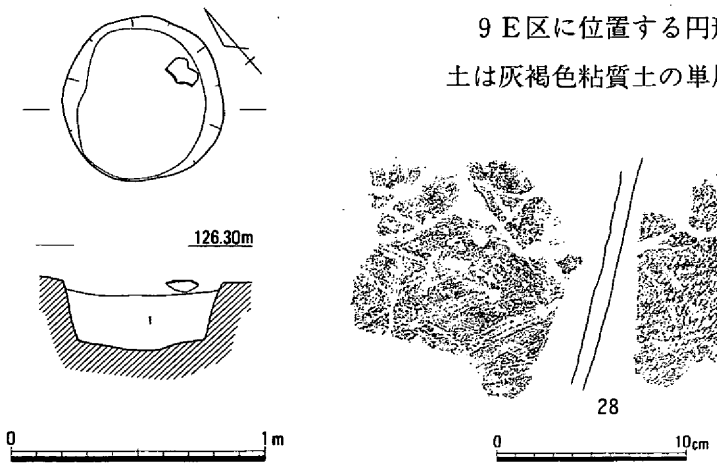
４，５Ｊ区に位置する不定形の土壙である。長径152cm、短径133cm、深さ最大17cmを測り、底面には凹凸がある。少量出土した土器片から、時期は縄文時代晩期と推定される。　（岡本泰）

土壙33（No46）（第35図）

５Ｊ区に位置し、土壙32の東に隣接する不整楕円形の土壙である。長径96cm、短径70cm、深さ最大12cmを測り、底面には凹凸がある。遺物はないが、縄文時代晩期と考えられる。　（岡本泰）

土壙34（No93）（第36図）

９Ｅ区に位置する円形の土壙で、径65cm、深さ26cmを測る。埋土は灰褐色粘質土の単層で、多量の礫が含まれていた。埋土の最上部から深鉢の胴部片**28**が出土した。外面には単節の斜縄文が施され、内面は条痕状のナデで調整される。胎土には火山ガラスを含む粘土を用い、繊維が混入されている。この土器により、土壙の時期は縄文時代早期に比定される。　（岡本泰）



1．灰褐色粘質土(礫多)

第36図　土壙34(1/30)・出土遺物(1/4)

土壙35（No99）（第37図、図版１・11）

12，13Ｆ区に位置する不整楕円形の土壙である。長径338cm、短径257cm、深さ24cmを測る。壁面の傾斜は北西部以外では緩やかで、断面形は浅い皿状を呈する。当初その平面形から竪穴住居とも考えられたが、以上のような断面形に加えて底面に柱穴等も確認されなかったため、その可能性は薄いとみている。埋土は褐灰色粘質土の単層で、中央部には多数の礫が投棄されたような状態で含まれていた。礫はすべて自然石のままで、加工や被熱の痕跡は認められない。

礫に混じって比較的大形の深鉢片も出土しており、うち２点を図示した。２点とも内外両面はナデで調整され、口縁直下に刻目突帯が巡る。**29**は口径242mmを測り、胴部は直線的にすぼまる。外面の一部には煤が付着している。**30**も深鉢で、口頸部と胴部の境が外側へ張り出すものと思われる。

Ｓ４は残存状態が悪いが、一部に刃部形成が認められ、スクレイパー等の可能性がある。このほかにサヌカイト片も出土している。

これらの遺物から、土壙の時期は縄文時代晩期後半と考えられる。なお、すぐ南側に埋土の類似する別の土壙が存在したが、後世の段に切られて残りは悪く、遺物も出土していない。　（岡本泰）

第37図　土壙35(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

集石１（No16）（第38図）

６Ｌ区で２基近接して検出された集石のうちの１基である。大小の礫が長さ80cm、幅60cmの範囲に集積され、主軸方向はほぼ北西－南東である。礫には加工や被熱の痕跡は認められない。下面には不定形の窪みがあり、礫の詰まった土壙の最下部が残存したものとも考えられる。遺物はないが、１区で検出された縄文時代晩期の土壙に同様のものがあり、一応縄文時代の遺構としておく。（岡本泰）

集石２（No17）（第39図）

集石１の北東に位置する。大小の礫が長さ80cm、幅55cmの範囲に集積され、主軸方向はほぼ北東－

南西で集石１とは直交する。集石１と同じく下面に窪みがあり、その他の特徴も共通する。時期も同様に縄文時代と考えられる。　（岡本泰）

包含層出土遺物

（第40～42図、図版11）

31は浅鉢の口縁付近と思われる破片で、２条の凹線文が巡っている。縄文時代後期に属すかも知れない。

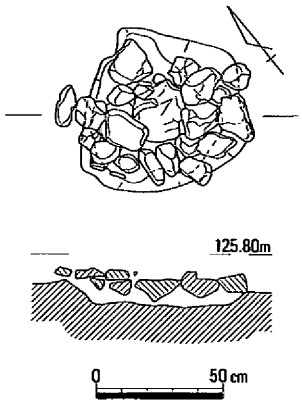
32・33は浅鉢の口縁部である。端部は内側に肥厚する。32にはヘラミガキ痕が残る。34～39は深鉢の口縁部である。34は端部にじかに突帯がつく。35～39は口縁部直下に刻目突帯を有する。35では刻目は細く、密に施される。各土器とも内外面とも調整はナデが主体である。40は口縁部付近か。

41～45は深鉢の口頸～胴部である。いずれも口頸部にはヘラ描き沈線で文様が施される。41～44は小片のため文様の全容が明確でない。45の口頸部には、斜行する沈線を組み合わせた鋸歯文が上下交互に描かれている。胴部との境には刻目突帯が巡り、その直上に２条の沈線が認められる。

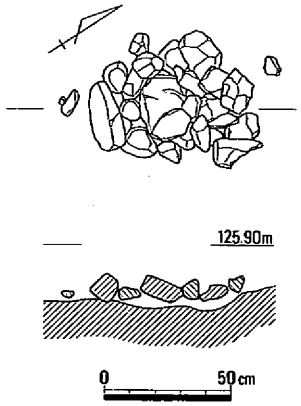
Ｓ５～８は石鏃である。Ｓ８は基部がわずかに窪み、側縁は緩いＳ字状にカーブしている。

Ｓ９は楔形石器。上下両端に敲打痕が残る。

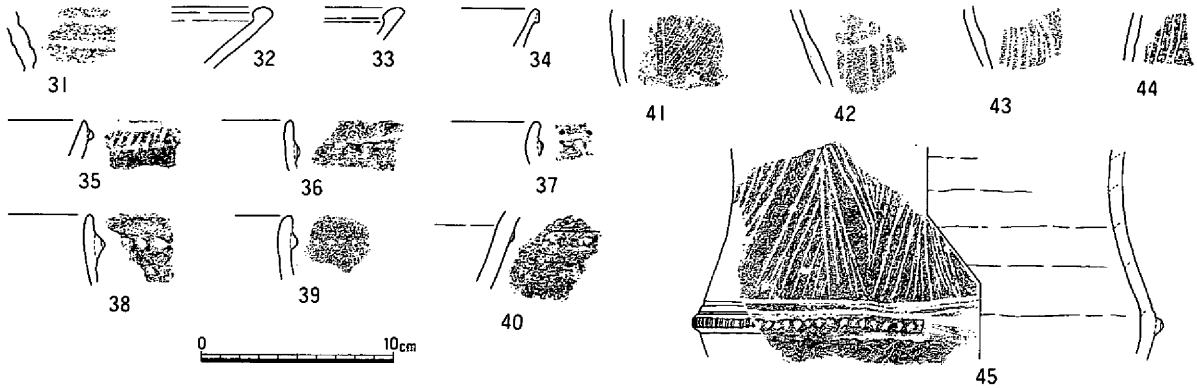
Ｓ10は剥片で、穿孔の途中らしき円形の窪みがある。何を意図したのかは不明である。



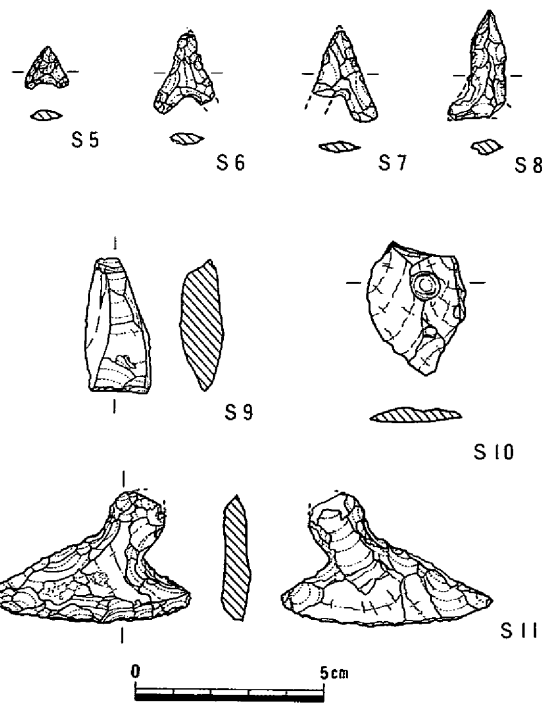
第38図　集石１(1/30)



第39図　集石２(1/30)



第40図　大田茶屋遺跡出土縄文土器(1/4)



第41図　大田茶屋遺跡出土石器(1)(1/2)

S11は石匙である。５丁区の、中世と思われる建物56の柱穴３から出土した。刃部は外湾し、細かい剥離によって形成される。つまみは中心からずれた位置に斜めに取りつく。

S12は磨石である。側縁全面に使用による擦痕が認められる。

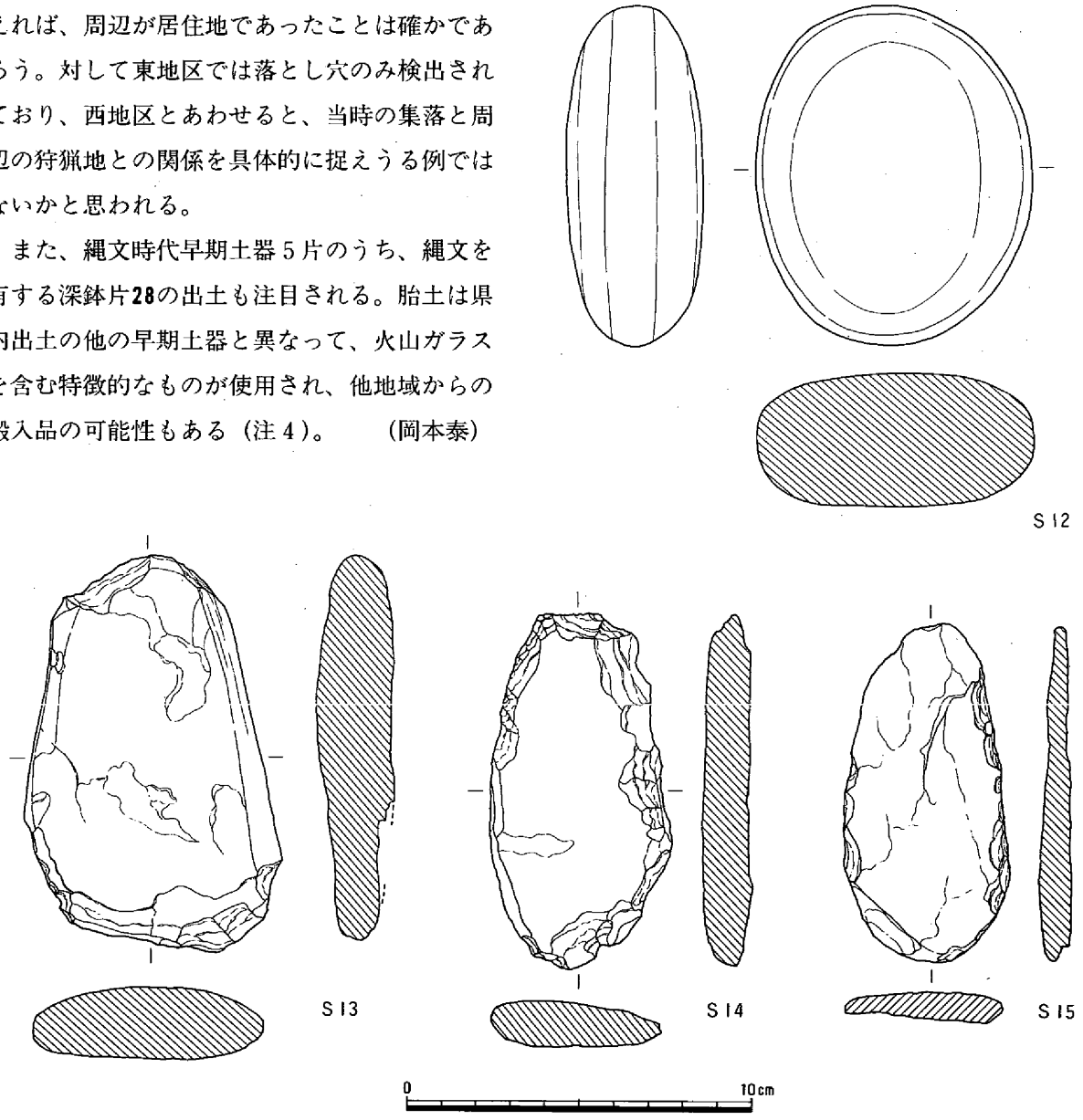
S13～15は石鍬である。３点とも使用による摩滅が観察できる。**S13**は全体が研磨されているもので、使用による先端部の欠損が著しい。

以上の遺物をみると、土器は後期に遡る可能性のある１点を除き、すべて縄文時代晩期後半に属するものである。石器類は時期を確定しがたいが、土器と大きく隔たるとは思われない。　（岡本泰）

３．小結

以上のように、時期の判明した遺構は１例を除きすべて晩期の後半に所属し、遺物も多くは同時期のものであった。西地区の遺構は性格不明の土壙が多く、集落と断定するには困難が伴う。しかし丘陵頂部という立地条件や土器の保存状態から考えれば、周辺が居住地であったことは確かであろう。対して東地区では落とし穴のみ検出されており、西地区とあわせると、当時の集落と周辺の狩猟地との関係を具体的に捉えうる例ではないかと思われる。

また、縄文時代早期土器５片のうち、縄文を有する深鉢片**28**の出土も注目される。胎土は県内出土の他の早期土器と異なって、火山ガラスを含む特徴的なものが使用され、他地域からの搬入品の可能性もある（注４）。　（岡本泰）



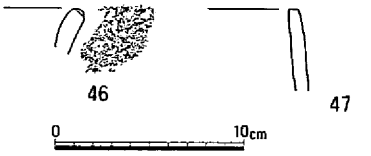
第42図　大田茶屋遺跡出土石器(2)(1/2)

第４節　大田障子遺跡

１．遺物

土器（第43図）

大田障子遺跡では縄文時代の遺構は検出されていないが、包含層中から若干の遺物が出土している。第43図に示した土器２点は深鉢形土器の口縁部小片である。**46**は外傾し、口縁端部には刻目が入る。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。**47**は内傾し、口縁端部は平坦面をなす。内面ナデ、外面ヘラケズリで調整される。色調は浅黄色、焼成は良好である。いずれも縄文時代晩期に属するものであろう。（岡本泰）



第43図　大田障子遺跡出土遺物(1)(1/4)

石器（第44・45図、図版11・12）

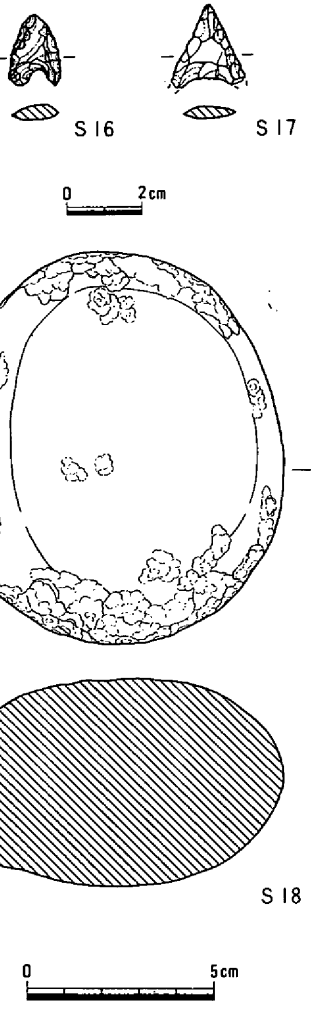
第44・45図に掲載する石器類は、実際には縄文～奈良時代の各時期の遺物が混在する包含層からの出土である。このため一応縄文時代のものとして扱ってはいるが、弥生時代の石器との峻別が困難な面もある。

S16・17は石鏃である。どちらもサヌカイト製・凹基式で、最大長は19.0㎜・22.0㎜、重量は0.9ｇ・1.1ｇをそれぞれ測る。

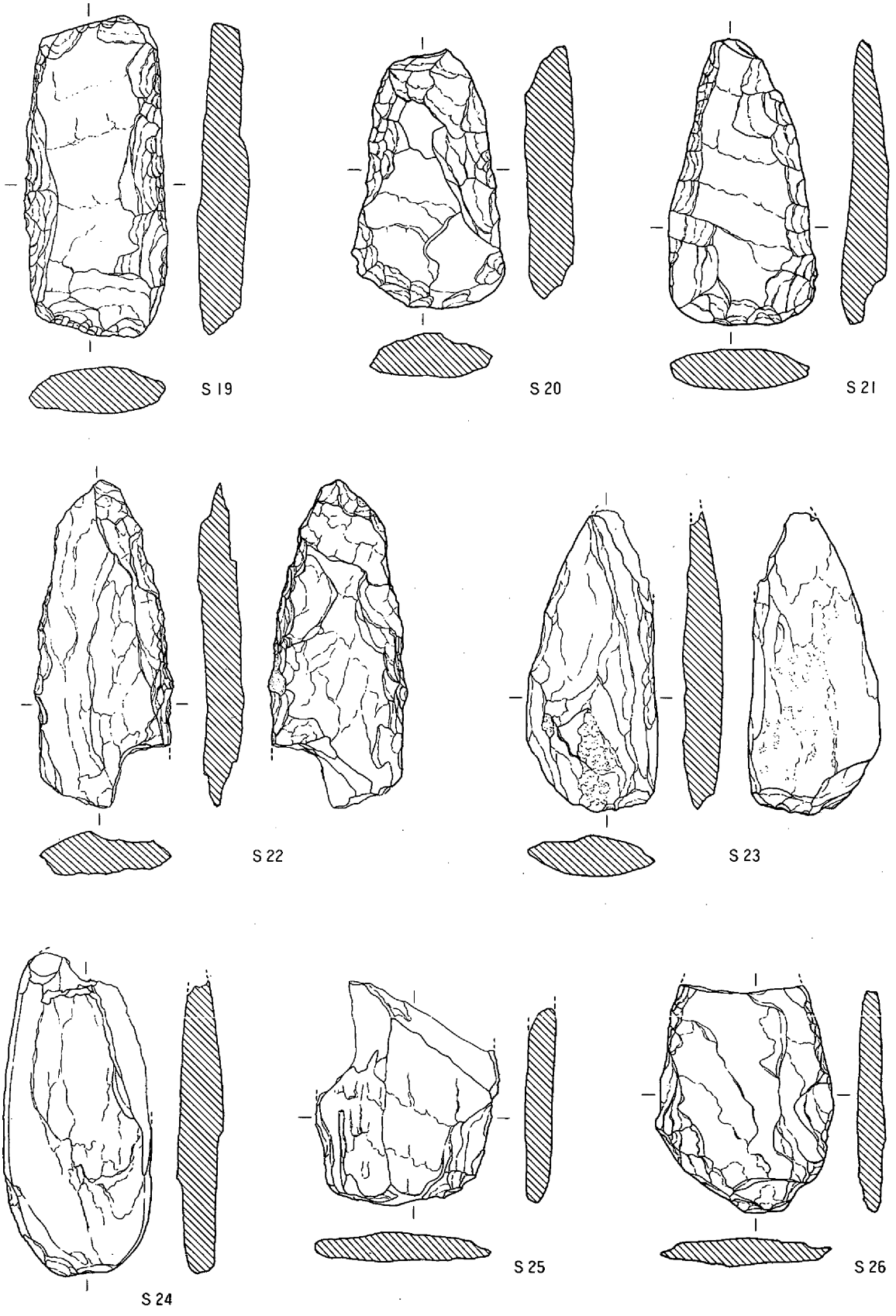
S18は花崗岩製の敲石と考えられる。最大長104.0㎜、最大幅88.0㎜、重量719.1ｇを測り、周縁部には多数の敲打痕が残る。

S19～26は打製石鍬である。**S19～21**は完形、**S22～24**は一部欠損、**S25・26**は破片である。形態的には、**S19**のようにほぼ長方形を呈するもの、**S20～23**のように三角形に近いもの、**S24**のように楕円形のものとに大別される。**S19～22**では側縁部と刃部に加えられた調整が明瞭に観察できる。**S24**の先端部は研磨されているようである。**S25**の刃部には使用による摩滅が認められる。**S26**は他と形態がやや異なり、石包丁未成品かとも思われるが、石鍬の可能性が高いと考えている。主要なものについて法量と重量を示すと、**S19**は最大長109.5㎜、最大幅49.0㎜、厚さ18.5㎜、重量147.6ｇ、**S20**は同じく88.5㎜・52.0㎜・17.0㎜・95.4ｇ、**S21**は97.0㎜・50.0㎜・14.0㎜・93.5ｇ、**S22**は112.0㎜・48.0㎜・16.0㎜・82.1ｇ、**S23**は102.5㎜・44.0㎜・16.0㎜・83.0ｇ、**S24**は110.0㎜・50.5㎜・17.0㎜・110.4ｇとなる。使用石材は、**S22**が頁岩、**S25**が安山岩である以外は、すべて流紋岩であった。

これらの時期は縄文時代晩期と考えられる。（岡本泰）



第44図　大田障子遺跡出土遺物(2)(1/2)



第45図　大田障子遺跡出土遺物(3)(1/2)

第５節　大田大正開遺跡

１．遺物

大田大正開遺跡では旧石器・縄文時代の遺構は全く検出されていないが、包含層（黒ボク）内からごく少量の遺物が出土しているので紹介したい。これらの遺物は、調査区内から散発的に出土したもので、当初から遺構には伴っていなかったと考えられる。

48は深鉢の小破片である。調整は内面はナデ、外面にはナデののち縦方向の貝殻条痕がみられる。文様としては縦方向の沈線が施される。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。胎土には石英・長石・雲母粒が含まれている。時期は縄文時代晩期後半に比定される。

S27・S28は石鏃である。**S27**はサヌカイト製で、全体に風化が進行している。法量は、最大長22.5㎜、同幅17.0㎜、同厚さ3.5㎜、重量0.9ｇを測る。側縁はやや内湾ぎみになる。**S28**は黒曜石製で、最大長24.0㎜、同幅17.5㎜、同厚さ4.0㎜、重量1.1ｇを測る。表面には細かい剝離痕を多くとどめ、丁寧に仕上げられている。基部の形状は左右非対称である。これらの特徴からみて、**S28**は縄文時代早期後半に属すると思われる（注５）。

S29は黒曜石の剝片である。法量は、最大長18.0㎜、同幅21.5㎜、同厚さ4.2㎜、重量1.2ｇを測る。主要剝離の打点付近には原礫面が残存している。側縁部には不鮮明ながら使用痕が認められるようで、スクレイパー等として使用されたとも考えられる。この剝片の時期は決定しがたいが、旧石器時代に遡る可能性もある。

黒曜石製の石器は、前述の大田茶屋遺跡からも細石器が出土していて、旧石器時代から縄文時代早期にかけて、この丘陵部がすでに人間の活動領域であったことが知られる。　（岡本泰）

注

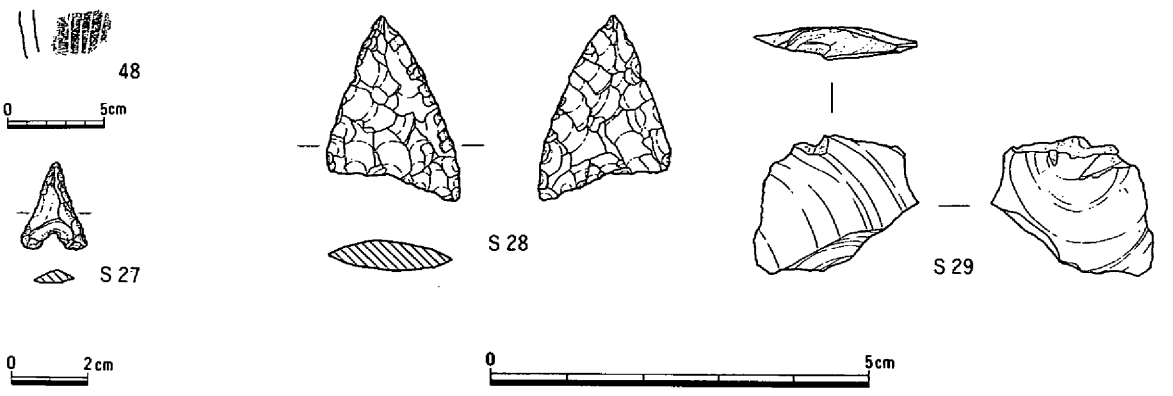
（注１）安川豊史「西奥田遺跡発掘調査概要」『年報津山弥生の里』第２号　津山市教育委員会津山弥生の里文化財センター　1995年

（注２）平井勝「第三章　縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987年

（注３）土居徹「竹田遺跡」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年

（注４）平井勝氏の教示を得た。

（注５）杉山一雄氏の教示を得た。



第46図　大田大正開遺跡出土遺物(1)(1/4・1/2・1/1)

第4章　弥生時代の遺構と遺物

第1節　概要

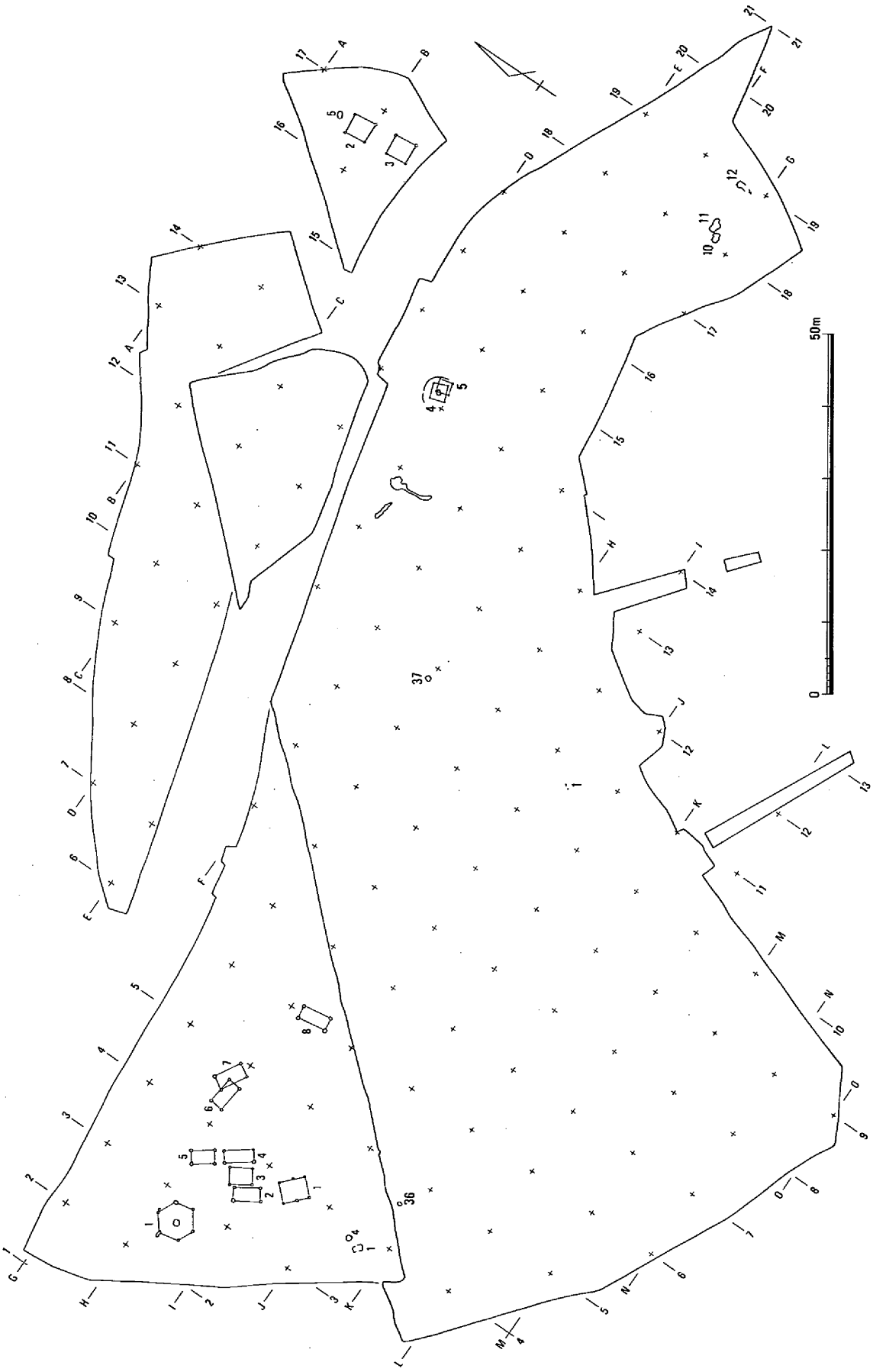
弥生時代の調査対象地はきわめて活気に富む。すべての遺跡にわたって遺構・遺物が検出されただけではなく、その密度が高く、また、種類も多い。とくに、調査対象地の南半では、複数の遺跡にまたがって広い生活域が形成され、重層的な構造の集落が存在したと考えられる。ただ、弥生時代の全期間にわたってそのような状況が存在したのではなく、弥生社会の発展の過程として現出したものである。そこで、あらためて時間の流れに沿って、その変化をながめてみたい。

大田茶屋遺跡から弥生時代前期の土器片がいくらか出土した。土器片のあり様は縄文時代のそれと類似し、同じ生活様式が継続していたと考えられそうである。ただ、縄文時代晩期における農耕の存在を考慮するならば、なだらかな丘陵の谷筋という立地から、初期の水稲農耕が試作されたことも十分に可能性がある。

調査対象地において本格的な水田農耕が開始されたのは弥生時代中期中葉である。大田西奥田遺跡は小規模な集落跡とみられ、この時期の遺物しか出土していない。これと同期の遺物が大田大正開遺跡から出土し、また、県道部分として発掘調査を実施した大田茶屋遺跡の3区でも、同期か、少し降る時期の住居跡が検出されている。3区は大田大正開遺跡と近接し、同じ集落とみることができる。低平な丘陵のそれぞれ別の谷筋に二つの集落が形成されたと考えられる。

弥生時代中期後葉に至って集落の規模が拡大する。大田西奥田遺跡の集落は消滅したようであるが、かわって大田松山久保遺跡の集落が形成される。大田大正開遺跡にあった集落は、大田茶屋遺跡の西地区に拡大され、さらに谷筋を越えて、大田茶屋遺跡の東地区から大田障子遺跡にまで及んでいる。大田松山久保遺跡、大田茶屋遺跡西地区、大田茶屋遺跡東地区のいずれでも竪穴住居跡が検出され、同時に存在していた可能性が高い。また、時期はかならずしも明確ではないが、大田茶屋遺跡西地区と大田茶屋遺跡東地区ともに集団墓地を伴っていた。さらに、大田茶屋遺跡の河道1や大田大正開遺跡土器溜まりから出土した土器の量も多く、大田茶屋遺跡西地区、大田茶屋遺跡東地区、大田大正開遺跡、大田松山久保遺跡のそれぞれが一つの集落として併存していたものとみられる。

弥生時代後期前葉になると、大田松山久保遺跡では大形の掘立柱建物が「コ」の字状に配置され、その区画から離れて竪穴住居が建てられる。大田松山久保遺跡は丘陵の頂部に位置しているが、そこから一段下がった平坦部にあるのが大田茶屋遺跡・大田大正開遺跡である。大田茶屋遺跡の西地区・東地区ともに後期前葉の竪穴住居跡が存在し、集落の継続がみられるが、両地区それぞれに掘立柱建物の集中する地区があり、大田松山久保遺跡との関係で注意される。大田茶屋遺跡の建物は大田松山久保遺跡の建物よりも規模が小さく、その立地なども考えれば、格差の存在が指摘されるように思われ、調査対象地の南半部分一帯の集落が関係を持ちあって、一つの大きな結合体を形作っていたとみられる。この結合体は弥生時代後期の前半で消滅したようで、弥生時代後期後半の遺構・遺物はこの地区では認められなくなる。　（岡本寛）



第47図　大田茶屋遺跡西地区(4-6・11区)弥生時代主要遺構配置図(1/800)

第２節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

大田茶屋遺跡において検出された弥生時代の主要な遺構は調査区一帯に広がり、竪穴住居10軒、掘立柱建物23棟、土壙10基、河道１条、墓地３カ所、墓壙25基、土器溜まり１カ所である。このうち、住居３軒、建物８棟、土壙２基、墓壙１基は県道部分の１区から３区までの検出による。遺構の分布をみると、西地区・東地区ともに等距離に配置されるのではなく、数カ所に群集していた。

西地区では遺構は尾根筋の平坦な部分に検出され、１区の西群と６区から３区にかけての東群の２カ所に集中していた。西群は建物を主体とし、墓壙が１基伴う。これに対して、東群は竪穴住居のみで、墓地が近接していた。また、竪穴住居の年代をみると、西群は後期前葉だが、東群は中期中葉から中期後葉であった。これらのことから、この二つの遺構群は別々の集落と考えられる。

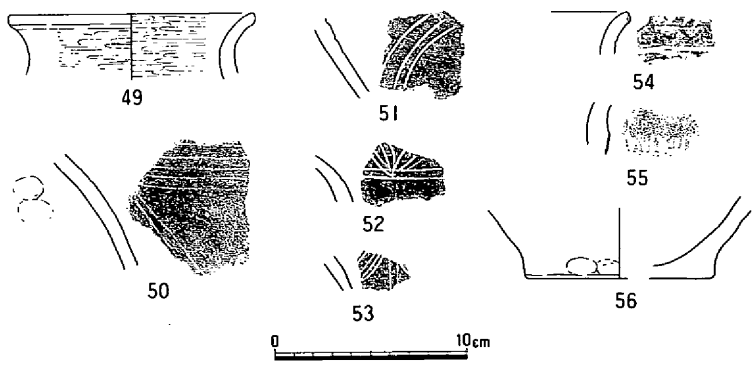
東地区の北西端には河道があり、実際にはこれが西地区と東地区の境界になっている。河道の北に竪穴住居が１軒検出され、大田大正開遺跡２区の掘立柱建物とまとめられて一つの集落を形成していたと考えられる。住居の年代は後期前葉で、西地区東群の集落が発展したものとも捉えうる。

河道より南の東地区本体では、大きくみれば３カ所で遺構の密集がみられた。南西端部と中央部、それに東半の中央付近である。南西端部は２カ所の墓地とやや離れた住居と建物からなる。墓地と住居が近接して共存するとは考えにくく、時期を異にするものとみられる。中央部は13棟の掘立柱建物からなり、もう数棟あったものと思われる。棟の方向が揃っているため、複数棟が共存していたと考えられる。東半中央には竪穴住居２軒と掘立柱建物１棟があるが、２軒の住居の時期が異なるため、中央部と東半中央で一つの集落が形成されたものとみられる。建物群と竪穴住居が分離された配置は、後述する大田松山久保遺跡でも典型的に認められ、その類似が注意される。　（岡本寛）

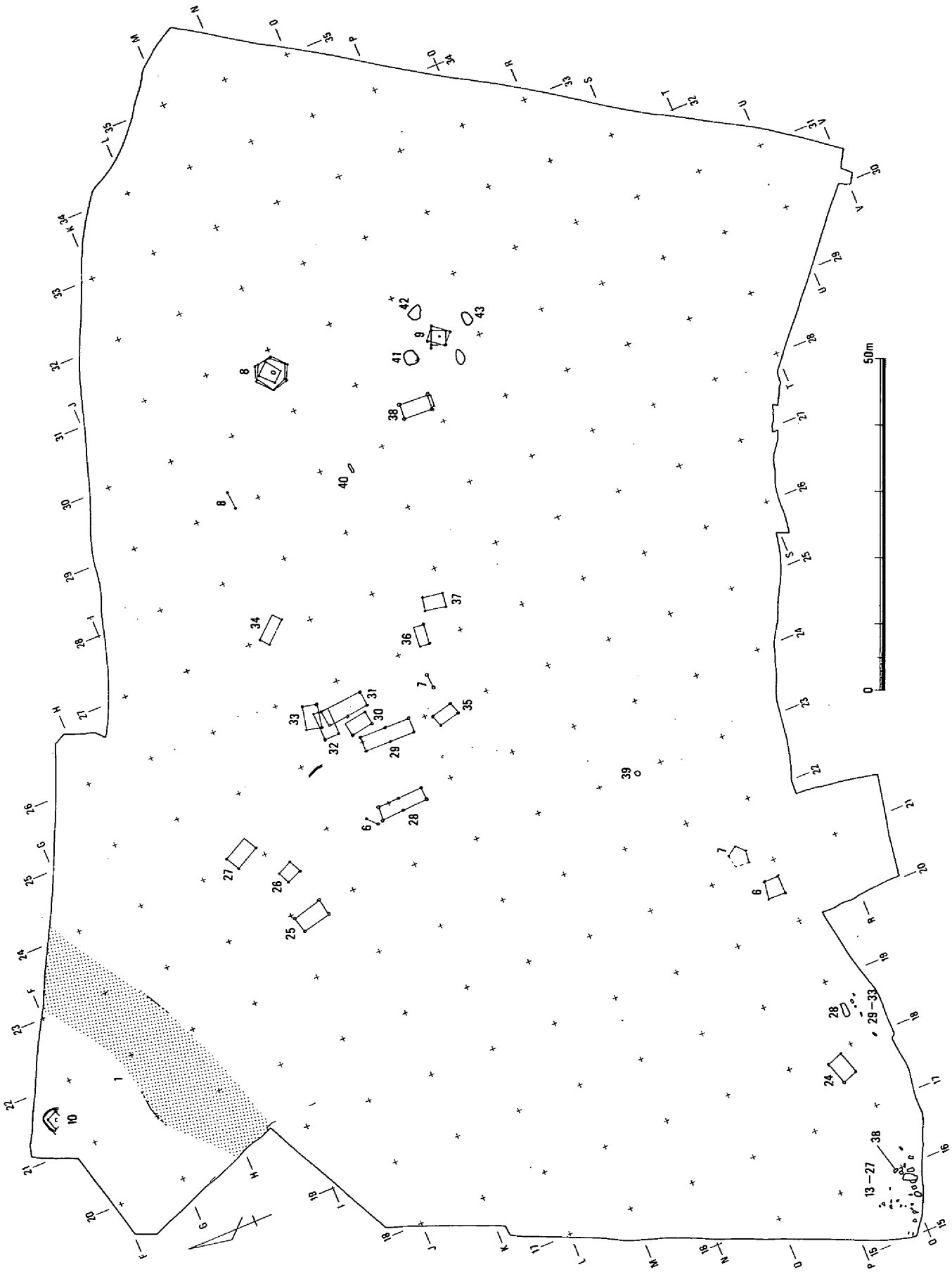
２．遺構・遺物

弥生時代前期の土器（第48図）

49・50・52～54は河道１の埋土中から、**51**と**56**は６区の包含層から、**55**は建物52の柱穴から出土した。**54**は甕で、他は壺とみられるが、**50**は文様から甕の可能性もある。**49**はゆるやかに外反する短い口縁をもち、ヘラミガキで調整する。**50～53**は壺の胴部上半で、ヘラ描きの文様を施している。**50**は肩部に５条の直線文があり、その下に２条の斜線が描かれる。**51**は３条の弧線が描かれ、連弧文の一部とみられる。**52・53**は木葉文で、**52**では下に２条の直線文、**53**では縦に２条の線が引かれ、おそらく方形区画の中に



第48図　大田茶屋遺跡出土弥生時代前期土器(1/4)

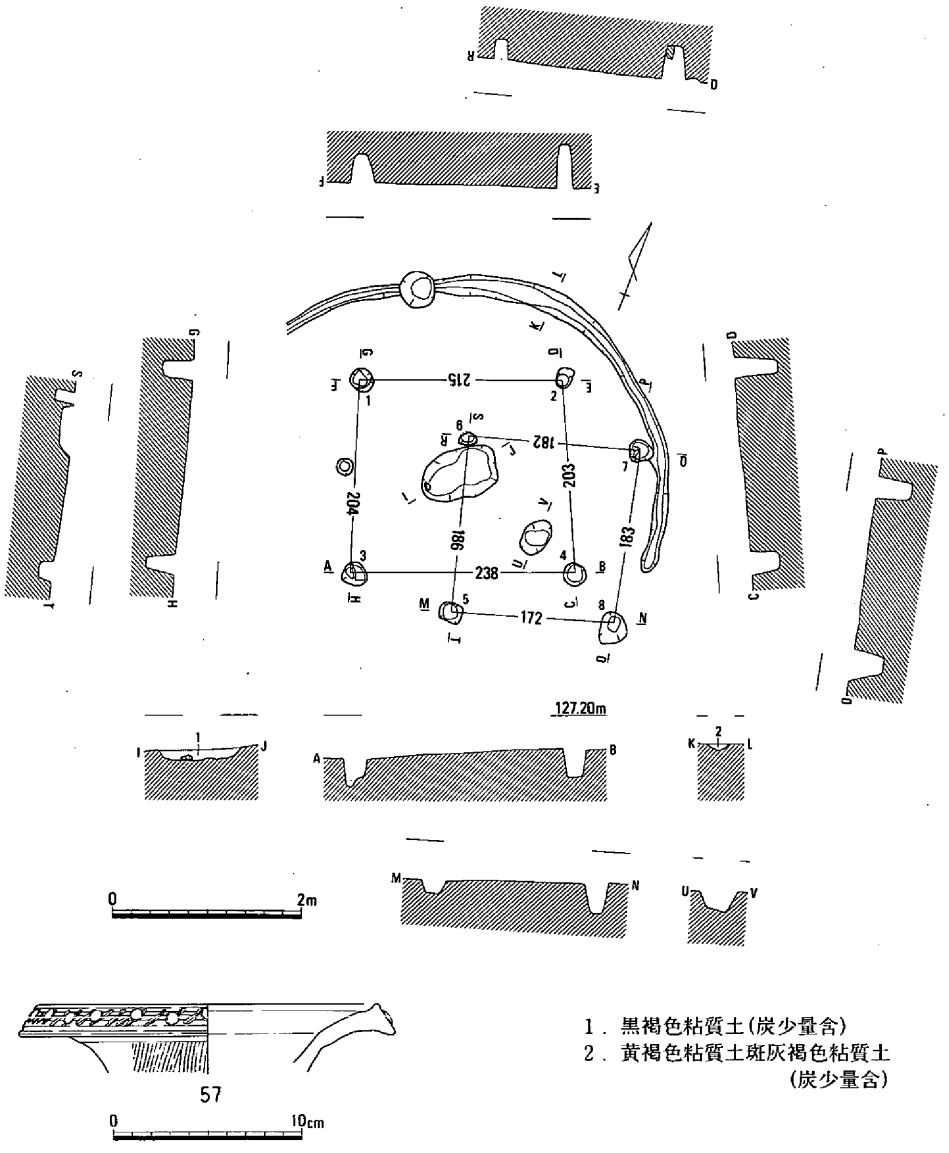


第49図　大田茶屋遺跡東地区(7-10区)弥生時代主要遺構配置図(1/800)

木葉文を連続して描いたものであろう。**54**はわずかに外反した口縁の端部を丸くおさめて刻目を施し、頸部には直線文と刺突文をヘラで描く。**55**は２条の突帯に刻目を施す。大形壺の頸部か。これらの土器の年代は弥生時代前期の中葉が主体で、**50**は後葉に降る。　（岡本寛）

住居４・５（No100・112）（第50図、図版１）

13，14Ｅ区に所在する。２軒の竪穴住居跡が重複していて、建て替えが行われたと考えられる。遺存状態は悪く、地山の上面で壁体溝と柱穴を検出したにすぎず、両者の先後関係は明確ではない。



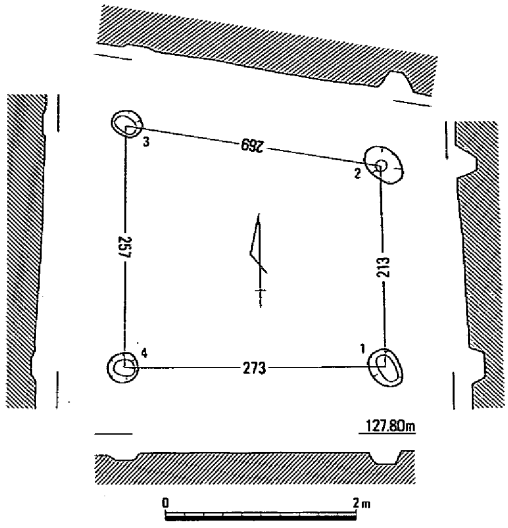
第50図　住居４・５(1/80)・住居４出土遺物(1/4)

住居４は壁体溝の形状から直径４ｍ前後の円形の竪穴住居と推定される。主柱穴は４本で、中央穴を備える。柱穴の長径は22～26cm、深さが30～45cmで、柱間は203～238cmを測り、東西が少し長い。中央穴は長径83cm、短径53cmの楕円形で、深さは13cmと浅い。住居５も主柱穴が４本で、中央穴をもっている。柱間は172～186cmと住居４よりは短く、南北がわずかに長い。中央穴も長径40cm、短径28cmと小さいが、深さは20cmを測る。柱穴の長径は20～35cmあり、深さは15～36cmである。

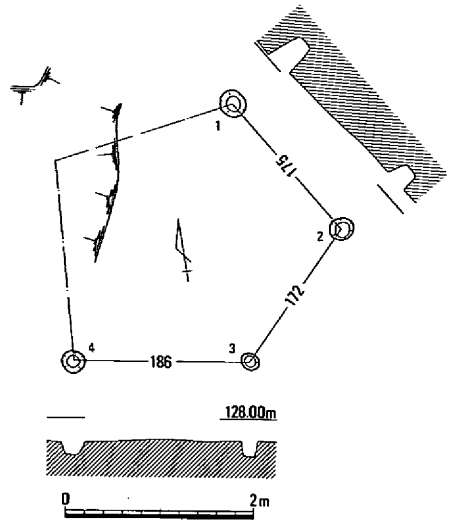
住居４の中央穴から壺の口縁部の大形破片**57**が出土した。この土器の年代は弥生時代中期後葉と考えられることから、住居の時期も同じ時期とみられる。　（岡本寛）

住居６（No205）（第51図）

20Ｐ区の南部、南西に伸びる丘陵の端部に位置し、北東７ｍには住居７がある。４基の柱穴の配置がやや不整形ながらも方形を呈すことから後世の削平により柱穴のみ残存した竪穴住居と判断した。



第51図　住居６(1/80)



第52図　住居７(1/80)

各柱穴の規模は検出面で径30～40cm、深さ５～22cmを測る。出土遺物がないため時期は断定できないが、周囲の遺構の状況から弥生時代中期後葉から後期前葉の間と考えられる。　(佐藤)

住居７（No209）（第52図）

21Ｐ区の西部、南西に伸びる丘陵の端部に位置し、南西７ｍには住居６がある。４基の柱穴の配置より、攪乱を受けている部分に柱穴が存在していた可能性が考えられることから、後世の削平により柱穴のみ残存した竪穴住居と判断した。

各柱穴の規模は検出面で径15～30cm、深さ15～40cmを測る。出土遺物がないため時期は断定できないが、周囲の遺構の状況から、弥生時代中期後葉から後期前葉の間と考えられる。　(佐藤)

住居８（No400～402）（第53図、図版２）

30Ｌ区の南西部から30M区の北東部に位置する。検出面で長径64cm、短径40cm、深さ16cmを測る楕円形のピットと、それを取り巻く柱穴を検出したことから、後世の削平により中央穴と柱穴のみが残存した竪穴住居と判断した。

各柱穴の位置関係と切り合い関係より、柱穴１～４の組合せによる４本柱の住居から、柱穴５～10の組合せによる６本柱の住居に拡張され、その後柱穴の位置を少しずらして柱穴11～16の組合せによる住居に建て替えられたものと考えられる。

各柱穴の規模は検出面で直径10～18cm、深さ４～10cmを測る。柱穴８・９・15で確認できた柱痕跡から、直径12cm前後の建築部材が使用されていたものと考えられる。

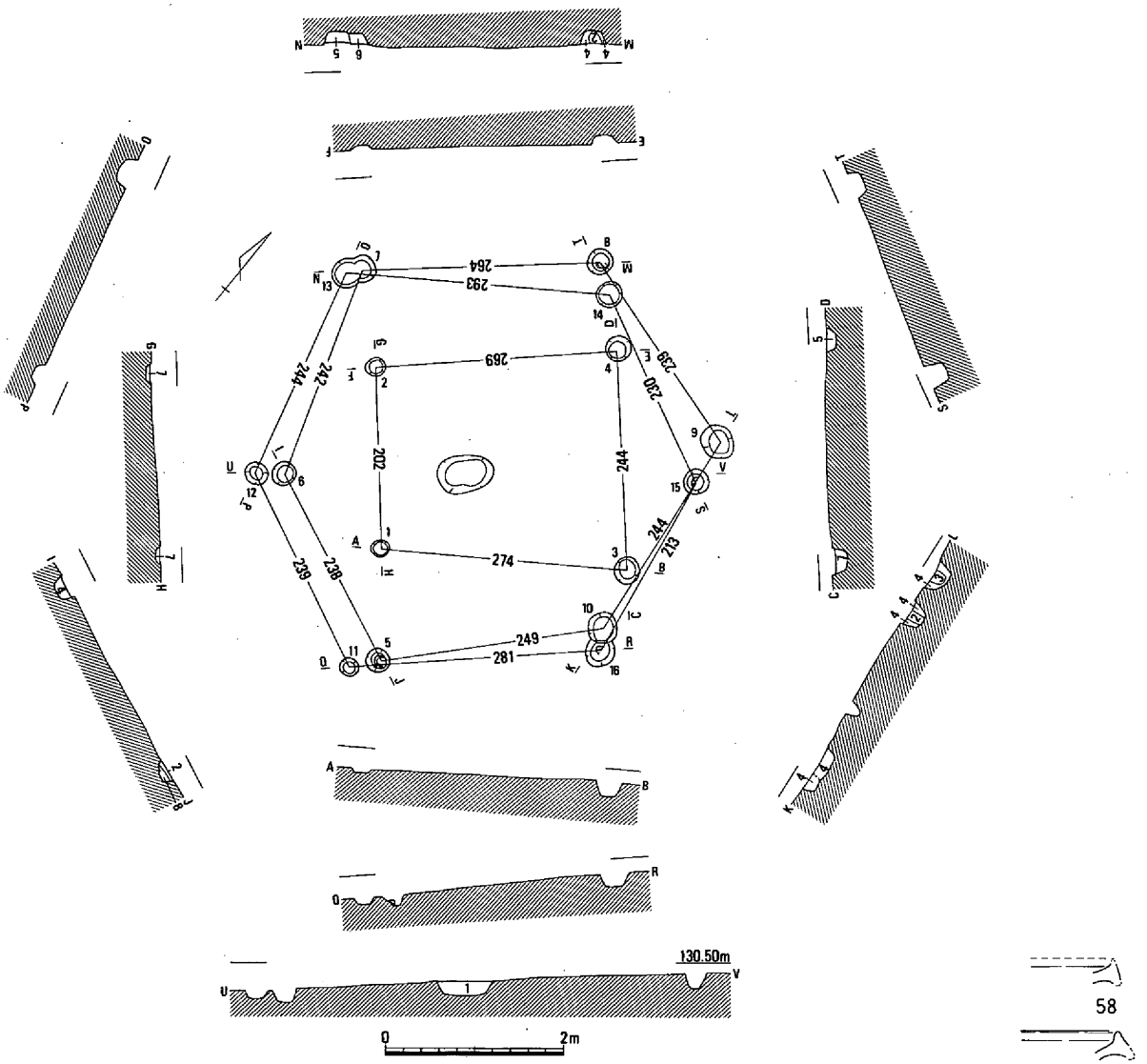
遺物は中央穴から**58**、柱穴15から**59**が出土している。磨耗と欠損が著しいが、いずれも壺または甕の口縁部で、口縁端部は上下に拡張され、**58**の口唇部には凹線文の痕跡が認められる。

これらの遺物から住居８の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(佐藤)

住居９（No426・427）（第54図）

30Ｏ区の西部に位置し、周囲には土壙41～43がある。一部削平されているが、検出面で推定直径50cm、深さ14cmを測るピットと、それを取り巻く柱穴を検出したことから、後世の削平により中央穴と柱穴のみ残存した竪穴住居と判断した。

各柱穴の位置関係から、柱穴１～４の組合せと柱穴５～８の組合せの２時期が考えられる。土層に



1．黒灰色砂質土　　4．黄色土斑褐色粘質土　　7．黄色土斑茶褐色粘質土
2．黒灰色粘質土　　5．灰褐色粘質土　　8．黄色土斑黒灰色粘質土
3．褐色粘質土　　6．黄色土斑褐色粘質土

第53図　住居８（1/80）・出土遺物(1/4)

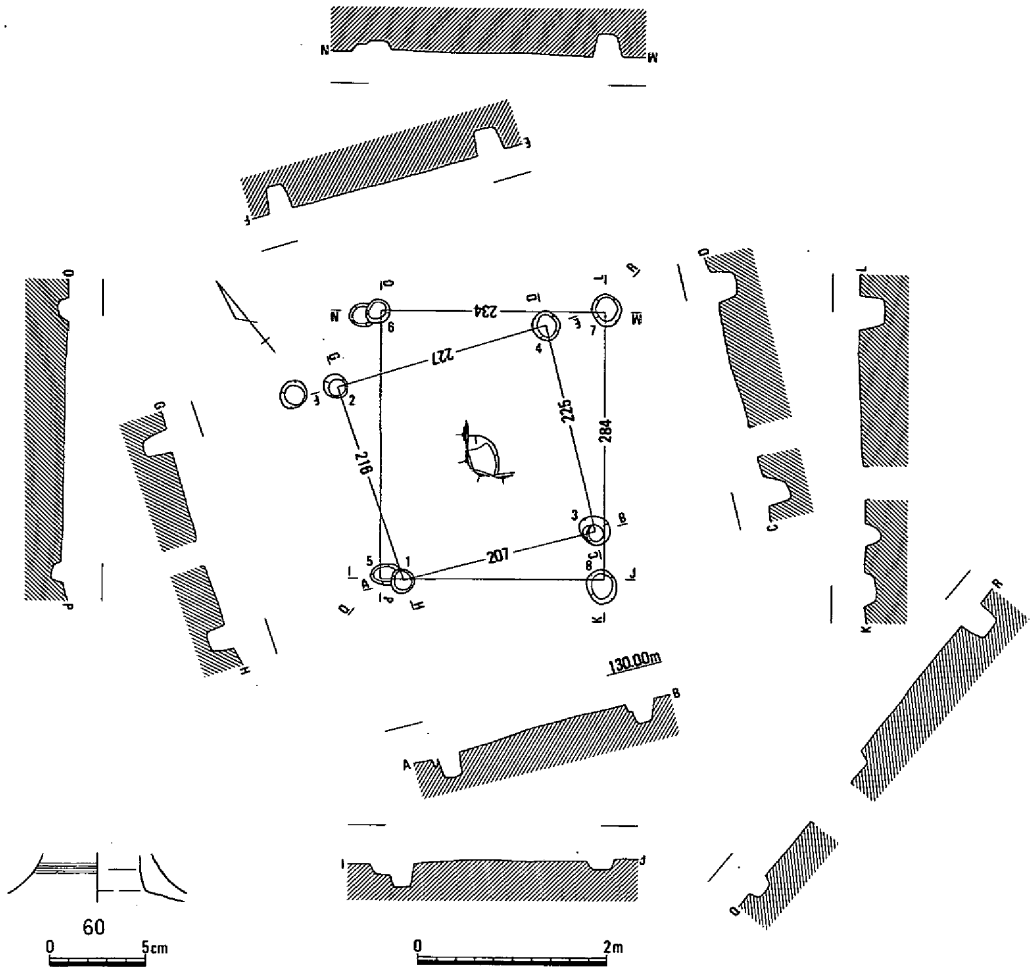
よる切り合い関係が検討できていないため、建て替えの前後関係は不明である。

ただ柱穴１～４の組合せに比べ、柱穴５～８の組合せの方が各柱穴の間隔が広く、竪穴住居を建て替える際、拡張される場合が多いことを考えると、前者から後者の順に建て替えが行われた可能性が高いと思われる。各柱穴の規模は検出面で径20～36cm、深さ８～28cmを測る。

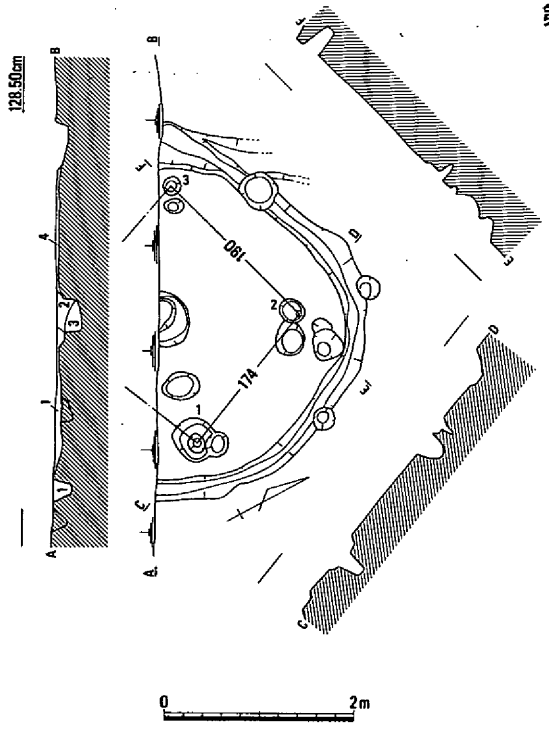
遺物は中央穴から**60**が出土している。高杯の脚柱部で、屈曲部に５条の篦描沈線文を巡らせている。これらの遺物から住居９の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　　（佐藤）

住居10（No434）（第55図）

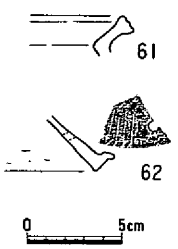
21Ｅ区の中央に位置する。住居の南半が削平されているため本来の規模は不明であるが、残存部分から、平面形が推定で径350cm前後のやや不整形な円形を呈す竪穴住居と考えられる。床面はほぼ平坦に掘削され、検出面からの深さ20cmを測る。中心には推定で径30cm、床面からの深さ24cmを測る中央穴が設けられている。柱穴は削平のため一部失われているが、やや不整形な方形に配置されたもの



第54図　住居９(1/80)・出土遺物(1/4)



1．暗褐色粘質土　　3．黒褐色粘質土
2．暗褐色粘質土　　4．暗褐色粘質土

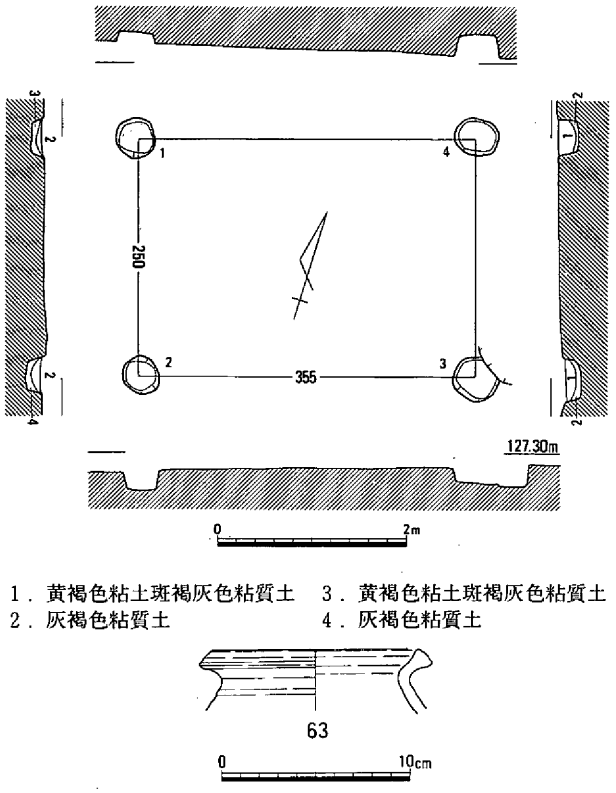


第55図　住居10(1/80)・出土遺物(1/4)

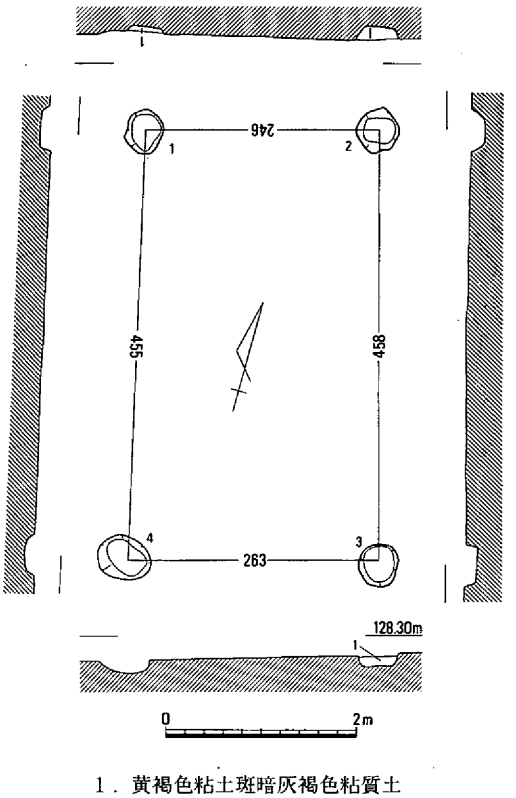
と考えられ、床面からの深さ20～32cmを測る。壁面から各柱穴までの距離は52～62cmを測る。この他、床面でいくつかのピットを検出したが、配置や規模がまちまちで柱穴とは考えにくく、明確な建て替えの痕跡は認められない。床面の周囲には壁面に沿って幅16～20cm、深さ４～６cm程の浅い壁体溝が巡る。

遺物は中央穴から**61**が、埋土中から**62**が出土している。**61**は甕の口縁部で、上下に拡張された口唇部には２条の擬凹線文が施される。**62**は高坏の脚裾部である。外面には櫛描直線文、その下に篦描による縦方向の直線文を施し、直径約５㎜の円孔を焼成前に開けている。これらの遺物から住居10の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

（佐藤）



第56図　建物24(1/80)・出土建物(1/4)



第57図　建物25(1/80)

建物24（No162）（第56図）

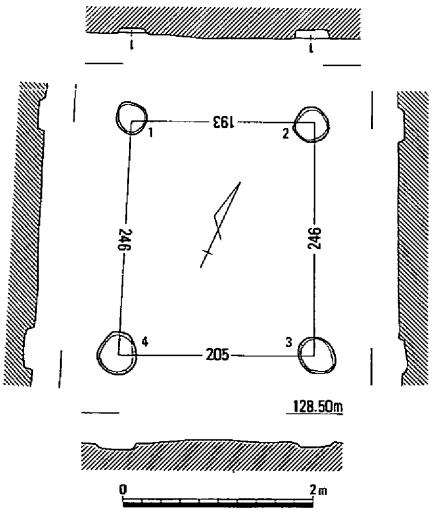
17Ｐ区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間と桁行の比率は１：1.42である。床面積8.8㎡、棟方向Ｅ－17°－Ｎで、各柱穴は検出面で径42～48cm、深さ12～24cmを測る。柱穴４より出土した**63**から、建物24の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

建物25（No265）（第57図）

22Ｊ区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積11.6㎡、棟方向Ｎ－14°－Ｗである。各柱穴は検出面で径37～58cm、深さ10～16cmを測る。出土遺物がないため時期は断定できないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）

建物26（No256）（第58図）

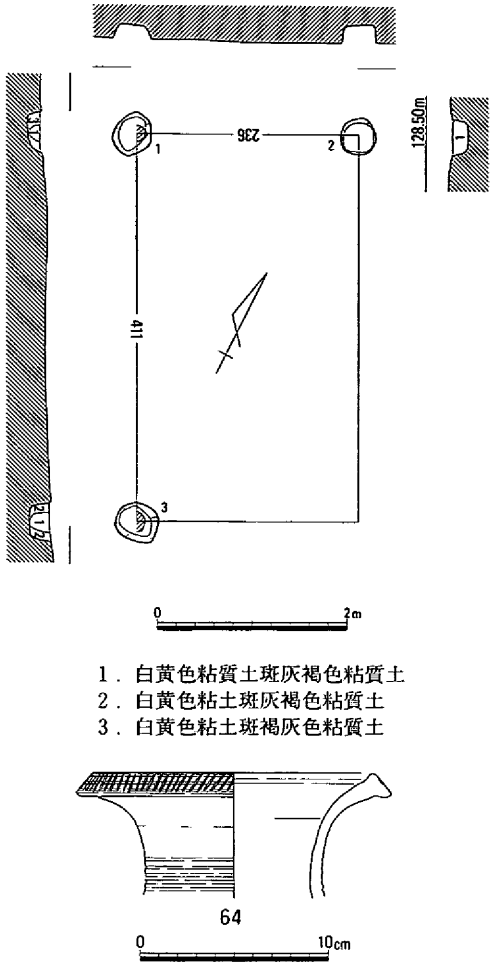
23Ｊ区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積4.9㎡、棟方向Ｎ－27°－Ｗである。各柱穴は検出面で径36～45cm、深さ４～10cmを測る。出土遺物がないため時期は断定できないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から、弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）



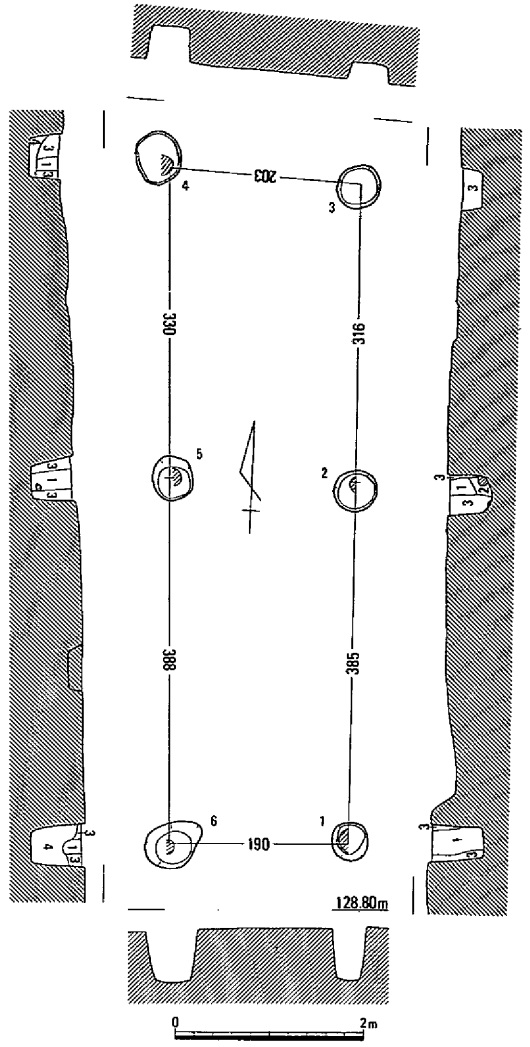
第58図　建物26(1/80)

建物27（No260）（第59図）

24Ｉ区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積9.7㎡、棟方向Ｎ－26°－Ｗである。各柱穴は検出面で径39～48cm、深さ12～20cmを測る。柱穴２より出土した**64**から建物27の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）



第59図　建物27(1/80)・出土遺物(1/4)



第60図　建物28(1/80)

建物28（No283）（第60図）

23,24K区に位置する。２間×１間の掘立柱建物で、床面積13.9㎡、棟方向N－15°－Eである。柱穴は検出面で径42～66cm、深さ22～56cmを測り、柱穴３を除くすべての柱穴で径15～26cmの柱痕跡が確認できた。出土遺物がないため時期は断定できないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から弥生時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

建物29（No289）（第61図）

24L区に位置する２間×１間の掘立柱建物で、床面積11.7㎡、棟方向N－1°－Eである。柱穴は検出面で径43～50cm、深さ44～56cmを測り、すべての柱穴で径16～27cmの柱痕跡が確認できた。出土遺物はないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から時期は弥生時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

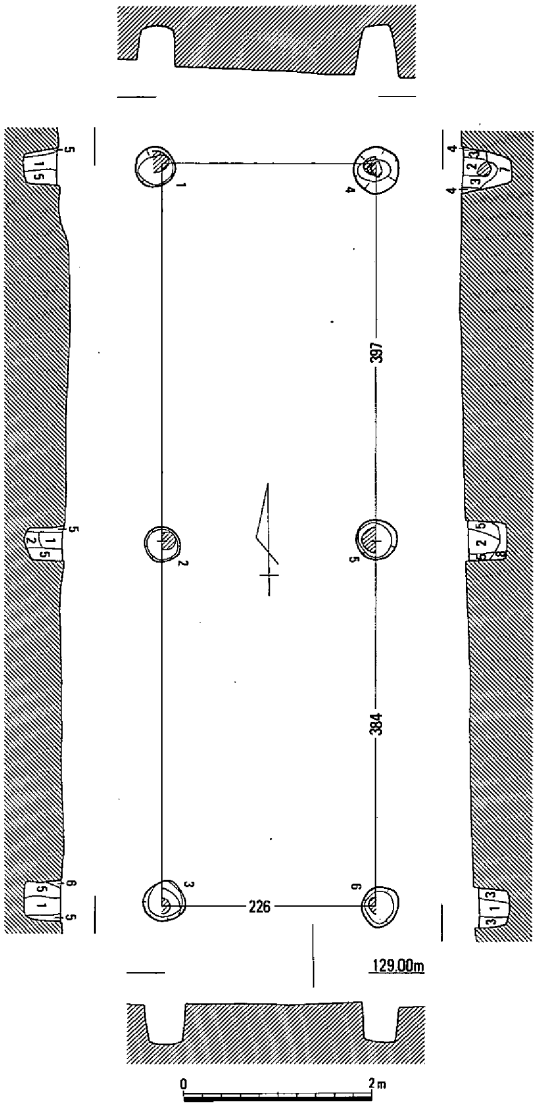
建物30（No300）（第62図）

25K,L区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積7.2㎡、棟方向N－8.5°－Wである。

柱穴は削平により１基欠損するが、検出面で径34～48cm、深さ20～28cmを測り、すべての柱穴で径約15cmの柱痕跡が確認できた。出土遺物がないため時期は断定できないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から弥生時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

建物31（No287）（第63図）

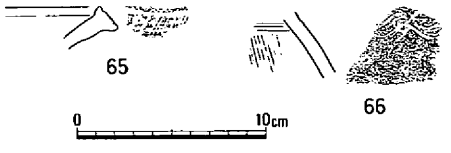
25K,L区に位置する。２間×１間の掘立柱建物で、床面積15.4㎡、棟方向N－5°－Wである。

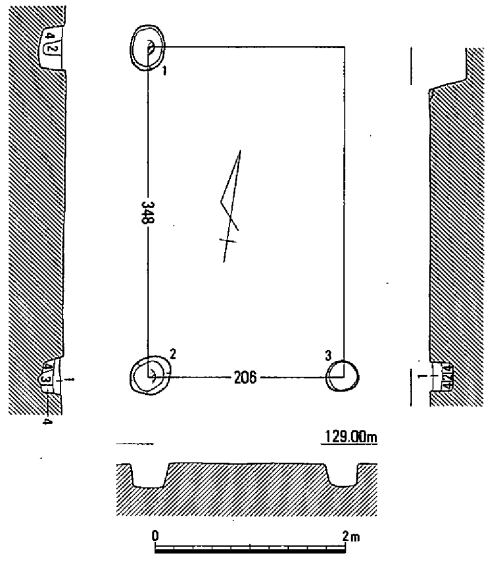


1．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土　5．黄白色粘土斑灰褐色粘質土
2．黄褐色粘土斑褐灰色粘質土　6．灰褐色粘質土
3．白黄色粘土斑褐灰色粘質土　7．暗灰褐色粘質土
4．褐灰色粘質土　8．灰褐色土斑白色粘質土

第61図　建物29(1/80)

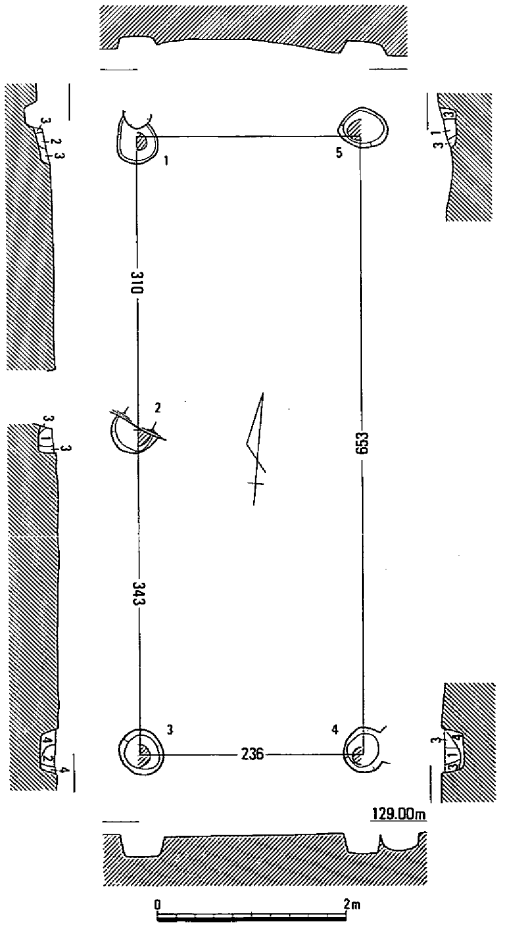
柱穴は削平により１基欠損するが、検出面で径46～51cm、深さ20～24cmを測り、すべての柱穴で径18～24cmの柱痕跡が確認できた。遺物は柱穴２より**65**、柱穴３より**66**が出土している。遺物は弥生時代中期であるが、隣接する建物との位置関係から建物31の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　（佐藤）





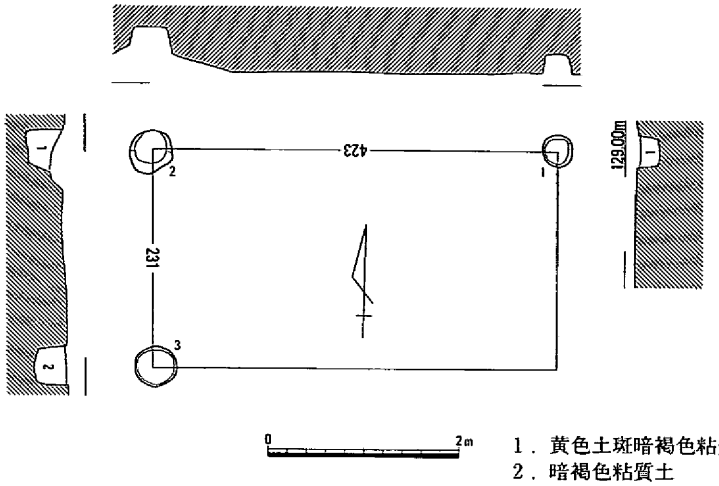
1．黒色土　3．黒灰色粘質土
2．黒色粘質土　4．黄色土斑黒色土

第62図　建物30(1/80)



1．暗灰褐色粘質土　3．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土　4．黄褐色粘土斑褐灰色粘質土

第63図　建物31(1/80)・出土遺物(1/4)



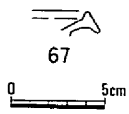
1．黄色土斑暗褐色粘質土
2．暗褐色粘質土

第64図　建物32(1/80)・出土遺物(1/4)

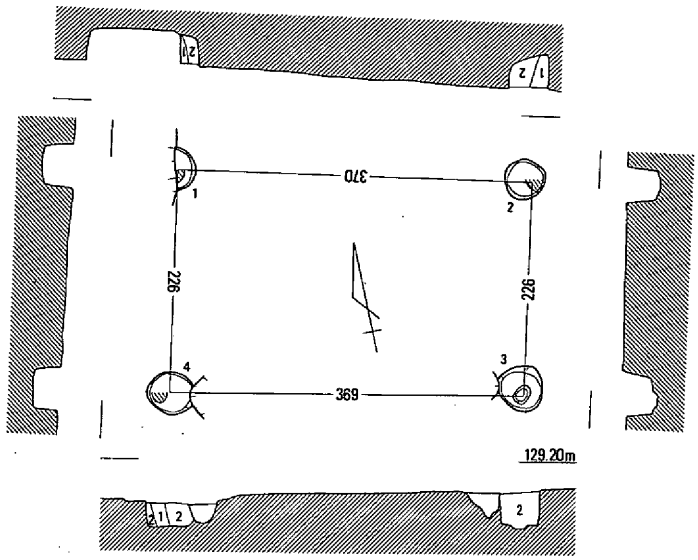
建物32（No354）（第64図）

25K区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積9.8㎡、棟方向E－2°－Nである。柱穴は削平により１基欠損するが、検出面で径34～49cm、深さ24～40cmを測る。

遺物は柱穴１より**67**が出土している。



これらの遺物から建物32の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）

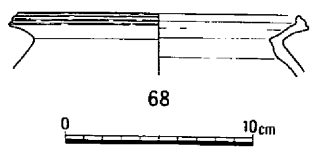


1．暗灰褐色粘質土　　2．白黄色粘土斑褐灰色粘質土

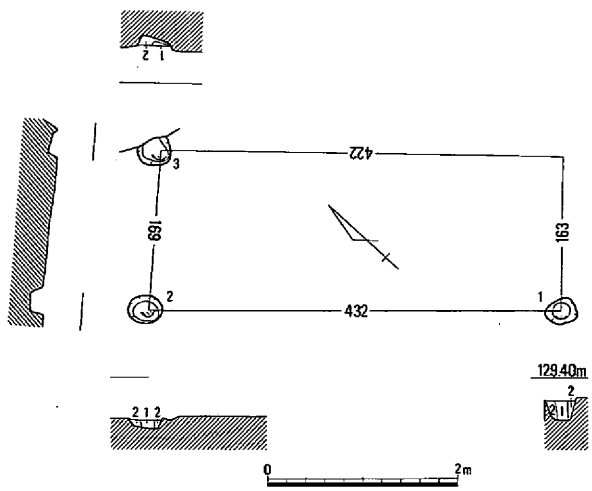
第65図　建物33(1/80)・出土遺物(1/4)

建物33（No286）（第65図）

25K区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積8.7㎡、棟方向はE－35°－Sである。柱穴は削平により一部欠損するが検出面で径43～49cm、深さ28～36cmを測る。すべての柱穴で径16～21cmの柱痕跡が確認できた。



柱穴２より出土した**68**から、建物33の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）



1．暗灰褐色粘質土　　2．白黄色粘土斑灰褐色粘質土

第66図　建物34(1/80)

建物34（No327）（第66・67図、図版12）

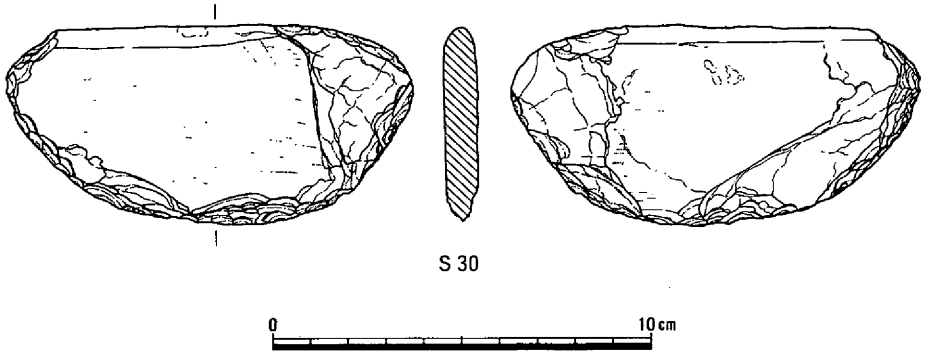
27K区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積7.3㎡、棟方向N－42°－Wである。柱穴は削平により１基欠損するが、検出面で径34cm、深さ８～22cmを測り、すべての柱穴で径12～16cmの柱痕跡が確認できた。

遺物は柱穴１より緑色片岩を素材とした、石包丁の研磨段階の未成品**S30**が出土している。棟方向や周囲の遺構との位置関係から時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）

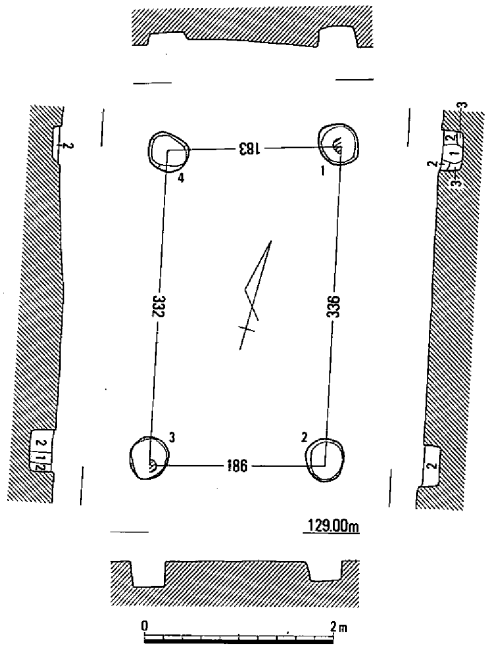
建物35(No291)

(第68図)

24M区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積6.1㎡、棟方向N－23°－Wである。各柱穴は検出面で径45～48cm、深さ12～28cmを測る。柱穴１で径17cm、柱穴３で径14cmの柱痕跡が確認できた。出土遺物はないが棟方向や周囲の遺構との位置関係から時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(佐藤)



第67図　建物34出土遺物(1/2)



1．暗灰褐色粘質土
2．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
3．灰褐色土斑黄褐色粘質土

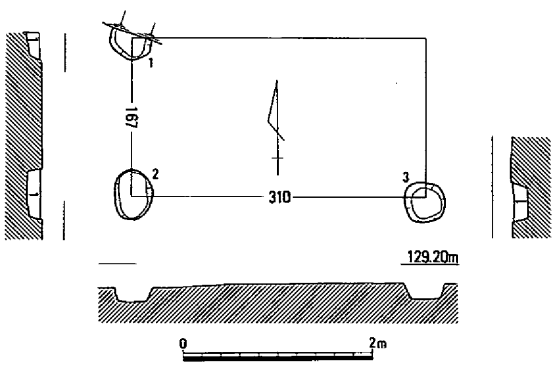
第68図　建物35(1/80)

建物36（No328）(第69図)

26M区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で床面積5.2㎡、棟方向E－0.5°－Sである。柱穴は削平により１基欠損するが、検出面で径47～53cm、深さ15～18cmを測る。出土遺物はないが、棟方向や周囲の遺構との位置関係から時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(佐藤)

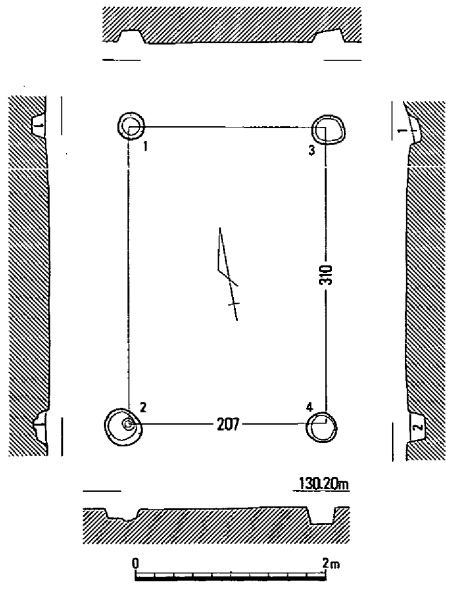
建物37（No363）(第70図)

26M区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で



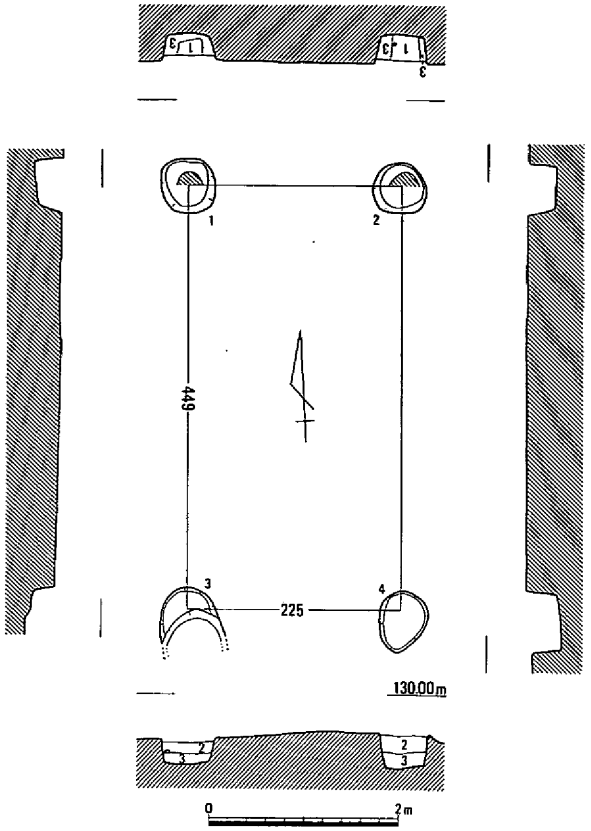
1．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土

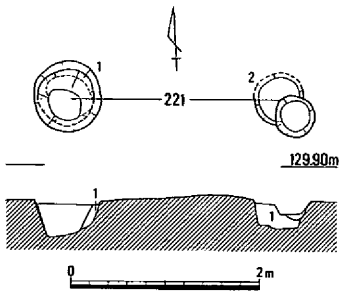
第69図　建物36(1/80)



1．黄色土斑褐色土　2．褐色土

第70図　建物37(1/80)





1．黄色土斑灰褐色粘質土　　3．黄色土斑暗褐色粘質土　　1．黄色土斑暗褐色粘質土
2．暗褐色粘質土

第71図　建物38(1/80)

床面積6.4㎡である。各柱穴は検出面で径28～40cm、深さ16～20cmを測る。出土遺物はないが棟方向や周囲の遺構との位置関係から時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　（佐藤）

建物38（No407・419）（第71図）

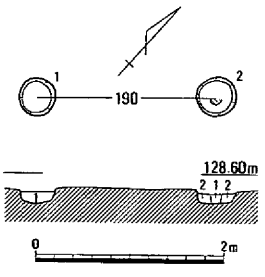
29N区に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、床面積10.1㎡、棟方向N－3°－Wである。

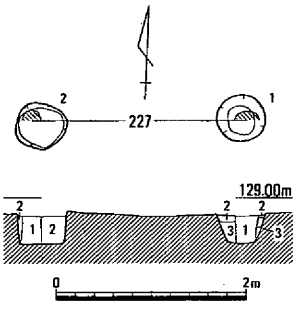
柱穴は検出面で径54～66cm、深さ28～36cmを測る。南側の梁間を構成する柱穴３・４では建て替えによる柱穴の重複が認められ、建物の桁行を南に若干拡張している。柱穴１で径27cm、柱穴２で径31cmの柱痕跡が確認できた。

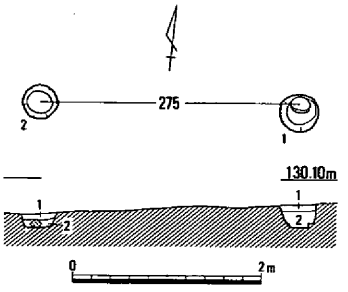
出土遺物がないため時期は断定できないが、棟方向や周囲の遺構の状況から弥生時代後期前葉と考えられる。　（佐藤）

柱穴列６～８（No369.329.394）（第72図）

柱穴列６は23K区に、柱穴列７は25M区に、柱穴列８は29K区に位置する。ここでは柱穴列として扱ったが、対になる柱穴の規模がほぼ同じであること、柱穴の中に径12～21cmの柱痕跡が確認できるものがあること、対になる柱穴の間隔とその方位が周囲の建物の梁間あるいは桁行を構成する柱穴とほぼ同じであることなどから、本来建物の梁間あるいは桁行を構成する柱穴であった可能性が高く、対になる柱穴列は削平により失われたものと考えられる。出土遺物がないため時期は断定できないが、柱穴列の方向や周囲の遺構の状況から弥生時代中期後葉から後期前葉の間と考えられる。　（佐藤）





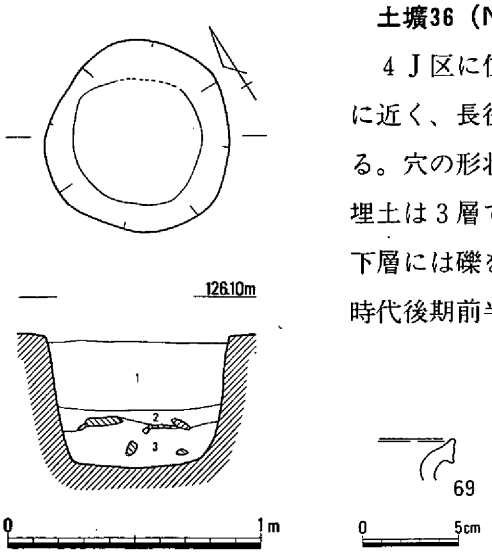


1．黄色土斑暗灰色土
2．黄色土斑黒色土

1．暗灰褐色粘質土
2．白黄色粘土斑褐灰色粘質土
3．白黄色粘質土

1．暗褐色粘質土
2．黄色土斑暗褐色粘質土

第72図　柱穴列６～８(1/80)



1．灰褐色粘質土斑灰黄褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．明黄褐色粘質土斑黄灰褐色粘質土

第73図　土壙36(1/30)・出土遺物(1/4)

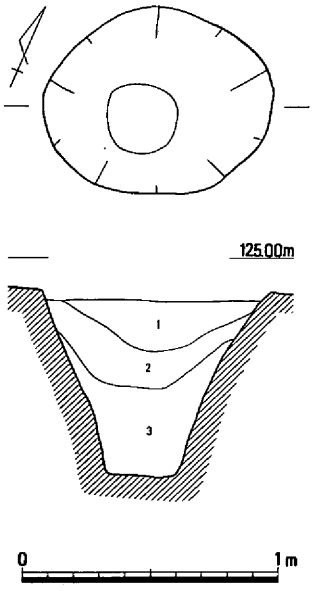
土壙36（No53）（第73図）

４Ｊ区に位置する。平面形は円形に近く、長径は77cm、深さ53cmを測る。穴の形状はバケツ状を呈する。埋土は３層で、ほぼ水平に堆積し、下層には礫を多く含んでいた。弥生時代後期前半の甕の口縁部小片が出土し、遺構の分布状況や埋土から同期の土壙とみられる。（岡本寛）

土壙37（No104）

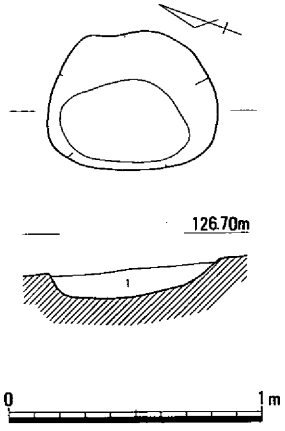
（第74図）

10Ｆ区で検出した。平面形は楕円形で、長径90cm、短径74cm、深さは73cmを測る。断面形はＶ字形だが、長径30cmの底面をもつ。埋土は３層で、上層は中央が落ち込んで厚い。形状や埋土から弥生時代と判断した。（岡本寛）



1．淡茶灰褐色粘質土
2．淡褐灰色粘質土
3．灰褐色粘質土

第74図　土壙37(1/30)



1．暗褐色土

第75図　土壙38(1/30)

土壙38（No180）（第75図）

15Ｐ区に位置する。検出面での平面形は長径68cm、短径54cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。遺物は出土していないが、埋土や周囲の遺構の状況から弥生時代の遺構と判断した。（佐藤）

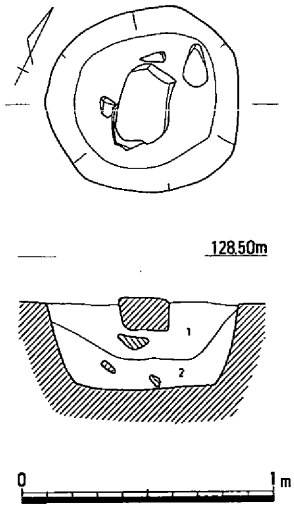
土壙39（No350）（第76図）

22Ｏ区に位置する。検出面での平面形は径75cm前後の円形を呈し深さは34cmを測る。弥生土器の細片が出土していることから、弥生時代の遺構と判断した。（佐藤）

土壙40（No411）

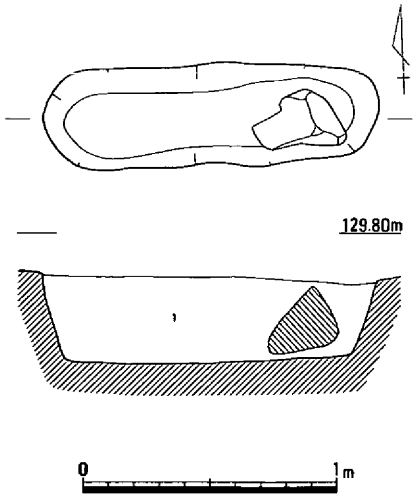
（第77図）

28M区に位置する。検出面での平面形は長径130cm、短径40cmの長楕円形を呈し深さは34cmを測る。弥生土器の細片が出土しているこ



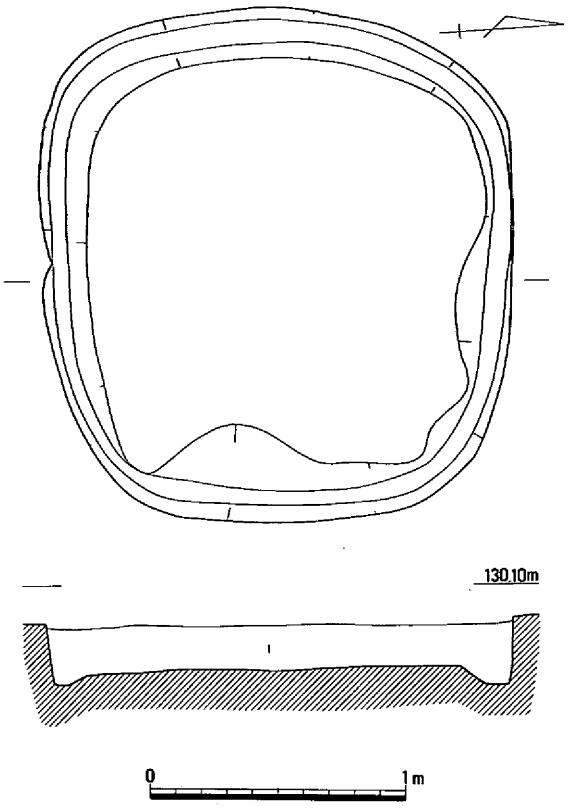
1．暗褐色粘質土
2．黄色土斑暗褐色粘質土

第76図　土壙39(1/30)

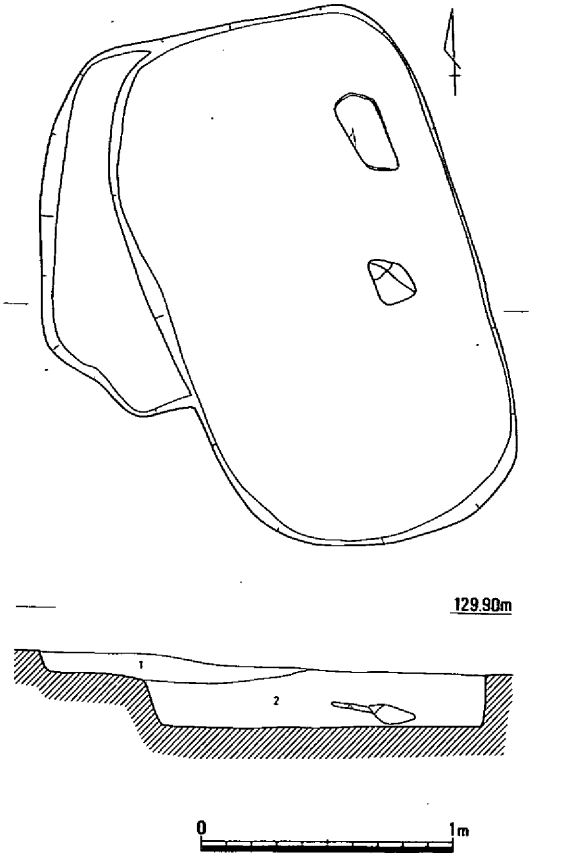


1．黒灰色微砂

第77図　土壙40(1/30)



第78図　土壙41(1/30)・出土遺物(1/4)



第79図　土壙42(1/30)・出土遺物(1/4)

とから弥生時代の遺構と判断した。　（佐藤）

土壙41（No356）（第78図）

30N区に位置する。検出面での平面形は、長径205cm、短径85cmの隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦に掘削され、深さ18cmを測る。底面の周囲には幅10cm前後、深さ４～８cmの溝が巡っている。

遺物は壺の口縁部**70**と底部**71**が出土している。**70**は大きく開く口縁部の上面に３条の浅い凹線文を巡らせている。これらの遺物から土壙41の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　（佐藤）

土壙42（No428）（第79図）

30O区に位置する。二つの土壙が切り合った状態で検出された。検出面での平面形は下層の土壙が長径215cm、短径130cmの隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦に掘削され、深さ25cmを測る。上層の土壙は推定で長径145cm、短径110cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。遺物は主に下層の土壙から出土しており、**72**は壺の口縁部、**73・74**は甕の口縁部、**75**は甕の底部である。これらの遺物から土壙42の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　（佐藤）

土壙43（No352）（第80図、図版２）

30O区に位置する。検出面での平面形は長径200cm、短径126cmの隅丸長方形を呈する。底面はほぼ

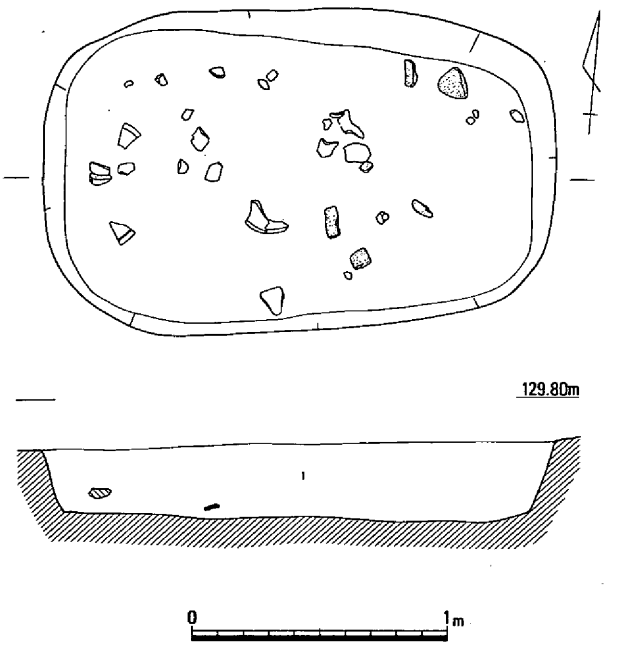
平坦に掘削され、深さ25～30cmを測る。

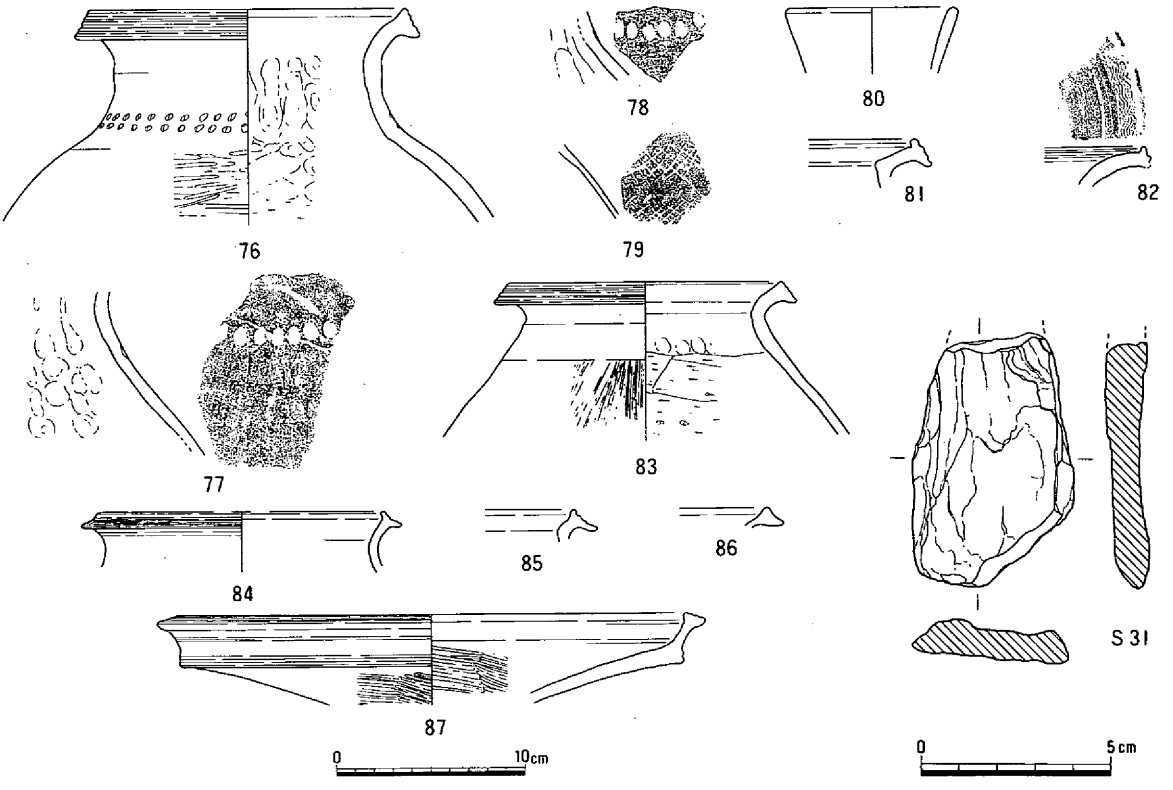
遺物は底面直上から出土したものは少なく多くは埋土中より出土している。

76～82は壺の口縁部から頸部・肩部にかけての部位である。**83～86**は甕の口縁部から頸部である。**87**は高杯で、杯部は内外面とも多角形状にヘラミガキを施し、口縁部はナデで仕上げている。口唇部には3条の凹線文を巡らせ、杯部内面には部分的に丹塗りの痕跡が認められる。

S31は打製石鏃で刃部の一部と基部を欠損している。

これらの遺物から土壙43の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　（佐藤）

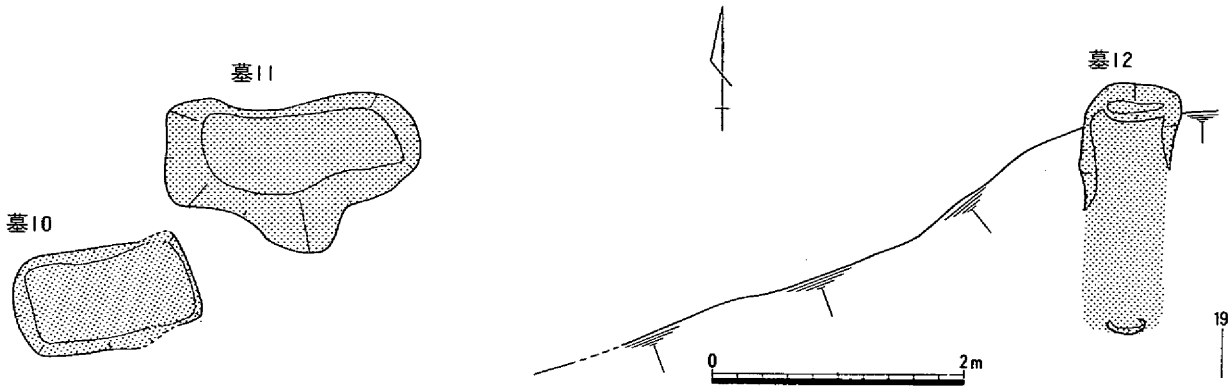




第80図　土壙43(1/30)・出土遺物(1/4)

弥生墓地1（第81図）

西地区の東端、18F区で3基の土壙を検出した。1基の土壙では木口溝が伴い、その形状から木棺墓と判断できた。他の土壙も、木口溝はないものの、長方形を呈し、墓壙の可能性が高い。周辺の遺構の分布状況から考えると、この地区にも墓地が存在したものとみられる。墓地は河道1の北岸にあたるために後世の浸食をうけ、いくつかの墓壙の消滅が推定される。　（岡本寛）



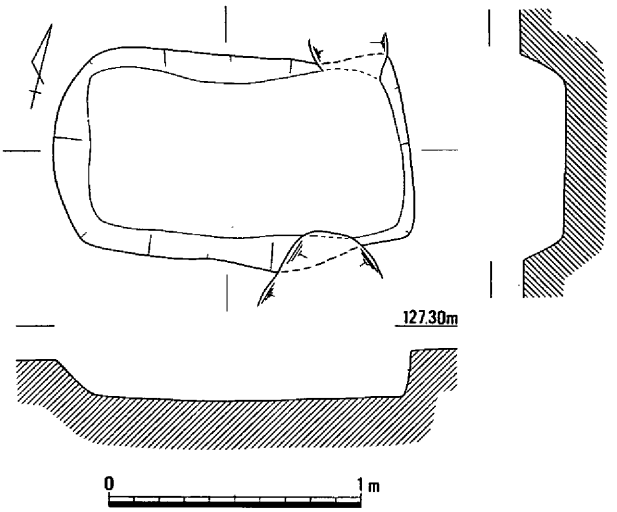
第81図　弥生墓地１墓壙配置図(1/60)

墓10（No153）（第82図）

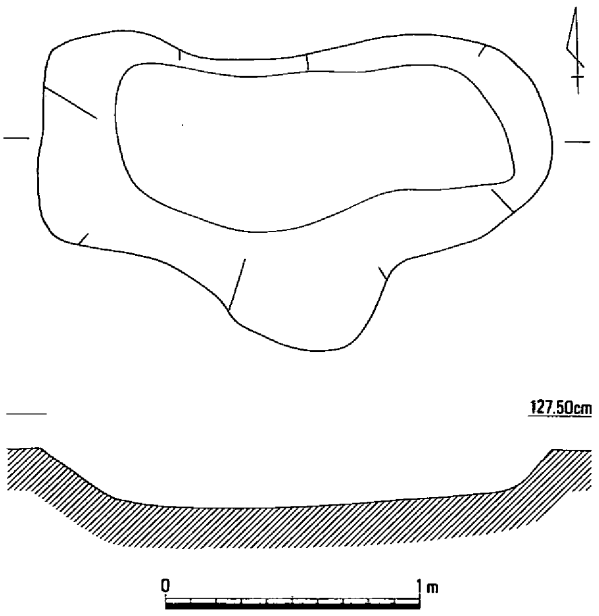
墓地の西端に位置する。平面形は長方形で、長軸が141cm、短軸は85cmを測る。底面も長方形で、ほぼ平坦である。墓壙の深さは20cmである。長軸の方向は東西で、墓12の方向とほぼ直交する。木口溝はなかった。　（岡本寛）

墓11（No117）（第83図）

墓10の北東隣で検出され、長軸の方向は墓10と平行する。周辺は砂利層の基盤で、掘り下げは難しく、西端の形からみれば、もともとは長方形だったと思われる。長軸203cm、西端幅85cm、深さ33～52cmを測る。　（岡本寛）



第82図　墓10(1/30)



第83図　墓11(1/30)

墓12（No143）（第84図）

墓11の東５ｍにあり、長軸方向は南北である。後世の削平を受けていたが、北端部と南の木口溝が残存していた。木口溝から木棺墓であったことが知られるが、木口板と側板の組み合わせ方は明瞭ではない。墓壙の幅は75cm、深さ20cm、木口溝間は170cmを測る。弥生時代中期後葉の壺の小破片が出土した。　（岡本寛）

弥生墓地２（第88図）

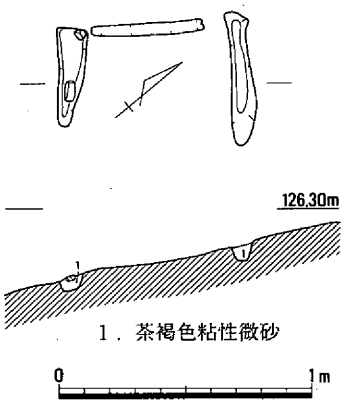
弥生墓地２は平野部を一望できる丘陵南端の15Ｐ・Ｑ区に位置する。墓域は南北７ｍ、東西13mの範囲に広がり、削平

により木口溝を残すのみのものも含め計18基を検出した。墓壙の形態や木口溝から埋葬施設の多くは木棺墓と考えられる。副葬品や外表施設は皆無で個々の時期は不明であるが、周囲の遺構の状況から墓域は弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて形成されたものと考えられる。　（佐藤）

墓13（No183）（第85図）

墓域の西端に位置し、主軸は等高線に直交する。両木口溝と西側側板溝が残存する。

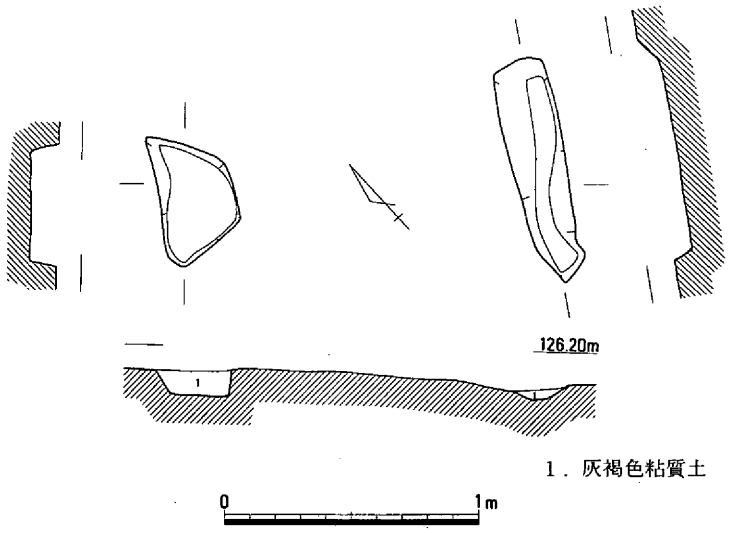
木口溝は底部長で35cmを測り、その間隔は68cmである。　（佐藤）



第85図　墓13(1/30)

墓14（No181）（第86図）

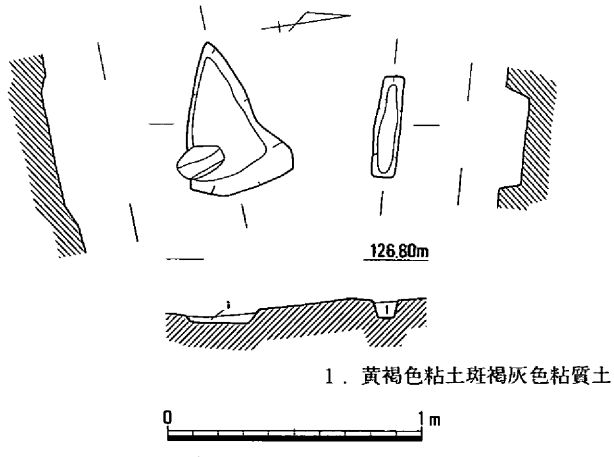
墓域の西よりに位置し、主軸は等高線に平行する。両木口溝が残存し、底部長で北側が78cm南側が22～54cmを測り、その間隔は145cmである。　（佐藤）



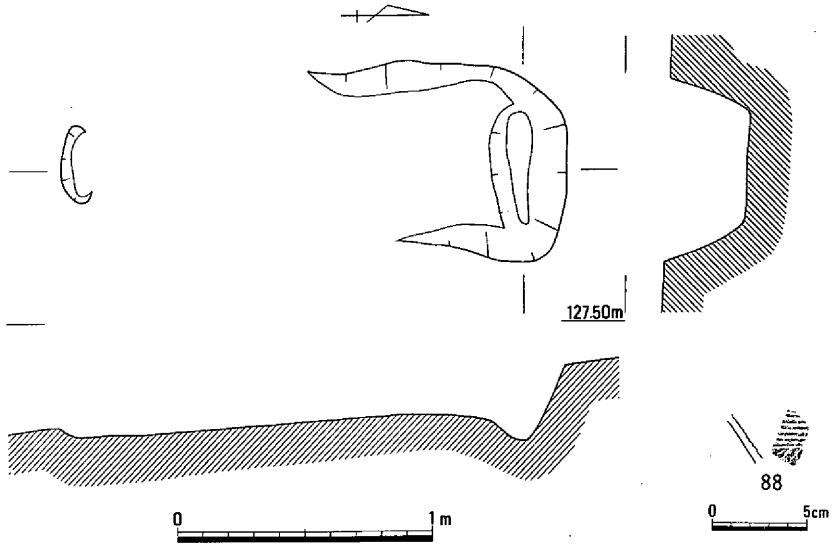
第86図　墓14(1/30)

墓15（No182）（第87図）

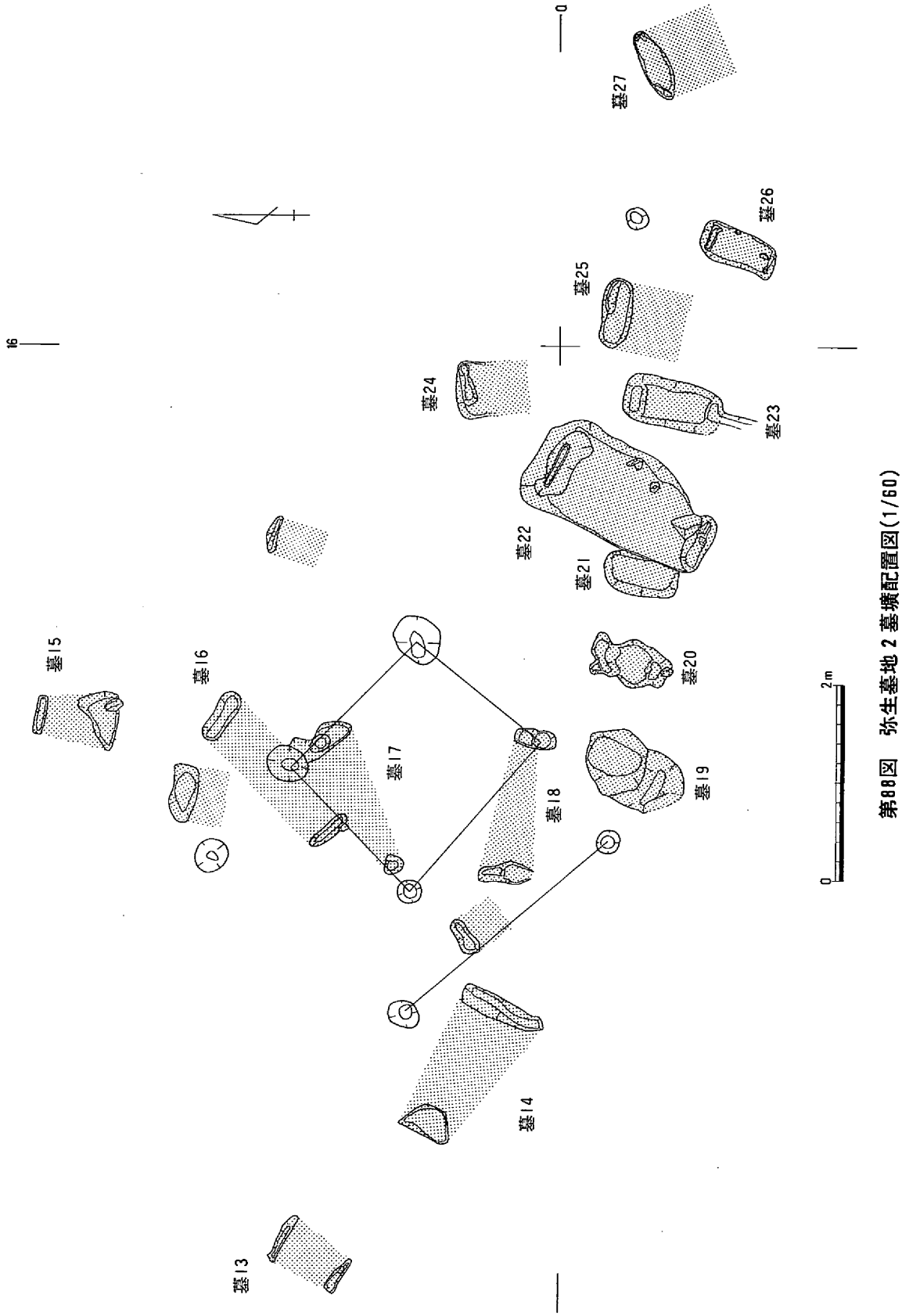
墓域の北端に位置し、主軸は等高線に直交する。両木口溝が残存し、底部長で北側が40cm、南側が58cmを測り、その間隔は75cmである。　（佐藤）



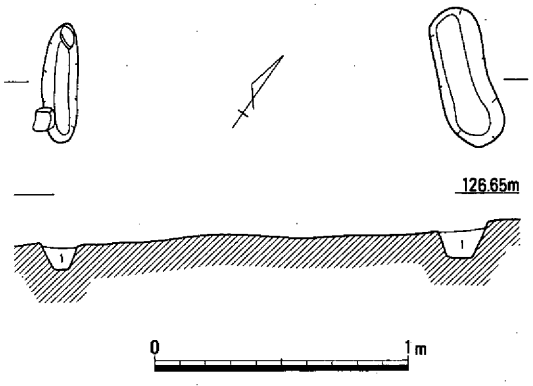
第87図　墓15(1/30)



第84図　墓12(1/30)・出土遺物(1/4)

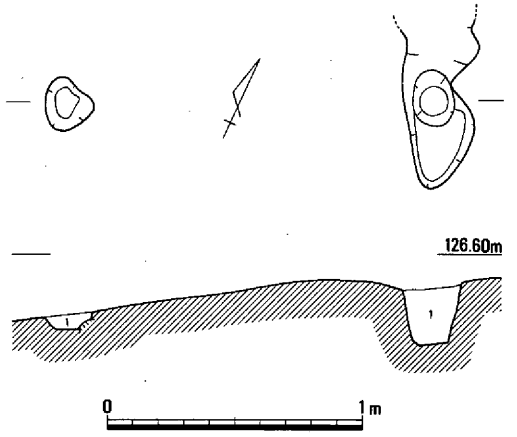


第88図　弥生墓地２墓壙配置図(1/60)



1．黄茶褐色粘土斑暗茶褐色粘質土

第89図　墓16(1/30)



1．暗茶褐色粘性微砂

第90図　墓17(1/30)

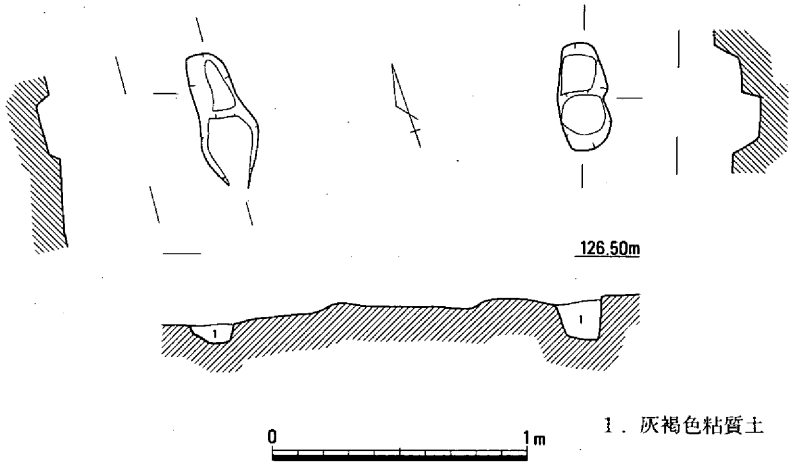
墓16（No178）（第89図）

墓域の北西に位置し、主軸は等高線に直交する。両木口溝が残存し、底部長で東側が46cm、西側が37cmを測り、その間隔は156cmである。　（佐藤）

墓17（No179）（第90図）

墓域の北西に位置し、主軸は等高線に直交する。

両木口溝と考えられる径15～20cm、検出面からの深さ６～24cmを測る不整形な円形のピットを検出し、その間隔は145cmを測る。　（佐藤）



1．灰褐色粘質土

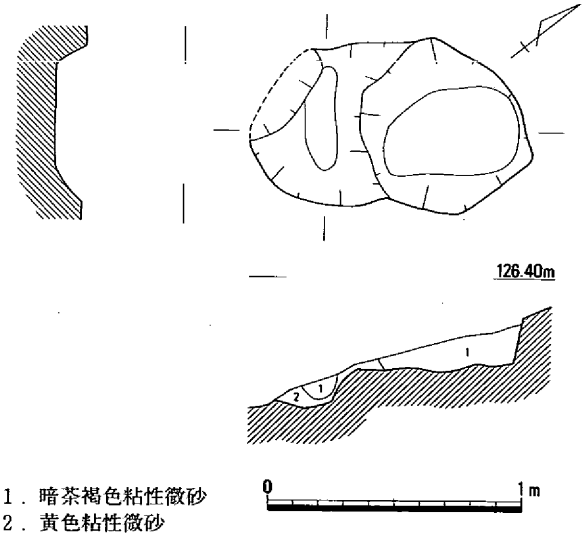
第91図　墓18(1/30)

墓18（No177）（第91図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に平行する。両木口溝が残存し底部で長さ30～50cm、幅６～15cm、検出面からの深さ８～15cmを測り、その間隔は約140cmである。　（佐藤）

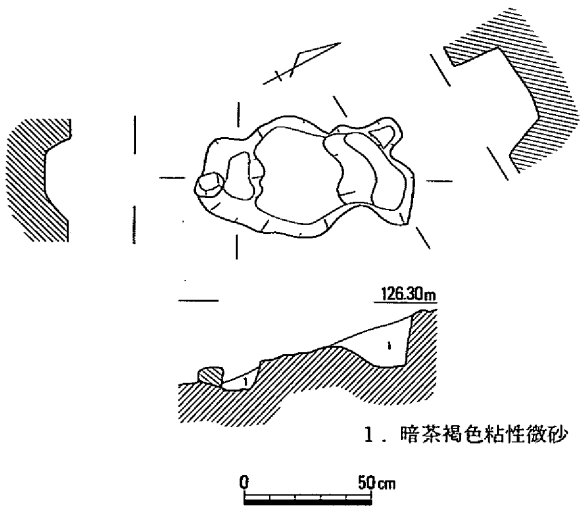
墓19（No167）（第92図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。墓壙の掘り方はいびつな楕円形を呈し、検出面で長径108cm、短径65cmを測る。底面は２段に掘削されており、検出面からの深さは２～16cmを測る。木口溝が認められないため、土壙墓の可能性もある。　（佐藤）



1．暗茶褐色粘性微砂
2．黄色粘性微砂

第92図　墓19(1/30)



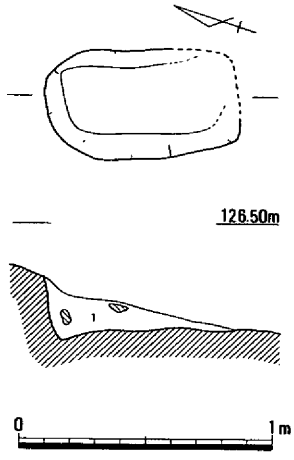
第93図　墓20(1/30)

墓20（No169）（第93図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。墓壙の掘り方はいびつな長方形を呈し、底面で長径50cm、短径26cmを測る。木口溝は底部長18～34cm、底面からの深さ8～12cmを測り、その間隔は約55cmである。　（佐藤）

墓21（No176）（第94図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。南東部は墓22により削平されている。墓壙の掘り方は隅丸長方形を呈し、底面で推定長径60cm、短径26cmを測る。木口溝が認められないため、土壙墓の可能性もある。　（佐藤）

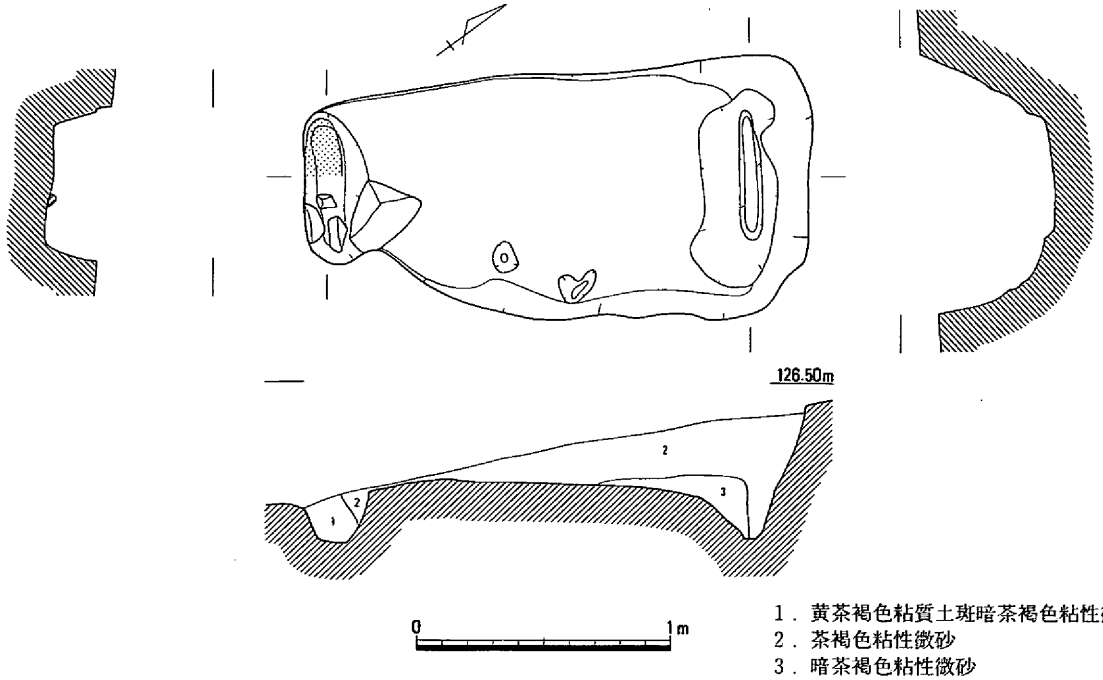


第94図　墓21(1/30)

墓22（No161）（第95図、図版2）

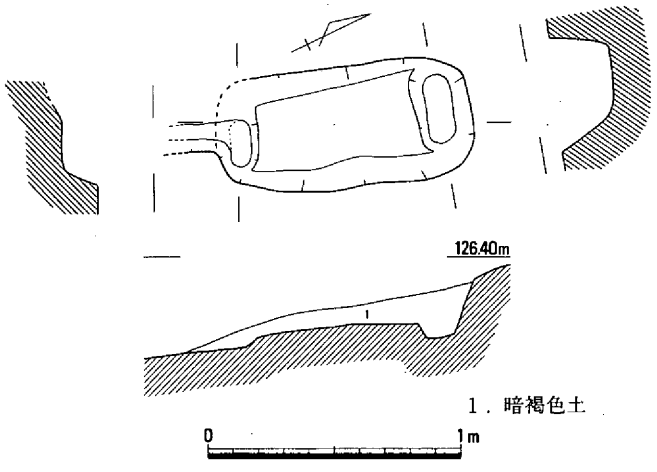
墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。墓壙の掘り方はいびつな長方形を呈し、底面で長径150cm、短径60～85cmを測る。

両木口溝は底部長46cm、底面からの深さ18cmを測り、その間隔は約165cmである。これらから木棺の規模は推定で長さ165cm、幅46cm前後であったと考えられる。また北側の木口では裏込めにより木口板を固定した状況を土層により確認することできた。　（佐藤）

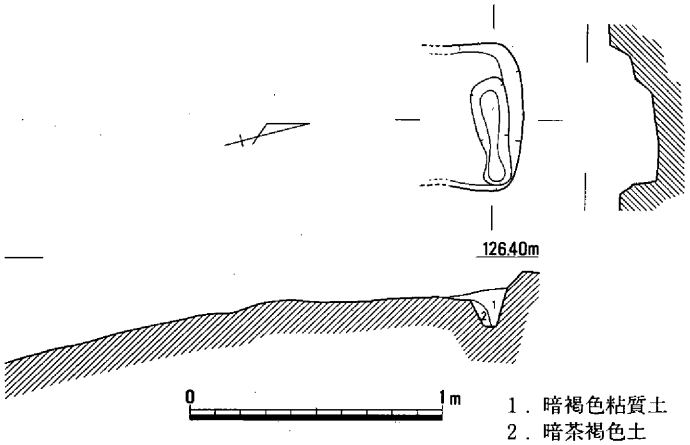


1．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘性微砂
2．茶褐色粘性微砂
3．暗茶褐色粘性微砂

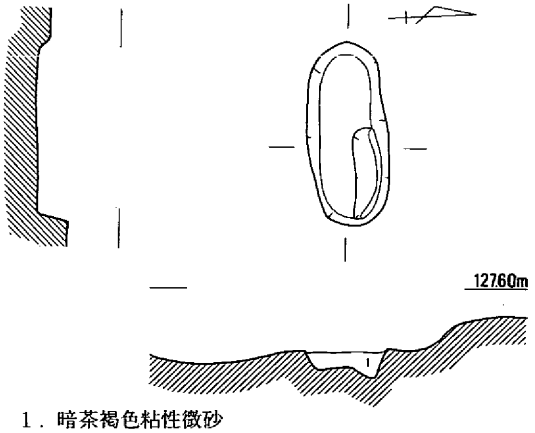
第95図　墓22(1/30)



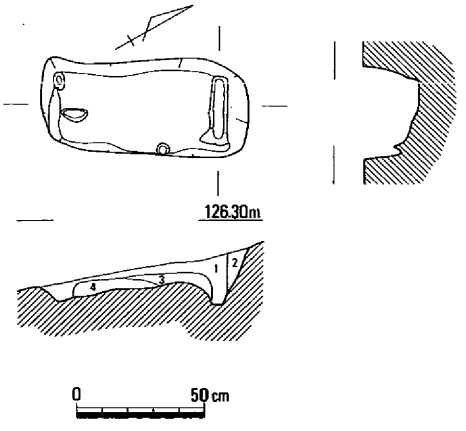
第96図　墓23(1/30)



第97図　墓24(1/30)



第98図　墓25(1/30)



第99図　墓26(1/30)

墓23（No170）（第96図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。墓壙の掘り方は隅丸長方形を呈し、底面で長径62cm、短径30cmを測る。

両木口溝は底部長18～28cm、底面からの深さ４～７cmを測り、その間隔は80cmである。　（佐藤）

墓24（No171）（第97図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。北側の墓壙の掘り方と木口溝が残存し、墓壙の掘り方は底面で短径40cm、木口溝は底部長34cm、底面からの深さ８cmを測る。　（佐藤）

墓25（No172）（第98図）

墓域の東よりに位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長64cmを測る。（佐藤）

墓26（No166）（第99図）

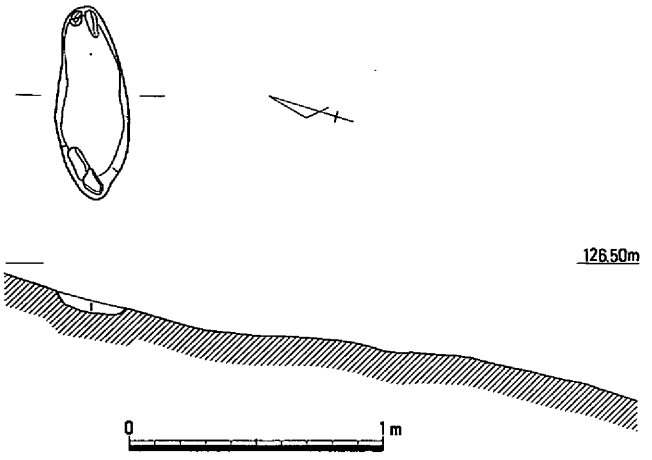
墓域の東よりに位置し、主軸は等高線に直交する。墓壙の掘り方は長方形を呈し、底面で長径50cm、短径28cmを測る。木口溝は北側のみ掘削されており、底部長23cm、底面からの深さ８cmを測る。　（佐藤）

墓27（No184）（第100図）

墓域の東端に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し底部長60cmを測る。　（佐藤）

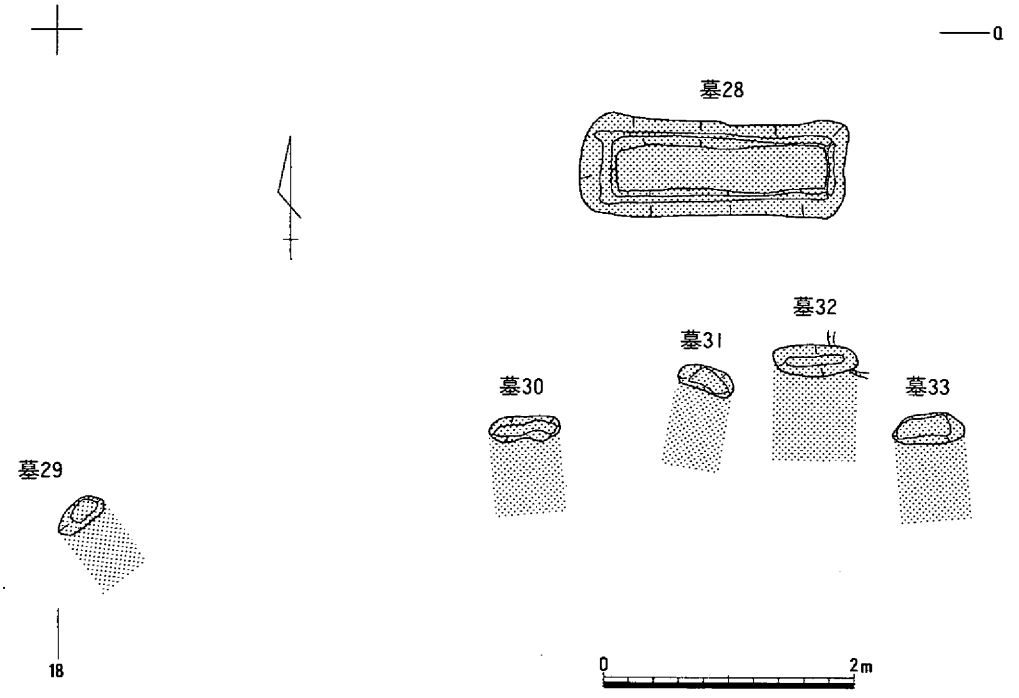
弥生墓地3（第101図）

弥生墓地3は平野部を一望できる丘陵南端の18Q区に位置する。西30mには弥生墓地2がある。墓域は南北3m、東西7mの範囲に広がり、やや大型の墓28の南側に、削平により木口溝を残すのみとなった小型の墓5基が主軸を直交させて分布する。埋葬施設はすべて木棺墓と考えられ、副葬品や外表施



1．暗茶褐色粘性微砂

第100図　墓27(1/30)



第101図　弥生墓地3墓壙配置図(1/60)

設などは認められない。墓域は墓壙の埋土中からわずかに出土した土器や周囲の遺構の状況から弥生時代後期前葉に形成されたものと考えられる。　（佐藤）

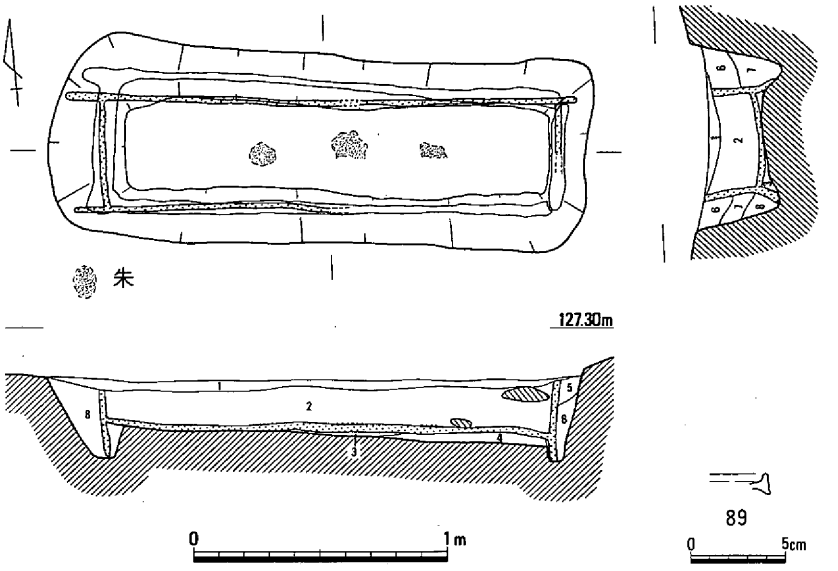
墓28（No174）（第102図、図版2）

墓域の北部に位置し、主軸は等高線に平行する。墓壙の掘り方は長方形を呈し、検出面で長径210cm、短径75cm、底面までの深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦に掘削され、長径168cm、短径34cmを測る。底面の周囲には棺材を固定するための溝が巡らされ、幅2～8cm、底面からの深さ6～12cmを測る。粘土化した木棺の痕跡から、墓壙内に構築された木棺は底板を木口板で挟み、さらに側板で底板と木口板を挟み込む構造で、厚さ2～3cmの材が使用されたものと考えられる。木棺内部の規模は推

定で長さ175cm、幅36cm程と考えられる。側板は木口板からさらに棺長軸方向に突出し、蓋材の痕跡は削平のためか認められなかった。底面中央部には３ヶ所にわたり径10～15cm程の範囲で朱の分布が認められる。

遺物は埋土中より**89**が出土している。

89は甕の口縁部で、口縁端部を上下に拡張し、口唇部には浅い凹線文を２条巡らせている。この遺物から、墓28の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

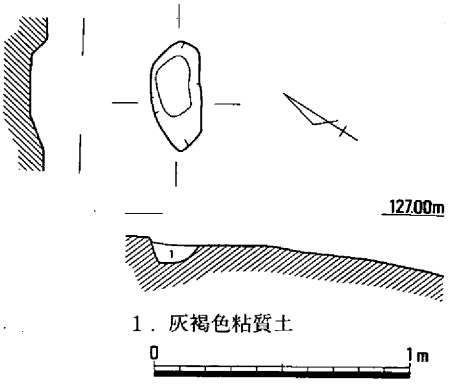


1．灰色土　3．淡灰色粘土　5．暗灰色土　7．黄灰色土
2．黄灰色土　4．灰黄色土　6．灰黄色土（小礫多）　8．黄色粘土

第102図　墓28(1/30)・出土遺物(1/4)

墓29（No195）（第103図）

墓域の西端に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長24cmを測る。（佐藤）



1．灰褐色粘質土

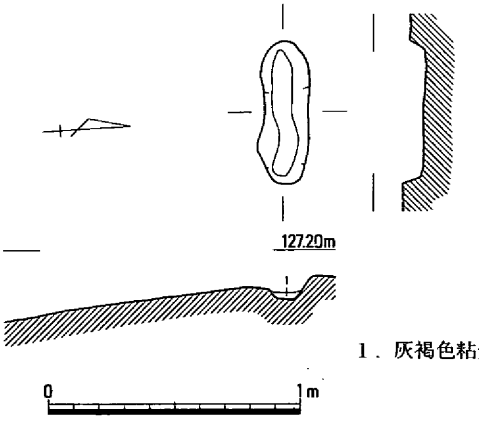
第103図　墓29(1/30)

墓30（No194）（第104図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長48cmを測る。（佐藤）

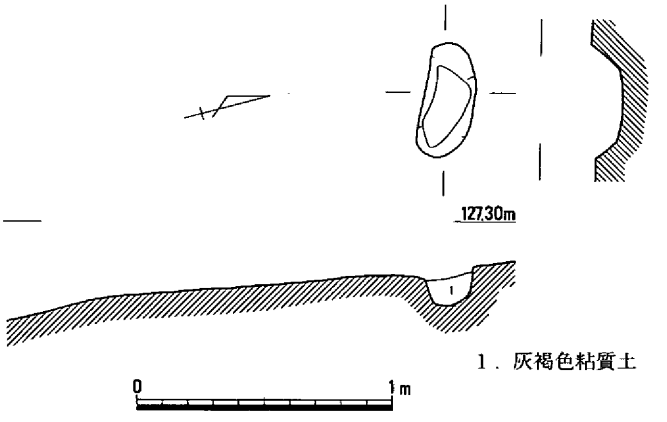
墓31（No193）（第105図）

墓域の中央に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長32cmを測る。（佐藤）



1．灰褐色粘質土

第104図　墓30(1/30)



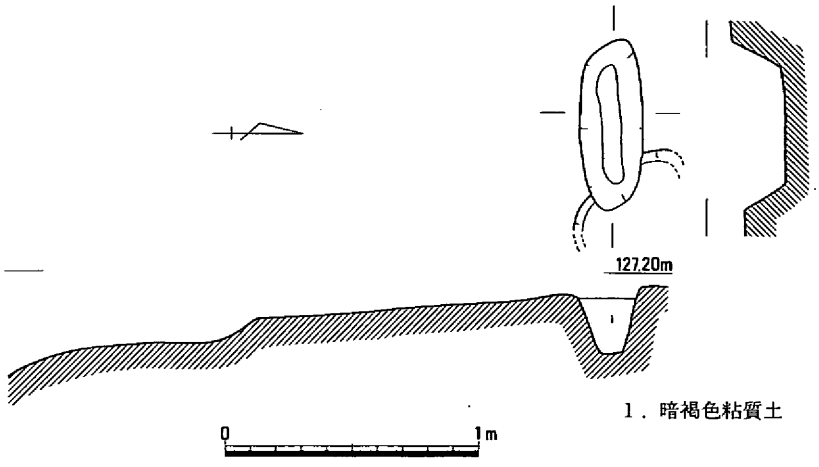
1．灰褐色粘質土

第105図　墓31(1/30)

墓32（No175）

（第106図）

墓域の東端に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長47cmを測る。（佐藤）

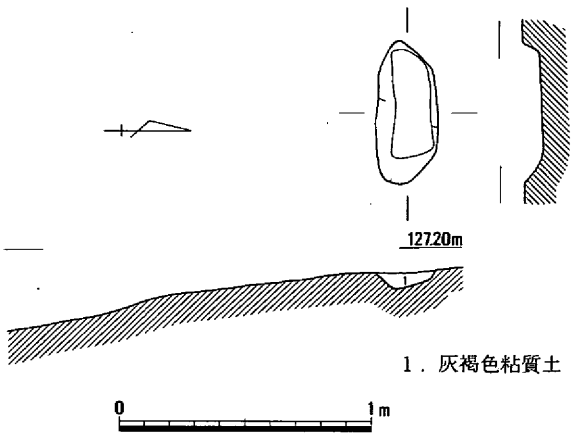


第106図　墓32(1/30)

墓33（No196）

（第107図）

墓域の東端に位置し、主軸は等高線に直交する。木口溝が片側のみ残存し、底部長42cmを測る。（佐藤）



第107図　墓33(1/30)

河道１（No436）

（第108～113図、図版２、13）

大田茶屋遺跡東地区の北西端に位置する。河道は調査区内を北東方向から南西方向に向かってゆるやかに高さを減じながら縦断している。河道流路は調査区外へと続いており、大田茶屋遺跡東地区と西地区の間にある谷へ流れ込んでいたものと考えられる。また、大田茶屋遺跡の北に隣接する大田大正開遺跡では、１区の土器溜まりが検出されたあたりが谷頭に近いと思われ、そこから少し南に下ったあたりから深さをしだいに増し、河道流路自体が始まるものと考えられる。

河道１の全体の規模や形態は不明であるが、調査区内で検出した範囲に限定すれば、幅10～12m前後、河床までの深さ1.2m前後を測る。河道の断面形は両肩口から中央に向かってなだらかに傾斜し、中央部付近で傾斜を強める逆台形を呈している。第108図に図示した河道の土層断面のうち、河道埋土は11層～13層で、１層～10層は河道が埋没した弥生時代後期以降に堆積した土であるが、遺物はほとんど含まれていない。11層～13層は黒色粘質土を主体とする土で、色調の違いから３層に分けることができる。このうち、11層から弥生時代中期後葉から後期前葉の土器が大量に出土している。これらの土器は大田茶屋遺跡や大田大正開遺跡で検出された遺構と同時期であり、大田大正開遺跡から大田茶屋遺跡にかけて営まれた集落から廃棄されたものと考えられる。河道の存続期間はこれらの土器からほぼ弥生時代中期後葉に限定でき、比較的短期間に埋没したものと考えられる。（佐藤）

河道１から出土した遺物には弥生時代前期の木葉文土器なども含まれていたが、ここでは、大部分を占める弥生時代中期後葉の土器を中心に紹介し、一部後期前葉の土器についても述べたい。

90～105は壺で、**106・107**は壺の脚台とみられる。壺の形態は大きく二種に分けられる。細長い頸部に大きく外反する口縁部をもつものと、算盤玉形の胴部に「く」の字状に屈折する短い口頸部をつ

けたものである。後者の例として101・104・105があり、この種の壺に脚台が付く。前者の壺は口縁部の形態でさらに細分される。93・94・96は口縁を強く外反させて、内面を文様で飾る。97・98の外反はゆるやかで、口縁端部を大きく拡張させ、内面に凹線を巡らせる。90・99は口縁の上端に水平な面を作って文様を施し、下端は大きく拡張させる。いずれも頸部は凹線文で飾るが、97は指頭圧痕を二段に巡らせる。拡張させた口縁端面も凹線文を施し、その上に刻目や円形浮文で加飾する。胴部は櫛描波状文や櫛描斜格子文で飾るが、算盤玉形の壺では凹線文やヘラ描きの斜格子文が用いられる。93や94の小形の壺には頸部の上端に穿孔があり、91のような蓋がつく。また、102や103のように甕に近い器形をもつ小形の壺があり、102には半環状の把手が横位に付けられている。

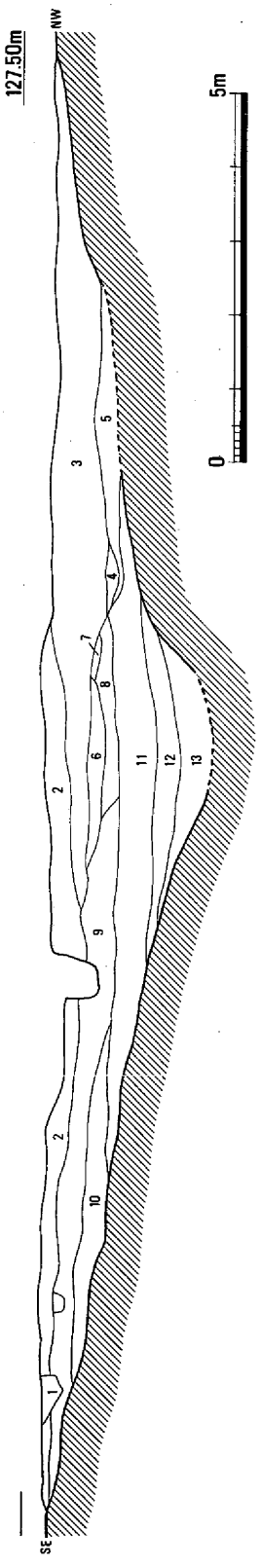
108～113は鉢で、ほとんどのものに脚台が付くと思われる。113は大形の台付鉢で、筒状の注口が1個取り付けられている。108の器体上半は直立するが、他の器体上半は屈折して立ち上がり、内側に傾斜する。後者の口縁部上端には面が作られる。111～113ではこの面が拡張され、凹線文や櫛描文で飾られる。器体上半には、上端と下端に凹線文を巡らせ、その間にヘラ描きの斜格子文や鋸歯文を施す。108は凹線文のみで、110は上端の凹線文の下に櫛描波状文と直線文を巡らせている。

114～124は高杯である。杯部の形態は二種類あり、114～116のように鉢の上端に鍔を付けたものと、器体上半を屈折させて立ち上げるものである。前者では、鍔の端部を拡張させ、端面に文様を描くものがあり、後者の器体上半には凹線文が施される。脚部は端部を拡張させ、凹線文を飾るものが多いが、無文もある。透かし孔は円形か三角形で、三角形では貫通していないものが多い。

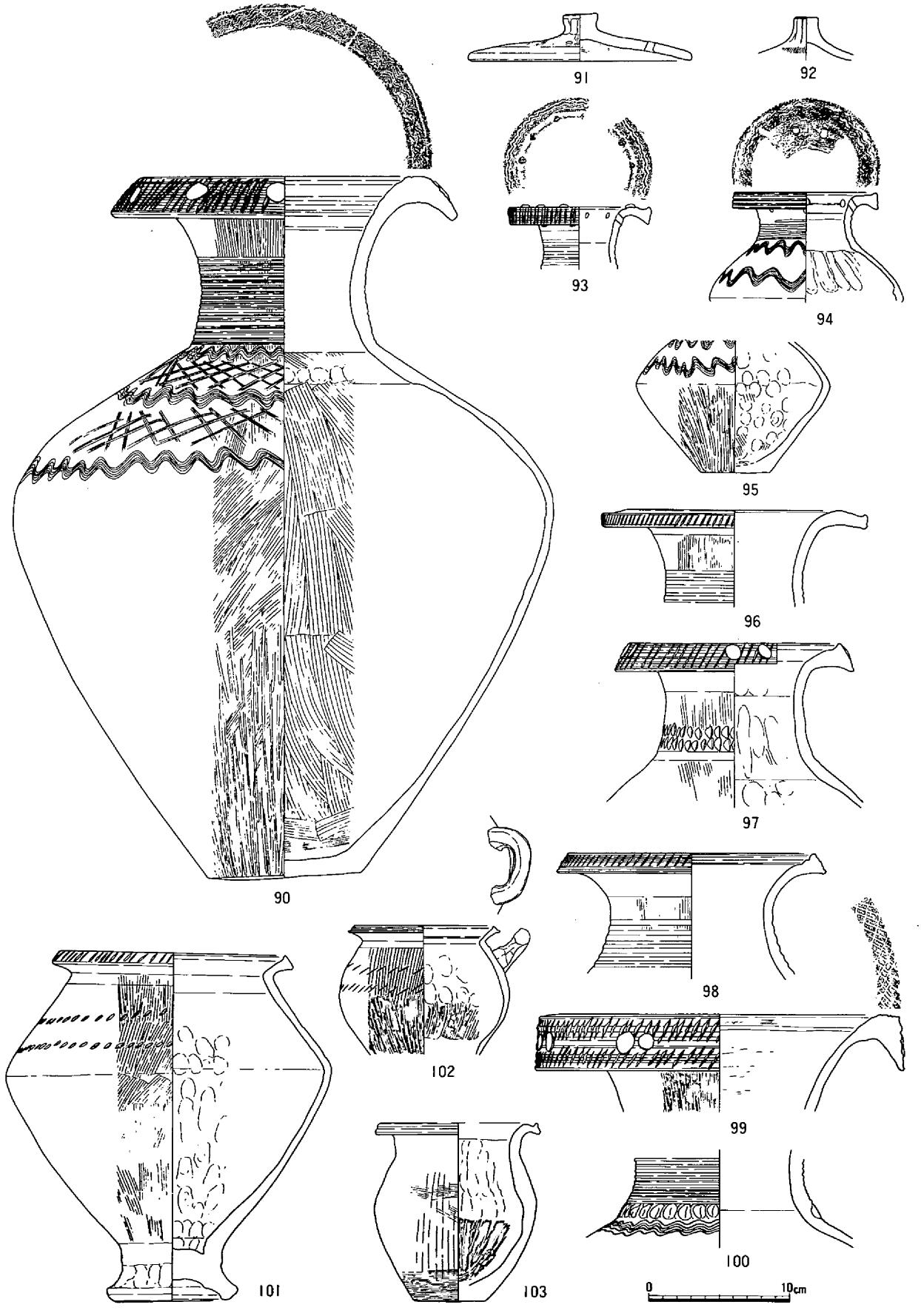
125～130は甕である。いずれも口縁端部を拡張し、端面に凹線文を巡らせる。胴部外面はハケで調整したのち、中央から下半にかけてヘラ磨きされる。胴部内面には指頭圧痕が顕著で、ハケやナデで調整している。127は肩がやや張るため壺であるかもしれない。

131から136は器台である。脚端部を拡張させ、とくに下方への張り出しが大きい。外面には凹線文を多用し、脚端に櫛描波状文を飾るものが多い。凹線文を間隔を置いて巡らせ、その間に透かし孔を連続させるものも多い。透かし孔の形には円形と三角形と長方形がみられる。

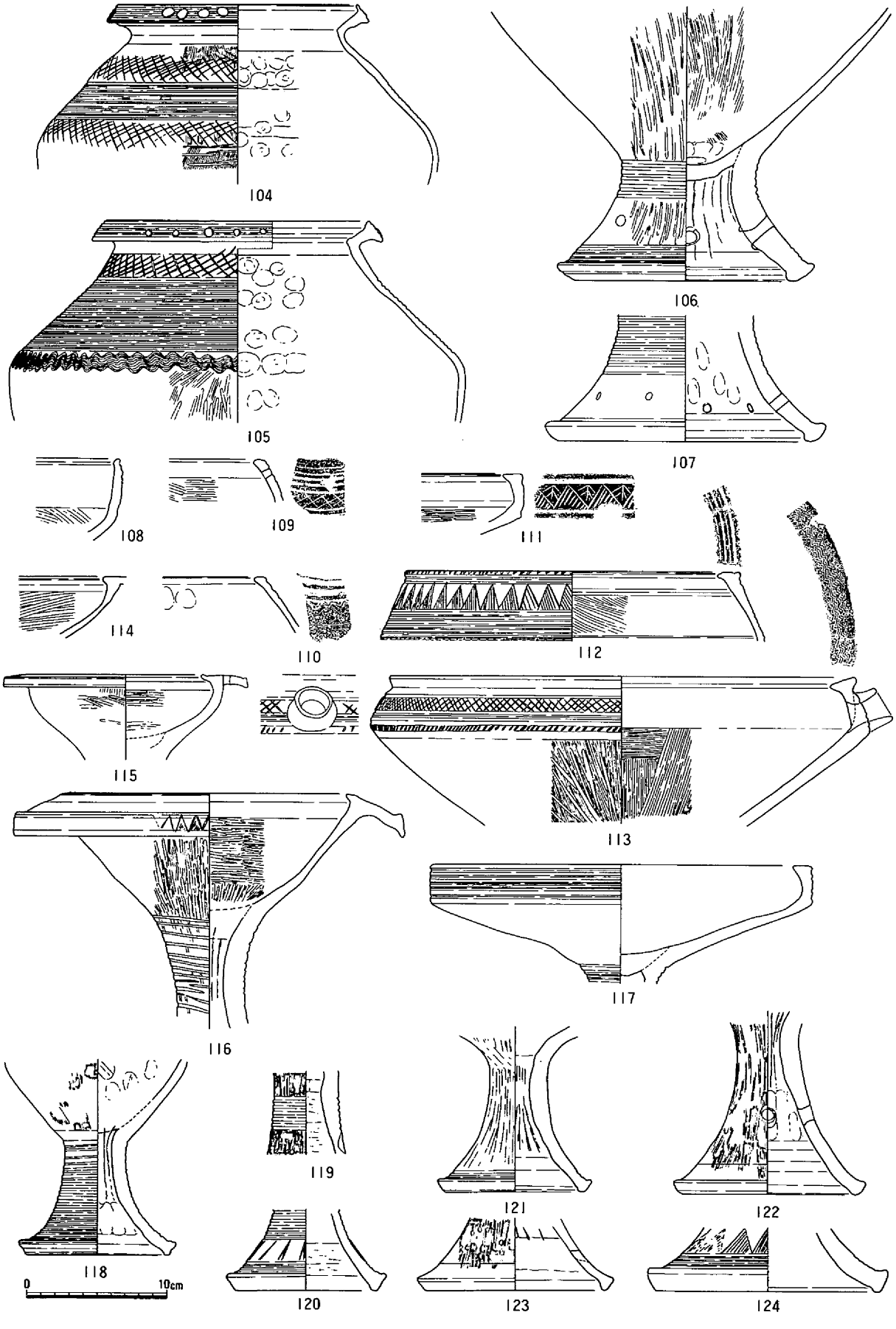
137～145は弥生時代後期前葉の土器である。137・138は



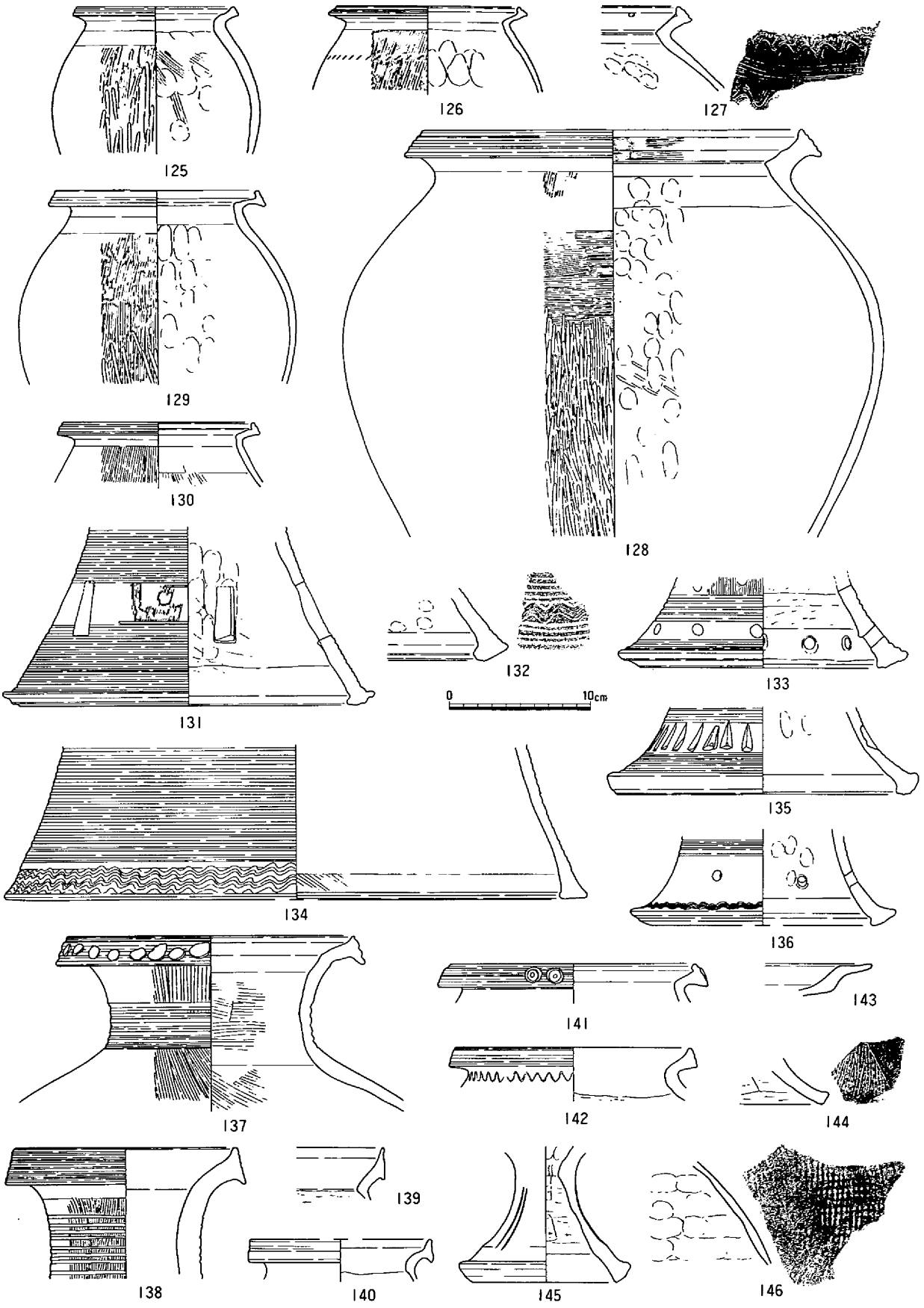
第108図　河道1土層断面図(1/100)



第109図　河道１出土遺物(1)(1/4)



第110図　河道１出土遺物(2)(1/4)



第111図　河道１出土遺物(3)(1/4)

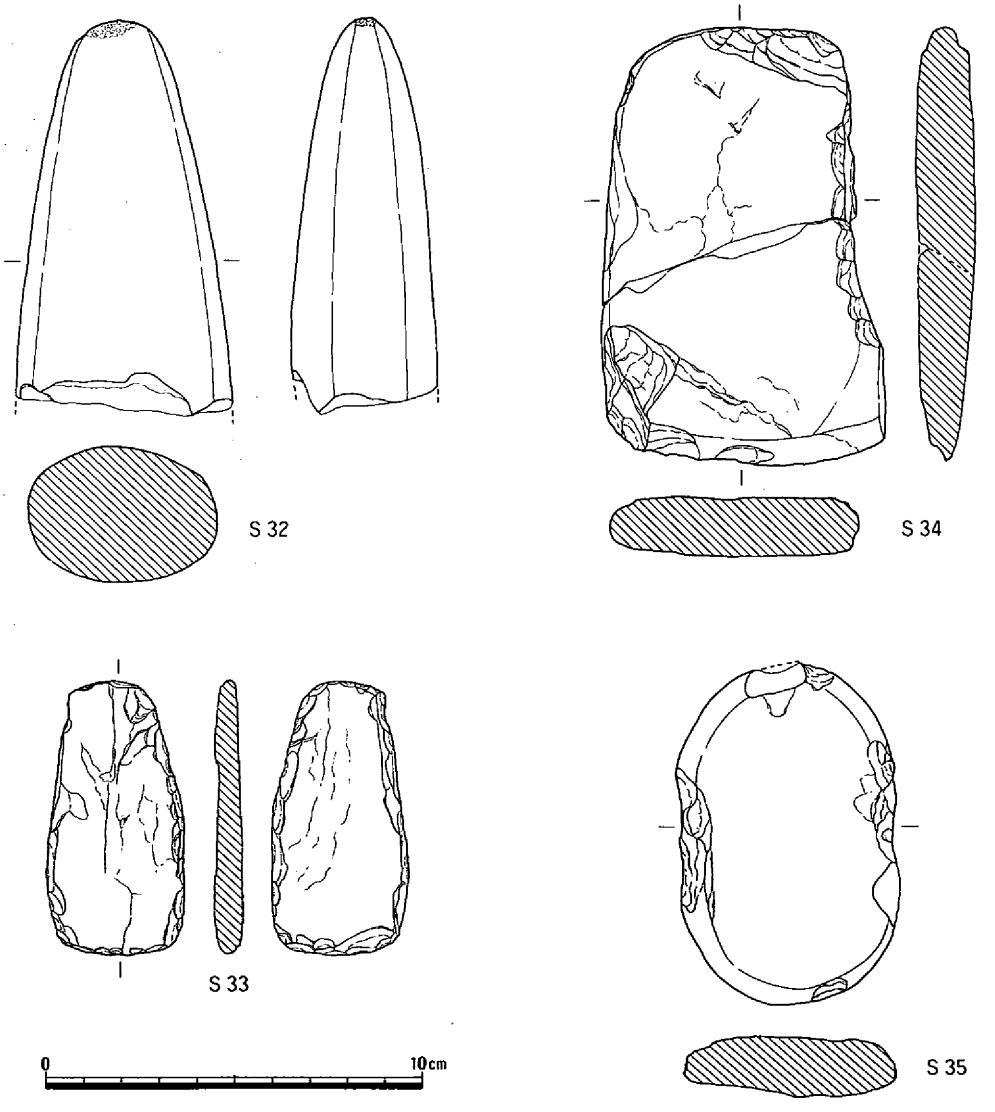
壺、139～142は甕、143～145は高杯である。137は口縁端面も頸部も凹線文を巡らせ中期的な様相が強いが、138の頸部はヘラ描きの沈線が巡り、口縁端面は櫛状工具によるとみられる。

146は上述した土器群と共伴していた。外面に格子の叩き目を残し、内面には指頭圧痕に似た当て具痕跡が明瞭に認められる（注１）。胎土には砂粒が多く含まれ、また、炭化物が点々と認められる。焼成はやや甘く、色調は灰黄褐色から褐灰色を呈する。他地域からの搬入品であろう。

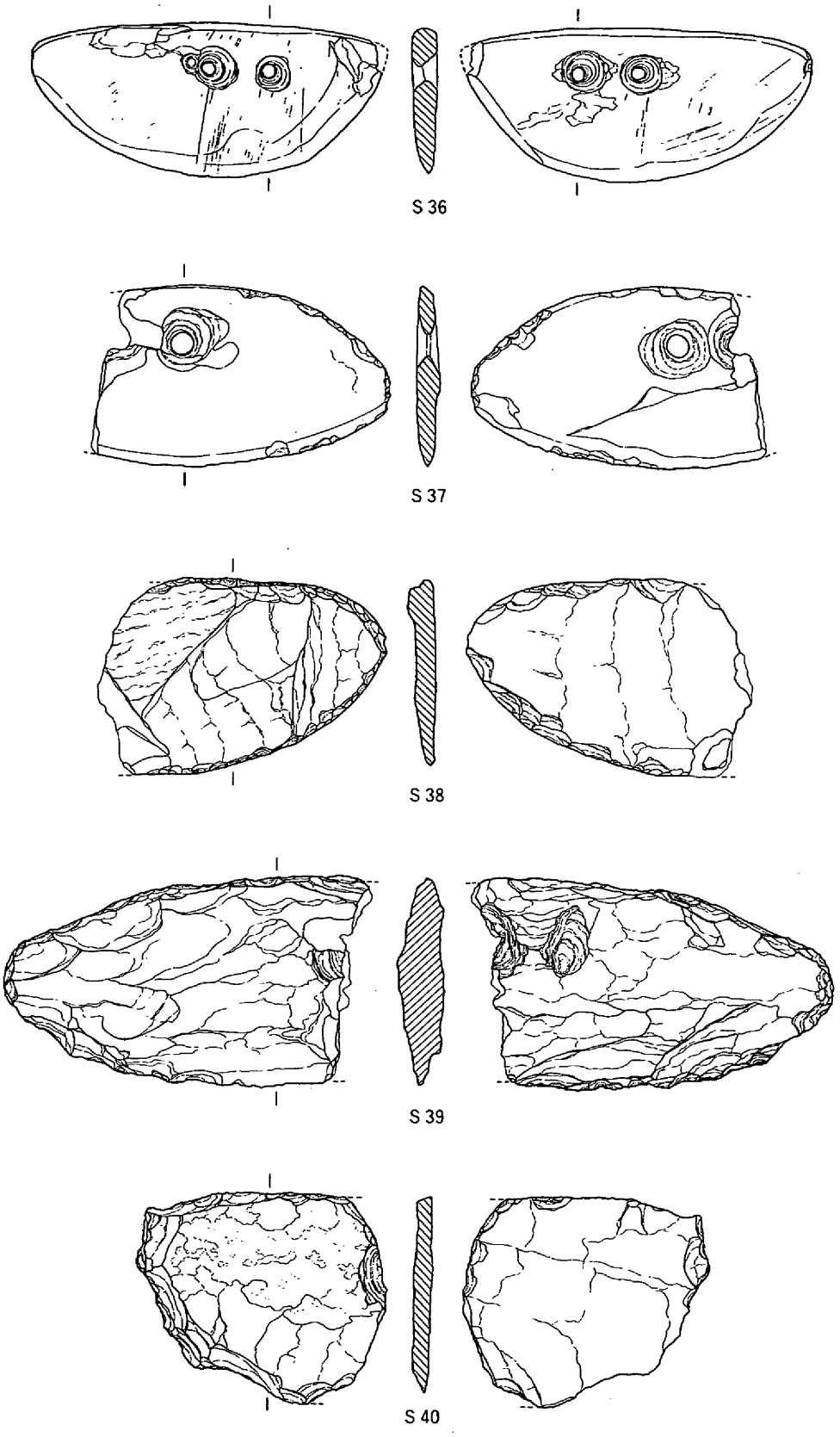
第112・113図には河道１から出土した弥生時代のものとみられる石器を掲載した。

Ｓ32～34は石斧と考えられる。Ｓ32は磨製石斧の基部で、蛤刃と推定される刃部が折損したものとみられる。基部の先端に敲打痕が認められる。Ｓ33は図の左面の左半分と右面の全面が研磨されていて、扁平片刃石斧ではないかと思われるが、側縁だけではなく、刃部にも調整の剝離が及んでいる。あるいは、これから刃部を研ぎ出す未成品かもしれない。Ｓ34も磨製の扁平片刃石斧とみられる。右側縁の調整剝離部分を除いて、全体を磨いていて、刃部の形成が明瞭である。

Ｓ35は石錘と考えられる。扁平な楕円形の石材を用いて、短軸方向の両側を剝いで大きな抉りを作り、長軸方向の両側にも小さな抉りを打ち欠いて縄掛けにしたとみられる。

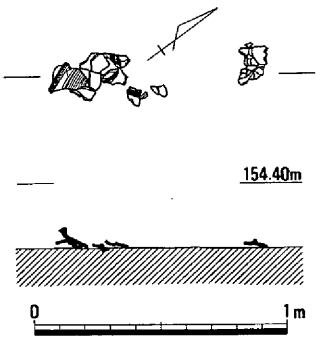


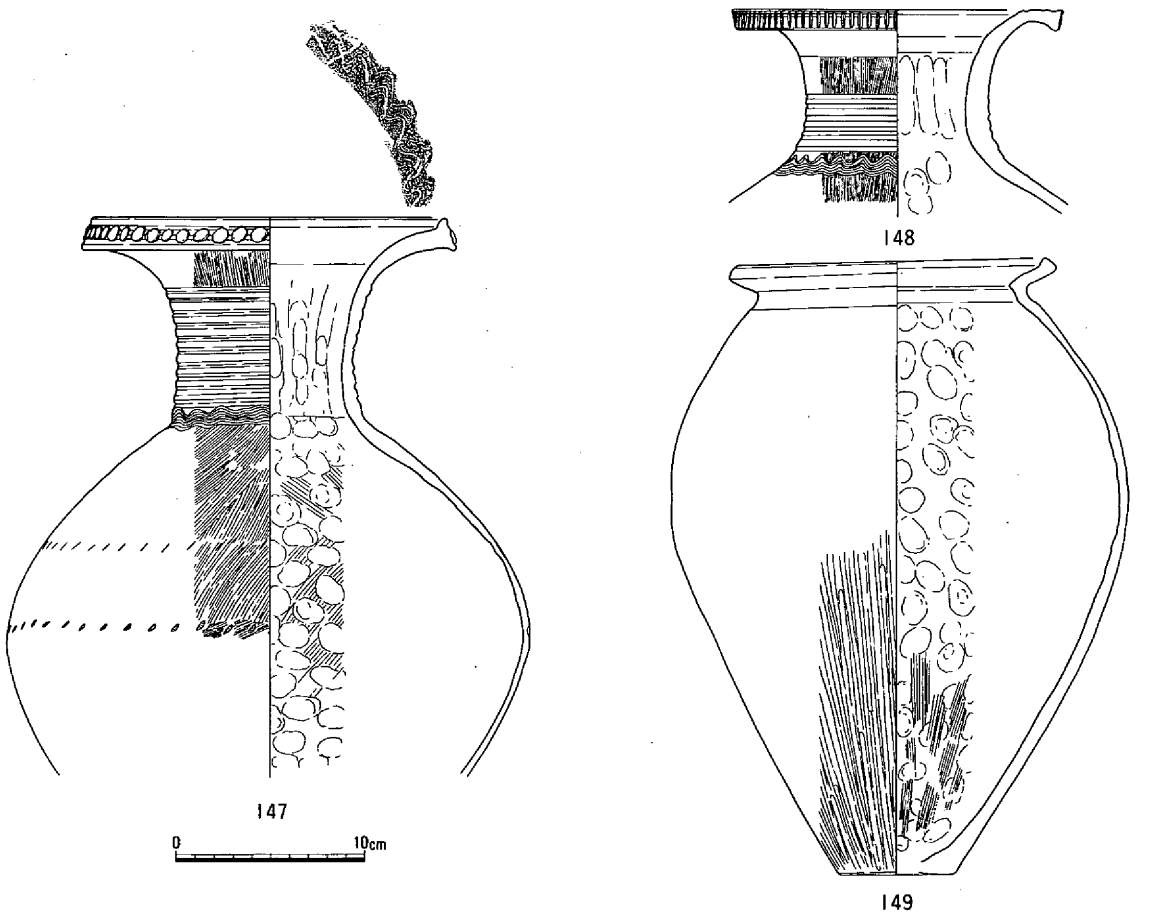
第112図　河道１出土遺物(4)(1/2)



第113図　河道1出土遺物(5)(1/2)

S36～40は石包丁である。S36とS37の磨製石包丁には使用痕が認められる。刃部は外湾し、両面から研ぎ出している。紐通しの孔は両面から穿たれ、石包丁の中央より少し片寄った位置にある。S38～S40は石包丁の未成品である。S38は粗割りの後に周辺を剥離調整した段階である。S39とS40はだいたいの形が整った後に穿孔を開始した段階のものである。S39では両面からの穿孔が観察されるが、表裏で少しズレがみられる。穿孔の途中で折れたためか、孔は貫通していない。　（岡本寛）





第114図　土器溜まり１(1/30)・出土遺物(1/4)

土器溜まり１（No111）（第114図、図版13）

10Ｉ区の中央付近で大形の土器片が幅25cm、長さ90cmの範囲に密集していた。土器片は南北の２カ所に分かれ、復元作業の結果、北側の部分は149の甕に、南側は147・148の壺になった。147の壺は図示した部分を半割したほどの破片があり、149の甕では口縁部から底部までかなりの部分の破片が残っていたことから、ほとんど完形に近い状態で倒れていたのではないかと推定される。土器片は第21図の第16層である暗灰褐色粘質土中にあり、縄文時代晩期の土器片も同一地点から採集された。検出時の周辺の精査では遺構は確認できなかったが、暗灰褐色粘質土を除去すると、残存部分で長径３ｍほどの大きな窪みが現れ、土器溜まりはこの上方に位置することが判明した。窪みに転落した土器が検

出されたものと考えられる。窪みの中では柱穴などはまとまらず、住居跡とはみられない。

147の壺はやや角張った胴部をもち、直立する頸部から緩やかに外反して口縁に至る。頸部には10条の凹線と、その下端に櫛描波状文を巡らせる。口縁は端部を拡張し、端面に凹線文を施し、さらに円形浮文を連続して飾る。口縁部の上面にも櫛描波状文を施している。胴部外面上半に刺突文を二段に飾る。148の壺は口縁部を強く外反させ、端部は少し拡張させる。端面には上端に凹線を１条巡らせ、刻目を施す。口縁部の上面には３条の凹線が巡らされる。頸部下半に凹線文、胴部上端に櫛描波状文を飾る。149の甕の口縁端部は少し上方へ拡張され、頸部の内外に強いヨコナデがみられる。

出土した土器の年代であるが、148や149の口縁端部はあまり拡張されず、また、147の口縁端部も上方につまみ上げたような形状で、頸部の凹線文はラセンにはならず、胴部の文様も刺突文であるなどの特徴があり、弥生時代中期の中葉末と考えられる。（岡本寛）

包含層出土遺物（第115・116図、図版12・13）

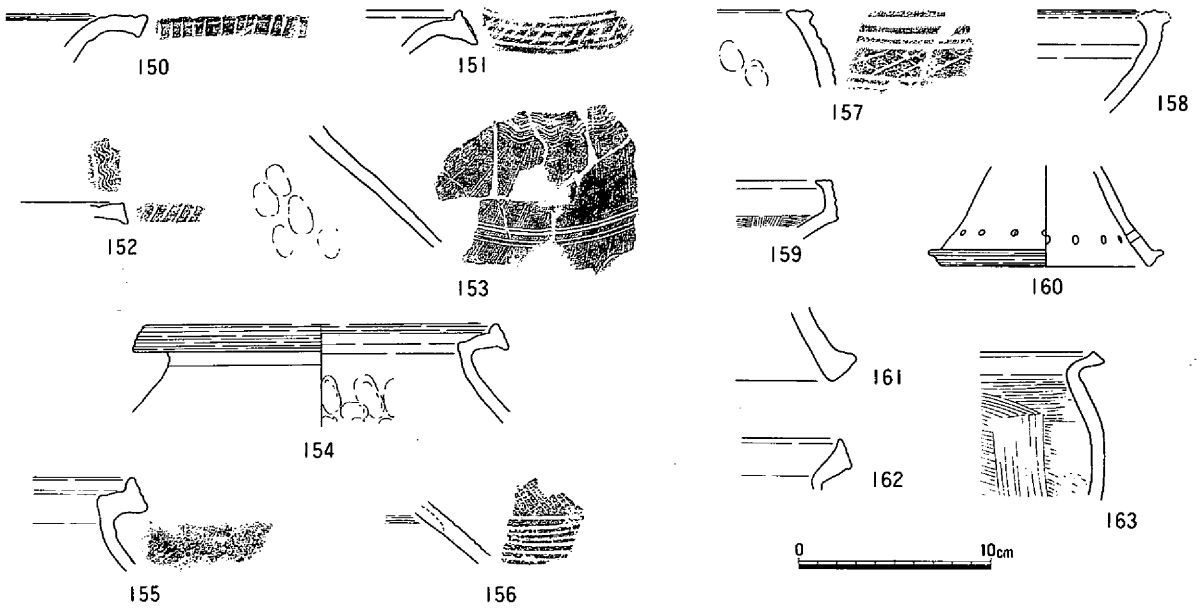
第115図に掲載した土器は西地区の包含層と柱穴から出土したものである。152・162は４区、157・160は５区、他は６区から出土した。なお、７区から９区にかけても弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての時期の土器が出土している。

150～156は壺である。150～153は細長い頸部から口縁部が大きく外反する器形をもち、口縁端部は拡張されて、口縁端面に文様を施し、口縁上面にも文様を飾るものがある。153の胴部には櫛描の波状文と直線文を交互に巡らせている。154～156の壺は、算盤玉形の胴部に短い口頸部をもつ器形である。口縁部は拡張させて端面に凹線文を巡らせ、胴部上半に文様を施す。155は連続した刺突文があり、156にはヘラ描きの斜格子文とその下に凹線文が飾られる。157・158は鉢で、脚台が付くとみられる。口縁端部を拡張して水平面を作り、158ではそこに凹線文を施す。器体の上端にも文様を飾り、157では上下二段の凹線文の間にヘラ描きの斜格子文を配し、158は４条凹線を巡らせる。158はその文様構成から高杯であるかもしれない。159～160は高杯の杯部上半と脚部下半である。杯部上半は屈折して立ち上がり、外面に凹線を４条巡らせる。口縁端部は拡張して水平面を作り、そこにも凹線を２条施す。脚端部は上方に拡張させて端面を作り、凹線を巡らせる。脚の裾には小さな円孔を連続して穿っている。161は器台の脚端部とみられ、内面の上方にはヘラケズリらしい痕跡が認められる。端部は上方に拡張され、端面には鈍い凹線が施されている。162・163は甕である。162は口縁端部をつまみ上げて上方へ拡張し、端面に鈍い凹線を巡らせる。外面に丹彩の痕跡が認められるため、あるいは鉢ないし壺の可能性がある。163は口縁端部を上方に少し拡張する。

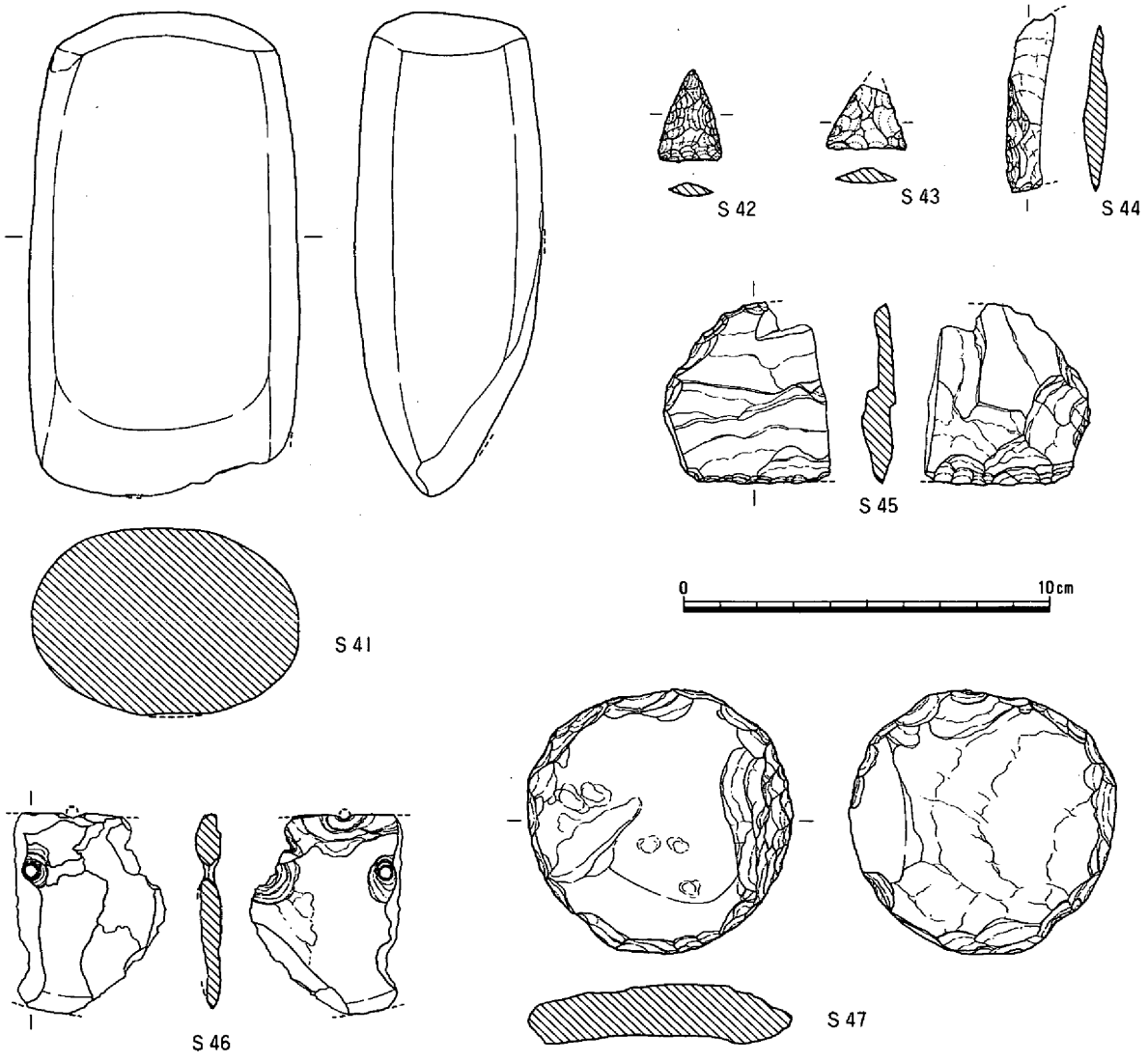
これらの土器のほとんどは弥生時代中期後葉のものと考えられ、162のみは後期前葉である。やや古相の150は６区出土で、162は５Ｊ区の柱穴から出土している。

第116図には石器を掲載した。Ｓ41は５区の表土から、Ｓ45は７区、Ｓ46は10区の包含層から出土した。Ｓ42は古代の土壙46、Ｓ43は古代の建物40の柱穴、Ｓ44は４Ｋ区の柱穴、Ｓ47は近世の建物129の柱穴出土である。

Ｓ41は磨製太型蛤刃石斧である。ほぼ完品だが、図示していない裏面に、使用によって生じたとみられる古い欠損が刃部から中央付近まで認められる。表面は風化して滑らかさを失っている。刃先は緩やかな弧を描き、背面も明瞭に形成され、丁寧に仕上げられた製品である。Ｓ42・43は石鏃である。いずれも無茎平基で、ほぼ二等辺三角形を呈している。主要剝離面は図の裏面になるが、周縁には丁寧な剝離がなされている。Ｓ43の剝離はやや粗い。Ｓ44は器種がはっきりしない。図の左辺には刃潰



第115図　大田茶屋遺跡出土弥生土器(1/4)



第116図　大田茶屋遺跡出土石器(3)(1/2)

しがなされ、下辺に刃部を作っているように観察されるため、スクレイパーではないかと考えられる。あまり風化していない。S45・S46は石包丁で、前者は未成品、後者は成品の欠損品である。S45は下辺で刃部を形成する細かい剝離かなされていて、研磨を加える直前の段階と思われる。S46は表裏ともに刃部まで研磨され、穿孔が2孔認められる。刃は外湾するとみられる。S47は川原石を薄く割り、周縁を剝離して円形に仕上げている。図上で×印になる方向の縁にやや大きな剝離が認められ、これを縄掛けのためのものとみて石錘ではないかと考えている。出土した遺構の時代からすると、つぶてかおはじきの可能性もある。（岡本寛）

3．小結

大田茶屋遺跡で検出された遺構・遺物の年代は前期中葉・後葉と中期中葉から後期前葉までの二時期に分かれる。このうち、前期については遺構は検出されず、遺物のみの出土であるが、縄文時代晩期からの継続が考えられ、小規模な農耕を伴った定住生活が営まれた可能性が高い。しばらくの空白期間を置いて、中期中葉から再び大田茶屋遺跡で集落が形成される。東地区と西地区を分かつ谷筋に開かれた水田を生産基盤とするもので、その後発展を続けていく。その過程を眺めていきたい。

大田大正開遺跡の3区から中期中葉前半の土器が集中して出土していることから、この谷筋で最初に形成された集落は、この地区を中心に存在したとみられる。これに続く中期中葉後半の竪穴住居である住居3は大田茶屋遺跡の3区に所在するが、大田大正開遺跡3区とは近接しているので、最初の集落の範囲内か、あるいは少し拡大したものかもしれない。

中期後葉に入って新しい展開がみられる。6区の住居4・5の存在からこれまでの集落が継続しているのは確かだが、あらたに谷筋の河道1の南にも集落が作られる。新しい集落は掘立柱建物を中心とし、竪穴住居の住居8が伴う。掘立柱建物の年代を確定するのはきわめて困難ではあるが、河道1から出土した土器の量や7区から9区、さらには大田障子遺跡の包含層から出土する弥生土器の存在を考慮すれば、削平されて消滅した住居がいくらかあったと仮定しても、検出された竪穴住居はあまりにも少なく、前述した掘立柱建物を弥生時代の遺構と考え、住居とせざるをえない。さらに、建物の重複関係や出土遺物から中期後葉の建物の存在も認めたい。墓12出土の土器片を根拠とすれば、この時期から集落に近接して墓地が営まれるようである。河道1の北側の集落には墓10～12が、南側の集落には、墓28が後期とすれば、墓13～27が伴うと考えられる。

後期前葉になっても、今までの二つの集落は住居9・10の存在から継続が確認されるが、さらに、西地区の東端の1区付近にも集落が形成される。やはり掘立柱建物が中心で、竪穴住居は1軒にすぎない。この集落の西端に配石土壙墓の墓1があって朱が検出されているが、東地区の南西隅で検出された墓28の木棺墓でも朱が認められた。墓28は東地区の集落に伴うと考えられることから、丁寧に埋葬された1基の墓が一つの集落に伴うという類似で注目される。また、東地区の集落で建物の規模が大きくなっていることも見逃せない。なお、住居8はその規格から後期前葉まで続くとみられる。

このように、大田茶屋遺跡周辺に形成された集落は、中期中葉では一つであったものが、後期前葉には三つにまで増加し、その内容にも変化がみられる。それは弥生社会の発展を示すものであろうが、その全体像をつかむためには、まずは丘陵の上方に位置する大田松山久保遺跡との関係を考える必要があり、さらには、宮川流域の盆地全体に視角を拡げなければならない。大田茶屋遺跡周辺の集落は後期中葉には消滅するが、これも発展の一過程とすべきであろうか。（岡本寛）

第３節　大田西奥田遺跡

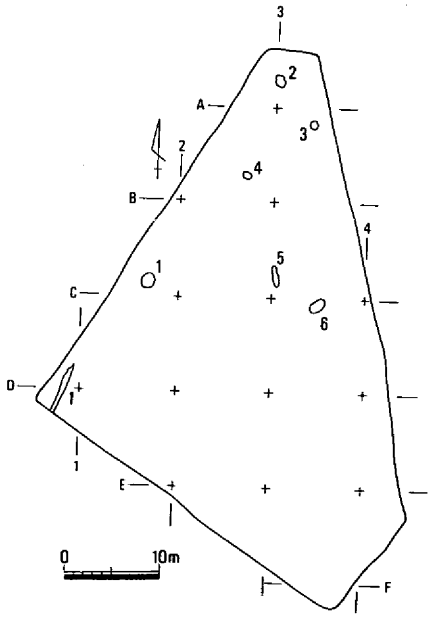
１．遺構配置

大田西奥田遺跡２区調査区は、海抜160ｍ前後の低丘陵上に位置する。調査区周辺は南に向かって高さを減じながら樹枝状に広がる尾根筋とそこに入り込む谷によって起伏のある地形を呈しており、調査区から津山盆地や東一宮の小盆地を望むことはできない。

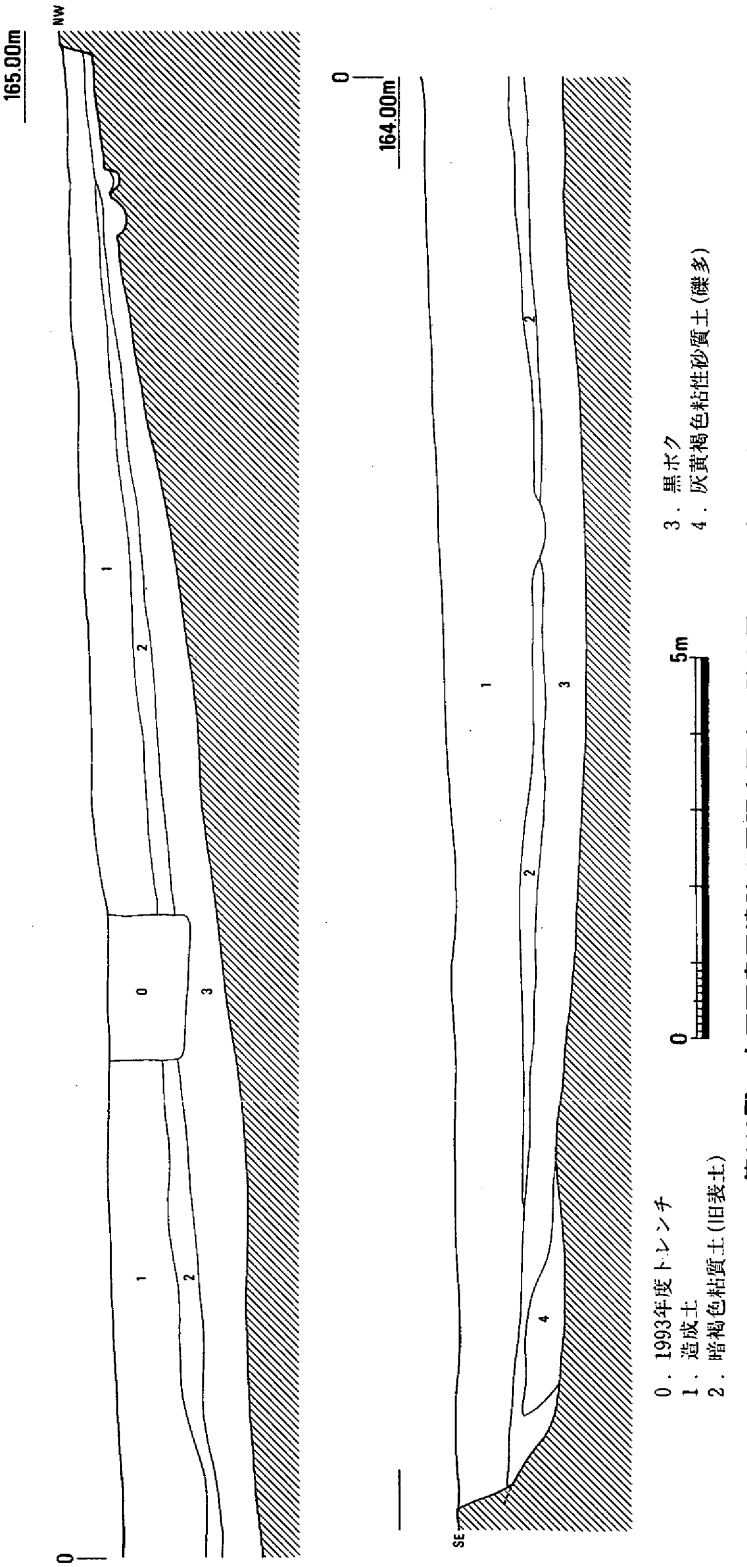
調査区は確認調査の成果をもとに、北から南西と南東に派生する尾根筋と、そこに挟まれた谷の肩口を囲む形で設定した。

調査区周辺は酪農試験場建設時の造成により、ほぼ全面的に削平あるいは盛土を受けている。

調査区内では、南東に伸びる尾根上と調査区北部の削平が著しく、



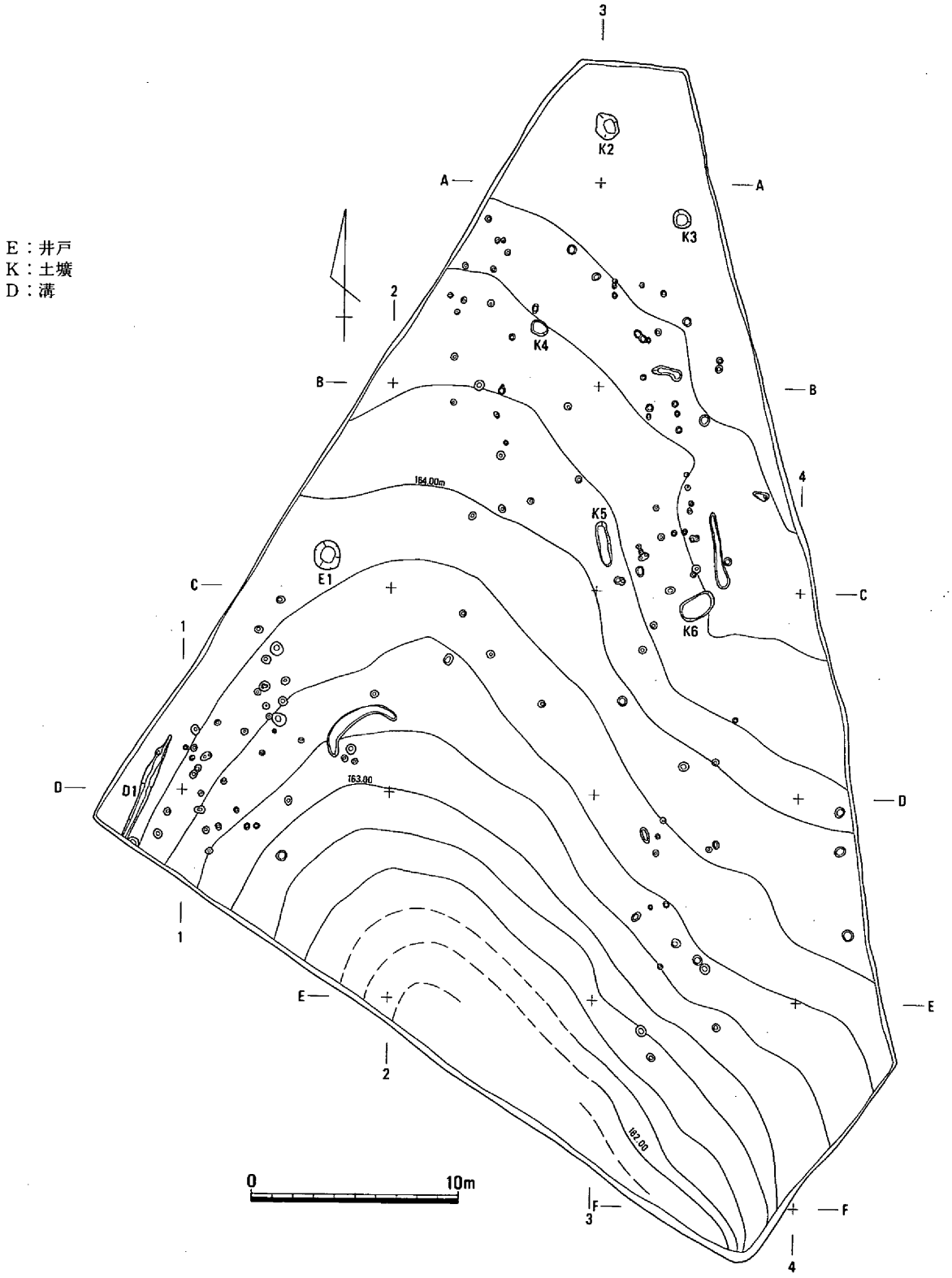
第117図　弥生時代主要遺構配置図(1/800)



第118図　大田西奥田遺跡２区調査区南西壁土層断面図(1/100)

等高線に乱れを生じている。逆に調査区南部の谷は全体的に造成土により盛土されており、造成土下には旧表土および黒ボク土の堆積が認められた（第118図）。

遺構検出は黒ボク層での検出が困難であるため、地山の黄褐色粘質土まで掘り下げて行った。遺構は主に調査区の北部から派生して南西および南東に伸びる尾根沿いに分布し、井戸１基、土壙５基、溝１条、柱穴136基を検出した。ただし南東に伸びる尾根上については削平を受けていることもあり



第119図　大田西奥田遺跡２区全遺構配置図(1/300)

本来より多くの遺構が存在していたものと考えられる（第117・119図）。遺物の多くは尾根に挟まれた谷に堆積した黒ボク土から出土している。　（佐藤）

２．遺構・遺物

井戸１（No ３）（第120図）

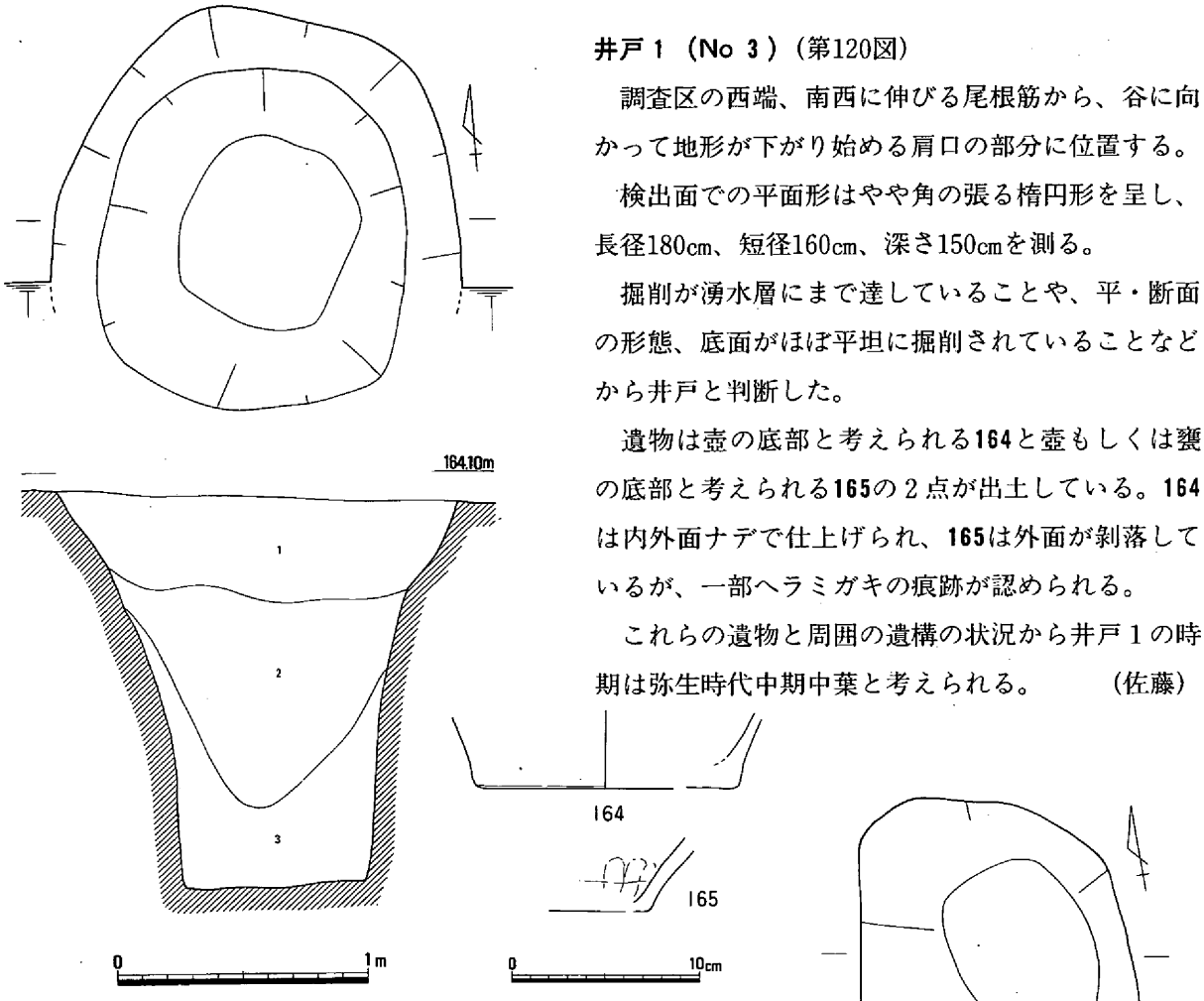
調査区の西端、南西に伸びる尾根筋から、谷に向かって地形が下がり始める肩口の部分に位置する。

検出面での平面形はやや角の張る楕円形を呈し、長径180cm、短径160cm、深さ150cmを測る。

掘削が湧水層にまで達していることや、平・断面の形態、底面がほぼ平坦に掘削されていることなどから井戸と判断した。

遺物は壺の底部と考えられる**164**と壺もしくは甕の底部と考えられる**165**の２点が出土している。**164**は内外面ナデで仕上げられ、**165**は外面が剥落しているが、一部ヘラミガキの痕跡が認められる。

これらの遺物と周囲の遺構の状況から井戸１の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）



１．暗灰褐色粘質土　　３．褐灰色粘質土
２．黒褐色粘質土

第120図　井戸１（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙１（No １）（第121図）

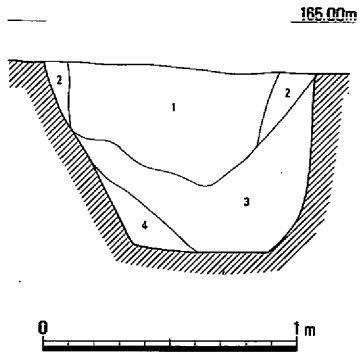
調査区の北端に位置する。上面を削平されており、本来の規模は不明である。検出面での平面形は不整形な楕円形を呈し、長径130cm、短径100cm、深さ70cmを測る。

出土遺物がないため、時期は断定できないが、周囲の遺構の状況から弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）

土壙２（No ２）（第122図）

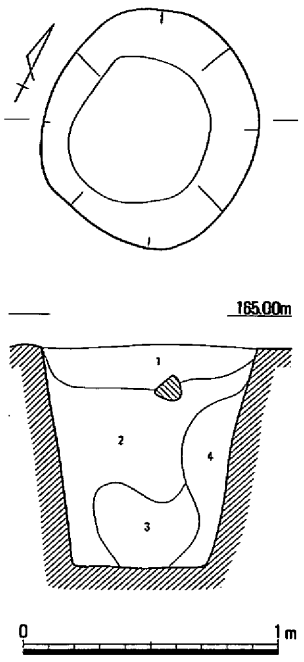
調査区の北端、土壙１の南西５ｍに位置する。上面を削平されており、本来の規模は不明である。検出面での平面形は楕円形を呈し、長径100cm、短径80cm、深さ90cmを測る。

掘削は湧水層まで達しており、底面も平坦に掘削されている



１．暗褐色粘性微砂
２．暗茶褐色粘性微砂
３．暗黄褐色粘性粗砂
４．黄褐色粘性粗砂

第121図　土壙１（1/30）



1．暗茶褐色粘性微砂
2．暗褐色粘性粗砂
3．黄色粘性粗砂斑暗褐色粘質砂
4．暗茶褐色粘性粗砂

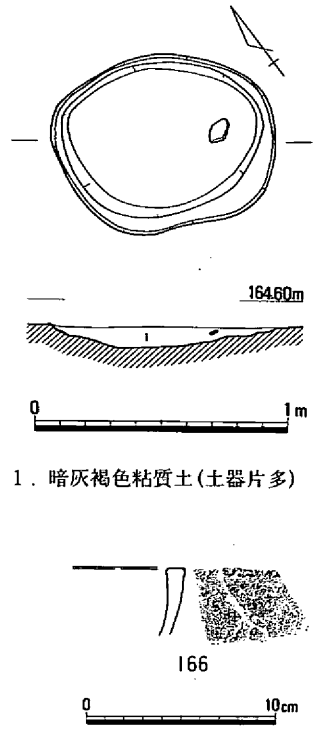
第122図　土壙2（1/30）

ので、井戸の可能性もある。

出土遺物がないため時期は断定できないが、周囲の遺構の状況から弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）

土壙3（No 5）（第123図）

調査区の北部、土壙2の南西9mに位置する。検出面での平面形は楕円形を呈し、長径90cm、短径70cm、深さ10cmを測る。埋土中には多くの土器片が含まれていたが、細片が多く、図化できたのは1点だけである。**166**は高杯の口縁部で、端部は若干肥厚し、外面には細かい刻目を施す。これらの遺物から土壙3の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）



1．暗灰褐色粘質土（土器片多）

第123図　土壙3（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙4（No 6）（第124・125図、図版5）

調査区のほぼ中央に位置する。検出面での平面形は東西に長い楕円形を呈し、長径220cm、短径60cm、深さ20cmを測る。底面はゆるい弧状をなし、北西方向に向かってやや深くなっている。

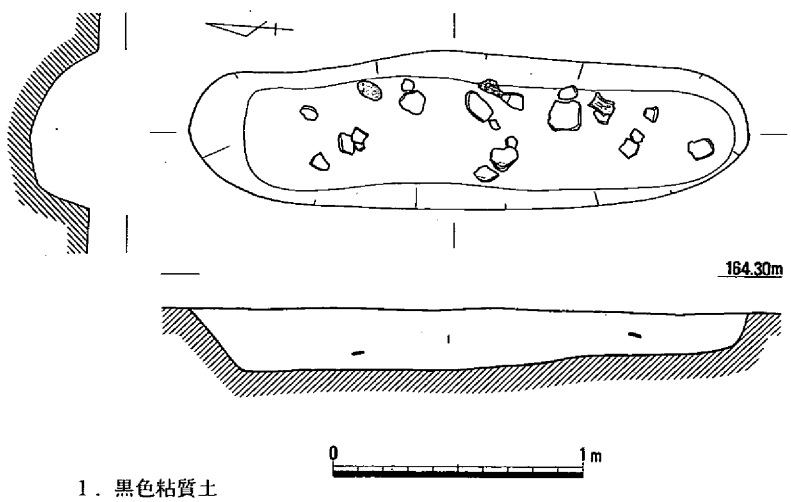
遺物は底面直上で出土したものは少なく、多くは埋土中から出土している。**167**は壺の口縁部で、外面に櫛描波状文、端部には細かな刻目を巡らす。口唇部にも櫛描波状文と円形浮文を施している。

168は口縁部を欠損する壺である。外面はハケの後、胴部以下に縦方向のヘラミガキを施し、内面はハケにより仕上げている。**169・170**は壺の肩部から胴部上半にかけての部分で、肩部には3本1組の櫛状工具による刺突文を巡らせている。

171～175は甕の口縁部である。すべて内外面ヨコナデにより仕上げている。

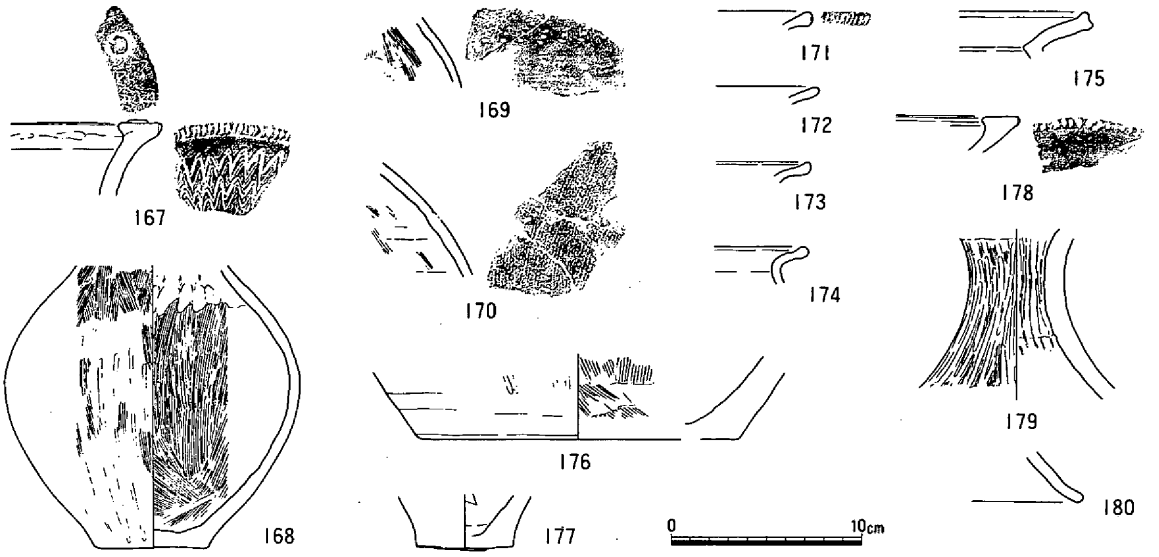
171は口唇部に刻目を施す。**175**は口唇部をやや上方につまみ上げている。

176・177は壺の底部である。**178～180**は高杯である。**178**は口縁部で、端部外面には細かな刻目が施される。



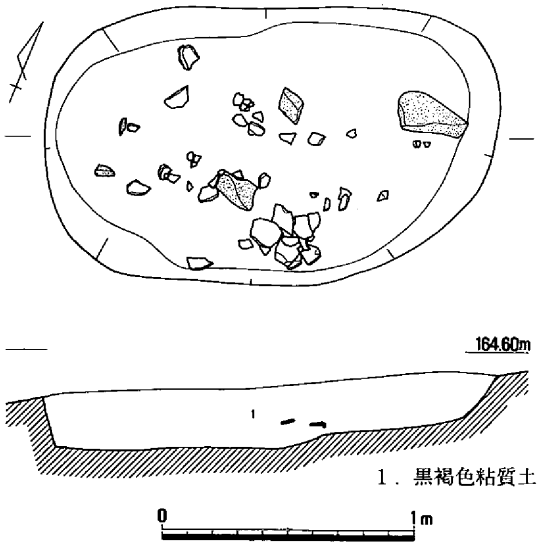
1．黒色粘質土

第124図　土壙4（1/30）



第125図　土壙４出土遺物(1/4)

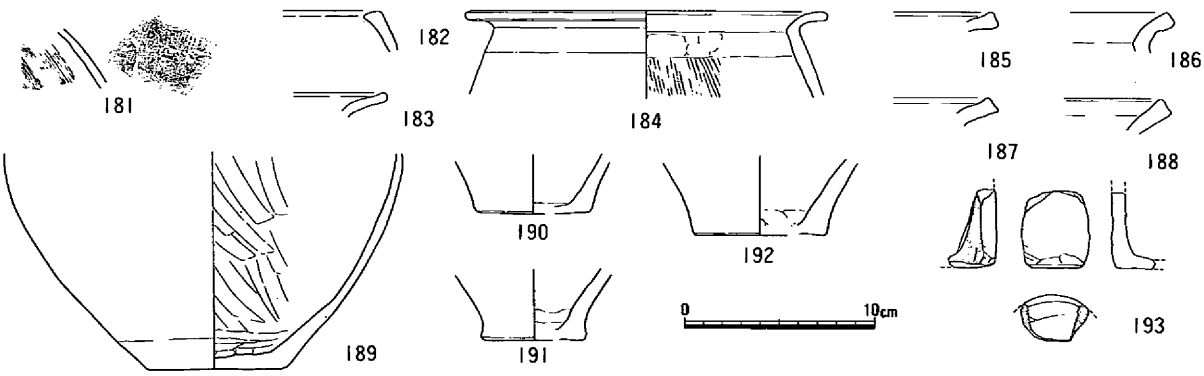
179は脚柱部で内面には絞り跡が顕著である。**180**は脚裾部で外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げられる。これらの遺物から、土壙４の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）



土壙５（No ４）（第126図）

調査区の中央やや西より、土壙４の南西５ｍに位置する。検出面での平面形は楕円形を呈し長径180cm、短径110cm、深さ25cmを測る。遺物は底面直上で出土したものは少なく、多くは埋土中から出土している。

181は壺の肩部で３本１組の櫛状工具による刺突文を巡らせている。**182**は無頸壺もしくは台付鉢の口縁部と考えられる。**183～188**は甕の口縁部である。すべて内外面ともヨコナデにより仕上げられ、口唇部は丸く収めるものと、四角く収めて上部を若干摘み上げたものとがある。



第126図　土壙５(1/30)・出土遺物(1/4)

189は壺の底部で、内面はハケメにより仕上げている。**190**～**192**は甕の底部である。**193**は小片のため断定はできないが、ミニチュア土器または土製品と考えられる。また、小型の筒形土器の底部である可能性も考えられる。この他、小片が出土しているが磨耗が激しく図化しえなかった。

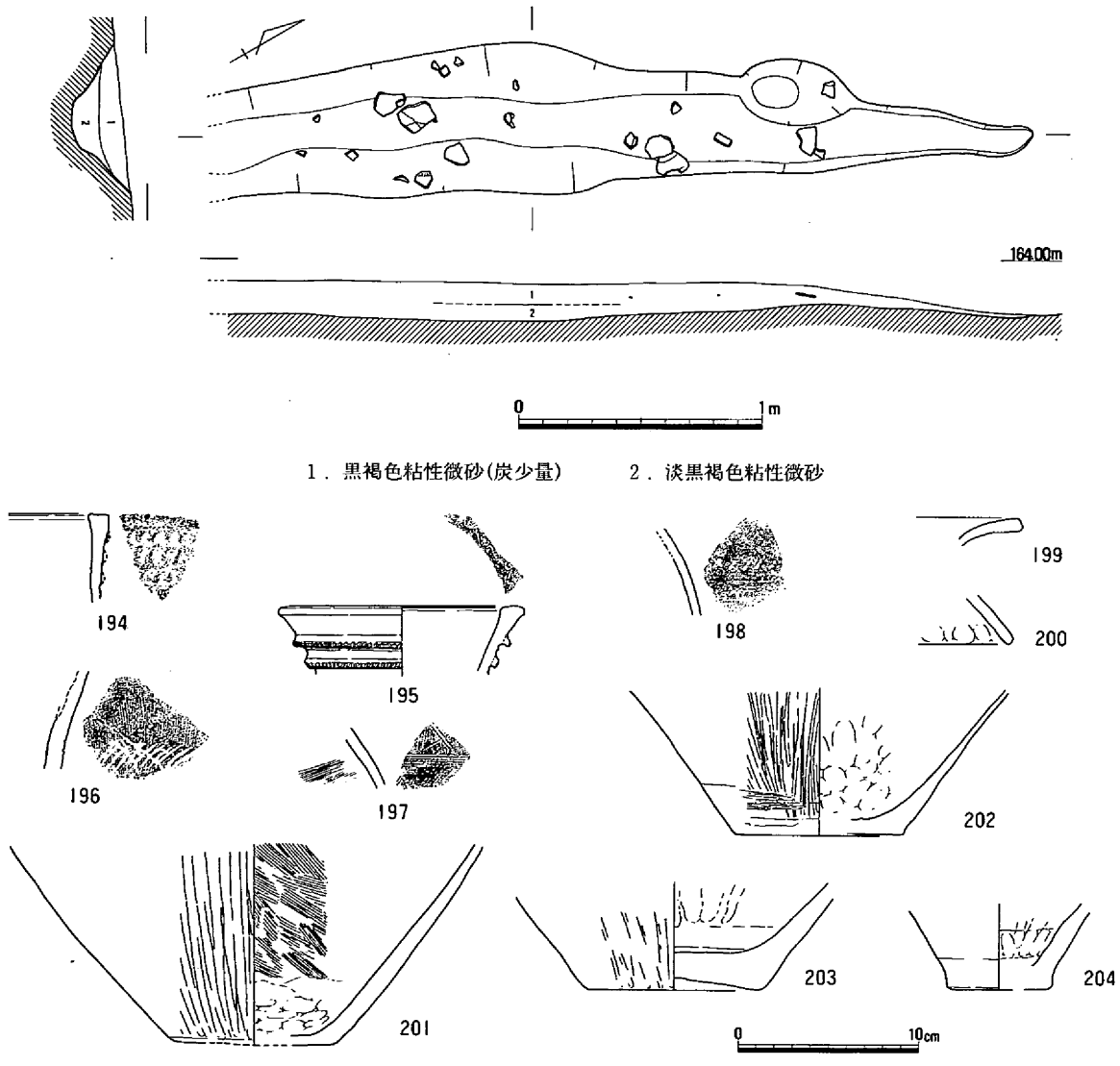
これらの遺物から土壙５の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。　（佐藤）

溝１（No ７）（第127図）

調査区の南西端に位置する。南西に伸びる尾根筋に平行して掘削され、調査区外へと続いていくため全体の規模は不明である。検出面からの規模は最大で幅60cm、深さ15cmを測り、南西に向かって幅と深さを増している。遺物は底面直上から出土したものは少なく、多くは埋土中から出土している。

194・195は壺の口縁部である。**194**は頸部からすぼまりながら、ほぼ垂直に立ち上がる形態の壺の口縁部で、外面には指頭圧痕文を施した３条の張り付け突帯を巡らすが、その後のナデにより突帯は削られており、爪跡らしき痕跡を残すのみとなっている。**195**は外面に刻目を施した突帯を２条巡らせ、口唇部はヨコナデにより水平に仕上げた後、櫛描波状文を施している。

196は壺の頸部である。外面にはハケの後、ヘラ状工具による刺突文を巡らせている。



第127図　溝１(1/30)・出土遺物(1/4)

197・198は壺の肩部である。**197**は外面をハケメで仕上げた後、ハケ状工具により直線文と斜格子文らしき文様を施しているが、小片のため全体の文様構成は不明である。**198**は外面をナデにより仕上げた後、ハケ状工具による刺突文を巡らせている。

199・200は高杯である。**199**は口縁部で、口唇部に向かって若干肥厚し、内外面ともヨコナデにより仕上げている。**200**は脚端部で内外面ともナデで仕上げられ、内面には押圧痕が明瞭に残る。

201～203は壺の底部である。いずれも外面はヘラミガキ、内面はハケもしくはナデによって仕上げている。**203**の底部は上げ底になっている。**204**は甕の底部と考えられる。

これらの遺物から溝１の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。（佐藤）

柱穴出土遺物（第128図）

調査区内では計136基の柱穴を検出しているが、住居跡または掘立柱建物としてまとめられるものはなかった。主に南西方向および南東方向に伸びる尾根沿いを中心に分布しており、埋土はほとんどが黒ボクである。これらの柱穴は径15～40cm、深さ10～30cmを測り、深さ・幅とも20cm前後のものが比較的多い。これらの柱穴のうち、25基から遺物が出土している。

205～207は壺の口縁部である。**205・206**は端部を若干肥厚し、口唇部にはヘラ状工具による刻目を全面に巡らせている。**207**は端部を上方に摘み上げ、口唇部の上端と下端に細かな刻目を施している。

208～210は壺の肩部である。いずれもハケあるいはナデの後、各種文様を施している。**208**は櫛状工具による刺突文の上部にヘラ状工具による弧状の線刻文らしき文様を施している。

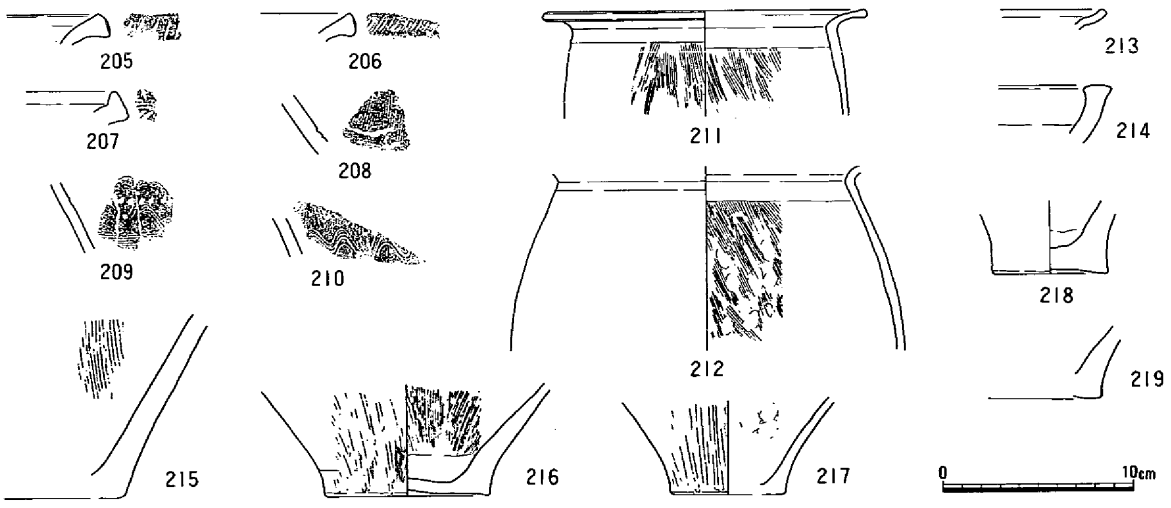
211～213は甕の口縁部から頸部である。口縁部はいずれも肥厚せず、ヨコナデにより仕上げている。**213**はつよいヨコナデにより、口縁端部上面に浅いくぼみを生じている。

214は高杯の口縁部である。杯部は椀状を呈し、口縁端部を拡張し平坦面を形成している。

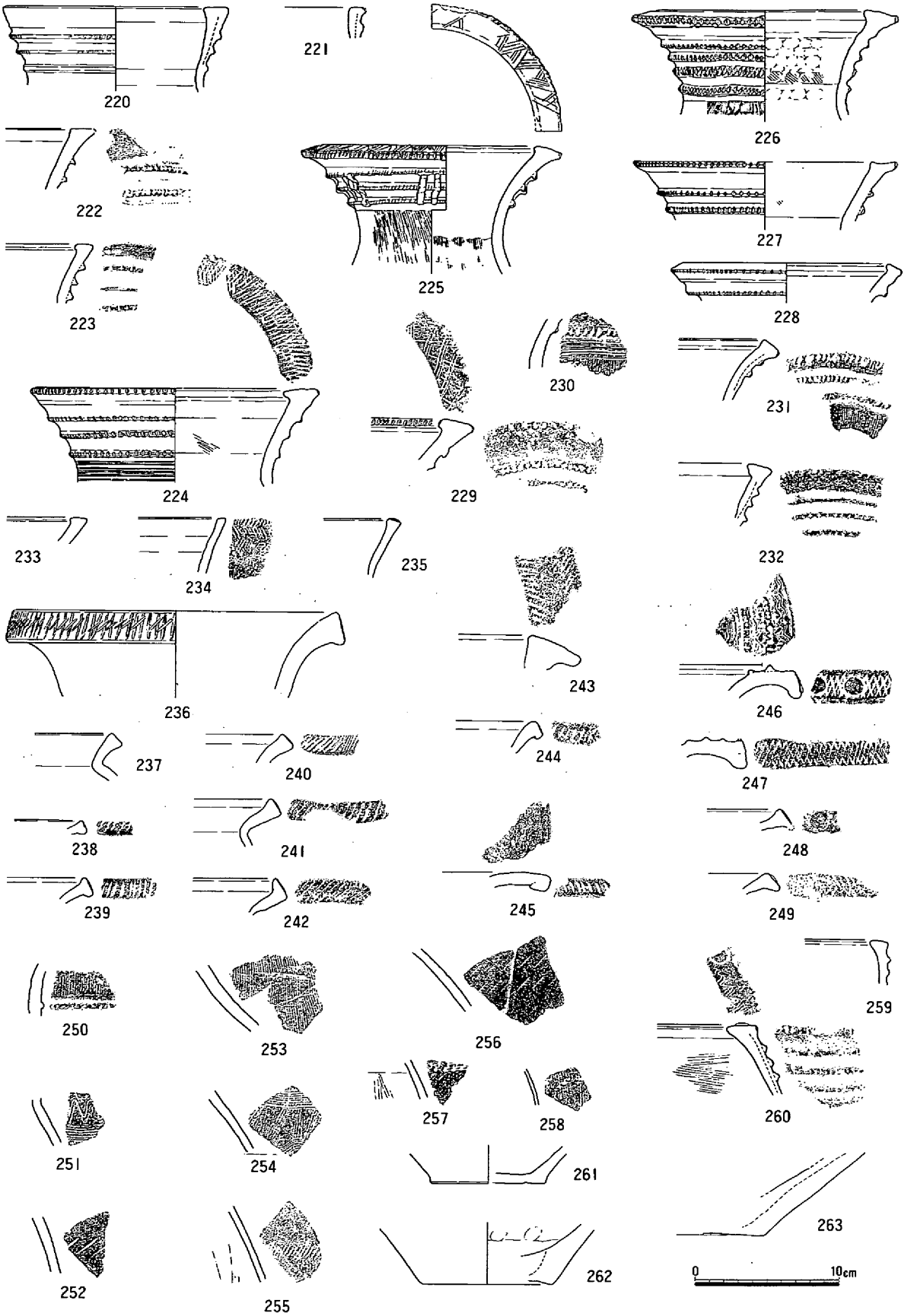
215・216は壺の底部である。**216**はやや上げ底気味である。**217～219**は甕の底部である。

この他、数点の土器片が柱穴内より出土しているが、いずれも小片で図化しえなかった。

柱穴から出土した遺物の時期はすべて弥生時代中期中葉と考えられる。また他の遺構の状況から、遺物を伴わない柱穴も大部分は中期中葉を中心とする時期に形成されたものと考えられる。（佐藤）



第128図　大田西奥田遺跡２区柱穴出土遺物(1/4)



第129図　大田西奥田遺跡2区包含層出土遺物(1)(1/4)

包含層出土遺物（第129～131図、図版14）

遺構に伴わない遺物は、土器を中心にコンテナにして８箱程出土している。主に北から南東および南西にのびる尾根に挟まれた浅い谷に面した斜面に堆積している旧表土の暗褐色粘質土および黒ボクから出土しているが、細片が多く図化し得るものは少なかった。

220～249は壺の口縁部で、その形態から５種類に分類することができる。

220～223はわずかに外反しつつ直線的に立ち上がり、口縁部外面に刻目を施した貼付突帯を２～３条巡らせる形態の壺である。口縁端部の内面あるいは外面を若干摘み出している。

224～232はゆるやかに外反しながら開き、口縁部外面に刻目を施した貼付突帯を２～４条巡らせる形態の壺である。口縁端部は内・外面を突帯状に摘み出し、刻目を施すものが多い。口唇部にヨコナデによる平坦面を形成し各種文様を施すものもある。**224**は口唇部に櫛状工具による刺突文を２列巡らせ、一部は綾杉文状になる。また、３条の貼付突帯の下には櫛描直線文を巡らせている。**225**は口唇部に櫛状工具による斜格子文を巡らせ、３条の貼付突帯上には２本１組の棒状浮文を推定で計８組施している。**229**は口唇部に３本１組の櫛状工具による斜格子文を巡らせ、内外面に摘み出した口縁端部には細かい刻目を施している。**230**は小片のため全体の文様構成は不明であるが、刻目を施した貼付突帯の下に櫛描直線文を巡らせている。**227**は外面に摘み出した口縁端部と外面に巡らせた貼付突帯上に沈線文を施し、その上面に刻目を施している。**232**の口唇部には櫛状工具による綾杉文状の文様がわずかに認められる。

233～235はわずかに外反しつつ直線的に立ち上がり、口縁部外面に貼付突帯を施さない形態の壺である。**234**は口縁端部外面に櫛状工具による刺突文を３列、綾杉文状に互い違いに巡らせている。**235**は表面が剥落して調整・文様とも不鮮明であるが、口唇部に円形浮文を施している。

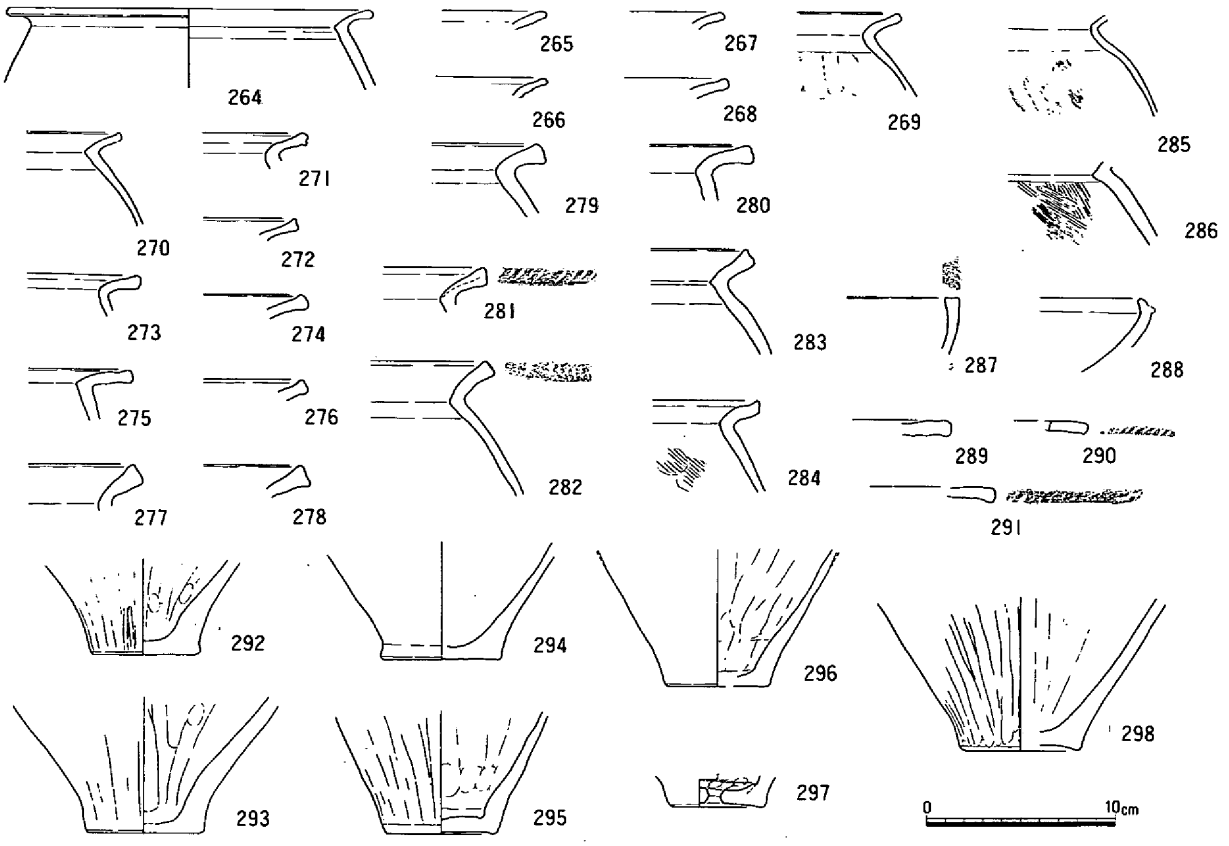
236～244は短頸で、口縁部が短く外反する形態の壺である。口縁端部は内面あるいは外面を摘み出し、口唇部はヨコナデにより平坦面を形成し、文様を巡らせるものが多い。**238**は口唇部に貝殻腹縁による刺突文を巡らせている。**240**は口唇部周辺がわずかに赤橙色を呈し、酸化鉄による赤彩が施されていた可能性がある。**243**は口唇部に櫛状工具による刺突文を２列、綾杉文状に巡らせている。また酸化鉄によると思われる赤彩が施されている。

245～249は長頸で、口縁部が頸部から大きく開く形態の壺である。口縁部を水平に仕上げ、上面に突帯や文様を施すものも多い。**245**は口縁端部を外側に折り返し、内面に櫛状工具による刺突文、口唇部に刻目を施している。**246**は口縁端部を外面に摘み出して拡張した口唇部に、櫛状工具の刺突による斜格子文と円形浮文を施している。また、大きく開いた口縁部の上面はナデにより平坦に仕上げ、２条の刻目を施した貼付突帯を挟んで、外側から順に櫛描波状文を２条、櫛描直線文を１条巡らしている。**247**は口縁端部を外面に摘み出して拡張した口唇部に櫛状工具による斜格子文を施している。また、大きく開いた口縁部の上面には貼付突帯を３条巡らせている。

250～258は壺の肩部である。外面は縦方向のハケ、内面はナデにより仕上げ、刺突文や櫛状工具による各種文様を施している。**257**は小片のため、全体の文様構成は不明だが、ハケ状工具による簾状文風の押し引き文を巡らせている。**258**は貝殻腹縁による刺突文を巡らせている。

259・260は鉢の口縁部と考えられるが、高杯の可能性もある。いずれも表面が剥落して、調整はよく分からないが、**259**はナデ、**260**はハケの後、ナデにより仕上げている。

261～263は壺の底部である。**261**は平底、**262・263**はわずかに上げ底となっている。



第130図　大田西奥田遺跡２区包含層出土遺物(2)(1/4)

264～286は甕の口縁部から肩部である。口縁部は「く」字状を呈し、すべてヨコナデにより仕上げられる。口縁端部内面が強いヨコナデによって、わずかにくぼむものもある。口唇部には丸く収めるもの、四角く面を形成するもの、面を形成し、さらに刻目を施すものなどがある。

287～291は高杯の口縁部で、内・外面ともヘラミガキあるいはナデによって仕上げられる。口唇部にヨコナデによる面を形成した後、刻目を施すものもある。**290**には焼成前の穿孔が認められる。

292～298は甕の底部である。底部は平底のものが多いが、上げ底のものも若干認められる。外面はヘラミガキ、内面は強いナデにより仕上げられている。**297**は上げ底の底部中央に径５㎜程の穴が穿たれている。これは焼成前に先端の尖った工具を用いて、内・外面から回転運動によって穿孔したものである。また底部外面は火熱を受け、赤色を呈している。

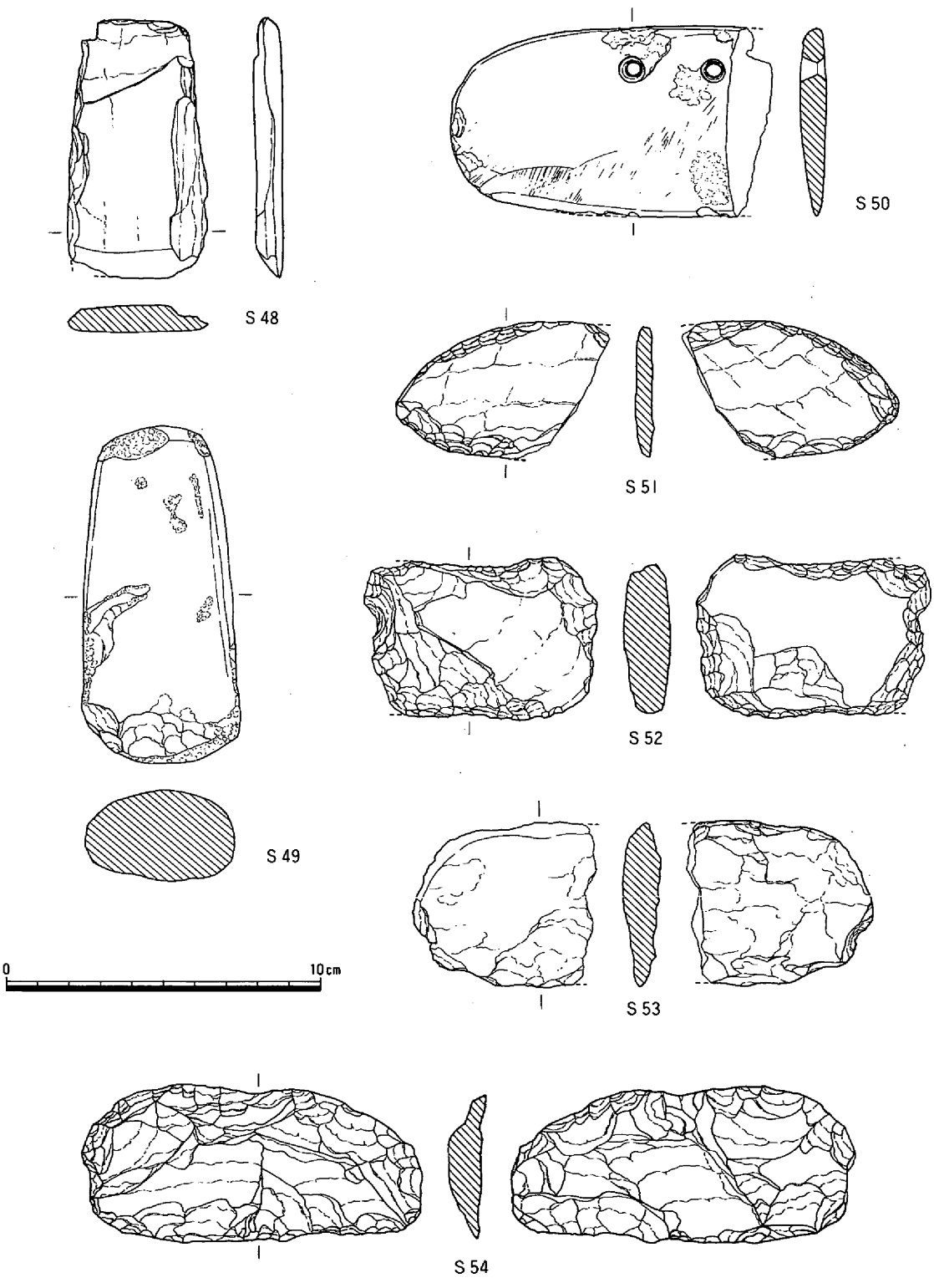
Ｓ48は扁平片刃石斧である。完品で最大長82.0㎜、基端幅34.0㎜、刃部幅40.0㎜、重さ56.7ｇを測り、石材はサヌカイトである。打製により全体を形作った後、敲打により基端・両側縁を整え、刃部を研磨して仕上げている。刃部の使用痕や着柄時の紐痕跡は認められなかった。

Ｓ49は敲き石である。最大長106.5㎜、最大幅50.0㎜、最大厚29.0㎜、重さ242.4ｇを測り、石材は流紋岩である。断面は角の張る楕円形を呈し、全面よく研磨されている。敲打痕は敲打面から側面の下1／3にかけてと、基端に一部認められる。伐採斧を転用している可能性もある。

Ｓ50は磨製石包丁である。1／3を欠損するため本来の長さと重さは不明であるが、最大幅60.0㎜、最大厚8.0㎜を測り、石材は頁岩である。全面を研磨し、穿孔は２孔とも両面から行われている。

Ｓ51～Ｓ53は石包丁の製作中の欠損品で、**Ｓ52**が穿孔段階、その他は敲打段階の欠損品と考えられ

る。石材はＳ51が流紋岩、Ｓ52・Ｓ53が熔結凝灰岩である。Ｓ52は両面とも一部研磨されているが、石包丁としてはやや厚みがあることや石材も特殊であることから、石包丁製作時の欠損品を石錘として再利用している可能性もある。Ｓ53は打製石鍬の基部の可能性もある。Ｓ54は石包丁の未成品で、敲打段階のものと考えられる。石材は流紋岩である。　（佐藤）



第131図　大田西奥田遺跡２区包含層出土遺物(3)(1/2)

３．小結

以上、大田西奥田遺跡２区調査区で検出された弥生時代の遺構、遺物について概要を述べた。この調査区は本報告書記載の他遺跡から距離が離れていることや、時期的にもやや古い遺構、遺物が検出されていることから、ここで若干の検討とまとめを行う。

遺構は調査区中央の浅い谷を挟んで、北から南東と南西に伸びる尾根上を中心に分布している。調査区内では特に明確な集落の痕跡は認められなかったが、谷の縁辺に沿うような形で井戸あるいは井戸の可能性のある土壙が点在し、現在でも１ｍほど掘り下げれば湧水層に達することから、調査区内は集落縁辺の水場として利用されていた可能性が考えられる。

また、大田西奥田遺跡の立地する丘陵の尾根筋や緩斜面には別節で報告する大田茶屋遺跡や大田松山久保遺跡、大田大正開遺跡の他、沼遺跡、紫保井遺跡、大田十二社遺跡など中期から後期にかけての集落が点在していることから、調査区付近にも当該期の集落が存在しているものと思われる。

遺物のうち土器について、その多くは調査区中央の浅い谷に面した斜面に堆積した包含層から出土したもので、ある程度の時間幅をもつ資料であるが、現在までの土器編年に照らし合わせた場合、ほぼ中期中葉古～中段階に限定できる資料と考えられる。その特徴は下記の通りである。

壺は口縁部の形態からＡ：わずかに外反しつつ直線的に立ち上がり、口縁部外面には刻目を施した貼付突帯を２～３条巡らせる（**194・220～223**）、Ｂ：ゆるやかに外反しながら開き、口縁部外面には刻目を施した貼付突帯を２～４条巡らせる（**167・195・224～232**）、Ｃ：わずかに外反しつつ直線的に立ち上がり、口縁部外面に貼付突帯を施さない（**196・233～235**）、Ｄ：短頸で、口縁部が短く外反する（**205～207・236～244**）、Ｅ：長頸で、口縁部が頸部から大きく開く（**245～249**）の５種に分類することができる。口唇部には刺突文、斜格子文、刻目文が多用され、頸部から肩部には櫛描直線文・波状文、刺突文が巡らされる。凹線文は認められない。

甕は口縁部の断面形が「く」の字状を呈し、内外面ともヨコナデにより仕上げられる。口縁端部内面が強いヨコナデによってわずかにくぼむものもある。口唇部を丸く収めるもの、面を形成するもの、面を形成しさらに刻目を施すものがある。胴部から底部は外面上半がナデまたはハケ、下半がヘラミガキ、内面がハケまたはナデにより仕上げられる。文様はほとんどなく、内面ヘラケズリ技法は認められない。

高杯は杯部と口縁部の形態からＡ：椀状の杯部をもつ（**166・178・214・287・288**）、Ｂ：椀状の杯部に水平な口縁部をもつ（**289～291**）の２種に分類することができる。

同時期の資料として津山市内では津山市沼Ｅ遺跡１号住居址・７号長方形竪穴住居状遺構出土土器（注２）や美作国府ＳＤ606・Ｔ６下層・Ｔ９下層出土土器（注３）、野村高尾遺跡段状遺構１出土土器（注４）などがある。

岡山県南部との編年との関係では高橋編年Ⅳ－ａ期（注５）、備前Ⅲ－１様式、備中Ⅲ－１様式（注６）にほぼ併行するものと考えられる。（佐藤）

第４節　大田松山久保遺跡

１．遺構配置

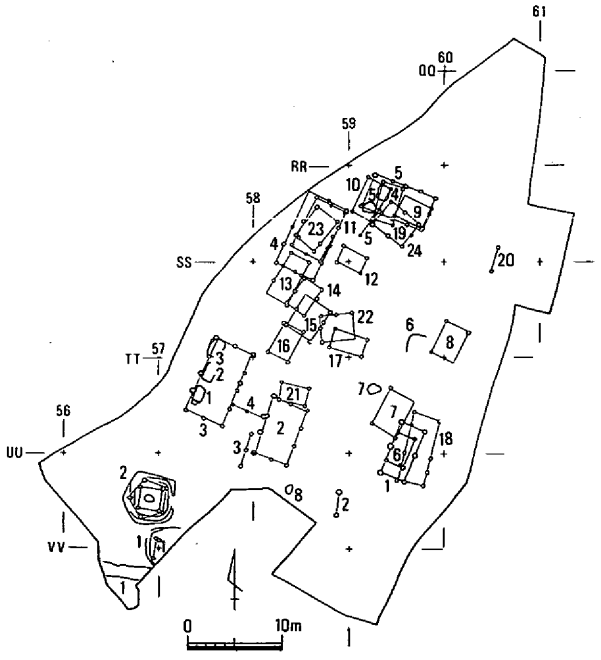
大田松山久保遺跡は、南北方向に延びる低平な尾根の頂部に立地する。遺構検出面上の地形は、標高約156mを測る中央部を最高点とし、そこから四方に緩傾斜をもって下がる。遺構面は１面のみで、厚さ１ｍ未満の造成土層を除去した時点で検出されたが、部分的には旧表土の黒ボク層が残存しており、その箇所では黒ボク層下で遺構が現れた。なお、調査区内各所（特に東半部）に酪農試験場建設時のものと思われる撹乱坑が多数あり、遺構の一部が損壊を受けている。

検出された遺構は、竪穴住居２軒・掘立柱建物24棟・柱穴列５列・土壙８基・溝１条と柱穴多数で、その多くは調査区中央寄りに分布し、周辺部では希薄になる。土壙や一部の建物を除くと出土遺物は少ないが、時期的にはいずれも弥生時代中期後葉～後期前葉の範囲に収まる。遺物のない遺構についても、その形状、他遺構との位置関係や埋土の質から判断してほぼ同時期のものと考えた。

まず、遺構の中でも多数を占める掘立柱建物に着目すると、その大部分は調査区中央部を北・東・西の三方から囲繞するような配置で検出されている。調査区内を北北東―南南西に尾根筋が走るためか、建物の多くも尾根方向に平行ないしは直交する主軸を有し、特に大形のものにその傾向が顕著にみられる。そのため棟方向を手がかりに建物配置の変遷を読み取ることは困難だが、基本的には中央部に空白地を残してその周囲に建物を置くという形式が踏襲されていたと考えられる。第二の特徴としては、中期後葉～後期前葉という比較的短期間に、同一の場所でかなり頻繁に建て替えを繰り返した結果、建物間の重複が著しい点が挙げられる。この他に、単独で存在する柱穴の中にも、本来は建物を構成していたものが含まれている可能性が高い。

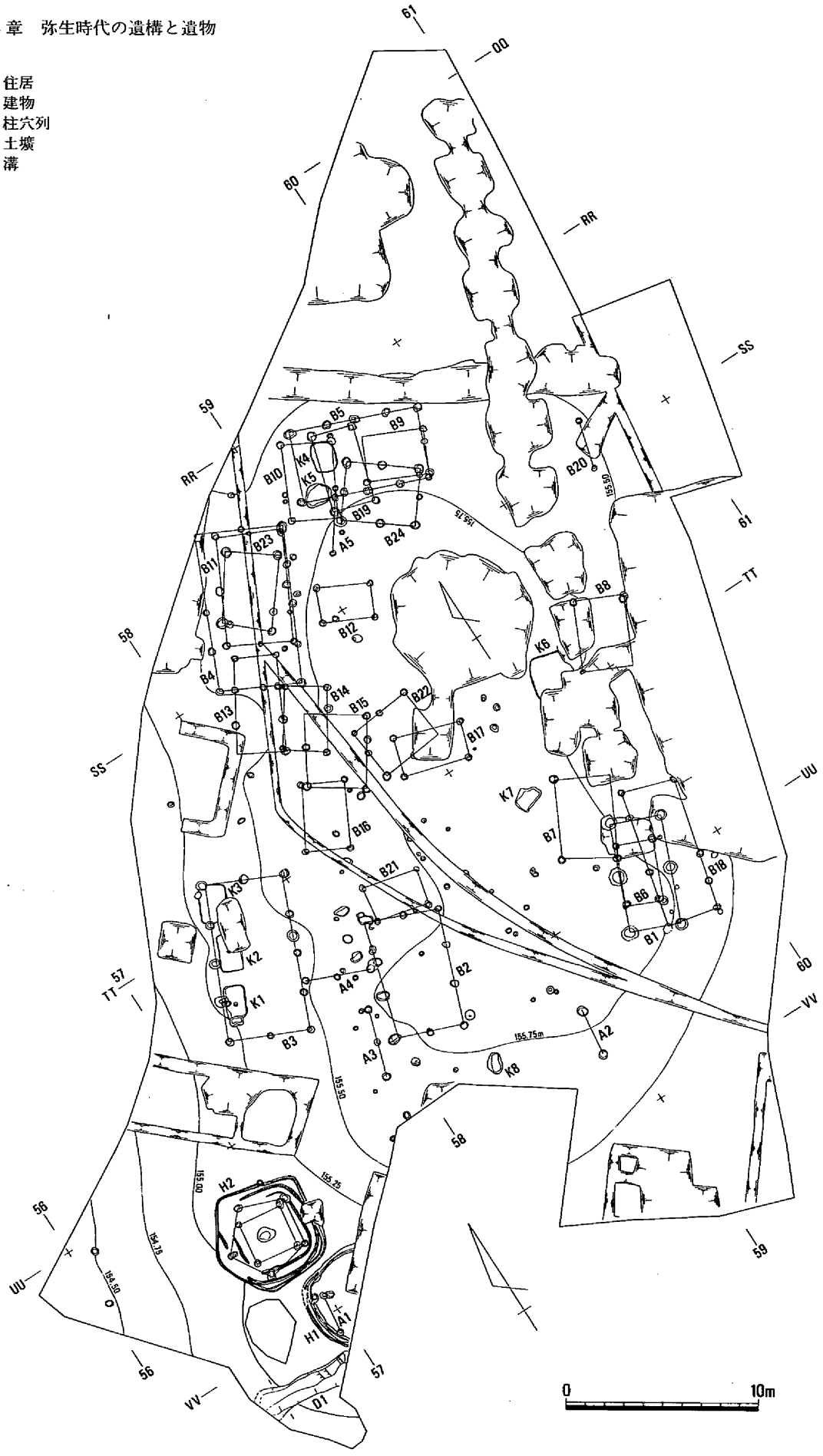
竪穴住居２軒は、調査区の南西隅で建物群からやや離れて検出された。調査区外にはさらに少数の住居が存在した可能性もあるが、後世の造成・削平により現存しないと考えられる。時期は建物群と併行しており、竪穴住居と建物群とが截然と分離していた様子が看取される。また住居数に比べて建物の比率が高いことも注目され、同様の傾向は、大田茶屋遺跡や大田大正開遺跡でも認められた。

なお遺構の分布範囲についてであるが、確認調査時の知見や周囲の地形を考慮すると、調査区外への大幅な広がりは考えにくく、削平分を除けば今回の調査によって当該時期の小規模集落のほぼ全体を把みえたと言えよう。　　（岡本泰）



第132図　弥生時代主要遺構配置図(1/800)

Ｈ：住居
Ｂ：建物
Ａ：柱穴列
Ｋ：土壙
Ｄ：溝



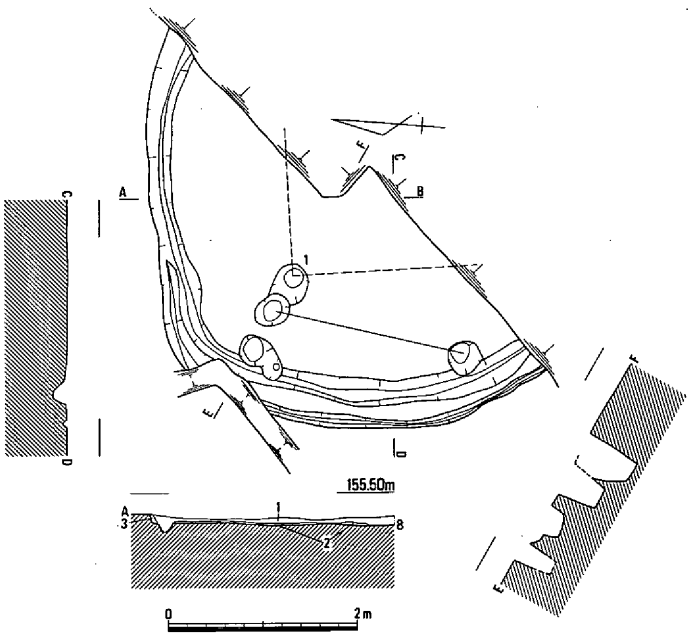
第133図　大田松山久保遺跡全遺構配置図(1/300)

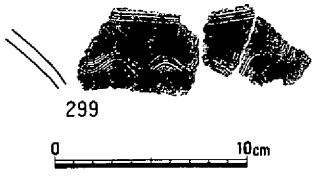
２．遺構・遺物

住居１（No37）（第134図、図版３）

調査区の南西部、56UU～57VV区に位置する、隅丸方形と思われる竪穴住居である。南東部を現代の貯水槽の掘り方によって破壊され、北西側だけの検出に留まるが、北側と西側の壁体溝が攪乱の手前で幾分屈曲を始めており、これを基にして一辺4.5m程度の規模を想定しておきたい。壁面は削平を受けてほとんど残存せず、もっとも残りのよい北東部では床面までの深さ30cmを測る。床面上には部分的に厚さ２～４cmの黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土が残存し、貼り床と考えられる。主柱穴は本来４基存在したと思われるが、北西側の１基のみが検出された。柱穴の形状は長径50cm、短径35cm程度の楕円形で、深さは58cmを測り、柱痕等は特に認められなかった。なおこの柱穴は後述する柱穴列１に切られている。壁体溝は北壁側では５～20cmの間隔をおいて二重に巡っているが、これが住居の拡張等によるものか否かは現状では明確ではない。床面からの深さは内側の溝が最大で12cm、外側のものが４cm程度を測る。

出土遺物は小片ばかりで、量も少ない。図示した**299**は埋土中から出土した壺形土器の肩部破片で、外面にはタテハケ調整ののち、櫛描きによる波状文と直線文を巡らし、内面は指による押圧の上にナデを加える。この土器により、住居の時期は弥生時代中期後葉に比定される。（岡本泰）





１．黒色粘質土
２．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土(貼り床？)
３．暗黄灰褐色粘質土

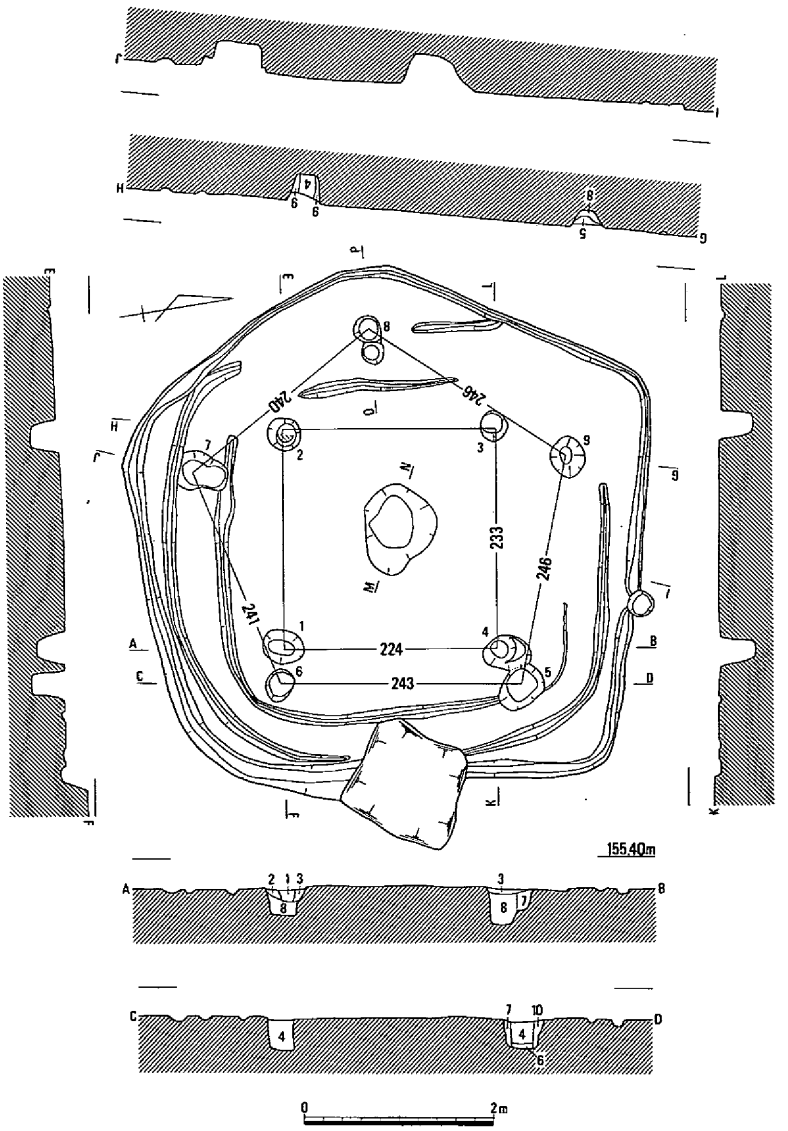
第134図　住居１(1/80)・出土遺物(1/4)

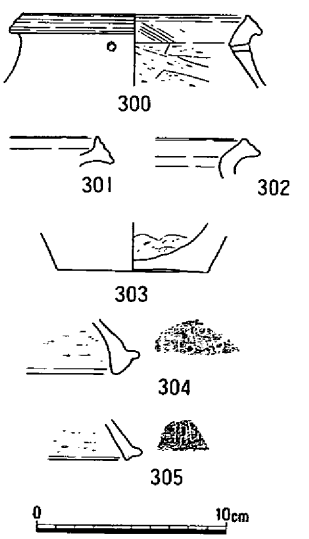
住居２（No36）（第135図、図版３）

56・57UU区で、住居１の北側に隣接して検出された竪穴住居である。削平によって壁面はほぼ完全に失われていたが、中央穴と主柱穴、壁体溝が遺存していた。床面は地形に影響されて、わずかに西方へと傾斜する。壁体溝は三重に巡り、内側の２条は平面隅丸方形、外側の１条が五角形を呈する。それに対して主柱穴は内側に１～４の４基、外側に５～９の５基と二重に巡っている。以上の所見から、２回の建て替えとそれに伴う形態の変化のあったことが知られ、内側から順に住居２ａ・ｂ・ｃと呼んで説明したい。おのおのの先後関係は、柱穴や壁体溝の切り合い関係の観察によりａ→ｂ→ｃと考えられる。

住居２ａ・ｂは中央穴と主柱穴４基、および壁体溝１条ずつで構成される方形の住居である。ｂはａの中央穴と柱穴を継承し、壁面を50～60cmほど拡張して壁体溝を掘り直したものである。両者の規模については、残存する壁体溝上での計測ではあるが、検出面でａが一辺370cm前後、ｂが450cm前後の隅丸方形となる。柱穴は円形～楕円形で長径34～50cm、深さ30～35cmを測り、南西の柱穴２には径16cmの柱痕が残っていた。中央穴はいびつな楕円形で、長径98cm、短径78cmを測り、深さは最大34cmと柱穴とほぼ同じであった。壁面には凹凸があり、底面中央部にも窪みが認められる。この中央穴は住居２ｃにも引き継がれる。壁体溝は一部が削平によって途切れるが、深さは２～４cmを測る。

２ｃは中央穴と主柱穴５基、壁体溝１条からなる五角形の住居である。ａ・ｂ同様に削平が激しいが、東辺の一部で壁が残っており、そこでは検出面からの深さ29cmを測る。柱穴は長径30～53cmの円形～楕円形、深さは22～32cmで２ａ・ｂに比べてばらつきが大きい。２基の柱穴で重複が認められ、建て替えの行われた可能性がある。北東の柱穴５には径24cmの柱痕が遺存していた。柱間距離は240～246cmと大差なく、ほぼ均整な五角形の配置となっている。壁体溝はやや不整な五角形に巡り、各辺の長さは約290～410cm、深さは２～８cmである。





1．黄褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．暗褐灰色粘質土
4．黒褐灰色粘質土
5．黒灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
7．黄灰色粘質土
8．暗黄灰褐色粘質土
9．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
10．灰黄褐色粘質土(地山？)

第135図　住居２(1/80)・出土遺物(1/4)

出土遺物は少ないが、７点を図示した。**301・303**が中央穴、他は柱穴や壁体溝からの出土である。**300・302**は甕形土器の口縁部で、端面に２条の凹線が巡る。**300**は口縁上端が若干上方につまみ上げられ、口縁直下には外→内への穿孔が１カ所認められる。内面はヨコ方向にヘラケズリされる。**301**は壺形土器の口縁部小片で、端面に３条の凹線を巡らす。**303**は甕の底部であろう。**304・305**は高杯形土器の脚部で、外面はナデ、内面はヘラケズリで調整する。両者とも外面はヘラ描きによる縦方向の沈線で飾られ、**305**の場合は４条で１単位をなす。**304**には円形の刺突文も併せて施される。

住居２の時期は、以上の出土遺物により弥生時代後期前葉に位置づけられる。遺物の少なさもあり、ａ～ｃ間に明確な時期差を見いだすことはできない。　（岡本泰）

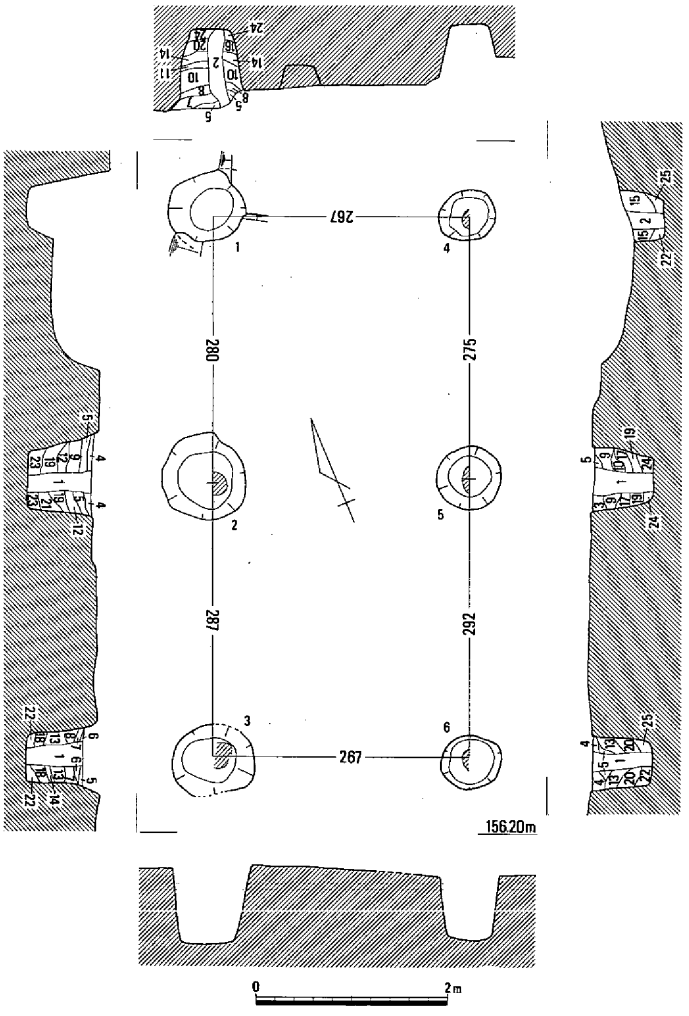
建物１（No １）

（第136図、図版４）

59TT・UU区で検出された２×１間の掘立柱建物で、桁行567cm、梁間287cm、面積16.3㎡、棟方向はN－22.5°－Eである。建物６・７・18と重複するが柱穴の切り合いはない。柱穴は円形で、規模は他の建物に比べて大きく、最大で直径93cm、深さ86cmを測る。東側の柱穴は削平のため検出面上では小振りに見える。柱穴底面は平坦で、底面の標高は155.0～1mで大差ない。全柱穴で柱痕が確認され、その径は21～29cmに及ぶ。柱穴の埋土は黄褐色土・褐灰色土・暗灰色土などが数～10数cmごとの互層をなし、版築状に土を詰め込んで柱を固定した様子が窺えた。

この建物は面積の割に柱穴がかなり大き目で、柱痕も太く、特異な印象を受ける。倉庫とすれば他の建物に比べてより大重量に耐ええたであろう。

時期については、土器小片が微量出土したに過ぎないため判断しがたいが、位置関係や埋土の特徴も考慮して弥生時代後期前葉としておく。　（岡本泰）



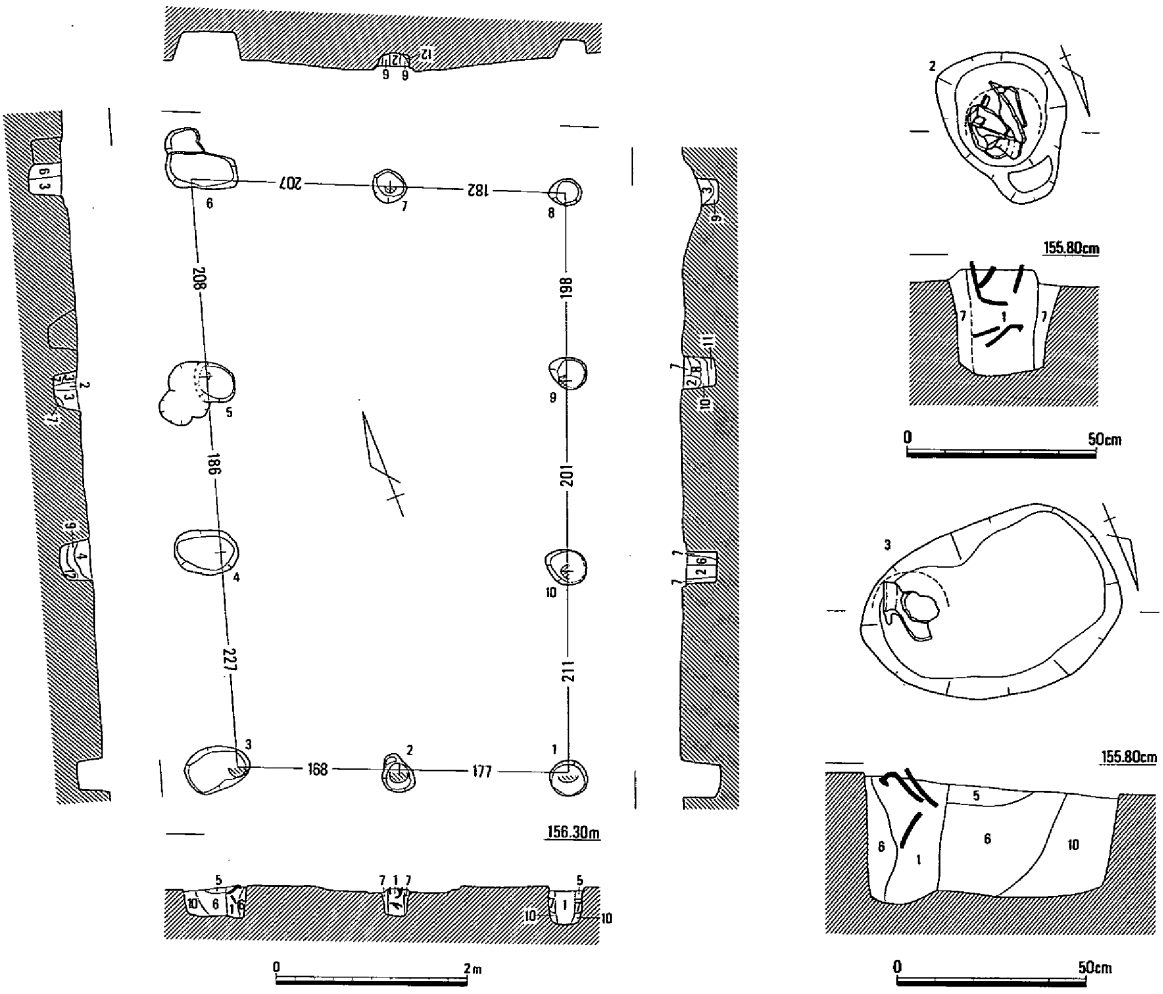
1．暗黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
2．暗黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．暗灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
6．暗褐灰色粘質土斑赤黄褐色粘質土
7．黄褐灰色粘質土斑黒褐灰色粘質土
8．暗褐灰色粘質土斑灰黄褐色粘質土
9．暗黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土
10．褐灰色粘質土斑暗褐灰色粘質土
11．褐灰色粘質土斑明黄褐色粘質土
12．暗褐灰色粘質土斑赤黄褐色粘質土
13．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
14．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土
15．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
16．暗黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
17．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
18．黄赤褐色粘質土
19．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
20．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
21．黒灰褐色粘質土
22．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
23．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
24．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土
25．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土

第136図　建物１（1/80）

建物２（No ５）（第137・138図、図版４・15）

57TT～58UU区にまたがって検出された３×２間の掘立柱建物で、北辺は建物21と一部重複する。桁行610cm、梁間389cm、面積22.6㎡、棟方向はＮ－18°－Ｅを測る。北側の梁間が南より長く、全体の形状はやや北に開いた台形ぎみとなる。柱穴は、東側桁行と梁間中央のが径35～40cmの円形を呈するのに対して、西側桁行のものは短径35～47cm、長径69～74cmの楕円形と対照的であった。この相違が当初からのものなのか、西桁行で改築に伴って柱穴の掘り直しが行われた結果なのか、判断しがたい。柱穴の深さは最深で40cmを測る。底面の標高は東西桁行が155.4～5mで、梁間中央のものは155.5～6mとやや浅い。梁間・東側桁行の柱穴には柱痕が残存しており、径は９～21cmである。南西隅の柱穴３では、柱痕直下の部分が若干窪んでいた。

南側梁間の柱穴２・３では、柱痕内から大形の土器片が意図的に埋納された状態で出土した。断面観察により、まず柱を抜いた穴を黒色粘質土で途中まで埋め、その後は土器片を挟み込みながら完全に埋め戻した過程を確認できた。建物の廃絶に伴う祭祀行為が実施されたと考えられ、同様の例は建物４にもみられる。なお両柱穴の土器片は互いに接合し、１個体の甕に復元された。

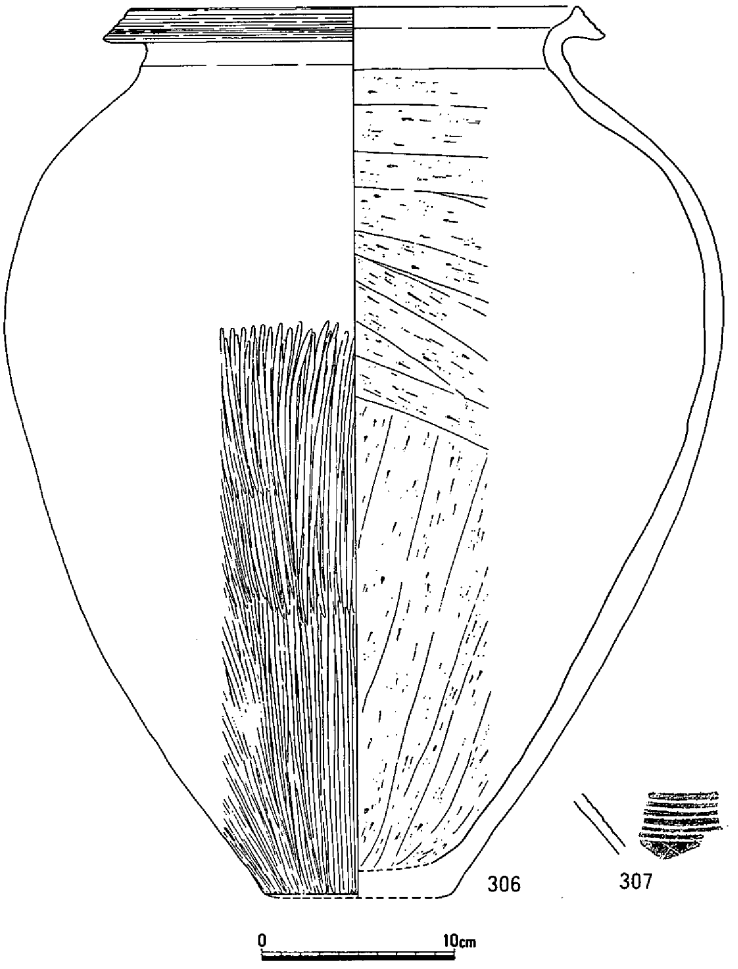


１．黒色粘質土
２．暗褐灰色粘質土
３．黒褐灰色粘質土
４．灰黄褐色粘質土
５．暗灰色粘質土
６．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
７．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
８．黄褐色粘質土斑淡褐灰色粘質土
９．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
10．黒灰色粘質土
11．褐灰色粘質土
12．灰褐色粘質土

第137図　建物２（1/80）・柱穴遺物出土状態（1/20）

出土遺物を第138図に示す。**306**が柱穴２・３から出土した甕形土器で、残存率は１／３程度であり、底部はほとんど残存しない。復元口径は232㎜、残存器高は468㎜を測る。外面は、口縁部から胴部上端までがヨコナデ、それ以下は縦の方向のヘラミガキによって調整され、胴部下半には黒斑が認められる。内面上半は横の方向、下半は縦の方向に、口縁直下まで粗くヘラケズリされる。口縁端面には４条の凹線が巡っている。**307**は柱穴２から出土した壺形土器の肩部片で、６～７条の沈線文が施される。その下に見える右下がりの線刻は斜格子文の一部と思われる。また内面には煤が付着している。

以上の出土土器からみて、建物２の時期は弥生時代後期前葉に比定されよう。　（岡本泰）



第138図　建物２出土遺物(1/4)

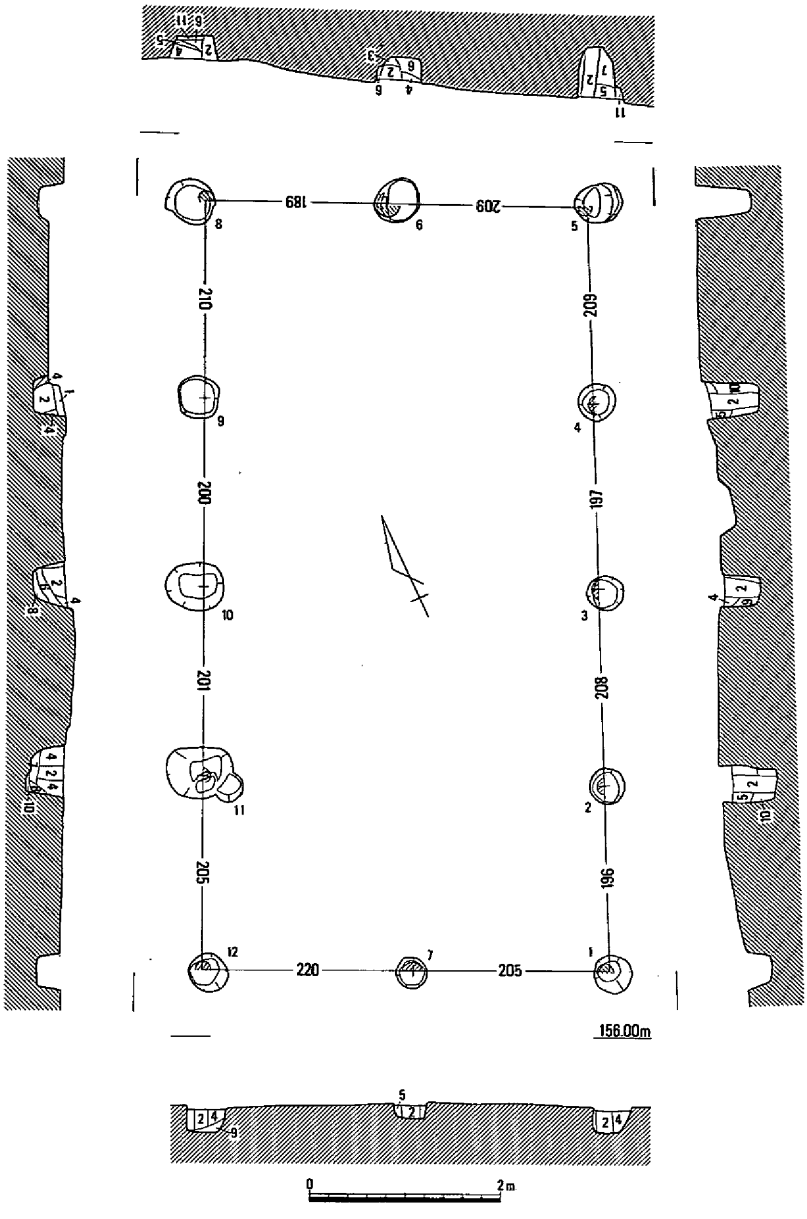
建物３（No14）（第139図、図版４）

57・58SS・57TT区にまたがって位置する、４×２間の掘立柱建物である。土壙１・２・３と重複し、それらより新しい。桁行816cm、梁間425cm、面積33.5㎡を測り、棟方向はＮ－24°－Ｅである。柱間は桁行・梁間とも200cm前後で大きなばらつきはないが、南側梁間の柱穴７・12間のみは220cmと少し長めである。この建物は規模・形状の点で後述の建物４に近似する。

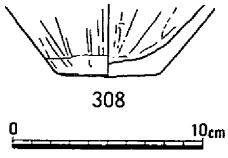
柱穴はいずれも円形で、直径35～86cmを測る。西桁行・北梁間の柱穴は東桁行・南梁間に比べて規模が大きいが、両者間で削平に顕著な差があるとも思えず、本来的な相違と考えられる。柱穴の深さは最大で検出面から62cmを測る。南北梁間中央の柱穴は他よりやや浅い。底面の標高は154.8～155.1ｍで、北梁間では地形に影響されて徐々に西に下がっている。全柱穴で柱痕が明瞭に検出された。柱痕の直径は15～27cmで、埋土はすべて黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土であった。西桁行の柱穴９・10の柱痕は他に比較して太い。

出土遺物は少なく、図示し得たのは１点のみである。**308**は柱穴６・９から出土して接合した甕形土器の底部で、外面はヘラミガキ、内面は下から上へのナデで仕上げている。

建物の時期は、出土土器が小片のため正確には求められないが、弥生時代後期の範疇には入るものと思われる。　（岡本泰）



1．暗褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
3．黒色粘質土
4．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑黒褐色粘質土
7．黒色粘質土
8．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
9．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
10．黄灰褐色粘質土
11．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土



第139図　建物３（1/80）・出土遺物(1/4)

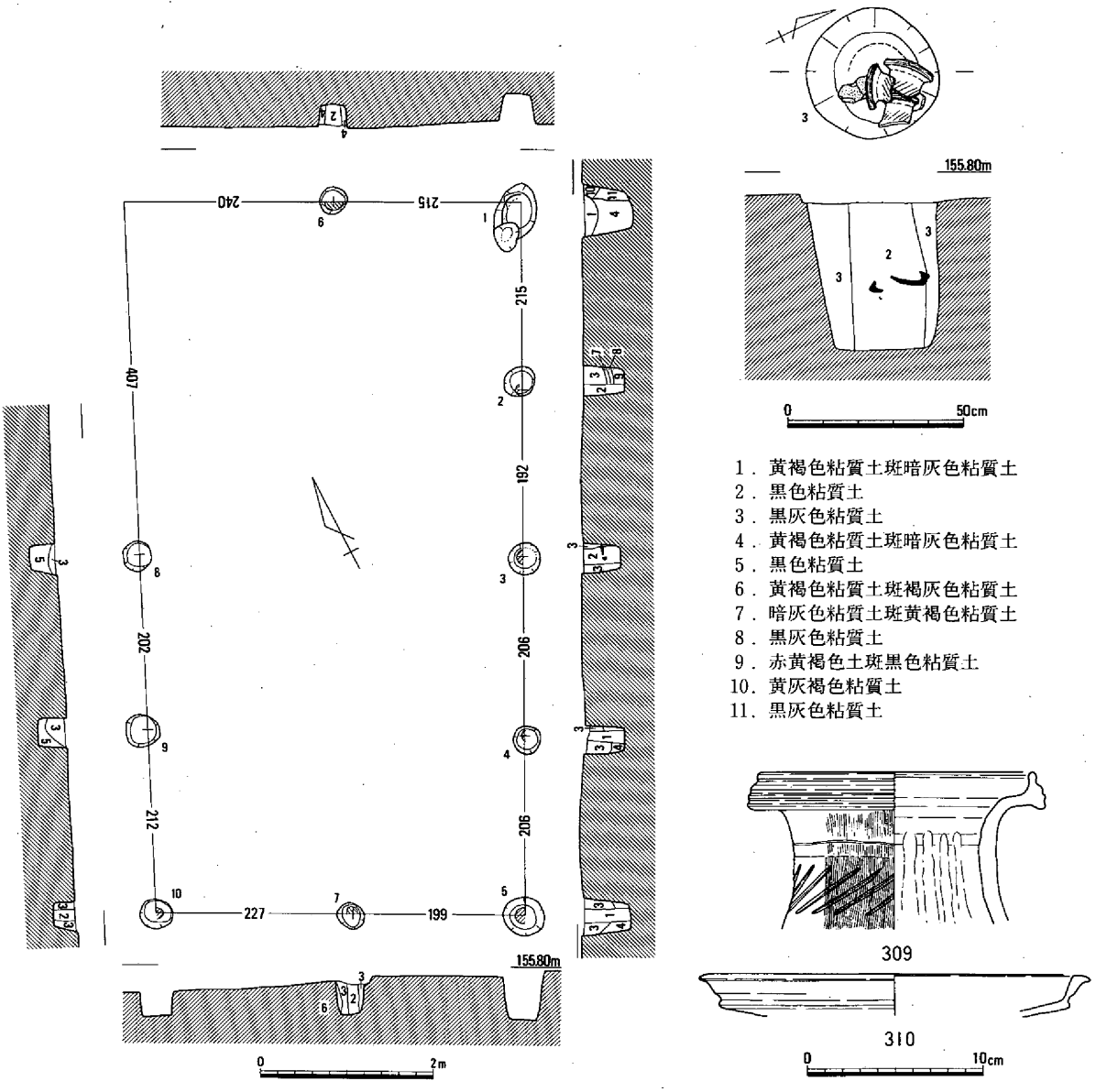
建物４（No ８）

（第140図、図版４・15）

58・59ＲＲ・59ＳＳ区にまたがる４×２間の掘立柱建物で、北西隅の柱穴２基は攪乱によって消滅している。建物11・13・23と重複し、建物11より新しい。規模は、桁行821cm、梁間455cm、面積36.3㎡、柱間距離は192～240cmを測り、いずれも建物３に近似した数値を示す。棟方向はＮ－26°－Ｅである。

柱穴はほとんどが直径33～48cmの円形であるが、北東隅の柱穴１のみは長径64cm、短径47cmの楕円形を呈している。これは建物11の柱穴と重複して判別困難であったのに加え、さらに他の柱穴と切り合う可能性もあるため、本来の形状かどうか疑問である。断面図に示した10・11層は他柱穴の埋土とみるべきかも知れない。柱穴の深さは最深のもので58cmを測る。西桁行の柱穴は東よりも浅くなるが、底面の標高は各辺とも155.2～3mと大差はない。東桁行と南北梁間の柱穴で柱痕の残存が認められ、径は12～23cmであった。

東桁行の柱穴３において、柱痕内から破砕された壺形土器の大形破片が出土している。建物２の例と同様意図的な埋納で、土器は柱痕埋土の中ほどから、浮いた状態で検出された。また土器に接した位置に礫が１点あったが、これも同時に埋め込まれたものかも知れない。



第140図　建物４（1/80）・柱穴遺物出土状態(1/20)・出土遺物(1/4)

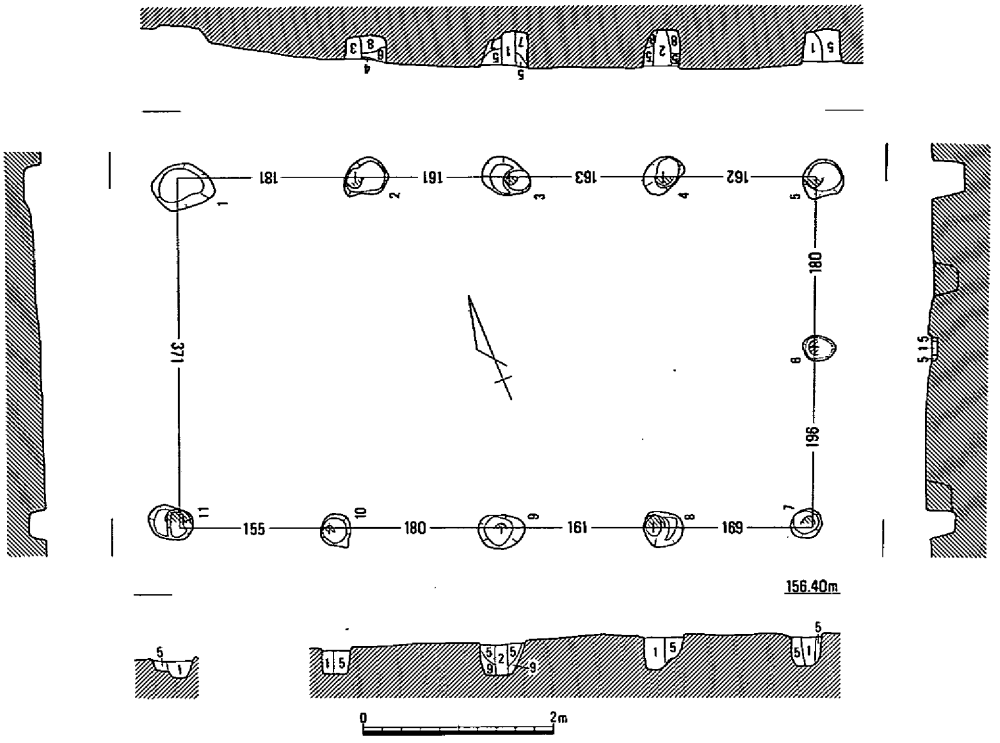
309が柱穴３出土の長頸壺で、復元口径は154㎜を測る。口縁端部はやや内傾ぎみに上方へ突出し、端面には３条の凹線が巡る。頸部外面には縦方向の工具ナデののち、刻みのある原体を用いて右上がりの刺突文を施している。頸部内面はヨコナデ後、指で縦方向のナデを加えている。**310**は柱穴７から出土した高杯形土器の口縁部で、復元口径は206㎜を測る。器表の剝落が激しく、調整の詳細は不明である。

建物の時期は、出土土器の特徴から考えて弥生時代後期前葉に求められよう。　（岡本泰）

建物５（No ６）（第141図）

59RR区で複雑に重なり合った建物群のうちの１棟で、４×２間の掘立柱建物である。建物９・10・19・24、柱穴列５、土壙４・５と重複し、建物９よりは新しい。建物の規模は、桁行667cm、梁間372cm、面積24.9㎡で、棟方向はＥ－22°－Ｓを測る。西梁間中央の柱穴がみられないのは削平を受けたためであろう。

柱穴はいびつな円形のものが多く、径は35～66cmである。検出面からの深さは最深のもので38cm、



1．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
2．黒灰色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
6．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
7．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
8．黄褐色粘質土斑黒色粘質土
9．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

第141図　建物５(1/80)

底面の標高は155.5～6mの範囲におさまるが、東梁間中央の柱穴６のみは約155.8mとかなり浅い。柱穴１を除く全柱穴で柱痕が確認されており、径は14～26cmを測る。

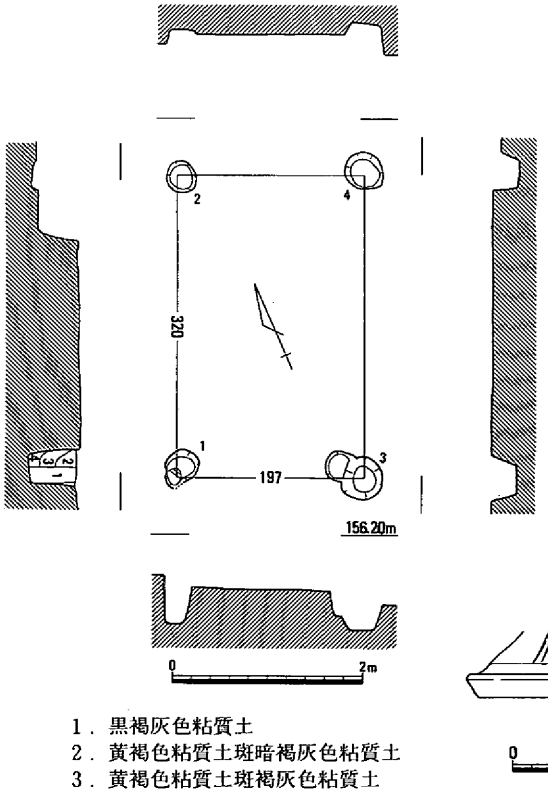
柱穴から少量の土器片が出土した。小片のため時期を特定しにくいが、弥生時代中期のものかと考えられる。　(岡本泰)

建物６（No19）（第142図、図版４）

59TT・UU区で検出された１×１間の掘立柱建物である。建物１・７・18と重なり、建物18の柱穴と切り合うが新旧関係は見極めがたい。規模は桁行320cm、梁間197cm、面積6.3m²を測り、棟方向はN－23.5°－Eである。

柱穴は円形で、攪乱のため残りは悪い。底面の標高は155.1～2m程度を測る。南西隅の柱穴１は深さ54cmで、柱痕も残存している。

311は平成５年度の確認調査



1．黒褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
4．明茶褐色粘質土

第142図　建物６(1/80)・出土遺物(1/4)

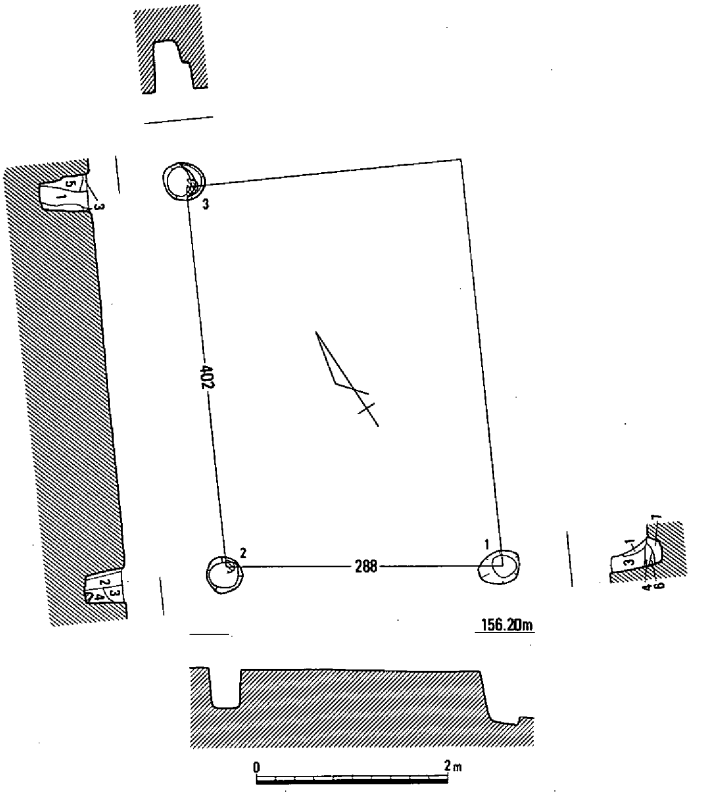
時に柱穴から出土した高杯形土器の脚部である。復元径は136㎜を測り、外面には沈線がヘラ描きされ、内面はヘラケズリで調整される。この土器により、建物の時期は弥生時代後期前葉に比定される。　（岡本泰）

建物７（No20）（第143図）

59TT区で検出された、１×１間と推定される掘立柱建物である。建物１・６と重複する。柱穴３基のみの残存で建物とする根拠は弱いが、埋土や柱穴規模の類似もあり、１棟の建物を構成すると想定した。建物の規模は、桁行402cm、梁間288cm、面積11.9㎡を測り、棟方向はＮ－27.5°－Ｅである。

柱穴は円形で、直径は39～44cm、検出面からの深さは最大55cmを測った。底面の標高は155.3～4mである。柱穴２・３では明瞭な柱痕が認められ、直径は14～17cmであった。

遺物が１点も出土していないため、確実な時期は知り得ないが、埋土や位置関係から判断して弥生時代の遺構としたい。（岡本泰）



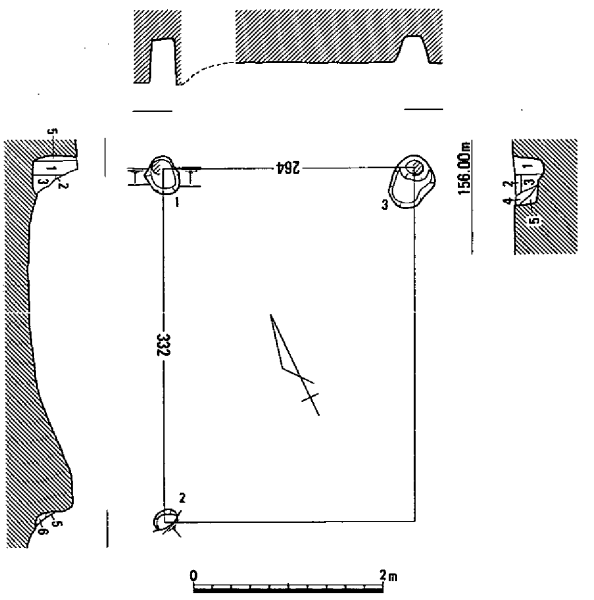
１．暗褐灰色粘質土
２．暗褐灰色粘質土
３．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
４．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
５．黄褐色粘質土斑黄褐灰色粘質土
６．黄褐色粘質土
７．黒褐灰色粘質土

第143図　建物７（1/80）

建物８（No22）（第144図、図版４）

59SS～60TT区に位置する、１×１間の掘立柱建物である。柱穴３基が現存しているが、いずれも攪乱坑に切られ残りは悪い。規模は桁行332cm、梁間264cm、面積8.8㎡で、棟方向はＮ－26°－Ｅを測る。もっとも、以上の数値はすべて現状でのものので、本来はより大規模な建物であった可能性も否定できない。

柱穴は円形～楕円形で、残りのよい３の長径は57cmを測った。また検出面からの深さは最大48cmである。底面の標高は155.2～3mの範囲に収まる。柱痕は、柱穴２では確認できなかったが、１・３に残存しており、径は16cmであった。



１．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
２．黒色粘質土
３．黄褐色粘質土斑淡褐灰色粘質土
４．暗褐灰色粘質土
５．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
６．黒褐色粘質土

第144図　建物８（1/80）

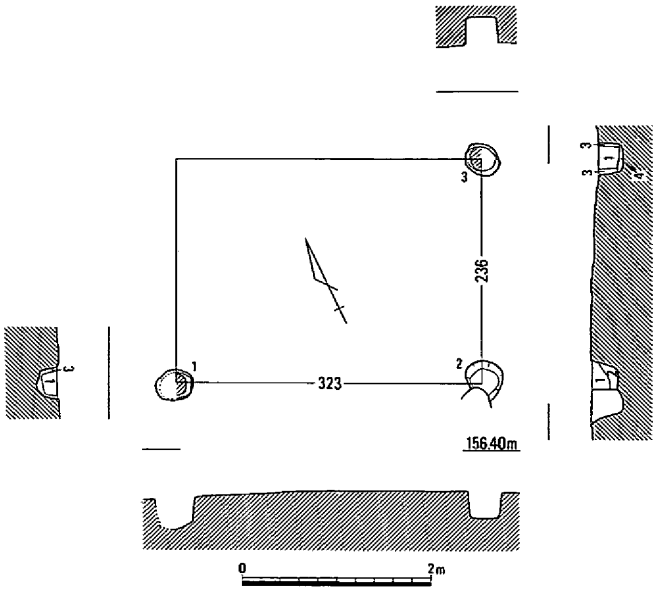
時期は、少量出土した土器片により弥生時代後期に置ける。　（岡本泰）

建物９（No21）（第145図）

59RR区に位置する１×１間の掘立柱建物である。建物５・19・24と重複し、建物５に先行する。建物の規模は、桁行323cm、梁間236cm、面積7.6㎡を測り、棟方向はＥ－22.5°－Ｓである。北西隅の柱穴は攪乱のため現存しない。

柱穴は円形で、径は39～51cm、検出面からの深さは最大で32cm、底面の標高は155.6～7mで、西側がやや低くなるようである。柱穴１・３で黒色粘質土の柱痕が確認でき、径はそれぞれ24、25cmを測った。

遺物がなく時期決定は困難だが、建物５に先行することから弥生時代であることは間違いない。　（岡本泰）



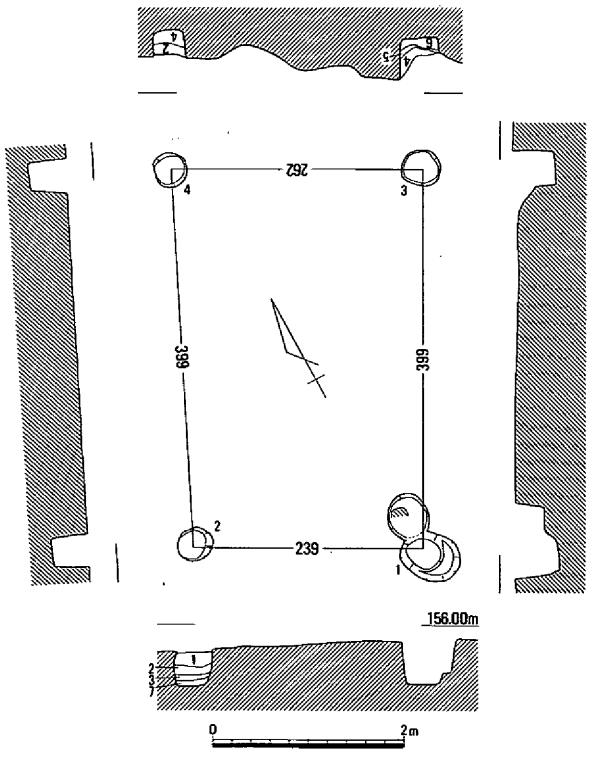
1．黒色粘質土　　3．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土　4．暗黄灰褐色粘質土

第145図　建物９(1/80)

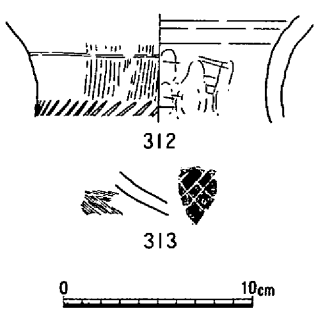
建物10（No17）（第146図）

59RR区に位置し、建物５・19・24、柱穴列５、土壙４・５と重複する１×１間の掘立柱建物である。東梁間の柱穴１・３がそれぞれ建物19の柱穴・土壙４と接しているが、新旧関係は定かでない。桁行399cm、梁間262cm、面積9.0㎡、棟方向Ｎ－27°－Ｅを測る。

柱穴は径40cm前後の円形が主だが、柱穴１のみは長径63cmの楕円形であった。どの柱穴でも柱痕は確認されていない。深さは最大51cm、底面標高は155.4～5mである。



1．黒灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
3．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
4．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
7．黒色粘質土



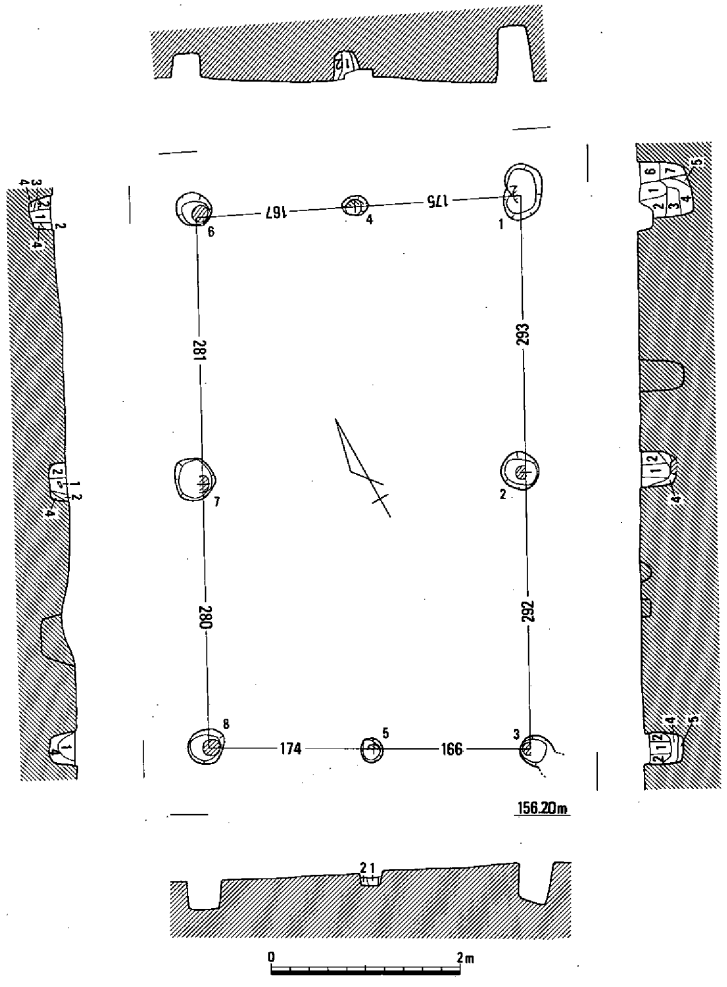
第146図　建物10(1/80)・出土遺物(1/4)

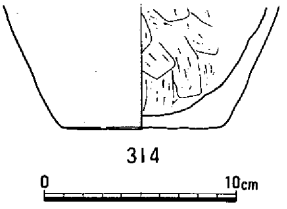
出土遺物のうち２点を示す。いずれも壺形土器で、**312**は柱穴２出土の頸部、**313**は柱穴１出土の肩部である。

これらの土器からみて、建物の時期は弥生時代後期前葉と思われるが、中期後葉にかかる可能性もある。（岡本泰）

建物11（No15）（第147図）

58・59ＲＲ、59ＳＳ区にまた





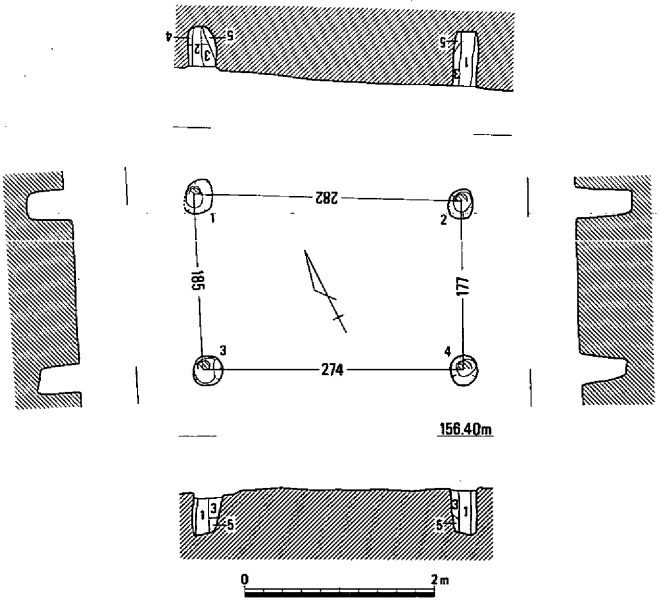
1．黒色粘質土
2．黒灰色粘質土
3．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
4．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
5．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
6．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
7．黒色粘質土

第147図　建物11(1/80)・出土遺物(1/4)

がる２×２間の掘立柱建物である。建物４・23と重なり、建物４よりも古い。桁行585cm、梁間342cm、面積19.6m²を測り、棟方向はＮ－28°－Ｅである。

柱穴は円形で、径は26～45cm、深さは15～59cm、底面の標高は155.1～4mを測る。梁間中央の柱穴は径・深さとも小規模である。

柱痕はすべての柱穴で検出され、その径は13～28cmであった。東桁行中央の柱穴２では柱痕下に礎石も確認された。遺物としては、柱穴７の柱痕内から甕形土器の底部**314**が出土している。



1．暗褐灰色粘質土
2．黒色粘質土
3．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
4．黒褐灰色粘質土
5．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土

第148図　建物12(1/80)

建物の時期は、出土土器からみて弥生時代後期であろう。　　（岡本泰）

建物12（No28）（第148図）

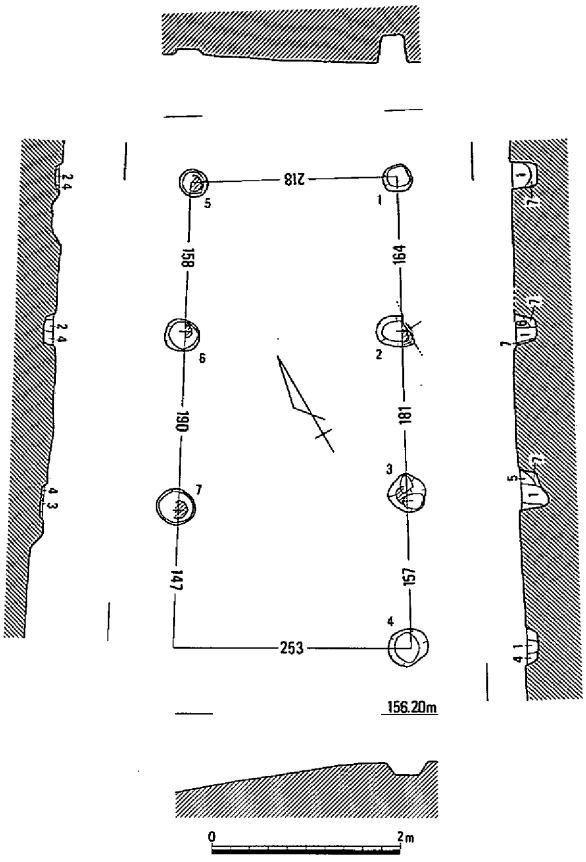
58RR～59SS区に位置する、１×１間の掘立柱建物である。桁行282cm、梁間185cm、面積5.0㎡、棟方向Ｅ－30°－Ｓを測る。

柱穴は径33～40cmの円形を呈し、深さは最大59cm、底面の標高は155.3～4mである。全柱穴で柱痕が良好に遺存しており、その径は12～15cmであった。

遺物が出土していないため時期は特定しにくいが、埋土の類似から弥生時代の遺構と判断している。　　（岡本泰）

建物13（No 7）（第149図）

58RR・SS区に位置する３×１間の掘立柱建物で、建物４・14と重複し、建物14よりも新しい。規模は、桁行502cm、梁間253cm、面積11.7㎡を測り、棟方向はＮ－28°－Ｅである。南西隅の柱穴は攪乱のため現存しない。



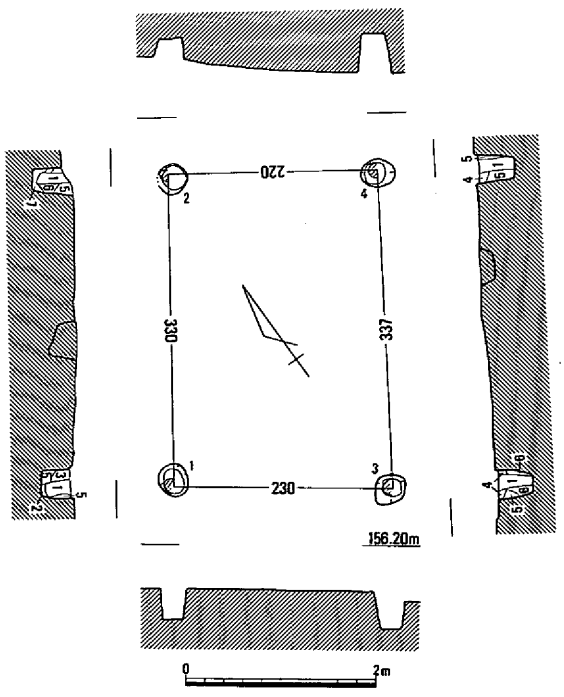
1．暗灰色粘質土
2．黒色粘質土
3．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土
5．黒灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
7．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

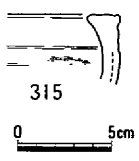
第149図　建物13(1/80)

その他の柱穴も削平のため残りは悪く、特に西辺のものは底部付近のみの残存である。

柱穴は円形で、径は31～44cm、深さは最大31cmを測る。底面の標高は155.4～5mと、傾斜地のわりにばらつきは少ない。柱痕は柱穴１を除く全柱穴で認められ、径は14～19cmを測った。

柱穴内から土器小片が出土し、これをもって時期は弥生時代とした。　　（岡本泰）



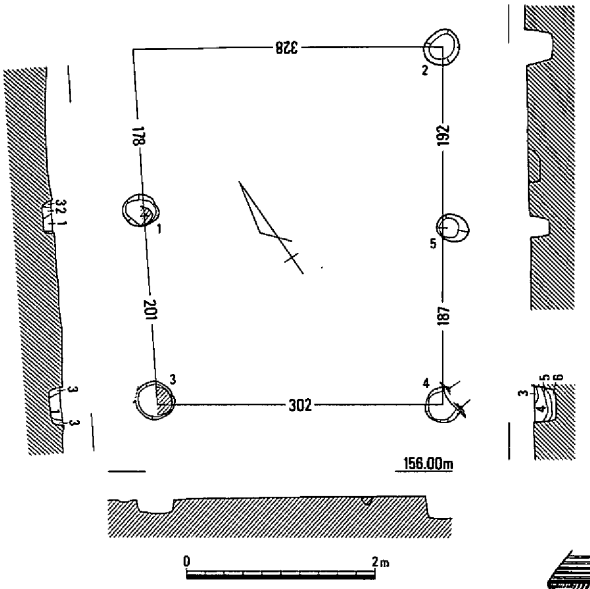


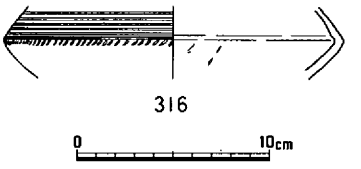
1．黒褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑黒色粘質土
3．黒色粘質土
4．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
7．黄褐色粘質土斑黄褐灰色粘質土

第150図　建物14(1/80)・出土遺物(1/4)

建物14（No30）（第150図）

58SS区に位置する１×１間の掘立柱建物である。建物13・15と重複し、建物13より古い。規模は、桁行337cm、





1．黒褐灰色粘質土
2．黒色粘質土
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

第151図　建物15(1/80)・出土遺物(1/4)

梁間230cm、面積7.5m²、棟方向N－33.5°－Eを測る。

柱穴は円形で、径33～39cm、深さは最大42cm、底面標高155.3～4mを測る。全柱穴で柱痕が認められ、その径は12～17cmである。

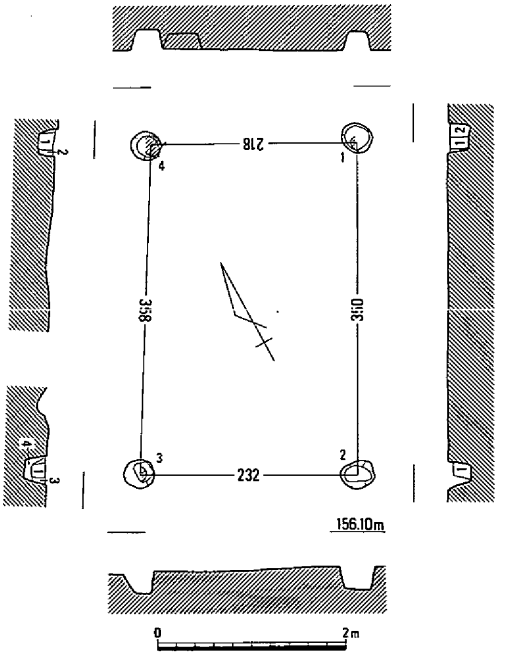
315は柱穴３から出土した鉢形土器の口縁部で、外面の口縁直下には３条の凹線が巡る。

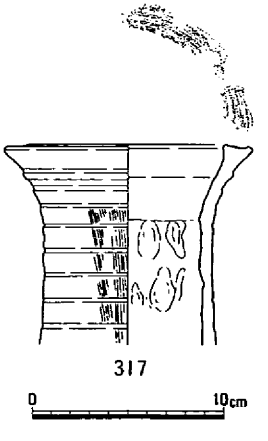
出土土器から、この建物の時期は弥生時代中期後葉に求められよう。　　(岡本泰)

建物15（No33）（第151図）

58SS区に位置する２×１間の掘立柱建物で、建物14・16・22と重複し、建物16より古い。規模は、桁行379cm、梁間328cm、面積7.8m²、棟方向N－33°－Eを測る。北西隅の柱穴は現存しない。

柱穴は円形で、径35～41cm、深さ最大30cm、底面の標高155.5～7mを測る。柱穴１・３・４には柱痕が残り、径は20～30cmである。





1．黒色粘質土
2．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
3．黒灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土

第152図　建物16(1/80)・出土遺物(1/4)

316は柱穴２から出土した壺形土器の胴部片で、最大径部の直上と直下に６条の凹線と刺突文がそれぞれ巡る。弥生時代後期前葉に比定され、建物の時期も同様であろう。　　(岡本泰)

建物16（No32）（第152図）

58SS・TT区に位置する１×１間の掘立柱建物である。重複する建物15より新しい。規模は、桁行358cm、梁間232cm、面積7.8m²を測り、棟方向はN－29.5°－Eである。

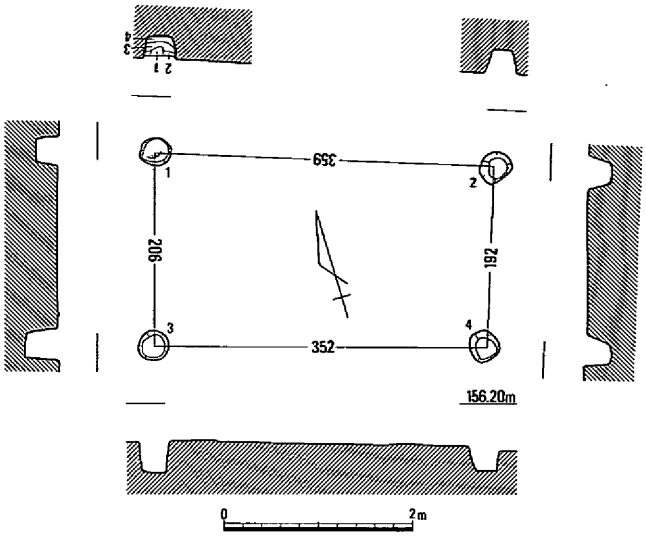
柱穴は円形で、径32～38cm、深さ最大25cmを測る。底面標高は155.5m程度で一定する。２以外の柱穴には柱痕があり、径は14～32cmであった。

317は柱穴３出土の長頸壺である。頸部には浅い沈線が巡り、口縁上端の平坦面には２個１組の竹管文が２カ所に残る。

建物の時期は、土器の特徴から弥生時代後期前葉に置ける。　（岡本泰）

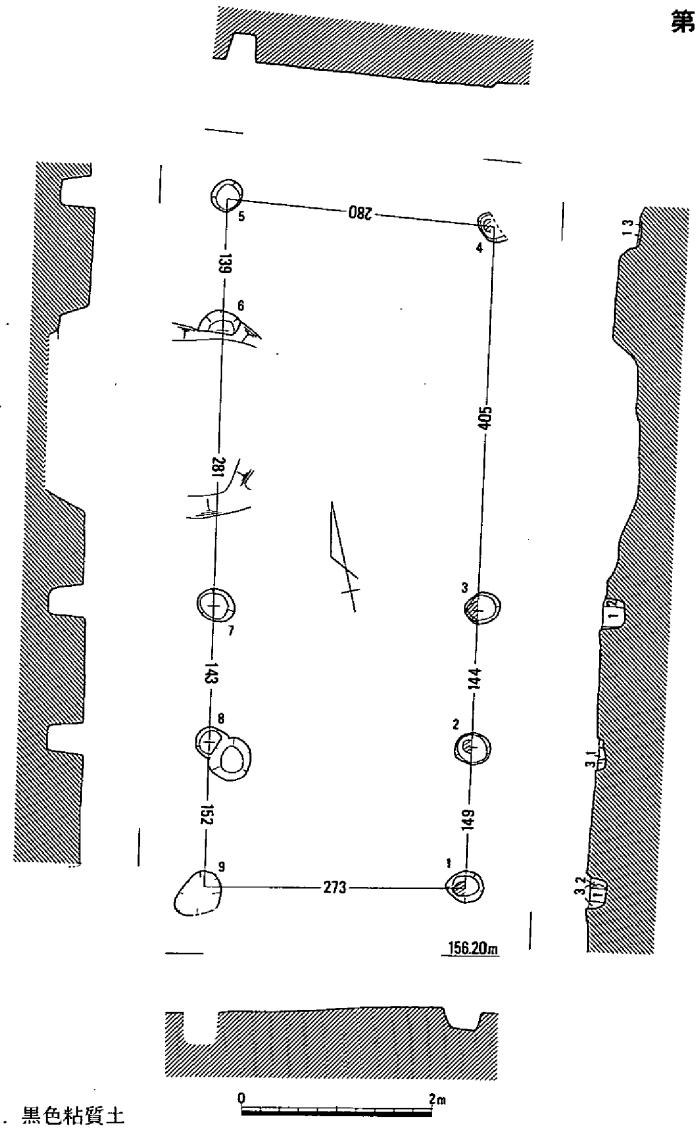
建物17（No39）（第153図）

58・59ＳＳ区にある１×１間の掘立柱建物である。建物22と重複するが新旧関係は不明である。建物の規模は、桁行359cm、梁間206cm、面積7.1㎡で、棟方向はＮ－17.5°－Ｓを測る。



１．黒色粘質土　　３．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
２．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土　４．黒灰褐色粘質土

第153図　建物17(1/80)



１．黒色粘質土
２．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土　　３．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土

第154図　建物18(1/80)

柱穴は円形で、径は32～35cm、検出面からの深さは最大で33cm、底面の標高は155.4～5mである。柱穴１には径16cmの柱痕が認められた。他の柱穴は建物を認識する前に完掘したため、柱痕の有無は不明である。

出土遺物はないが、埋土等から弥生時代の建物と考える。　（岡本泰）

建物18（No２）（第154図、図版４）

59TT・UU区に位置する梁間１間の掘立柱建物である。一部攪乱で破壊されているが、柱間距離からみて桁行は４間か５間と考えられる。建物１・６と重複し、建物６の柱穴と切り合うが新旧関係は判断しがたい。規模は、桁行715cm、梁間280cm、面積19.7㎡、棟方向はＮ－14°－Ｅを測る。

柱穴は円形で、径33～40cm、深さは最大27cmを測り、底面標高は155.4～5mの範囲である。柱穴１～４では、径13～22cmの柱痕がみられた。

建物の時期は、出土土器により弥生時代後期前葉に比定される。（岡本泰）

建物19（No18）（第155図）

59RR区に位置する１×１間の掘立柱建物である。建物５・９・10・24、土壙４・５と重複し、建物24の柱穴と接するが、明確な切り合い関係はない。桁行406cm、梁間202cm、面積9.0㎡、棟方向Ｎ－28°－Ｅを測る。

柱穴は円形で、径39～48cm、深さ最大42cm、底面標高はいずれも約156.5mで一定である。柱穴１・２・４には柱痕が残り、径16～17cmを測った。

遺物は出土しなかったが、埋土の特徴等から弥生時代の遺構と判断した。（岡本泰）

建物20（No16）（第156図）

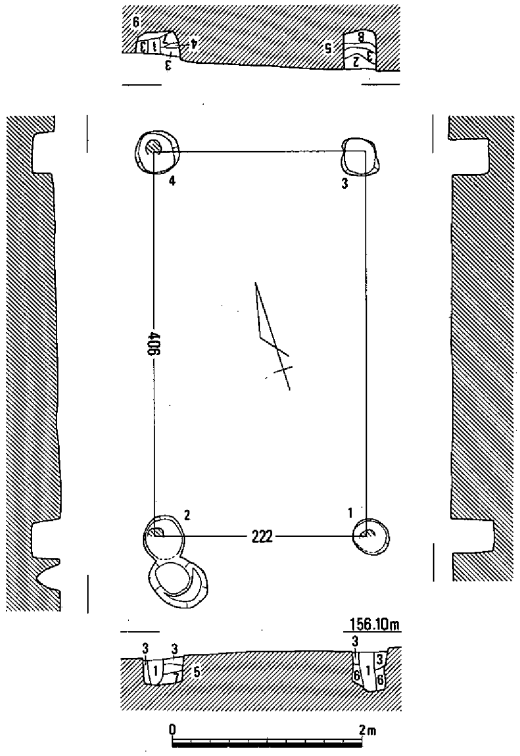
60RR・SS区に位置する。柱穴２基のみの検出で、対応する柱穴を攪乱で破壊された建物と考えているが確証はない。残存する柱穴列の主軸方向はＮ－16°－Ｅ、柱間距離は258cmを測る。建物とすれば、本来の規格は１×１ないし２×１間であったと推測される。

柱穴は円形で、径32～33cm、深さ最大26cm、底面標高は155.4～5m、柱痕の径は12～14cmであった。遺物は出土していない。（岡本泰）

建物21（No29）（第157図）

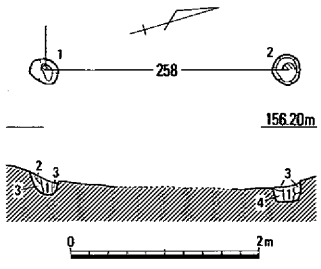
58TT区に位置し、建物２と重複する１×１間の掘立柱建物である。桁行300cm、梁間188cm、面積7.2㎡で、棟方向はＥ－13.5°－Ｓを測る。

柱穴は円～楕円形を呈し、径は27～38cm、深さは最大で61cmを測る。底面の標高は155.2～3mの範囲にお



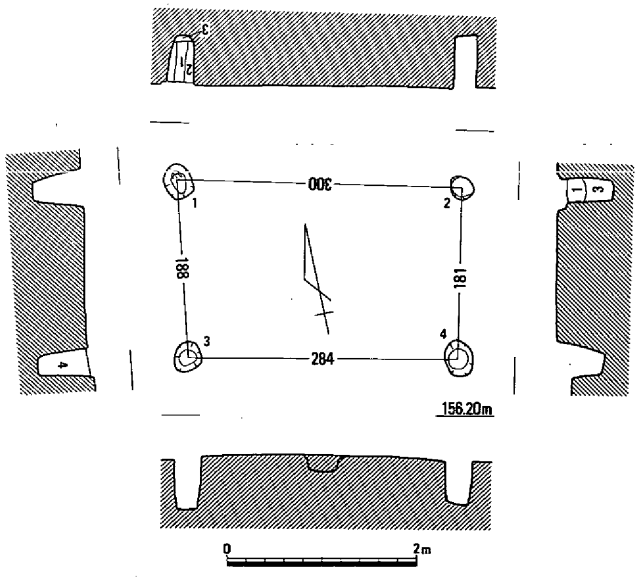
1．暗褐灰色粘質土
2．黒褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
6．黒色粘質土
7．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
8．灰黄褐色粘質土
9．黒褐灰色粘質土

第155図　建物19(1/80)



1．黒褐灰色粘質土　　3．褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土　　4．黄褐色粘質土

第156図　建物20(1/80)



1．暗褐色粘質土　　3．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗褐色粘質土　　4．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土

第157図　建物21(1/80)

さまる。柱穴１には直径11cmの柱痕が残存していた。

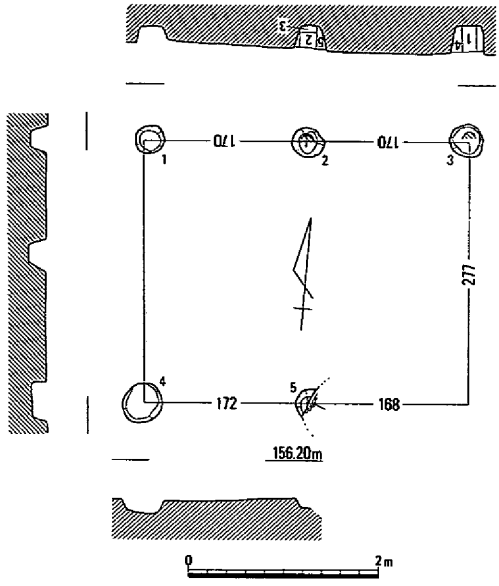
出土遺物がないため時期を特定しにくいが、他の建物と同じく弥生時代の遺構であろう。（岡本泰）

建物22（No34）（第158図）

58・59SS区に位置する２×１間の掘立柱建物で、建物15・17と重複する。規模は、桁行340cm、梁間277cm、面積9.4㎡で、棟方向はＥ－4.5°－Ｓを測る。南東隅の柱穴は攪乱により現存しない。

柱穴は円形を呈し、径32～44cm、深さは最大で28cmを測り、底面標高は155.6m前後でほぼ一定である。柱穴２・３には柱痕が認められ、径はそれぞれ17・14cmであった。

柱穴から遺物は出土しなかったが、弥生時代の遺構と考えられる。（岡本泰）



1．黒色粘質土
2．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

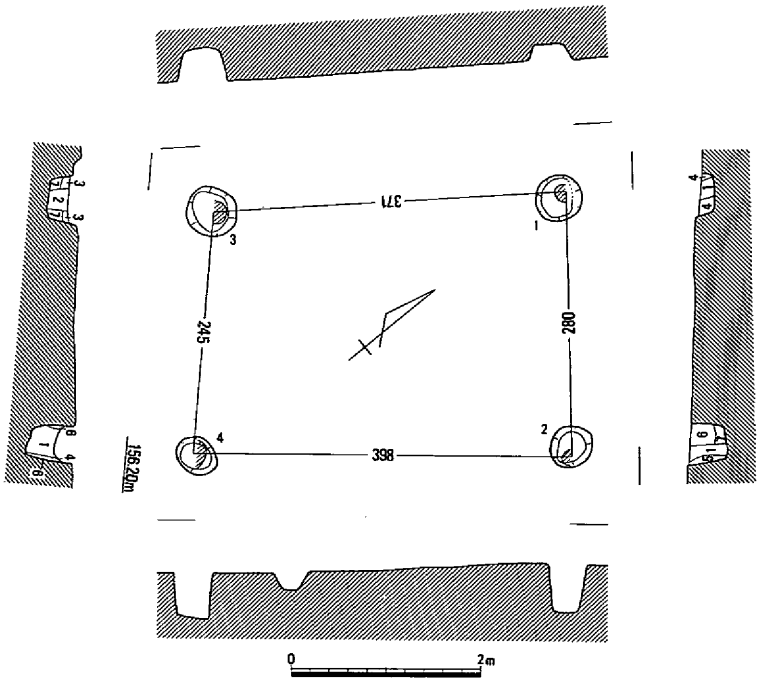
第158図　建物22(1/80)

建物23（No13）（第159図）

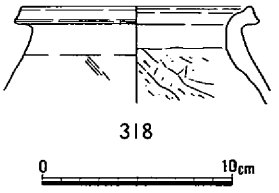
58RR区にある１×１間の掘立柱建物である。建物４・11と重複するが新旧関係は不明。規模は、桁行398cm、梁間280cm、面積10.3㎡で、棟方向はＮ－37°－Ｅを測る。

柱穴は円形で、径は46～55cm、検出面からの深さは最大で55cmを測る。底面の標高は北辺で約155.3m、南辺で155.1～2mと北側がやや高い。全柱穴に柱痕が残り、径は18～31cmである。

遺物としては、柱穴３から出土した甕形土器**318**がある。復元口径120mmを測り、外面と口縁部内面はナデ、頸部内面は粗いヘラケズリで調整する。この土器から、建物の時期は弥生時代後期初頭と考えられる。（岡本泰）



1．黒色粘質土
2．黄褐灰色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
5．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土
6．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
7．灰黄褐色粘質土

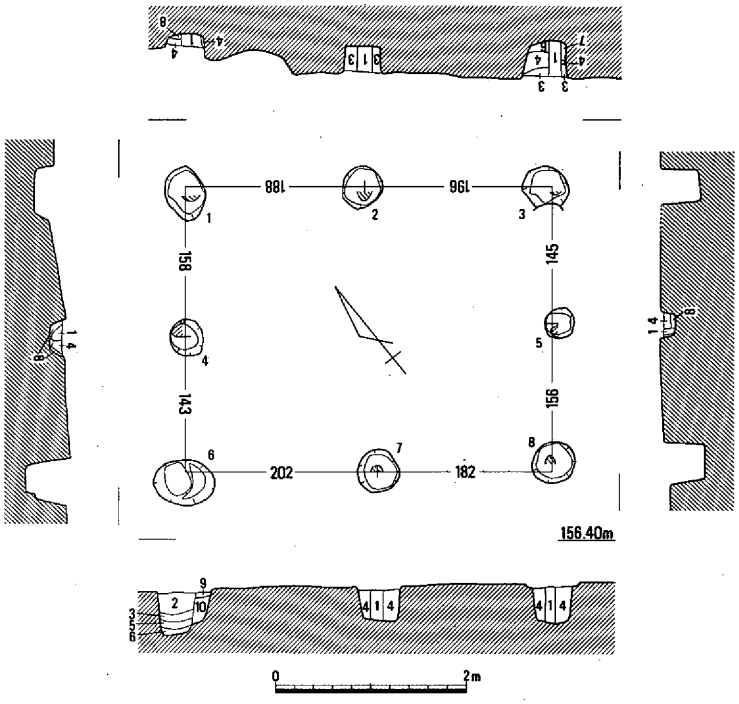


第159図　建物23(1/80)・出土遺物(1/4)

建物24（No12）（第160図）

59RR区にある２×２間の掘立柱建物で、建物５・９・10・19と重複し、建物10と切り合うが新旧は不明。規模は、桁行384cm、梁間301cm、面積11.6㎡で、棟方向はＥ－38.5°－Ｓである。

柱穴は円～楕円形で、径34～65cm、深さは最大45cm、底面標高155.4～7mを測り、梁間中央のものは小規模である。６以外の柱穴には径11～29cmの柱痕が残存している。建物の時期は、柱穴から出土した土器小片により、弥生時代後期前半と考えられる。（岡本泰）

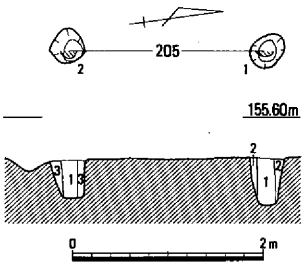


1．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
2．黒色粘質土
3．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
6．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
7．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土
8．黄灰褐色粘質土
9．黒灰色粘質土
10．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

第160図　建物24(1/80)

柱穴列１（No38）（第161図）

56UU・VV区に位置し、住居１の主柱穴を切る１間の柱穴列である。主軸方向はＮ－8°－Ｅ、柱穴は円形を呈し、径37・39cmで柱痕を有する。本来は建物の西辺であった可能性もある。遺物がなく時期は明確でないが、弥生時代のものか。（岡本泰）



1．黒褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

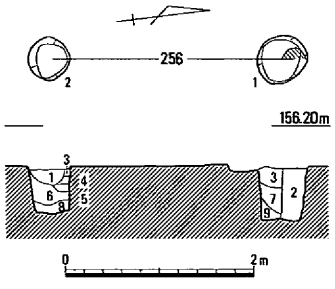
第161図　柱穴列１(1/80)

柱穴列２（No35）（第162図）

58UU区にある１間の柱穴列。柱穴は円形で、径は47・45cm、主軸方向はＮ－7.5°－Ｅである。柱穴１には径25cmの柱痕が残る。遺物はないが、弥生時代と思われる。（岡本泰）

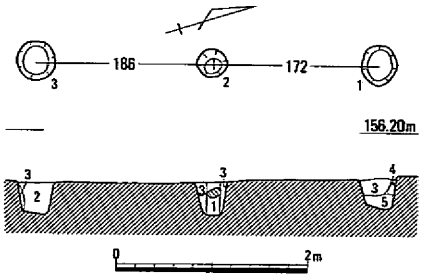
柱穴列３（No27）（第163図）

57TT・UU区に位置する２間の柱穴列。柱穴は円形で、径は31～42cm、深さは34～37cmを測り、中央の柱穴２はやや小さい。主軸方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴２には径15cmの柱痕が残り、その内部から礫が１点出土した。意図的な埋納の可能性もある。他に遺物はないが、弥生時代の遺構と思われる。（岡本泰）



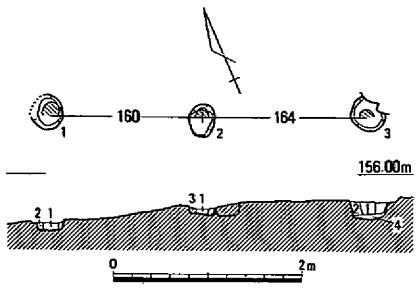
1．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
2．暗黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．黄褐灰色粘質土
6．暗褐灰色粘質土
7．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
8．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
9．黄褐色粘質土

第162図　柱穴列２(1/80)



１．暗褐灰色粘質土
２．黒褐灰色粘質土
３．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
４．暗灰褐色粘質土
５．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土

第163図　柱穴列３(1/80)



１．黒褐灰色粘質土
２．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
３．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
４．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土

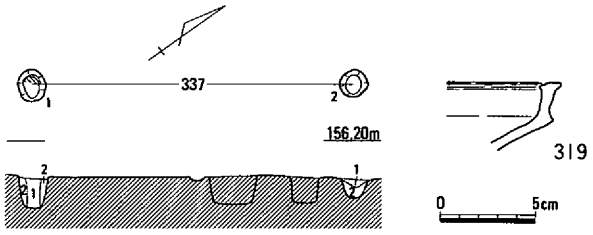
第164図　柱穴列４(1/80)

柱穴列４（No31）（第164図）

57・58TT区で検出された２間の柱穴列である。柱穴は円形で、径は35～39cm、深さは最大でも17cmと残りは悪い。底面高は西側のほうが低くなる。主軸方向はN－23°－Eである。全柱穴に柱痕が残存しており、その径は15～17cmを測る。柱穴内から遺物は出土しなかったが、埋土等から弥生時代の遺構と考えた。(岡本泰)

柱穴列５（No23）（第165図）

59RR区にある１間の柱穴列。建物５・10・19と重複する。柱穴は円形で、径は30・34cm、深さは23・35cmを測る。柱穴１には径18cmの柱痕が残る。柱穴１から出土した高杯口縁部**319**により、時期は弥生時代後期前葉に置ける。(岡本泰)

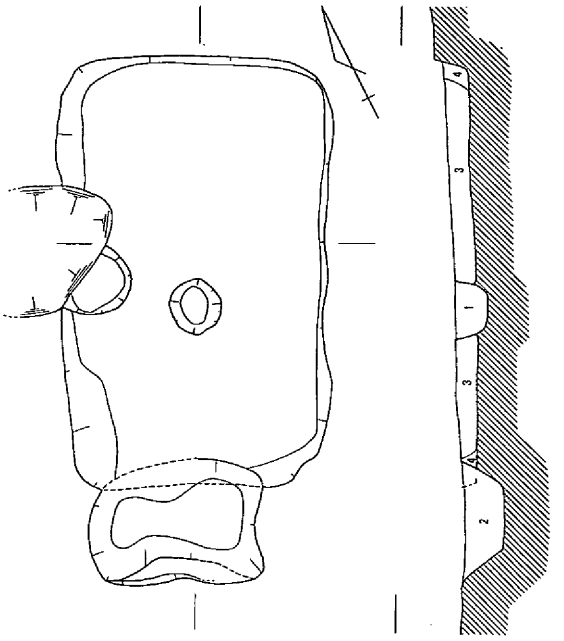


１．黒色粘質土
２．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土

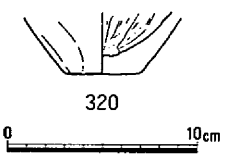
第165図　柱穴列５(1/80)・出土遺物(1/4)

土壙１（No11）（第166図）

57SS・TT区において、南北に並ぶ長方形の土



１．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
２．黒褐灰色粘質土
３．黒褐灰色粘質土
４．暗灰褐色粘質土



第166図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4)

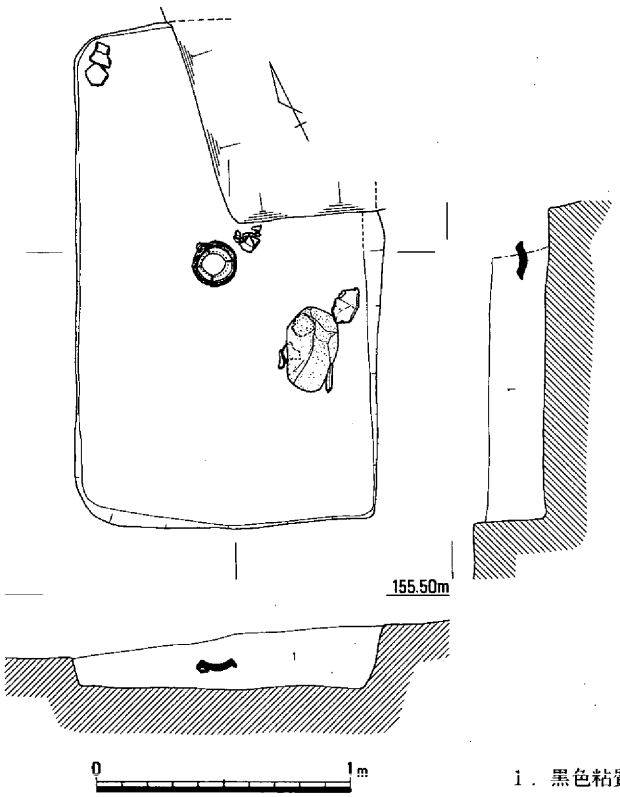
壙１～３が検出された。当土壙は57TT区にあり、３基中で最も南側に位置する。検出面での規模は、長軸170cm、短軸105cmの長方形で、深さは18cmを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐灰色粘質土であるが、壙壁沿いや底面の一部には暗灰褐色粘質土もみられる。なお南木口と底面にあるピットは土壙とは別時期のものである。時期は、埋土中から出土した甕形土器底部**320**により弥生時代後期における、近接する土壙２・３の年代観を援用すれば後期前葉となろう。これら３基の土壙は、形態的には津山市竹ノ下遺跡で検出されている、住居に伴うとされる「長方形土壙」に類似するが（注７）、この場合どの遺構に伴うかは明らかでない。（岡本泰）

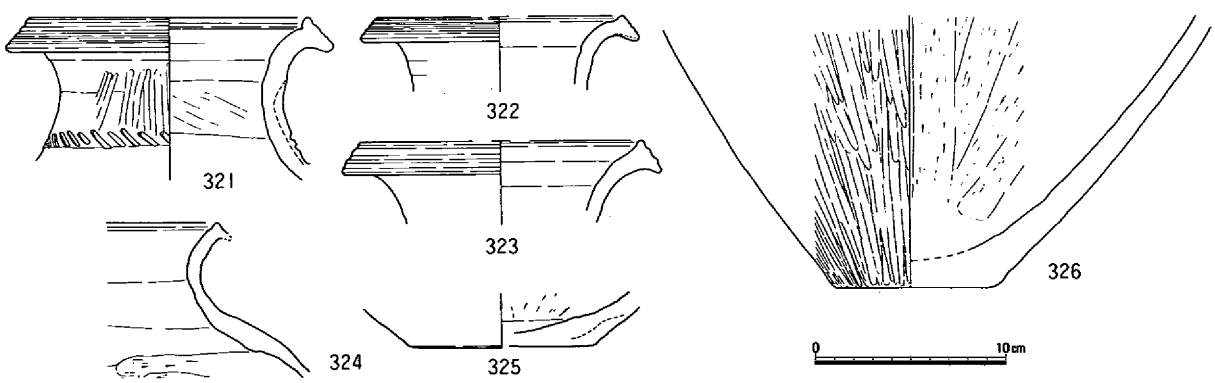
土壙２（No10）（第167図、図版15）

57TT区に位置する、長軸199cm、短軸121cm、深さ30cmを測る長方形の土壙である。北東隅は攪乱によって破壊されている。壙壁の傾斜は垂直に近く、底面は平坦である。埋土は黒色粘質土の単層であった。

埋土中から、主として浮いた状態で土器類と礫が検出された。図示した土器のうち、**321**～**324**は壺形土器の口縁～肩部である。**321**は中央部から出土したもので、口径147mmを測り、口縁端面に４条の凹線、頸部に工具による刺突文が巡る。頸部外面はタテ方向にヘラミガキされる。**322**・**323**は復元口径130mm・148mmを測り、端面には４条および３条の凹線が巡る。**324**の端面には浅い凹線が認められる。**325**は甕形土器の底部で、復元底径100mm。**326**は底径80mmで、壺形土器の底部と思われる。

以上の出土土器は、口縁部の作り等に若干の時期差がみられるようだが、土壙の時期としては弥生時代後期前葉をあてることができよう。（岡本泰）





第167図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙３（No ９）（第168図、図版４・15）

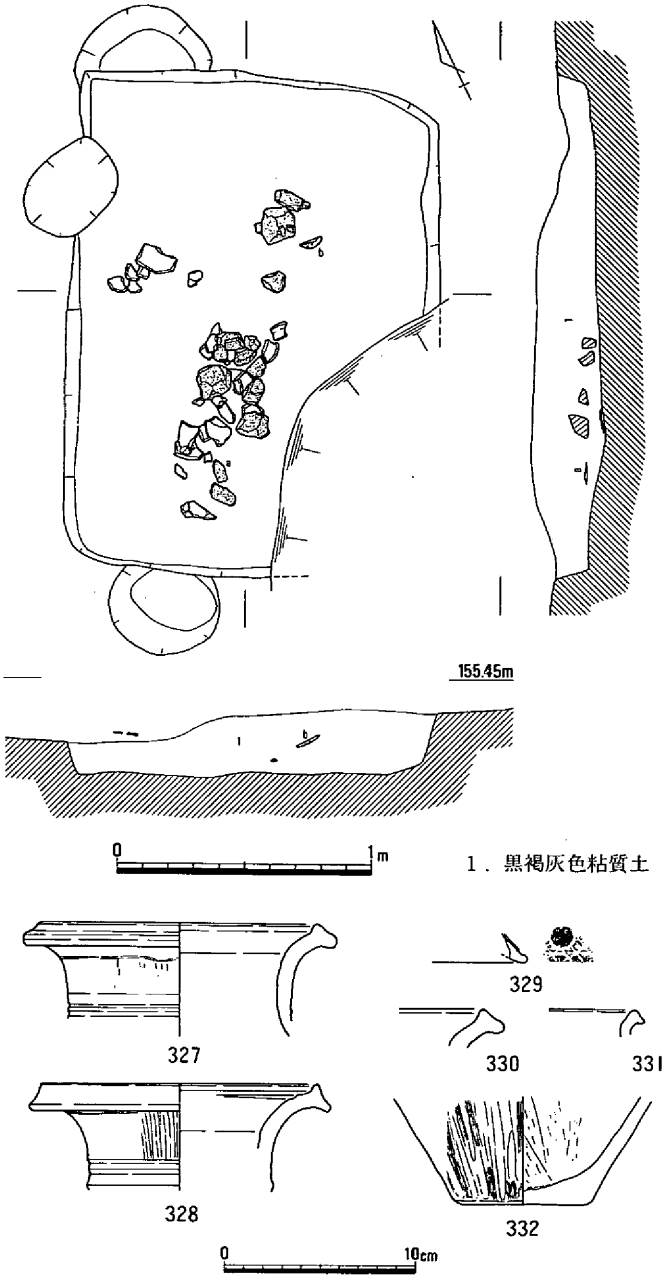
57TT区に位置する長方形の土壙である。規模は、長軸199cm、短軸146cm、深さ28cmを測り、南東隅は攪乱で破壊されている。壙壁の傾斜は急で、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

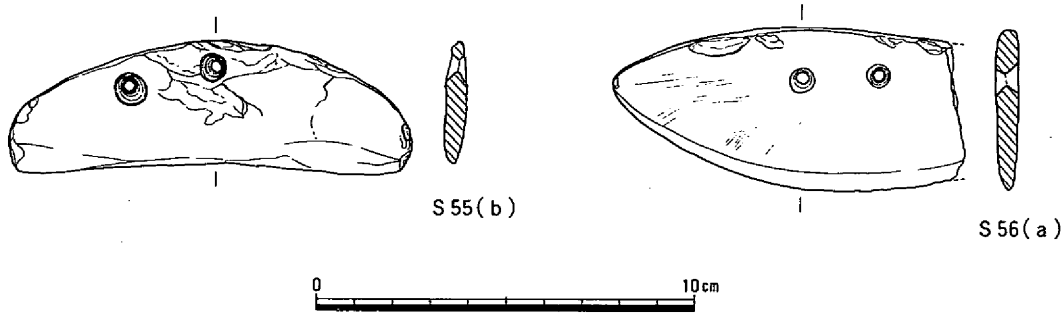
遺物としては、主に底面からやや浮いた状態で、土器・石器・礫が出土している。**327・328**は壺形土器の口縁～頸部で、復元口径はそれぞれ142mm、144mmを測り、頸部には凹線が巡らされる。**329**は壺形土器の口縁部端面の破片で、斜格子文と円形浮文が施されている。**330・331**は壺形土器の口縁部であろう。**332**は復元底径64mmを測る、壺ないし甕形土器の底部である。石器は２点出土した。**S55・S56**とも緑色片岩製の磨製石包丁である。**S55**は最大長106.5mm、最大幅35mm、重量31.2ｇを測り、表面は研磨が不十分で凹凸が残る。**S56**は最大長94mm、最大幅43mm、重量38.4ｇを測り、表面は平滑に仕上げられている。

以上の出土遺物からみて、この土壙の時期は弥生時代後期前葉に置くことができよう。（岡本泰）

土壙４（No ４）（第169図）

59RR区に位置する隅丸長方形の土壙である。建物５・10・19と重複する。長軸157cm、短軸125cm、深さ38cmを測



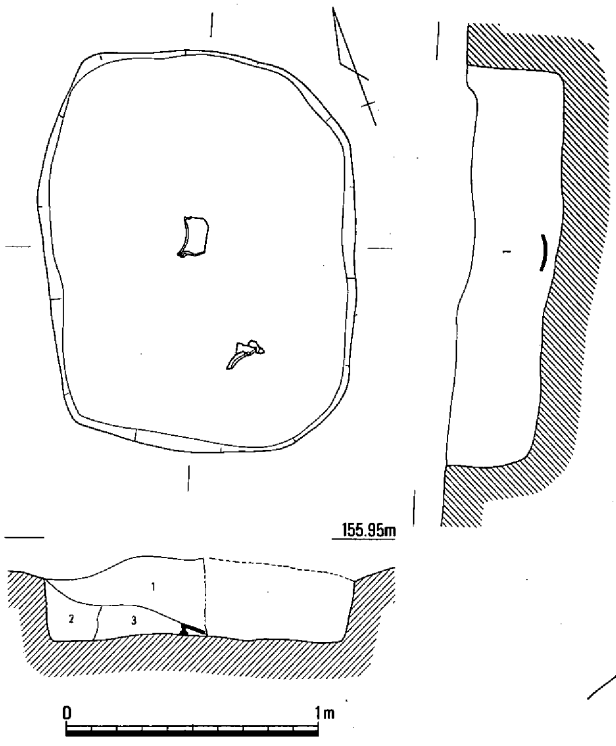


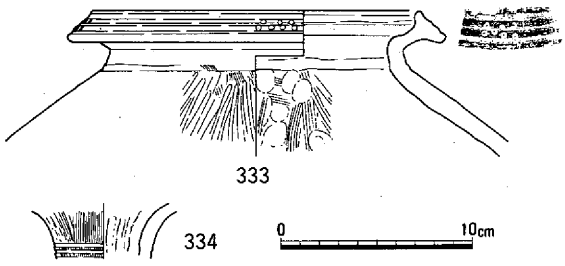
第168図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

る。壙壁は垂直に近く、底面には若干凹凸がある。埋土は上層は黒色粘質土だが、下層では黄褐色粘質土が斑状に含まれる。

遺物は底面直上から出土した。**333**の甕形土器は複元口径170㎜で、口縁端面には３条の凹線が巡り、２列の竹管文を４カ所に施文する。**334**は壺形土器の頸部で、外面はタテハケで調整し、凹線が３条残存している。内面にはシボリ痕が認められる。

当土壙の時期は、出土遺物から考えて弥生時代後期前葉であろう。　（岡本泰）





1．黒色粘質土
2．黄褐色粘質土斑黒灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土

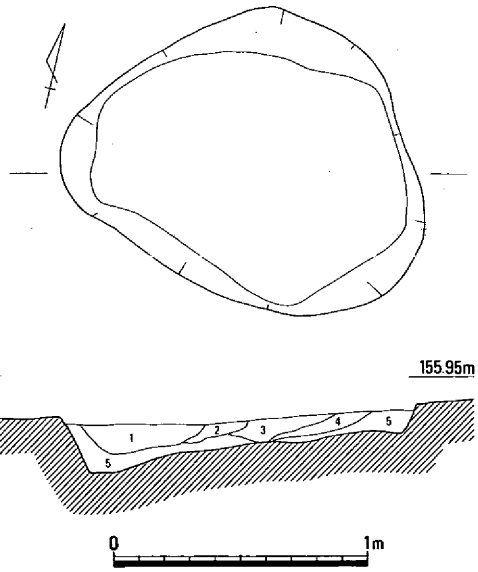
第169図　土壙４（1/30）・出土遺物(1/4)

土壙５（No ３）（第170図）

59RR区に位置する。建物５・10・19と重複する。形状は不整な楕円形を呈し、長径147㎝、短径113㎝、深さは11～23㎝で西側ほど深くなる。ここでは弥生時代の遺構としているが、遺物は全く出土しておらず、また埋土の色調が他の弥生時代の遺構と比較して明るいなど、時期判定には不確定要素が多い。　（岡本泰）

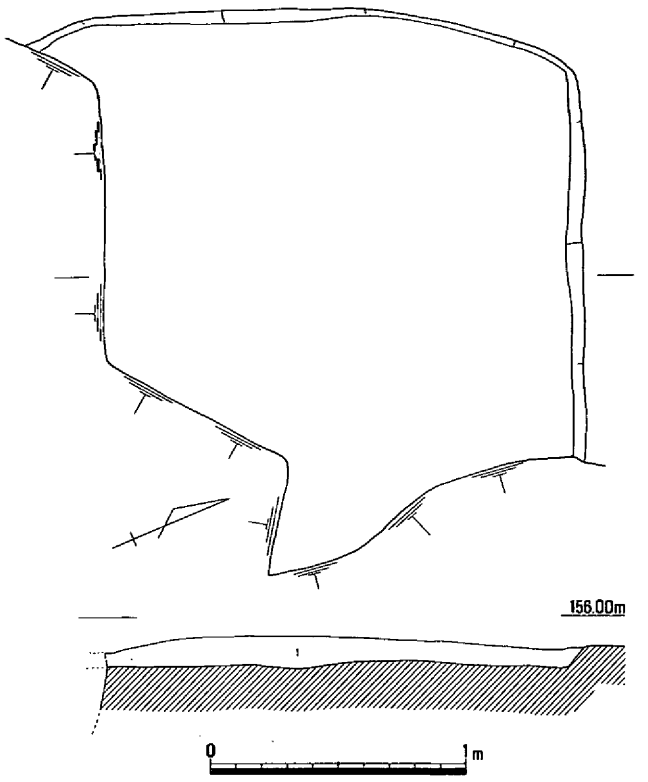
土壙６（No26）（第171図）

59SS区で検出された方形と推定される土壙であるが、攪乱により残存状態は悪く、北西隅しかおさえられない。検出面からの深さは最大で13㎝を測り、底面はほぼ平らである。埋土は黒褐灰色粘質土の単層である。この土壙は、その形状から竪穴住居の可能性も考えられたが、精査にもかかわらず柱穴等は確認できなかった。遺物も出土しなかったが、埋土の類似から弥生時代の遺構としている。　（岡本泰）



1．黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．褐灰色粘質土斑黄灰色粘質土

第170図　土壙５（1/30）

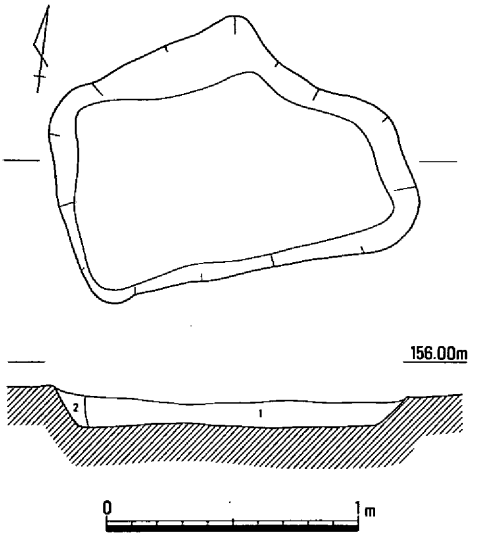


1．黒褐灰色粘質土

第171図　土壙６（1/30）

土壙７（No25）（第172図、図版４）

59TT区に位置する、不整な五角形の土壙である。長径137cm、短径101cm、深さ11cmを測る。壁面の傾斜は、南・西に比べて北・東のほうが緩やかで、底面は平坦である。出土遺物はないが、弥生時代と推定される。（岡本泰）

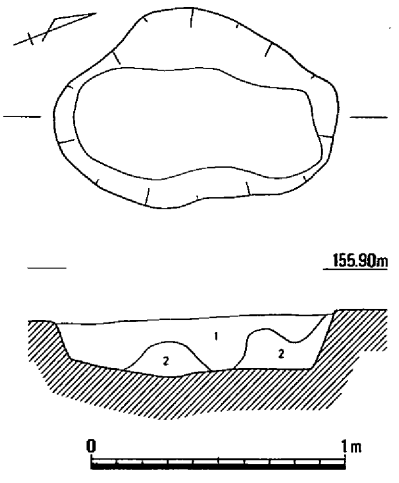


1．黒褐灰色粘質土　　2．黄灰褐色粘質土

第172図　土壙７（1/30）

土壙８（No40）（第173図）

58TT区で検出された土壙である。形状は不整な楕円形で、長径111cm、短径79cm、深さ22cmを測る。壁面は、南北は急、東西は緩く傾斜し、底面には弱い凹凸がある。出土土器は小片ばかりで量もわずかだが、弥生時代後期と推定される。（岡本泰）

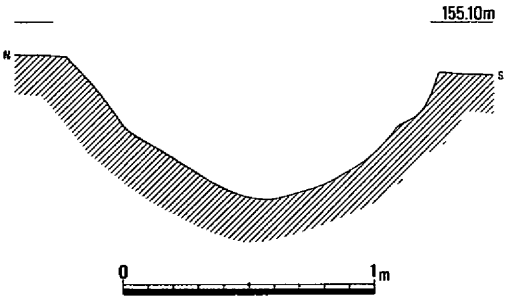


1．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土

第173図　土壙８（1/30）

溝１（No24）（第174図）

調査区の南端、56VV区で一部のみ検出した東西方向の溝で、底面は西方への傾斜を示す。検出面での規模は、幅100～150cm程度、深さは50cm前後である。断面形は台形～Ｖ字形



第174図　溝１（1/30）

を呈する。溝の性格は不明である。遺物は、弥生時代中期かと思われる土器小片が少量出土しているのみである。（岡本泰）

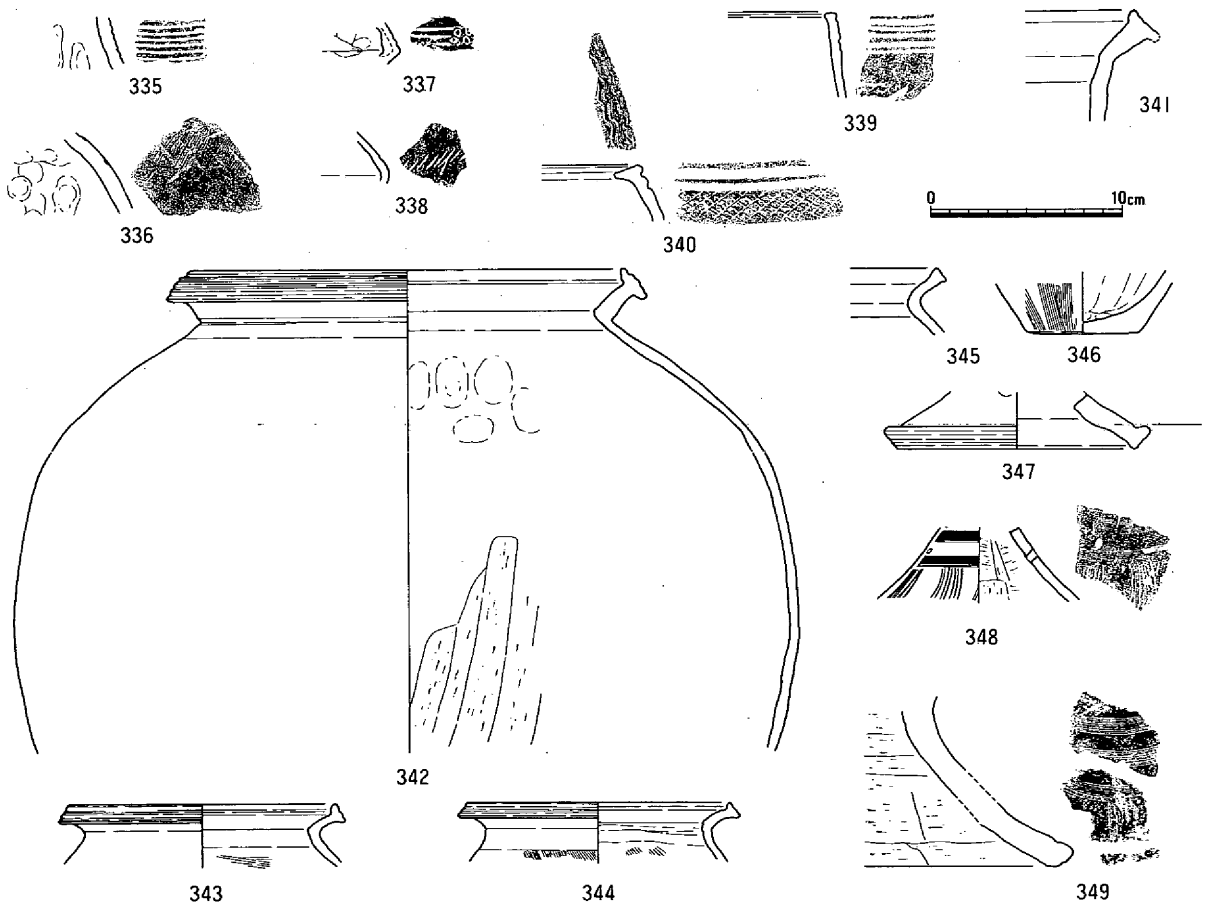
柱穴・包含層出土遺物（第175図）

以上の遺構の他にも、建物や列としてまとまらない柱穴が多数検出されている。ここではそれらの柱穴と、包含層（黒ボク）内から出土した遺物のうち、主要なものを紹介する。なお掲載した土器のうち、**338・339・345・348**が柱穴出土、その他は包含層出土である。

335～338・341は壺形土器である。**335**は頸部で、凹線文で飾られる。**336**は肩部で、２列の刺突文が巡っている。**337・338**は胴部で、**337**は３条の凹線ののち竹管文、**338**は刺突文が施される。**341**の口縁部は、端面にごく浅い擬凹線がみられる。**335・337**の内面には指頭圧痕が残る。

339・340は鉢形土器の口縁部である。**340**については高杯の可能性もある。**340**の外面は、口縁直下に２条の深い凹線、その下は斜格子文が施される。口縁端面には波状文が巡る。**339**は外面口縁直下に５条の凹線を有し、その下には刺突文がみられる。両者とも内面はナデで調整される。

342～346は甕形土器である。**342**は調査区中央よりやや北寄りの包含層内からまとまって出土した破片から復元された。復元口径は228㎜で、口縁端面には４条の凹線を有する。調整は内外面ともナデで、内面下半の一部はヘラケズリされる。**343・344**はそれぞれ復元口径140㎜、138㎜を測り、口縁端面に２～３条の凹線が巡る。調整はナデで、一部ハケ目も残る。**343**の内面には炭化物が付着している。**345**は剥落が激しく詳細は不明。**346**は底径60㎜で、内面に炭化物が付着していた。



第175図　大田松山久保遺跡柱穴・包含層出土遺物(1/4)

347～349は高杯形土器の脚部。**347**は底径126㎜で、全体をナデ調整し、外面の脚裾部と端部の境は凹線状に深く抉られる。また穿孔が1カ所に認められる。**348**は外面ナデ、内面ヘラケズリで、外面上半には10～11条単位の櫛描文が2カ所、下半には7条単位のヘラ描沈線文が施される。櫛描文の間には穿孔がなされている。**349**は外面ナデ、内面ヘラケズリで、外面には10条単位の櫛描文が施される。また、脚裾部外面の端部との境付近には1条の凹線が巡る。

これらの土器は、時期的にはいずれも弥生時代中期後葉～後期前葉の範囲におさまり、他の遺構出土のものとの差異は認められない。従って、この点から見ても当遺跡の弥生集落の存続期間はほぼその範囲に限定されると考えられる。（岡本泰）

3．小結

大田松山久保遺跡で検出された遺構・遺物は、時期的には弥生時代中期後葉から後期前葉の短期間に限定され、他時期のものは含まれていない。空間的には、調査区外への遺構の大幅な広がりは考えにくいことから、存続期間の短い小規模集落との性格が付与できる。

集落は主として竪穴住居と掘立柱建物から構成される。両者の分布を見ると、住居と建物群とが画然と分離している状況が観察される。また、建物の全部が同時存在でないにしても、住居数に比べて建物数の比率が高いという特徴がある。これは今回調査の他遺跡についても同様で、この丘陵部の弥生時代中期後葉～後期前葉の集落の特徴といえよう。なお、墓はまったく検出されておらず、墓域は集落から離れた位置に設けられていたと考えられる。

24棟を数える掘立柱建物は、頻繁な建て替えの結果重複が激しく、棟方向も互いに近似するため、その変遷を詳細に追うことを困難にしている。しかし基本的には、丘陵頂部を北・東・西から「コ」の字形に取り巻く配置が踏襲されていたと思われ、中央に残る空白部には広場としての役割を想定できる。また、従来掘立柱建物の機能に倉庫を充てる場合が多いが、同時期の住居の少なさから、ここでは建物の一部にも住居としての機能を付与しておきたい。その場合、竪穴住居と建物との機能分担、ないしは格差の存在の有無が問題となろう。

こうした集落構成は、同時期の大田茶屋遺跡や大田大正開遺跡にも共通することは既述のとおりであるが、大田松山久保遺跡のほうが建物の規模が大きく、また立地条件からしても両者間に格差の存在が想定される。後期前葉において、各遺跡がほぼ共通の集落構成をもつに至った背景には、この丘陵上で集落間の関係が深化し、一つの結合体が形成されたことが考えられるが、その中でも大田松山久保遺跡は他よりやや卓越した位置を占めていたものと思われる。

このほかに注目される遺構としては、57SS・TT区で並んで検出された長方形土壙群がある。棺痕跡のないことや遺物の出土状況から、土壙墓の可能性は低い。規模がほぼ揃うことから単なる廃棄土壙とも考えにくい。また、美作地域の弥生時代中期の集落に特徴的な「長方形竪穴遺構」とも、規模が小さく床面に被熱痕のない点が異なる。いずれかの建物ないし住居に伴う遺構と思われるが、現在のところ用途は不明といわざるをえない。（岡本泰）

第５節　大田大正開遺跡

１．遺構配置

弥生時代の遺構としては、１区で土壙墓１基・貯蔵穴１基・土壙１基、２区では建物４棟、３区で建物２棟がそれぞれ検出された。中間の４区およびトレンチ調査部分は遺構の空白地帯となっている。なお２・３区ではピットが多数検出されており、その中には当時期の建物の柱穴も含まれると思われるが、調査範囲が道路予定地に限定されたため認定できた建物はわずかであった。ここに報告する建物はすべて整理時に図上復元したものであることを断っておきたい。遺構群の広がりは調査区外にも及んでいることは確実で、今回の調査ではその全容を十分把握できなかった。

２・３区で検出された建物はいずれも１×１間のものだが、調査範囲の制約から本来の形状かどうかは分からない。２区の重複する建物３・４は正方形に近く、一見竪穴住居を思わせるものの中央穴を欠いている。断定はできないが、大田松山久保遺跡などと同様、掘立柱建物の比率の高い集落であったと考えられる。一方、１区は若干の墓や貯蔵穴などが検出されたに留まり、生活空間としての機能は想定しにくい。

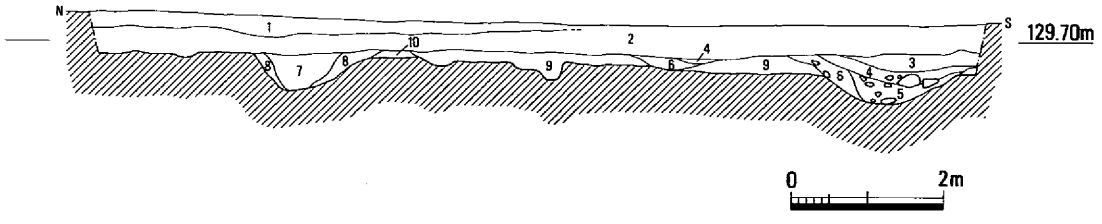
地形的には、１・４区は大田松山久保遺跡が所在する丘陵の西側斜面の末端部にあたり、建物の存在する２・３区はほぼ平坦である。こうした地形と遺構の分布状況から考えると、２・３区は大田茶屋遺跡と一連の居住域で、やや隔てた丘陵裾部の１区周辺に墓や貯蔵穴が設けられていたようである。

調査区の層序は１区西壁と２区中央で観察した。１区では現代の造成土等の直下に時期不詳の茶灰褐色粘質土があり、その下に弥生時代中・後期の遺物を包含する黒ボク層が堆積する。黒ボク下の黄褐色粘質土が地山で、遺構はこの上面で検出されたが、遺構自体は黒ボク上から掘り込まれた可能性もある。２区では明確な黒ボク層はなく、部分的に灰黒色土の残存が認められた。遺構検出面はこの下の黄褐色土（地山）上面である。　（岡本泰）

２．遺構・遺物

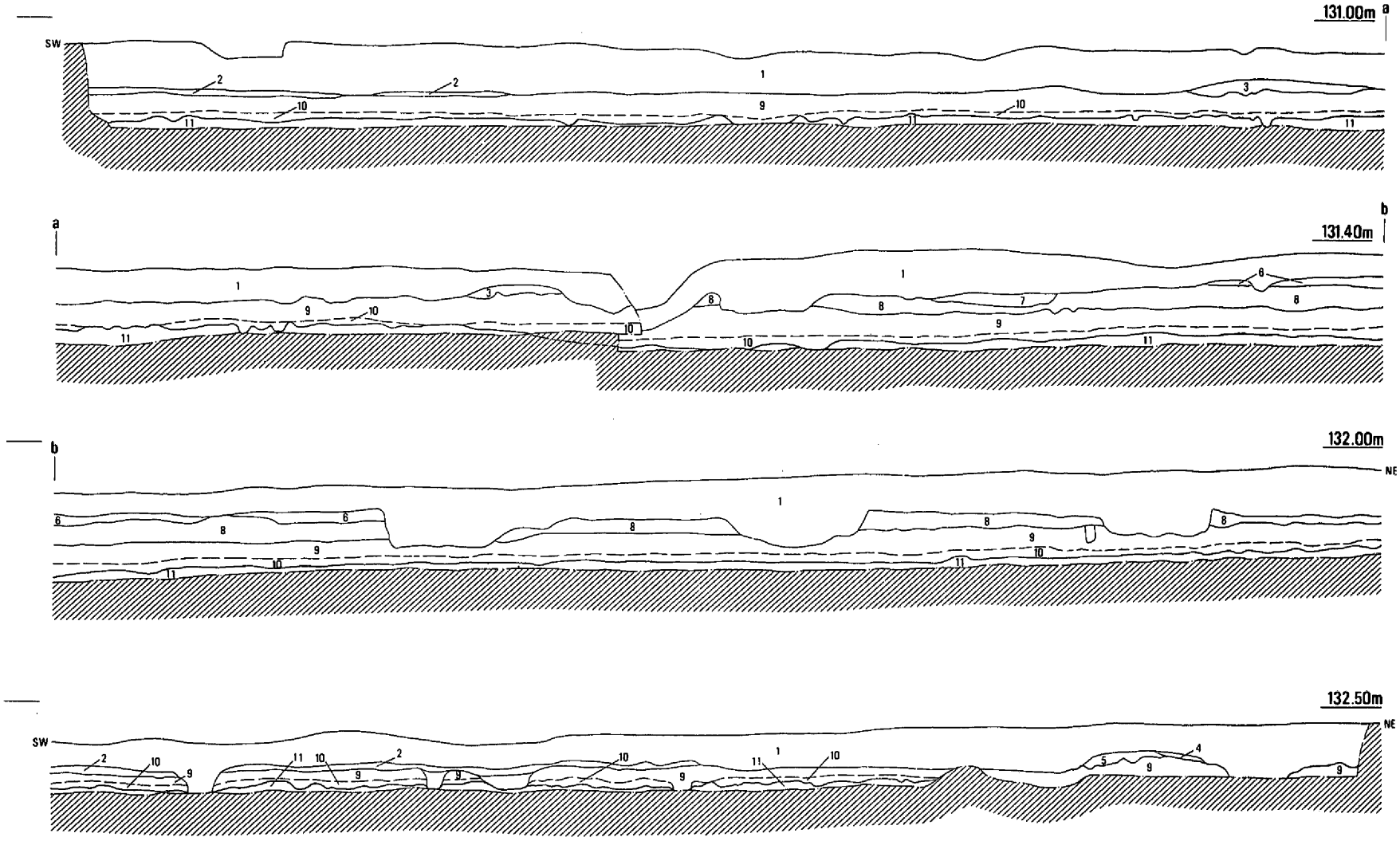
建物１（No14）（第179図）

２区の22D・E区に所在する１×１間の建物である。規模は、桁行442㎝、梁間250㎝、面積11.1㎡で、棟方向はN－9°－Wである。柱穴は円形で、径は46～52㎝とほぼ揃っている。柱穴内からは若干の土器小片が出土したのみで、時期決定は難しいが、棟方向などから弥生時代としたい。（岡本泰）



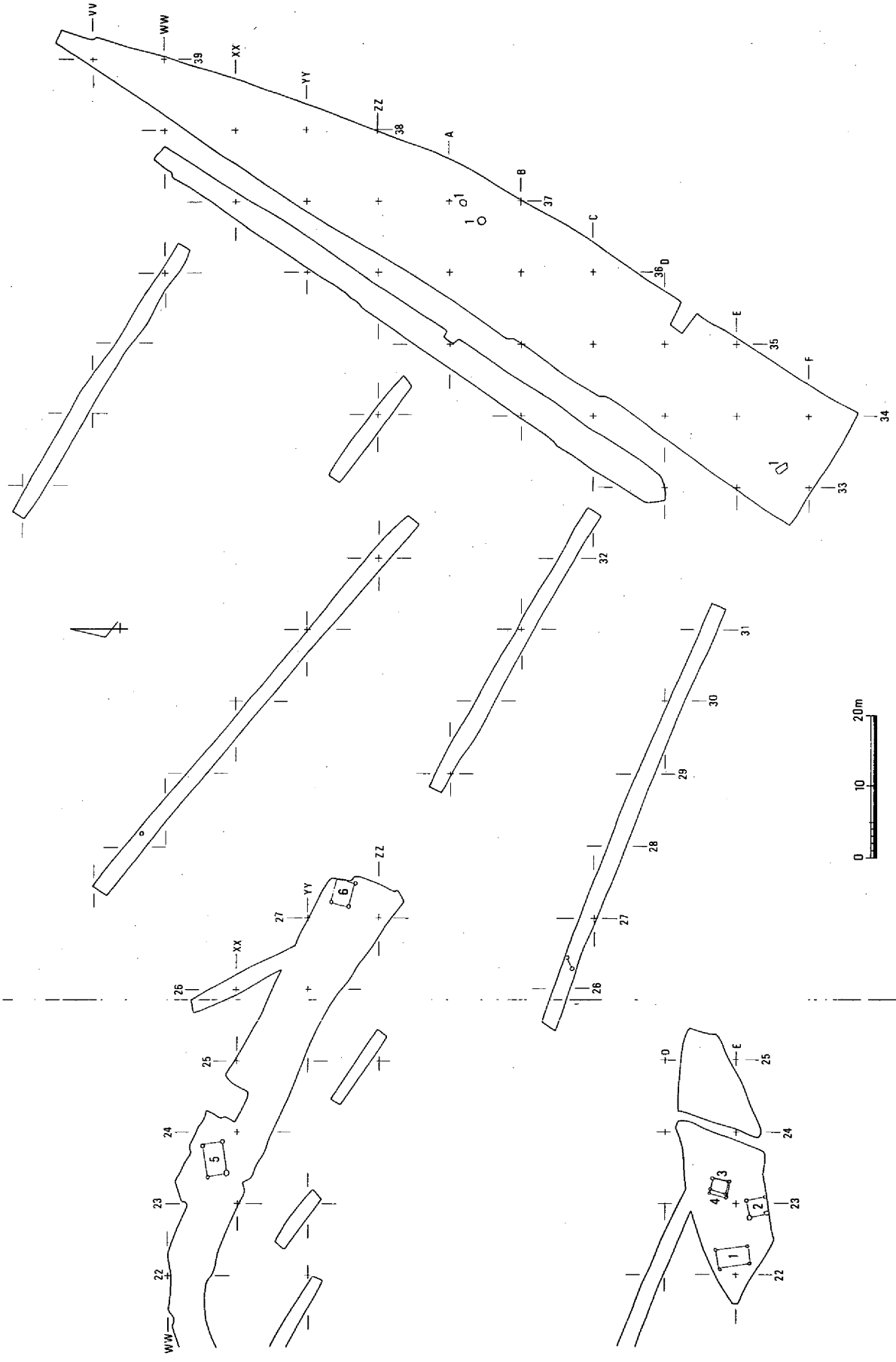
1．灰茶色土
2．黄灰色粘土斑茶灰色土
3．黄色粘土斑黒灰色土
4．黒灰色土（角礫含）
5．灰色土(礫多含)
6．淡灰黒色土
7．黒褐色土（黒ボク）
8．灰黄色土
9．灰黒色土
10．暗灰黄色土

第176図　大田大正開遺跡２区中央土層断面図(1/100)



1．造成土
2．淡褐灰色粘質土(現代水田)
3．灰茶褐色粘質土(畦)
4．黒褐灰色粘質土(畦)
5．茶灰褐色粘質土(畦)
6．褐灰色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．茶灰褐色粘質土
9．黒褐色粘質土(黒ボク)
10．灰黄褐色粘質土(漸移層)
11．黄褐色粘質土(地山)

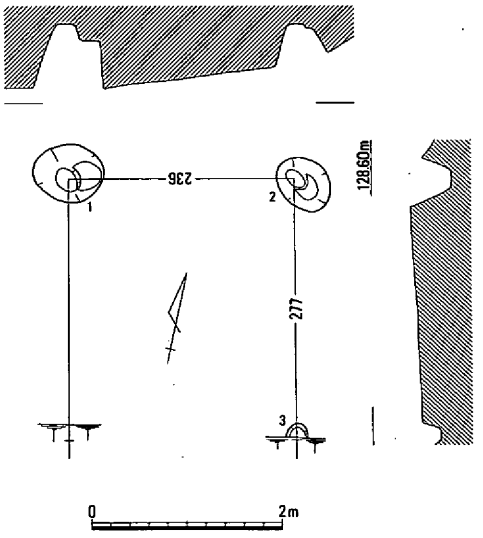
第177図　大田大正開遺跡1区北西壁土層断面図(1/100)



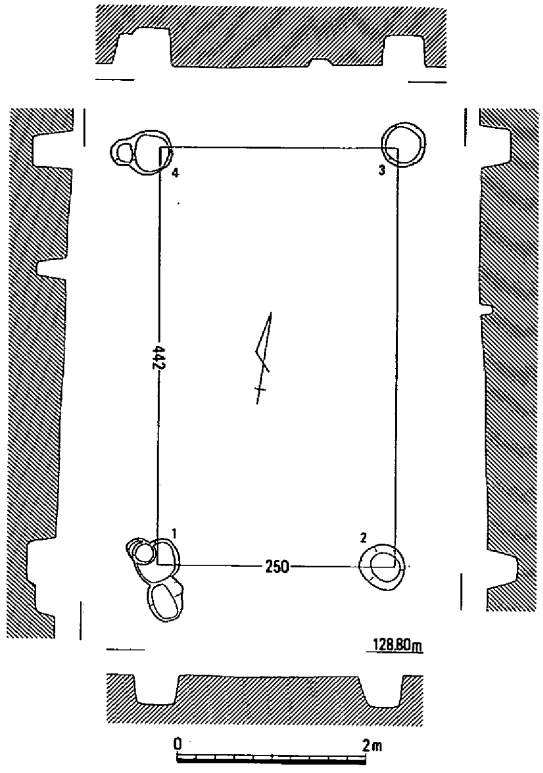
第178図　大田大正開遺跡弥生時代主要遺構配置図(1/800)

建物２（No17）（第180図）

２区の22・23Ｅ区に位置する１×１間の建物である。桁行277cm、梁間236cm、棟方向Ｎ－12°－Ｗを測る。南側の柱穴３は小規模で浅く、一つの建物とするのに疑問もある。遺物はまったく出土せず、時期は確定できないが、棟方向などを考慮して弥生時代と考えている。　（岡本泰）



第180図　建物２（1/80）



第179図　建物１（1/80）

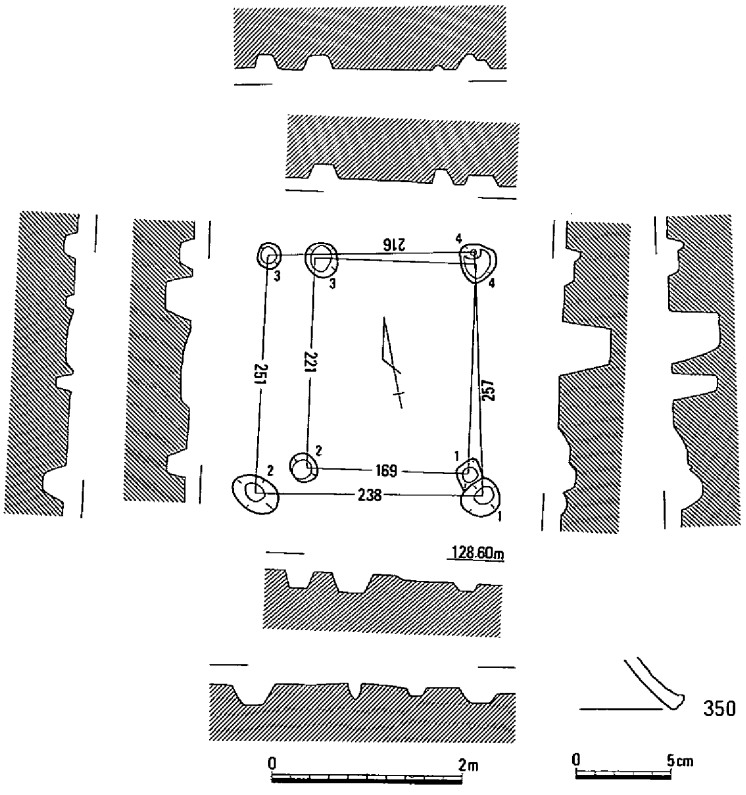
建物３・４（No21・20）

（第181図）

２区の23Ｄ・Ｅ区に位置する、重複した２棟の建物である。柱穴の切り合いからみて建物３が古い。規模は、建物３が桁行221cm、梁間169cm、面積3.7㎡、建物４が桁行257cm、梁間238cm、面積5.7㎡を測る。棟方向はそれぞれＮ－13°－Ｅ、Ｎ－11.5°－Ｅである。柱穴はともに円形で、東側の柱穴１・４には重複がある。

この２棟は、その形態から拡張された竪穴住居を想起させるが、中央穴や壁体溝が認められないことからここでは建物としておく。

建物４の柱穴から高杯脚部**350**が出土しており、時期は弥生時代中期に比定される。建物３も同様であろう。　（岡本泰）

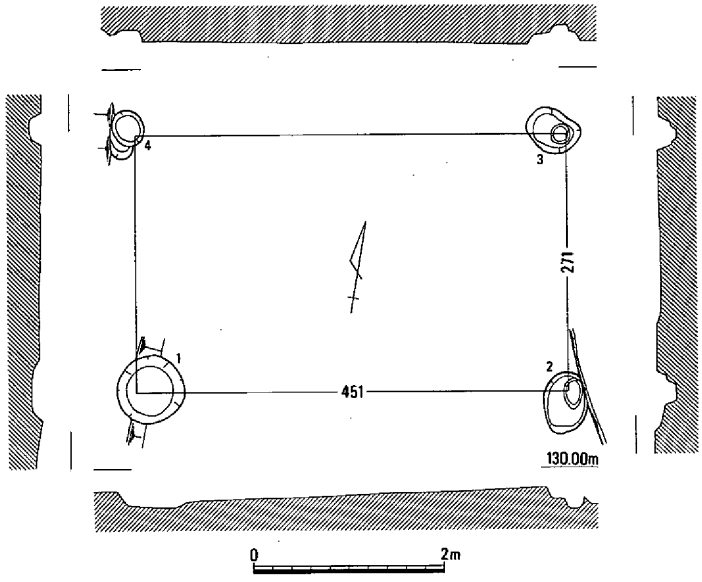


第181図　建物３・４（1/80）・出土遺物(1/4)

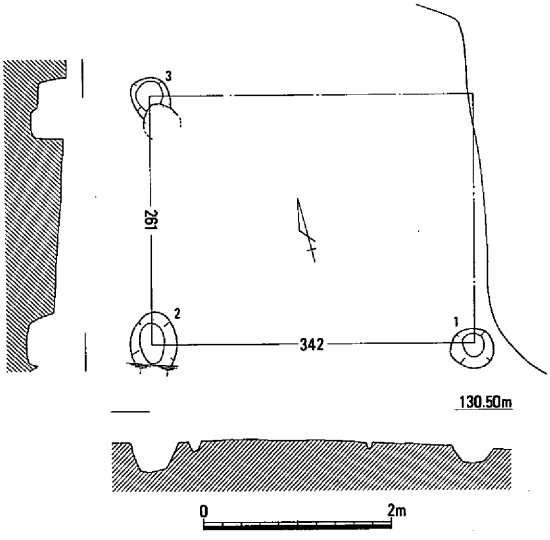
建物５（No13）（第182図）

３区の23WW区に位置する１×１間の掘立柱建物である。規模は、桁行451cm、梁間271cm、面積12.3㎡で、棟方向はＥ－10°－Ｎを測る。検出面はほぼ平坦にもかかわらず、柱穴の形・大きさは不揃いである。東側の柱穴２・３の底面には柱痕らしき窪みが認められた。

時期は、柱穴出土の土器片により弥生時代中期と考える。（岡本泰）



第182図　建物５（1/80）



第183図　建物６（1/80）

建物６（No23）（第183図）

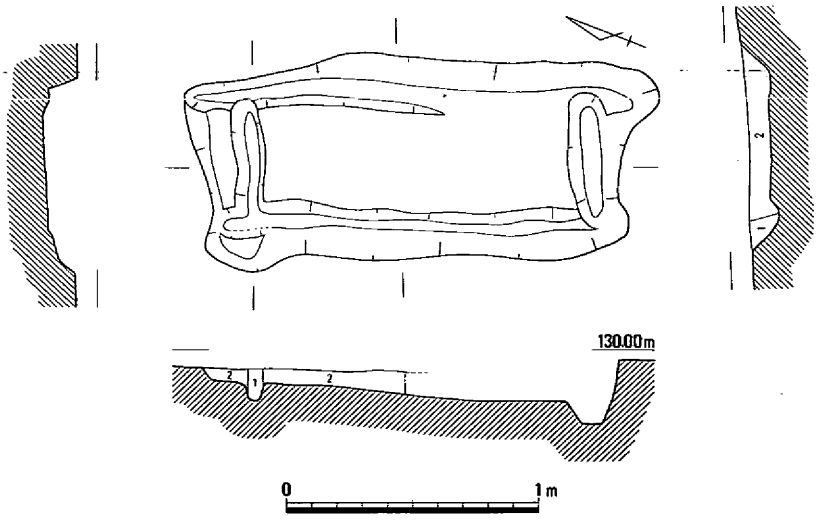
３区の27YY区で検出された１×１間の掘立柱建物である。規模は、現状では桁行342cm、梁間261cm、面積8.9㎡を測るが、調査区の端に位置するため本来の規格かどうかは判然としない。棟方向はＥ－15.5°－Ｎである。柱穴は円形を呈し、南西隅の柱穴２は他と比較して大きく、またやや深めである。柱穴から出土した土器片により、弥生時代の建物と推定されるが、時期を細かく特定するには至らない。（岡本泰）

墓１（No１）

（第184図、図版５）

１区の17YY・ZZ区で検出された土壙墓である。

検出面での規模は全長190cm、幅81cmを測り、底面は南へ緩く傾斜する。底面の四方に木口溝と側板溝が残存しており、断面でも棺痕跡を確認できた。これに基づけば、棺の内法は約120cm×40cm程度となる。墓壙の形状



１．黄褐色粘質土斑暗灰色粘質土　　２．黒色粘質土

第184図　墓１（1/30）

から、側板が小口板を挟む形であったと思われる。

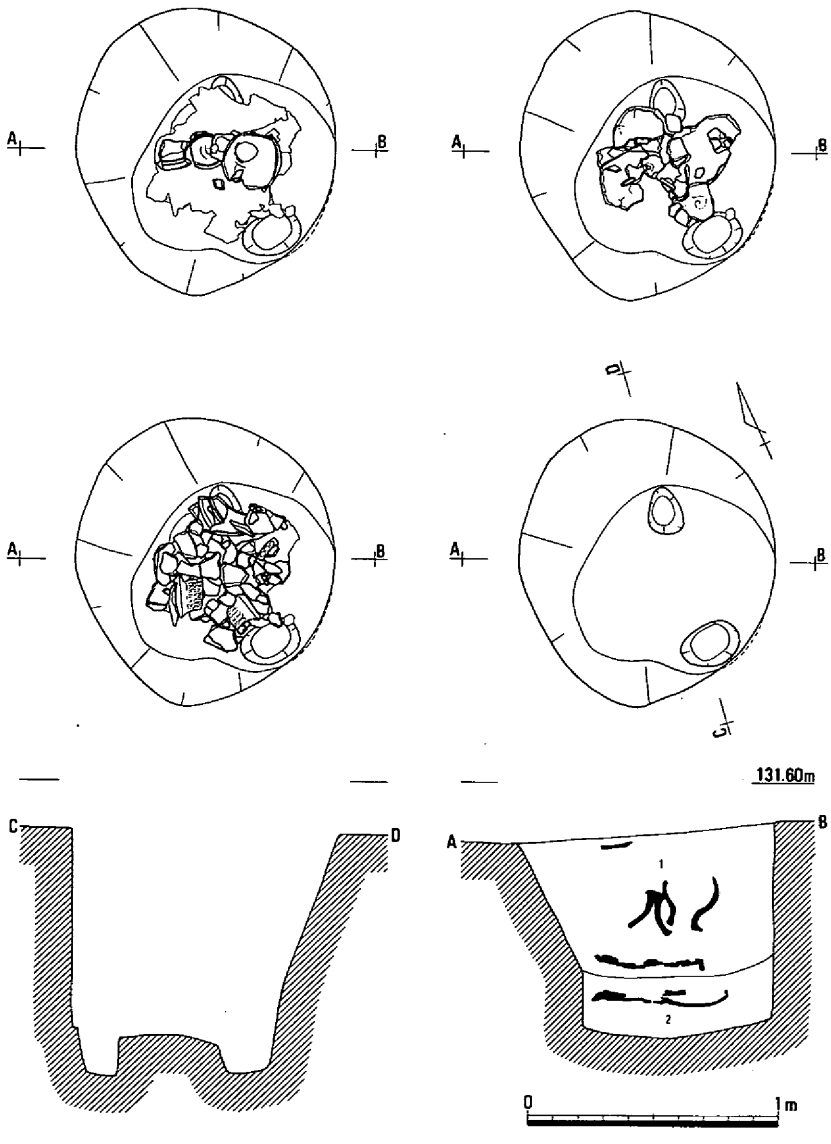
遺物はまったく出土しなかったが、その形態や埋土から弥生時代の墓と考えられる。　（岡本泰）

貯蔵穴1（No 1）（第185～187図、図版5・16）

第2次調査の第67トレンチにおいて検出された。第3次調査を実施した1区の36A区に位置する。検出当初は井戸かと考えたが、完掘した結果、底面から小穴がみつかり、貯蔵穴であると判断した。穴は検出面でやや不整な円形を呈し、長径114cm、短径102cmを測る。穴の底面が中央より南側に片寄っていたため、壁の傾斜は一様ではなく、南東側はほとんど垂直であったが、北西側は少し緩やかになっていた。底面も不整な円形で、長径が83cm、短径は77cmあり、中央部分がわずかに窪んだ凹面をなしていた。底面の南北両端で小穴が穿たれていた。小穴は楕円形で、北の穴が長径19cm、深さ10cmを測り、南の穴は長径24cm、深さ18cmであった。二つの小穴の距離は心々で55cmになった。

埋土中からは多量の土器片が出土した。土器は上下三段に分かれて群集し、下の二段は面状にひろがって重なり合っていた。第185図の左上が上段、左下が中段、右上は下段である。埋土は二層に分けられるが、その境が中段の直下にあり、下層の土は地山の黄褐色粘質土と灰色粘質土の混じり合った土であった。このことから、この二つの面は、それぞれが穴の底に堆積したものとみられ、下段の堆積後に土を入れ、底面を作り直したと考える。下段と上段の破片は大きく、1／2～1／4程度の残存のものがみられた。復元作業の結果、上段から下段まで破片が散乱している個体のあることが確認され、この三段の堆積は一時に形成されたことが判明した。

以上のような状況から判断して、底面の二つの小穴は柱痕で、2本の柱の上に棟木を渡し、上屋



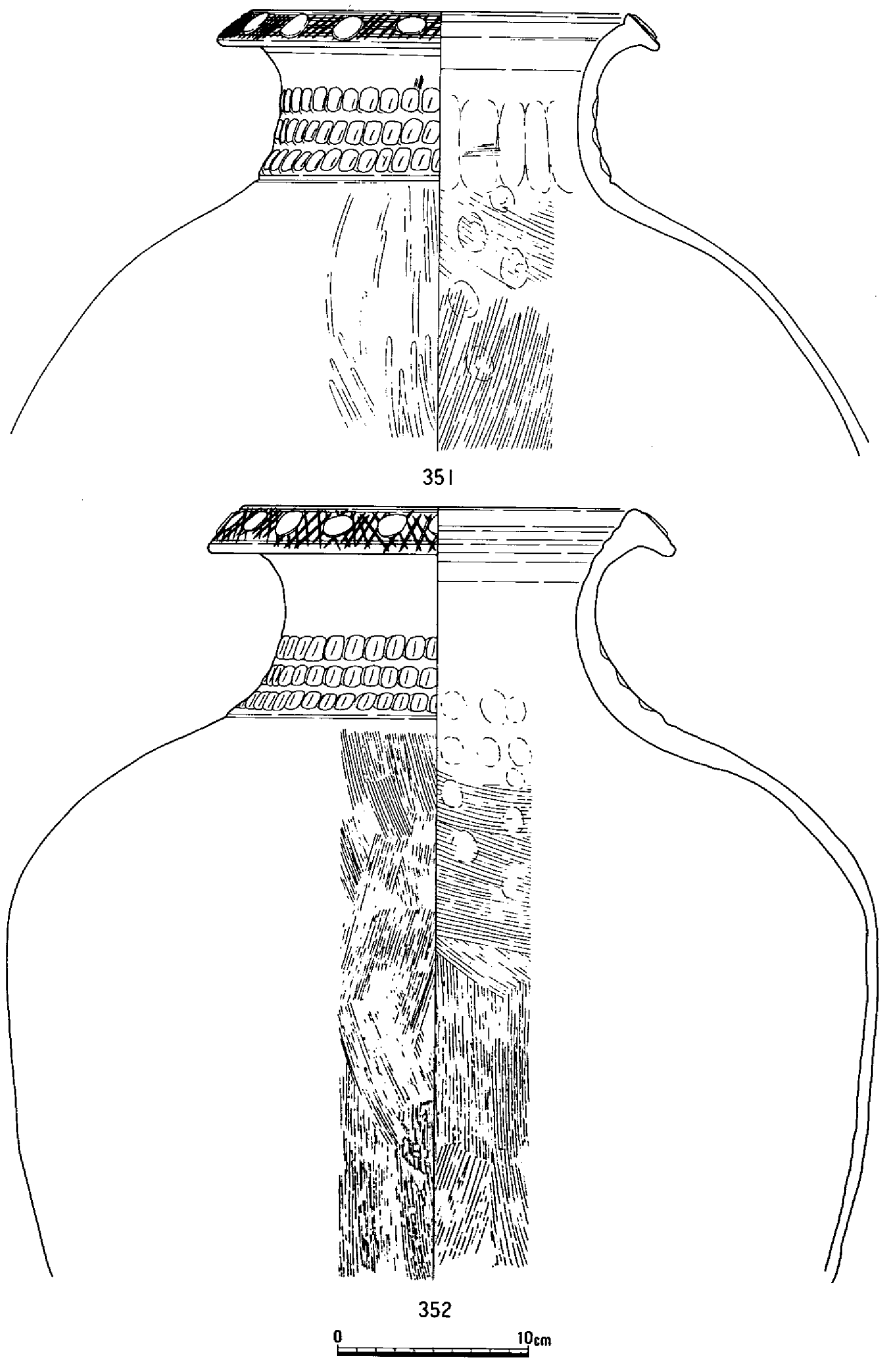
1．暗灰褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑灰色粘質土

第185図　貯蔵穴1（1/30）

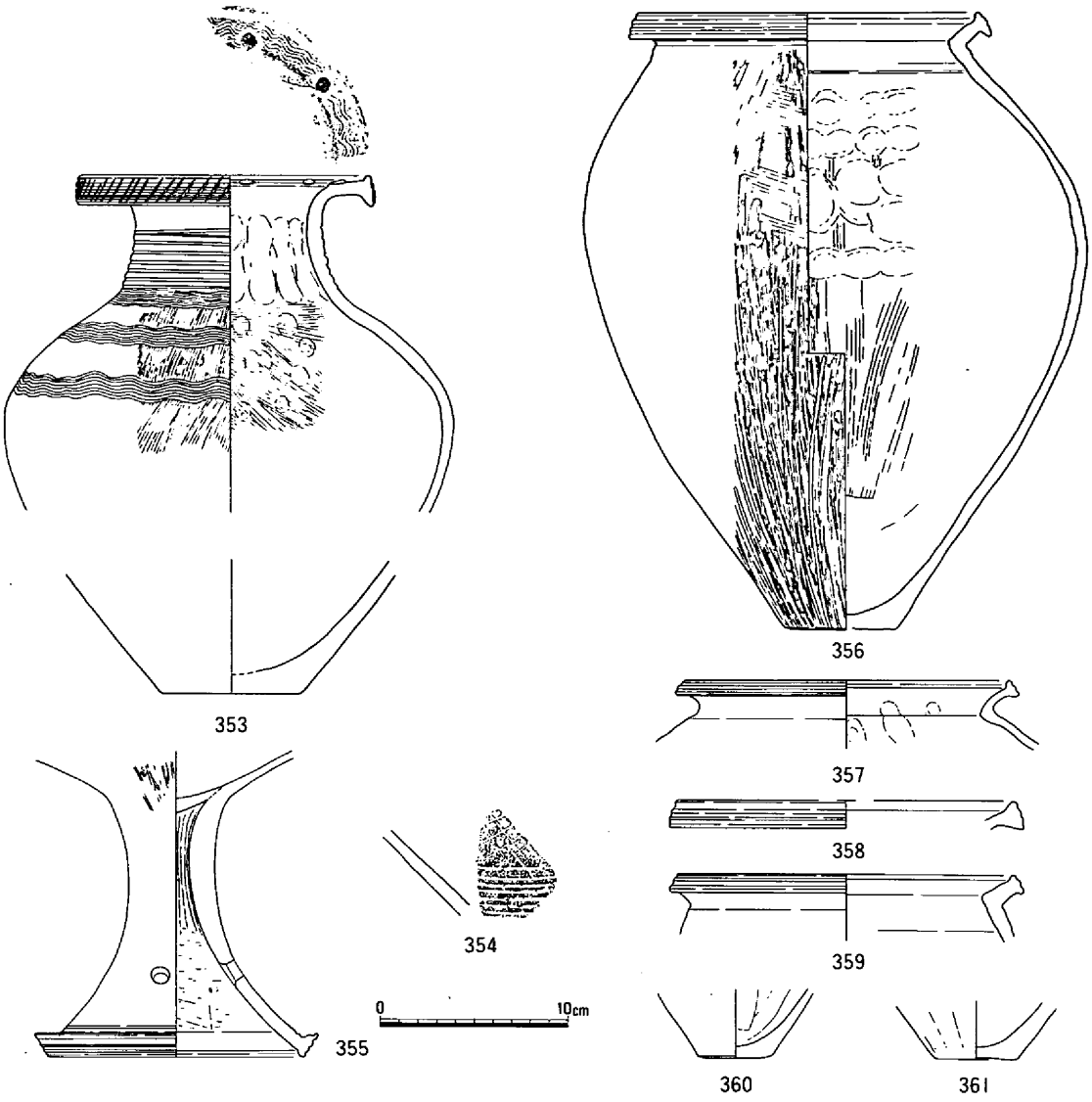
がかけられていたものと推定される。西側の壁の傾斜が緩いのは昇降に関係するとみられ、あるいは西に開口していたかもしれない。土器片は一時に埋められたものであるが、その過程は複雑であった。最初に底面に破片を敷き並べ、それを埋めて一度底面を作り直し、新しい底面に土器片をひろげて置き、それをまた埋める途中で大形の土器片も投入している。穴の廃棄に伴う、このような手の込んだ埋め方には祭祀的な色彩がきわめて色濃くにじんでいる。貯蔵穴１の北東４ｍで検出された土壙１でも底部に大量の土器片の堆積がみられ、同様の意識に基づくものではないかと想像される。

第186・187図に出土した土器を示しているが、**351・352**は上段から下段にかけて破片が散乱していた。**353～355・357・360・361**は上段から、**358**は中段から、**356**は下段から出土した。

351・352の大形の壺は、よく類似した装飾文様を施すが、器形には相違がみられる。文様では、拡張させた口縁端面に凹線を巡らせて刻目を施し、円形浮文を等間隔に貼り付けている。頸部下半には三段にわたって指頭による刺突文が飾られ、頸部と胴部の境には凹線状の段が巡らされる。器形では口縁部と胴部の形態に相違が認められる。**351**の口縁部は端部を上下に拡張しているが、**352**では下方のみへ大きく拡張する。**352**の口縁部内面には凹線が数条巡っている。胴部の形態では最大径の位置がかなり異なっている。**353・354**も壺である。**353**は口縁部を強く外反させ、上面に文様を施



第186図　貯蔵穴１出土遺物(1)(1/4)



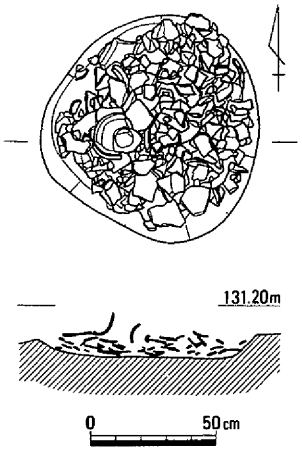
第187図　貯蔵穴1出土遺物(2)(1/4)

す。口縁端部は上下に拡張させて凹線を巡らせ、刻目を施す。頸部の凹線はヘラで描いてヨコナデし、ラセン状になる。胴部はわずかに角張り、上半に櫛描波状文を飾る。胴部外面はハケ調整、下半はヘラミガキである。**354**は短い口縁部と算盤玉形の胴部をもつ壺の肩部で、ヘラ描きの斜格子文の下に凹線文を巡らせる。**355**は高杯である。杯部の底は円盤充塡法による。脚端部を拡張させ、端面にも端部上面にも凹線文を巡らせる。脚部内面には絞り目があり、下半はヘラケズリされる。穿孔は4孔である。**356～359**は甕である。どの口縁部も拡張され、2・3条の凹線が巡らされる。頸部は強くヨコナデされ、胴部との境に段がみられる。**356**の胴部外面は、ハケ調整の後、下半にヘラミガキを施す。

出土した土器の年代は弥生時代中期後葉で、その中でも後半に属するものと考えられる。土器の出土状態から判断して、貯蔵穴1の年代もその時期と考えてよい。　(岡本寛)

土壙1（No 2）(第188～190図、図版5・15)

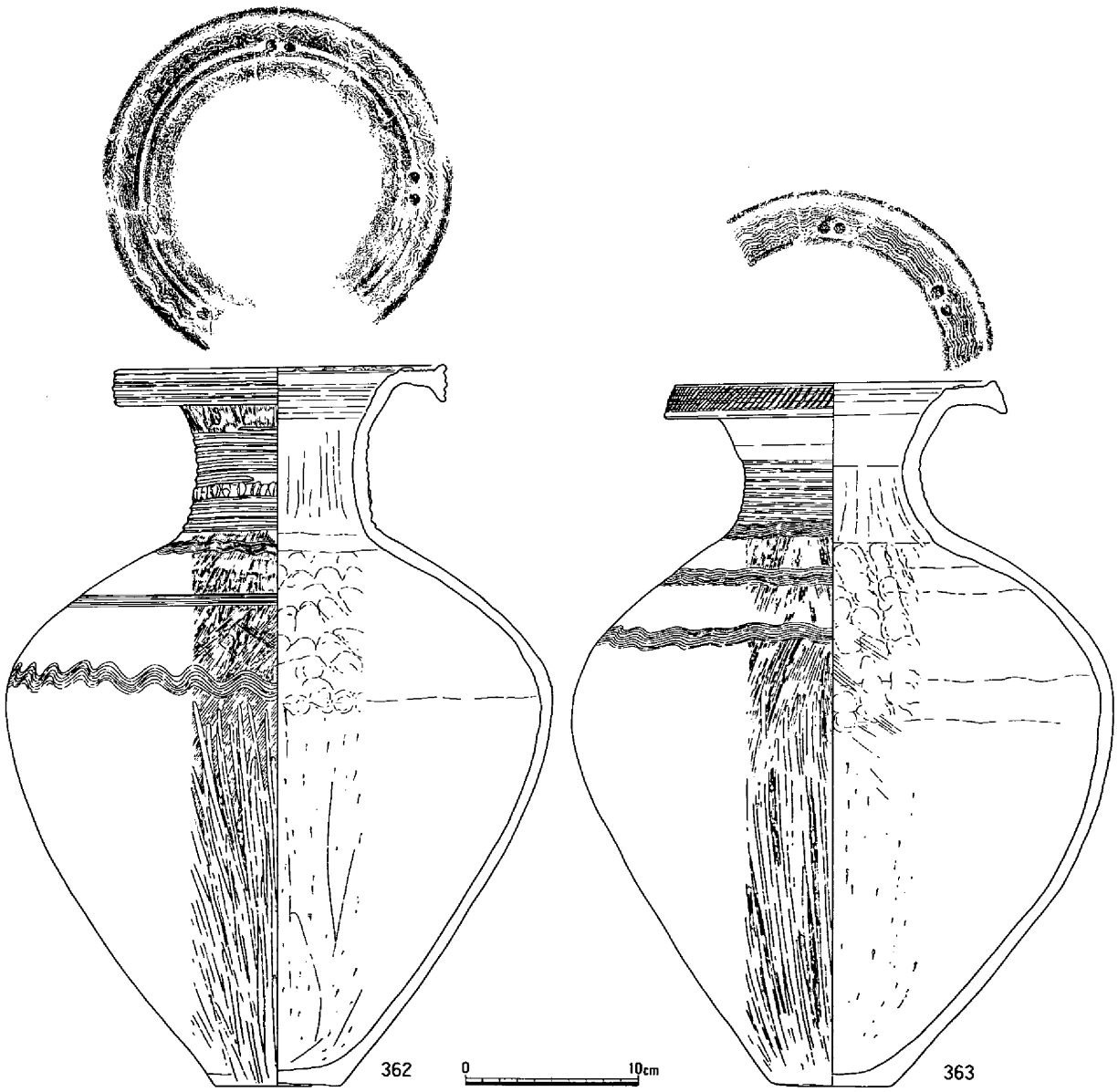
1区の17・18YY区に位置し、最大径90cm、深さ10cmを測る円形の浅い土壙である。埋土中には、土壙全体を埋め尽くすほど大量の土器片が密集した状態で含まれていた。土器の中には検出面より上にはみ出すものもあることから、本来はより深い土壙の底部付近のみを検出した可能性もある。しか



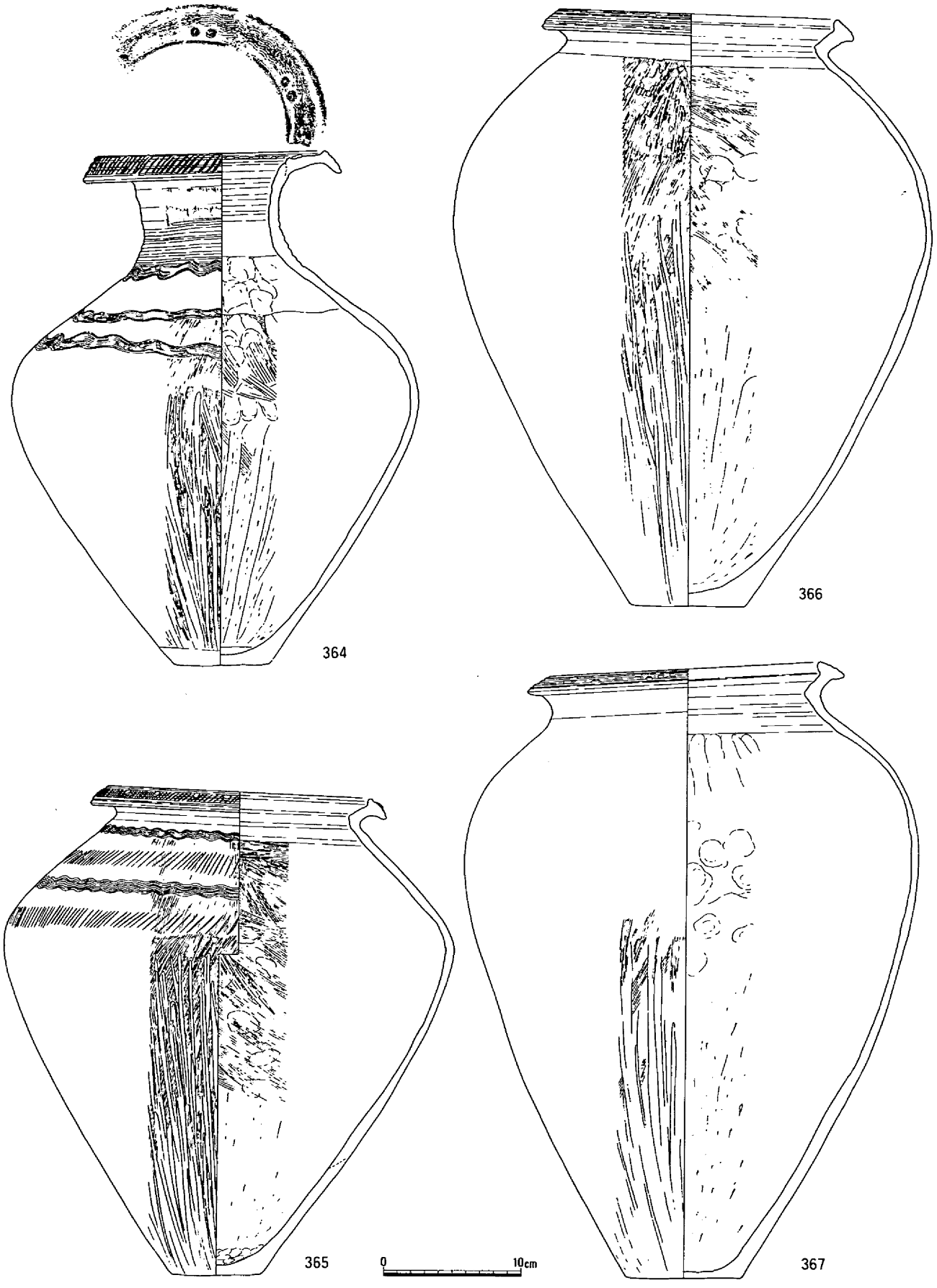
第188図　土壙１(1/30)

しながら、包含層出土として扱った土器片とは接合しないため、土壙内の土器はこれで全てと思われる。なお出土土器片はほぼ全部が接合し、第189・190図に示す６個体の壺・甕に復元された。残存率は６点とも半分以上と良好である。

362～**364**の壺形土器は、いずれも胴部が算盤玉状に膨らみ、口縁部上面の平坦面に波状文と２個一組の円形浮文を有し、頸部は沈線文、胴部上半は櫛描きの直線文と波状文とで飾られるという特徴を共有する。頸部の各部分の調整手法もほぼ同一だが、**363**・**364**の胴部内面上半にはハケ目が残る。頸部の沈線はラセン状をなしている。**362**の頸部には爪形のある押圧文も施される。口径・底径・器高を示すと、**362**が188㎜・73㎜・414㎜、**363**が181㎜・69㎜・409㎜、**364**が176㎜・70㎜・379㎜となる。 **365**も壺形土器である。短い口縁



第189図　土壙１出土遺物(1)(1/4)



第190図　土壙１出土遺物(2)(1/4)

部に角張った算盤玉状の胴部をもつ。装飾手法は胴部上半に波状文と刺突文が交互に、口縁端面に刻目と円形浮文が施される。口径・底径・器高は、190㎜・65㎜・367㎜である。

366・367は甕形土器である。口縁端面の凹線以外には特に装飾はみられない。胴部外面下半は丁寧なナデ・ヘラミガキで仕上げられている。**366**では内外両面の胴部上半に縦から斜め方向のハケ目が顕著に残る。口径・底径・器高は、**366**が200㎜・85㎜・454㎜、**367**が212㎜・85㎜・439㎜である。

土壙の時期は、以上の出土土器の特徴からみて弥生時代中期後葉であり、その中でも新しい段階に比定されよう。性格としては、不要になった土器をまとめて廃棄した土壙と考えられ、土器の残りの良さからも、当該期の良好な資料を提供したといえよう。　（岡本泰）

土器溜まり（第191・192図）

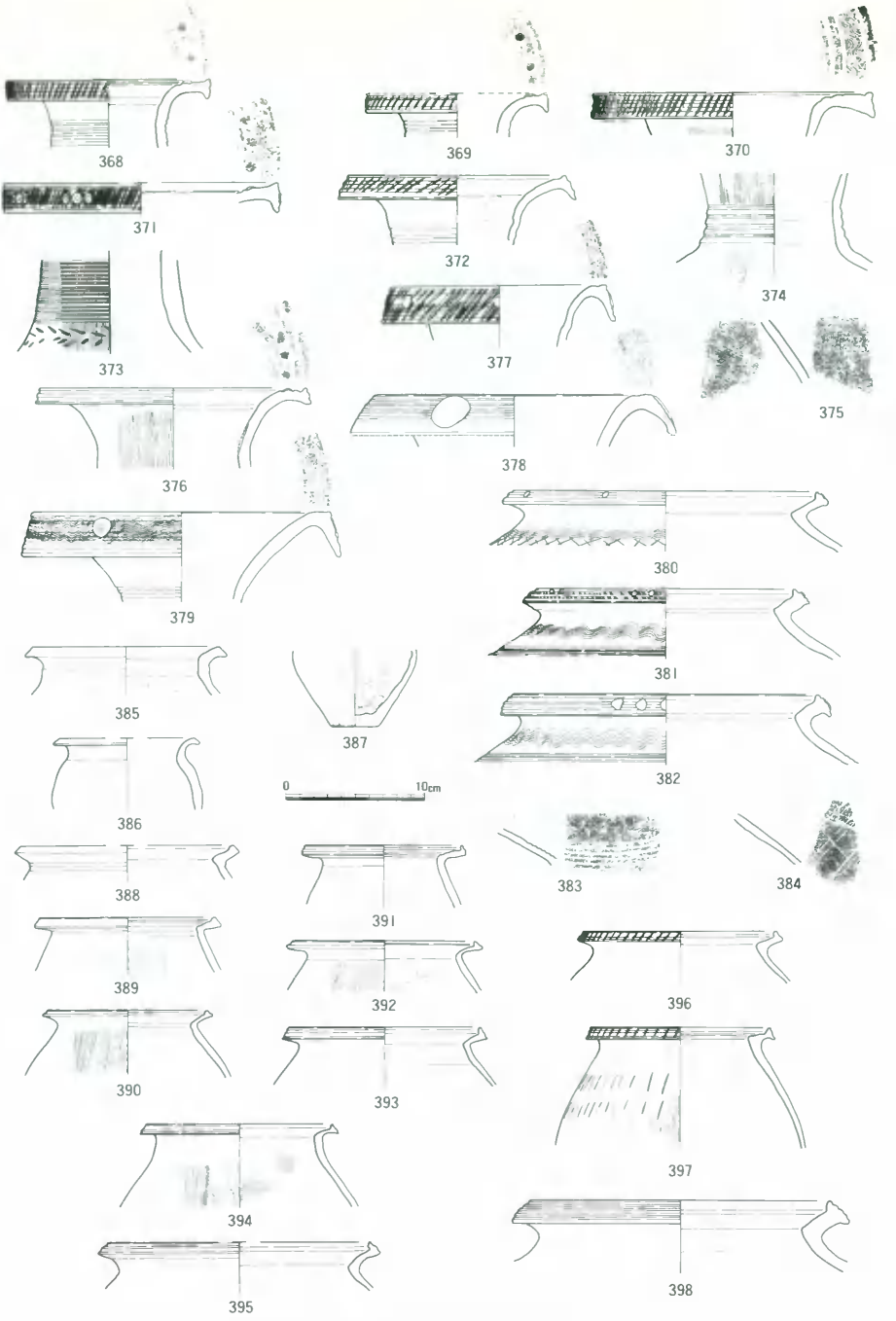
1区の36YY,ZZ区付近から多量の土器片が出土した。土器片は第177図の第9層にあたる黒褐色粘質土（黒ボク）層に包含されていた。土器片はぎっしりと密着した状態ではなく、包含層中である程度上下に幅をもち、土器片の間にも土が挟まれていた。この地区では黒ボクの上面での遺構検出が困難であったため、あるいは大きな落ち込みが存在していた可能性もある。しかし、土器溜まりのあった地点は大田茶屋遺跡の西地区と東地区を分ける谷筋の谷頭付近とみられるため、もともとの緩斜面に周辺の集落から土器片が流出したり、人為的に投棄されたものと思われる。出土した土器の年代をみると弥生時代中期中葉から後期前葉まで幅があり、長期にわたる堆積の結果とみられる。

368～387は壺である。中期後葉の壺には大別して二種類がある。一つは細長い頸部から口縁部が大きく外反するもので、一つは短い口縁部と算盤玉形の胴部をもつものである。後者の**380～384**は口縁端部を拡張して端面に凹線を巡らせ、刻目や円形浮文で飾る。胴部には櫛描波状文や直線文を飾るものが多いが、凹線文や斜格子文もみられる。前者の壺はさらに細分ができる。**368～371・376**は口縁部を水平に折り曲げ、上面に文様帯を作る。拡張された口縁端面には凹線文が施され、刻目を巡らせるものがほとんどである。**372**は口縁部が緩やかに外反し、端部は下方の拡張が大きい。**377～379**は口縁端部を折り曲げたように拡張させる。口縁の上端には平坦面を作り、櫛描波状文を飾る。口縁端面には凹線文を巡らせ、刻目や櫛描波状文で飾り、円形浮文を貼り付ける。これらの壺の頸部には凹線文帯を施すが、**374**のように太くて条数の少ないものから、**373**のようにヘラ描きの沈線を20条近く巡らせるものまでみられる。**385・386**は後期前葉の壺で、口縁端部を下方に少し拡張させる。頸部に強いヨコナデがなされる。**387**は**386**のような小形壺の胴部下半とみられる。

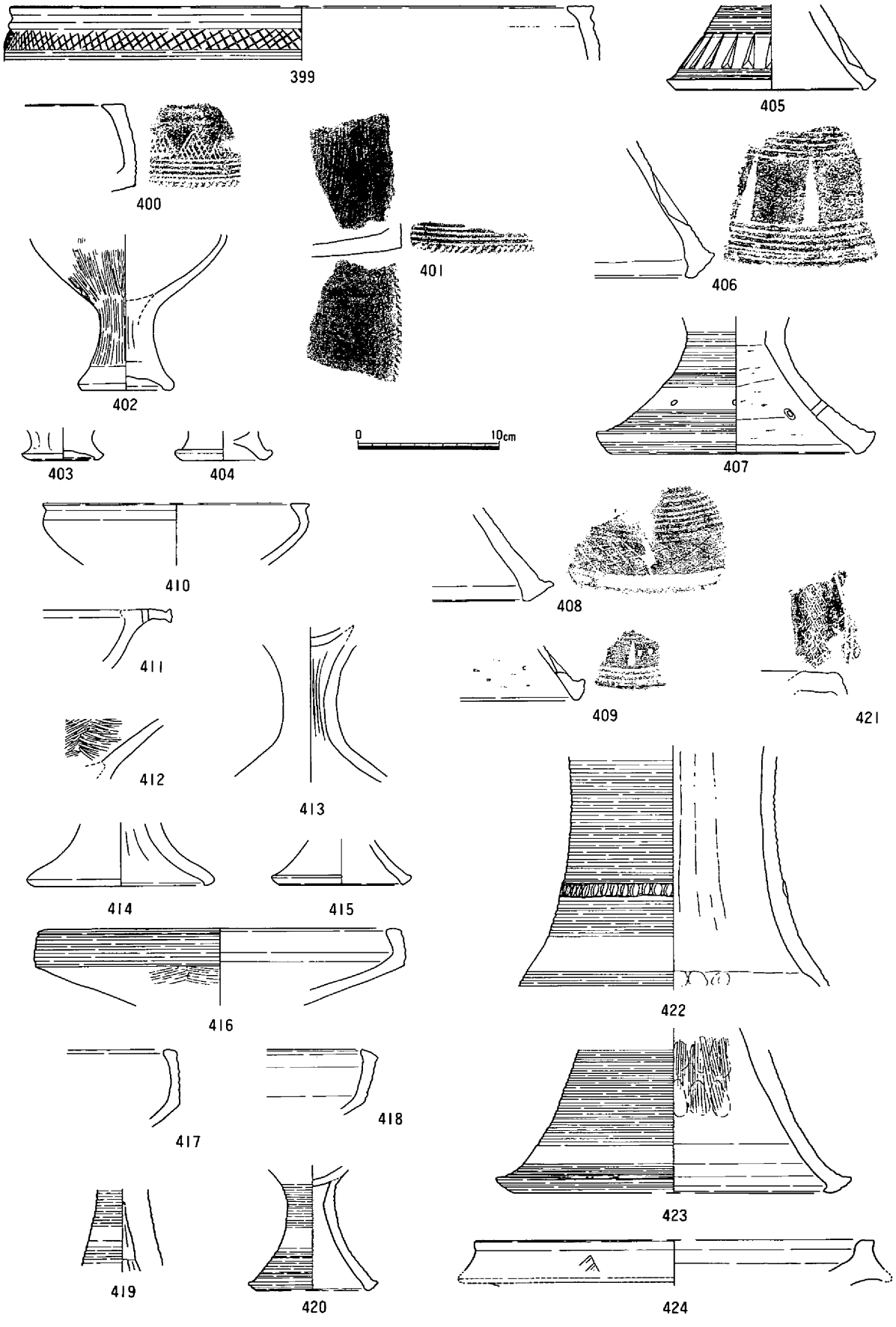
388～398は甕で、中期後葉のものとみられる。小形の甕では口縁端部を折り返したように上方へ拡張したものがほとんどである。口縁端面には、1、2条の凹線を巡らせるものが多い。**396・397**の口縁端面には刻目が施され、**397**の胴部にはハケ状工具による刺突文を二段に巡らせる。

399～401は中期後葉の脚台付き鉢であろう。器体上部は屈折して内傾ぎみに立ち上がり、口縁端部は拡張させて、水平な面を作りだしている。**399**では水平面に3状の凹線を巡らせている。器体上部の外面には中央にヘラ描きの斜格子文や格子目の鋸歯文を飾り、上端や下端に凹線文を施す。

402～409は中期中葉の脚台で、壺か鉢に付く。**402～404**は脚端面をもち、底部は凹面になる。**402**の上部の器体の底は円盤充塡である。**405～409**は高い脚台で、脚端部を拡張する。脚端に凹線文を施し、少し間隔を置いて上方にも凹線文帯を巡らせる。その間には円形ないしは三角形の透かし孔を飾る。三角形の孔は貫通しない。**408**は端部にヘラ描きの斜格子文を飾り、その上に凹線文を巡らせる。内面の調整は、**406・408**のようにナデるものと、**407・409**のようにヘラケズリのものがある。



第191図　土器溜まり出土遺物(1)(1/4)



第192図　土器溜まり出土遺物(2)(1/4)

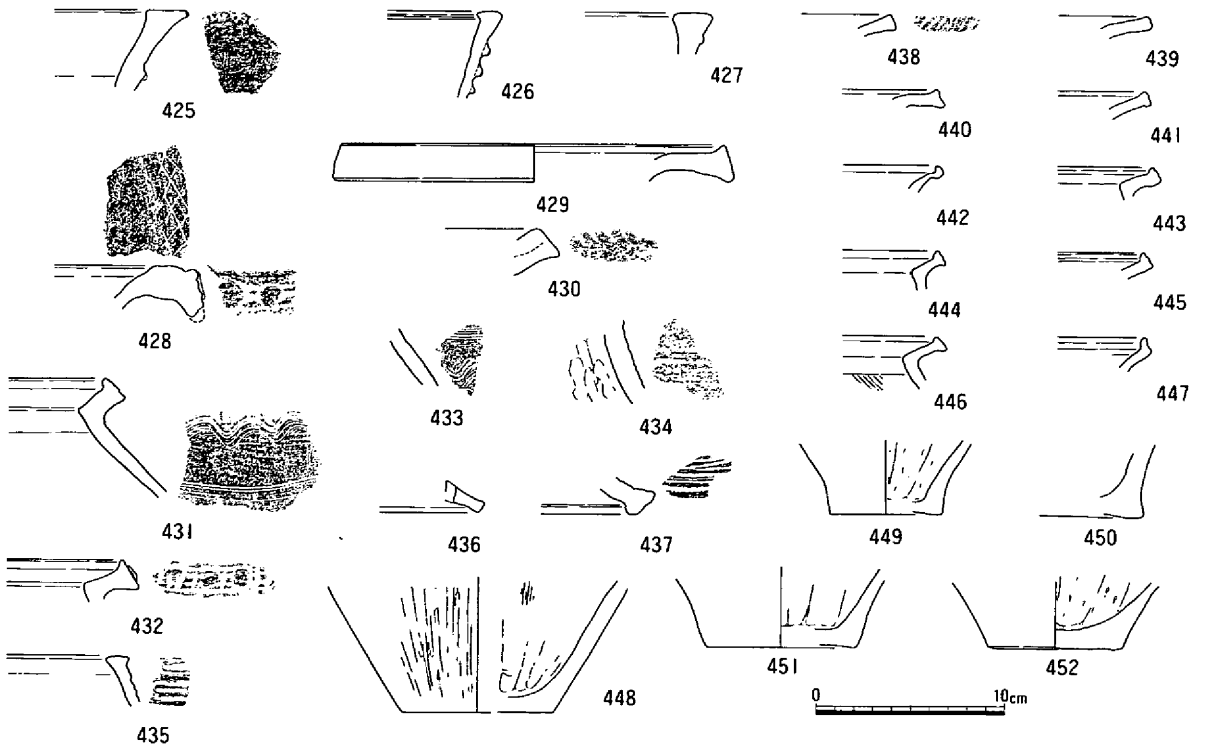
410～420は中期の高杯である。杯部の形には変化がある。410は杯部上部を内湾させ、口縁端部を拡張して端面を作る。411の口縁端部外面には鍔のような円板が付く。ともに年代は中期中葉の可能性がある。416～418は杯部上部が屈折して立ち上がり、外面に凹線文を巡らせる。中期後葉のものである。脚部では二種類がみられる。413～415は外面が無文で、脚端部はわずかに拡張させる。419・420は外面に二段の凹線文帯を巡らせ、脚端部を拡張している。

421～424は器台である。421は口縁上端に広い平坦面を作り、端部を下方に大きく拡張させる。端面には凹線文を巡らせ、口縁端面にも上端の平坦面にもヘラ描きの斜格子文を飾る。422は器体の中央部から下半、423は脚端部の破片である。全面を凹線文で飾り、脚端部より少し上に無文帯がある。422では中央部よりやや下に指頭による連続刺突文が１条巡らされる。以上の器台の年代は弥生時代中期後葉だが、424は後期前葉のものである。口縁端部を大きく拡張し、とくに上方へは直立し、断面形が方形の突起となる。口縁端面にはヘラ描きの複線鋸歯文を巡らせるようである。　（岡本寛）

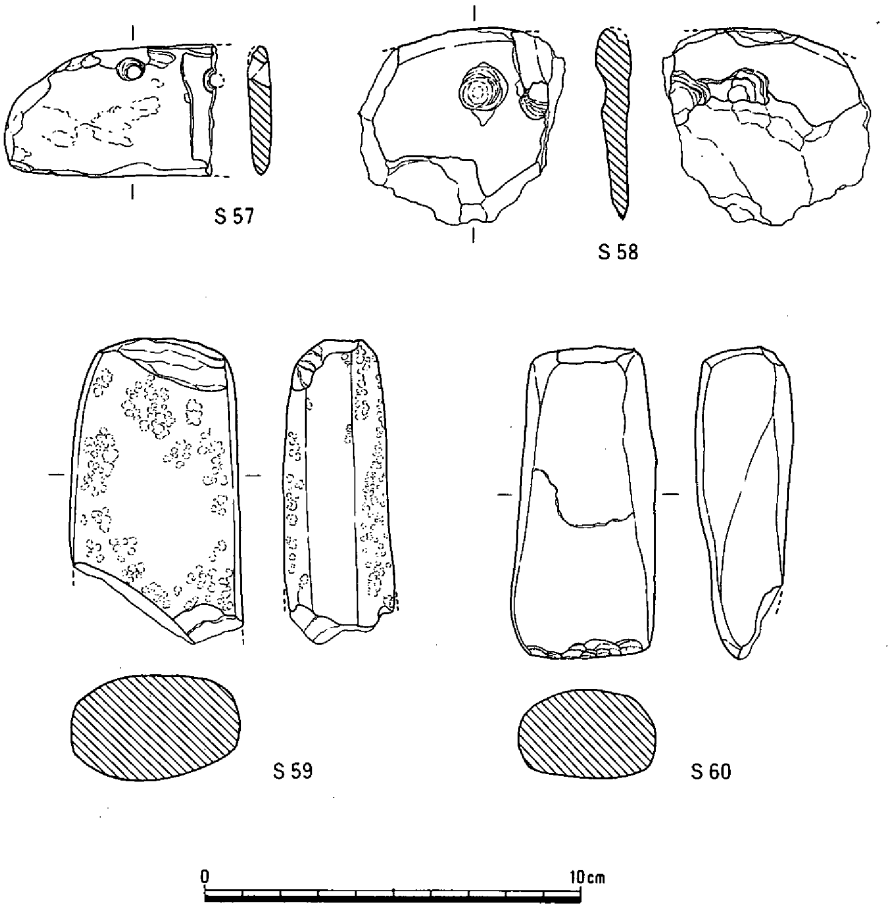
柱穴・包含層出土遺物（第193・194図、図版16）

第193図には建物としてまとまらなかった柱穴や包含層から出土した土器を示した。それぞれの出土地区は、432が第２次調査の第67トレンチ、428・433～437・440・444・446・452は２区、その他は３区である。425～434は壺、435・436が鉢、437は器台、438～447は甕である。

425～427の壺は口縁部が直口状に立ち上がり、端部を拡張させて平坦面を作る。外面には突帯を貼り付けている。429は強く外反する口縁の端部を上方へつまみ上げている。430は口縁端面に貝殻腹縁による刺突文を綾杉状に施している。以上の壺は弥生時代中期中葉と考えられる。428の口縁部は上部に平坦面を作り、ヘラ描きの斜格子文を飾る。端部は下方に拡張させる。431・432は短い口縁部の壺で、拡張させた口縁端面には凹線文を巡らせる。433は肩部、434は頸部である。これらの壺は中期後葉とみられる。



第193図　大田大正開遺跡出土遺物(2)(1/4)



第194図　大田大正開遺跡出土遺物(3)(1/2)

435の口縁端部は拡張させて端面を作り、端面から外面にかけて凹線文を飾る。436の脚には穿孔があり、437は端部を拡張させ、外面には凹線文を巡らせる。

438～447の甕の口縁部では、口縁端部を上方へつまみ上げるものが多い。438の端面には刻目が施され、443・445では端面に２条の凹線が巡らされる。

第194図には石器を示した。S58は３区、他は１区出土である。

S57・58は石包丁である。S57は半折した成品で、全面を研磨されているが、凹凸がみられる。刃部は直線状をなす。S58は未成品である。両側から穿孔する途中で廃棄されている。上部では一部に研磨がなされている。

S59・60はいささか形状が整っていないが、石斧と考えている。S59は刃部を欠き、基部に剝離がみられる。風化のためか、表面はざらざらしている。S60は刃部に小さな剝離があり、図の裏面には使用時に欠損したかと思われる大きな剝離がみられる。表面の研磨は明瞭ではない。　（岡本寛）

３．小結

大田大正開遺跡で検出された主要な遺構の配置をみると、１区と２・３区に別れ、その間には空白地帯が存在する。この地区は大田茶屋遺跡を東西に分けていた谷筋の上流にあたっているため、もともと住居や建物の立地する場所ではなかったと思われる。この空白地帯の西の２・３区には建物が複数検出されているが、東の１区には貯蔵穴・土壙・墓が各１基のみで、土地利用の上から明瞭な使い分けがなされていたと考えられる。２・３区周辺が主要な生活の場である居住域であり、１区周辺はそれに付属した地域で、必要に応じて訪れる場所であったと思われる。

出土した遺物を検討すると、３区では弥生時代中期中葉の土器が散布するが、２区では中期後葉の土器が多くを占める。このことからすれば、最初に３区あたりに形成された集落が、２区へ、さらには大田茶屋遺跡まで拡大していったことが想定される。建物３・４が竪穴住居である可能性はあるが、大田大正開遺跡に所在した集落も掘立柱建物が優位を占めていたと考えられる。　（岡本寛）

第６節　大田障子遺跡

１．遺物

土器（第195図）

弥生時代の遺構は検出されていない。削平等の影響も考えねばならないが、弥生時代の遺構は隣接する大田茶屋遺跡東地区の中央北寄りと南西部に集中して検出されており、大田障子遺跡は周辺部にあたり空白地であったとも考えられる。一方、調査区中央部の包含層や表土中からは当期の遺物の出土をみる。土器はほとんど小片であるが、各器種がそろい、保存状態のよいものも散見される。

453～**463**は壺形土器の口縁部から頸・胴部にかけての破片である。いずれの土器とも拡張された口縁端面に３～４条の凹線が巡り、その上から縦ないし斜め方向の刻目が入るという特徴を共有する。端面は内傾するものと、**455**～**458**のようにほぼ直立するものとがある。また口縁～胴部の形態をみると、**459**のように長い頸部を有するものと、**460**のように口縁が肩に直結するものとに大別できる。**455**の口縁部上面には間隔をおいて２条の沈線が巡り、両沈線間に円形浮文、外側の沈線と外端との間に波状文が施文される。**462**の口縁端面にも２個一組の円形浮文が１カ所に認められる。**459**は口縁部を欠失する大形破片である。頸部の付け根付近に７条、少し間隔を置いた上に１条の沈線が残存する。器面の剝落が激しいため文様や調整の詳細は観察できない。**460**は口径196㎜を測り、口縁端面には４条の凹線と刻目、肩部にはヘラ描きの沈線文と斜格子文がみられる。**464**は壺形土器の把手と思われる。断面はほぼ円形だが、全体にナデで調整され、面が形成される。**465**～**467**は壺形土器の肩部である。外面には櫛描きの波状文と直線文が交互に施され、内面にはナデや指頭痕が残る。

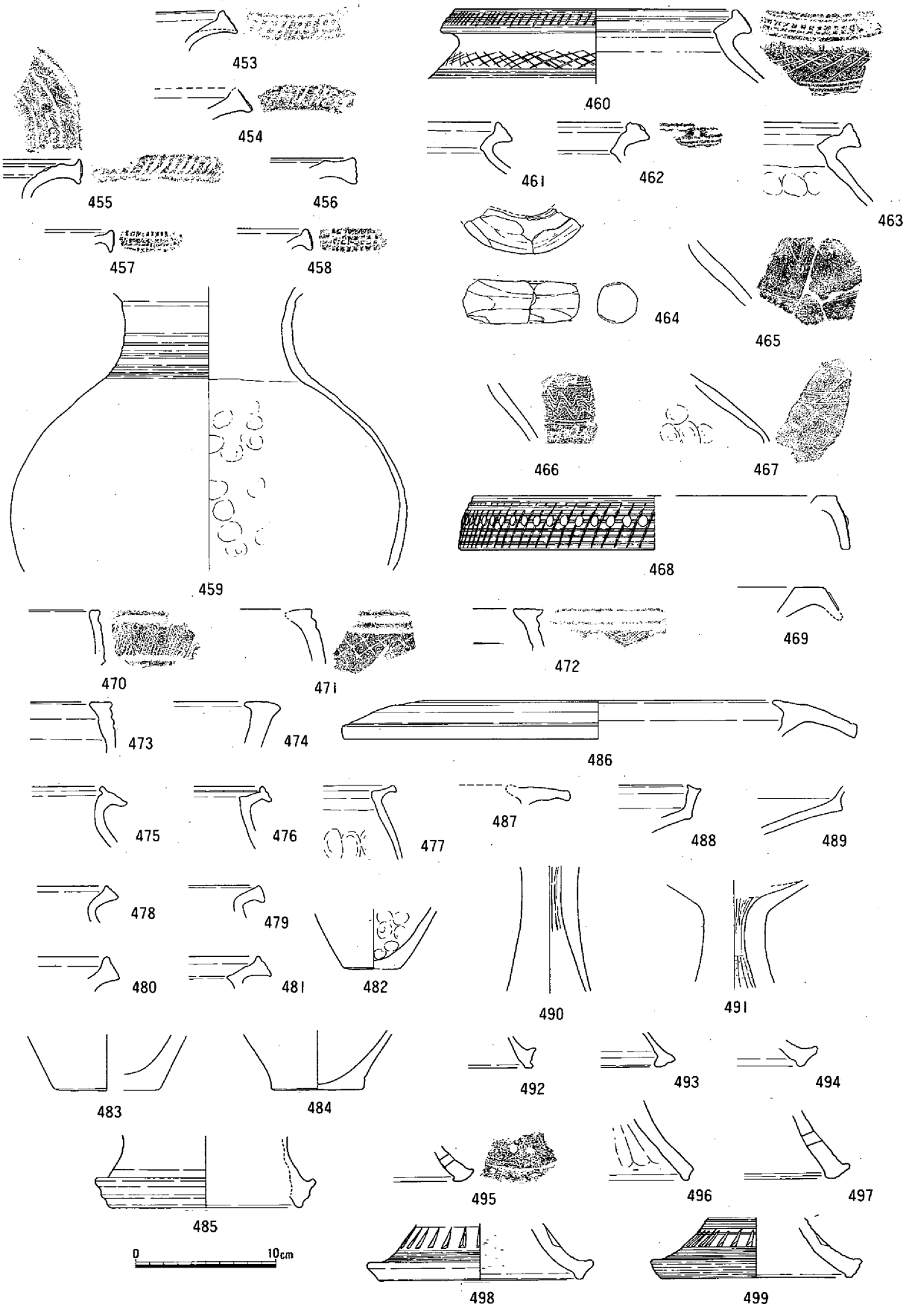
468・**469**は器台形土器の口縁部である。２点とも上面は水平で、端部を大きく垂下させる。**468**は口径256㎜を測り、全体にヨコナデで調整される。端面には退化した７条の凹線、刻目、円形浮文が順に施される。**469**は剝落のため調整や文様の詳細は不明だが、端面には円形浮文が残っている。

470～**474**は鉢形土器の口縁部である。形態は様々で、**470**～**473**は内傾、**474**は外傾する。また口縁部上面は、**470**ではさほど肥厚しない一方、**471**～**474**では肥厚して平坦面を形成する。口縁部上面には**470**では１条、**472**では４条の凹線が巡る。体部の文様は種々ある。**470**では口縁直下にヘラ状工具で鋸歯文を描き、その間に２個一組の竹管文を配置する。鋸歯文は輪郭を描いた後、左下がりの直線で内部を埋めている。**471**・**472**は口縁直下に２条の凹線が巡り、その下に斜格子文と波状文がそれぞれ施される。**473**では口縁下の沈線は３条である。

475～**481**は甕形土器の口縁部である。**475**・**476**は口縁部が上下に拡張され、端面には浅い凹線が巡る。**477**の口縁端部はわずかに肥厚する程度である。**478**～**481**は口縁部が幾分拡張されるもので、**480**を除いては端面に退化した凹線が残っていた。調整は内外面ともヨコナデで、**477**の胴部内面には指頭圧痕が残存する。**482**～**484**は甕形土器の底部である。３点とも器面の残存状態が良くないが、調整はナデで、**482**の内面には指頭圧痕もみられる。**482**の外面は被熱のため赤変している。

485は台付きの壺形土器の脚台部と考えられ、ちょうど接合面で剝離した破片である。底径は135㎜を測る。端部は上方につまみ上げられ、端面は強くヨコナデされて２条の凹線状を呈する。

486～**489**は高杯形土器の口縁～杯部である。**486**・**487**の口縁部は内外に拡張され、特に外側に向かっ



第195図　大田障子遺跡出土遺物(4)(1/4)

て大きく突出する。486は口径248㎜を測り、拡張された口縁部上面はヘラミガキされ、両端近くに浅い沈線が1条ずつ巡っている。488では口縁部の拡張はほとんどないが、両端が尖りぎみに上方へつまみ上げられ、その間に退化した凹線が3条巡る。489は剥落のため詳細不明である。490・491は高杯形土器の脚柱部である。490は全体にナデで調整され、内面上部にシボリ痕がみられる。491は外面はハケののちミガキが施される。内面上部にはシボリ、下部にはケズリの痕跡が認められる。492～499は高杯形土器の脚裾部である。剥落の激しいものもあるが、調整は内外とも主としてヨコナデにより、498のみは内面にヘラケズリが認められる。496を除いては、程度の差はあれ脚端部が拡張されている。495・497には穿孔があり、495の場合3個で一組をなすようである。498・499の外面には沈線と貫通しない三角形の透かし穴が施文される。底径はいずれも134㎜を測る。

以上の弥生土器は、包含層出土で一括性に欠けるものではあるが、中期後葉の新しい段階から後期前葉の範囲内におさまると考えられる。大田茶屋遺跡の主要な遺構群ともほぼ同時期とみられ、周辺からの投棄や、削平された遺構からの流れ込みと考えられる。（岡本泰）

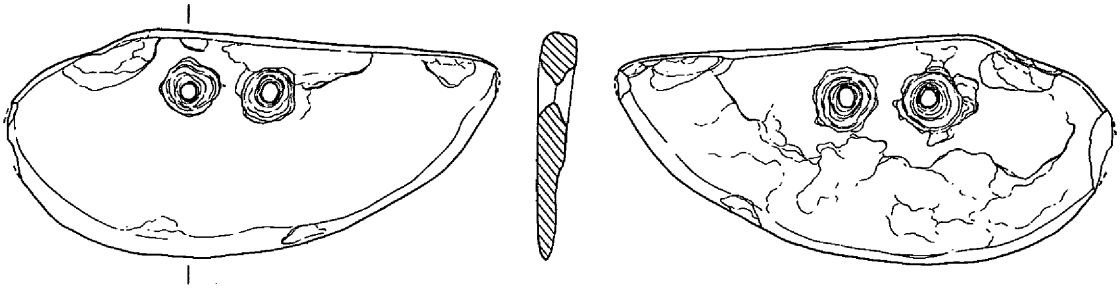
石器（第196・197図、図版17）

出土した石器は、石包丁とその未成品、石錘、および用途不明の石器である。石錘については縄文時代のものとの区別が困難であるが、表面の風化度等から当時期と判断した。

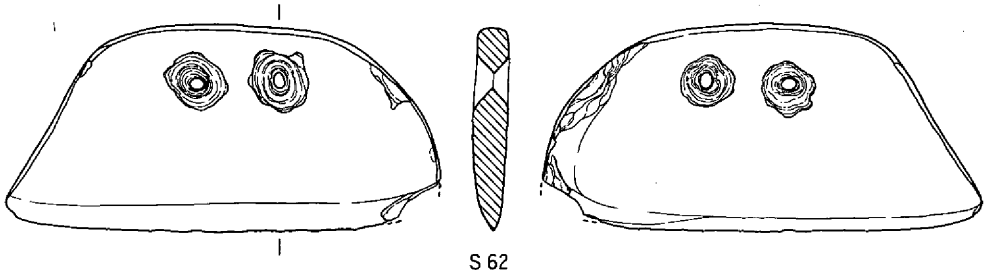
S61・62は磨製石包丁である。S61は外湾刃を有し、素材の段階で破損したためか、変則的な半月形を呈する。両端が若干欠損するが、刃部には摩滅がほとんど認められず、実際に使用された形跡は薄い。最大長130.5㎜、同幅60.5㎜、同厚さ10.0㎜、重量86.6ｇを測る。石材は熔結凝灰岩である。S62は直線刃で、台形を呈する。表面は丁寧に研磨され、平滑に仕上げられている。これもS61と同様、使用痕がほとんど認められない。最大長115.5㎜、同幅55.0㎜、同厚さ10.0㎜、重量92.5ｇを測り、石材は熔結凝灰岩である。S63～67は磨製石包丁の未成品である。S63は外湾刃を意図したもので、刃部および背部の一部が粗く研磨されており、刃部形成の段階に入っているようである。最大長62.5㎜、同幅46.0㎜、同厚さ9.0㎜、重量32.2ｇを測り、石材は緑色凝灰岩である。S64は長方形を呈する。刃部および背部を細かい剥離によって形成する途上のものである。最大長84.0㎜、同幅63.0㎜、同厚さ8.0㎜、重量68.3ｇを測り、石材は熔結凝灰岩である。S65は欠損が多く、もとの形状が明らかでない。残存する側縁部には粗い剥離痕がみられる。欠損部分に1カ所円孔がかかっており、意図的な穿孔とは考えられるが、石包丁の穿孔にしては位置が偏りすぎるようである。このため実際に石包丁の未成品かどうか疑問もある。最大長112.0㎜、同幅60.0㎜、同厚さ13.0㎜、重量105.2ｇを測り、石材は流紋岩である。S66は両端を欠損する。刃部および背部が細かい剥離によって形成される途中のものである。最大長82.0㎜、同幅43.0㎜、同厚さ7.2㎜、重量31.1ｇを測り、石材は流紋岩である。S67は粗い剥離の段階と思われるが、石包丁かどうか疑問もある。最大長76.0㎜、同幅48.5㎜、同厚さ12.0㎜、重量59.7ｇを測り、石材は緑色凝灰岩である。

S68は用途不明の磨製品である。長楕円形の一端を深く抉り込み、鏃のような形態をしている。最大長73.0㎜、同幅33.5㎜、同厚さ5.5㎜、重量22.5ｇを測る。抉り部を含め全体が研磨されているが、側縁の断面形は丸みを帯び、刃部は作り出されていない。研磨は途中のようでもあり、何かの未成品の可能性もある。石材は緑色片岩である。

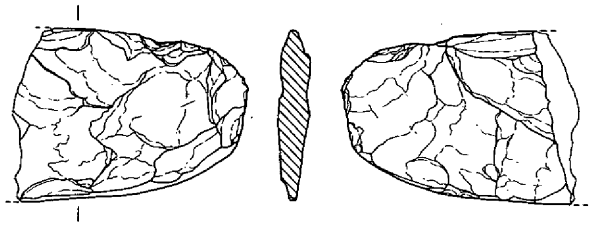
S69・70は石錘と思われる。風化の度合い等から判断して弥生時代に比定したが確定できない。S69は欠損箇所が多いが、4カ所に網掛け用の抉りが入る。最大長95.0㎜、同幅59.0㎜、同厚さ20.0㎜、



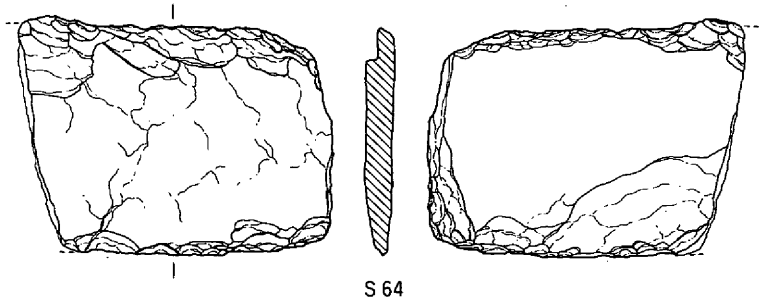
S 61



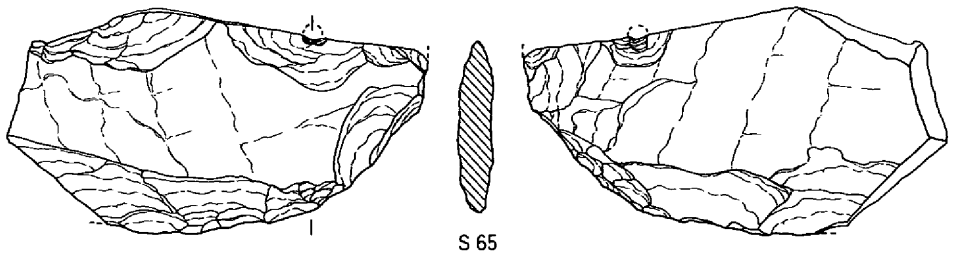
S 62



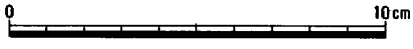
S 63



S 64



S 65



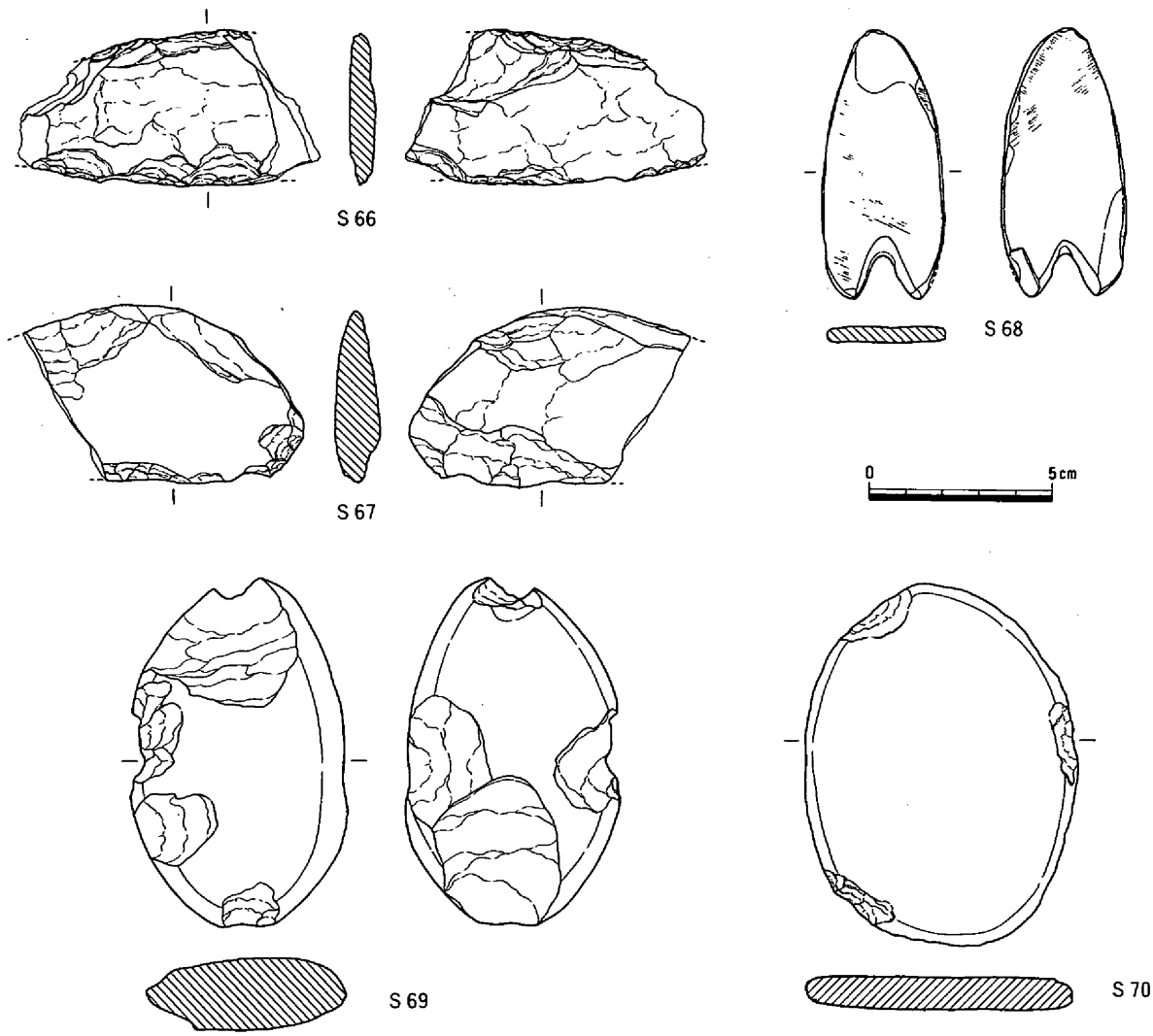
第196図　大田障子遺跡出土遺物(5)(1/2)

重量138.9ｇを測る。石材は流紋岩である。S70は扁平な礫を使用しており、最大長98.5㎜、同幅74.0㎜、同厚さ10.0㎜、重量115.2ｇを測る。側縁の３カ所に弱い網掛けの抉りが入っている。

石器類のうち、石包丁の未成品が多いのが注目される。遺構として検出されていないが、集落内で石包丁が製作されていたことを示す資料といえる。いずれも大まかな成形を終えており、途中の段階のものが含まれていない。集落内では製作の後半段階のみ行われていたようである。　（岡本泰）

注

（注１）岡山理科大学理学部助教授　亀田修一氏より教示を受けた。感謝申し上げる。
（注２）中山俊紀・行田裕美『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告８　津山市教育委員会　1981年
（注３）安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」『古代吉備』17　古代吉備研究会　1995年
（注４）行田裕美・平岡正宏・坂本心平『野村高尾遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告55　津山市教育委員会　1995年
（注５）高橋護「入門講座・弥生土器－山陽１・２－」『考古学ジャーナル』173・175　ニューサイエンス社　1980年
（注６）正岡睦夫「１．備前地域」・高畑知功「２．備中地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社　1992年
（注７）中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告11　津山市教育委員会　1982年

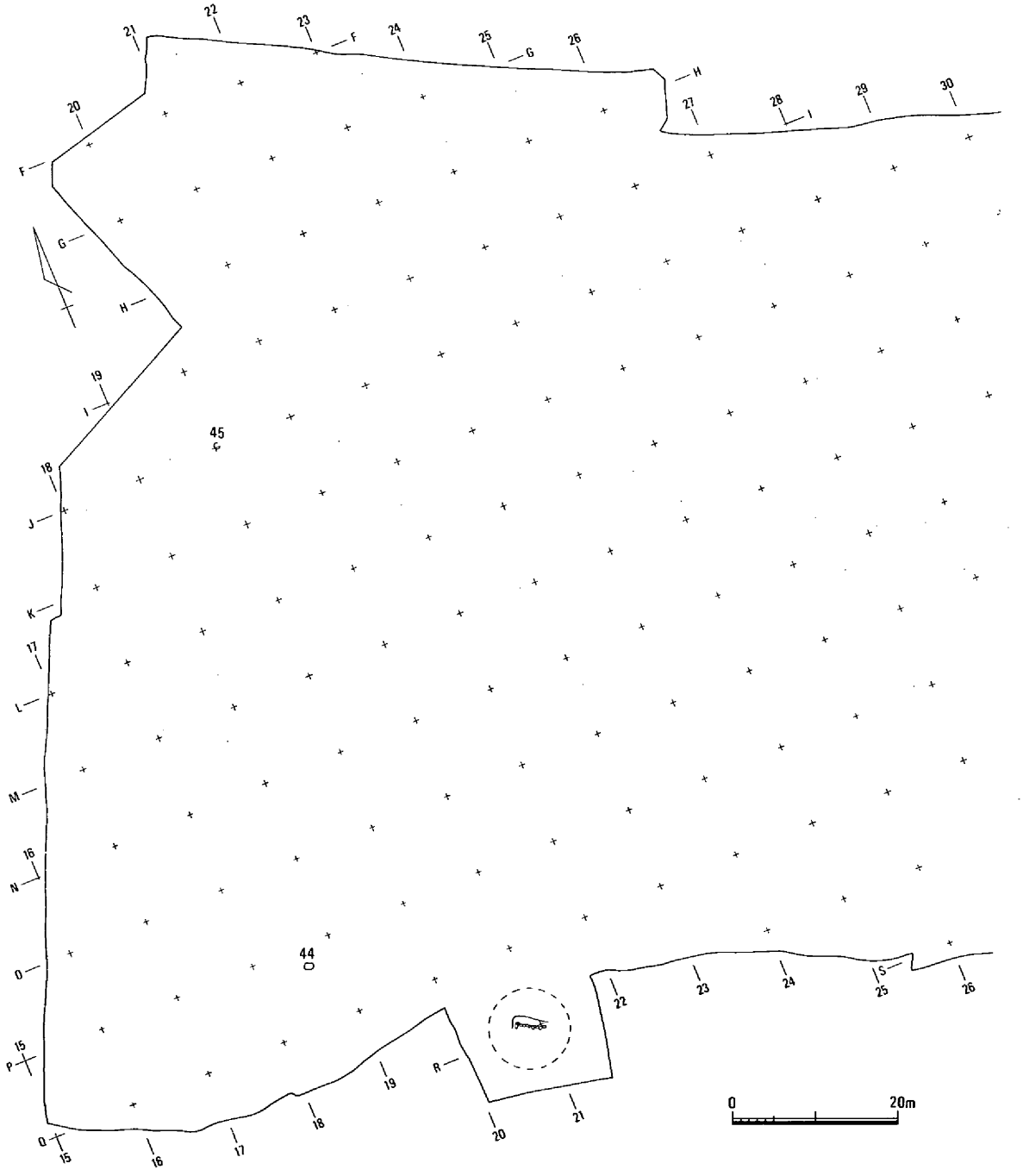


第197図　大田障子遺跡出土遺物(6)(1/2)

第5章　古墳時代の遺構と遺物

第1節　概要

調査対象地における古墳時代の遺構・遺物は大田茶屋遺跡と大田障子遺跡で検出された。大田障子遺跡では遺構は検出されず、遺物が古代の遺構から出土した。大田茶屋遺跡の遺構は土壙2基と古墳



第198図　大田茶屋遺跡東地区（7－10区）古墳時代主要遺構配置図(1/800)

１基である。大田茶屋古墳は小形の横穴式石室を埋葬主体とするもので、出土遺物から７世紀前半とみられる。東地区の南端の崖面から半壊された状態で検出された。包含層からは６世紀後半から７世紀前半の遺物が出土し、ほぼ完形のものもあった。出土量が少なく、小さな集落が存在していたとみられる。７世紀前半の遺物は大田茶屋遺跡の西地区から大田障子遺跡まで散布していた。（岡本寛）

第２節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

古墳時代の遺構は調査区全体で土壙２基が確認されたにすぎず、遺跡全域に削平が及んでいることを考慮しても全体に希薄で散在的である。こうした傾向は周囲の丘陵上の遺跡でも同様で、集落域が平野部に移動したものと考えられる。

また、大田茶屋遺跡の立地する丘陵は調査区の南端で急激に高さを減じて平野部へと至るが、その斜面中腹に大田茶屋古墳が築かれている。（佐藤）

２．遺構・遺物

土壙44（No155）（第199図）

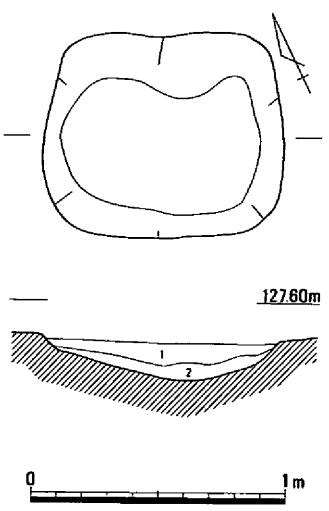
18Ｐ区に位置する。検出面での平面形は長径95cm、短径80cmを測る隅丸方形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。須恵器の細片が出土していることから古墳時代の遺構と判断した。（佐藤）

土壙45（No261）（第200図）

20Ｉ区に位置する。検出面での平面形は長径95cm、短径80cmを測るやや不整な楕円形を呈する。底面はほぼ平坦に掘削され、検出面からの深さは19cmを測る。

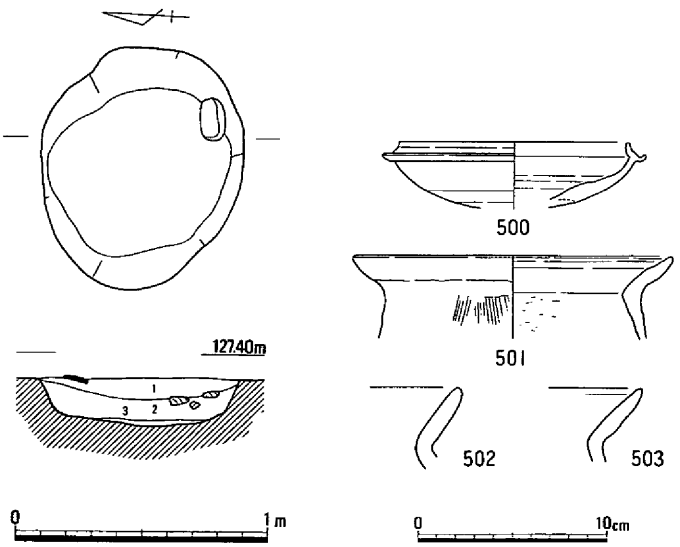
埋土中には焼土粒が混入し、出土遺物には須恵器の坏身、土師器の甕などがある。

これらの遺物から土壙45の時期は７世紀前葉と考えられる。（佐藤）



1．暗褐色粘質土
2．黄褐色粘土斑暗褐色粘質土

第199図　土壙44(1/30)



1．黒色土　　3．灰褐色土(焼土含)
2．淡灰色土

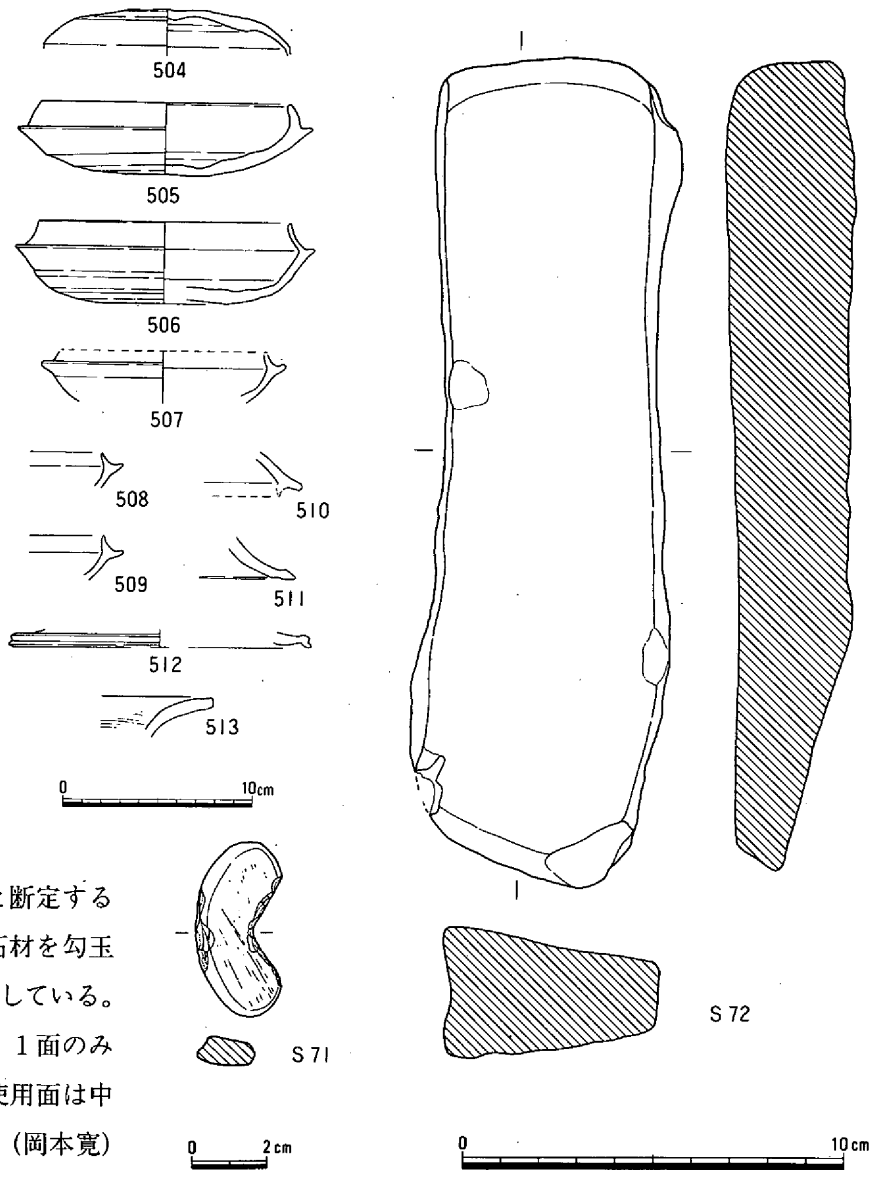
第200図　土壙45(1/30)・出土遺物(1/4)

包含層出土遺物

（第201図、図版18）

504～510は須恵器の蓋杯、**511・512**は須恵器の高杯脚部、**513**は土師器の甕である。出土場所は、**504**が24Ⅰ区の柱穴、**505～507**は東地区包含層、**508～513**は西地区の５区包含層中である。**504～506**は６世紀後半、**507～513**は７世紀前半とみられる。**505**はほぼ完形、**506**も2／3程度の残存で、近接して出土したようである。

石器２点は表採と表土出土で、古墳時代の遺物と断定する根拠は薄い。**S71**は扁平な石材を勾玉の形に加工し、表裏面を研磨している。**S72**は短冊形に粗く整形し、１面のみを研磨用に使用している。使用面は中央部が窪む。安山岩である。（岡本寛）



第201図　大田茶屋遺跡出土古墳時代遺物(1/4,1/2)

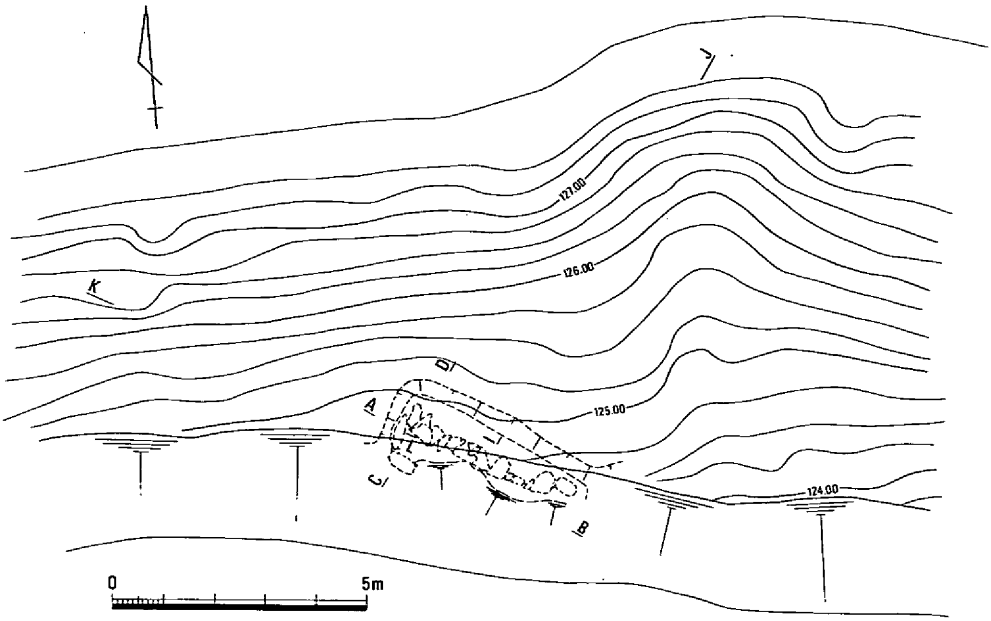
３．小結

大田茶屋遺跡で検出された古墳時代の遺構は土壙２基にすぎなかったが、同時代の遺物を出土した柱穴やほぼ完形の須恵器もあり、古墳時代の人々の生活がこの丘陵端部にみられたことは確かである。遺構・遺物の量からすれば、小さな集落が存在していたと考えられる。西地区・東地区を通じて７世紀代の遺物が広く散布していて、後続する古代の遺跡との関連で注意される。（岡本寛）

第３節　大田茶屋古墳

１．立地・形状

大田茶屋古墳は大田茶屋遺跡の立地する丘陵端部の南斜面中腹に位置し、平野部との比高は約５ｍを測る。調査前は竹藪となっていて、墳丘や遺物の散布等は認められなかったが、石室石材の一部が露出していたことからその存在が明らかになった。また、古墳の東10mには平野部と丘陵上とを結ぶ

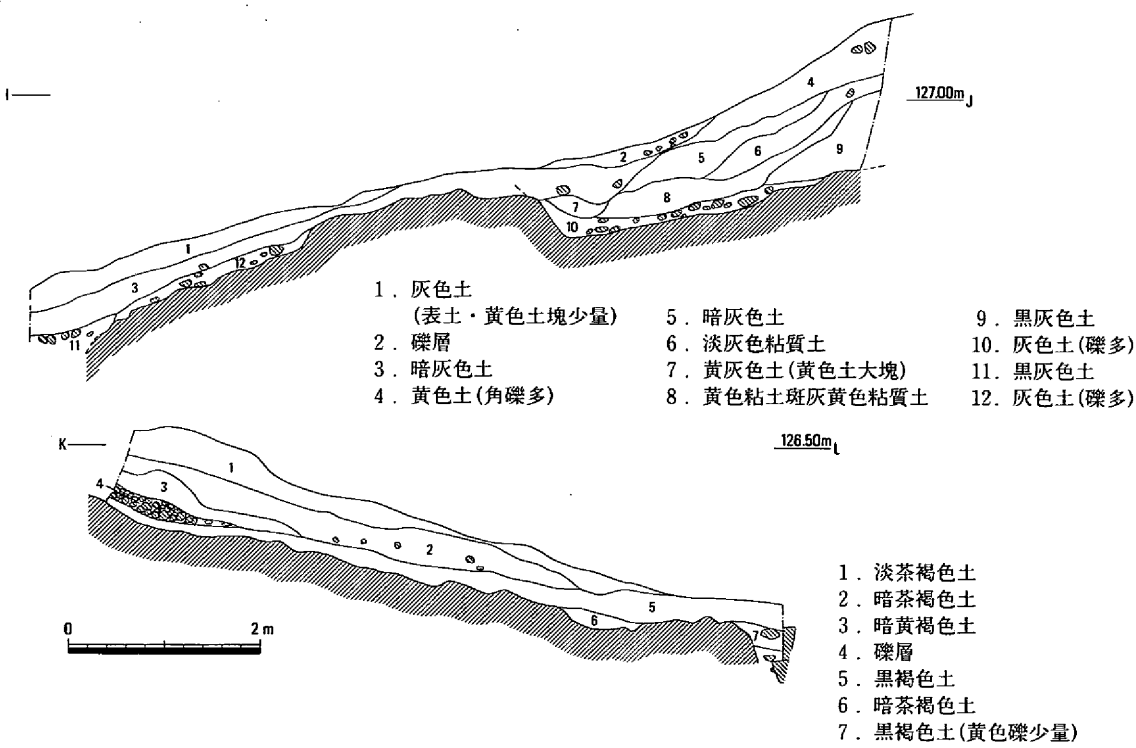


第202図　大田茶屋古墳調査前地形測量図(1/150)

近世の道が掘削されている。

墳形や墳丘規模は古墳が斜面上に築かれているため封土が流出していることや、南半が削平により大きく失われているため不明であるが、石室の規模やＫ－Ｌ間の土層断面でわずかに認められるくぼみが周溝の痕跡と考えられることから、推定で径６～７ｍ前後の円墳になるものと思われる。

外表施設や供献土器等は認められなかった。

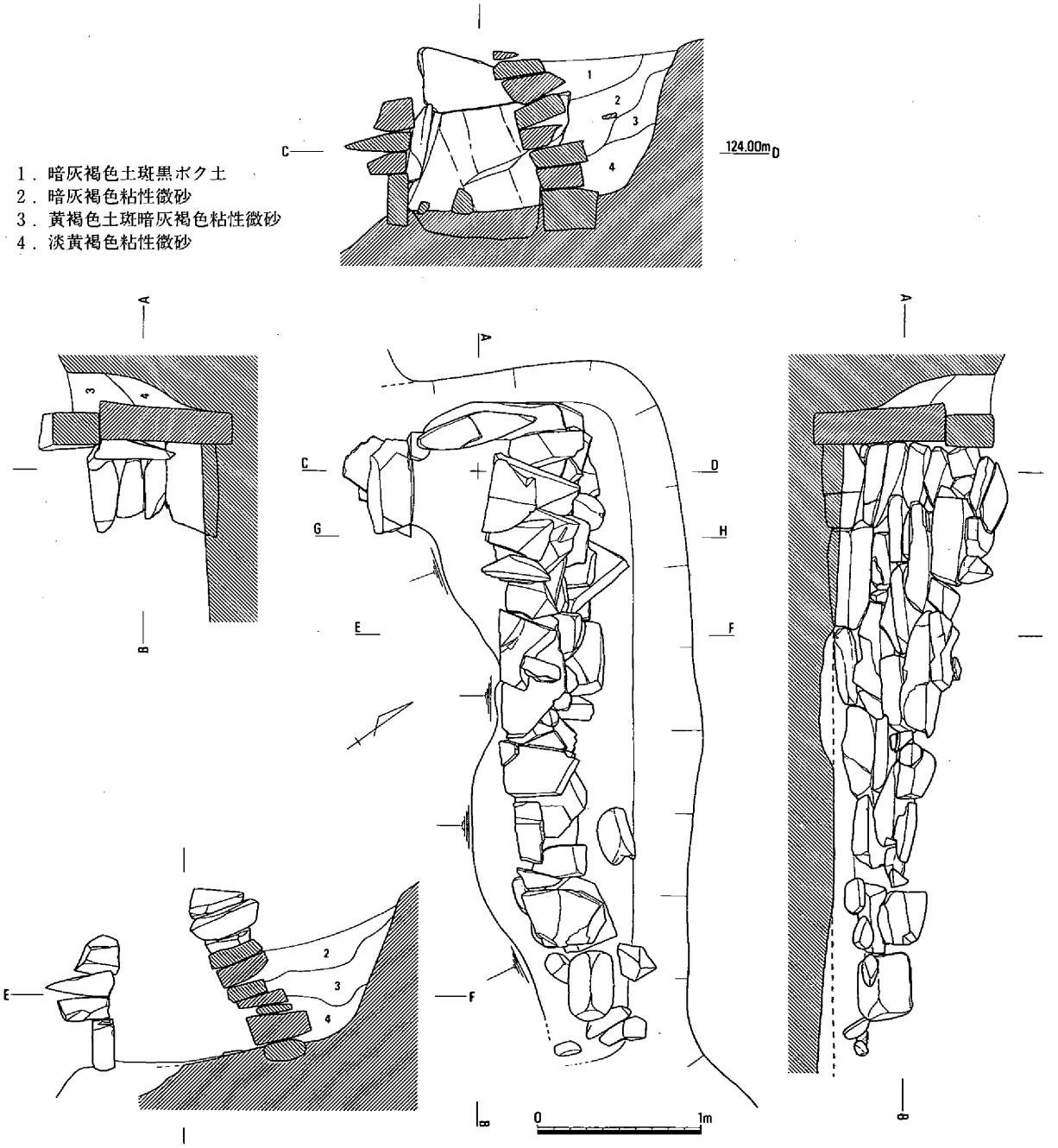


第203図　大田茶屋古墳トレンチ土層断面図(1/80)

２．埋葬施設

埋葬施設は等高線に若干斜交してＥ－41°－Ｓに開口する無袖式の横穴式石室である。石室を構築する墓壙の堀り方は南半が削平により大きく失われているが、残存する部分から推定して検出面で長さ4.5m、幅2.4m、深さ90cm前後の平面長方形、断面逆台形を呈するものと考えられる。

石室の遺存状態は悪く、天井石は取り去られ、右側壁は削平により大きく失われ、左側壁は土圧のため石室内側に傾斜している。このため本来の石室規模は不明であるが、比較的残りのよい奥壁付近や側壁の基底部分から推定して、石室内面で全長3.5m、幅80～90cm、高さ１m前後で、平面形では奥壁から羨道部に向かってやや幅が広くなる形態の石室が構築されていたものと考えられる。



第204図　大田茶屋古墳横穴式石室(1/40)

奥壁は板状に加工した大型の石材２枚を縦に積み重ねて構築している。側壁は板状に加工した石材を６～７段の小口積みにして構築しているが、奥壁に接する部分については基底石を立て、２段目以上を小口積みとしている。比較的残りのよい奥壁に接する右側壁の石積みから、側壁は若干持ち送りしているものの、ほぼ垂直に積み上げられていたものと考えられる。また、石積みの目地は縦横ともに揃っておらず、石室構築の際の工程単位や玄室と羨道の境は不明瞭である。石室に用いられている石材はほとんどが結晶片岩で、石室の入口付近で１点のみ堆積岩系の河原石が使用されている。

石室内は上方からの流入土が堆積しており、床面が攪乱されたような痕跡は認められなかった。床面は墓壙の底面をそのまま使用しており、礫床や排水施設、貼床等は施されていない。床面の大部分が削平により失われているため、遺物の残存状況は悪く、削平を免れた奥壁付近で若干の遺物と棺台と考えられる河原石数点を確認したのみである。また、床面直上の埋土については水洗選別を実施したが、鉄釘や玉類は認められなかった。

閉塞施設についても削平のため不明瞭であるが、石室の入口付近に拳大の河原石や塊石が点在していることから、これらの礫により閉塞されていたものと考えられる。

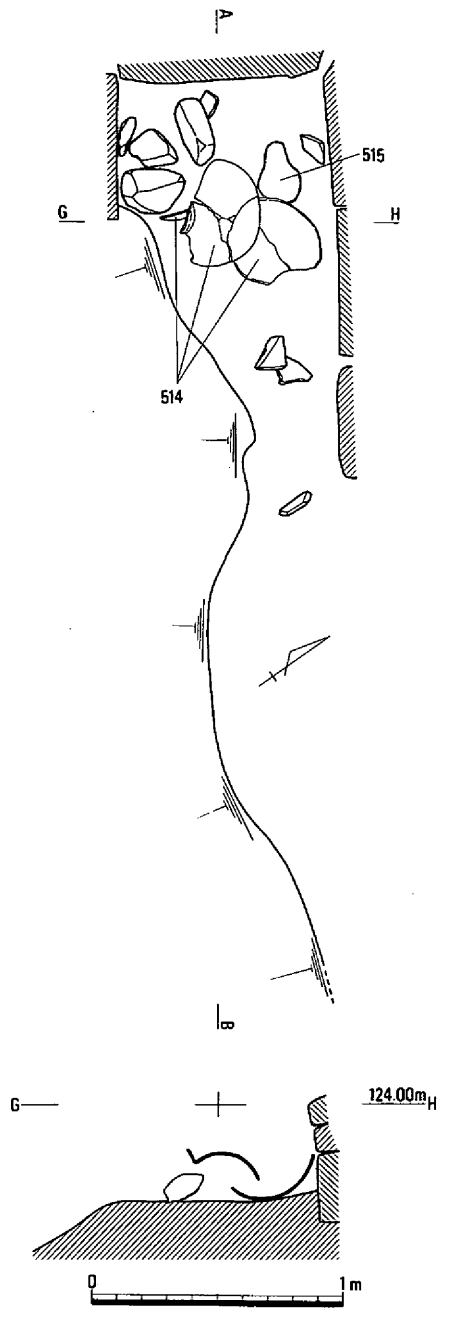
追葬の有無についても判断材料に乏しく、明確にし得ないが、石室の規模から単葬であった可能性が高いのではなかろうか。また、墓道も削平のため確認できなかった。

３．出土遺物

遺物は須恵器の甕**514**と土師器の甕**515**が出土している。いずれも奥壁付近で破片となって出土しており、本来の副葬位置からは若干動いているものと思われる。

514は全体の1/2が残存していた。肩部に最大径がくる倒卵形の体部に逆「ハ」の字状に広がる口縁部が取り付く器形で、肩部には把手が付く。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられ、外面には浅い段状の沈線が１条巡る。また、口唇部には面が形成される。体部は反時計回りのカキメで仕上げられ、成形時のタタキ具の痕跡が部分的に確認できる。内面には当て具痕が明瞭に残る。このうち、下から1／3にはいわゆる車輪文の当て具（注１）が使用され、残り2／3には通常の同心円文の当て具が使用されている。当て具径は48㎜を測る。

515は全体の1／5程が残存していたにすぎないため、本来の形態が今一つ不明瞭であるが、ボウル状の底部に直線的に伸びる体部をもつ器形と思われ、甑の可能性も考えられる。口唇部はヨコナデで丸く収められ、体部以下の調整は器壁が剥落しているため不明瞭である。体部は内外面とも16㎜幅の



第205図　大田茶屋古墳遺物出土状態(1/30)

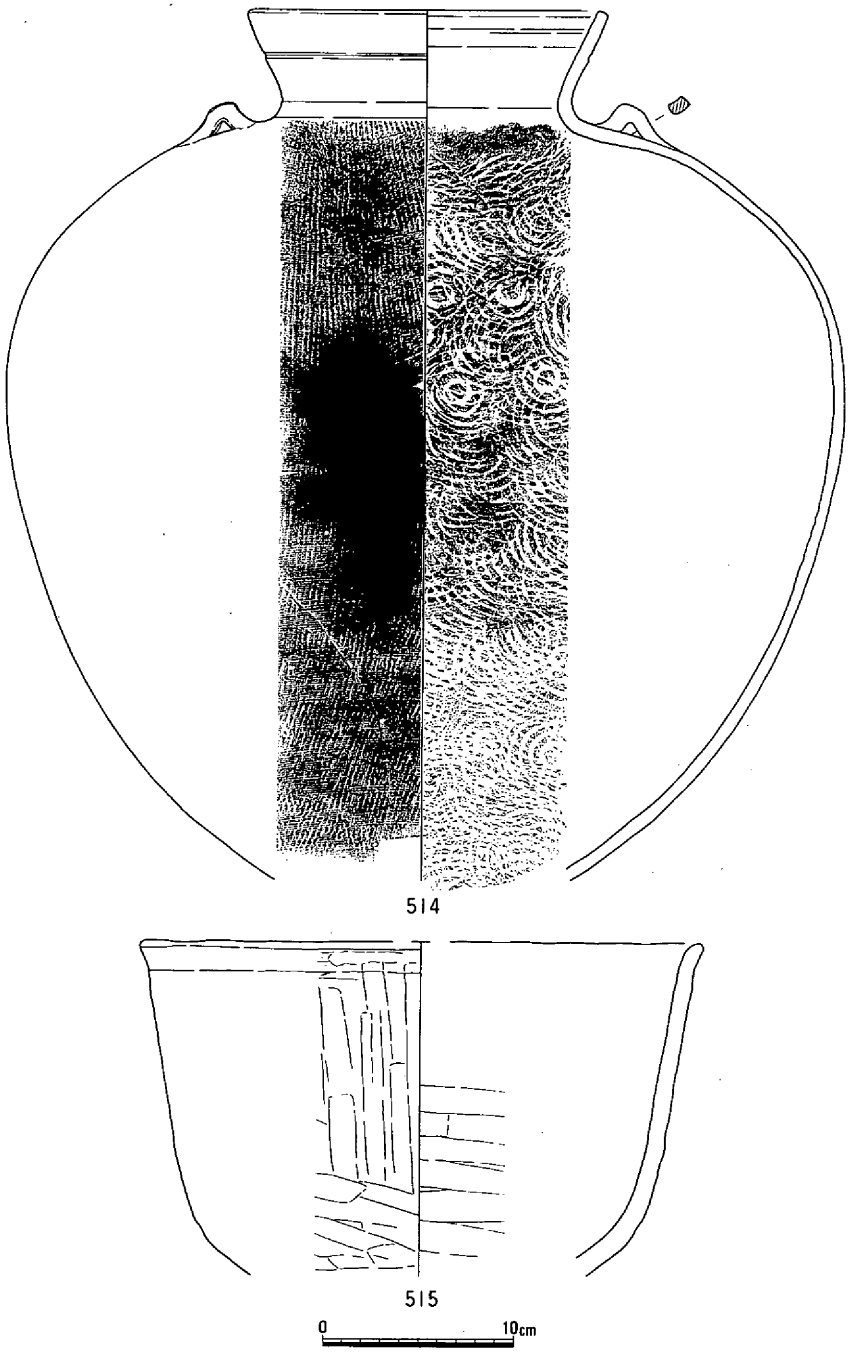
板状工具によるナデで仕上げられる。底部は16㎜幅の板状工具により、外面は横方向のナデ、内面は横方向のケズリで仕上げられる。また、外面の底部から体部の屈曲部には幅18㎜程の煤の付着が帯状に認められ、煮炊具の類であることを示す。

このうち、**514**については類例が寒風――Ⅰ号窯（注２）に認められることや、全体の器形からＴＫ217式（注３）に併行する７世紀第２四半期前後のものと考えられる。

４．小結

大田茶屋古墳は調査の結果、７世紀前半の古墳であることが判明した。

石室の規模や形態は糠山古墳群のＣタイプに相当し（注４）、土師器の煮炊具を副葬する美作の地域性（注５）が本古墳にも認められる。周辺の例としては若干後出するが、紫保井の十二足古墳（注６）がある。（佐藤）



第206図　大田茶屋古墳出土遺物(1/4)

注

（注１）横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号　九州大学九州文化史研究施設　1981年

（注２）山磨康平『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27　岡山県教育委員会　1978年

（注３）田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

（注４）村上幸雄「結語」『糠山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980年

（注５）亀山行雄「岡山県内の横穴式石室」『考古学研究』第44巻第２号　考古学研究会　1997年

（注６）近藤義郎「美作津山市紫保井十二足古墳」『古代吉備』第２集　「古代吉備」編集部　1958年

第6章　古代の遺構と遺物

第1節　概要

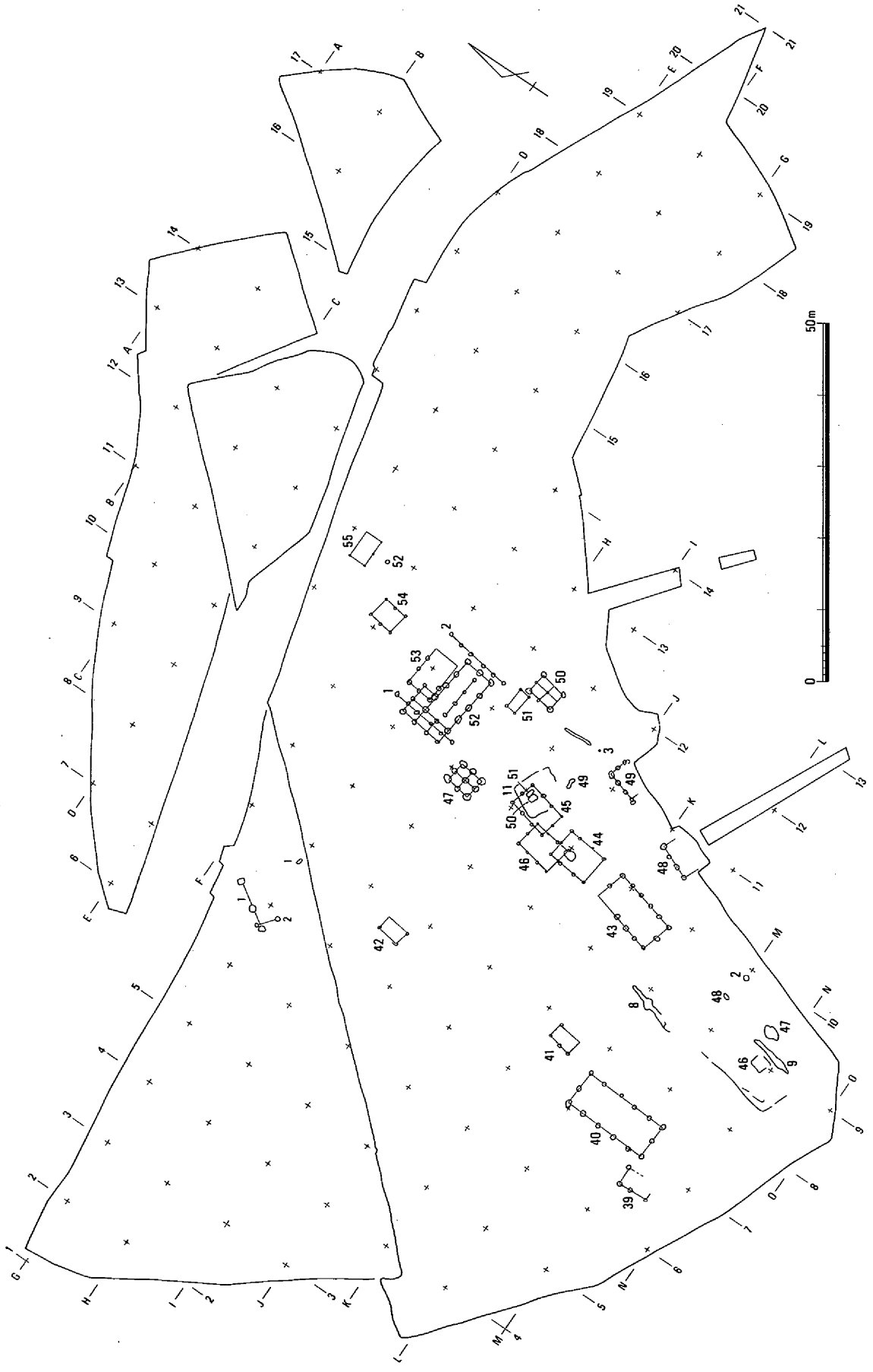
本報告書では、古代を7世紀中頃から12世紀中頃までとおおまかに捉えているが、この章では平安時代の中葉、11世紀の前半頃までの遺構・遺物を取り扱う。発掘調査で検出された遺構・遺物を量的にみると、8世紀代と12～15世紀にかけての時代に集中がみられ、その間は空白期となっている。美作地方では、勝間田焼の出現をもって中世的土器様相の開始とみられるようであり、その時期は11世紀後半とされている（注1）。このようなことから、11世紀後半以降の遺構・遺物については次章の古代末から中世の遺構・遺物としてまとめることとした。

調査対象地内における古代の遺構・遺物は、南端の大田茶屋遺跡から北端の大田西奥田遺跡まで広く分布しているが、大田松山久保遺跡の所在する丘陵尾根筋からは出土しなかった。遺構を検出したのは大田茶屋遺跡と大田障子遺跡の2遺跡であるが、大田西奥田遺跡からはいくらかの土器片が出土し、削平された地区か隣接した地区に遺構の存在する可能性がある。また、大田大正開遺跡でも、中世のものではないかと判断した建物の中に、古代に遡るものがある可能性がないとは言いきれない。とくに、建物の棟方向がほぼ真北であったことに苦慮した。

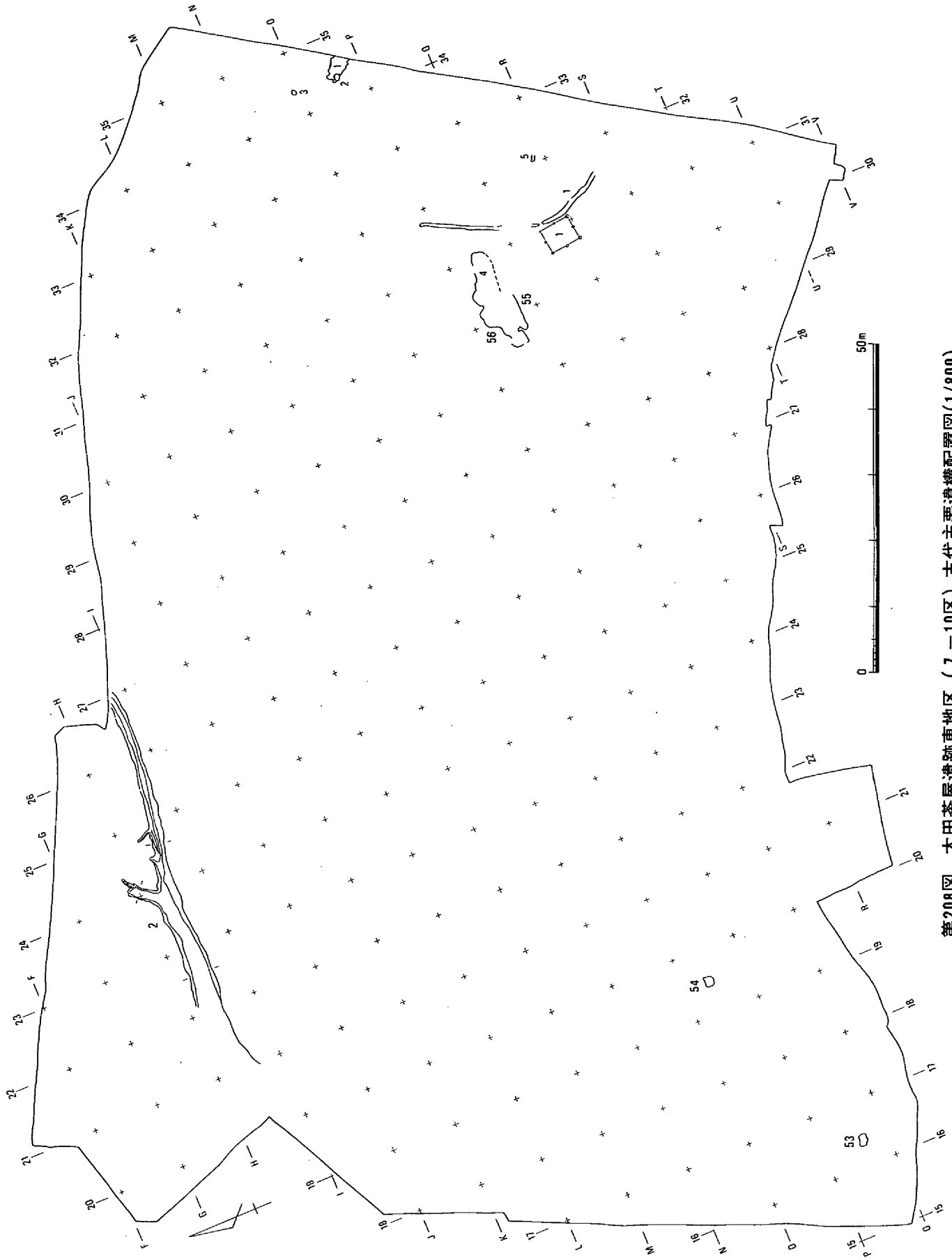
大田茶屋遺跡の西地区から17棟の掘立柱建物と2列の塀が検出された。建物と塀は棟の方向を南北あるいは東西にほぼそろえ、中心建物と、その前面に規格的に配置された建物からなり、さらに溝によって区画された部分の存在していた可能性が高い。出土遺物として奈良時代の瓦が多くあり、その中には美作国分寺・国分尼寺と同笵の軒平瓦があった。これらのことから、この遺構群は美作国の諸官衙の一つであると考えられる。建物には重複がみられ、中央建物も一度建て替えられている。軒丸瓦をみると笵の傷みが激しく、柱穴から瓦を出土する建物が多いことから、この官衙は奈良時代の後葉から平安時代の初頭頃のものと考えられる。西地区からは瓦塔が、東地区の北端を東西に流れる河道2からは土馬が出土していて、遺跡の官衙的性格を一層高めている。

大田茶屋遺跡東地区から大田障子遺跡にかけては、遺構の存在しない空白域が広く存在していた。遺構は東地区の南西部に2基の土壙が離れてあり、大田障子遺跡で建物1棟と5基の土壙、1条の溝が検出されたにすぎない。後世の削平によって消滅した遺構がいくらかあるのではないかと思われるが、中世の遺構の分布状況からすれば、古代にはこの地区ではもともと施設が少なく、広い空閑地があったものと考えられる。東地区南西部の土壙はともに方形の深い穴で類似が認められる。1基からは焼土やフイゴの羽口が出土していて、なにか特定の用途をもった施設とみられ、官衙に付属した工房のようなものが存在した可能性も視野に入れる必要があるかもしれない。これに関連するかどうかは明確ではないが、東地区から大田障子遺跡にかけては鉄滓がかなり出土した。

大田障子遺跡での遺構の在り方には官衙的な色彩はみられない。大形の不定型な土壙内は複雑な重複関係を示し、ゴミ穴ではないかとみられる。建物も小規模で、溝も湾曲し、日常的な生活臭が感じられる。より東に集落が存在するとみられるが、その住人と官衙との関係を考慮したい。（岡本寛）



第207図　大田茶屋遺跡西地区（4－6・11区）古代主要遺構配置図(1/800)



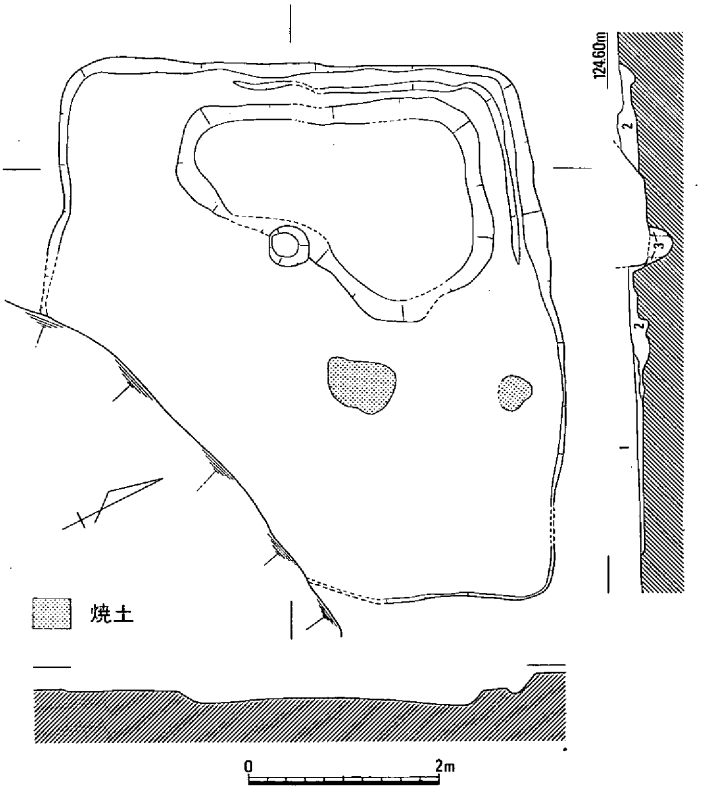
第208図　大田茶屋遺跡東地区（７－10区）古代主要遺構配置図(1/800)

第２節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

大田茶屋遺跡から検出された遺構は竪穴住居１軒、掘立柱建物17棟、塀２列、土壙11基、溝２条、河道１本である。遺跡は新たな自然流路である河道２によって分断される。大部分の遺構は西地区に存在し、東地区に所在した遺構は土壙４基にすぎなかった。それらの土壙も東西の端部に位置するため、東地区には広大な空閑地が存在することとなる。遺構の分布の上でこれだけの相違がみられるため、この二つの地区が一つの遺跡の中で関連しあうものとすれば、そこには土地利用の上で使用目的が違うということを意味し、その目的にあった分布状況を示していることになる。

西地区の建物は丘陵頂部から少し緩斜面を下がった東側から南東側にかけて配置されていて、６区の東半部分には遺構はみられなかった。建物群は大きく二つに分けられる。一つは南東の斜面に位置し、大形の建物40とそれに近接する２棟の小形建物である。もう一つは東斜面に位置する一群の建物で、残りのすべての建物から構成される。この一群の建物では北寄りに中心になるとみられる大形の建物があり、その南に南北棟の建物が東西２列に配置される。また、大形建物の北にも２棟の小形建物が存在する。２列の建物を東西で比較すると、規模や棟方向がそろわず、厳密な規格の上で対称的な配置を目指したものとはいえない。建物43から南にたどると、溝８・９や土壙46がみられ、調査時には認識できなかったが、溝８に続く段が存在する。これらの遺構は一群の建物の棟方向とほぼ平行する。とくに、溝８はその位置関係から建物群を取り囲んでいた可能性が考えられる。住居11は建物群より以前にあったとみられる。　　（岡本寛）



１．黄褐色粘質土斑暗黄灰褐色粘質土
２．灰褐色粘質土
３．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

第209図　住居11(1/80)

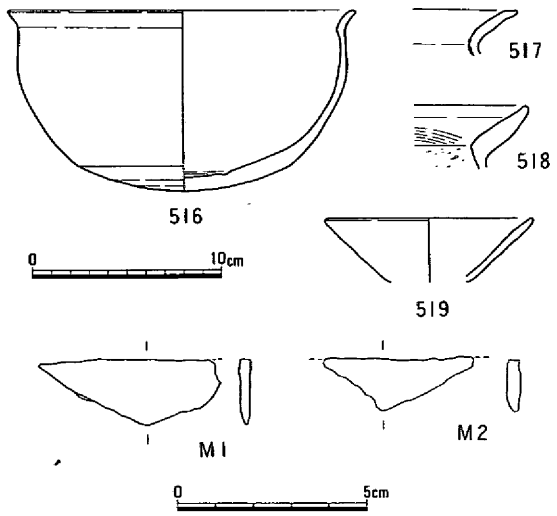
２．遺構・遺物

住居11（No105）

（第209・210図、図版６・18）

10H，Ｉ区に位置する竪穴住居である。平面形は方形で、北東辺が560cm、北西辺は470cmを測り、深さは23cmであった。北半中央部には土壙50・51が住居の埋没後に掘られ、また、建物45の柱穴も埋土の上面で検出された。住居の北隅で、幅30cm

前後、深さ26cmの壁体溝を一部検出した。北隅では、この壁体溝に沿うような形で、不整形な土壙が検出された。長径が340cm、短径は240cm、深さが24cmであった。この土壙の南辺で柱穴が１基検出された。直径47cm、深さ26cmを測る。土壙との先後関係は不明である。住居の中央付近と北東辺の中央沿いの２カ所で焼土塊を検出した。とくに、後者についてはカマドの痕跡ではないかと精査したが、明確にはしえなかった。柱穴については、床面をさらに掘り下げて検出したが、他には確認されなかった。このため、住居11は壁で屋根を支えるような構造ではなかったかと思わざるをえない。焼土についてはカマド土器の使用を考えるべきであろうか。大きな土壙の用途は不明である。土器と鉄器片が少量出土した。**516**は須恵器の鉢で、壁体溝の上方の埋土中から1／2弱が出土した。底部外面はヘラケズリがなされている。焼成は不良で、色調は灰白色を呈する。**517・518**は土師器の甕、**519**は製塩土器であろうか。**517**の口縁端部内面には凹線が巡る。鉄器片は厚さが２、３㎜の薄板である。刀子のようなものが推定される。

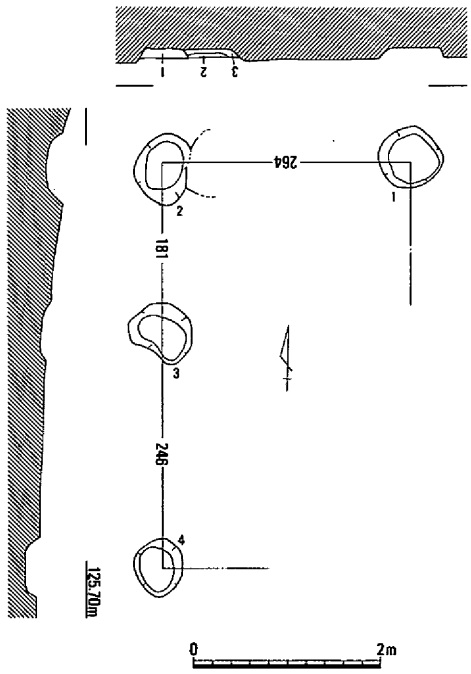


第210図　住居11出土遺物(1/4・1/2)

住居11の年代であるが、**516**の須恵器は管見では類例をみない。丸底で回転ヘラケズリの成形であるが、古墳時代とはみられず、焼成からは大田障子遺跡から出土した奈良時代の須恵器に似ている。建物45や土壙50・51より古いことから、奈良時代前半以前の時期を考えたい。　（岡本寛）

建物39（No85）（第211図）

６M区で検出された掘立柱建物である。柱穴の一部が削平により消滅しているが、２×１間と推定される。棟方向はN－２°－Wである。桁行全長427cm、梁間264cm、床面積は推定11.3㎡を測る。柱穴は不整円形で、直径が61～76cmあり、柱痕は確認できなかった。建物40に近接し、同時存在は考えられない。奈良時代後半と推定される。　（岡本寛）

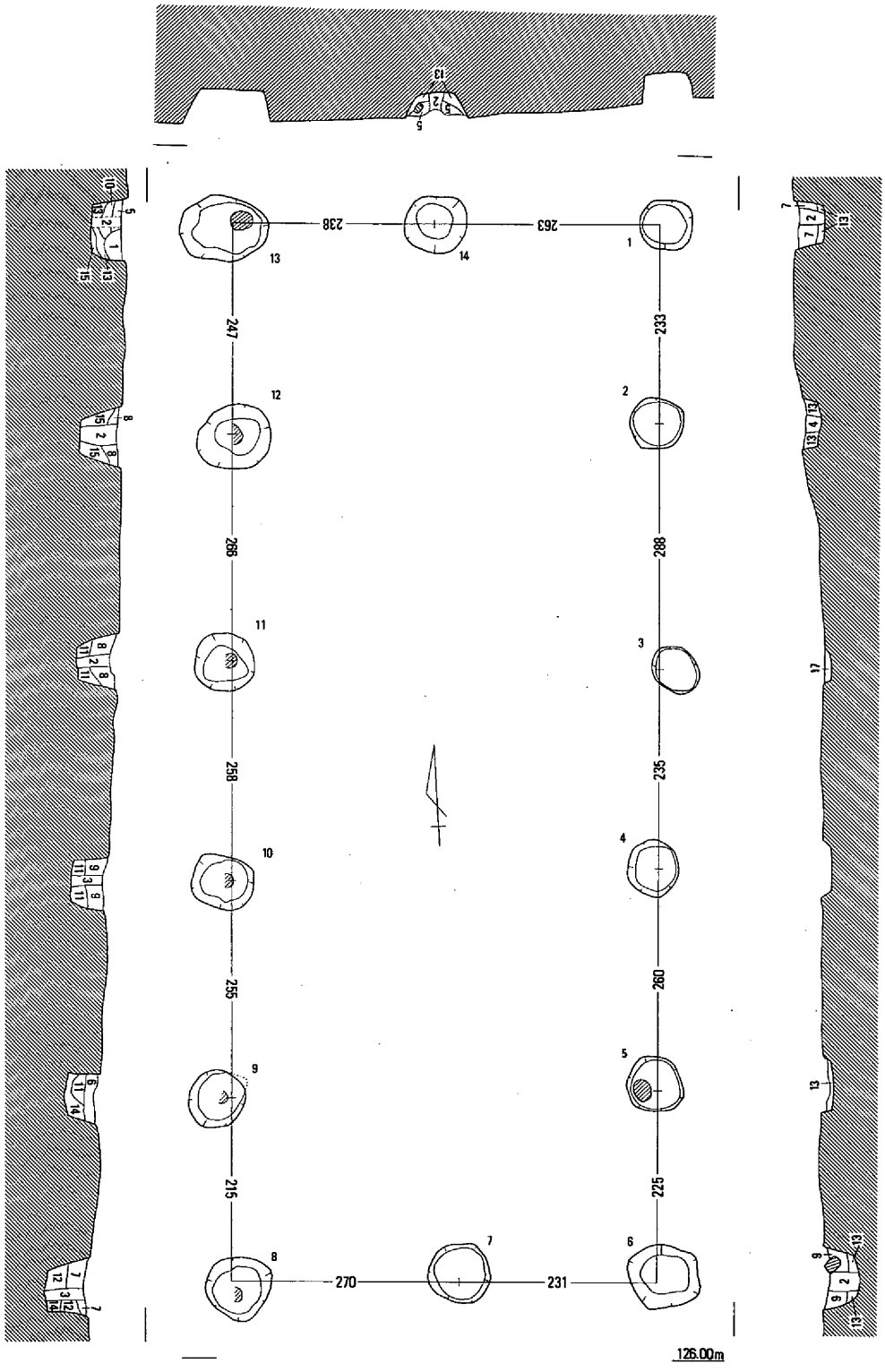


1．黄灰褐色粘質土(礫含)
2．灰褐色粘質土
3．灰黄褐色粘質土(礫含)

第211図　建物39(1/80)

建物40（No12）（第212図）

７K－M区で検出された大形の掘立柱建物である。５×１間の側柱建物で、桁行全長1241cm、梁間全長501cm、床面積62.2㎡を測る。棟の方向はN－３°－Eである。柱間は桁行が215～288cm、梁間は231～270cmあり、桁行の南端の１間が狭く、梁間では南北で広狭が逆になる。柱穴は不整形な楕円を呈するが、四隅の柱穴や柱穴２・７・10・14などはやや方形に近い。柱穴の長径は60～105cmで、深さは最深で55cmを測り、地形の緩斜面と対応するように、底面の高度が南にな



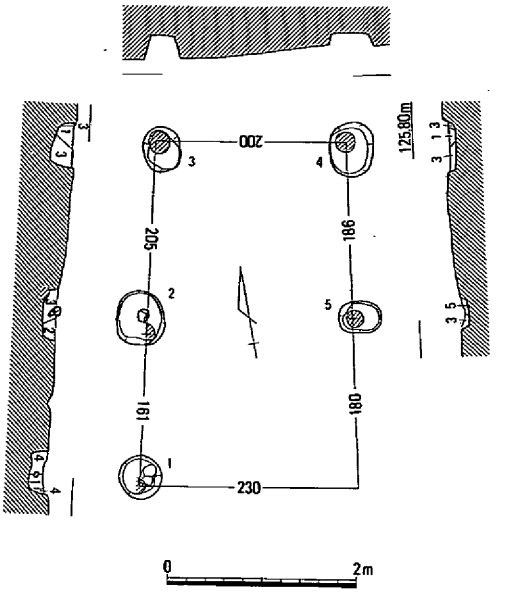
1．黄褐色土斑
　暗灰褐色粘質土(礫含)
2．暗灰褐色粘質土
3．暗黄灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質土斑
　茶褐色粘質土(礫含)
5．黄褐色粘質土(礫含)
6．暗灰黄褐色粘質土(礫含)
7．暗茶褐色粘質土(礫少含)
8．黄褐色粘質土斑暗黄灰褐色粘質土(礫含)
9．黄褐色粘質土斑
　暗灰褐色粘質土(礫含)
10．灰褐色粘質土(礫含)
11．暗黄褐色粘性砂質土
12．暗灰褐色粘質土
13．暗黄褐色粘質土(礫混)
14．黄褐色土斑暗灰褐色粘質土
15．黄褐色粘質土斑暗黄灰褐色粘質土(礫含)

第212図　建物40(1/80)

るほど低くなっていた。この傾向からすると、梁間の中央柱穴は他の柱穴より少し浅い。柱痕はほとんどの柱穴で確認され、直径が15～26cmであった。柱穴からは土師器の小片が出土したのみで、年代の確定は困難であるが、建物の規模や構造、それに棟方向や周辺の遺構の状況から奈良時代の建物と考えたい。(岡本寛)

建物41（No13）（第213図）

7K区に位置する。南東隅の柱穴は後世の削平によって確認されなかったが、2×1間の掘立柱建物であろう。桁行全長366cm、梁間230cm、床面積7.9m²を測る。柱穴は隅丸の長方形に近く、長径が45～58cmあり、直径17～25cmの柱痕が確認された。棟の方向はN－14°－Eで4m南にある建物40とはかなり異なり、同時に存在したか疑問である。むしろ、建物43などとの共存を考えるべきであろうか。出土遺物はないが、奈良時代の建物とみられる。　(岡本寛)



1．赤黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
2．赤褐色粘質土斑灰黄褐色粘質土
3．赤褐色土斑赤黄褐色粘質土
4．赤黄褐色粘質土斑黄灰褐色粘質土
5．赤褐色粘質土斑赤黄褐色粘質土

第213図　建物41(1/80)

建物42（No118）（第214図）

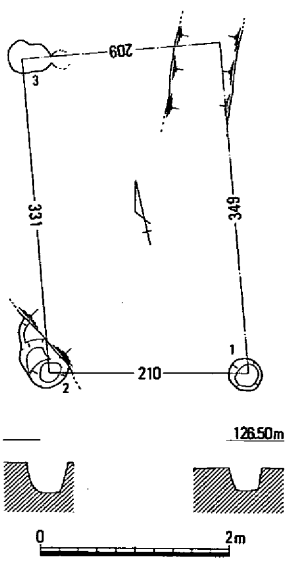
丘陵頂部の7H区にあり、建物59と重複していたため検出状態は悪く、建物として確認できるか疑問もある。1×1間の掘立柱建物で、桁行311cm、梁間210cm、推定床面積8.0m²を測る。柱穴は円形であった。出土遺物はなかった。棟方向がN－7.5°－Eのため奈良時代と判断している。(岡本寛)

建物43（No66）（第215図、図版18）

9,10J,K区で検出された。5×2間の掘立柱建物で、桁行全長965cm、梁間全長449cm、床面積43.3m²を測る。棟方向はN－15.5°－Eである。柱間は桁行が185～201cmであまり差がないが、梁間は207～242cmで、南北とも片側が広い。柱穴は不整な円形だが、柱穴1・4・6・11など方形に近いものもある。柱穴の長径は52～84cmで、ほとんどの柱穴で柱痕が確認できた。柱痕の直径は14～30cm前後である。柱穴からはいくらか遺物の出土をみた。**M3・4**は断面が方形の鉄釘で、柱穴7から出土した。木質が全体に付着している。**520・521**は須恵器蓋、**522**は土師器杯である。杯の内外面には黒色の塗膜がみられる。**523**は平瓦片で、柱穴3から出土した。凸面に縄タタキ目が残る。建物43は出土遺物や構造から奈良時代後葉のものとみられる。　(岡本寛)

建物44（No73）（第216図）

9,10I,J区に位置し、建物46と重複していた。3×2間の掘立柱建物で、桁行全長597cm、梁間全長436cm、床面積25.7m²を測る。桁行の柱間は155～246cmで、東西両側とも中央が広い。棟方向はN－6.5°－Eである。柱穴は円形で直径が35～53cmあり、柱穴4の柱痕は直径30cmだった。建物46との先後関係は不明である。奈良時代の建物と考えるが、瓦質の土器片が1片出土した。　(岡本寛)



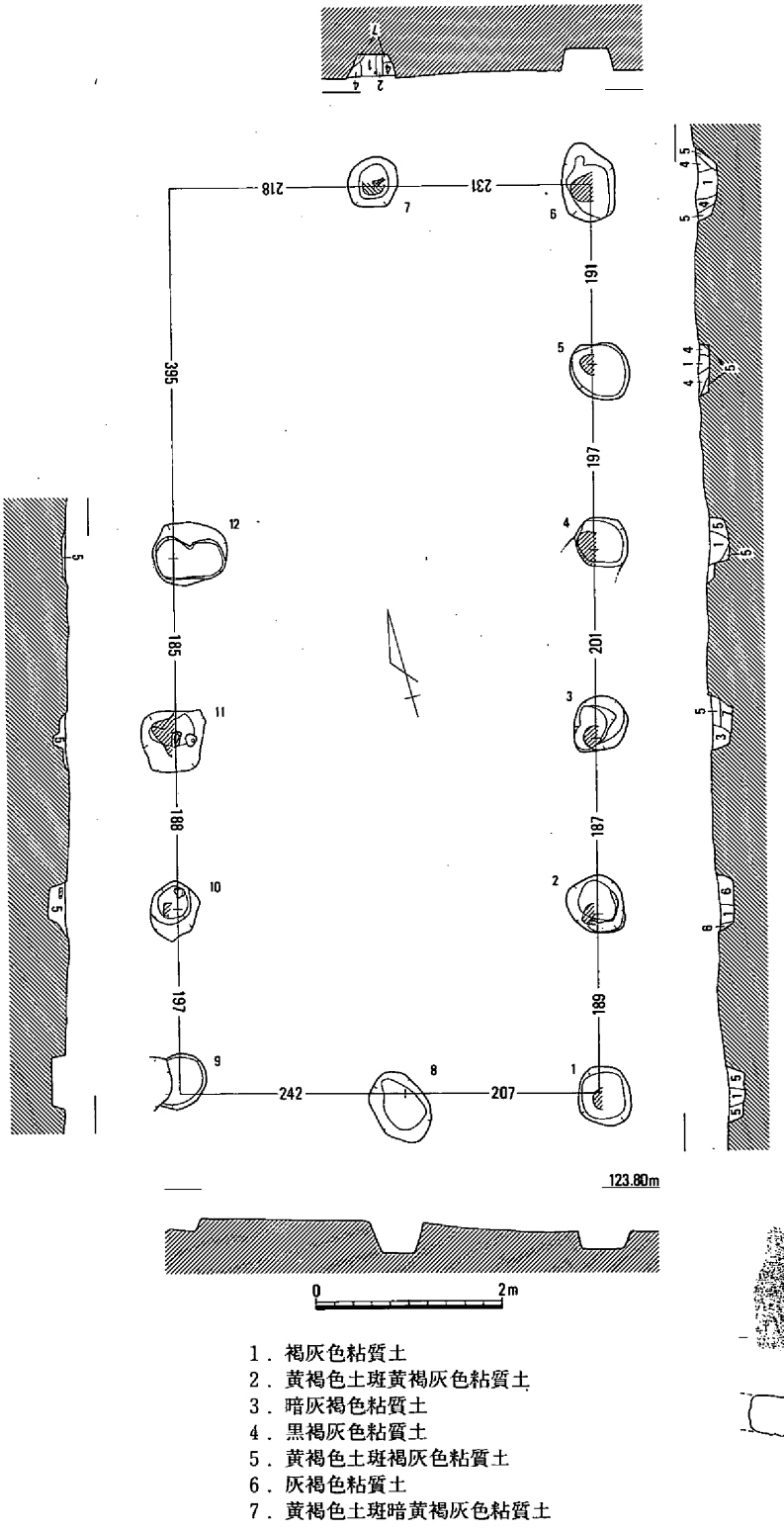
第214図　建物42(1/80)

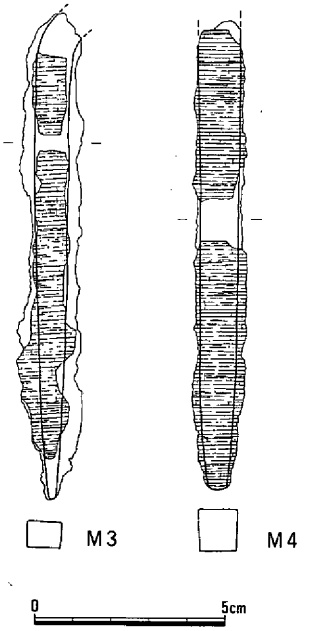
建物45（No75）（第217図）

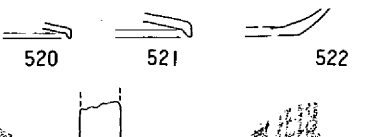
９,10Ⅰ区で検出され、住居11や建物46などと重複関係にある。住居11よりは新しいが、建物46との先後関係は不明である。３×２間の掘立柱建物で、桁行全長610cm、梁間全長374cm、床面積22.3m²を測る。柱間は桁行が179～213cm、梁間が177～194cmで、それぞれ大きく違わない。棟方向はＮ－14.5°－Ｅである。柱穴は直径が33～68cmの円形で、ほとんどの柱穴で直径17～26cmの柱痕を確認した。奈良時代後半の建物か。　（岡本寛）

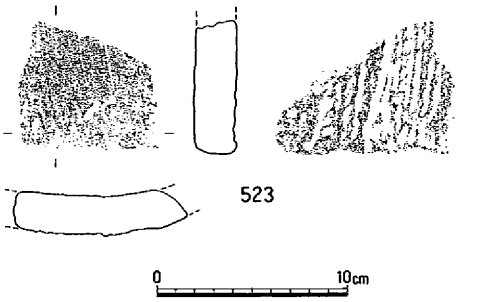
建物46（No65）（第219図）

９,10Ⅰ区で検出された３×２間の掘立柱建物である。桁行全長は565cm、梁間全長



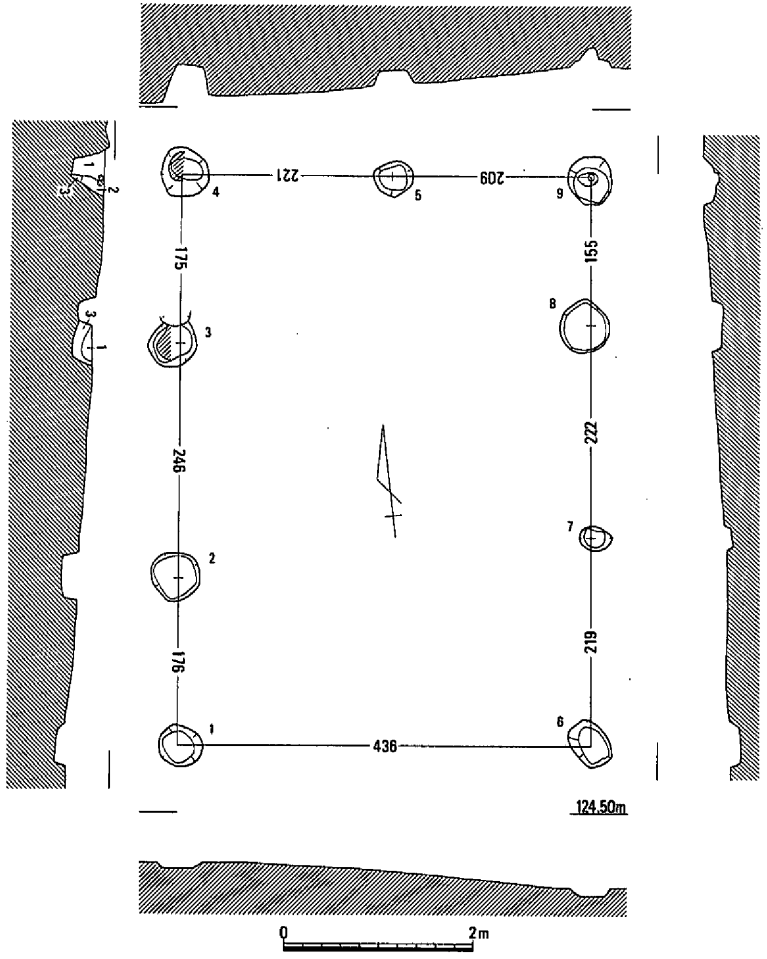






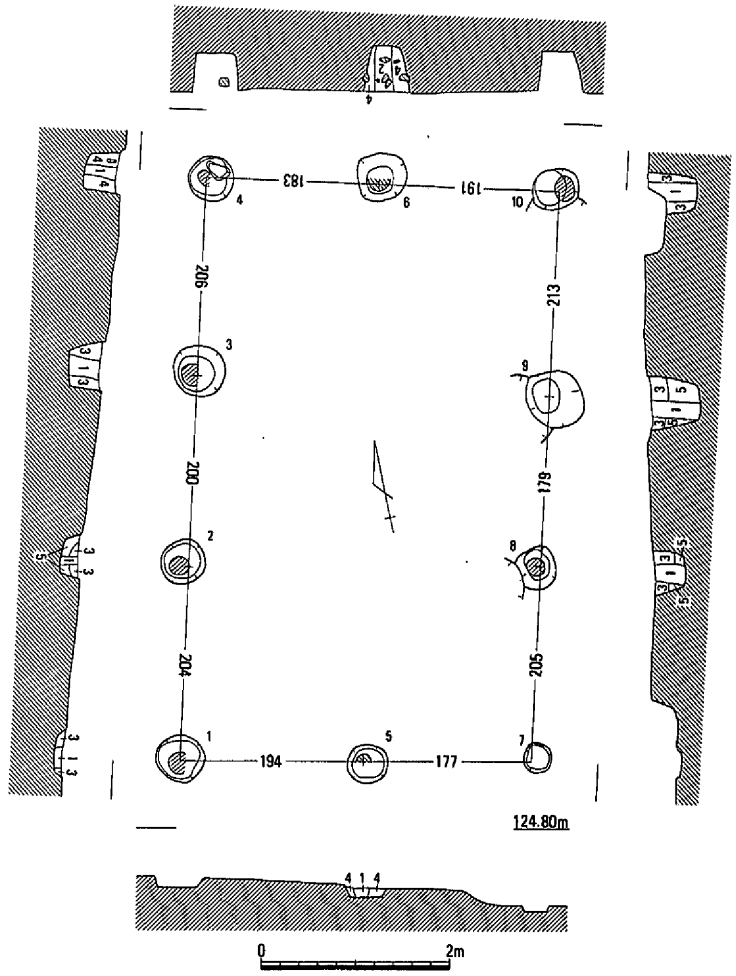
1．褐灰色粘質土
2．黄褐色土斑黄褐灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．黒褐灰色粘質土
5．黄褐色土斑褐灰色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．黄褐色土斑暗黄褐灰色粘質土

第215図　建物43(1/80)・出土遺物(1/2・1/4)



1．暗褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土

第216図　建物44(1/80)



1．灰褐色粘質土
2．茶灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土

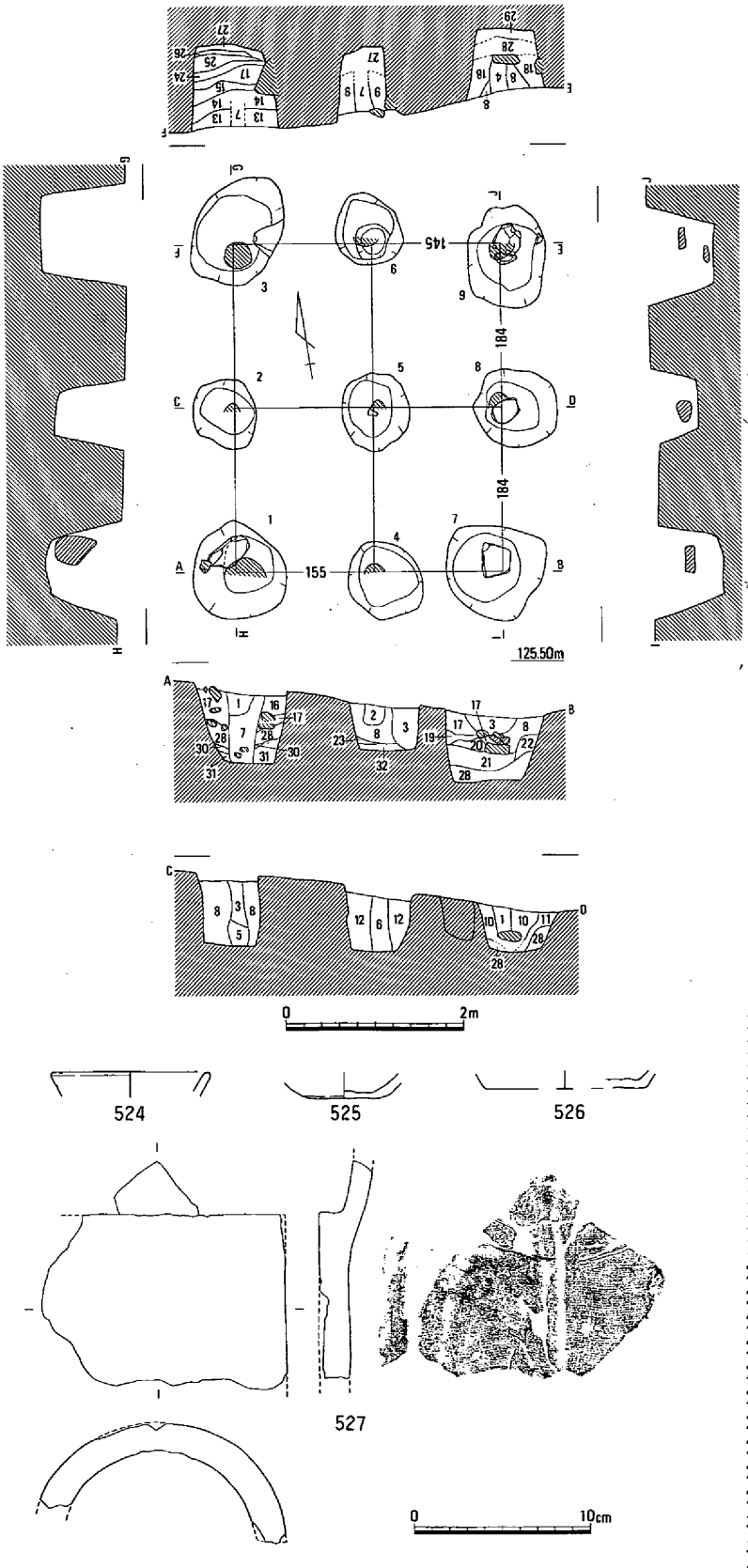
第217図　建物45(1/80)

405cm、床面積21.8㎡を測る。東側柱の残存状況が悪いためやや不整形である。棟方向はＮ－9°　－Ｅを示す。柱間は桁行が180～202cm、梁間が186～205cmで、あまり差がない。柱穴は円形で、直径が26～56cmを測る。建物44・45と重複しているが、先後関係ははっきりしない。柱穴から奈良時代の須恵器・土師器片が出土した。この時代の建物と考えられる。　（岡本寛）

建物47（No32）

（第218図、図版７）

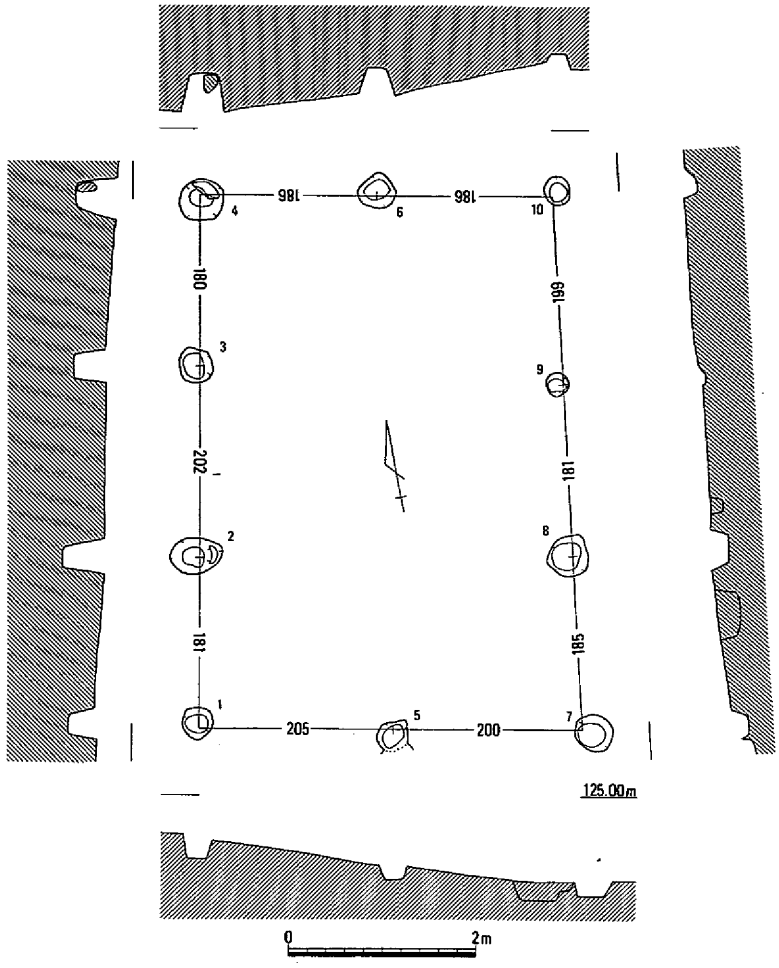
９,10Ｈ区で検出された２×２間の総柱の掘立柱建物である。平面形は長方形で、南北棟の建物とみられる。桁行全長368cm、梁間全長299cm、床面積11.0㎡を測る。棟方向はＮ－8.5°　－Ｅである。柱穴は不整形な円形ないしは楕円形で、長径は84～134cmだが、桁行・梁間それぞれの中



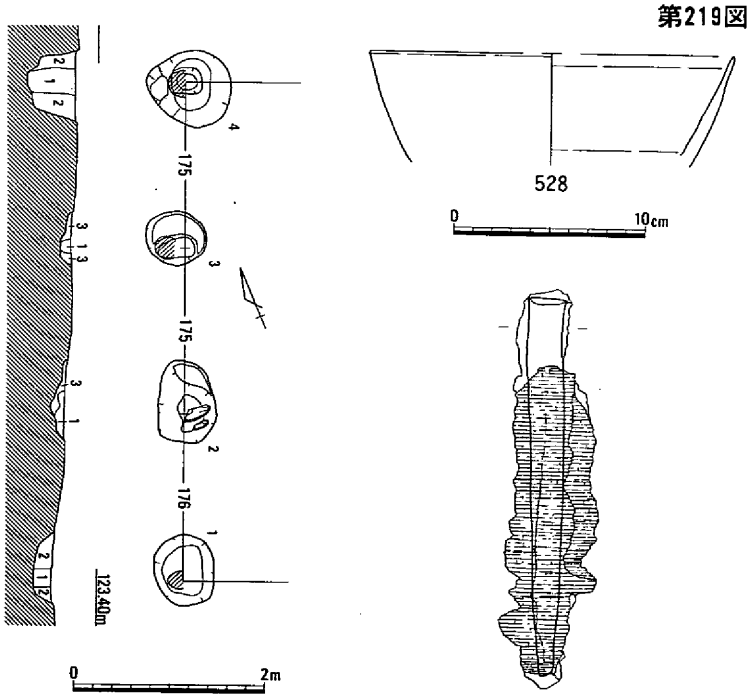
1．黄灰褐色粘質土
2．黄灰色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗黄灰褐色粘質土(礫含)
5．暗灰色粘質土
6．黄褐灰色粘性砂質土(礫多含)
7．暗灰褐色粘質土(礫含)
8．暗灰褐色粘質土(礫含)
9．暗灰黄褐色粘性砂質土(礫含)
10．暗黄灰褐色粘質土(礫含)
11．黄褐色粘質土(礫含)
12．黄灰褐色粘性砂質土(礫多含)
13．暗黄褐灰色粘質土(礫含)
14．暗褐灰色粘質土(礫含)
15．黄褐色土斑暗褐灰色粘質土
16．黄褐色砂質土斑黒褐色粘質土
17．黒褐色粘質土
18．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
19．黄褐色粘性砂質土
20．暗黄褐灰色粘性砂質土
21．黄褐灰色粘質土
22．黄褐色粘質土
23．暗褐灰色粘質土
24．黄褐色砂質土
25．暗灰色粘質土
26．暗黄灰色粘質土
27．暗灰褐色粘質土
28．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
29．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
30．黒灰色粘質土
31．暗黄褐色砂質土
32．灰黄褐色砂質土

第218図　建物47(1/80)・出土遺物(1/4)

央柱穴と中心の柱穴５は一回り小さい。また、柱穴５を除いて桁行・梁間の中央柱穴は四隅の柱穴より浅い。これらの中央柱穴は柱穴５も含め、床までの束柱だったと考えられる。掘り下げると礎石の検出された柱穴が４基あった。礎石はいずれも底面より浮いた状態にあったが、柱穴を掘り直したような状況は断面観察では確認できず、建て替えが行われたかどうかは判然としない。他の柱穴の状況からすれば、むしろ、柱の高さを揃えるためかとも思われる。出土遺物はいくらかあったが、図化できたのはわずかである。**524**は土師器の杯で口縁部内面に煤がみられ、灯明皿として使用されたようである。**525**も土師器



第219図　建物46(1/80)



1．黄褐色土斑暗灰色粘質土
2．黒褐灰色粘質土
3．黄褐色土斑
　暗褐灰色粘質土(含礫)

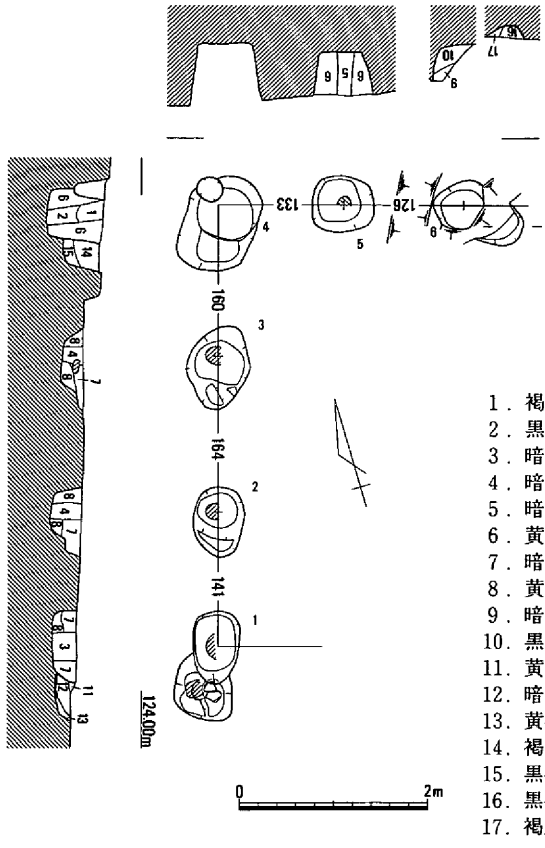
第220図　建物48(1/80)・出土遺物(1/4・1/2)

の杯である。**526**は須恵器の杯で、底径は91㎜を測る。**527**は玉縁付きの丸瓦である。凸面はナデて滑らかにされ、側端面はヘラ切りされる。**524・527**は柱穴１、**525**は柱穴６、**526**は柱穴３から出土した。

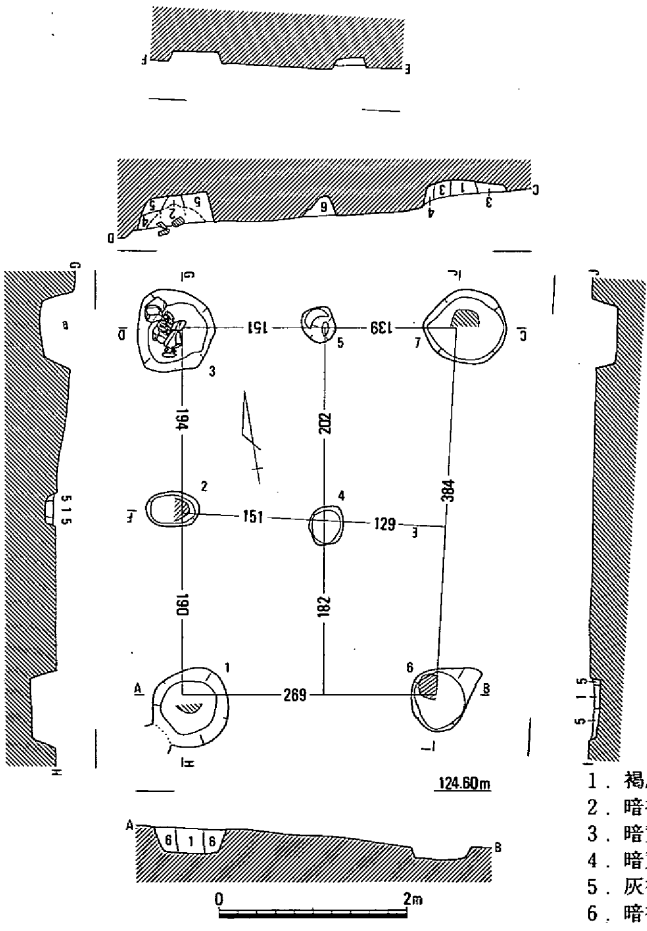
出土遺物や近接遺構との関係から建物47は奈良時代後葉のものと考えられる。　　(岡本寛)

建物48（No67）(第220図)

10K区で３間の柱穴列を検出した。列の東は後世の開墾によって大きく削平を受けていて確認はできないが、建物49との類似から、掘立柱建物の西側柱列と考えている。南北棟の建物であろう。全長は526cm、柱間は



第221図　建物49(1/80)



第222図　建物50(1/80)・出土遺物(1/4)

175・176cmとほぼ等間である。列の方向はＮ－22.5°－Ｅを測る。柱穴は不整形な楕円形だが、柱穴１・２はやや方形に近い。柱穴の長径は65～89cmで、18～26cmの柱痕を認めた。出土遺物が少しあり、須恵器杯と鉄釘を示した。**528**の口径は191mm、**Ｍ５**の釘の断面は方形で一辺が９mm、全長は100mmを測る。遺物などから奈良時代後葉の建物とみられる。　（岡本寛）

建物49（No84）

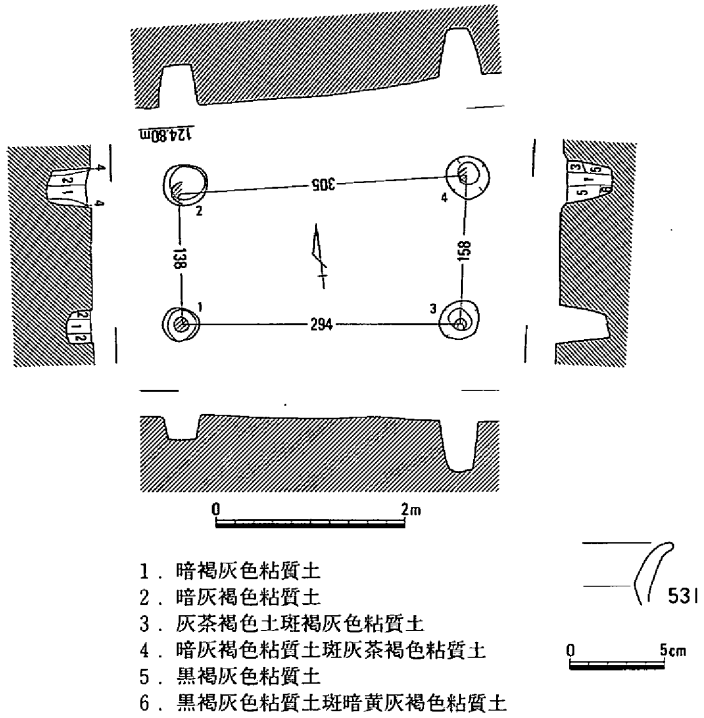
（第221図、図版７）

11Ｉ，Ｊ区に位置する。後世の削平によって全容は明らかではないが、柱穴５が両隣の柱穴より浅いことから３×２間の掘立柱建物と考えられる。棟方向はＮ－16.5°－Ｅである。桁行全長465cm、梁間全長259cm、床面積は12.0m²と推定される。角の柱穴で重複が認められ、建て替えられたものとみられる。柱穴は不整楕円形だが、方形に近いものがある。隣接する建物との関連から奈良時代後葉の建物と考えられる。　（岡本寛）

建物50（No83）（第222図）

11Ｈ区で検出された。建物群の中で緩斜面のもっとも下方に位置していたためか、残存状況はあまり良くない。このことは、もともとは建物群が一帯の整地された平坦部に建っていたのではないかと思わせる。２×２間の総柱の掘立柱建物で、建物47と対になり、後述する中心建物の南前面に

配置されたものと考えている。桁行全長384cm、梁間全長290cm、床面積10.7m²を測る。棟方向はN－10°－Eである。柱穴は不整円形で、長径が38～90cmあり、柱痕の長径は31～35cmであった。建物47と同じく四隅の柱穴が大きく、他の柱穴は束柱とみられる。**529**は須恵器杯で、柱穴2から出土した。**530**は柱穴1から出土した土師器杯で、口縁部内面に煤らしいものが付着している。出土遺物の年代は奈良時代末期頃とみられ、建物50の時期もその頃と考えられる。（岡本寛）



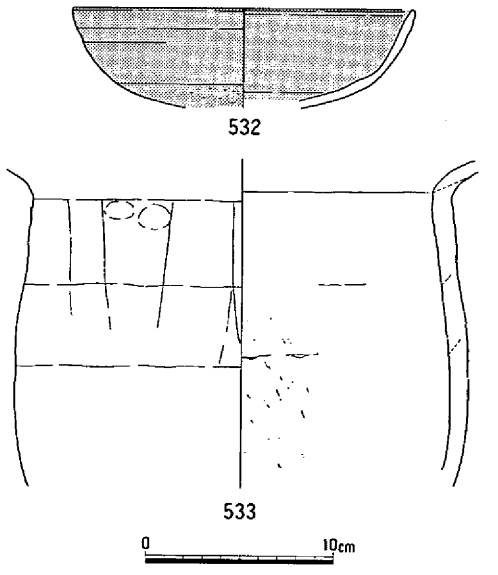
第223図　建物51(1/80)・出土遺物(1/4)

建物51（No79）（第223図）

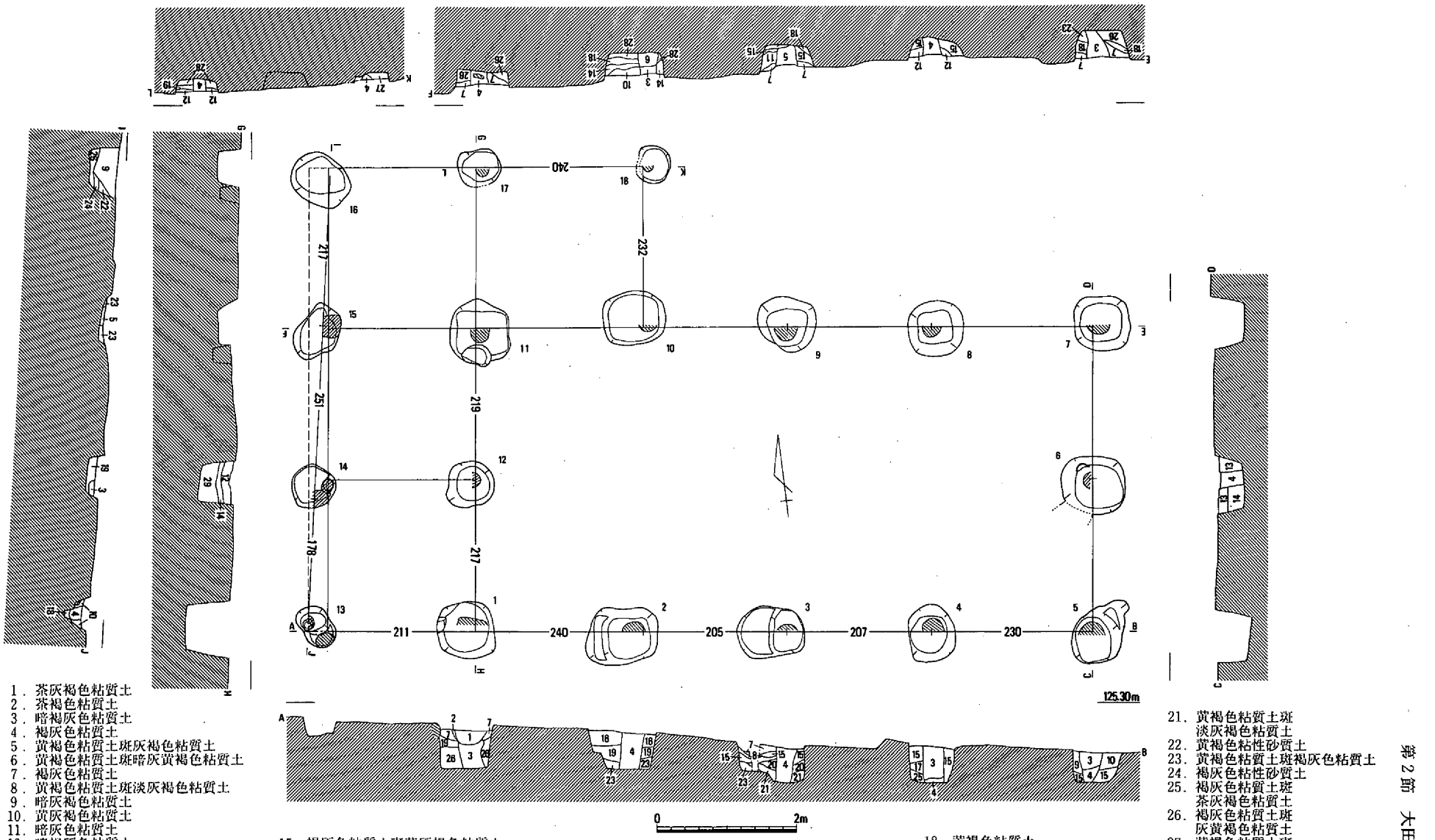
11H区で検出された掘立柱建物である。建物50と近接し、共存は考えられない。1×1間で、桁行305cm、梁間158cm、床面積5.0m²を測る。棟方向はE－6.5°－Sである。柱穴は円形で直径が39～46cmあり、確認された柱痕の直径は15～23cmであった。図示した土師器の甕は柱穴2から出土した。出土遺物や棟方向から奈良時代後半の建物とみられる。（岡本寛）

建物52（No80）（第224・225図、図版7）

10・11G区に位置し、奈良時代建物群の中心になる建物である。もう1棟の中心建物と考えられる建物53と重複している。東西棟の掘立柱建物で、身舎は4×2間で、北側と西側に庇が1間付く。北側の庇は2間しか検出されなかったが、東へ下がる地形のために後世の削平によって消滅した可能性がある。身舎の桁行全長は882cm、梁間全長は436cmを測る。梁間の柱間は217・219cmとほぼ等間であるが、桁行では東から230・207・205・240cmとなり、両側が広くなっていた。西側庇は幅が211cm、北側庇の幅は232cmで、庇部分を含めた建物の床面積は73.0m²となる。棟の方向はE－7°－Sである。身舎の柱穴は隅丸方形で、長軸は65～102cmを測る。全柱穴で柱痕が確認され、直径は22～45cmであった。庇の柱穴は円形のようだが、西庇の柱穴は建て替えられたようで、不整形なものがみられた。柱穴18の長径は54cmで、身舎の柱穴より一回り小さい。また、庇の柱痕の細いものは直径が20cmだった。さらに、庇柱穴の深さは、角の柱穴13・16では身舎柱穴に近かったが、他の柱穴は身舎柱穴よりかなり浅かった。



第224図　建物52出土遺物(1/4)



1．茶灰褐色粘質土
2．茶褐色粘質土
3．暗褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
6．黄褐色粘質土斑暗灰黄褐色粘質土
7．褐灰色粘質土
8．黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．黄灰褐色粘質土
11．暗灰色粘質土
12．暗褐灰色粘質土
13．黄褐色土斑暗茶灰褐色粘質土
14．暗褐灰色粘質土
15．褐灰色粘質土斑茶灰褐色粘質土
16．黄褐色粘質土斑黄褐灰色粘質土
17．黄褐色粘土斑淡褐灰色粘質土
18．黄褐色粘質土
19．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
20．黄褐色粘質土斑茶褐灰色粘質土
21．黄褐色粘質土斑
淡灰褐色粘質土
22．黄褐色粘性砂質土
23．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
24．褐灰色粘性砂質土
25．褐灰色粘質土斑
茶灰褐色粘質土
26．褐灰色粘質土斑
灰黄褐色粘質土
27．黄褐色粘質土斑
暗黄褐灰色粘質土
28．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
29．黒灰色粘質土

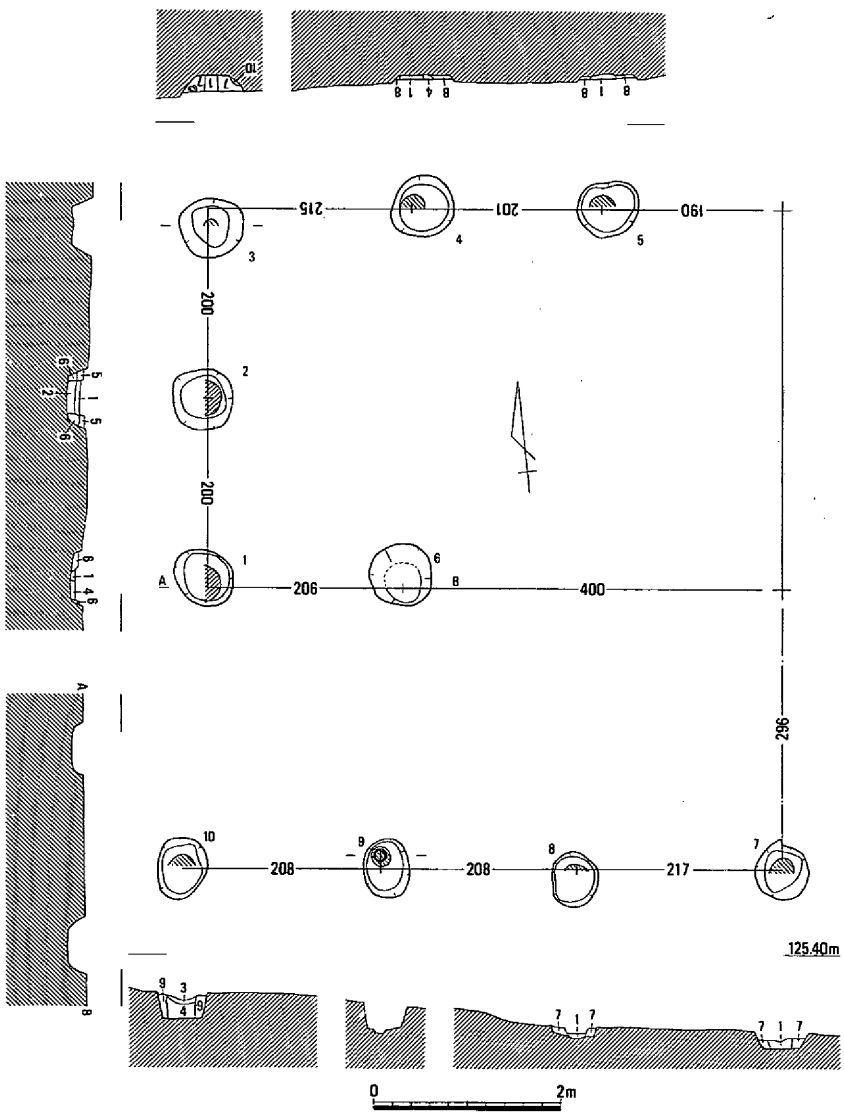
第225図　建物52(1/80)

柱穴からはかなりの数の土器片が出土した。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器がみられたが、図示できたのは2点である。**532**は柱穴10から、**533**は柱穴6から出土した。**532**は土師器の杯である。全面に丹が塗られている。底部外面はヘラケズリで成形され、内面には不定方向のナデが認められるようである。口縁端部の内面には軽い段が巡る。**533**は土師器の甕で、胴部外面は板状工具によって調整されている。内面はヘラケズリで、頸部付近はナデられている。煤が付着している。

建物52の時期は出土遺物から奈良時代後半とみられるが、柱穴からの瓦片の出土の有無を根拠とすれば、建物53に先行すると考えられ、建物群の初期の建物とされる。　(岡本寛)

建物53（No76）（第226～228・249図、図版7・18）

10,11F,G区で検出された。もう1棟の中心建物で、建物52から新たに建て替えられたものと考えられる。後世の削平によって柱穴の半分が消滅するが、3×2間の掘立柱建物と復元される。建物の南前面には3間の柱穴列が検出された。列の方向は建物53の棟方向と等しくE－6°－Sを測り、その位置関係も考慮して、建物53に伴う塀ではないかと考えている。建物53の桁行全長は推定で579cm、梁間全長は400cm、床面積は23.2m²と推定される。柱間は梁間では等間であるが、桁行では違いが大きい。西梁間の延長線と南側柱穴列の西端柱穴との間に27cmの間隔がある。調査時には柱穴列を庇として理解したが、建物との距離が建物の柱間より広く、柱穴の深さも柱穴列の方が深いことから、塀として解釈したい。塀の全長は633cmで、柱間は208・217cmとほぼ等間である。建物の柱穴は不整な円形だが、柱穴2・3のように方形に近いものもある。長径は65～70cmで、ほとんどの柱



1．褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．灰黄褐色粘質土
4．黄褐色土斑灰褐色粘質土
5．淡褐灰色粘質土
6．茶褐灰色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．茶灰褐色粘質土
9．黄褐色土斑黄灰褐色粘質土
10．灰黄褐色粘質土

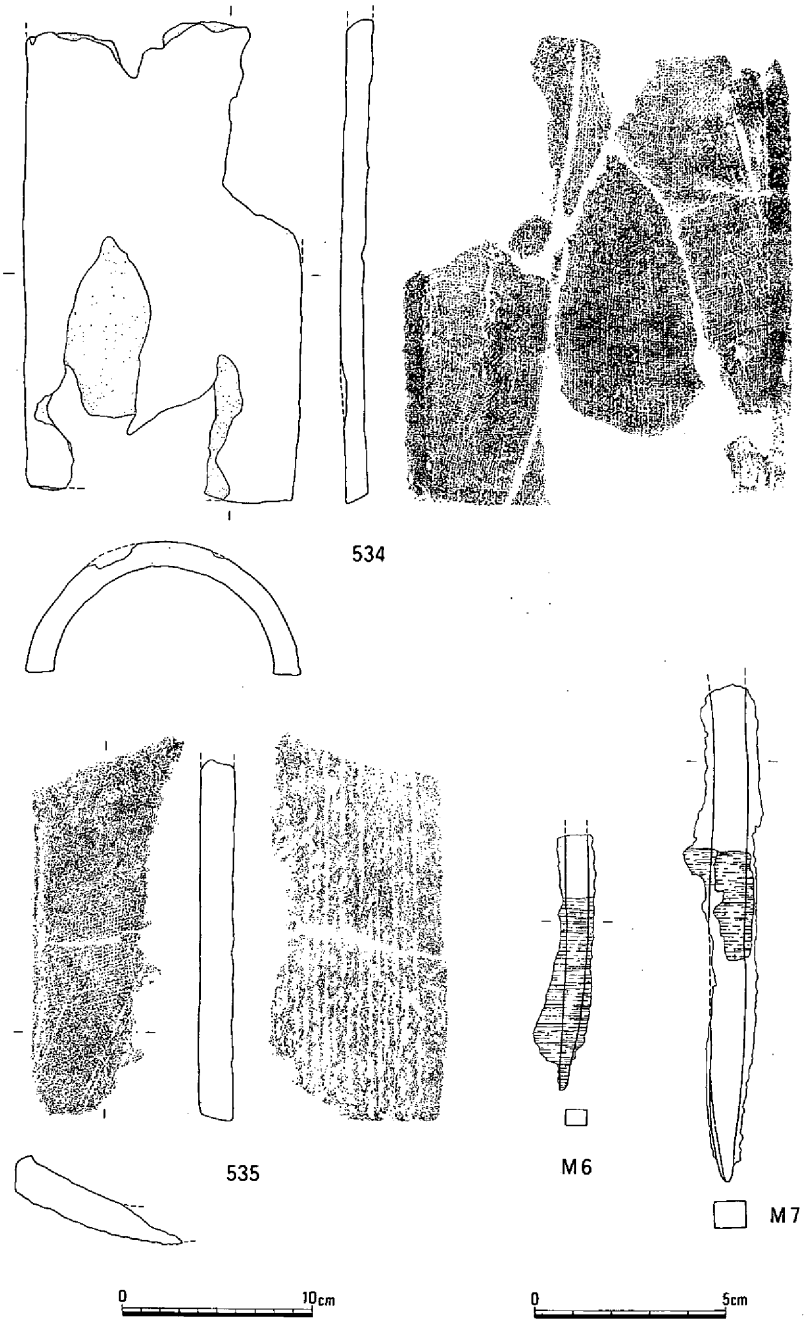
第226図　建物53(1/80)

穴で直径15～40cmの柱痕を認めた。塀の柱穴は不整楕円形で長径が58～65cm、柱痕は直径20～29cmだった。

建物53は第228図に示すように東西にも塀を伴っていた。塀の方向は建物の棟方向とほぼ直交し、建物からの距離がともに等しく、北端の柱穴が建物の北桁行と揃うことから、東西塀と建物53は共存したとみられる。建物53は東・南・西の三方を塀によって囲まれた特異な建物と考えられる。

柱穴からは土器小片・瓦片・鉄釘が出土した。**534**は柱穴４から出土した丸瓦である。**535**は平瓦で、柱穴３から出土した。凸面には縄のタタキ目が残り、側面は面取りをするか。鉄釘は柱穴６から３本（**M８～10**）、南塀の柱穴７から２本（**M６・７**）が出土した。

建物53の時期は出土遺物や建物52との関係から判断すれば奈良時代末期と考えられる。　（岡本寛）



第227図　建物53出土遺物(1/4・1/2)

建物54（No96）（第229図）

11E,F区で検出された２×１間の掘立柱建物である。棟方向はN－9.5°－Eで、このことと奈良時代建物群に近接することから同時代の建物と考えた。桁行全長は365cm、梁間が304cm、床面積は11.1㎡を測る。柱穴は円形で、直径が40～55cmである。弥生土器片が出土した。　（岡本寛）

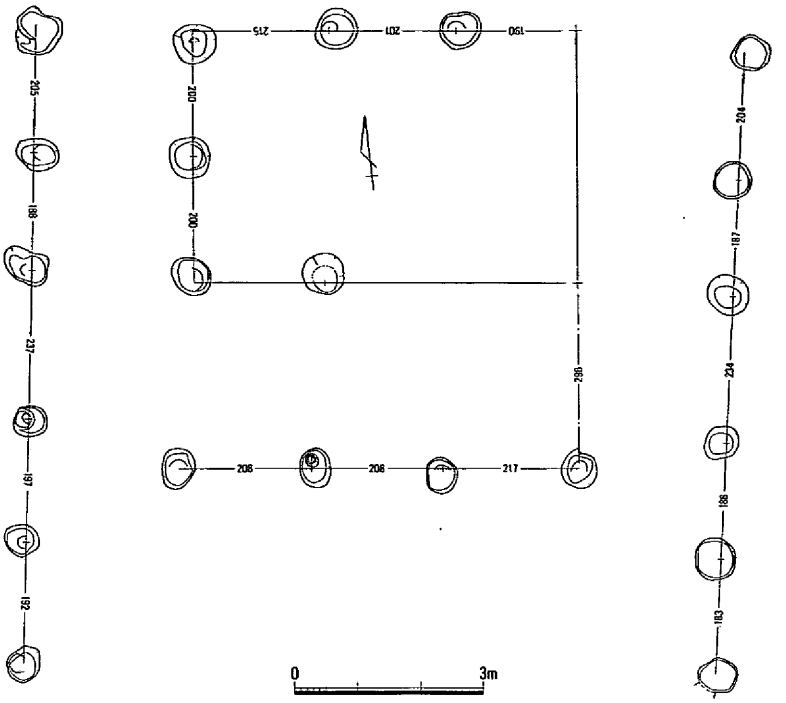
建物55（No89）（第230図）

11,12G区に位置する。２基の柱穴が確認されず、柱穴の直径も23～27cmと小さいため、２×１間の掘立柱建物とすることには疑問もある。棟の方向はE－0.5°－Sを測り、このことから奈良時代の建物としたが、柱穴規模が他の奈良時代建物の柱穴にくらべて貧弱なため、確実ではない。桁行全長は415cm、梁間255cm、床面積10.6㎡を測る。柱穴１の柱痕は径８cmである。遺物はない。（岡本寛）

塀１（No81）

（第228・231図、図版７）

10Ｆ，Ｇ区で検出された。５間の柱穴列で、建物53に伴う塀と考えられる。列の方向はＮ－７°－Ｅ、塀の全長は1019cmを測る。柱間は一定しないが、中央がもっとも長くて237cmあり、他は188～205cmと近似している。柱間の長短の変化は塀１と塀２でまったく等しく、両者が対であることを示す。柱穴は不整円形で長径が56～80cm、柱痕は径23～31cmを測る。奈良時代末期と考えられる。（岡本寛）



第228図　建物53・塀１・塀２配置図(1/120)

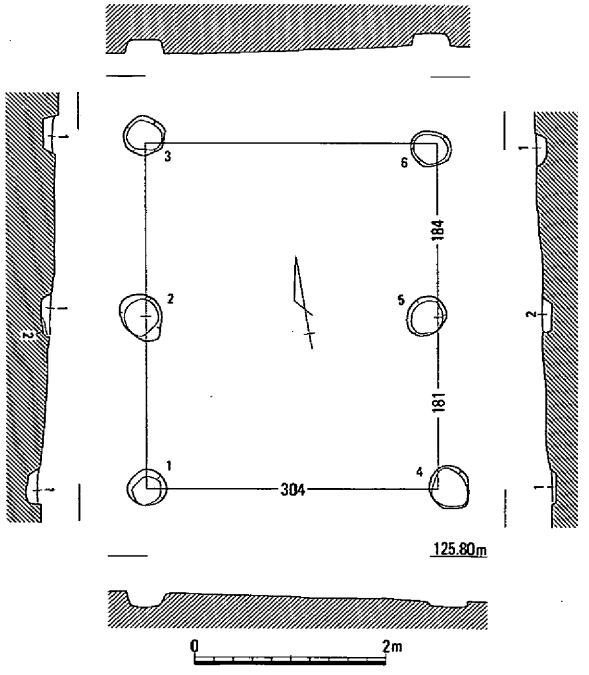
塀２（No82）

（第228・232図、図版７）

11Ｇ区に位置する。塀１と対になり建物53を囲む。５間の柱穴列で、全長は994cm、列の方向はＮ－９°－Ｅを測る。柱間は中央が234cmあり、他は183～204cmであった。柱穴は不整な円形で、直径が61～68cmあり、柱痕は確認できなかった。塀の時期は奈良時代末期と考えられる。（岡本寛）

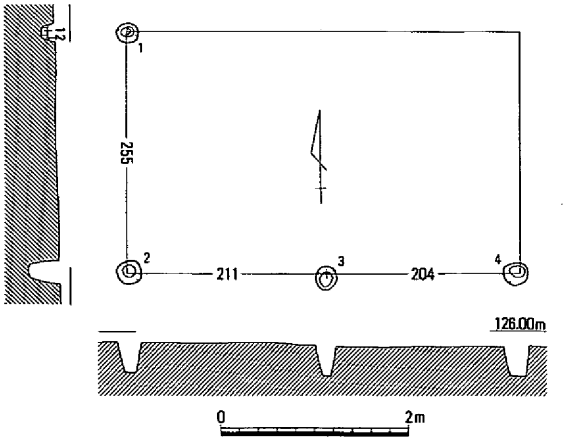
柱穴２（No102）（第233図）

９Ｌ区と９Ｍ区の境で検出された。不整な楕円形で長径は86cm、柱痕の直径は38cmを測る。付近には他に同規模の柱穴がなく、あるいは土壙48と対になるかもしれない。（岡本寛）



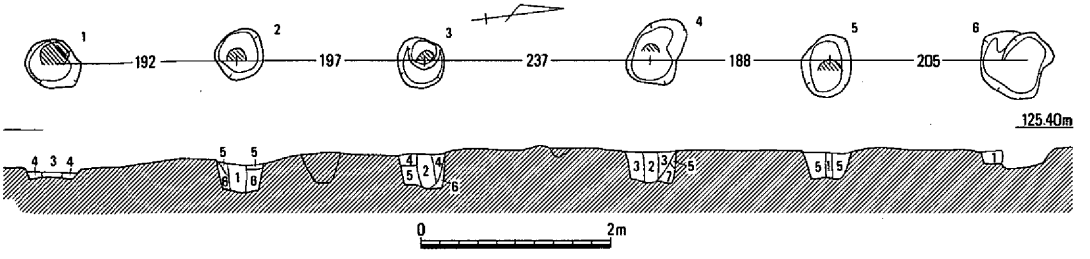
１．褐灰色粘質土　２．茶灰褐色粘質土

第229図　建物54(1/80)



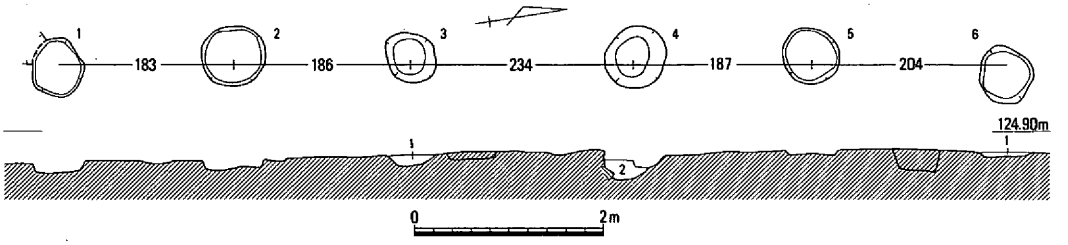
１．褐灰色粘質土　２．灰褐色粘質土

第230図　建物55(1/80)



１．灰黄褐色粘質土
２．黄褐色土斑黄褐灰色粘質土
３．灰褐色粘質土
４．黄褐色粘質土斑黄灰褐色粘質土
５．褐灰色粘質土(礫含)
６．黄褐色土斑黄褐色粘質土

第231図　塀１(1/80)



１．褐灰色粘質土　　２．黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土

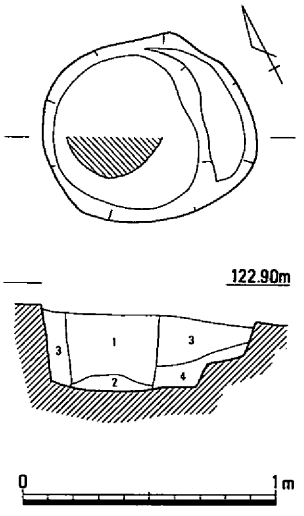
第232図　塀２(1/80)

柱穴３（No108）（第234図）

11Ｉ区で検出された。不整な円形で、長径は36cmを測る。柱がめり込んだとみられ、底面に直径18cmの穴が認められた。この穴の上部から凸面に縄のタタキ目のある平瓦が出土した。　　（岡本寛）

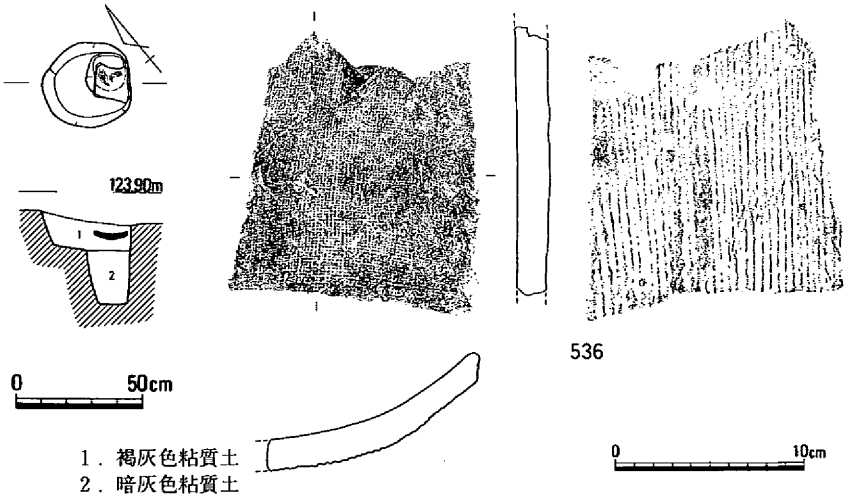
土壙46（No3）（第235図）

８，９Ｍ区で検出された。小形の方形の竪穴遺構である。東西辺200cm、南北辺210cm、深さ17cmを測る。埋土は礫を含んだ灰褐色粘質土のみであった。底面には長径18cm、深さ12cmの小穴が１基あったのみだった。弥生時代の石鏃が１点出土したが、南北辺の方位がＮ－15°－Ｅ前後で、建物43の棟方向や



１．褐灰色粘質土
２．淡黄褐色粘質土
３．黄褐色土斑褐灰色粘質土
４．淡黄褐色粘性砂質土

第233図　柱穴２(1/30)



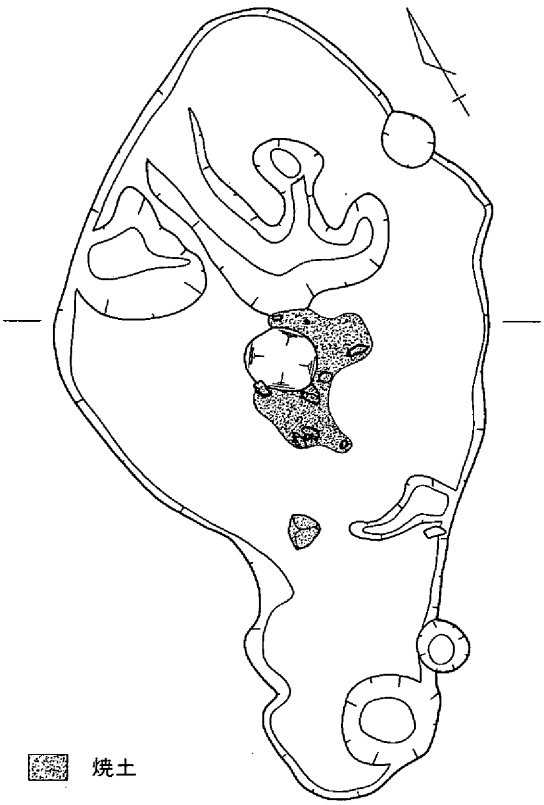
１．褐灰色粘質土
２．暗灰色粘質土

第234図　柱穴３(1/30)・出土遺物(1/4)

溝８の流走方向と近く、奈良時代に形成された平坦部分にあることから、建物群に伴う遺構と判断した。小形の建物の可能性も考えられる。　　（岡本寛）

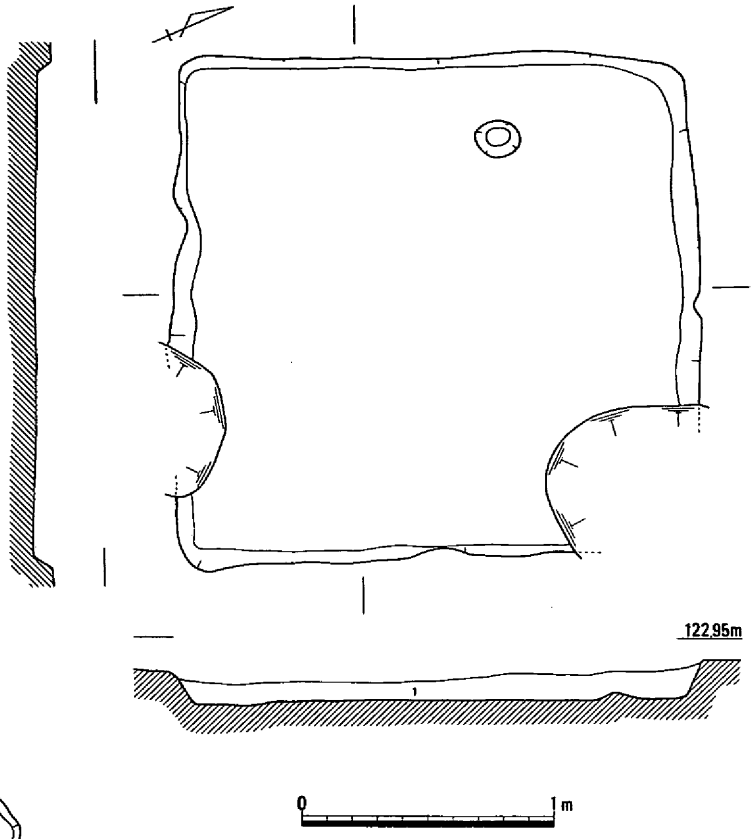
土壙47（No103）（第236図）

９M区で検出された。溝９を挟み、土壙46の２m東に位置する。緩斜面にあって、後世の削平を受けたためか、不定型な形をしている。長菱形に近く、長軸が315cm、短軸は170cm、深さ19cmを測る。中央に焼土塊があり、浅い小穴や溝状の窪みが認められた。土壙の性格は不明だが、奈良時代に形成された平坦部分にあることから、建物群に伴う遺構と考えたい。　　（岡本寛）



1．灰茶褐色粘質土（焼土塊含）
2．黄灰褐色粘質土

第236図　土壙47（1/30）

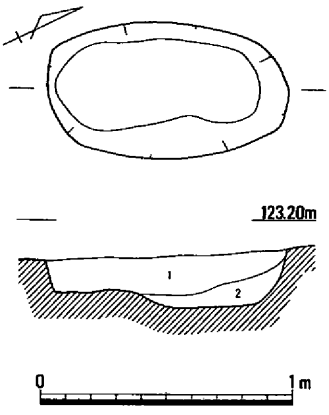


1．灰褐色粘質土（礫含）

第235図　土壙46（1/30）

土壙48（No11）（第237図）

９Ｌ区に位置する。長楕円形で長径が96cm、短径は53cm、深さ24cmを測る。埋土は２層で、柱痕は認められなかったが、位置的には柱穴２と対になってもよく、その距離は360cmを測り、方向はＥ－12°－Ｓである。　　（岡本寛）

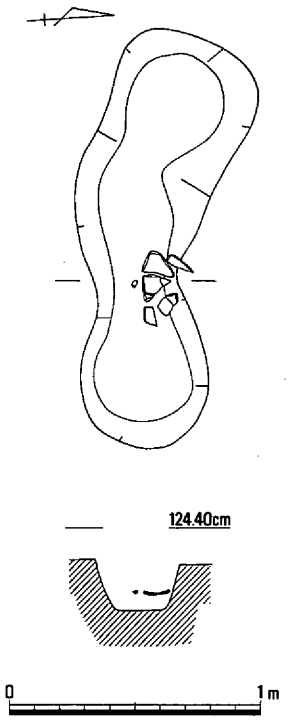


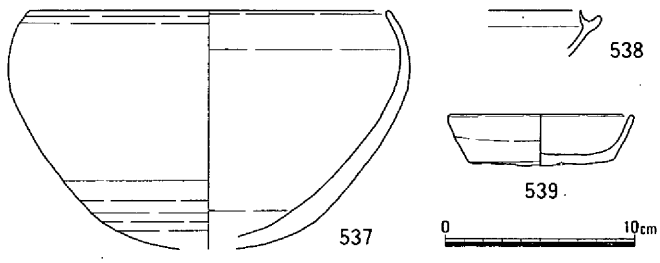
1．暗灰褐色粘質土（礫含）
2．淡黄灰色粘質土斑暗黄灰色粘質土

第237図　土壙48（1/30）

土壙49（No113）（第238図）

10Ｉ区で検出された。ナマコのような形状を呈し、長さ166cm、幅54cm、深さ44cmを測る。膨らみが三つあり、あるいは柱穴が３基重複したものの可能性もある。柱穴３も近くにあり、建物が周辺に存在していたかもしれない。出土遺物の**537**は鉄鉢形の須恵器である。口縁端部は丸くおさめ、底部外面はヘケズリの後にナデて調整している。**538**は須恵器の杯である。**539**は土師器の杯で、底部はヘラ切りし、口縁部に煤が付着している。時期は奈良時代後半か。　（岡本寛）

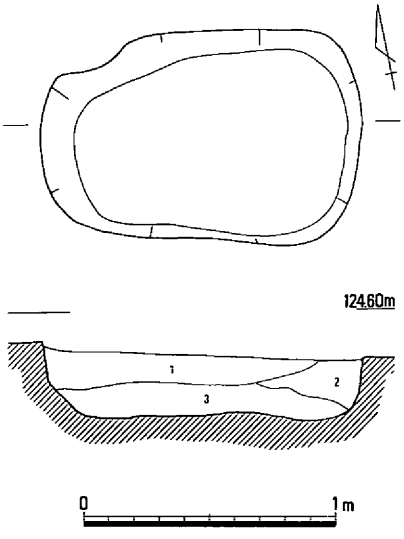




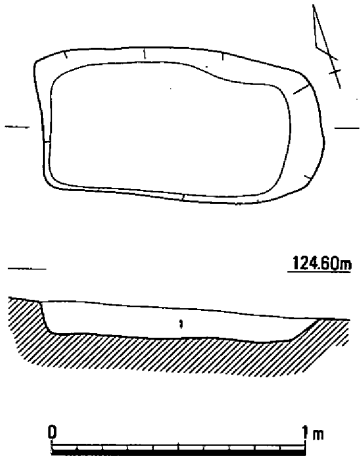
第238図　土壙49(1/30)・出土遺物(1/4)

土壙50～52（No109・101・97）（第239図）

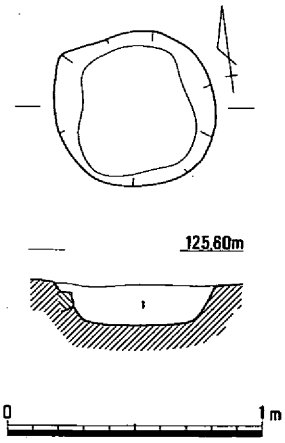
土壙50・51はともに10Ｉ区にあり、住居11の埋没後、その上方に掘られていた。いずれも不整な隅丸長方形で、底面は平坦である。土壙50は長軸が128cm、短軸は86cm、深さ33cmを測る。埋土は３層で、第１層と第３層には地山の黄褐色土の小塊が混入していた。土壙51は長軸が111cm、短軸は60cm、深さ13cmを測る。埋土は１層であった。土壙51からは奈良時代の丹塗りの土師器が出土したが、土壙50からは時期不明の小片が出土したのみだった。ともに建物50とも重複していた。土壙52は11Ｅ区にあり、建物55の南正面に位置する。不整な円形で、長径が69cm、深さ17cmを測る。遺物はなかった。　（岡本寛）



1．黄褐色土斑灰褐色粘質土
2．黒灰褐色粘質土
3．黄褐色土斑暗灰褐色粘質土



1．黄灰褐色粘質土



1．褐灰色粘質土(炭少量)

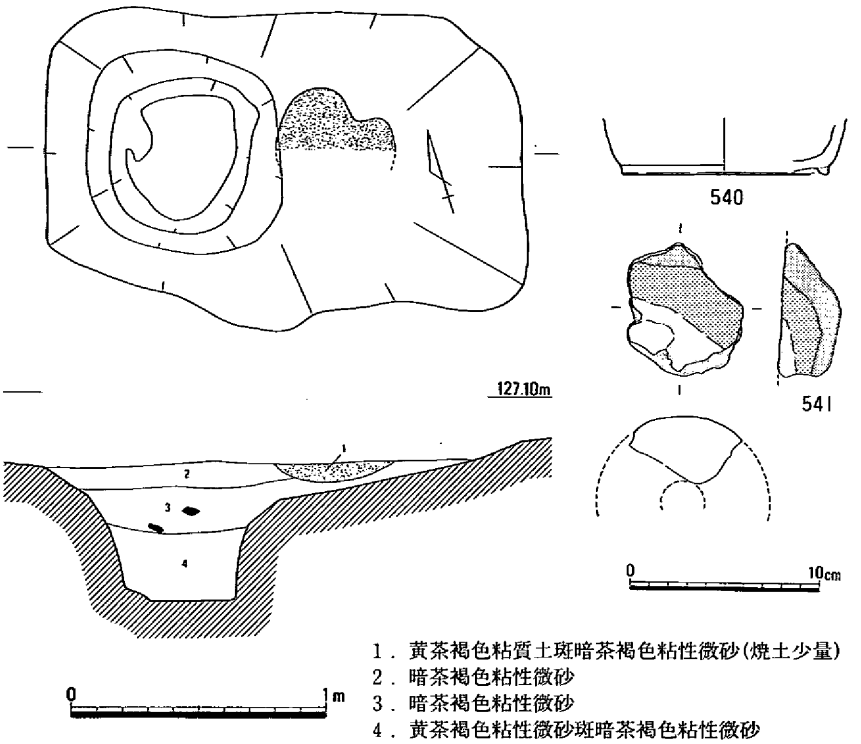
第239図　土壙50～52(1/30)

土壙53（No160）

（第240図）

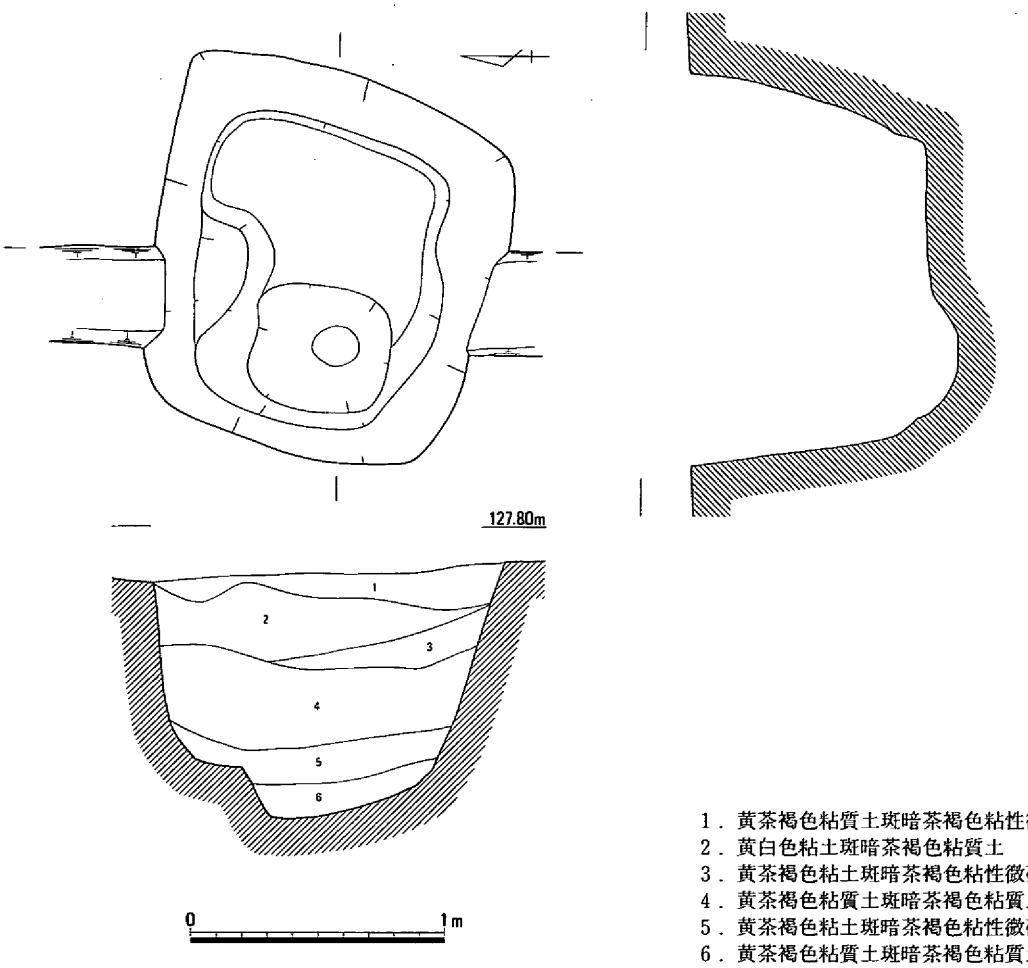
第７区南西隅において検出された。基本的には平面長方形を呈する土壙である。検出面から土壙底部までは浅く緩やかな移行を見せる。ただし西側半分は、底部からさらに40cmの深さに一辺70～80cmの方形の穴が掘られていた。

土壙の性格は、上部構造が削平されていたため、明確ではない。



1．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘性微砂(焼土少量)
2．暗茶褐色粘性微砂
3．暗茶褐色粘性微砂
4．黄茶褐色粘性微砂斑暗茶褐色粘性微砂

第240図　土壙53(1/30)・出土遺物(1/4)



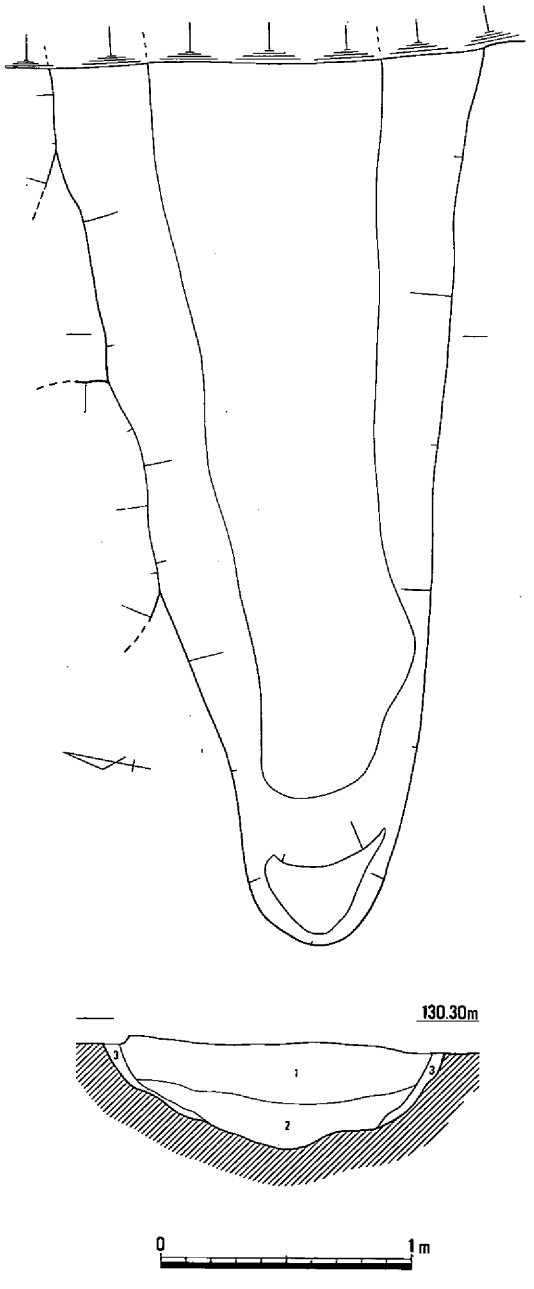
1．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘性微砂
2．黄白色粘土斑暗茶褐色粘質土
3．黄茶褐色粘土斑暗茶褐色粘性微砂
4．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘質土
5．黄茶褐色粘土斑暗茶褐色粘性微砂
6．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘質土

第241図　土壙54(1/30)

ただし、平面検出時に焼土を含む堆積層と、土壙埋積土中から鞴の羽口片を小片ながら１点確認している。このことから土壙53は、鍛冶に直接あるいは間接的に関係したものと推測される。時期的には、供伴土器である高台付の須恵器杯身片を唯一根拠とすれば奈良時代後半頃に比定されよう。（島崎）

土壙54（No165）（第241図）

土壙53から東方向に34m離れた地点で確認された。近代の暗渠排水溝と切り合った状態で検出された。土壙は、ほぼ東西・南北方向に約150×140cmの一辺をもつ方形プランを基調としたもので、検出面から壙底までの深さ約95cmを測った。また、壙底部西側には、一辺約50cm四方、深さ10cmの窪みが認められた。土壙53の在り方と共通した事象といえよう。堆積土は、粘質の強い土壌６層から成る比較的単調な堆積を見せていた。堆積状況により土壙は意図的に埋められたと推測された。出土遺物は、埋積土中から小片ながら須恵器片が確認されたにすぎない。時期については明瞭ではないが、およそ奈良時代に比定されよう。（島崎）



1．灰黄色土斑黒色土　　3．暗灰色土
2．黒色土

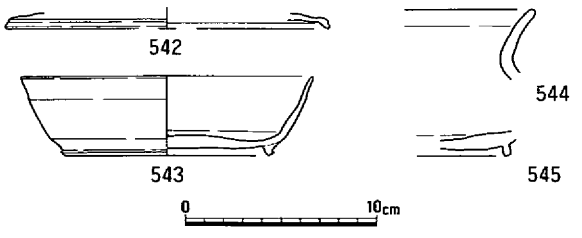
土壙55（No418）（第242・243図、図版18）

大田障子遺跡との境に所在する。両遺跡に跨るかのように焼土塊を多く含んだ土壙で、検出面が重複して確認された。土壙55は、その中でも南側にあって後述する土壙56に切られた状態で検出された。東側が大田障子遺跡にかかっていたため一部を欠損する。検出最大長６m、最大幅170cm、検出面からの深さ約30cmを測った。出土遺物には、須恵器の杯身**543・545**、杯蓋**542**、土師器甕**544**等が散見された。杯身・杯蓋ともに器壁が薄く形成され、粗雑な感は否めない。時期的には、奈良時代の範疇で考えて差し支えない。（島崎）

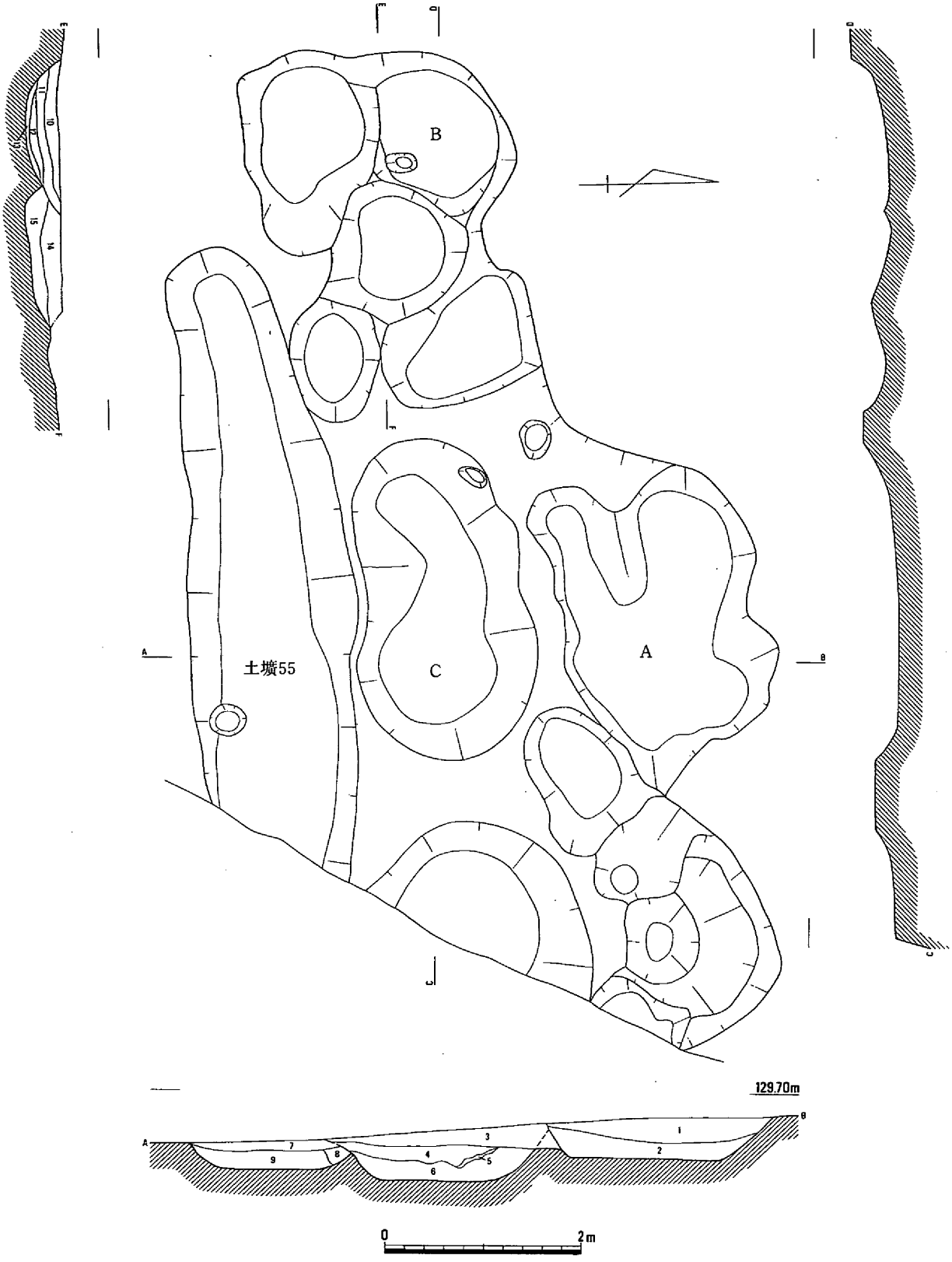
土壙56（No421～425・431）

（第243・244図、図版18・21）

29，30Ｐ区に位置し土壙55に近接して所在する。平面検出当初において平面的な在り方及び埋積土の状況から、土壙55を含め土壙56全体は同時に埋没したものと考えてきた。ところが基盤層近くまで埋積土を掘り下げた段階で、この広がりは径１～



第242図　土壙55(1/30)・出土遺物(1/4)



1．黒灰色土　　5．焼土　　9．黄色土　　13．黄色土斑黄灰色土
2．黄色土斑黒色土　　6．灰黄色土　　10．黒灰色土(含焼土塊)　　14．暗灰茶色土(含焼土塊)
3．灰茶色土　　7．黒色土　　11．黒色土斑黄灰色土　　15．暗黄灰色土(含焼土塊)
4．茶灰色粘質土　　8．茶灰色土　　12．黒色土

第243図　土壙55・56(1/60)

3m位の円形及び楕円形を呈する十数基の土壙の1カ所への集中ということが判明した。また、この広がりは東の大田障子遺跡にも伸びていた。大田障子遺跡の土壙4がこれに該当する。

土壙は、基本的には径1～3mの大きさで、深さ30～50cmのものが多い。また、断面形態も多くは皿状を見せるものであった。ここでは紙面上土壙全てについての説明が不可能なので代表として、中でも遺物の出土を見た仮にA・B・Cとした3基の土壙について概観する。なお、土壙全体の出土遺物として須恵器杯身（549）・須恵器杯蓋（546・547）・須恵器長頸壺（548）・須恵器平瓶（550）・土師器甕（551～553）・土師器甑（554）等がある。時期的には、奈良時代を示すものである。

Aは、一連の土壙中一番北側にあって掘り上がりがやや歪な楕円形を呈する。規模は、長軸長東西方向で3m、幅2mを測った。検出面からの深さは、40～45cmで底部は平坦面を見せる。埋積土は、上下2分層が可能で、上層に黒色土が、下層に基盤の黄色土塊と黒色土の混和層が認められた。

出土遺物には土師器甕（555・556）がある。

Bは、土壙56の中にあって最も西側に集中する土壙群の中にある。規模は、径1～1.5mのほぼ円形を呈し、断面皿状で検出面からの深さ最深部で約30cmとAと比較してやや浅めであった。埋積土中最上層の第10層には、焼土塊を含んだ黒灰色土の層が見られた。

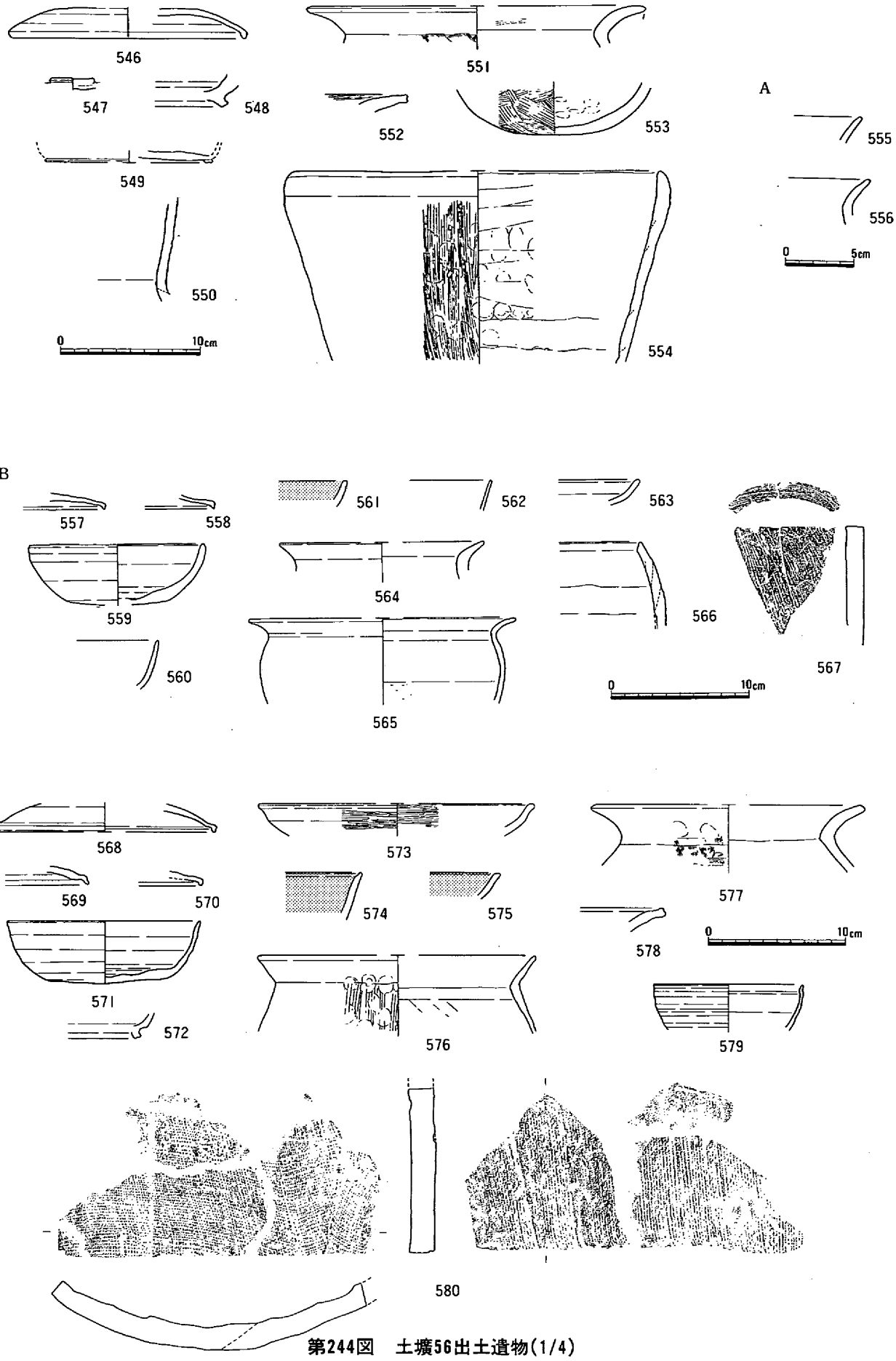
出土遺物には、須恵器杯身（559・560）・須恵器杯蓋（557・558）・土師器甕（564・565）・土師器鉢（566）・土師器杯身（561・562）・土師器皿（563）・瓦（567）等がある。杯身（559）が古い点を除けば、他はいずれも奈良時代の範疇で理解されるものである。

Cは、不鮮明ながら北側に所在する土壙Aによって埋没後、これを一部切って掘られたと考えられる土壙である。形態的には、東西方向に主軸長330cm、南北幅160～180cmの不定形な楕円形を呈する。断面は、浅い皿状を呈し、底部までの深さ約40cmを測った。また、土壙底部も平面同様不規則な掘り上げ状態を見せている。土層断面では、土壙Cは大きく3層に分層が可能である。なお、4層と6層の間層として部分的ながら焼土塊の集積した層が認められた。焼土塊は、面的な広がりまでは検出できなかった。

出土遺物には、須恵器杯身（571・572）・須恵器杯蓋（568～570）・土師器皿（573・575）・土師器杯（574）・土師器甕（576～578）・平瓦（580）などが見られる。土師器には、小物類に皿・杯があり丹塗りが施された製品が存在する。瓦は、平瓦で表裏には布目と縄目が比較的粗い状態での遺存が確認される。なお、1点のみ検出されている勝間田焼椀（579）は、本来これら土壙を切って構築された柵5の時期のもので、これらに伴っていたものであろうと考える。

時期的に土壙Cは、須恵器の杯身・杯蓋の形態的特徴から奈良時代後半頃に比定できよう。

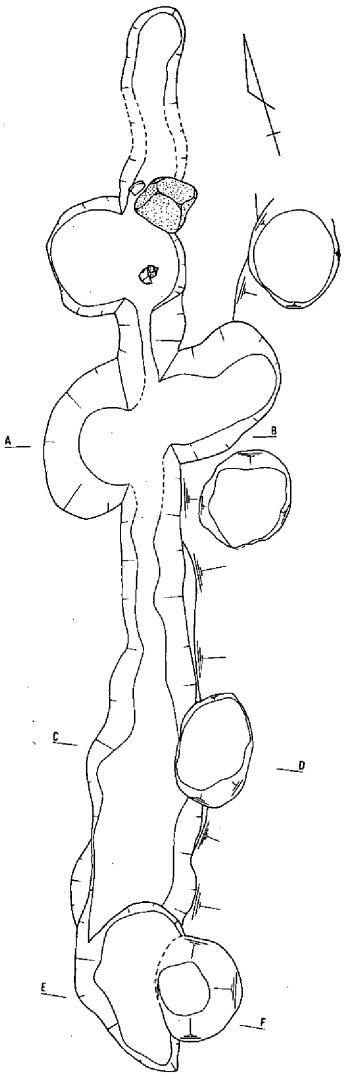
以上、当該地点に所在する土壙群を仮にA・B・Cとして抽出・説明してきたが、これらはいずれも奈良時代後半期のある一定期間の中で掘削・埋没が繰り返された結果である。この性格については不明であるが、これらに共通する特徴としては次の事象がある。土壙53・54は別としてその他は径100cm前後の円形もしくは不整楕円形を基調とする。検出面からの深さは、およそ30～50cmと比較的浅い。埋積状況は、いずれも比較的よく類似しており基本的には平面検出時点で灰色～黒色土であり、断面中には焼土塊が目立った。焼土塊は、大田障子遺跡の土壙4を含め、これら土壙内にも多く認められるが、特に土壙56及び土壙55においては多く認められた。こうした状況は、これら一連の土壙群が何らかの生産活動の結果と想起されるが、具体的には周辺の削平化により同時期の遺構が遺存しない現状では何に関係しての結果なのかは不明である。（島崎）

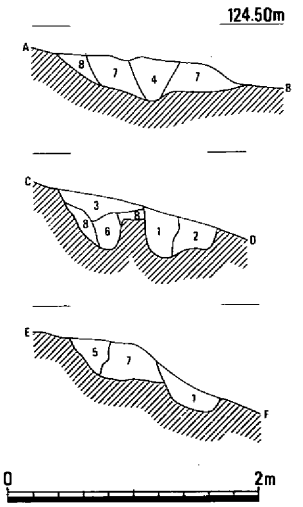


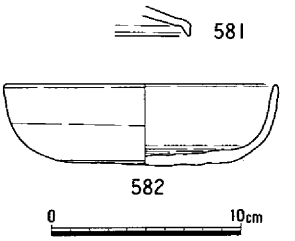
第244図　土壙56出土遺物(1/4)

溝8（No8）（第245図、図版8・18）

8K，L区で検出された。後世の段の肩部にあり、南に続く部分が下段でも検出され、8N区で直角に折れて、東へ伸びていたと思われる。古代末の柵2の柱穴によって破壊を受けていた。溝の幅は45～100cmあり、南の屈折部分では120cmに広がっていた。溝底の海抜高度は北端では124.14m、第245図の下端で123.86m、南の屈折部で122.78mを測る。溝の所々に柱穴状の膨らみがみられ、いわゆる繭状溝とみて築地の側溝の可能性も考えたが、もう1条の溝を想定すれば建物群と重複するか、きわめて接近するため、塀のような施設の可能性にとどめるべきかもしれない。溝の流走方向はN－9.5°－E前後である。出土遺物の**581**は須恵器の蓋である。**582**は土師器の杯で、底部はヘ切りされ、丹塗りがわずかに認められる。溝の時期は奈良時代後半と考えられる。（岡本寛）





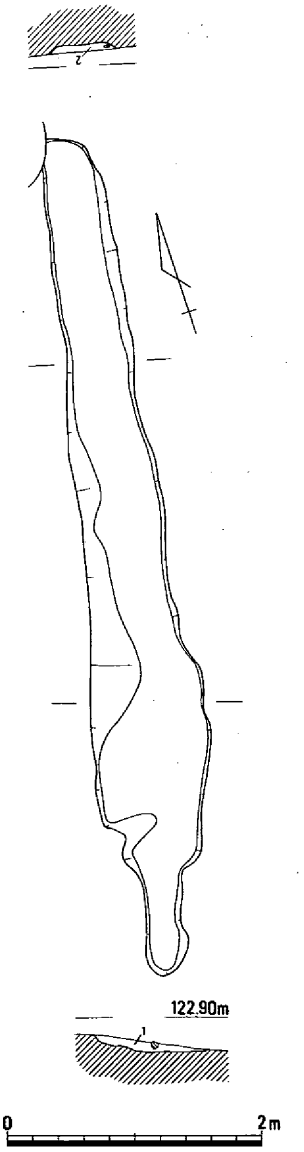


1．灰褐色粘質土
2．褐灰色粘質土
3．暗褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土
5．暗黄褐色粘質土
6．暗灰色粘質土
7．暗褐灰色粘質土
8．暗黄褐色粘質土

第245図　溝8（1/60）・出土遺物（1/4）

溝9（No4）（第246図）

9M，N区で検出された溝状の落ち込みである。長さ660cm、幅95cm、深さ13cmを測る。溝の方向はN－11°－E程度で、土壙46の東辺とほぼ平行し、同時に存在した可能性がある。溝9と土壙46の間は50cmで近接していた。溝8の流走方向とも近似している。（岡本寛）



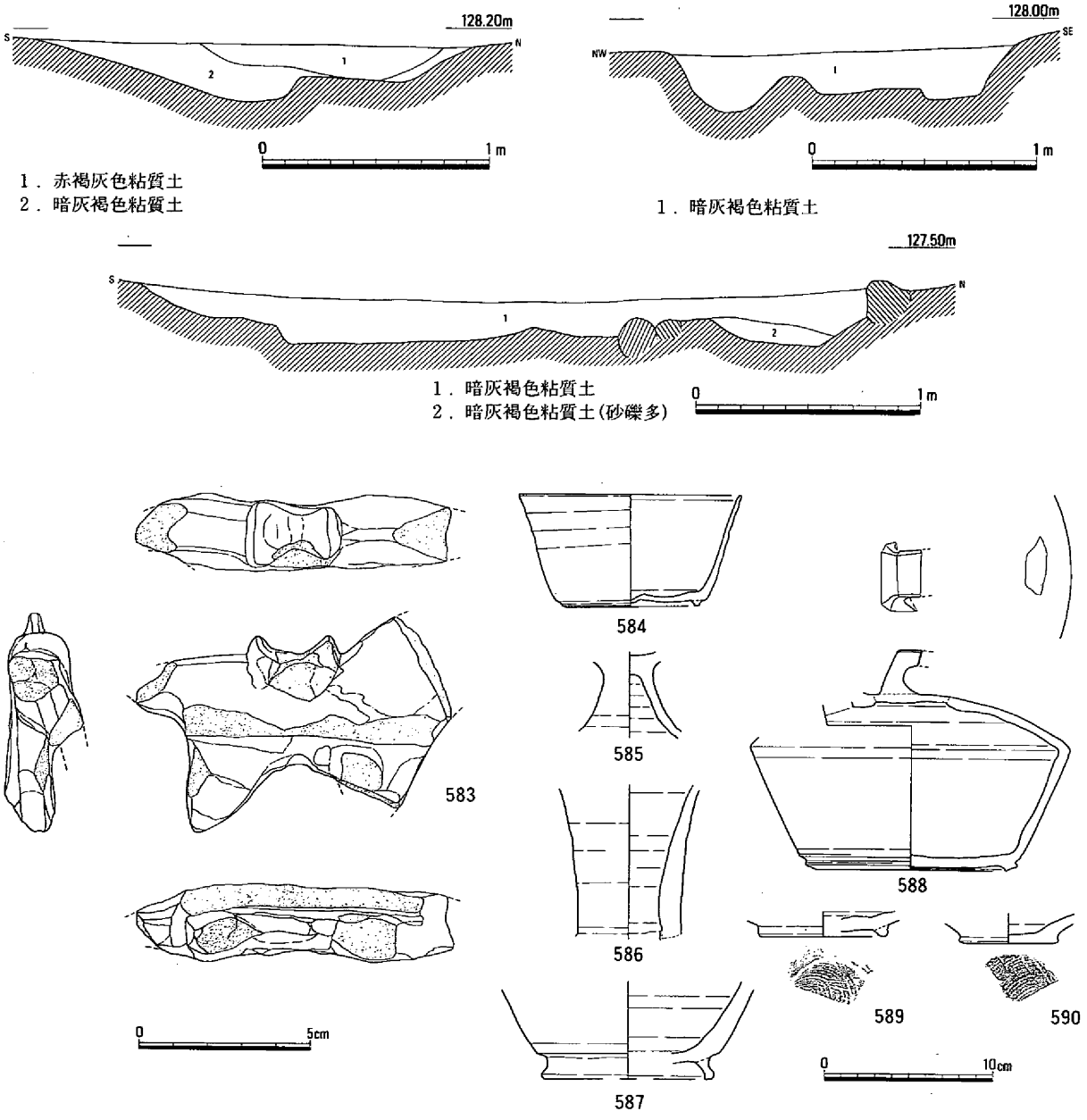
1．灰褐色粘質土
2．褐灰色粘質土

第246図　溝9（1/60）

河道2（No235）（第247図、図版21）

大田茶屋遺跡の西地区と東地区とは比較的深い谷地形で区分される。河道2は、その谷上流部に相当する地点の21～27N区において長さ約60mにわたって、ほぼ東西方向に検出された。ただし検出された河道は、幅が東側において約1.8mと狭く、下流の西側にゆくにしたがい約4mとやや幅を広めるもので、深さも20cm前後と浅く全体からいえば自然そのものであり、人工的な箇所は認められなかった。また、溝の底には、全体的に拳大から人頭大の円礫が多く落ち込み、その最下層である溝底には比較的細かい砂の堆積がレンズ状に認められた。この状況から、溝は水がよどむことなく谷川として絶えず流れていたものと推測された。その後は周辺の黒ボクの混入した暗灰褐色粘質土が下層に、赤褐灰色粘質土が上層に部分的な堆積状況を見せることから、しだいに埋没していったと考える。

出土遺物には、須恵器椀（584）・高杯（585）・台付長頸壺（586・587）・台付取手付平瓶（588）・土馬（583）・勝間田焼椀（589）・皿（590）等がみられた。須恵器椀は、胎土・焼成ともに良好である

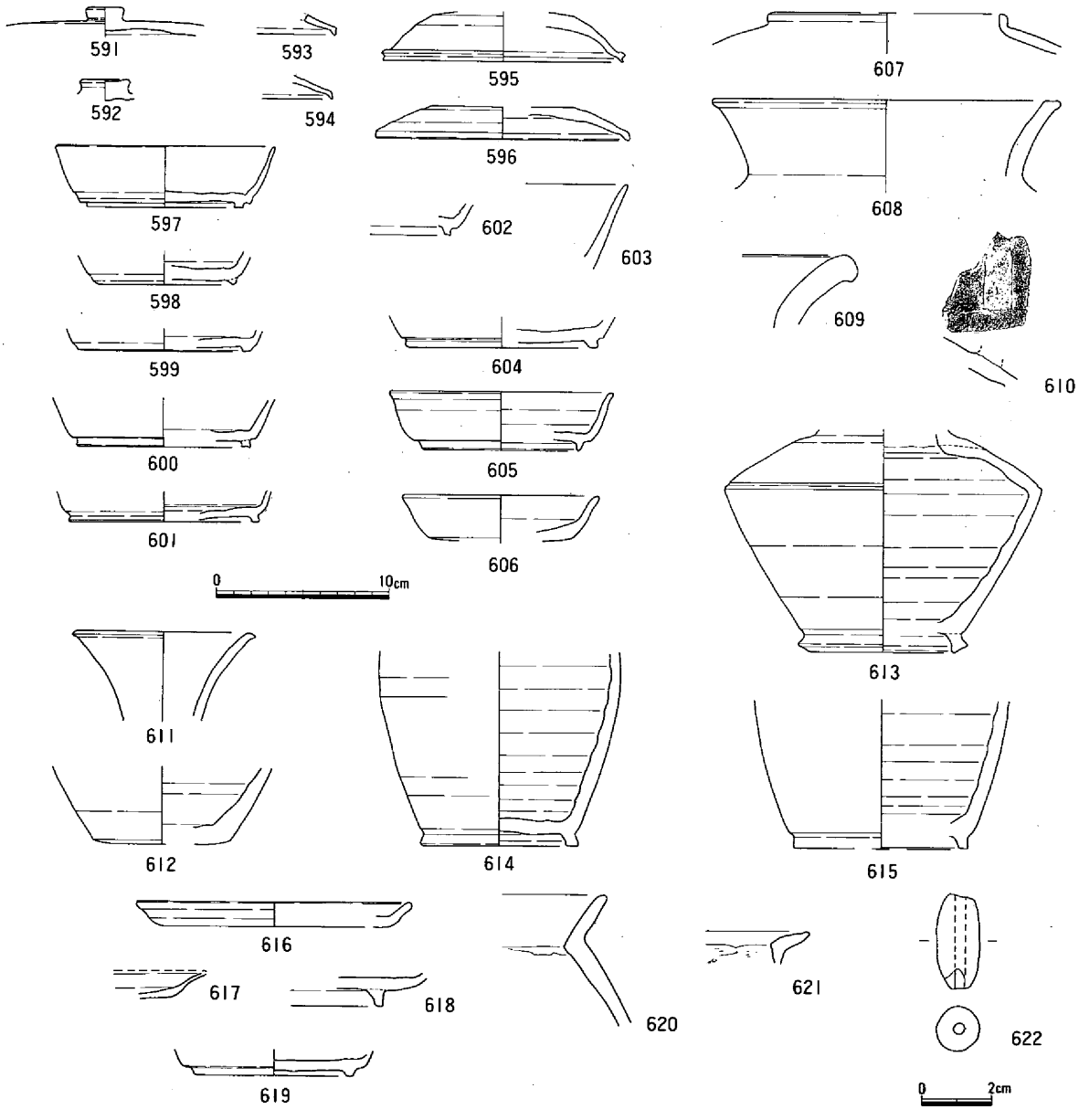


第247図　河道2（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）

が器壁は薄く仕上げられていた。高杯は、無蓋のもので短脚である。台付長頸壺は、頸部（586）と台付部（587）から成る。平瓶は、底部に高台を巡らし、上部には断面長方形の取っ手が付けられたものである。土馬は、土師質のもので遺存しているのは頸、足、尻尾、を除く胴体部分のみである。胴部上面には、鞍が粘土貼付により前輪が小さく、後輪側が広く具体的に表現されていた。しかし、その他の馬具の表現は認められなかった。大きさは、現存長９cm、厚さ２cmを測った。

なお、その他の出土遺物として古代末頃と考えられる勝間田焼の椀と皿があるが、いずれも底部には、糸切り痕跡を有し、椀には比較的しっかりとした高台が貼付される。

以上、溝の出土遺物は奈良時代と古代末の２時期に分かれるが、溝の流れていた時期は遺物の出土状況と黒ボクを中心とした土の埋積状況等から奈良時代と考えて差し支えない。一方、古代末頃と考える２点は東調査区南端部に検出された長大な柵群及び中央において検出された掘立柱建物群との関係で考えた方が良く、その時期に混入したものと考える。（島崎）



第248図　大田茶屋遺跡西地区出土古代遺物(1)(1/4・1/2)

西地区出土遺物（第248～250図、図版18・20）

大田茶屋遺跡の西地区からは古代の遺物がかなり出土している。第248図には土器類を掲載した。591～615は須恵器、616～621は土師器、622は土錘である。出土地区は615が表土、609・613が側溝、593・594が4区南東端、592・600・607・608・611・612が6区であり、他はすべて5区からの出土である。ほとんどのものは包含層中にあったが、610・616は柱穴埋土中に含まれていた。

591～596は蓋である。591のつまみは頂部が平坦だが、592ではかすかに宝珠形をなす。593は透かし孔をもつようで高杯の脚部かもしれない。595の口縁部は軽く外反させた後に端部をつまみ出している。天井部内面は磨滅して平滑になり光沢をもつ。転用硯かもしれない。

597～606は杯である。606を除いてすべて高台が付く。高台は低くて、断面が方形をなすものがほとんどであるが、605では端部を丸くおさめている。高台の付く位置は底部と体部の境より少し内側になるものが多いが、599・601のように境に付くものもみられる。606の底部外面はヘラ切りである。

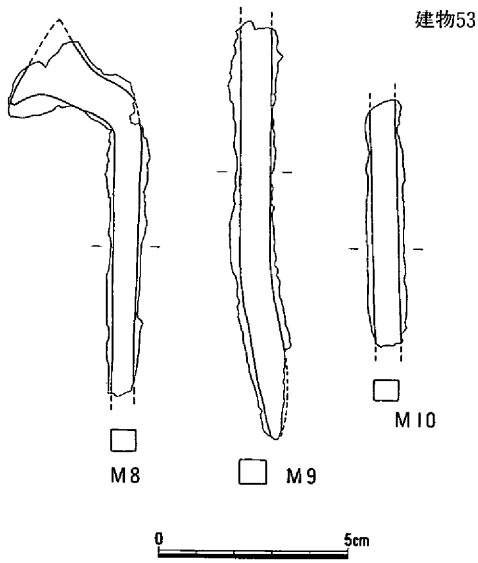
608・609は甕である。608は水平な口縁端面を形成し、外方へ少し拡張させる。609の口縁端部は外側へ押さえられた形で肥厚する。610は平瓶の肩部で、板状の把手を接合した痕跡が残る。

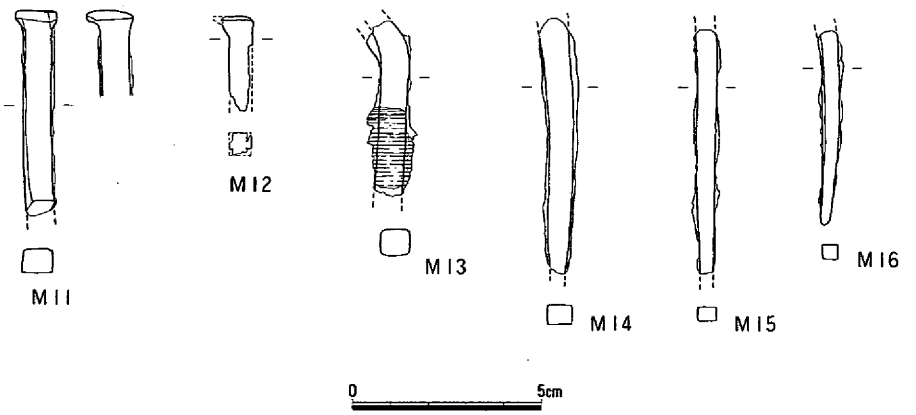
607・611～615は壺である。607は短い口縁部に球形の胴部をもつとみられる。口縁部は断面が方形に近く、上端に面をもつ。611の口縁端部は外側へつまみ出すように拡張させる。612の底部外面はヘラ切りの後にナデて調整するようである。613は直口の外反した長い頸が付くとみられる。胴の肩部は鋭角的に張り、凹線を1条巡らせる。高台は踏ん張った形をしている。614・615の胴部上半はなで肩で丸くなると思われる。短い高台が底部の縁に付けられている。614の底面の中央部には指頭による圧痕が顕著に認められ、その部分は凹面となっている。焼成は堅緻である。

616～618は皿である。616の口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。胎土は精良である。617の口縁部は巻き込むようで、内面に線が認められる。618は短く垂下する高台を付けている。

619は杯であろう。器表の剝落が激しいが、端部を丸くおさめた短い高台が付くようである。

620・621は甕である。620の胴部内面はナデによって調整され、口縁端部は丸くおさめる。頸部にはオサエがみられる。621の胴部内面はヘラケズリで、口縁部はかすかに内湾する。

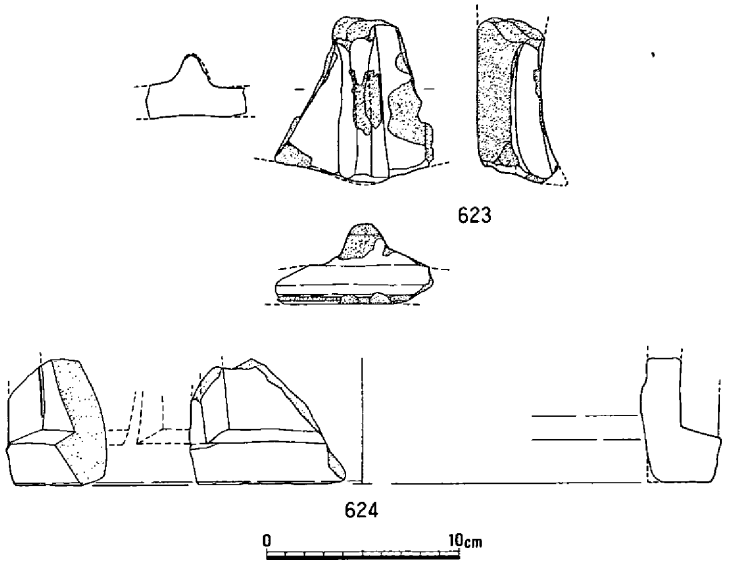




第249図　大田茶屋遺跡西地区出土古代遺物(2)(1/2)

622の土錘は現存長27.5㎜、最大幅13.5㎜、孔径3㎜、重量3.53ｇを測る。

これらの土器の年代は、613のような８世紀前葉から595・597などの８世紀後葉にわたり、さらに９世紀中葉に降るかとみられる617まで幅がある。その中でも中心を占めるのは８世紀後葉のもので、これは出土した軒瓦の年代観とも合致し、建物群の時期がその頃にあることを示している。



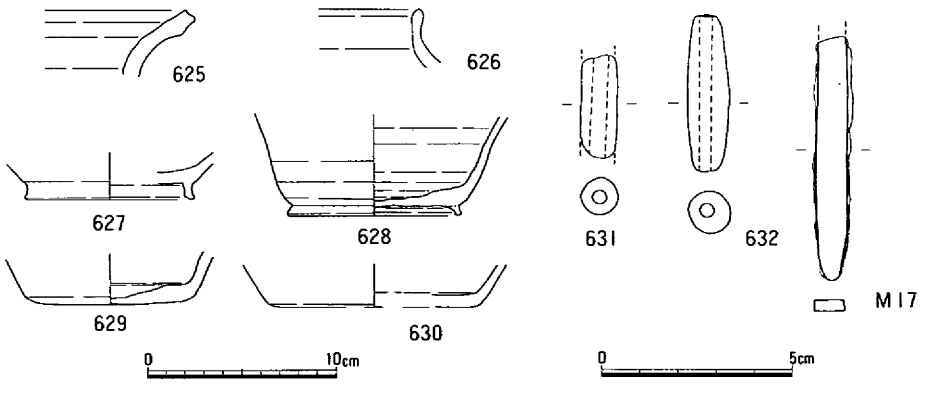
第250図　大田茶屋遺跡西地区出土瓦塔(1/4)

第249図には鉄釘を示した。鉄釘は建物の柱穴から出土しているが、包含層中からも採集されている。Ｍ８～10は建物53の柱穴６出土である。本書の校正中に遺漏に気付いた。M11～16は５区の包含層中から出土した。いずれも角釘であるが、長方形の断面を呈するものが多い。頭部は叩き潰して拡張させている。M13のように木質の依存するものがある。Ｍ９は残存長131.5㎜、幅18.5㎜、厚さ15.5㎜、重さ42.2ｇを測る。

第250図に示したのは瓦塔である。２片が出土したが、胎土や色調は等しく、同一個体の各部の破片と考えられる。623は屋根の軒先部分の破片とみられる。丸瓦列を表現したと思われる突帯があり、軒先で反り返る。瓦当面にあたる部分には装飾はみられない。上方からみると、軒先は「へ」の字状をしていて、多角形の屋根が想定される。軒端と軒先の裏面はヨコナデ調整される。624は基壇を表現した台座とみられるが、ヘラで透かし孔を切っている。小片のために確実ではないが、直径370㎜程度の円形になるようである。底面はナデとオサエによって調整され、側面はヨコナデ調整である。束石を表すかと思われる突帯はヘラで側面を削って薄くしている。胎土には砂粒が含まれ、色調は灰白色である。623は６区の表土から、624は５区の包含層中から瓦とともに出土した。　（岡本寛）

東地区出土遺物（第251・252図）

第251図には河道１の埋没後、その上方に堆積した包含層から出土した遺物を掲載した。625～630は土器で、いずれも須恵器である。625は甕で、口縁端部を断面方形に肥厚させる。626・627は壺とみられる。628～630は杯である。628と629の底部外面は全面ヘラ切りの後に、ナデで調整している。

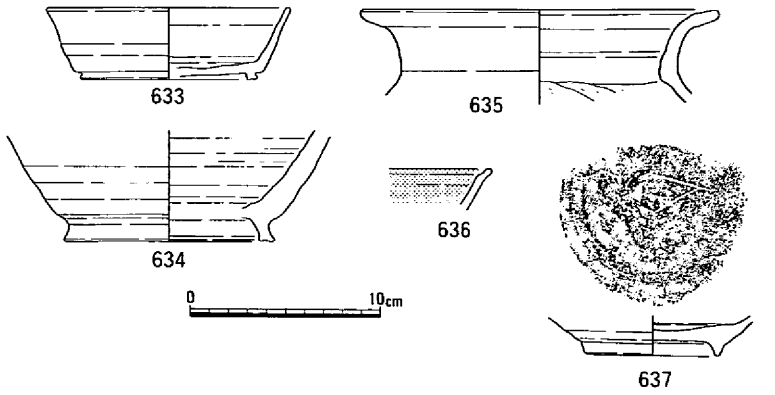


第251図　大田茶屋遺跡東地区出土古代遺物(1)(1/4・1/2)

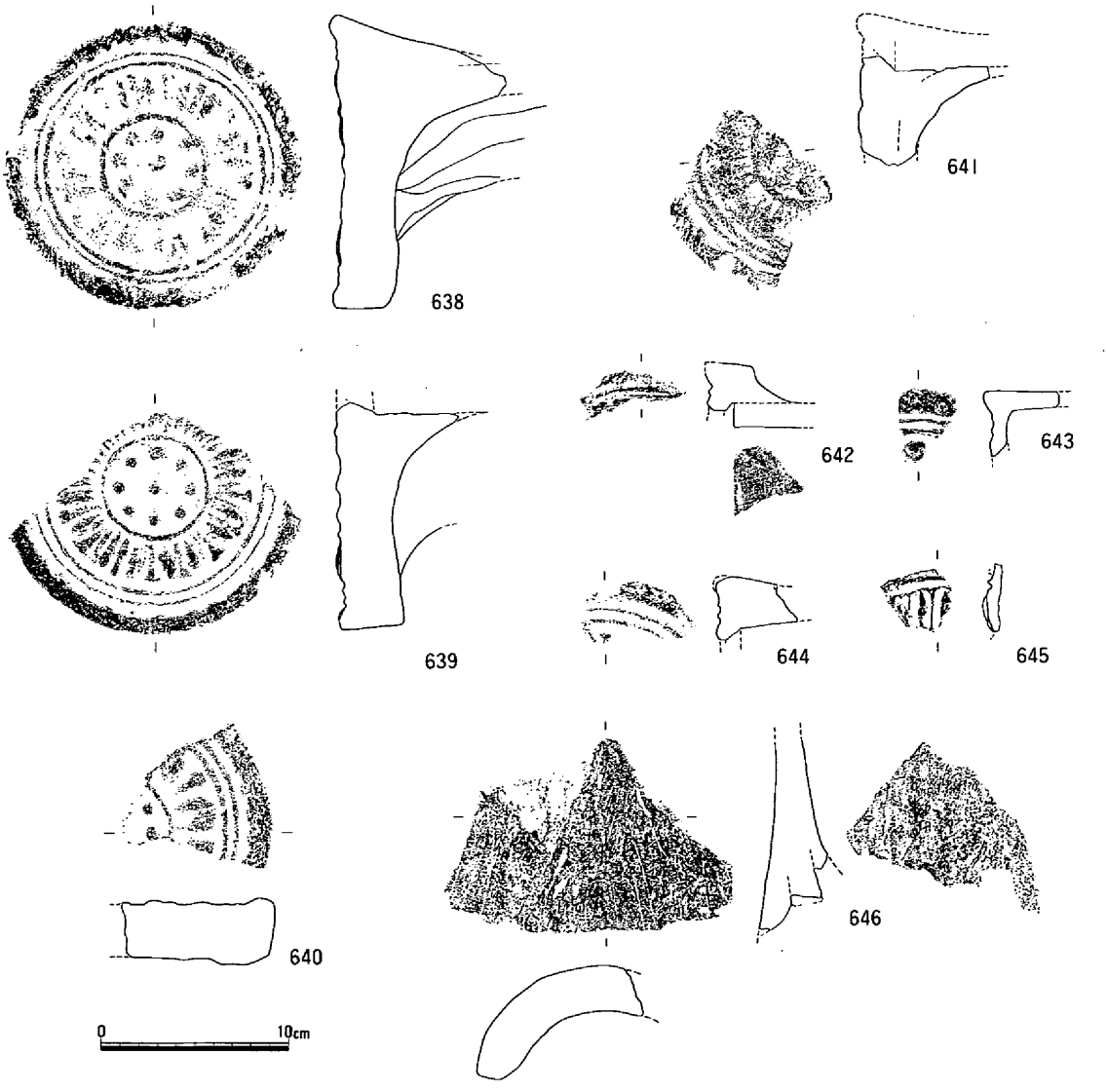
631・632は土師質の土錘である。両端が細くなる型式で、632は長さ41㎜、厚さ11㎜、重さ3.51ｇを測る。M17は板状の鉄釘である。

第252図の633・634は８区包含層、635は８区柱穴、636は９区包含、637は前述の河道１上方出土である。633・634は須恵器、635～637は土師器である。636の内面には丹塗りが確認される。633・636・637は杯、634は壺、635は甕である。636の口縁部内面には凹線がめぐり、637の底部内面にはヘラ記号が刻まれている。

以上の土器の年代は、633・636などの８世紀後半から637の10世紀前半に及ぶ。　（岡本寛）



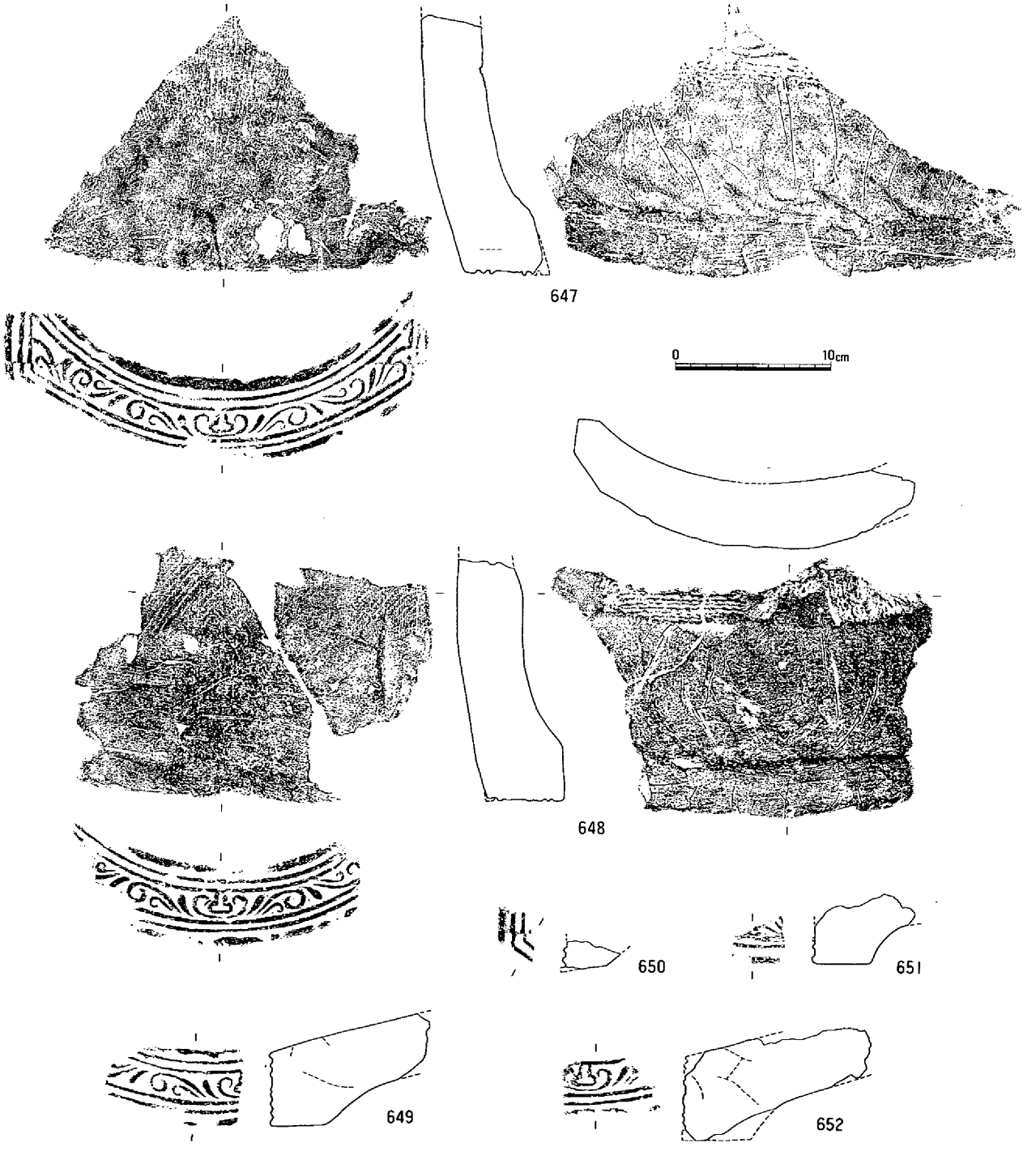
第252図　大田茶屋遺跡東地区出土古代遺物(2)(1/4)



第253図　大田茶屋遺跡出土軒丸瓦(1/4)

西地区出土古代瓦（第253～257図、図版19～21）

大田茶屋遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となるのが瓦の出土である。瓦は遺跡の全域から広く出土したのではなく、ごく限られた地点に集中していた。このことは、瓦を使用した建物が１ないし２棟というきわめて少数であったことを示している。瓦が出土したのは、建物47の北東側から南東側にかけての周辺と、そこから緩斜面を下った建物50の東側の落ち込み部分である。おそらく建物47の周辺に形成されていた瓦溜まりの一部が後世の削平によって谷部へ押し出されたものであろう。建物47周辺の瓦溜まりは古代末から中世にかけての土器片も含まれるようで、屋根から崩落したような



第254図　大田茶屋遺跡出土軒平瓦(1/4)

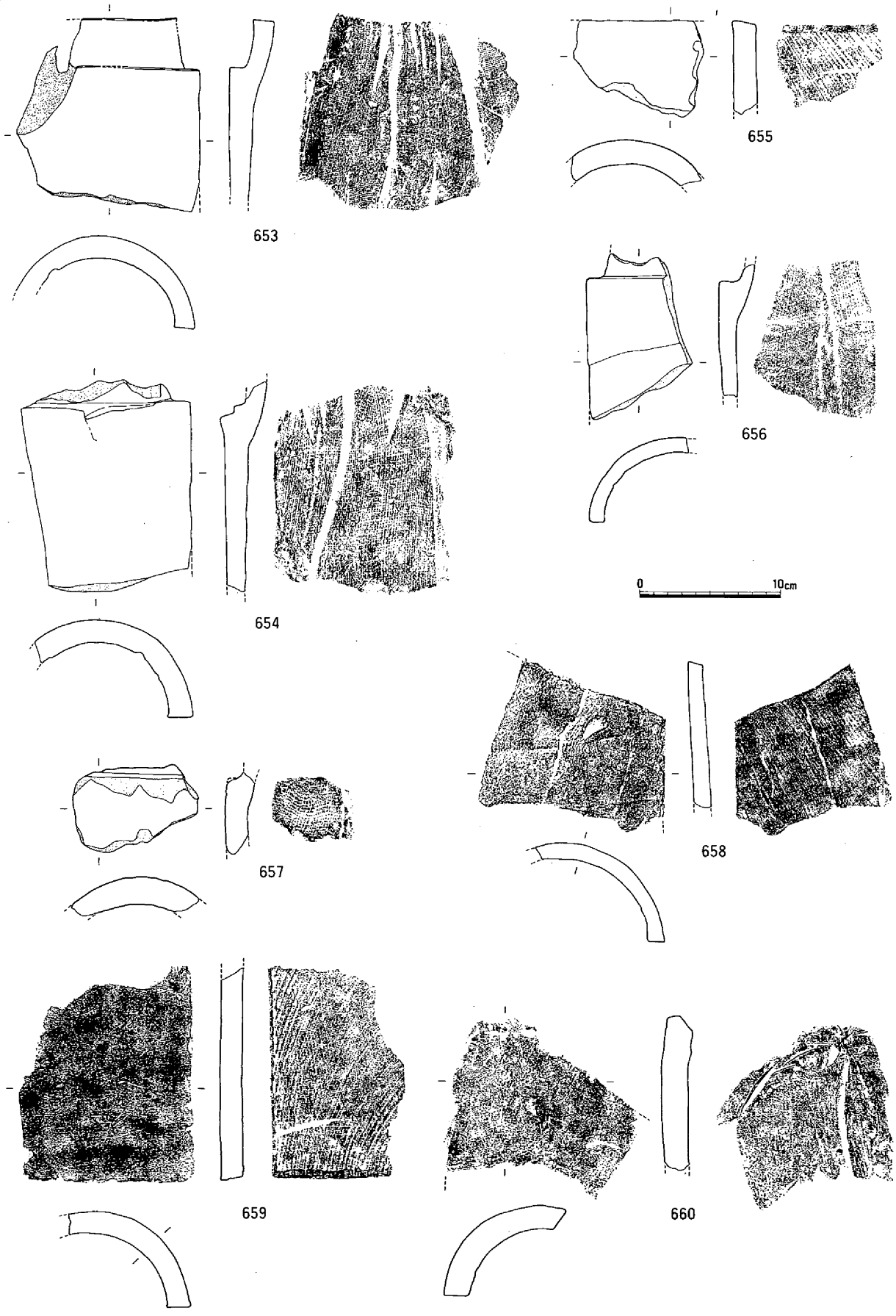
状況にはなく、ある時点で一カ所にまとめられたものと考えられる。

638～646は軒丸瓦である。すべて同一の型式に属するものである。**638**は瓦当部分はほぼ完存している。瓦当文様は平城宮6225A型式を模した複弁八弁蓮華文である。内区は突圏線で仕切り、中心に1個、周囲に8個の蓮子を置く。花弁は高くて長い子葉を二つ配しているが、中心部分の隆起は高いが、周縁の隆起は低く、花弁と間弁が繰り返すように見える。間弁は楔形である。外区は二重の突圏線が巡らされ、外縁に続く傾斜面には外行の突鋸歯文を連続させて飾るが、不明瞭である。**638**と**639**は同笵とみられるが、**638**の文様は隆起も鈍くて朦朧としている。**640・641**も**638**と同様で、**639**より少し後に製作され、さらに長期間風雨にさらされたものとみられる。これに対して、**645**では**639**より文様が明瞭である。瓦当部分と丸瓦の接合にあたっては内側に多量の粘土を付加する。**638・640・641**では粘土を付加した後に指頭で縦方向の強いナデを行っているが、**639**にはナデがみられず、このことも製作年代のずれを示していると思われる。このことと関連して、**639**があまり風化していないようにみられることも注意され、ことによれば、**638**と**639**のそれぞれを使用した建物が異なることも考えられる。丸瓦の凸面部分は縦方向にヘラケズリされている。**639**の色調は明褐灰色だが、**638・640・641**は灰色から暗灰色である。**645**の色調は灰黒色を呈する。瓦当の面径は158㎜、外区内側圏線の直径が116㎜、内区圏線の直径は56㎜を測る。細かい検討はまだ行っていないが、**638**は美作国府出土の軒丸瓦Ⅰ型式b種（C114）（注2）と製作手法も含めて酷似し、同笵である可能性が高い。

647～652は軒平瓦である。軒平瓦もすべて同じ型式のものである。**647**の瓦当面はほぼ完存している。瓦当文様は均整唐草文である。中心に垂下する花頭があり、それを中心葉で囲み、その左右に3葉1単位の唐草を3回反転させる。この唐草文帯を二重の突線で区画し、外縁の平坦面で囲む。瓦当の顎は曲線顎で、36～40㎜の幅の平坦な顎から内湾して平瓦へ続く。顎の平坦面はヘラケズリによって成形し、後にナデている。内湾部分は斜め縦方向にヘラケズリされている。瓦当部の凹面側は95～105㎜の幅で広く横方向にヘラケズリし、さらにナデで調整している。凸面側の内湾部分から平瓦の凸面に移る接点には横方向の縄目タタキ痕が認められる。瓦当面は幅が279㎜、厚さは53㎜あり、内側の突線から外縁までの幅は10㎜ないし11㎜を測る。**647**の瓦当面には、左右の両端にある第3単位の中央に横走する笵傷が顕著に認められ、**650**にも同じ傷がある。この笵傷は美作国分寺・国分尼寺から出土した軒平瓦Ⅰ型式a種（注3）の一部にみられるもので、さらに、Ⅰ－a全体に認められる花頭と中心葉の間の笵傷も**648～649**で確認できる。軒平瓦Ⅰ－aは美作国府からも出土していて、国府最初の所用瓦であるとともに、国分寺・国分尼寺の創建瓦でもある。その年代については、平城宮6663Cb型式をもっとも近いモデルとみて、8世紀中葉頃と考えられている（注2）。

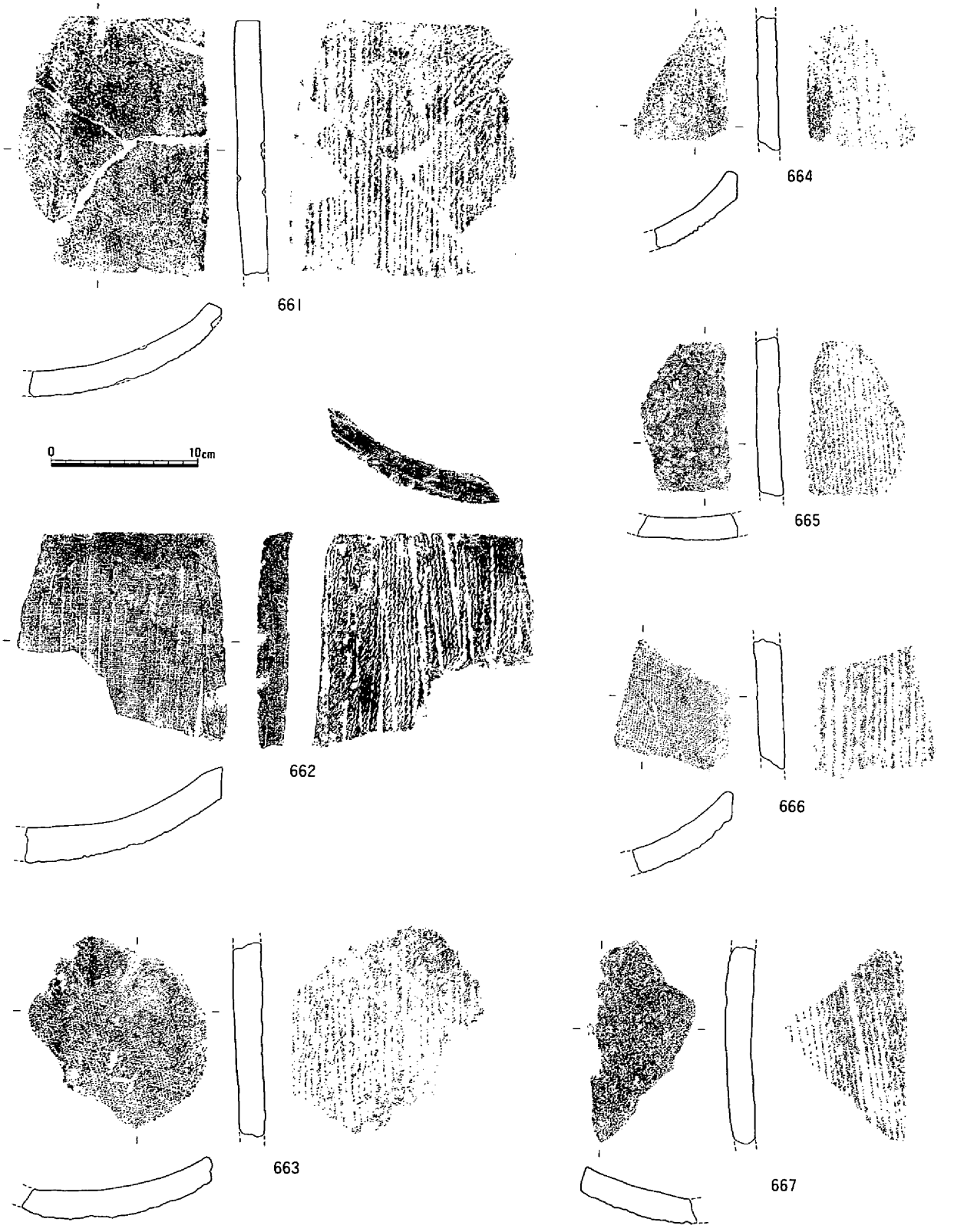
大田茶屋遺跡から出土した軒丸瓦はⅠ－b型式のみで、軒平瓦もⅠ－a型式に限られていた。かつて国分尼寺出土瓦の考察にあたって、軒丸瓦Ⅰ－a・Ⅰ－bと軒平瓦Ⅰ－a・Ⅰ－bの組み合わせを検討したところ、美作国府では軒丸瓦Ⅰ－aと軒平瓦Ⅰ－aの組み合わせが確認されるのに、国分寺・国分尼寺では軒丸瓦Ⅰ－bと軒平瓦Ⅰ－aが多量を占め、Ⅰ－aとⅠ－bが混用して使用されたか、Ⅰ－a・Ⅰ－bそれぞれの組み合わせは認め、創建期の造営工事の中でそれぞれが異なる建物に使用されて同時に併存したかのどちらかだと想定された（注3）。大田茶屋遺跡での結果は、国分寺・国分尼寺の状況に近く、軒丸瓦Ⅰ－bと軒平瓦Ⅰ－aが組み合う場合もあったことを示している。

653～660は丸瓦である。出土した丸瓦はいずれも玉縁の付くものである。凸面はナデによって滑らかにされ、凹面には布目の圧痕が残されている。**655・659**では布目痕の下に粘土板の糸切り痕が残る。



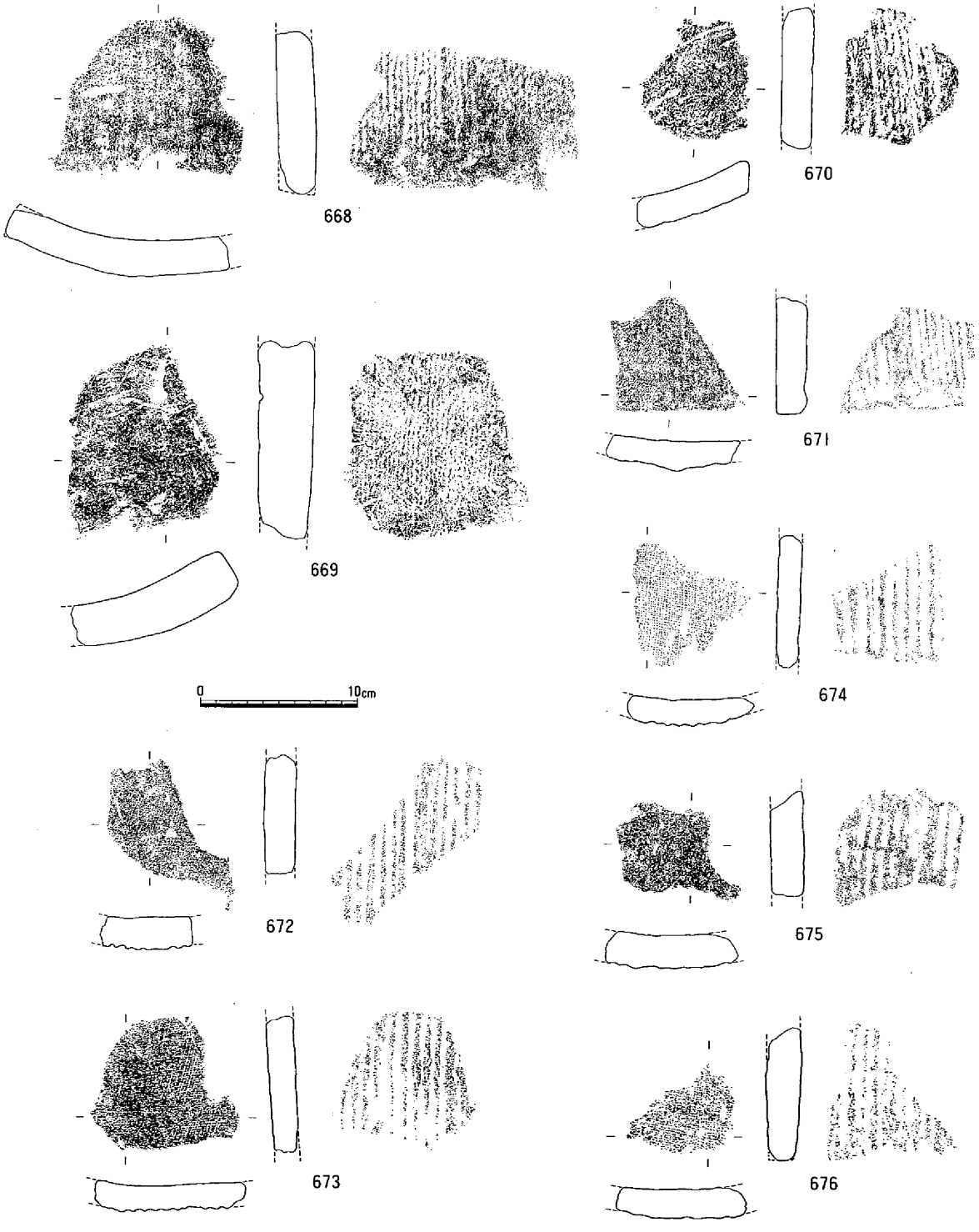
第255図　大田茶屋遺跡出土丸瓦(1/4)

655・659の凹面側の端部はヘラで面取りされるが、653にはみられない。659の下端面はヘラで切られている。658・660は隅切りの丸瓦である。丸瓦の上半部をヘラで切り取っている。切取面は傾斜している。658の側端と切取線の角度は約110°を測る。長方形の屋根に葺かれたものであろう。



第256図　大田茶屋遺跡出土平瓦(1)(1/4)

661～676は平瓦である。出土した平瓦は凸面のタタキ目原体の違いから大きく二つに分けられる。一つは縄目のもので、**661～671**がこれにあたる。もう一つは平行な条線を刻んだもので、**672～676**がそうである。量的には縄目のものが圧倒している。縄目のものは側面と凸面のなす角度が鈍角のものと直角のものに分かれる。鈍角のものはさらに、**662・664**のように凹面との境を面取りするものと、**663・666・670**のように丸くおさめるだけのものの二種がある。直角のものはヘラで切るだけのものが多いが、**661**は凸面との境を面取りする。**669**は隅切り瓦である。　（岡本寛）



第257図　大田茶屋遺跡出土平瓦(2)(1/4)

3．小結

古代の大田茶屋遺跡は、大形建物を中心にして規則的に配置された建物群の存在や、美作国府・国分寺と同笵の軒瓦などの出土から判断して、国府に関連した官衙遺跡と考えられる。建物群には重複関係があり、建て替えの行われたことが明瞭である。ここでは、出土遺物や棟方向によって建物群の組分けを行い、同時に存在していたとみられる建物を抽出し、建物群の変遷を明確にしておきたい。

建物の出土遺物では注意されるものとして瓦がある。最初に建てられた瓦葺きの建物を壊して、新たに建物を建て替える時に、周辺に散乱していた瓦片が柱穴に入ったと考えるのが自然であると思われるので、柱穴から瓦片を出土する建物は、建て替えられた建物と考えることができる。瓦といっしょに鉄釘を出土する建物が複数あり、釘も散乱していたものとみれば瓦と同じように考えることができる。建物の棟方向では、大きく三つの組に分けることができる。A組は建物39のN－2°－Wから建物40のN－3°－Eまで、B組は建物53の棟方向と直角になるN－6°－Eから建物50のN－10°－Eまで、C組は建物41のN－14°－Eから建物48のN－22.5°－Eまでの三組である。この出土遺物としての瓦・釘の有無と棟方向との組み合わせから建物群を分解して再構成する。

瓦か釘を出土した建物は建物43・47・48・53の4棟で、建物53の南の塀からも出土している。それらの建物の棟方向はB組とC組にまたがるが、お互いに重複することはなく、北半にB組の建物、南半にC組の建物というように、配置のうえでの錯綜もない。建物47と対になる建物50やC組の建物49・50を加えてもこの配置状況は変わらない。したがってこれらの建物を一時期の建物群とみることは可能であり、細分すれば、北半と南半で二つの小期に分けられるかもしれない。

建物53と重複するもう1棟の中心建物である大形建物52からは瓦は出土していない。棟方向はB組であるので、前述の一時期に入らなかったB組の建物をみると、建物51は建物50と、建物46は建物45と重複関係にあり、異なる時期に属することが考えられる。このことから建物47・50・53以外のB組の建物で一時期の建物群を考えることができそうである。ただ、建物44と建物46が重複しているので、いくらかの時間幅は考慮する必要がありそうに思われる。

A組の建物は大形の建物40と小形の建物39・55の3棟にすぎない。小形の建物はいずれも柱穴の一部を欠き、時期も不確実である。配置的には前述の二時期の建物群とは重複しないが、瓦や釘が出土していないことと、棟の方向が近似することから後者の建物群に含めたい。

このように大田茶屋遺跡の古代建物群は二時期に分けることができる。瓦の出土する建物が新しいという前提に立って、古い方をⅠ期、新しい方をⅡ期とする。Ⅰ期の建物群は建物39・40・42・44・46・51・52・54・55から構成され、Ⅱ期の建物群は建物41・43・45・47・48・49・50・53によって成立する。溝8はⅠ期に属し、溝9と土壙46はⅡ期に含まれる。土壙48と柱穴2が対の柱穴とすればこれらもⅡ期に伴うとみられる。Ⅰ期とⅡ期を比較すると、Ⅰ期では2棟の大形建物の他は中・小形の建物がまばらに建てられているだけだが、Ⅱ期では北半の東西対称に企画性をもって建てられた一画と、南半のほぼ棟を揃えて建つ4棟の中形建物からなる地区が並置され、より整備された状況が窺える。瓦の出土状況から判断すれば、Ⅰ期の建物52とⅡ期の建物47・50は瓦葺きの建物の可能性がある。建物52と建物53では様相が一変していて、なにか大きな機能上の変化があったことを示している。

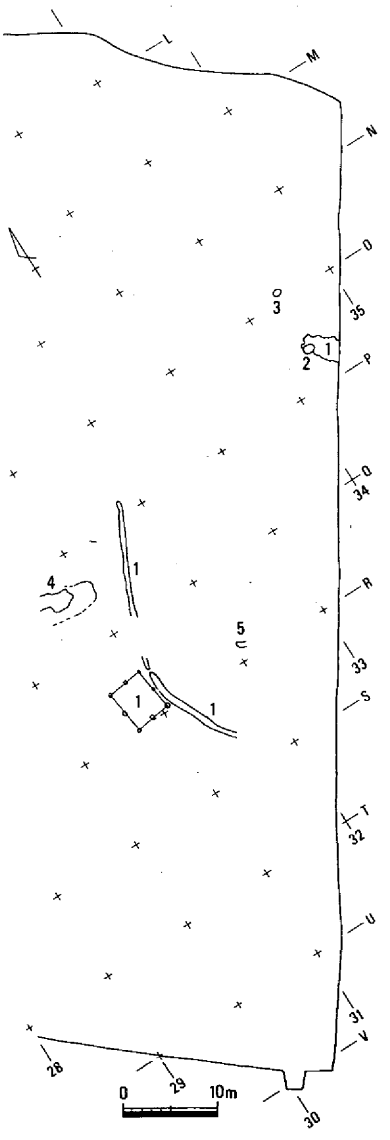
大田茶屋遺跡の古代建物群が存続した期間は、出土遺物から考えると8世紀後葉から9世紀前半までとみられる。それ以前の遺物は小規模な集落に伴うものと判断される。　　（岡本寛）

第３節　大田障子遺跡

１．遺構配置

奈良時代の遺構としては、建物１棟・土壙５基・溝１条がある。遺構の分布範囲は調査区中央付近と北東部の２カ所に分離しているが、特に意味はなさそうである。分布状況は散漫で、大田茶屋遺跡の建物群のように、配置に規則性が認められるわけでもない。

なお、ここで第260図に示した調査区の層序について説明したい。８・９層としたのが基盤層直上にのる縄文～古代の遺物包含層で、この上面が近世の遺構面となっている。ただし、この層は調査区中央部にのみ遺存しており、北半部および南端部では表土を除去するとすぐ基盤層が露出し、その上面で遺構が検出された。表土は近世以降の造成土で、若干の遺物を包含する。　　（岡本泰）

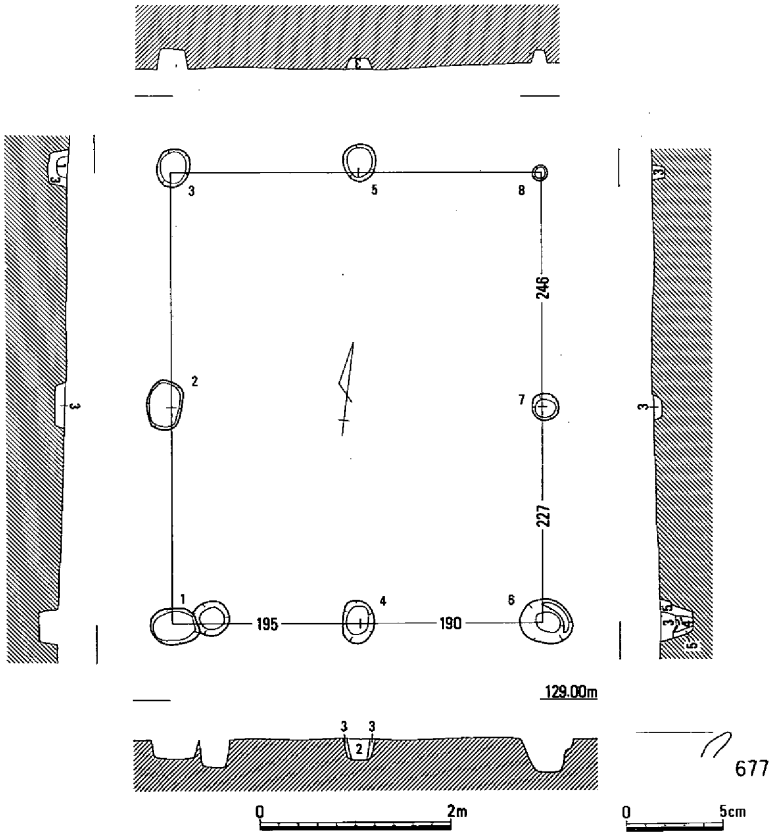


第258図　奈良時代主要遺構配置図(1/800)

２．遺構・遺物

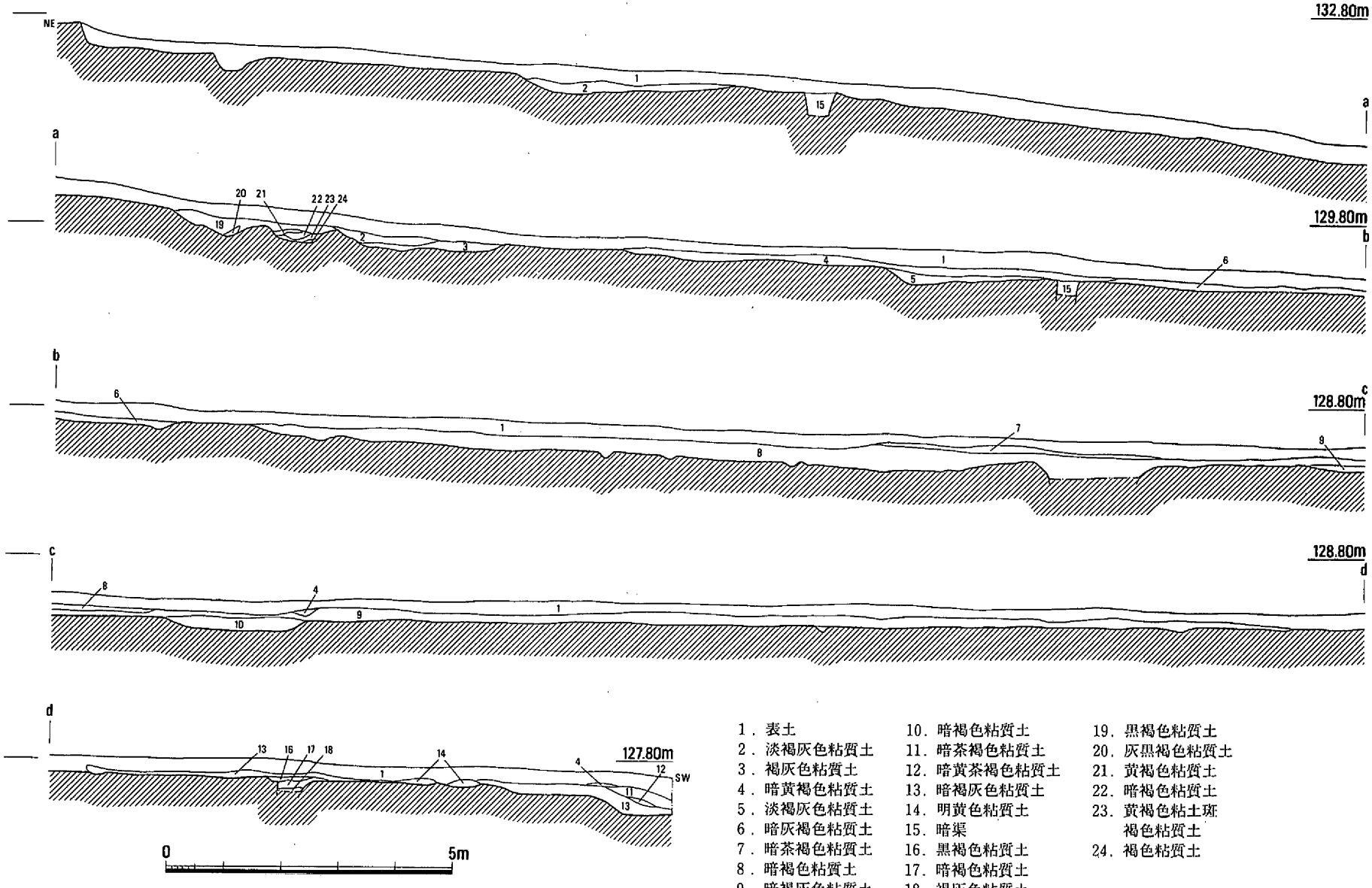
建物１（No16）（第259図）

調査区の中央よりやや南側で検出された２×２間の掘立柱建物である。この周辺には柱穴が多数群在していたが、奈良期の建物としてまとまったのはこの１棟のみであった。



１．黄色砂礫混黒褐色土
２．黒褐色土(炭・焼土混入)
３．黒褐色土
４．黒褐色粘質土
５．黄色土斑黒褐色土

第259図　建物１(1/80)・出土遺物(1/4)



1．表土
2．淡褐灰色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．暗黄褐色粘質土
5．淡褐灰色粘質土
6．暗灰褐色粘質土
7．暗茶褐色粘質土
8．暗褐色粘質土
9．暗褐灰色粘質土
10．暗褐色粘質土
11．暗茶褐色粘質土
12．暗黄茶褐色粘質土
13．暗褐灰色粘質土
14．明黄色粘質土
15．暗渠
16．黒褐色粘質土
17．暗褐色粘質土
18．褐灰色粘質土
19．黒褐色粘質土
20．灰黒褐色粘質土
21．黄褐色粘質土
22．暗褐色粘質土
23．黄褐色粘土斑
褐色粘質土
24．褐色粘質土

第260図　大田障子遺跡調査区南東壁土層断面図(1/100)

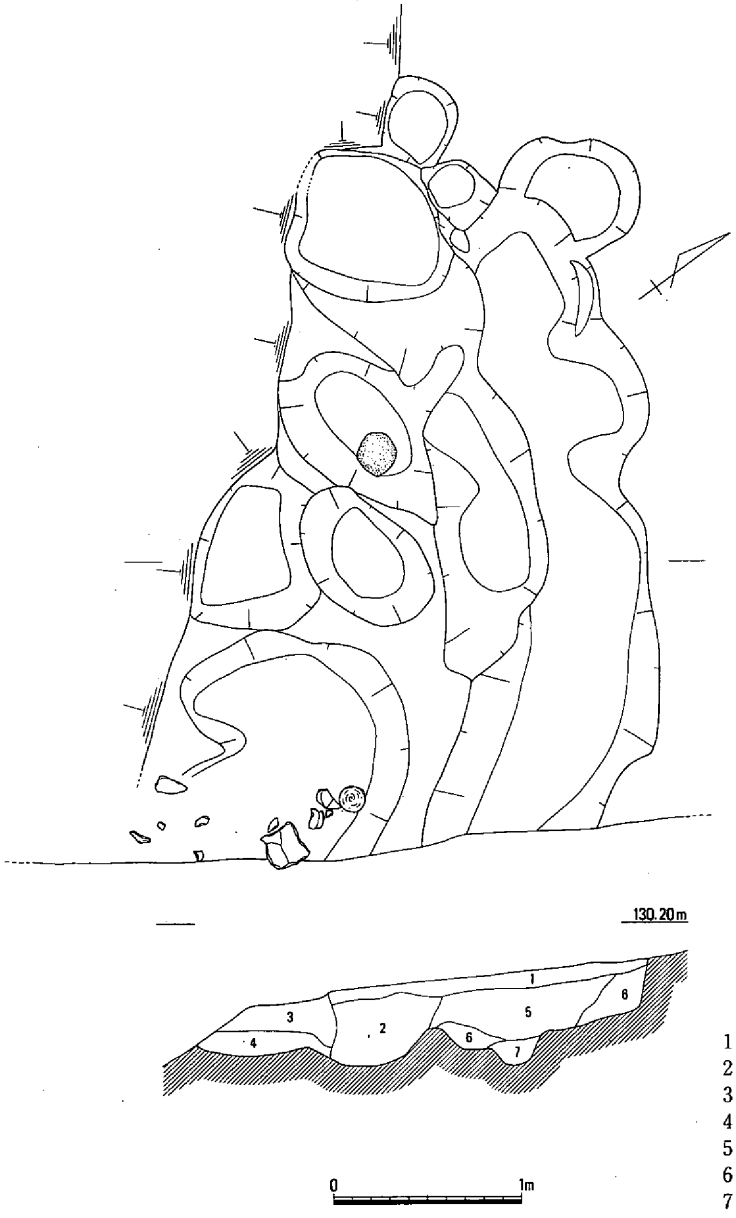
建物の規模は、桁行473cm、梁間385cm、面積18.3㎡を測る。柱穴は円～楕円形を呈し、径17～54cm、深さ９～33cmと幅がある。遺物としては弥生土器・土師器・須恵器片が出土しているが、図示可能なものは少ない。**677**は土師器甕の口縁部と思われる。（岡本泰）

土壙１（No1）

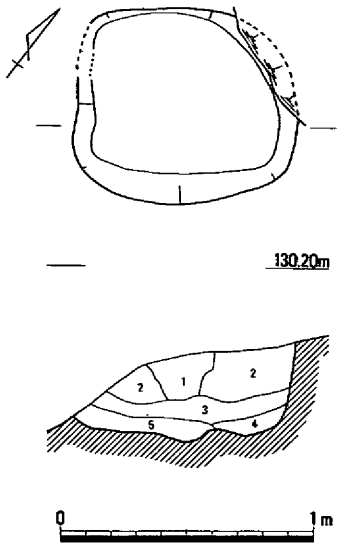
（第261図、図版21）

34O区に位置する不定形の土壙である。東側は調査区外になり、南側は後世の畑の段に切られているため、全容は不明である。壁面と底面には著しい凹凸があり、断面の状況からみても本来は複数の土壙が重複していたと考えられるが、後述する土壙２を除いては検出面上では区別できなかった。検出面からの深さは最大で１m程度を測る。埋土は暗灰褐～黒褐灰色の粘質土が中心であった。

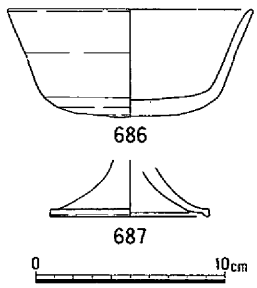
遺物は、調査区南東壁に接する位置で集中的に認められた。**678**～**680**は土師器で、それぞれ鉢・皿・皿ないし椀の底部である。**679**の内外両面には丹塗りが施されている。**681**～**685**は須恵器であ



第261図　土壙１（1/40）・出土遺物（1/4）



1．暗褐色粘質土
2．黒褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．暗茶褐色粘質土
5．褐灰色粘質土



第262図　土壙２(1/30)・出土遺物(1/4)

る。**682**の杯身はほぼ完形で、口径129㎜、底径83㎜、器高43.5㎜を測る。**683**～**685**は甕で、**683**の内面には格子目の当て具痕がみられる。**684**と**685**は同一個体の可能性がある。鉄滓も出土した。

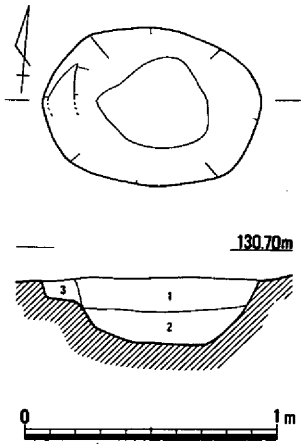
時期は奈良時代末期から平安時代初期である。　（岡本泰）

土壙２（No10）（第262図）

34O区で、土壙１の西端部を切る形で検出された隅丸方形の土壙である。埋土は土壙１と酷似し、検出は困難であった。規模は、長径87cm、短径78cm、深さ44cmを測る。この土壙は、その形状や、断面図に１で示した柱痕様の堆積状況から掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられたが、調査区内では対応する柱穴は確認できなかった。トレンチ調査時に埋土中から須恵器杯身**686**・高杯**687**が出土している。土壙の時期は土壙１同様、奈良時代末期から平安時代初期であろう。　（岡本泰）

土壙３（No9）（第263図）

34N区で検出された楕円形の土壙である。規模は長径87cm、短径62cm、深さ26cmを測り、西側の壁面には段がある。少量の土器片が出土したが、図示に耐えるものはない。埋土等から奈良時代に比定した。（岡本泰）



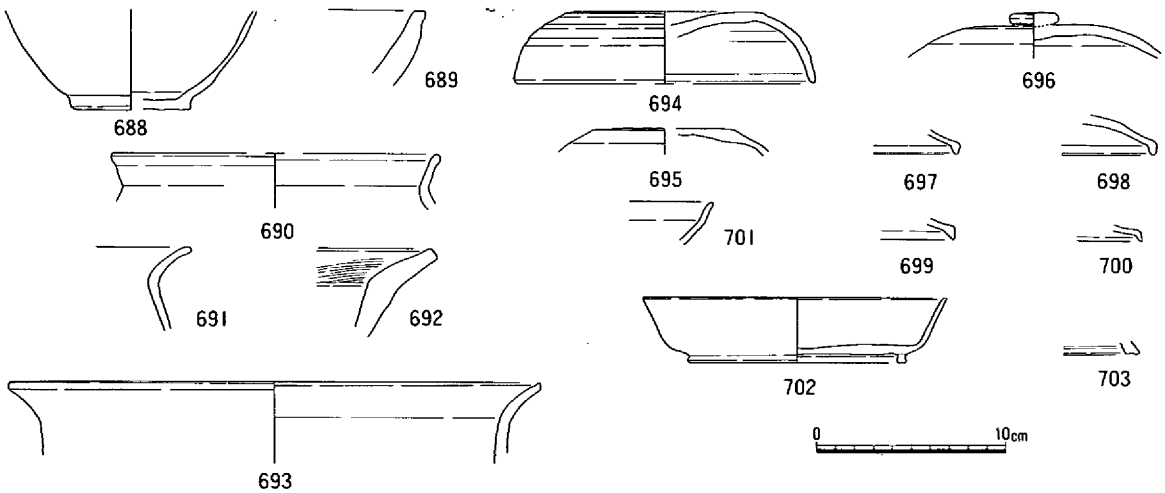
1．灰褐色砂質土(炭・土器片少量)
2．赤黄色粘質土斑褐灰色砂質土
3．淡褐色砂質土

第263図　土壙３(1/30)

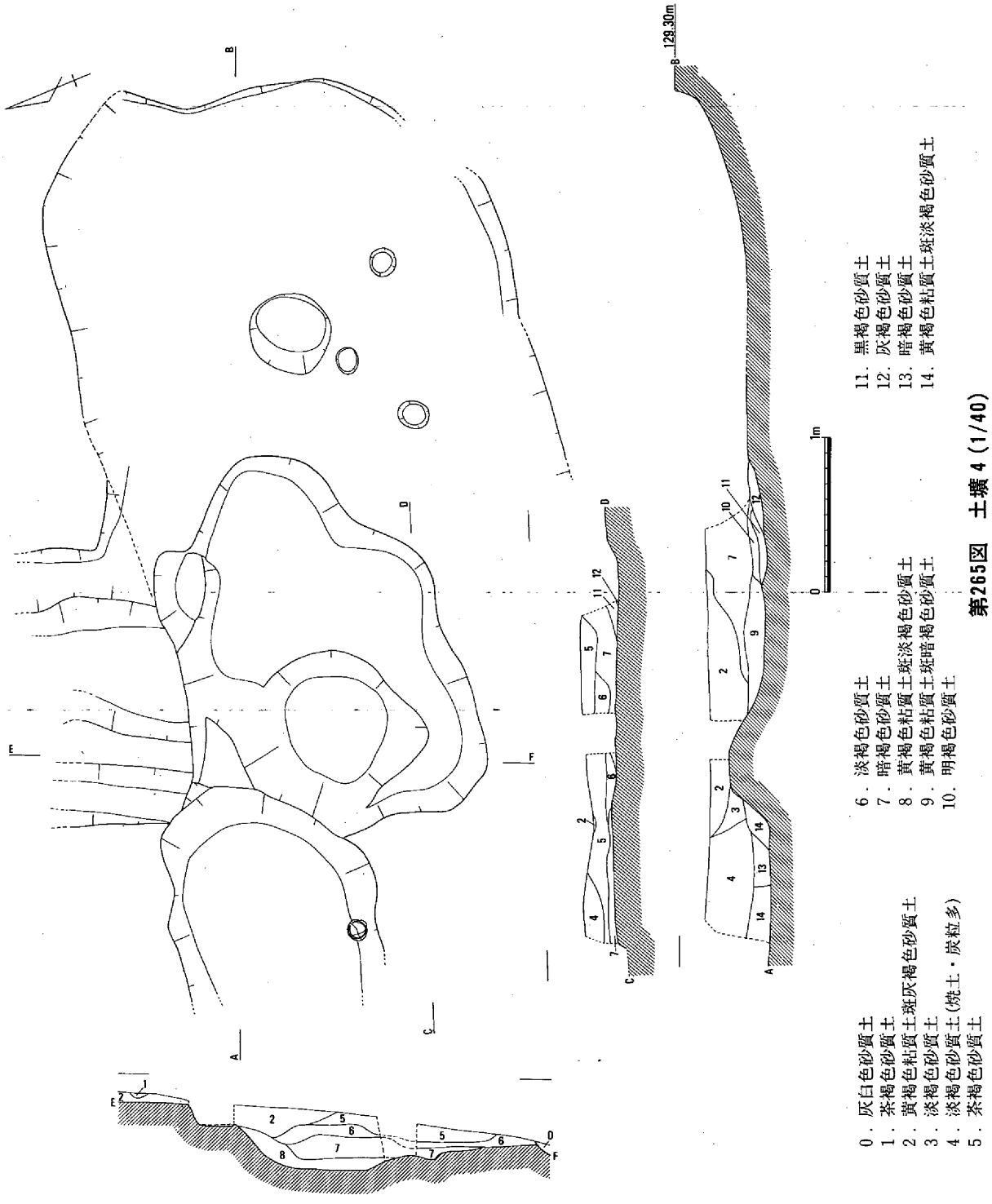
土壙４（No4）

（第264・265図）

30P区に位置する不定形の土壙で、大田茶屋遺跡の土壙56の東半分にあたり、両者併せて１基の大形土壙となる。土壙４は、南端・西端が削平されて本来の規模は



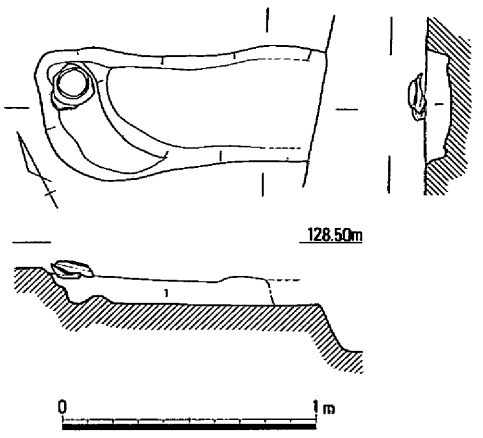
第264図　土壙４出土遺物(S＝1/4)



第265図　土壙４(1/40)

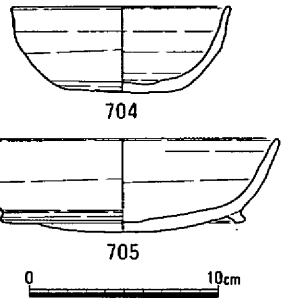
不明ながら、残存部分の長径は590cm、短径290cm、深さ最大43cmを測る。西半部では底面に窪みがあり、土壙１と同様に複数の土壙が切り合った結果ともみられる。東半部の底面に４基のピットがあるが、土壙との関係の有無は不明である。埋土は砂質土・粘質土が混じり焼土や炭が含まれていた。

出土遺物を第264図に示した。**688**～**693**は土師器で、**688**が杯、その他は甕である。**694**～**703**は須恵器である。**702**の杯身は底部がほぼ完存し、口径159mm、底径114mmを測る。**703**は杯身の高台片である。須恵器の杯蓋**694**・**695**のように時期の遡るものもあるが、他の土器は奈良時代に属するようで、土壙の時期も同様であろう。　(岡本泰)

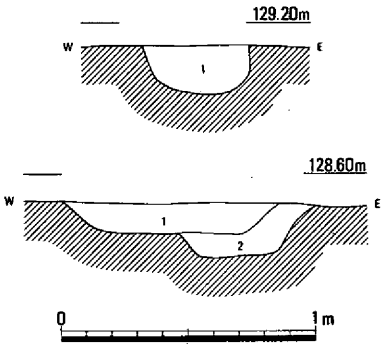


土壙5（No21）（第266図、図版22）

32Q区に位置する長方形の土壙である。主軸方向はほぼ西北西－東南東である。東端は確認調査のトレンチ掘削時に失われたため、現存長112cm、幅46cm、深さ最大12cmを測る。壁際の床面は溝状に浅く窪んでいる。また西木口部分では、床面から浮いた状態でほぼ完形の須恵器杯身2点が重なって出土した。こうした土壙の形態上の特徴や、須恵器の出土状況から考えれば、むしろ土壙墓の可能性が高いと思われる。ただし木棺痕跡を土層断面でおさえることはできなかった。

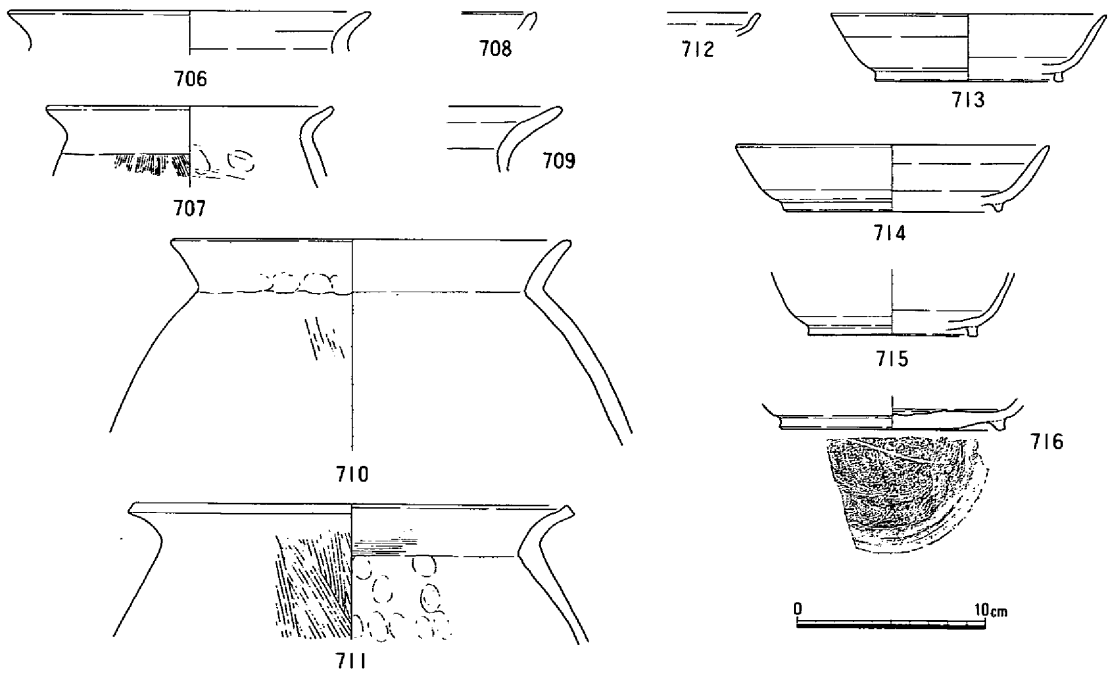


第266図　土壙5（1/30）・出土遺物（1/4）

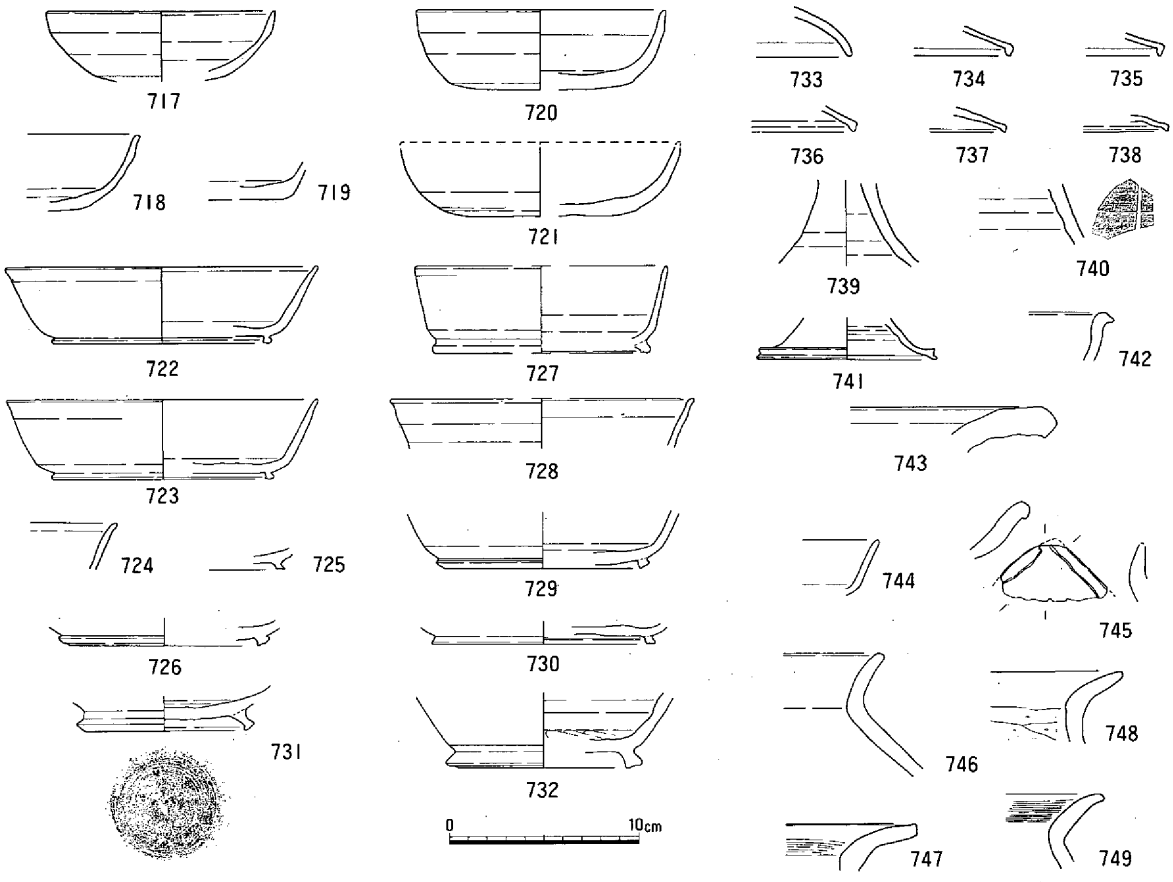


須恵器杯身2点は、正置した**704**の上に**705**が蓋状に被さった状態で出土している。**704**は口径113mm、底径76mm、器高46mmを測る無高台のもの。底面は回転ヘラ切り後ナデを加えている。**705**は高台を有し、口径164mm、高台径119mm、器高50mmを測る。底面は回転ヘラ切り。底部は高台よりも下側に張り出している。使用のためか、高台や見込み部分に摩滅が認められる。

土壙の時期は、出土須恵器の特徴からみて奈良時代前半頃と考えられる。（岡本泰）



第267図　溝1（1/30）・出土遺物（1/4）



第268図　大田障子遺跡出土遺物(7)(1/4)

溝１（No15）（第267図）

31O区に発し、弧を描いて31R区まで続く溝である。検出面での幅は最大65cmを測る。断面は台形を呈するが、一部では重複のためか壁面に段がある。溝の性格については不明である。

出土遺物には土師器と須恵器がある。**706**～**711**は土師器の甕である。**712**は須恵器の皿、**713**～**716**は須恵器の杯身で、**716**の底面には直線状のヘラ記号が認められる。

溝の時期は、出土遺物から奈良時代前半頃に比定される。（岡本泰）

包含層出土遺物（第268図）

調査区中央部の包含層や表土などから出土した遺物を掲載する。**717**～**743**が須恵器である。**717**～**721**は無高台、**722**～**730**は高台を有する杯身である。**731**・**732**は壺の底部とみられる。**720**の底部はヘラケズリ後ナデで仕上げる。**731**は底面に顕著なヘラ切り痕を残す。**732**は他に比べて体部・高台とも重厚な作りである。**733**～**738**は杯蓋である。端部は**733**では丸くおさめ、他のものは下方へ屈曲する。**739**～**741**は高杯脚部で、**740**の外面にはタテ方向の沈線が１条残る。**742**は器種がはっきりしないが、鉢の口縁部と思われる。端部は外側へ張り出している。**743**は大甕の口縁部である。**744**～**749**は土師器である。**744**は杯身。**745**は器種不明だが、把手の可能性がある。口縁端部は外側へ折り返されている。**746**～**749**は甕である。

以上の土器の時期は飛鳥～奈良時代の範囲におさまるものである。大部分は小片ではあるが、比較的多く出土しており、周囲が生活空間であった可能性が高い。（岡本泰）

3．小結

以上のように、大田障子遺跡においては奈良時代を中心として若干の遺構が検出された。遺構の種類や配置状況について、隣接する大田茶屋遺跡と比較してみていきたい。

性格の明確な遺構は、墓と推定される土壙5のみである。他の遺構は性格不明のものが多いが、包含層から当時期の遺物が比較的多く出土していることも考慮すれば、周囲が生活空間であったこと自体は確実といえよう。

ここで、同時期の大田茶屋遺跡の状況をみてみる。西地区においては、主軸方向をほぼ同じくする掘立柱建物が多数検出され、その配置に方位を意識した規格性が読み取れる。また、包含層遺物ではあるが軒瓦の出土をみており、官衙関連施設の存在が示唆される。一方茶屋遺跡東地区では遺構がほとんどなく、遺物の量もわずかである。当時期の東地区は遺構の空白地帯であったと思われ、大田障子遺跡に至って少数ながらも遺構の分布が認められるようになる。

以上のことから、今回の調査区は東側に展開する遺構群の西端部分にあたると結論できよう。遺跡の性格としては、遺構が小規模で規格性に乏しく、官衙関連の遺物も出土していないことから、茶屋遺跡の官衙施設とは距離を隔てて営まれた一般集落である可能性が高い。検出遺構は、集落縁辺部に作られた小屋や墓など、直接居住に関係のないものであったと考えられる。　（岡本泰）

第4節　大田大正開遺跡

1．遺物

調査区内からは古代の遺構は確認されていない。また、調査区が限られているため、遺跡全体の状況や南に隣接する大田茶屋遺跡との関係も不明であるが、包含層中から古代の遺物がわずかながら出土しており、付近に当該期の遺構が存在するものと考えられる。

750は須恵器の杯身である。内外面ヨコナデ、底部は右回りのヘラ削りで仕上げられ、高台径は推定で74㎜を測る。胎土は緻密で灰白色を呈し、焼成も堅緻である。

751は須恵器の甕の胴部下半から底部にかけての部位と考えられる。

外面にはタタキ具の痕跡が残り、自然釉が付着している。内面は指押さえの後、ナデで仕上げられており、指頭圧痕がわずかに観察できる。胎土は緻密で灰黄褐色を呈し、焼成も堅緻である。

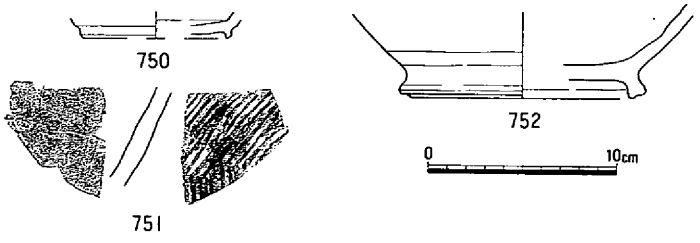
752は須恵器の壺である。体部内外面はヨコナデで仕上げられ、体部外面と底部との屈曲部に回転ヘラ削りの痕跡が残る。高台径は推定で116㎜を測る。

高台は「ハ」の字状を呈する。

高台端部はヨコナデにより、浅い窪みが認められる。

胎土は緻密で灰赤色を呈し、焼成も堅緻である。

これらの遺物は奈良時代のものと考えられる。　（佐藤）



第269図　大田大正開遺跡出土遺物(4)(1/4)

第５節　大田西奥田遺跡

１．遺物

１区、２区ともに古代の遺構は確認されていないが、１区では**753**が１片、２区では、北から南西と南東に伸びる尾根に挟まれた谷斜面に形成された包含層から、古代の遺物が若干出土している。

753～756は須恵器の蓋である。外面はヘラ削りの後、ヨコナデで仕上げられ、内面はヨコナデで仕上げられる。いずれも胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も堅緻である。**757～760**は須恵器の杯である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、**758・759**の外面には自然釉が一部付着している。**760**の口径は推定で145.5㎜を測る。いずれも胎土は緻密で灰色～暗灰色を呈し、焼成も堅緻である。**761**は須恵器の鉢の口縁部と考えられる。内外面ヨコナデで仕上げられ、口唇部には面を形成している。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も堅緻である。**762**は須恵器の壺の底部と考えられる。内面は当て具痕をナデ消して仕上げており、外面はナデで仕上げられる。底部もナデで仕上げられ、底径は推定で90㎜を測る。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も堅緻である。**763・764・766**は須恵器の甕の胴部上半から肩部にかけての部位である。外面はタタキの後、横方向のカキ目が施され、内面には青海波状の当て具痕が残る。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も堅緻である。**765**は須恵器の肩部である。外面にはタタキ具の痕跡が残り、緑色を呈する自然釉が一部かかっている。内面には青海波状の当て具痕が残る。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も堅緻である。

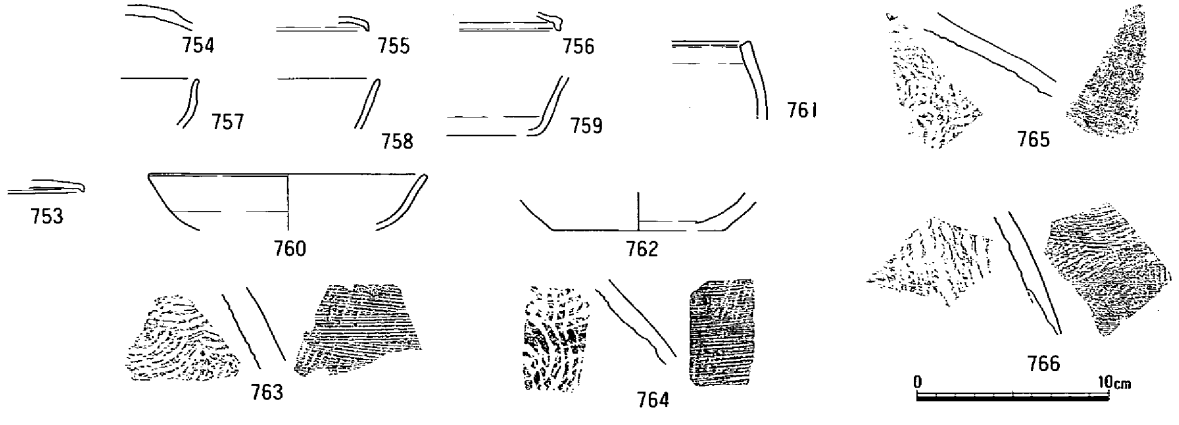
以上、大田西奥田遺跡で出土した古代の遺物はおおむね奈良時代のものと考えられる。遺物の出土量がわずかであることから、推測の域を出るものではないが、出土した須恵器の大部分が杯身・杯蓋・甕といった一般的な器種であることから、調査区付近の丘陵尾根上には当該期の集落が存在しているものと考えられる。　（佐藤）

注

（注１）伊藤晃「第十一章　窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987年

（注２）安川豊史『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告50　津山市教育委員会　1994年

（注３）湊哲夫・中山俊紀『美作国分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告12　津山市教育委員会　1983年



第270図　大田西奥田遺跡１・２区出土遺物(1/4)

第７章　古代末から中世の遺構と遺物

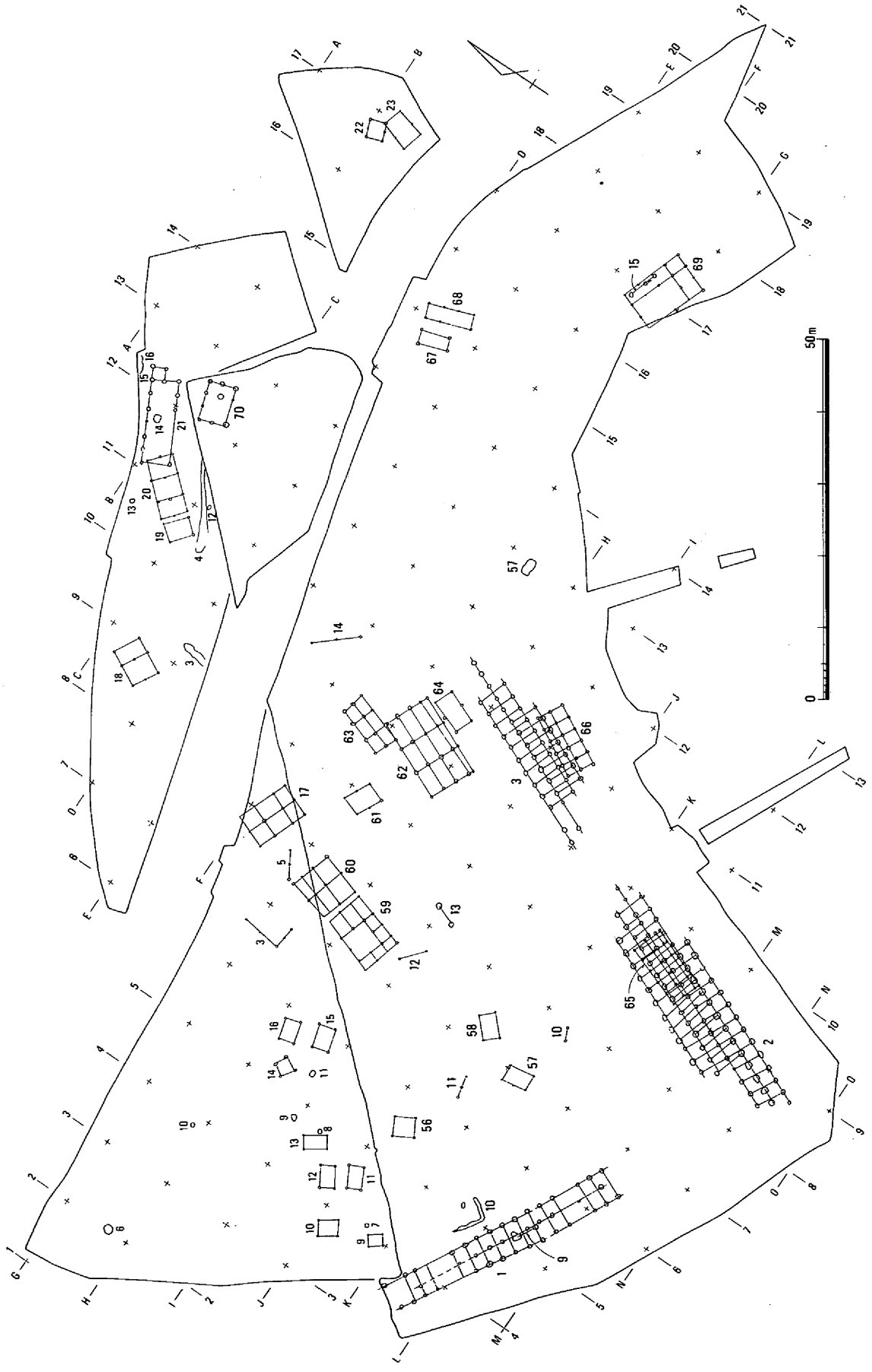
第１節　概要

大田茶屋遺跡において遺構・遺物が検出された奈良時代から平安時代前期より後は、調査対象地における人々の活動痕跡はしばらく途絶えることとなる。再び遺構・遺物が確認されるようになるのは12世紀からで、それは勝間田焼の調査地における普遍的な出土をもって始まる。勝間田焼は全遺跡から出土し、大田松山久保遺跡でもわずか１点ではあるが、柱穴からそれらしい破片が出土している。この章が対象とする時代は11世紀後半から16世紀中頃までの長期にわたっているが、出土遺物の年代をみると全期間を満たすことはなく、ある限られた期間のもののみが出土している。

最初の遺構は大田茶屋遺跡において検出されている。大田茶屋遺跡の西地区から東地区、さらには大田障子遺跡に及ぶ長大な柵が、丘陵端の頂部平坦面を広く取り囲む形で巡らされている。検出された長さだけでも約270mに達する。柵は１列ではなく、もっともよく残っている部分では５列もの柱穴列となり、１列とばしで柱穴の対応関係が認められ、井桁を組むような形で設置されていた可能性が高い。この柵の出入り口にあたる部分が東地区で１カ所検出され、そこを入った正面にあたる位置に大形建物があり、２ないし３棟の副屋を伴っていた。東地区ではもう１カ所、主屋の大形建物と数棟の副屋の建ち並ぶ地区が存在したが、それ以外には柵と共存した可能性のある建物群は検出されなかった。西地区では柵と共存することが明瞭に認められる建物は指摘できないが、県道部分の２区に所在した大形建物と、その建物と棟方向をほぼ等しくする建物が11区で検出されていて、候補として挙げられる。このように、この厳重な柵の中にあったのは２ないし３カ所の小規模な建物群とわずかな小形建物のみで、集落などは存在せず、むしろ広い空閑地がその囲い込みの目的であったようにも解される。この大規模な柵は、柱穴の観察によれば長期間は存在しなかったとみられ、目的の消滅とともに抜き取られたものとみられる。この柵の存続期間は12世紀代のことと考えられる。

大規模な柵の消滅後、しばらくの空白期間を置いて、13世紀の後半ないしは末期から掘立柱建物が出現する。建物は西地区を中心に展開するが、東地区でも２棟の大形建物と10数棟の小形建物が所在している。全体の配置状況をみると、大形建物がある程度の間隔をもって存在し、それぞれが屋敷地を有していたと考えられる。このことから集落が形成されていたものとみられる。集落内の建物にはかなり大きなものがみられ、輸入磁器もいくらか出土していることをみると、集落の居住者はある程度の財産を所有していた富裕層ではないかと思われる。大田大正開遺跡でも掘立柱建物が検出され、この付近まで集落が広がっていたとみられる。しかし、この中世集落は長くは続かなかったようである。集落から出土した遺物は14世紀代のものが多く、15世紀の前半頃までのものを最後に、16世紀とみられる遺物は出土していない。なによりも、掘立柱であるにもかかわらず建物の建て替えがほとんど認められないことは、後述する近世の状況とくらべて対照的で、集落として存続した期間が短かったことを示している。

大田西奥田遺跡１区で柱穴群が検出されている。中世後期の集落の端部と思われる。　（岡本寛）



第271図　大田茶屋遺跡西地区（4－6・11区）古代末～中世主要遺構配置図(1/800)

第２節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

大田茶屋遺跡における古代末から中世にかけての遺構・遺物は前述のように二つの時期に分けられる。一つは12世紀代の平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてで、もう一つは13世紀後葉から15世紀前葉頃までの期間、鎌倉時代後期から室町時代前期までである。前者を前期、後者を後期と呼ぶ。

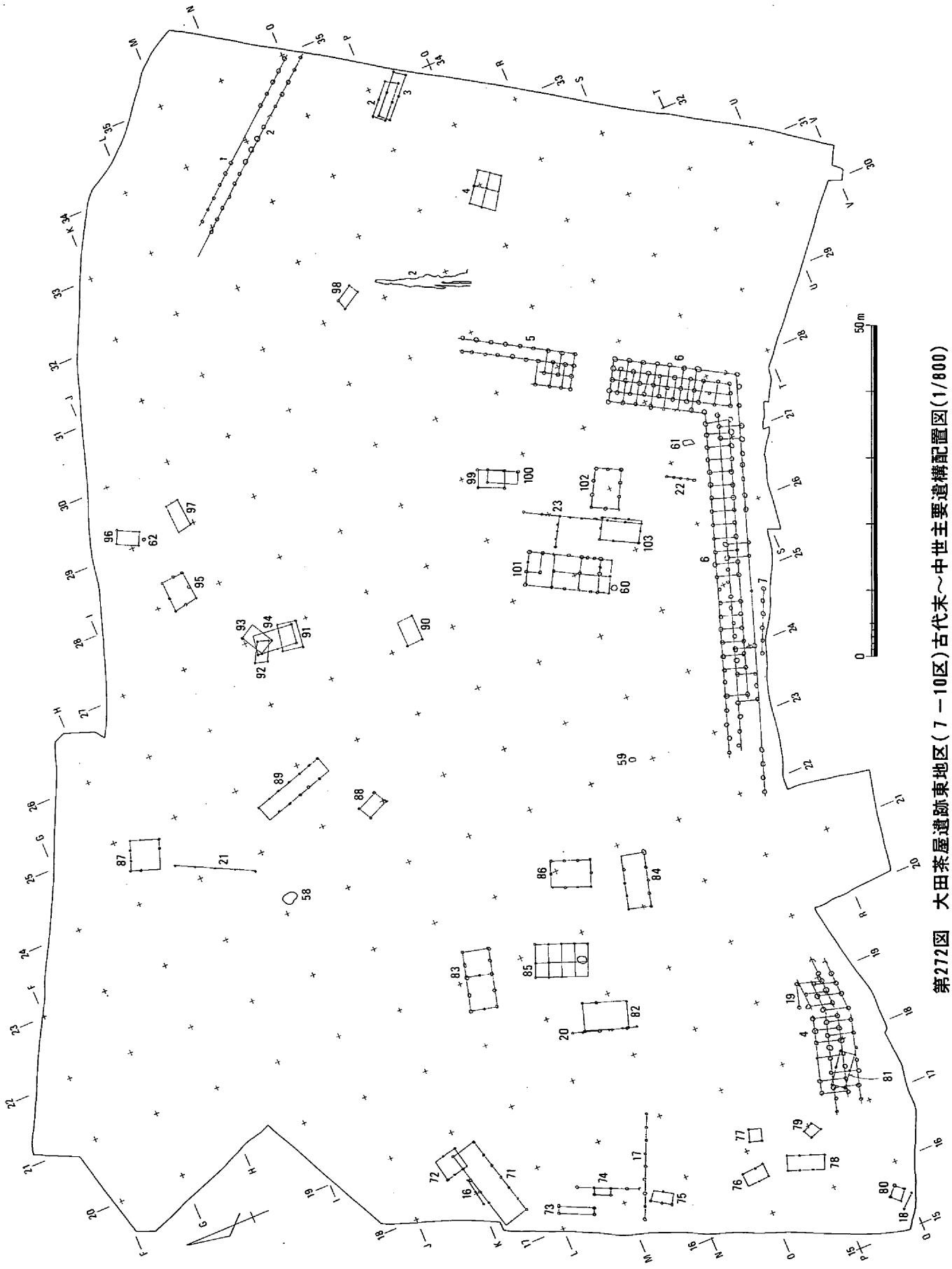
前期の遺構として長大な柵がまず挙げられる。西地区では、丘陵端の南西斜面に柵１が、丘陵の南東斜面を下った所に柵２・３がほぼ直線状に設けられ、丘陵頂部平坦面を取り囲んでいた。東地区では、調査区南西端に柵４が残存し、21Ｑ区から27Ｓ区まで直線状に延び、そこから屈折して28Ｑ区まで続く柵６が検出され、さらに出入口を挟んで続く柵５がわずかに残されていた。これらの柵も丘陵頂部の平坦面を取り囲むことを意図した施設であったことは明瞭である。柵は途切れて検出されたが、本来は一続きであったと思われ、柵１は柵２まで延び、柵３は北端の検出されなくなるあたりから東へ折れていた可能性がある。柵５は北東へ延びて、大田障子遺跡の柵１・２に接続していたことも推定される。東地区の例からして、柵には何カ所か出入口が設けられていたとみられる。たとえば、柵２と柵３の間のように、地盤の残存状況からすれば柱穴が検出されてもおかしくない所に柱穴がなく、柵と共存していたとみられる建物群の前面にあたる柵４と柵６の間でも同様の状況がみられた。

28Ｑ区の出入口を入った所に建物群が検出された。棟方向は柵と平行し、建物102の柱穴からは勝間田焼の甕の破片が出土したことから、この建物群は柵と共存していたと判断した。主屋は建物101で、その前面には目隠塀の柱穴列23があり、その塀に添うような形で建物102と建物99ないしは建物100が配置される。ここから40mほど西にもう一つの建物群が存在する。棟方向は東の建物群に近似しているが、むしろ柵６と平行する。建物82・83・84が配置された時と建物85・86が並んでいた時の二時期が考えられる。東地区ではこれらの建物群と棟方向の等しい小形建物が数棟散在していた。

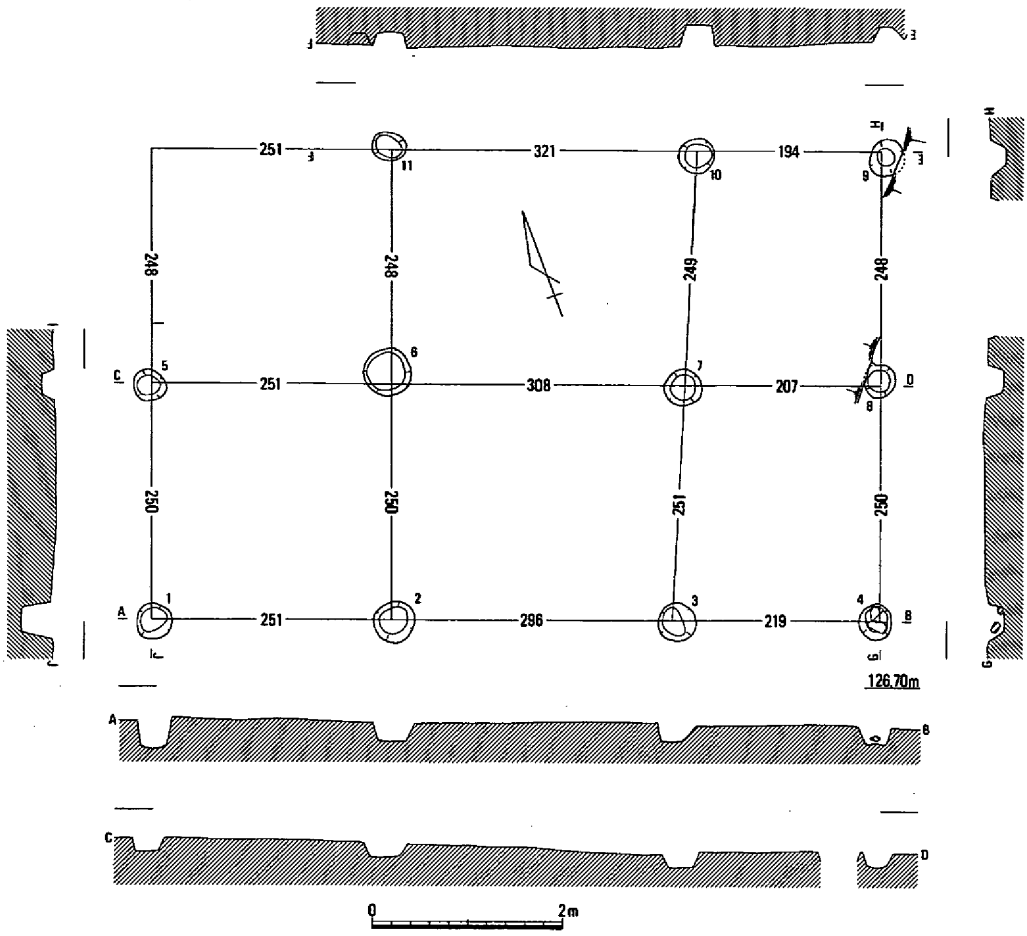
西地区では、柵と平行する建物62・64がある。建物62は出土遺物から後期と判断されるが、建物64は前期の遺物を出土し、構造上の特徴から柵に伴うかもしれない。東地区の建物群には側柱建物が多かったため、柵３が東へ折れると仮定すれば、県道部分の２区で検出された建物14とその前面に位置する11区の建物70が柵と共存する可能性があり、その場合には建物67・68も伴うかもしれない。

後期の建物は、東地区では前期の建物と棟方向を異にする。西端の建物71と北半中央付近の建物89が大形の建物だが、前者には出土遺物が無く、後者では弥生土器が出土するのみで確実ではない。棟方向だけでみれば、むしろ建物14・70と平行しているが、後期の遺物の出土から建物の存在を考えれば建物71・89ということになる。小形の建物が付随するかは微妙で、むしろ散在する例が多い。

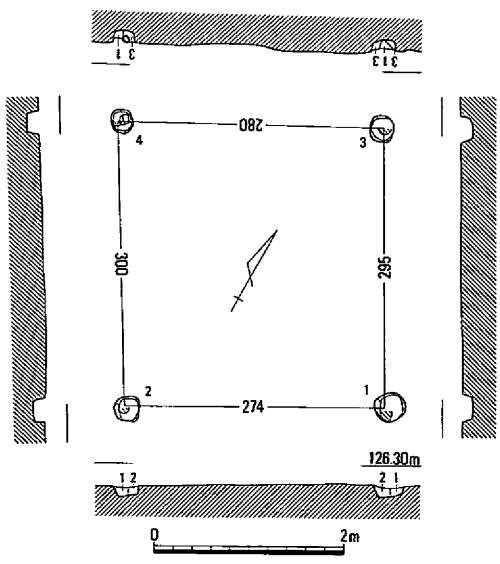
後期の西地区では、５区で建物59・62、６区に建物69という大形建物がある。建物59には建物60、建物62には建物63が重複していて、一度建て替えられたようである。建物63と同規模の建物として、４区と５区の境に建物65が、５区には建物66がともに柵のあった場所に建てられ、１区と５区の境には建物17、２区には建物20が検出されている。それぞれに適当な間隔をおいて配置されていることから、集落内を区画した屋敷地が存在したものと考えられる。１区から４区にかけての丘陵頂部で検出された小形建物の性格は明らかではない。弥生時代とした建物とは柱穴の規模が異なる。（岡本寛）



第272図　大田茶屋遺跡東地区（7－10区）古代末～中世主要遺構配置図(1/800)

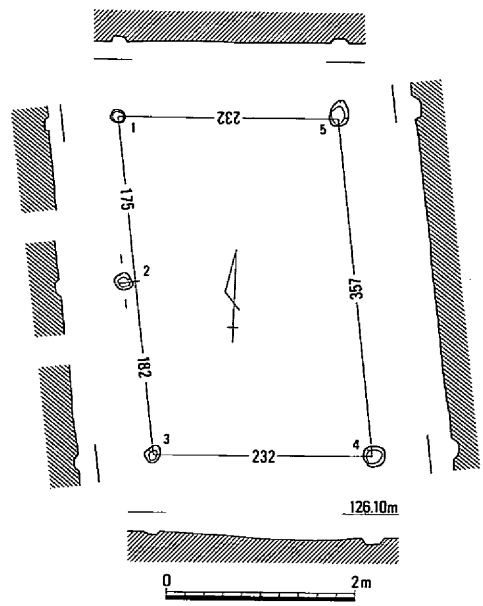


第273図　建物17(1/80)



1．暗褐灰色粘質土　　3．灰褐色粘質土
2．茶灰褐色粘質土

第274図　建物56(1/80)



第275図　建物57(1/80)

２．遺構・遺物

建物17（No35）（第273図）

県道部分の１区、7，8Ｆ区に大部分があり、５区で柱穴２基を検出した。３×２間の掘立柱建物で、桁行全長766cm、梁間全長498cm、床面積38.1㎡を測る。棟方向はＥ－20.5°－Ｓである。（岡本寛）

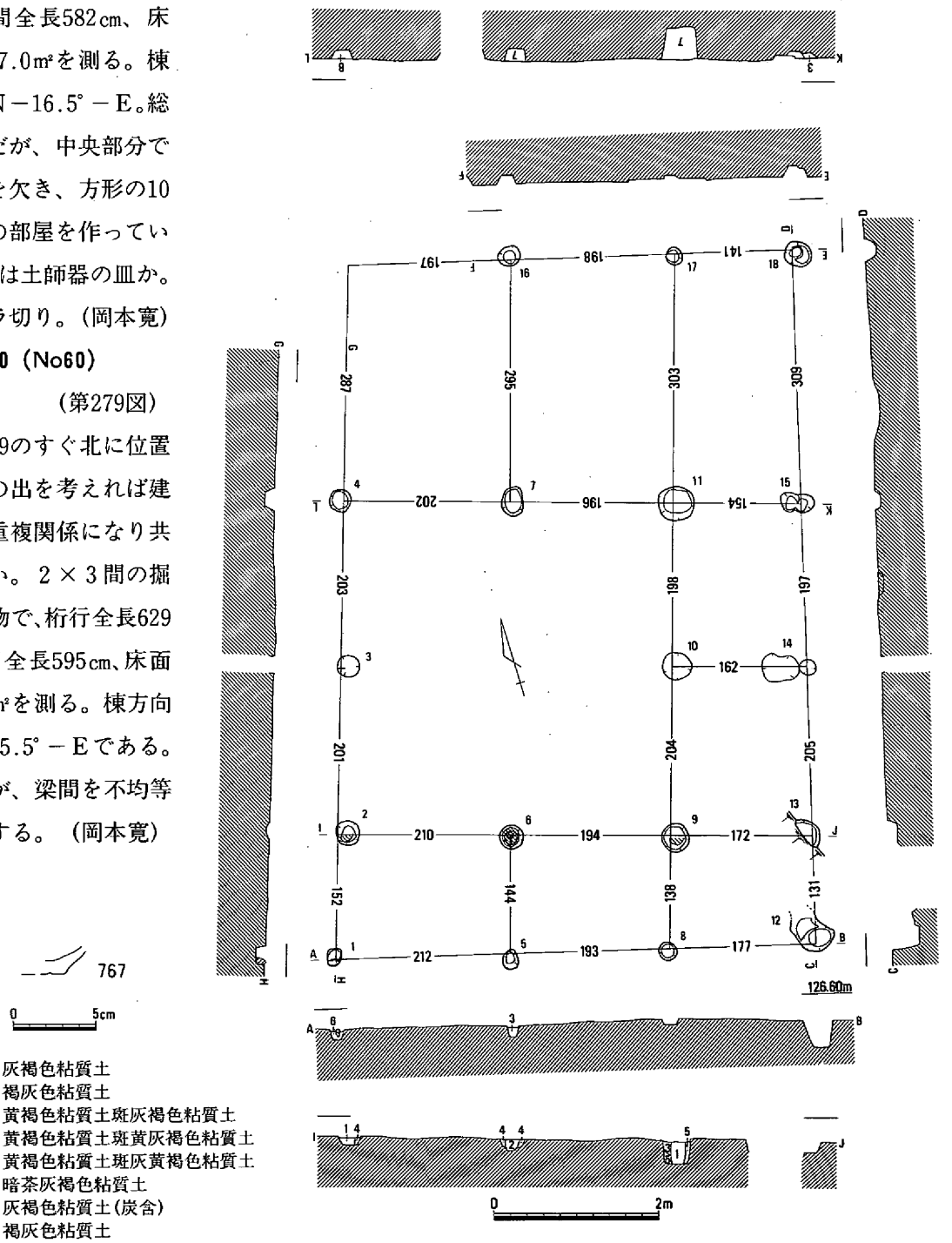
建物59（No24）（第276図）

６Ｈ・７Ｇ，Ｈ区にある４×３間の大形掘立柱建物であるが、北端の柱間が他よりかなり長くて変則的である。桁行全長843cm、梁間全長582cm、床面積は47.0㎡を測る。棟方向はＮ－16.5°－Ｅ。総柱建物だが、中央部分では１基を欠き、方形の10畳ほどの部屋を作っている。**767**は土師器の皿か。底部ヘラ切り。（岡本寛）

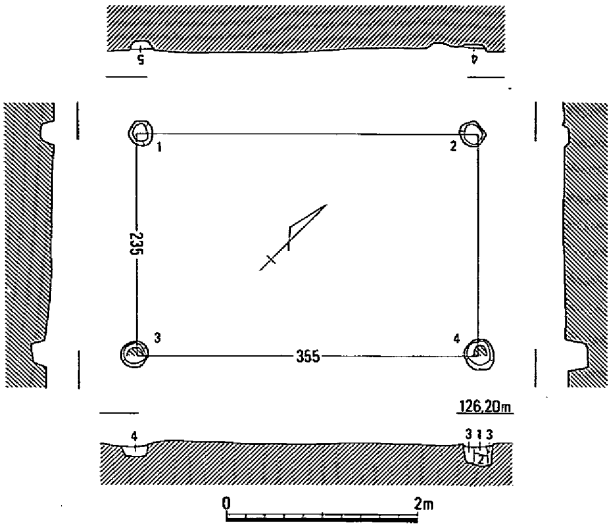
建物60（No60）

（第279図）

建物59のすぐ北に位置し、軒の出を考えれば建物59と重複関係になり共存しない。２×３間の掘立柱建物で、桁行全長629cm、梁間全長595cm、床面積36.2㎡を測る。棟方向はＮ－15.5°－Ｅである。総柱だが、梁間を不均等に三分する。（岡本寛）

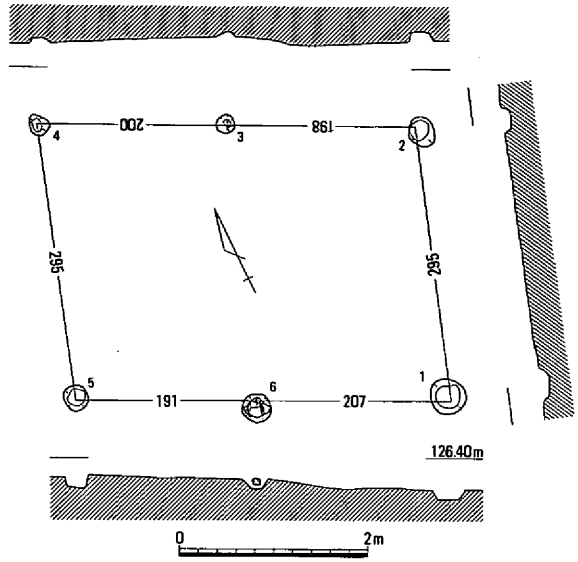


第276図　建物59(1/80)・出土遺物(1/4)



1．黄褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質土斑茶灰褐色粘質土
5．茶灰褐色粘質土

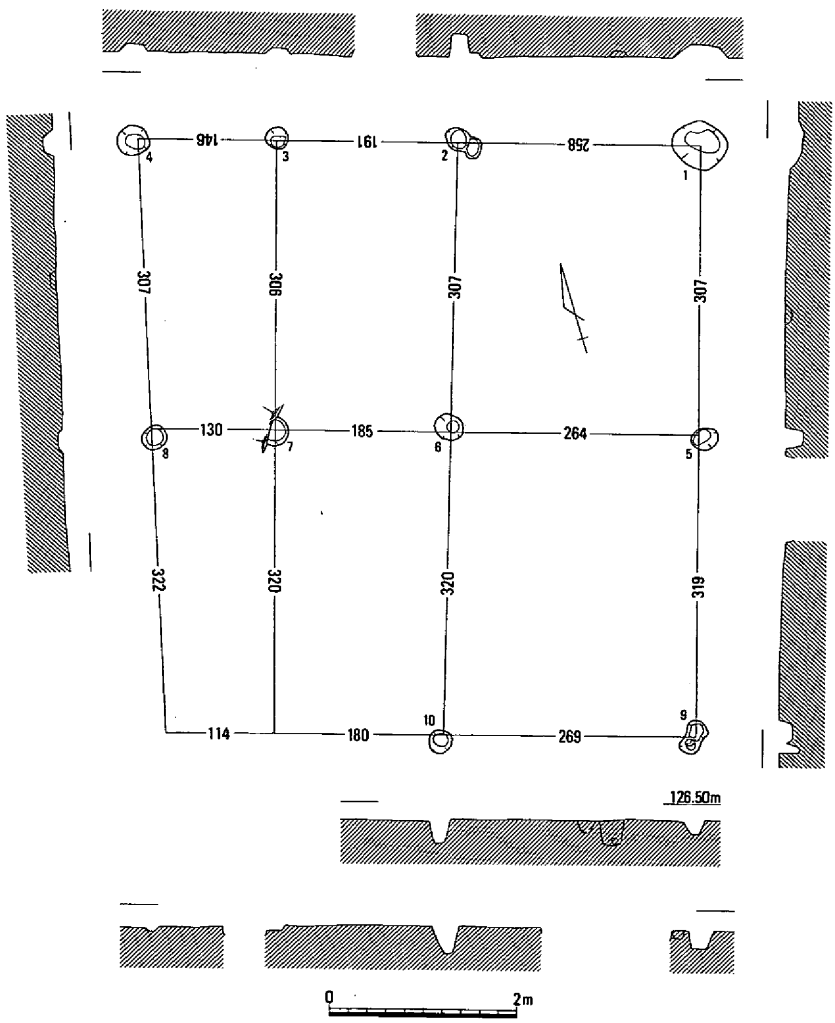
第277図　建物58(1/80)



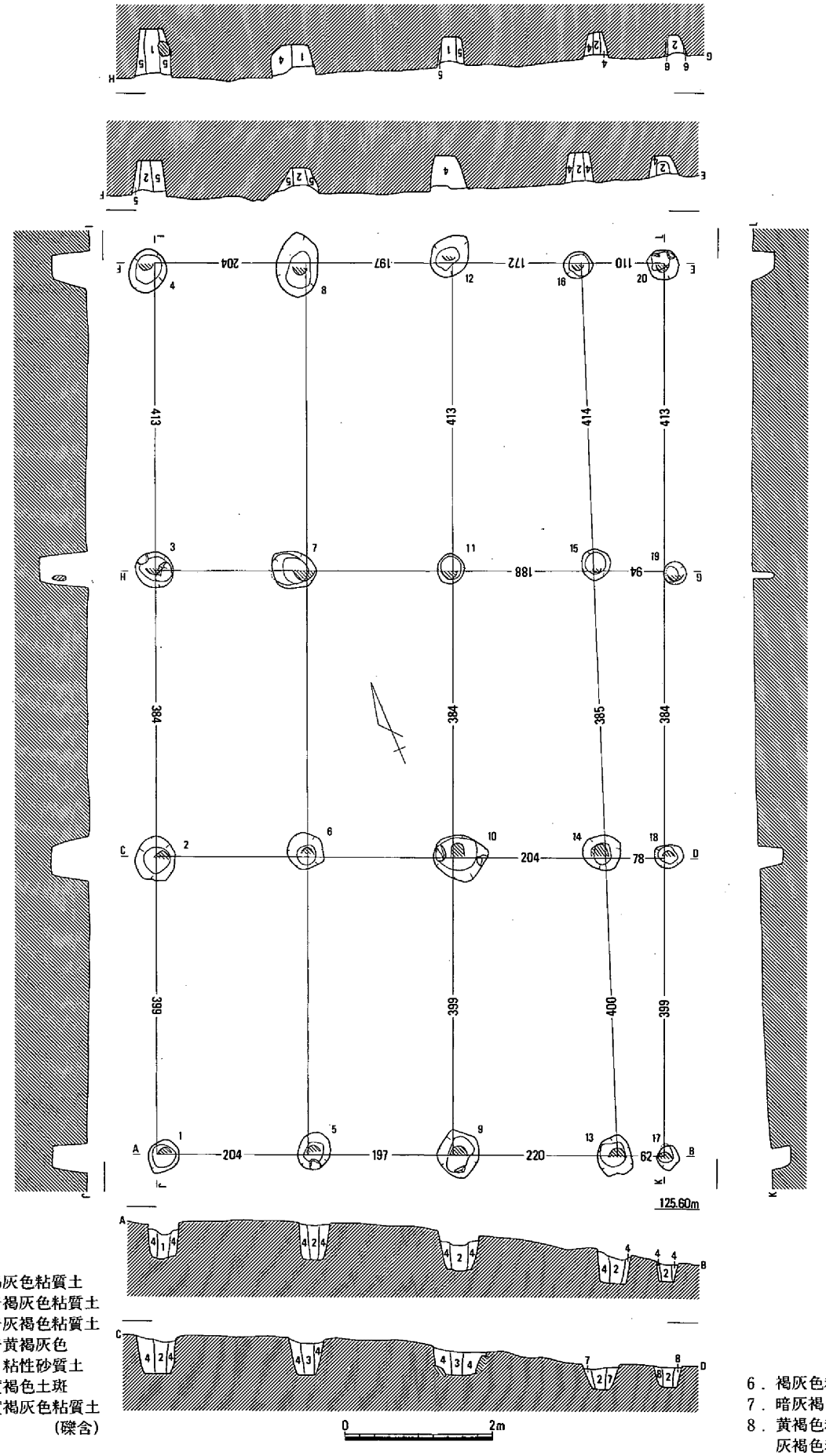
第278図　建物61(1/80)

建物62（No29）（第280・281図、図版８）

大形の掘立柱建物で、９,10Ｆ-Ｈ区にある。東端の柱穴は径が小さくて浅いことから、庇か縁と考えたいが、その西隣の柱穴列が棟方向に対して斜行しているため疑問もある。身舎が３×３間、東面庇１間としておく。桁行全長1196cm、梁間全長683cm、床面積81.7㎡を測る。棟方向はＮ－23°－Ｅである。出土遺物がかなりあり、青磁片もみられた。**768・769**は柱穴８、**770**は柱穴９、**771**は柱穴10、**772・773**は柱穴15出土である。**772・773**の備前焼は14～15世紀とみられる。　（岡本寛）



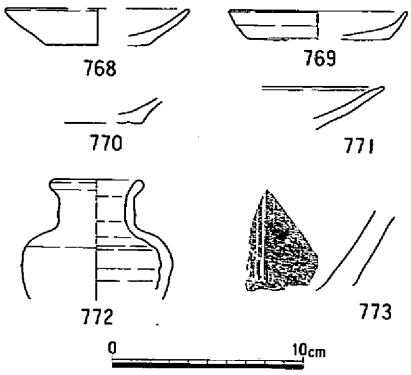
第279図　建物60(1/80)

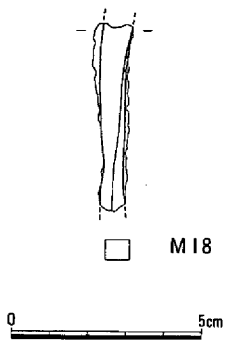


1．褐灰色粘質土
2．暗褐灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．暗黄褐灰色
　粘性砂質土
5．黄褐色土斑
　黄褐灰色粘質土
　(礫含)

6．褐灰色粘質土
7．暗灰褐色粘質土
8．黄褐色粘質土斑
　灰褐色粘質土

第280図　建物62(1/80)





第281図　建物62出土遺物
(1/4・1/2)

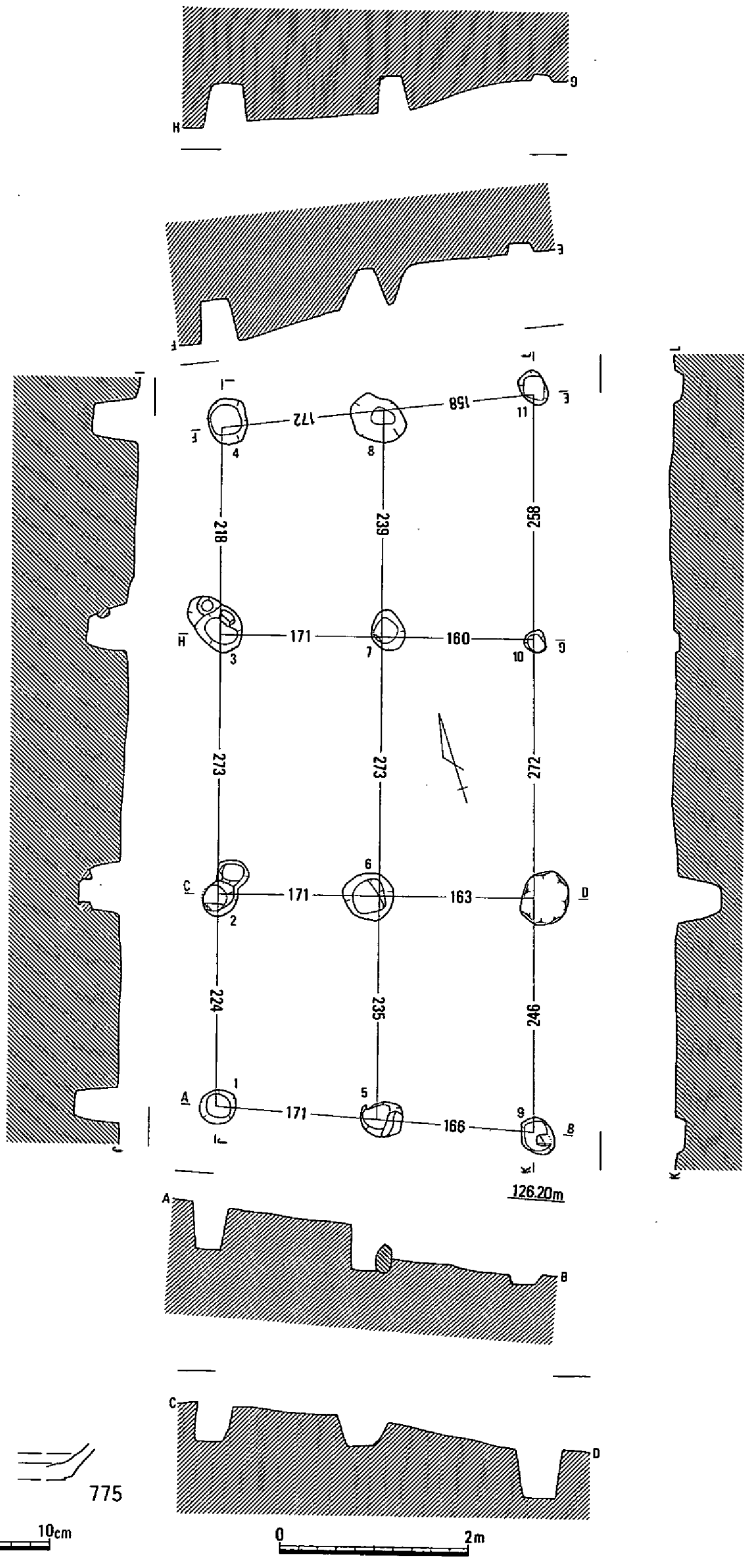
N－18.5°－Eである。梁間の柱間はほぼ等分されるが、桁行は中央の柱間が長い。**774**は柱穴２、**775**は柱穴７から出土した。土師器の杯とみられる。**775**の底部はヘラ切りである。　(岡本寛)

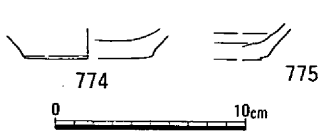
建物64 (No59)(第283図)

建物62の東に近接し、同時存在は考えられない。棟方向はN－20°－Eである。２×１間の掘立柱建物であるが、桁行の中央柱穴は四隅の柱穴より浅く、東柱の可能性もある。建物67と類似している。柱穴がかなり深い。桁行全長502cm、梁間全長261cm、床面積13.6㎡を測る。**776**は土師器の杯で、古代末期か。(岡本寛)

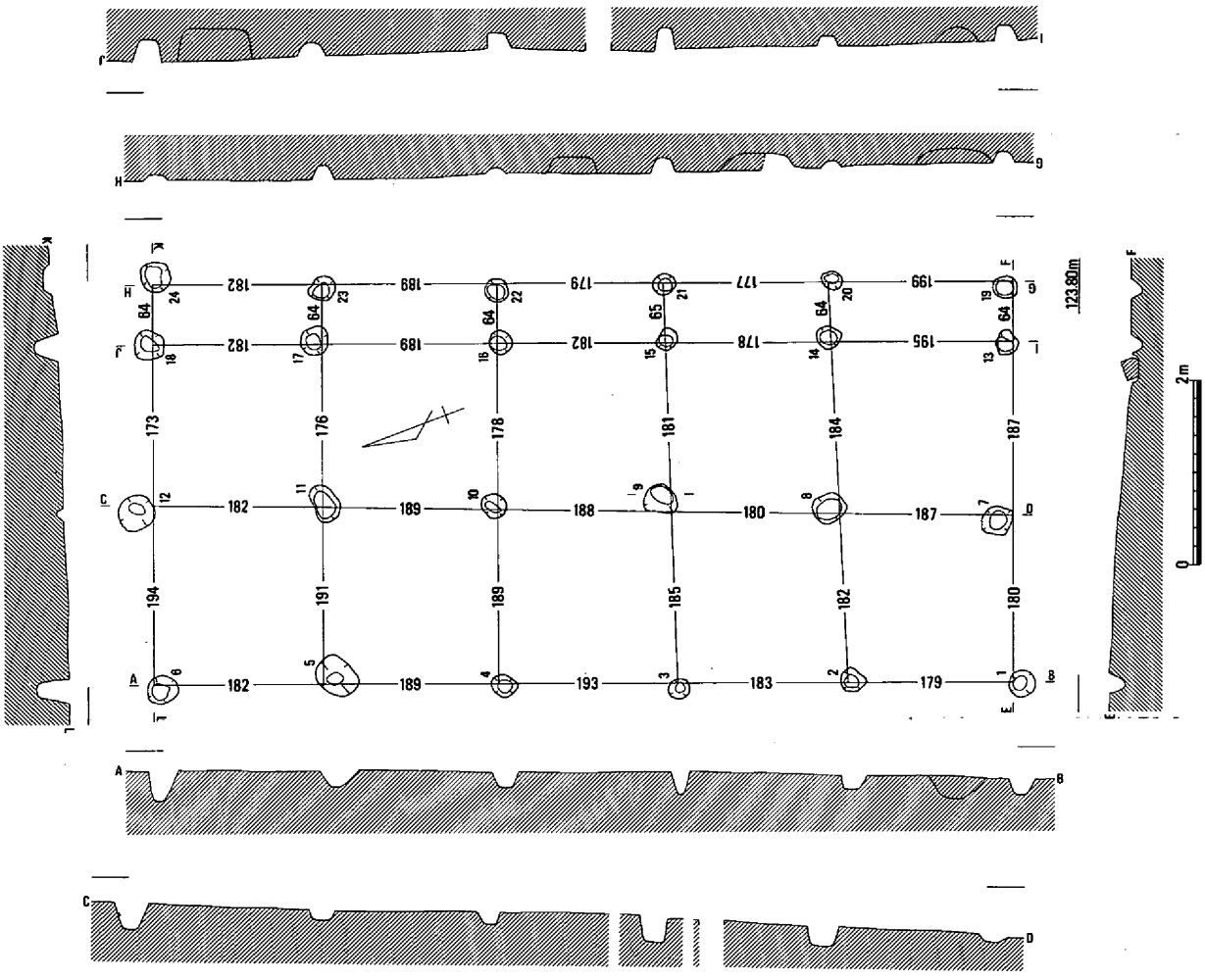
建物63 (No34)(第282図)

建物62の北西角に一部重複して建つ。３×２間の総柱の掘立柱建物である。平面形はやや歪み、台形を呈する。桁行全長776cm、梁間全長337cm、床面積は24.7㎡を測る。棟方向は

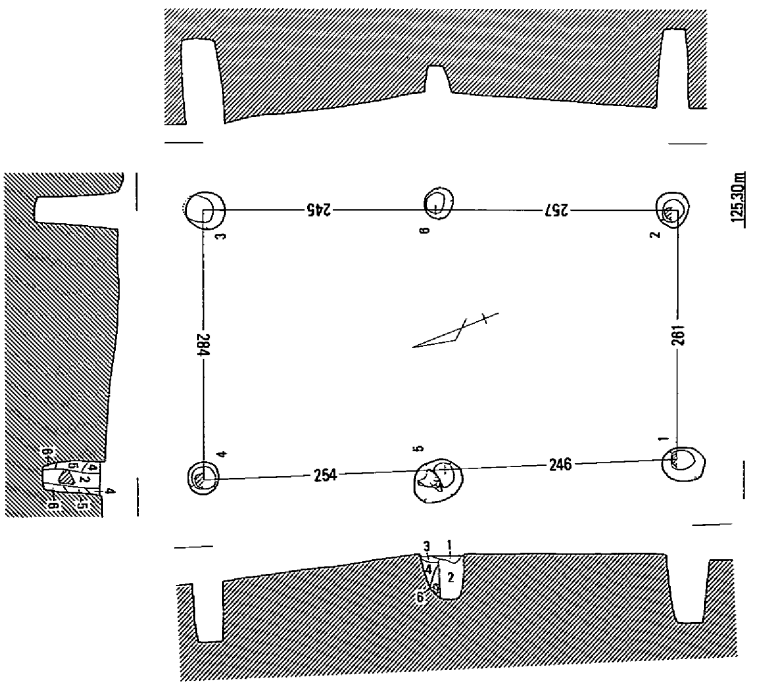




第282図　建物63(1/80)・出土遺物(1/4)



第284図　建物65(1/80)



1．灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土　4．茶灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土　5．黄褐色土斑灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土　6．褐灰色粘質土(黄褐色土混)

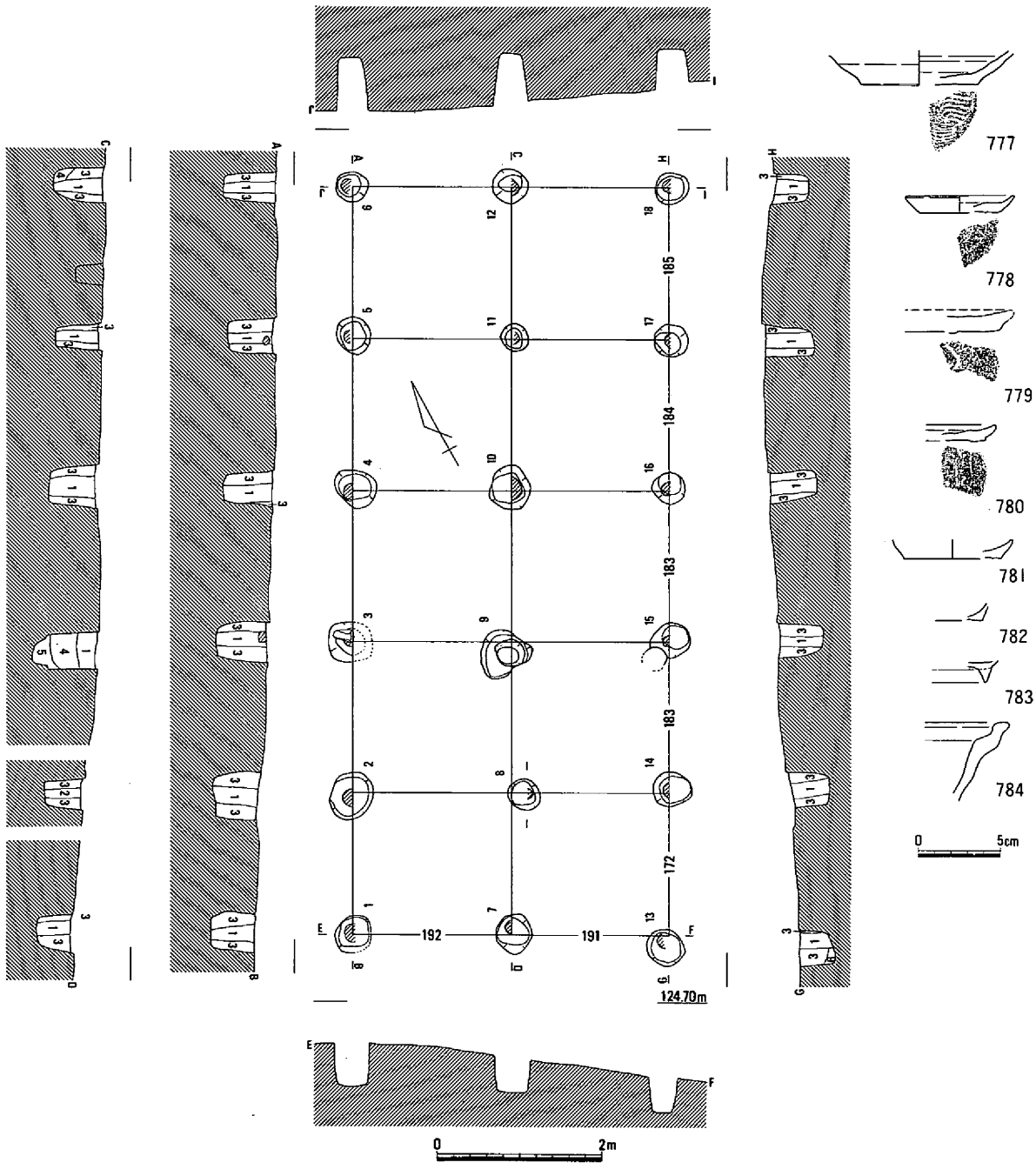
第283図　建物64(1/80)・出土遺物(1/4)

建物65（No86）(第284図)

８，９Ｋ，Ｌ区で検出された。５×２間総柱の掘立柱建物で、東側に幅64cmの縁をもつ。桁行全長は926cm、梁間全長431cm、床面積は縁も含めて39.9㎡を測る。棟の方向はＮ－21°－Ｅである。柱間は桁行、梁間ともにほぼ均等である。建物の南半では柱の位置が長方形規格からずれている。（岡本寛）

建物66（No64）(第285図)

10,11Ｈ，Ｉ区に位置する総柱の掘立柱建物である。規模は５×２間で、桁行全長907cm、梁間全長383cm、床面積は34.7㎡を測る。棟方向はＮ－29°－Ｅである。柱間は桁行、梁間ともにほぼ均等で、



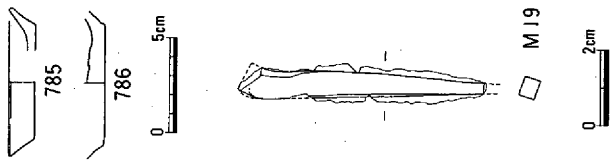
１．暗褐灰色粘質土　　４．灰褐色粘質土
２．黄褐色土斑灰褐色粘質土　　５．黄褐色土斑褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土　　６．暗褐色粘質土

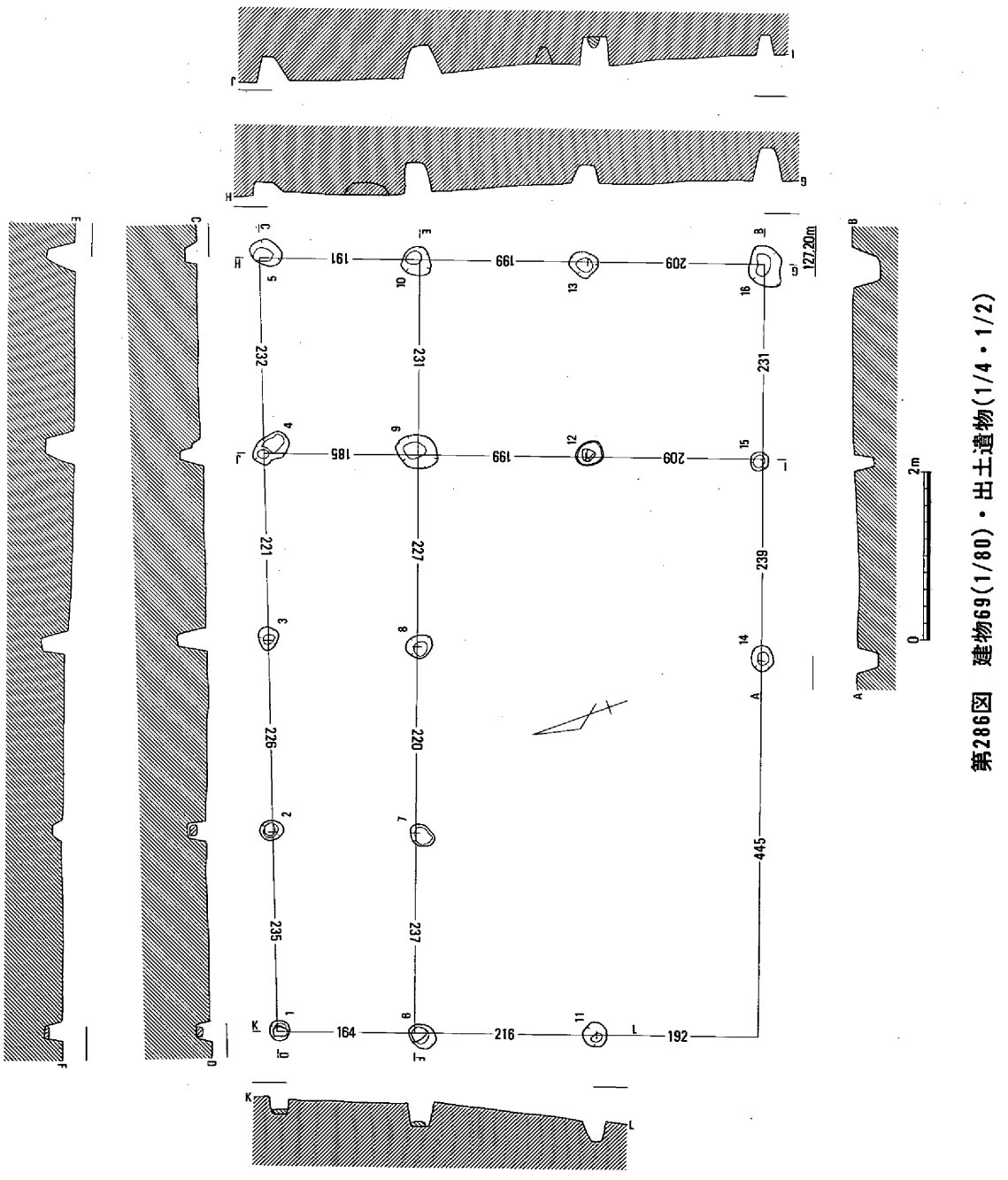
第285図　建物66(1/80)・出土遺物(1/4)

とくに、北２間の柱穴が正しく配置されていることは建物65とよく類似する。出土遺物が多く、**777**は勝間田焼の椀、**778**～**782**は土師器の小皿、**783**は土師器椀、**784**は瓦質土器の鍋である。遺物の年代から判断すると、建物66の年代は13世紀末から14世紀前半頃と考えられる。　（岡本寛）

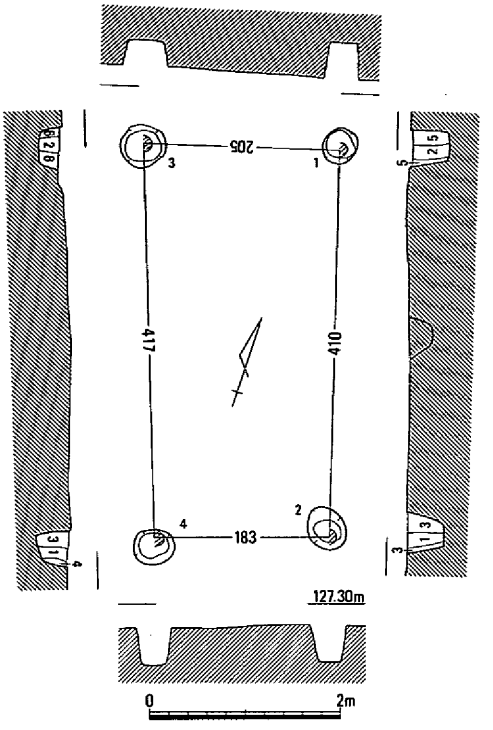
建物69（No114）（第286図）

16,17Ｆ,Ｇ区で検出された。４×３間の掘立柱建物であるが、北端の側柱列が建物の主軸に対して斜行し、柱穴もやや浅いことから、北の１間は庇とみられる。桁行全長915cm、梁間全長599cm、床面積は53.6㎡を測る。棟方向はＥ－19.5°－Ｓである。礎石をもつ柱穴があった。**785**は土師器小皿、**786**は土師器杯、**M19**は鉄釘である。　（岡本寛）



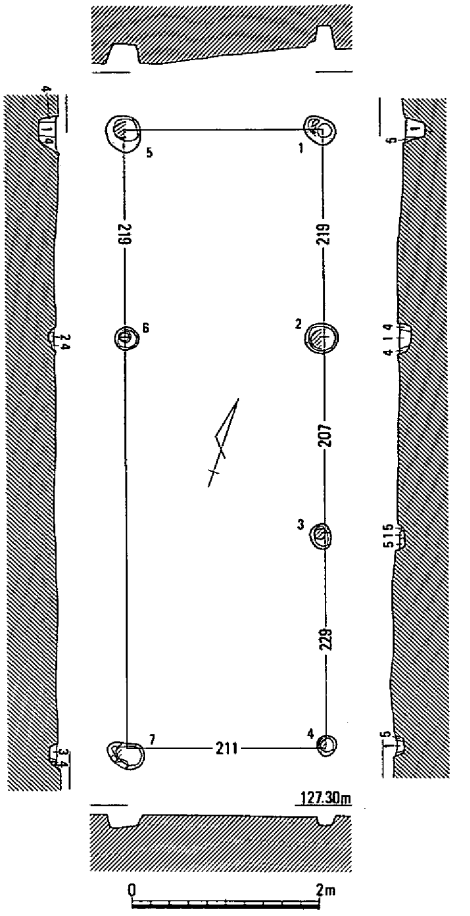


第286図　建物69（1/80）・出土遺物（1/4・1/2）



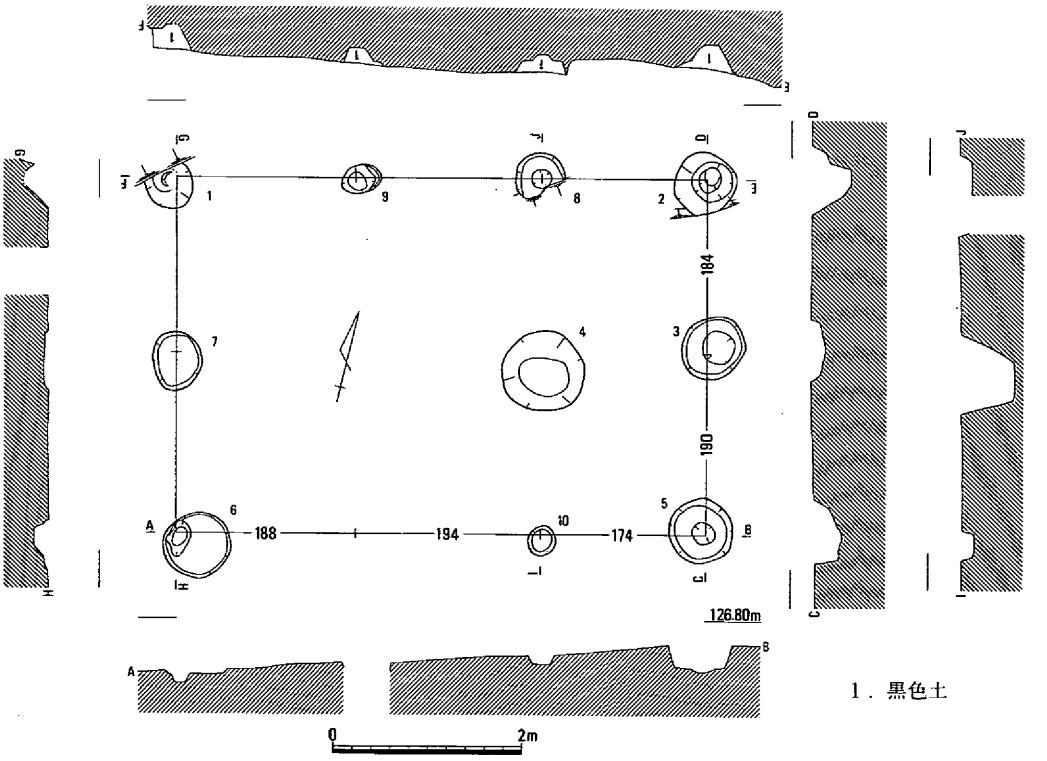
1．褐灰色粘質土
2．暗褐灰色粘質土
3．暗褐灰色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．黄褐色土斑暗褐灰色粘質土
6．黒褐灰色粘質土

第287図　建物67(1/80)



1．黄褐色土斑黒褐灰色粘質土
2．黄褐色土斑褐灰色粘質土
3．黄褐色土斑暗灰褐色粘質土
4．黄褐色土斑灰褐色粘質土
5．暗灰褐色粘質土

第288図　建物68(1/80)



1．黒色土

第289図　建物70(1/80)

建物70（No318）（第289図）

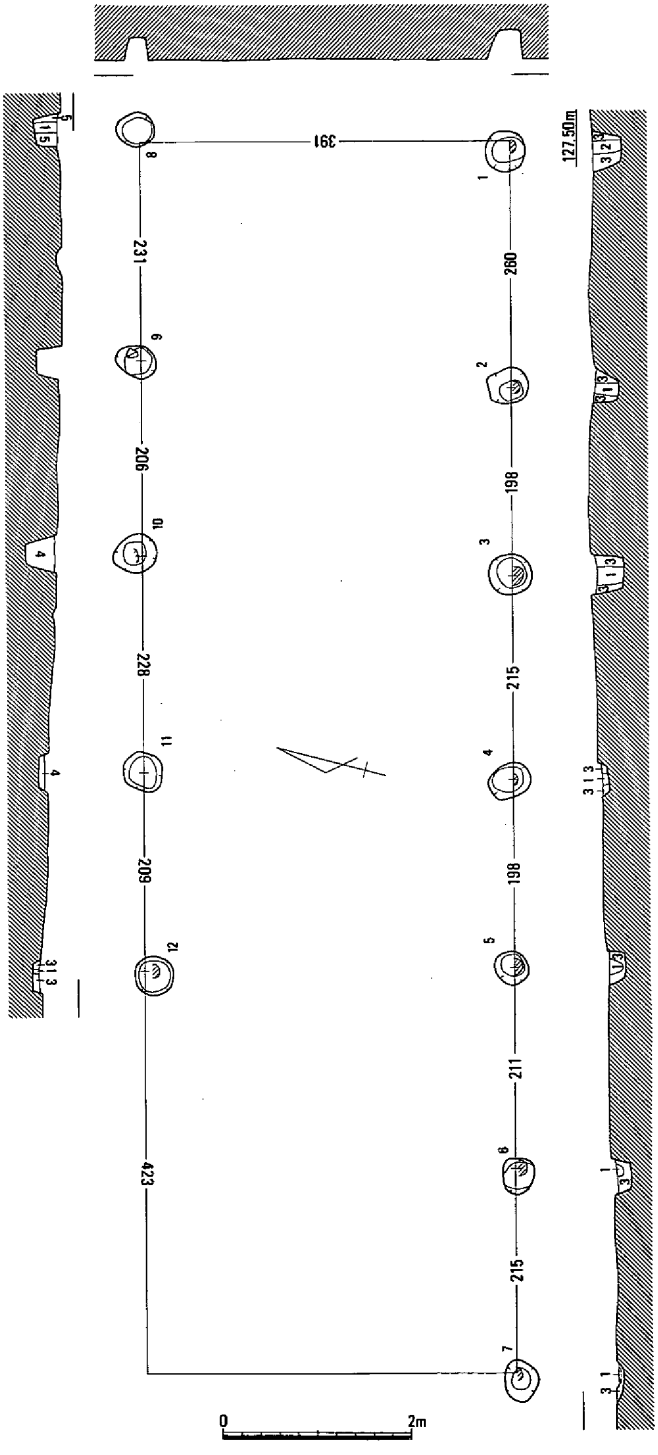
大田茶屋遺跡西地区の北側12Ｂ区において検出された。いずれも黒色土で埋没した径40～60cmの柱穴から構成され、南北２間×東西３間の規模を測った。柱穴は、四隅の柱穴が途中の柱穴より規模・深さにおいて勝っていた。時期は埋積土の状況から古代末の範疇で考えて差し支えなかろう。（島崎）

建物71（No131）（第290図、図版９）

17,18Ｊ,Ｋ区に位置する大形の掘立柱建物である。規模は６×１間で、桁行全長1297cm、梁間全長391cm、床面積50.7㎡を測る。棟の方向はＥ－15°－Ｎである。桁行の柱間は198cmから260cmまでと一定せず、両桁の対応関係も認められない。（岡本寛）

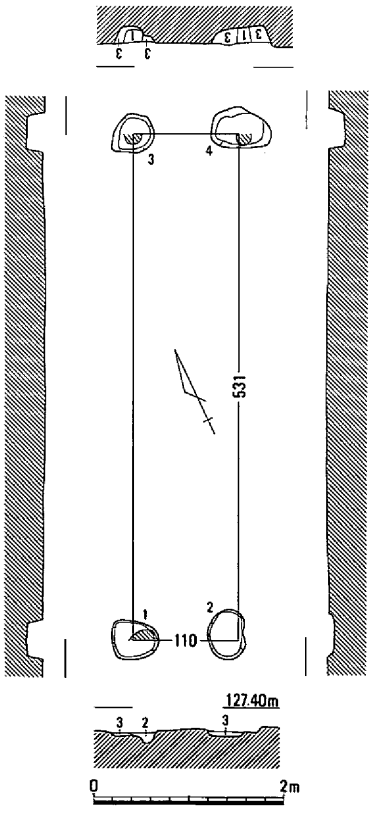
建物73（No149）（第291図）

17Ｌ区で検出された。１×１間の細長い建物だが、桁行長が531cmとあまりにも長く、建物64のように中央に浅い柱穴があったものとみられる。梁間



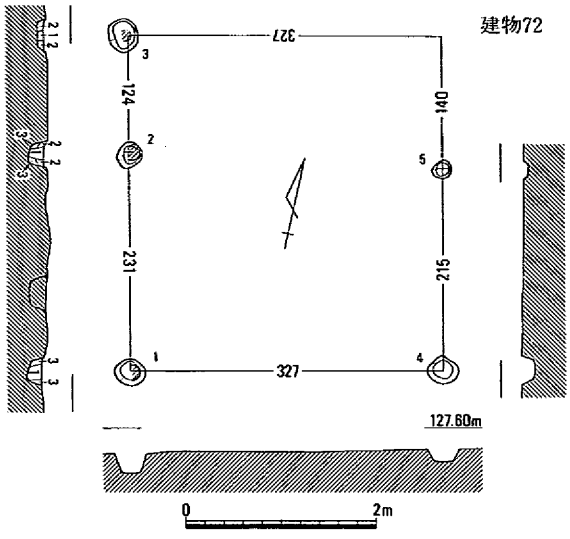
1．褐灰色粘質土
2．黄灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘性砂質土
4．褐灰色粘質土斑褐灰色粘性砂質土
5．明黄茶褐色粘質土斑褐灰色粘質土（礫含）

第290図　建物71（1/80）

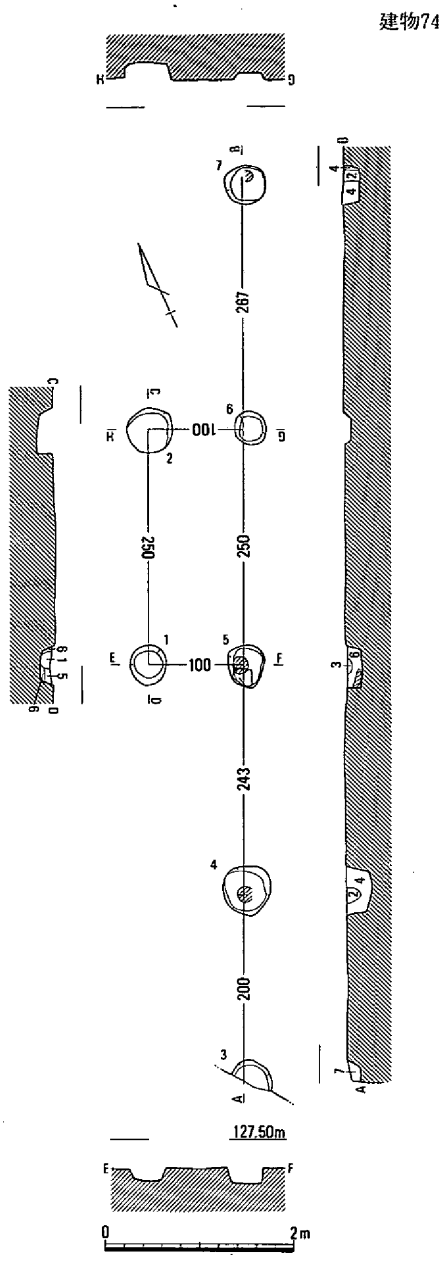


1．褐灰色粘質土
2．黄茶褐色粘質土斑灰褐色粘質土
3．黄茶褐色粘質土

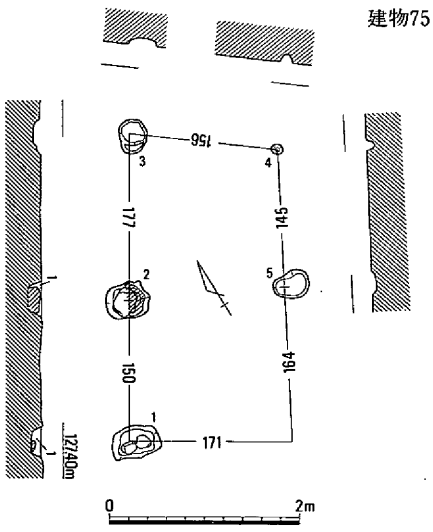
第291図　建物73（1/80）



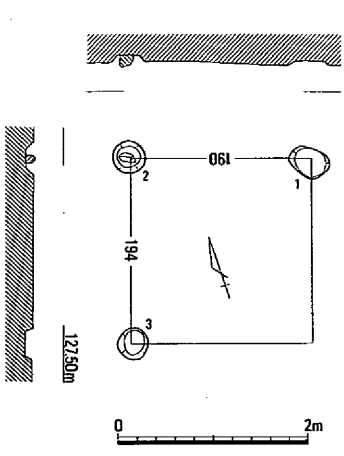
1．褐灰色粘質土
2．暗褐灰色粘質土
3．黄茶褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土



1．褐灰色粘質土斑明黄茶褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．黄茶褐色粘質土
5．明黄茶褐色粘質土斑褐灰色粘質土
6．黄褐色粘性微砂質土



1．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘質土

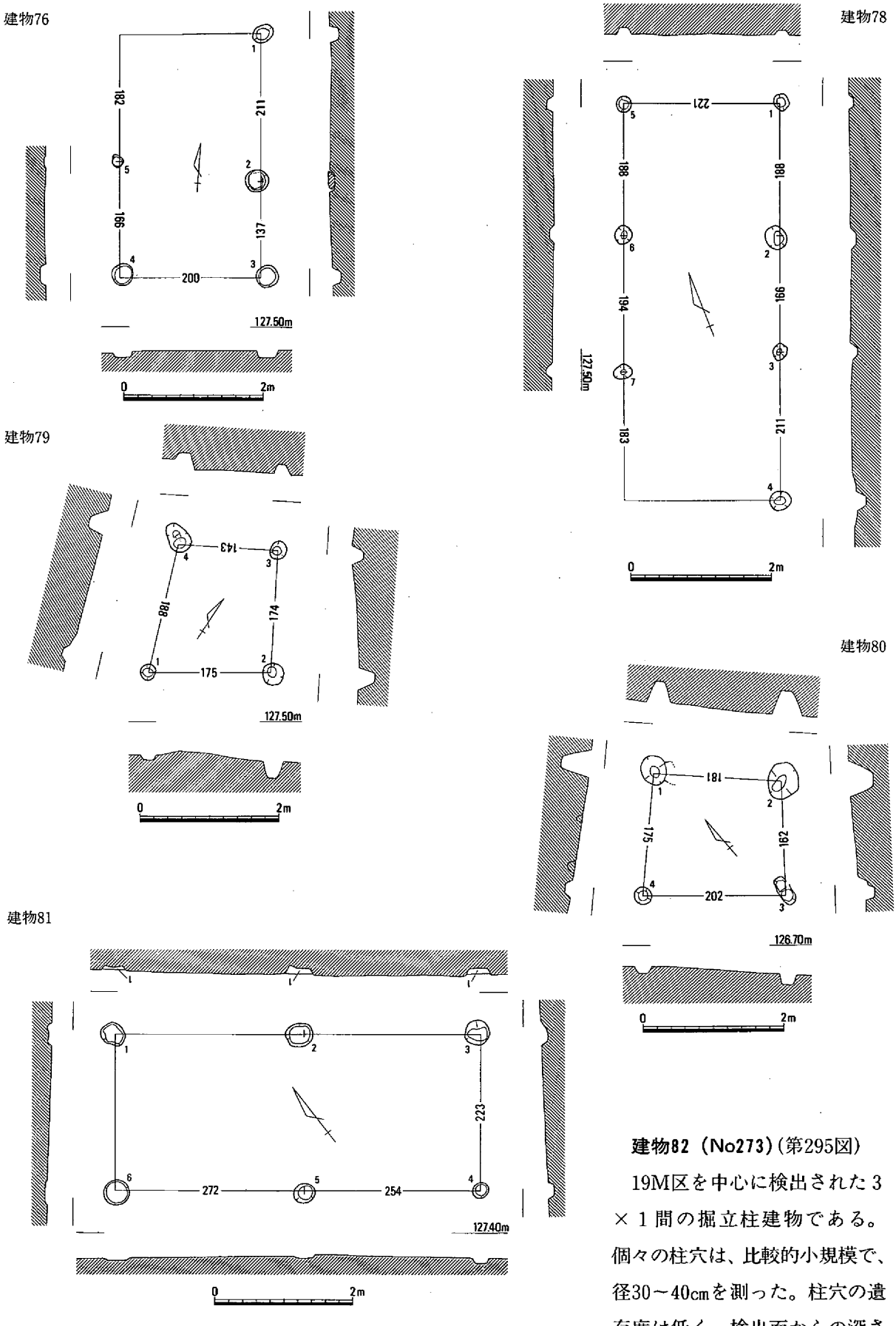


第292図　建物72・74・75・77(1/80)

長110cm、床面積5.8m²、棟方向N－25°－Eである。　(岡本寛)

建物74 (No141)(第292図)

17L，M区に位置し、建物73のすぐ西に位置している。４間の柱穴列が検出され、北から二つ目と三つ目の柱穴に対応して西側に柱穴が１基ずつ、100cmの柱間で設けられていた。柱穴列の方向はN－24.5°－Eを測り、柱間は一定していなかった。１×１間の張り出し部については、門のような施設ではなかったかと考える。(岡本寛)

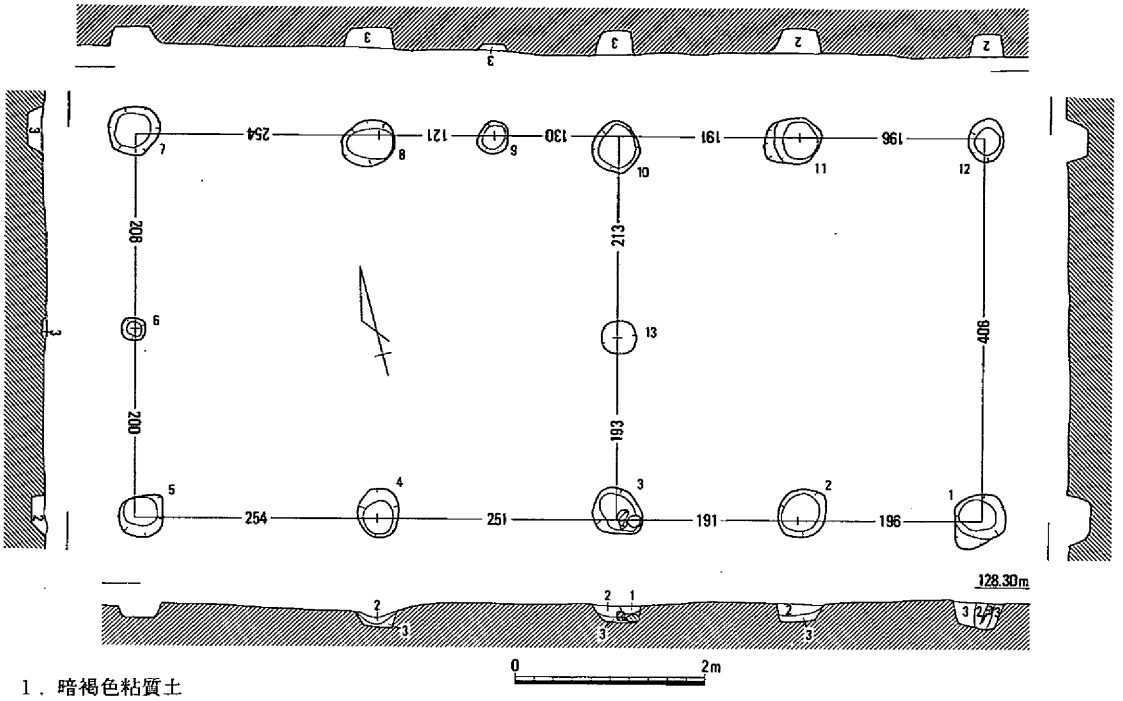


1．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土

第293図　建物76・78・79・80・81(1/80)

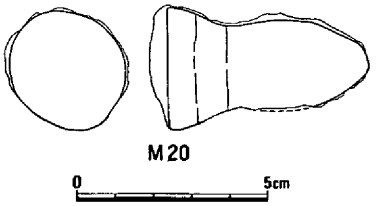
建物82（No273）(第295図)

19M区を中心に検出された３×１間の掘立柱建物である。個々の柱穴は、比較的小規模で、径30～40cmを測った。柱穴の遺存度は低く、検出面からの深さ５～20cm程度であった。



1．暗褐色粘質土
2．黄色土斑暗灰褐色粘質土
3．黄色土斑灰褐色土

第294図　建物83(1/80)・出土遺物(1/2)



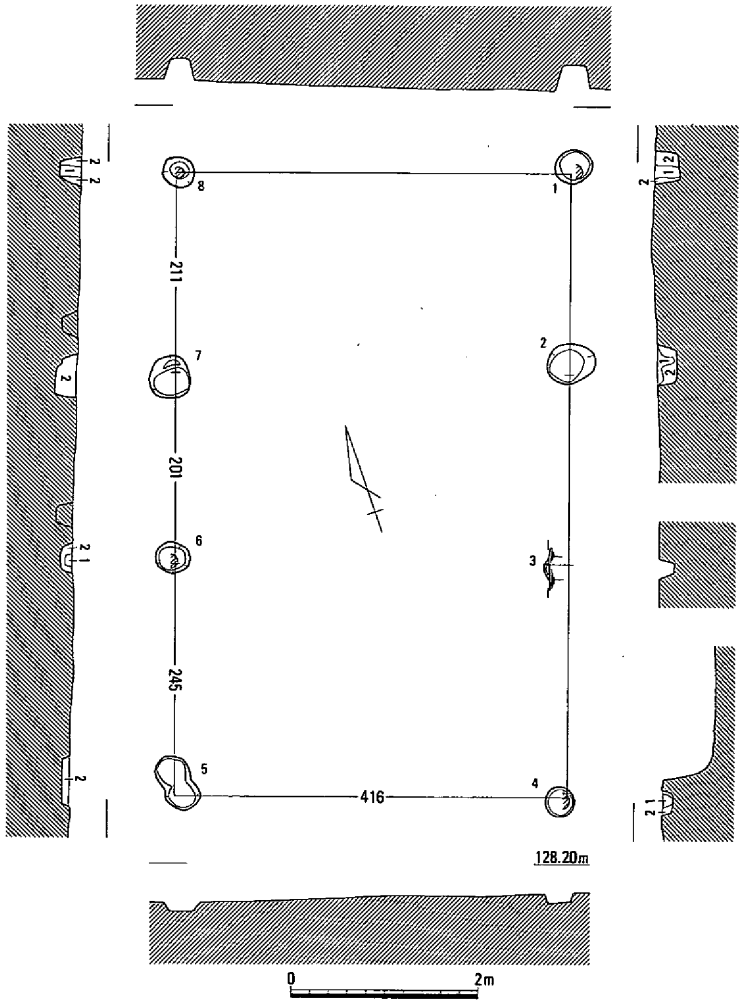
時期は、土器がないことで明確ではないが、勝間田焼の甕を出土した建物86との関係からおそらく同時期の古代末頃と考えて差し支えないと考える。　　(島崎)

建物83（No217）(第294図)

建物82の北東約10mの地点において建物82の主軸に直交した桁方向を見せる４×２間の掘立柱建物である。建物中央には束柱と考えられる径40cmの柱穴が１本のみ確認された。

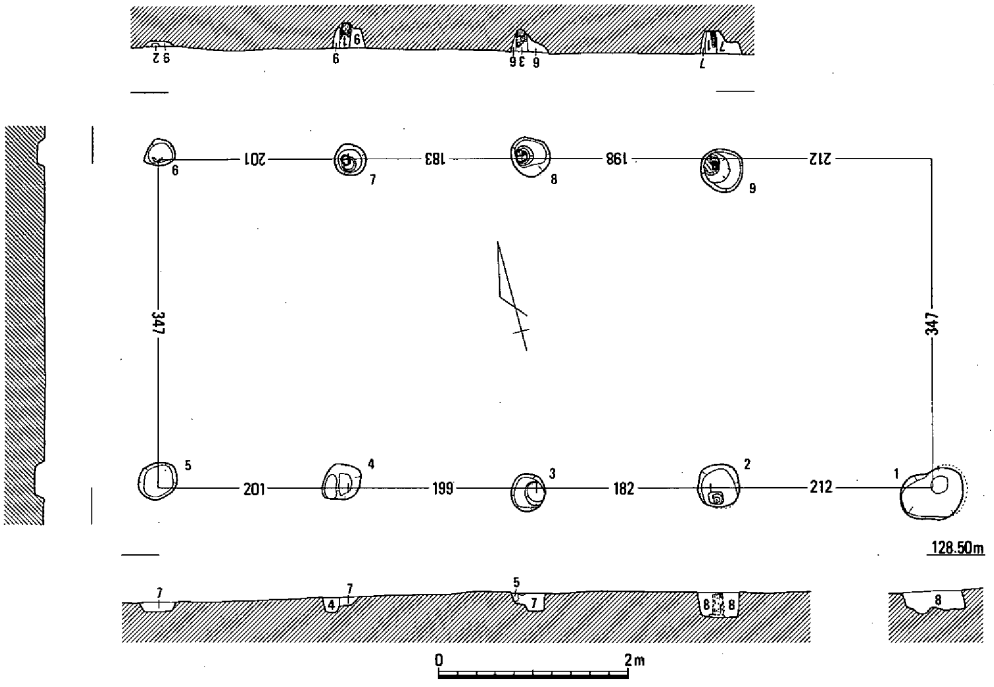
出土遺物には、鍛冶道具の鏨が１点あり、注目された。

時期は、建物82と同じく古代末と考えてよい。　　(島崎)



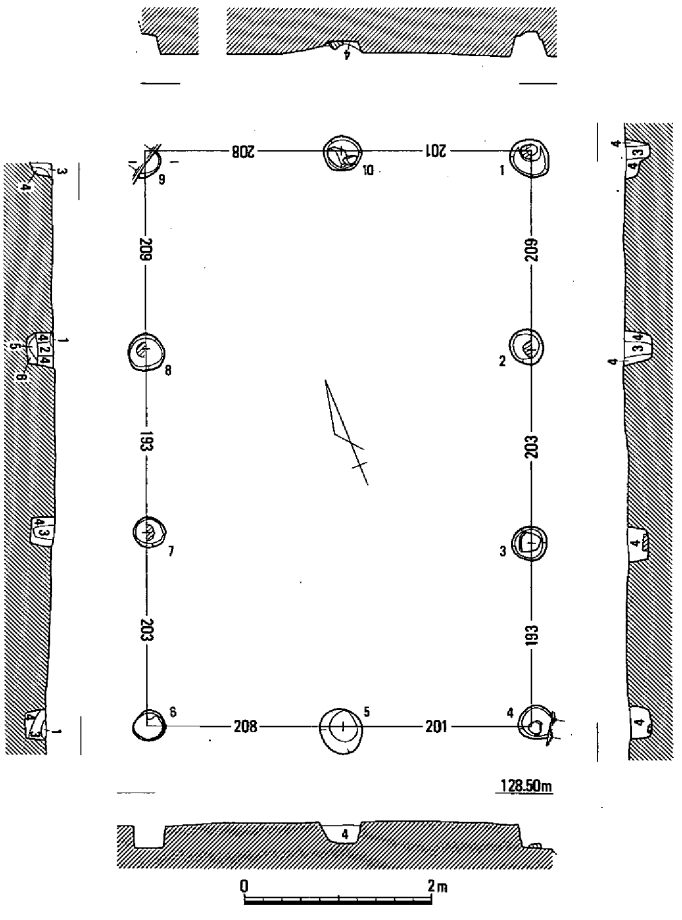
1．灰褐色粘質土　　2．灰褐色土斑黄褐色粘質土

第295図　建物82(1/80)



１．灰色土　　４．暗灰色土　　７．灰茶色土
２．黒灰色粘土　　５．黄色土塊　　８．黄色土斑黒灰色土
３．淡灰色土　　６．灰色土　　９．暗灰色土

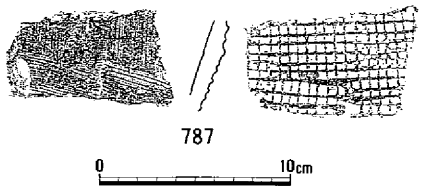
第296図　建物84(1/80)



建物84（No269）(第296図)

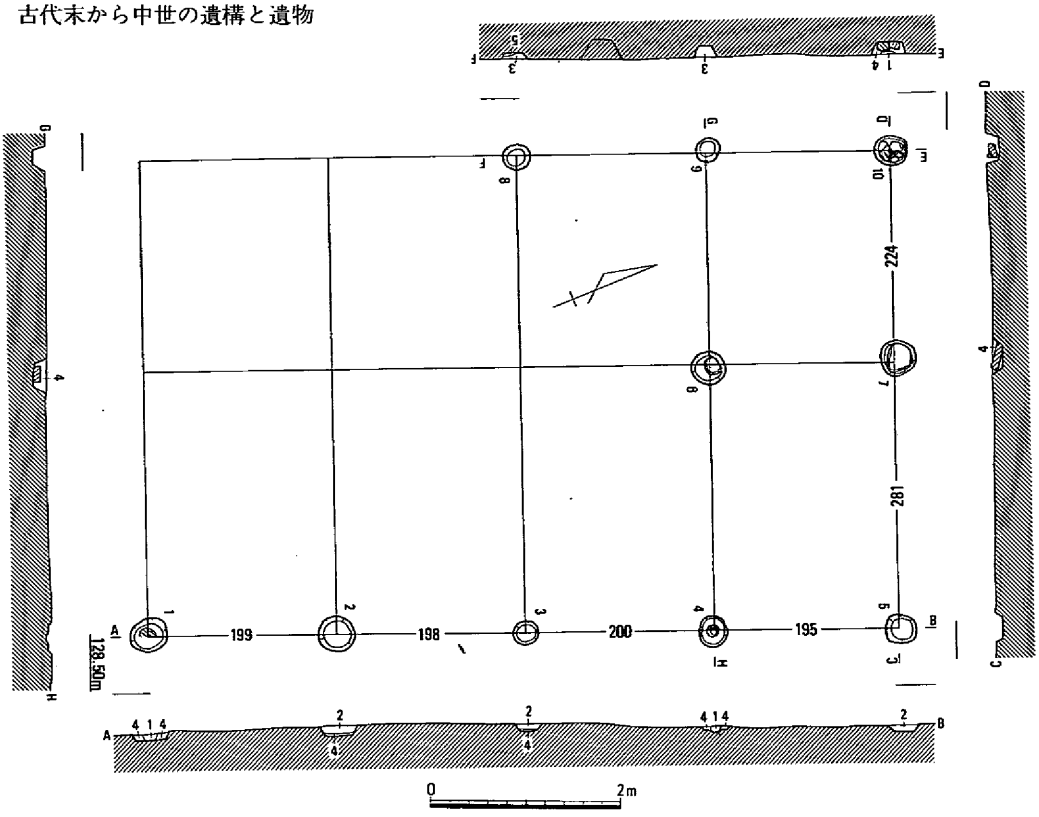
建物82の東約14mに所在し、その主軸に直交した梁行きを見せる。北東側柱穴の存在は不明瞭ながら４×１間を想定された。柱間は、桁行きがおよそ350cm、梁行き各間が約200cm前後を測った。

出土遺物はまったく見られなかったが、柱穴埋積土等の状況から古代末～中世に位置されよう。　　（島崎）



１．白黄褐色粘土
２．白黄褐色粘土斑褐灰色粘質土
３．白黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
４．白黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
５．黄褐色粘質土
６．黒褐色粘質土

第297図　建物86(1/80)・出土遺物(1/4)



1．灰色土
2．黄色粘土斑暗灰色土
3．黒灰色土
4．黄灰色粘土
5．黄色土

第298図　建物85(1/80)

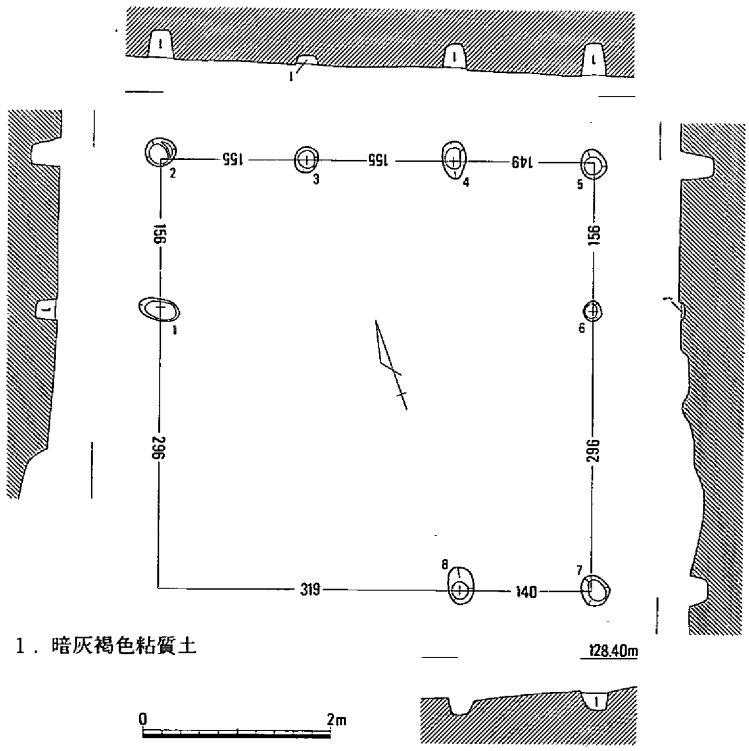
建物85（No271）（第298図）

建物82の東４ｍに所在し、この主軸にほぼ平行する。東西２間×南北４間の規模を見せるものの、後世の削平によって特に南側の柱穴の遺存状況は悪い。しかし、１本の束柱の遺存が見られることから本来総柱建物であったことが知られる。　（島崎）

建物87（No253）（第299図）

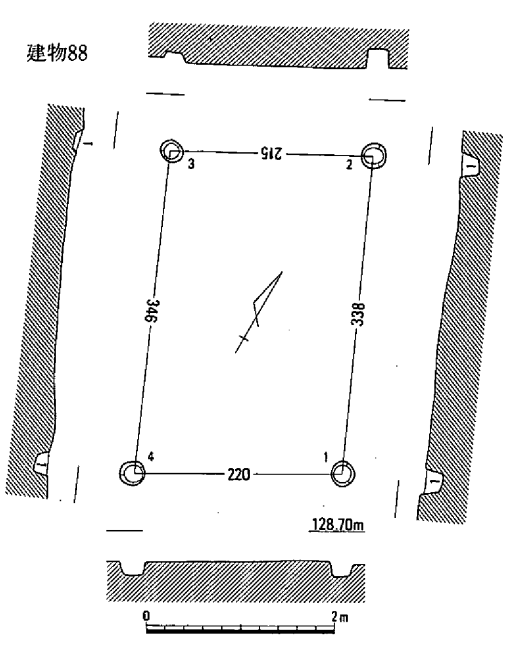
24H区において検出された。ただし、後世の暗渠排水と溝によって極めて遺存状況は悪く、特に西側隅については不明である。また、現状で３×３間の規格が想定されるが、性格についての詳細は明言できない。

時期は、柱穴埋積土の状況から古代末～中世と考える。（島崎）

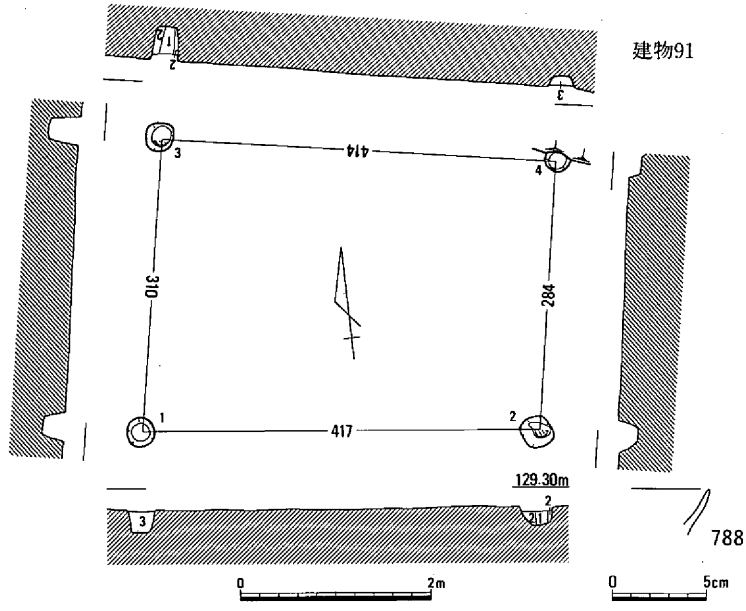


1．暗灰褐色粘質土

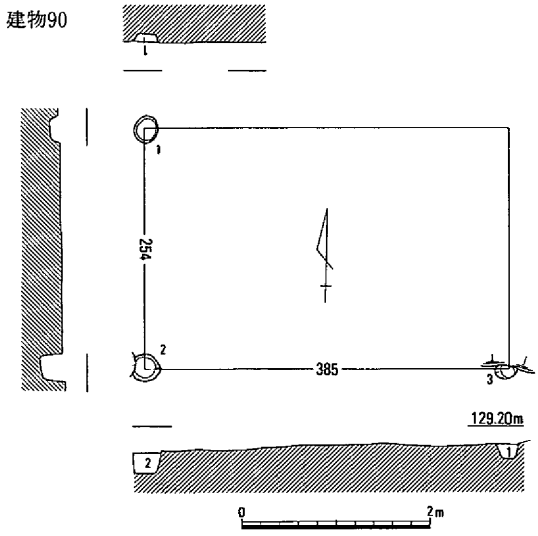
第299図　建物87(1/80)



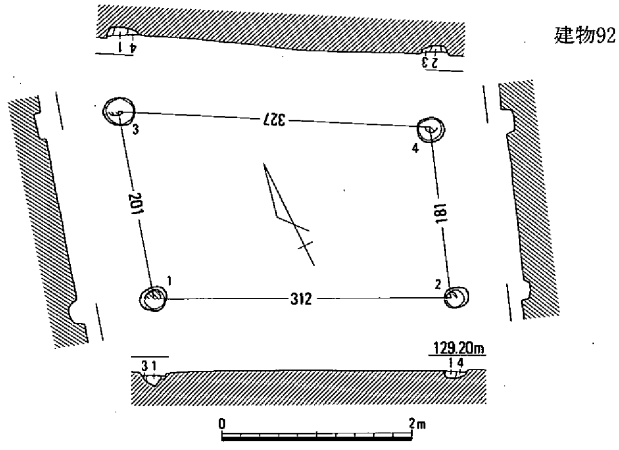
１．黄色土斑黒灰色粘質土



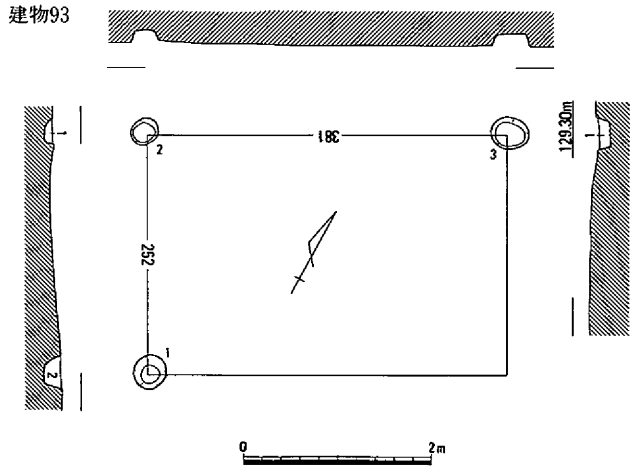
１．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
２．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土　　３．白黄色粘質土斑褐灰色粘質土



１．白黄色粘土斑褐灰色粘質土
２．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土



１．灰褐色粘質土　　３．白黄色粘土斑褐灰色粘質土
２．暗灰褐色粘質土　　４．白黄色粘土斑淡褐色粘質土



１．灰褐色粘質土　　２．白黄色粘土斑褐灰色粘質土

第300図　建物88・90・91・92・93(1/80)・建物91出土遺物(1/4)

建物89（No279）(第301図)

24Ｊ－Ｋ区にかけて検出された。規格は、６×１間と比較的長い建物構造となっていた。一方、柱穴規模は検出面で径30cmを前後する比較的小規模なものであった。

時期は、弥生時代の可能性を残しながらも、一応古代末から中世に位置づける。（島崎）

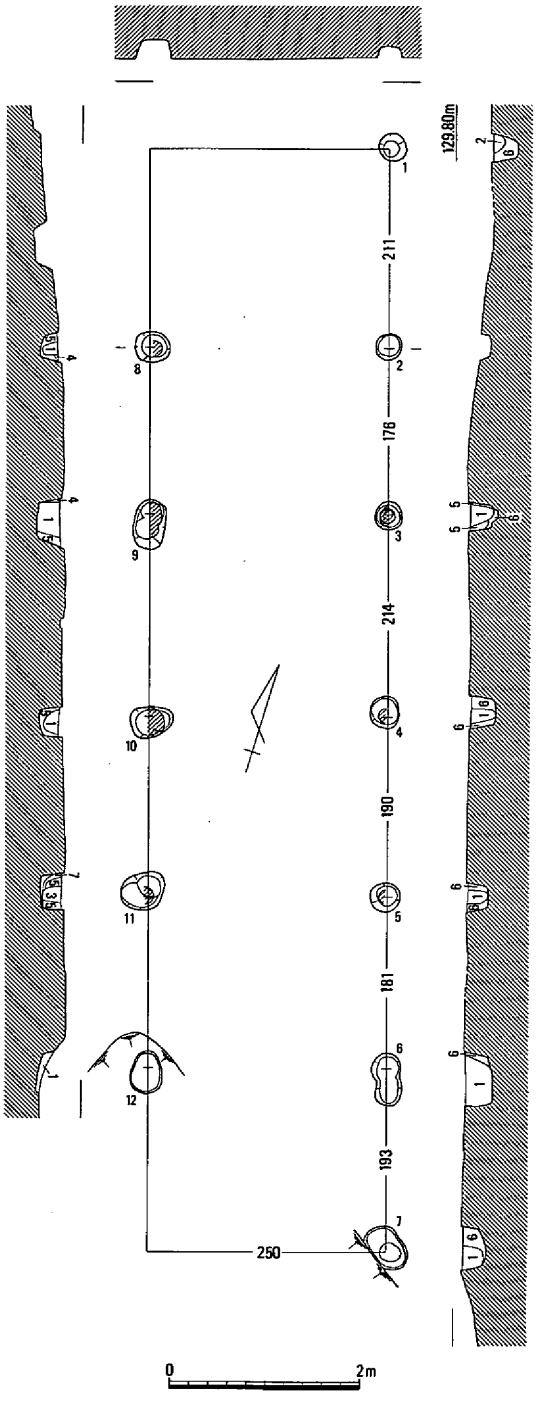
建物91（No325）(第300図)

26,27Ｋ区に位置する。規格は、１×１間であるが、柱間距離は梁間310cm、桁行417cmと長い。時期は、柱穴内埋積土の状況から古代末から中世と考える。（島崎）

建物95（No316）（第304図）

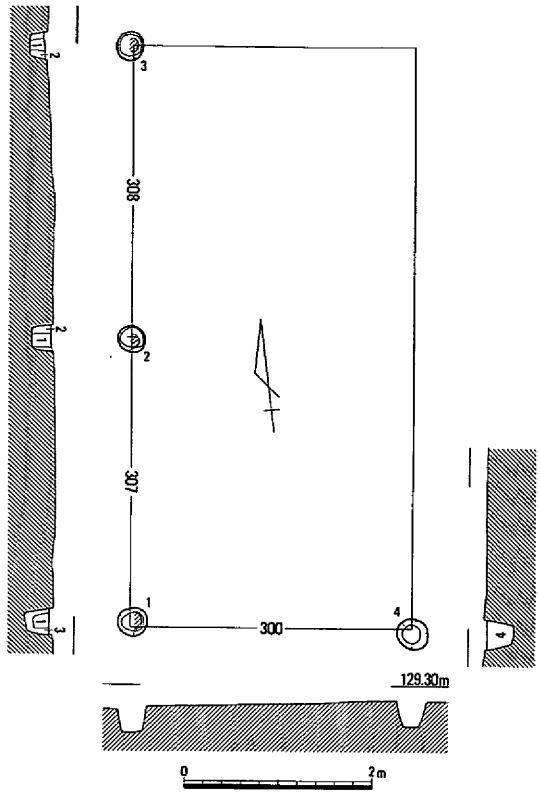
27－28Ｊ区にかけて検出された２×２間の掘立柱建物である。柱穴規模は、30～40cmを測る。

時期は、柱穴内埋積土の状況から古代末～中世に位置づけられよう。　（島崎）



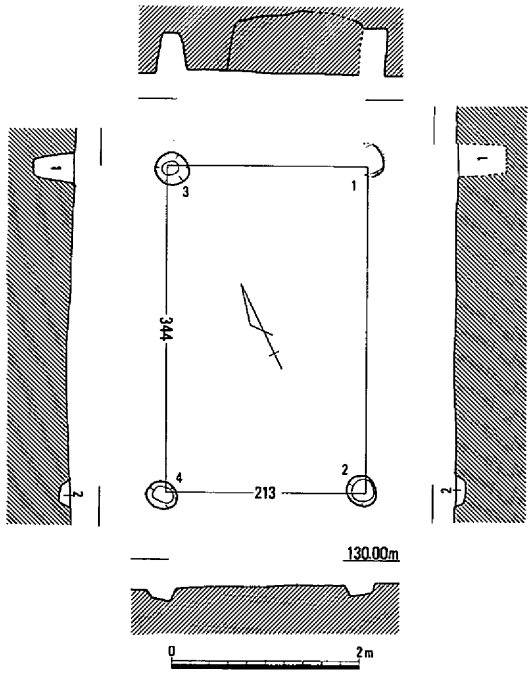
1．灰黒色土（黒ボク）
2．暗灰色土
3．黒褐色土
4．黄色土
5．黄色土斑灰黒色土
6．黄色土斑暗灰黄色土
7．暗灰色土

第301図　建物89（1/80）



1．暗灰褐色粘質土
2．白黄色粘土斑灰褐色粘質土
3．白黄色粘土斑暗灰褐色粘質土
4．白黄色粘土斑褐灰色粘質土

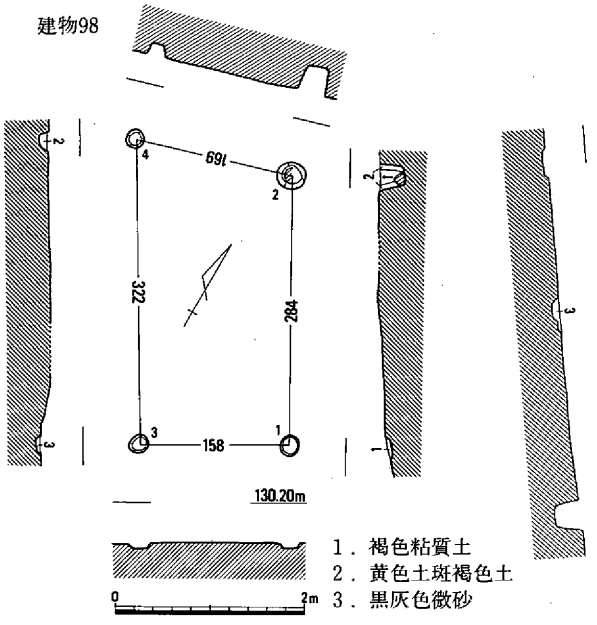
第302図　建物94（1/80）



1．白黄色粘土斑暗灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土

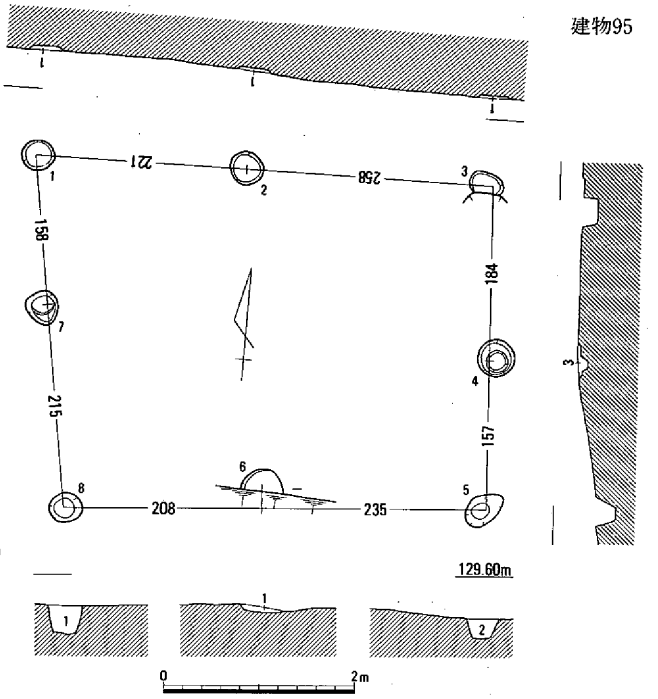
第303図　建物96（1/80）

建物98



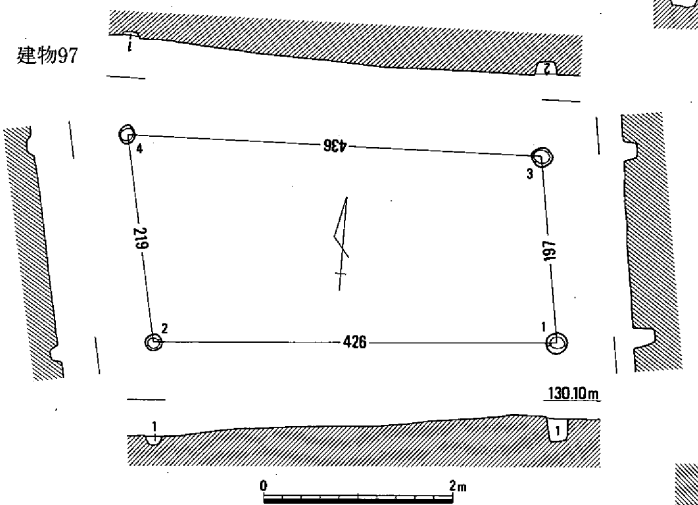
1．褐色粘質土
2．黄色土斑褐色土
3．黒灰色微砂

建物95



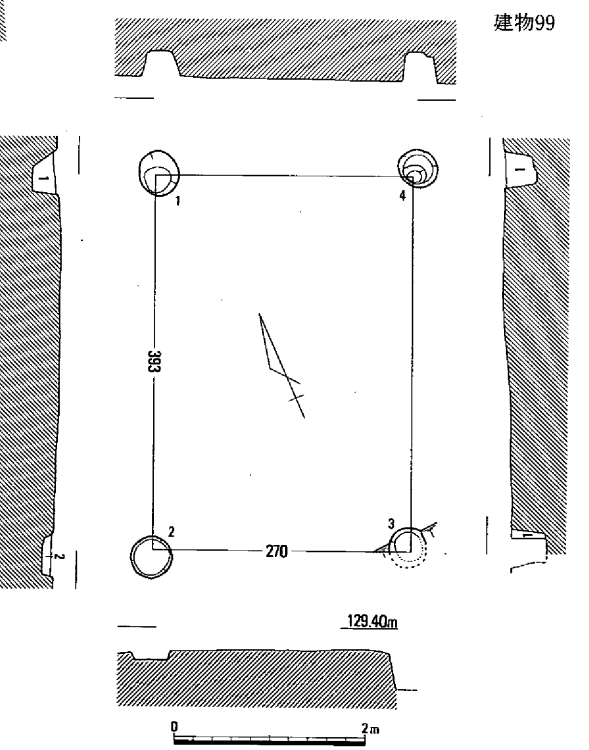
1．暗褐色粘質微砂
2．暗灰褐色粘質微砂
3．褐色粘質微砂斑暗褐色粘質微砂

建物97



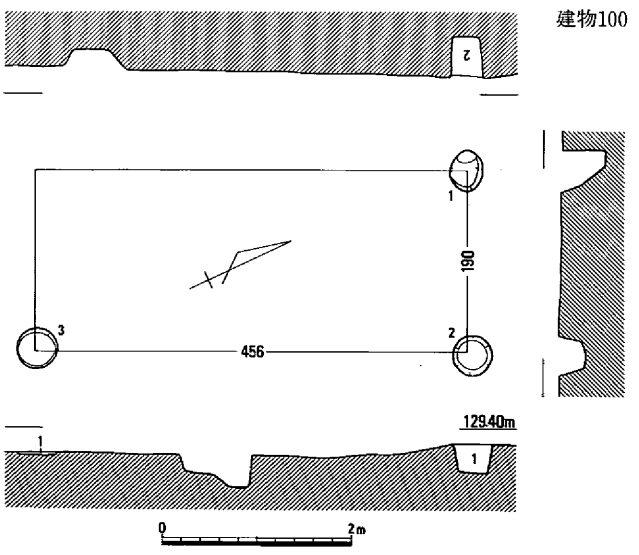
1．白黄色粘土斑灰褐色粘質土　　2．褐灰色粘質土

建物99



1．黄色土斑褐色土　　2．黄色土斑黒灰色土

建物100



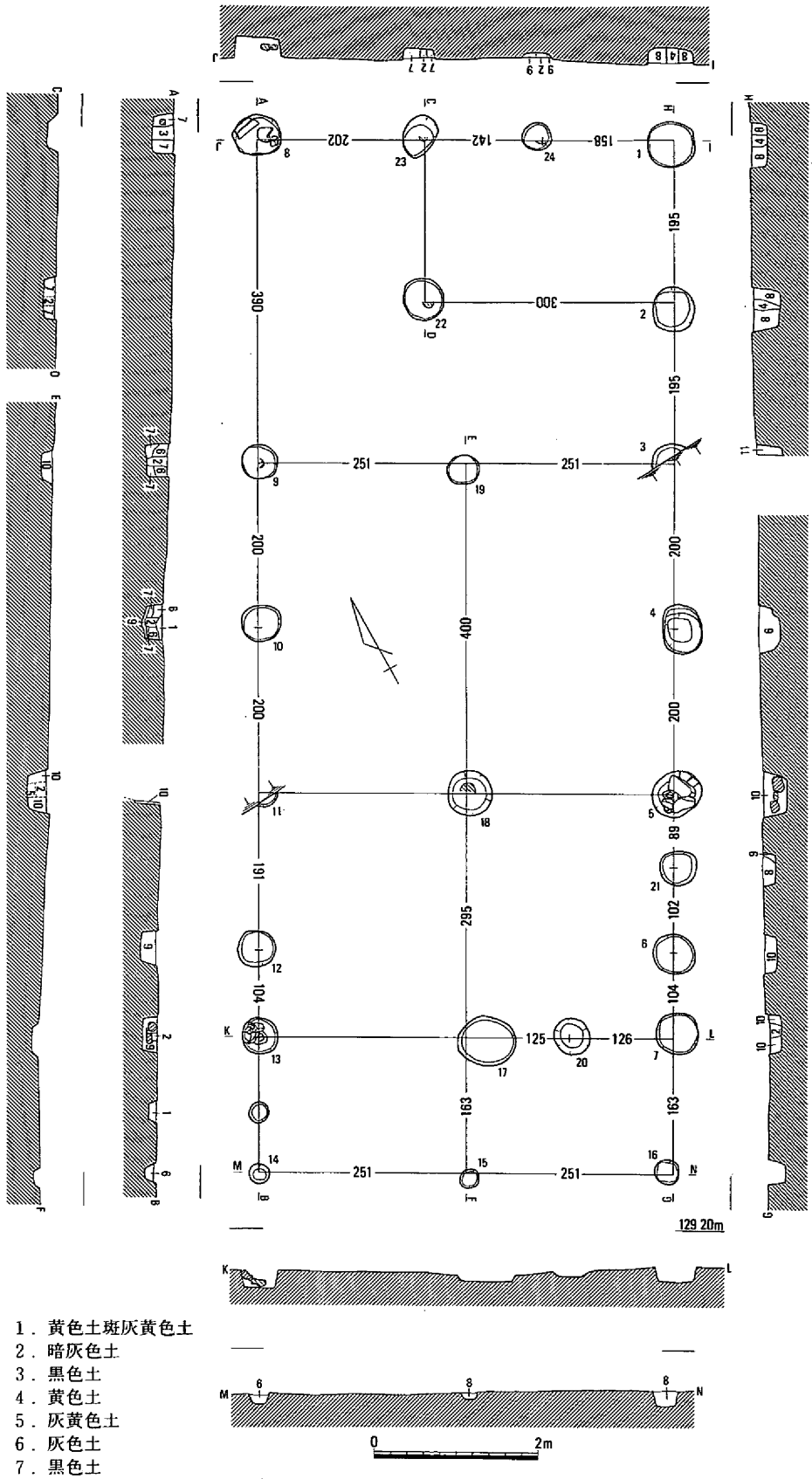
1．黄色土斑褐色土
2．黄色土斑黒灰色土

第304図　建物95・97・98・99・100(1/80)

建物101（No334）（第305図）

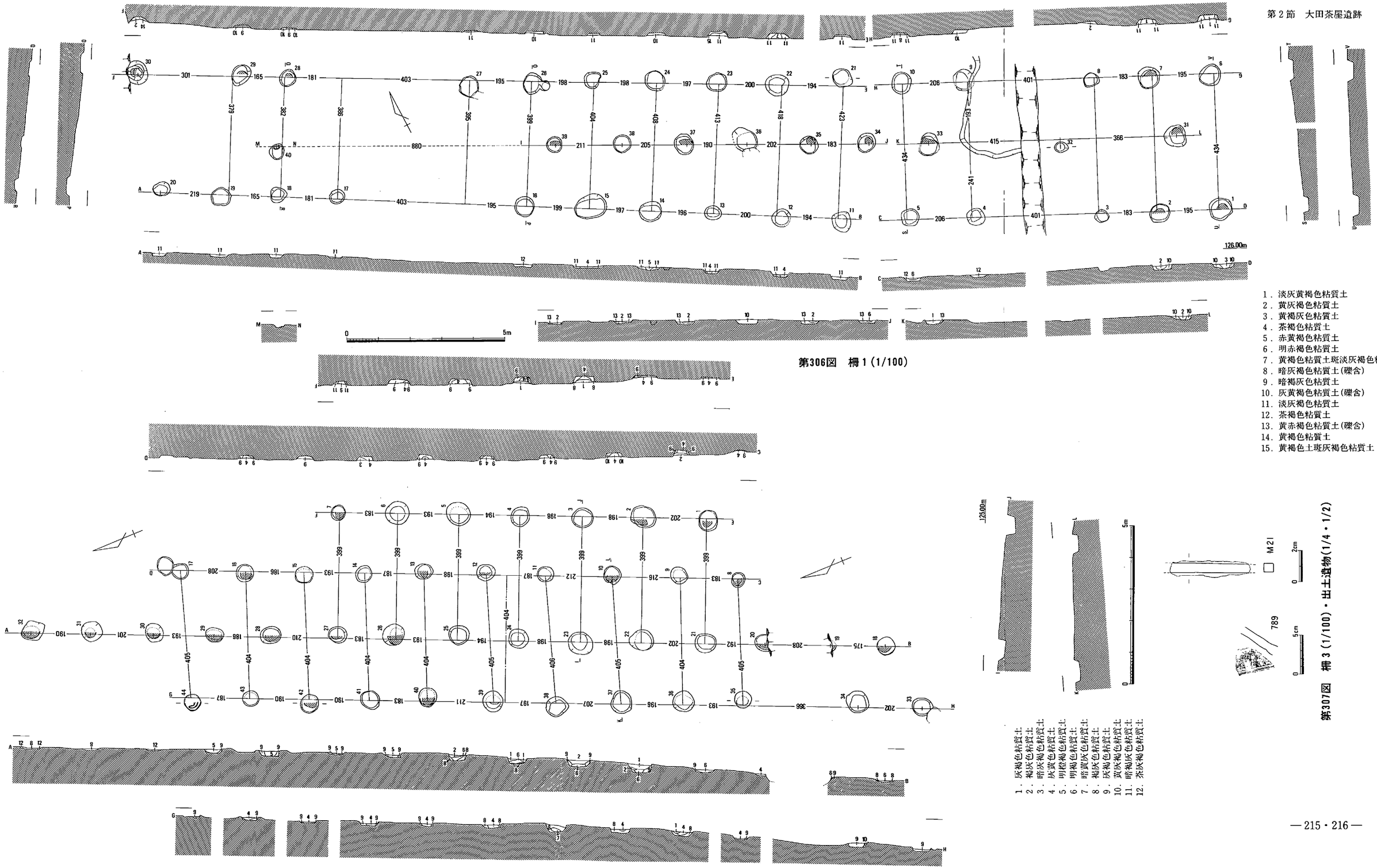
25,26O，P区を中心に検出された。柱穴の並びが直線的で、しかもこれに直交してさらに直線的な柱穴列が認められた。柱穴は、直径20cm前後から大きいもので60cmに達するものまで各種あるが、いずれの並びも直線・直交関係の中に一体的にその存在を窺わせる。なかには柱間間隔で短いもので104cm、長いもので390cmに達するものなど不規則で判然としない部分がある。しかし、周辺に近接した位置でこれら柱穴以外に柱穴が存在しないことからも１棟の掘立柱建物としての妥当性がより深く認識された。

時期は、出土遺物がまったく確認出来なかったことから明言は出来ないが、建物棟方向が大田茶屋遺跡周辺部で検出されている長大な柵列と深く関係することや、建物102との位置などから古代末から中世に比定できよう。（島崎）



1．黄色土斑灰黄色土
2．暗灰色土
3．黒色土
4．黄色土
5．灰黄色土
6．灰色土
7．黒色土

第305図　建物101(1/80)

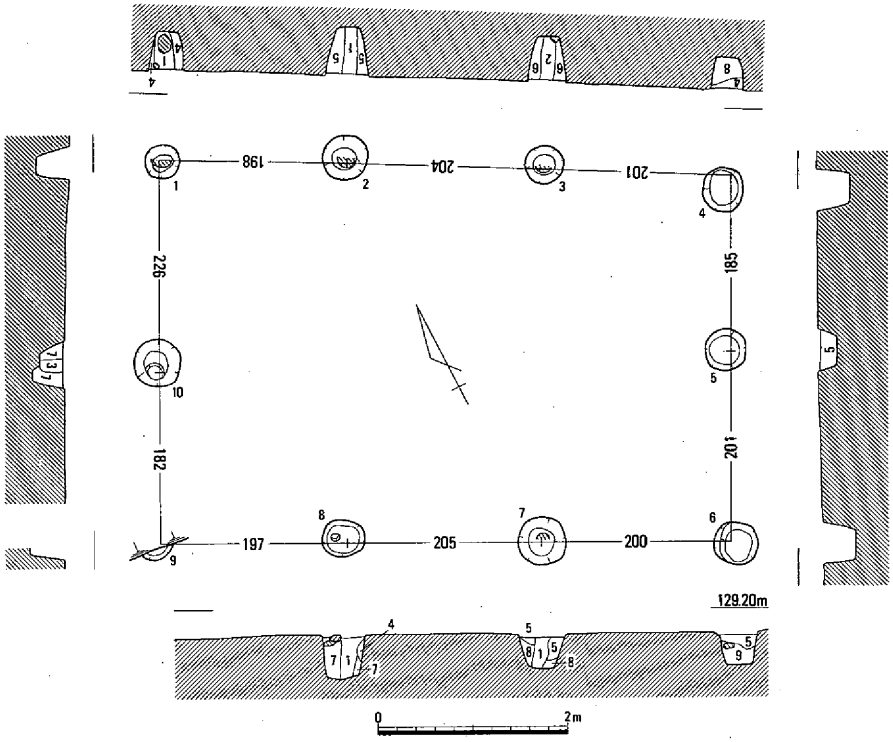


第306図　柵１(1/100)

1．淡灰黄褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土
3．黄褐灰色粘質土
4．茶褐色粘質土
5．赤黄褐色粘質土
6．明赤褐色粘質土
7．黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
8．暗灰褐色粘質土(礫含)
9．暗褐灰色粘質土
10．灰黄褐色粘質土(礫含)
11．淡灰褐色粘質土
12．茶褐色粘質土
13．黄赤褐色粘質土(礫含)
14．黄褐色粘質土
15．黄褐色土斑灰褐色粘質土

1．灰褐色粘質土
2．褐灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．灰茶色粘質土
5．明橙褐色粘質土
6．明褐色粘質土
7．暗黄灰色粘質土
8．褐灰色粘質土
9．灰褐色粘質土
10．黄灰褐色粘質土
11．暗褐灰色粘質土
12．茶灰褐色粘質土

第307図　柵３(1/100)・出土遺物(1/4・1/2)



第308図　建物102(1/80)・出土遺物(1/4)

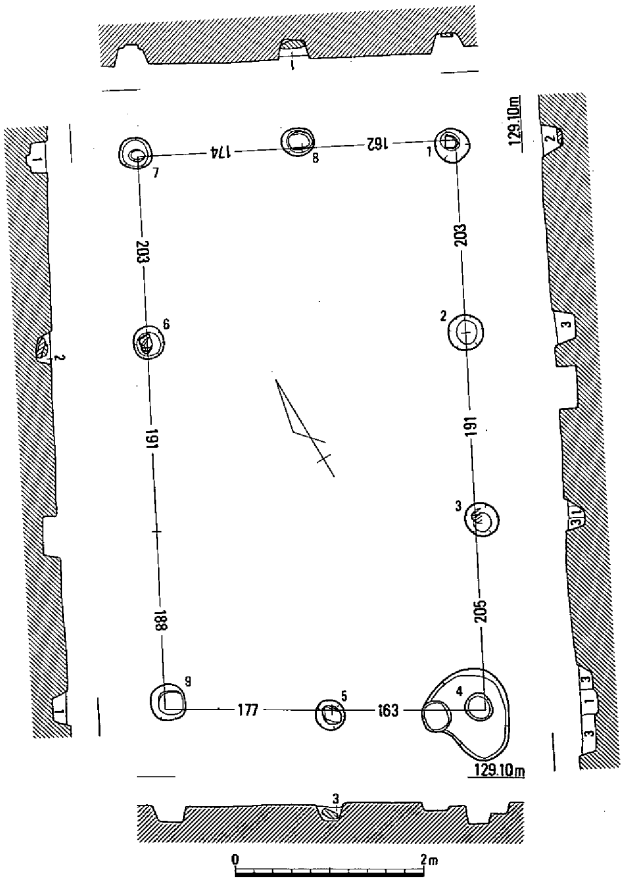
1．灰色土
2．暗灰褐色粘質土
3．黄色砂礫
4．黄色土斑灰色土
5．黄色土斑暗灰黄色土
6．灰色砂礫土
7．黄色土斑暗灰茶色土
8．黒色土・黄色土互層
9．灰色土斑黄色土

建物102(No332)

(第308図)

27Q杭を中心とした地点に検出された３×２間の掘立柱建物である。建物101との関係からいえばちょうど主軸が東西方向と南北方向の直交関係にあり、さらに同じ理由で後述の柵６とも深く関係していたようで、同時期に構築された可能性が高い。ただし、柱穴の遺存状況は、例えば柵６との比較において建物102は検出面からの深さ30～50cmと柵６の10～20cmに比較して格段に深い。

時期は、出土した勝間田焼の観察から、古代末～中世と考える。　(島崎)



1．黄色土斑褐色粘質土　　3．黄色土斑褐色土(礫多量)
2．黄色土斑褐色粘質微砂

第309図　建物103(1/80)

建物103 (No333)(第309図)

建物102の西側約２ｍにおいて確認された梁間２間×桁行３間の掘立柱建物である。規模は、340～346cm×582～599cmを測り、先述の建物が386～408cm×601～602cmであったのに比較して梁間が若干短いもののほぼ同規格である。また建物配置も建物102の主軸に直交しており、柱穴の規模の相違はあるものの柱穴内埋積土の状況も基本的にはほとんど同様な土質・色調の土砂によって埋没していた。このことから、この建物103は建物102と共に

ほぼ同時期に建てられていたと考える。時期は、遺物の出土がないことから断定はできないが、建物102との関係から古代末～中世への位置づけが可能であろう。（島崎）

柵１（No6・7・19・27・28・30・31・52）（第306図、図版８）

４区の南西端近く、３K区から６M区へ続く柱穴列が検出された。第３次調査時では重複関係にある大形建物と考え、８×１間の中心建物と、２×１間の東西２棟の建物が、左右対称の形で配置されていると理解していた。しかし、第４次調査の結果、３列の柱穴列が同時で、一つの構造物のものであることが判明した。他の柵の状態から考えると、もう１、２列あったものと推定され、溝10の存在から、それらは斜面のより下方に位置していたものと思われる。柱穴は円形ないし楕円形で、長径が47～100cmあり、70cm前後が多い。柱間は165～219cmで、200cm程度が多い。北列と南列の柱穴の間に対応関係が認められ、その距離は379～434cmであった。各柱穴列は柱穴５と11、10と21、33と34の間でわずかに屈折するが、これは柵４でもみられるように、地形に合わせるためと思われる。南列の方向は東部がE－26°－S、西部がE－30°－Sを測る。（岡本寛）

柵２（No1・2・5・9・10）（第310図、図版８）

４区と５区の南東端、丘陵頂部から緩斜面を少し降ったところに位置する。この地点は奈良時代には建物群が所在した場所で、第18図から判断すると、その造成面をいくらか利用して、柵にあわせて新しく平坦面を削り出している可能性がある。柱穴列は５列あり、柵６の例から考えてこれ以外の柱穴列はなかったものと思われる。柱穴列は整然とすべて平行に並び、その方向はN－23.5°－Eを測る。柱穴は不整な円形のものが多く、長径は60～90cmのものがほとんどであった。柱間は148～226cmと一定せず、変化が大きいが、平均すれば200cm前後となる。柱穴の配置をみると、東から１列目・３列目・５列目の間で柱穴の対応関係が認められ、柱穴14・45・74などは直線上に並んでいる。第５列の柱穴の底面は第３列のそれより60～100cm以上高い。第１列と第３列の間隔は407cm、第３列と第５列の間隔は399cmを測り、各列の柱間の約２倍である。第２列と第４列の間隔は404cmである。各列の南端はそろわないが、これについては柵６のように柵１との接続の在り方を示すものとして考えたい。

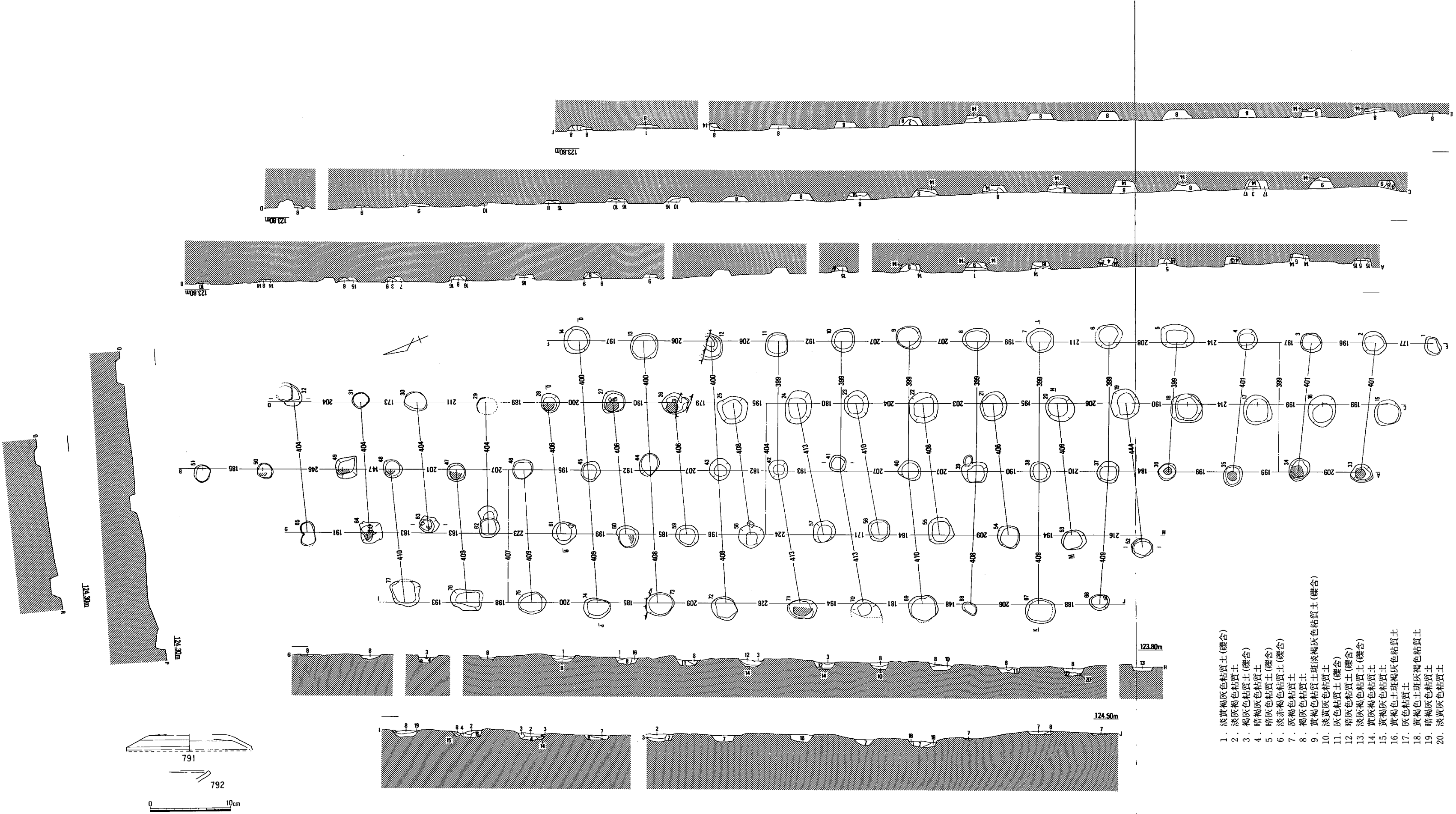
柱穴63から遺物が出土した。**791**は須恵器蓋、**792**は土師器鍋の口縁部である。（岡本寛）

柵３（No56・57・58・63）（第307図、図版８）

５区の南東端部、10I区から11G区にかけて検出された。図版８でわかるように、各柱穴列は正しく柵２の柱穴列の延長線上に位置していた。柱穴の遺存状況は悪く、底面が高い位置にあった柵２の第５列に対応する列は破壊されたものと思われる。列方向や柱穴の規模、柱間は柵２と等しい。第２列と第４列の柱穴はきれいな対応関係を示し、対応する柱穴を結んだ線は柱穴列と直交する。**789**は備前焼のすり鉢で、柱穴36から出土した。混入品であろうか。鉄釘は柱穴６出土である。（岡本寛）

柵４（No153・154）（第311図）

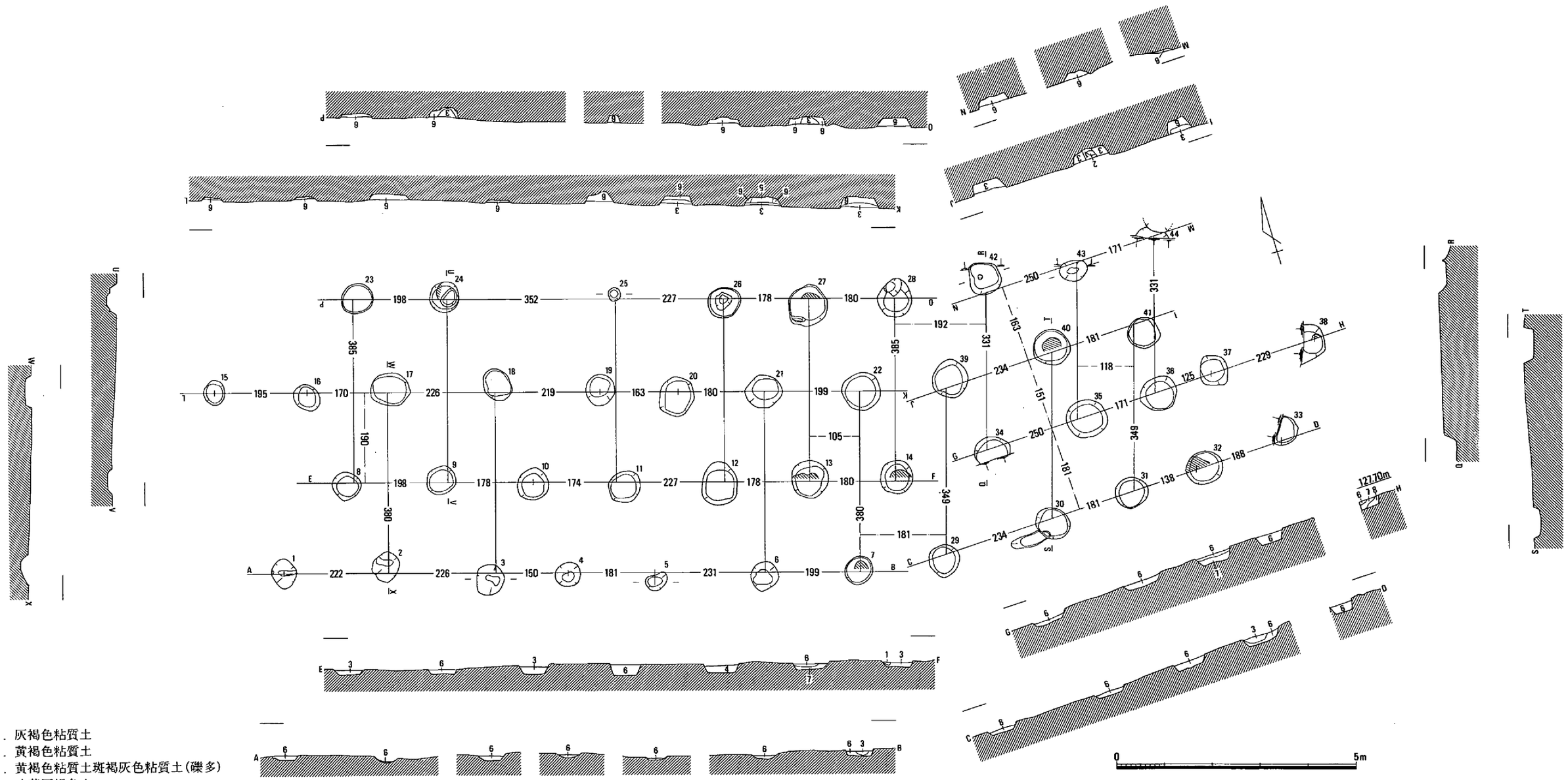
17－19P，Q区において検出された幅500～580cm、長さ23mの規模を誇る柵である。柱穴は、平面径50～80cmと大規模で、柱穴間距離170～230cmと不揃いながら全体的には調和のとれた柱間構成を見せる。柱穴のほとんどは上面が後世の削平によって欠損しており、ここで検出された柱穴で最も深いものでもおよそ20cmと浅いものであった。比較的深く掘られていたものが検出できたのであって、既に欠損している柱穴の存在も当然考えられる。これら柱穴群は位置関係において全体的に一定の規則性を見せる。ただし、これは従来一般的に見られる掘立柱建物の柱穴の在り方、即ち個々の柱穴がそれぞれ直角位置に等間隔に存在するのとは異なり、柱穴列を構成する個々の柱穴に対して対応する複



1．淡黄褐灰色粘質土(礫合)
2．淡灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土(礫合)
4．暗褐灰色粘質土
5．暗灰色粘質土(礫合)
6．淡赤褐色粘質土(礫合)
7．灰褐色粘質土
8．褐灰色粘質土
9．黄褐色粘質土斑淡褐灰色粘質土(礫合)
10．淡黄灰色粘質土
11．灰色粘質土(礫合)
12．暗灰色粘質土(礫合)
13．淡灰褐色粘質土(礫合)
14．黄灰褐色粘質土
15．黄褐灰色粘質土
16．黄褐色土斑褐灰色粘質土
17．灰色粘質土
18．黄褐色土斑灰褐色粘質土
19．暗褐灰色粘質土
20．淡黄灰色粘質土

791
792
0　10cm

第310図　桐２(1/100)・出土遺物(1/4)



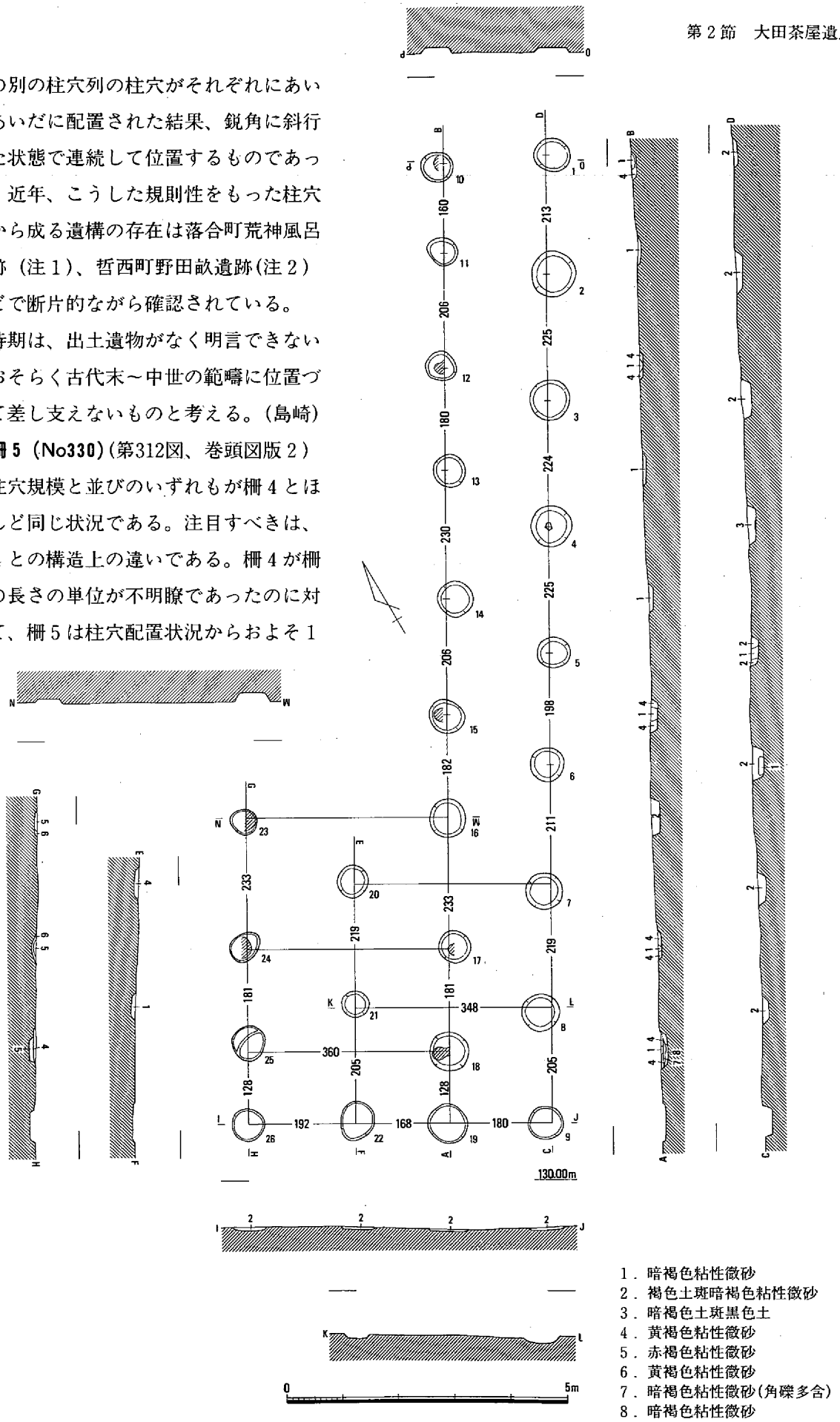
第311図　柵4(1/100)

数の別の柱穴列の柱穴がそれぞれにあいだあいだに配置された結果、鋭角に斜行した状態で連続して位置するものであった。近年、こうした規則性をもった柱穴群から成る遺構の存在は落合町荒神風呂遺跡（注１）、哲西町野田畝遺跡(注２)などで断片的ながら確認されている。

時期は、出土遺物がなく明言できないがおそらく古代末～中世の範疇に位置づけて差し支えないものと考える。(島崎)

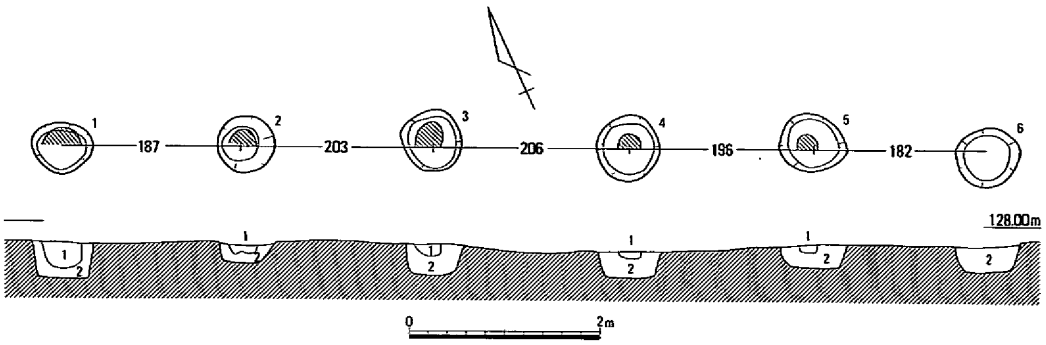
柵５（No330）(第312図、巻頭図版２)

柱穴規模と並びのいずれもが柵４とほとんど同じ状況である。注目すべきは、柵４との構造上の違いである。柵４が柵列の長さの単位が不明瞭であったのに対して、柵５は柱穴配置状況からおよそ１



1．暗褐色粘性微砂
2．褐色土斑暗褐色粘性微砂
3．暗褐色土斑黒色土
4．黄褐色粘性微砂
5．赤褐色粘性微砂
6．黄褐色粘性微砂
7．暗褐色粘性微砂(角礫多含)
8．暗褐色粘性微砂

第312図　柵５(1/100)



１．黒褐色土　　２．暗茶褐色土

第313図　柵７（1/80）

単位完結するとして差し支えないと考える。それは、南・北側の柱間３間あるいは１間が東・西側の柱穴列に対して直角にしかも直線になるように調整されていることから窺われる。調整は、南側においては柱穴18と19、柱穴25と26に、また北側においては柱穴10と11の関係に認められるように本来180～230cmの柱穴心々距離であるものに対して128と160cmと柱穴間の距離を意図的に狭めていることから窺われる。また、柵５との関係でさらに注目すべきものが柵６の存在であろう。　（島崎）

柵６（No192・197・331）（第314・315図、巻頭図版２）

柵５の南側柱穴列とちょうど６mの間隔をもって平行する５本の柱穴列を北側一辺とし、また柵５の東側柱穴の並び延長線上に掘られた柱穴列を同じく東側とする柵である。北側一辺は、柵５と同じく柱穴10と11、柱穴29と30のように柱間距離を119cmと狭めることで５本の柱穴を直線に形成させる。全体的に柵６は、北側から南に５列で約18m延びた地点にコーナーを造り、約80度の角度をもって西側に折れ、それから約64mに渡って直線的な柱列の伸びを見せる。なお、その際にそれまで南北に５列で構成されていた柵列がこのコーナーを境に東西４列に数を減らす。さらに西側もその続きが予想されるが何分柱穴の上面削平が著しく、その存在については明言できない。

遺物は、個々の柱穴の遺存状況が深いもので約20cm、大半のものが数cmと浅いものであったためわずかに７点の土器と１点の鉄器が出土したにすぎない。また、**798・799**は近世の混入であった。

時期は、勝間田焼碗（**793・794**）が共伴するものと考えれば古代末～中世に比定出来よう。（島崎）

柵７（No198）（第313図）

柵６の南側において確認された６本の柱穴列である。地点が段丘肩部であったためその延長線上に続く柱穴の存在については未検出である。柱痕には、黒色土の流入が見られた。　（島崎）

柱穴列20（No274）（第317図）

建物82の西側に沿うかのような状態で位置する。柱穴埋積土は、建物82と同一であった。（島崎）

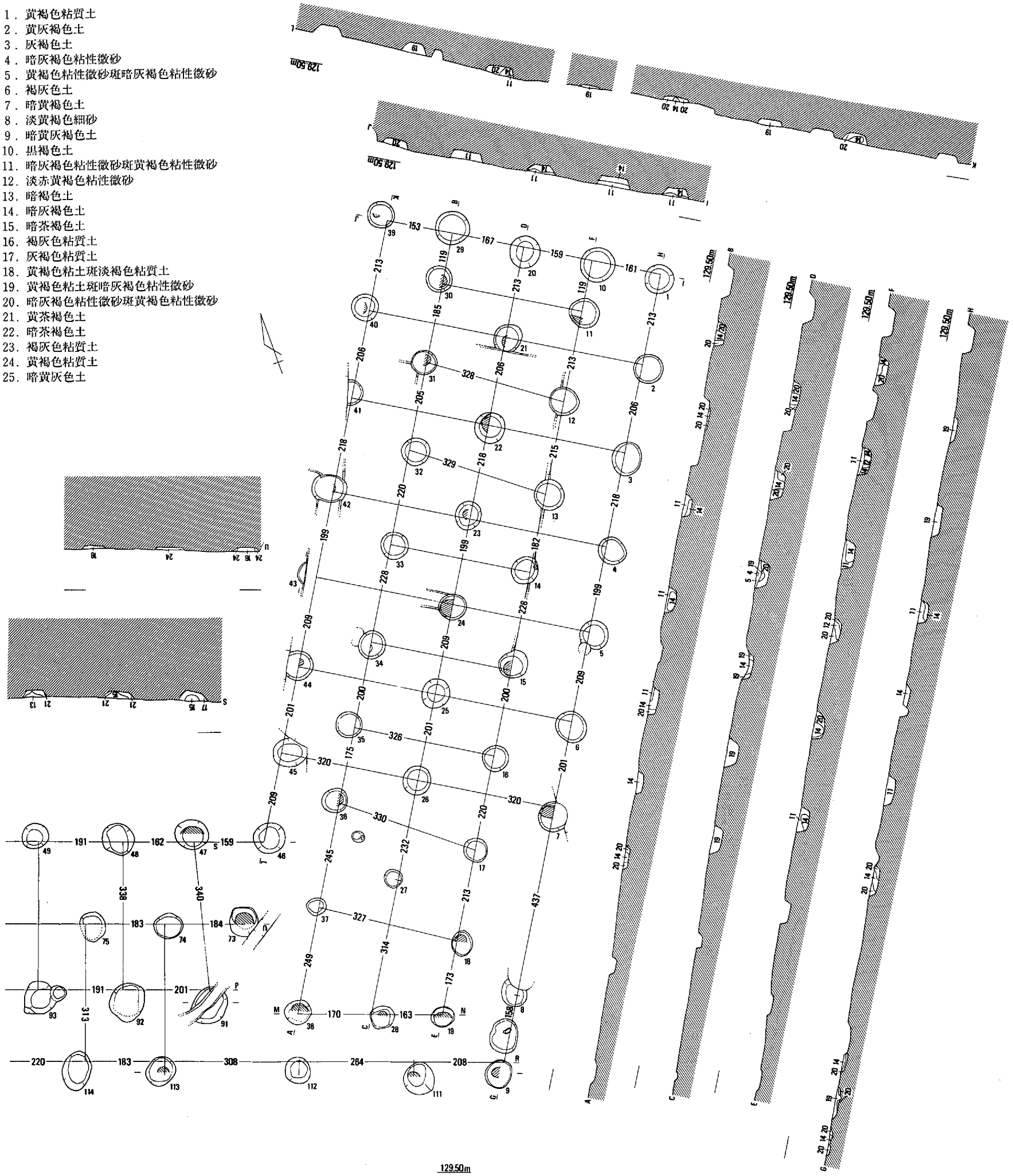
柱穴列21（No254）（第317図）

23－24Ｈ－Ｉで検出された。柱穴間の距離が300cm前後と長い。柵5・6の方向に一致する。（島崎）

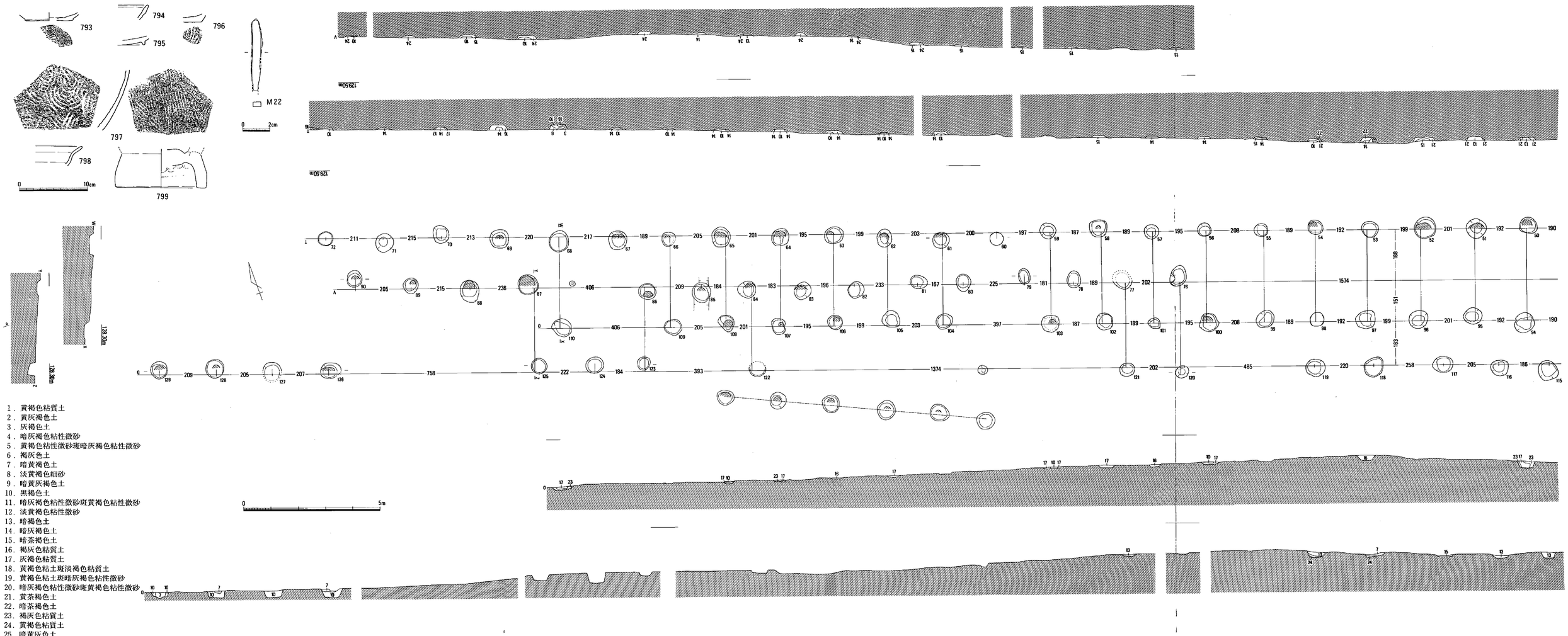
柱穴列23（No404）（第317図）

柵５と柵６の西側約24mの地点にあって柵５・６、建物101の主軸に平行する。柵５と柵６の間６m幅を西側に延長した場合、ちょうど正面にあり、柱穴列23に直交する柱列は柵５の南側柱列の直線上に位置する。こうした状況から、柱穴列23は、柵５と柵６の間を門とした場合、目隠し塀として、また建物101とともに有機的に機能していたと考えられる。　（島崎）

1．黄褐色粘質土
2．黄灰褐色土
3．灰褐色土
4．暗灰褐色粘性微砂
5．黄褐色粘性微砂斑暗灰褐色粘性微砂
6．褐灰色土
7．暗黄褐色土
8．淡黄褐色細砂
9．暗黄灰褐色土
10．黒褐色土
11．暗灰褐色粘性微砂斑黄褐色粘性微砂
12．淡赤黄褐色粘性微砂
13．暗褐色土
14．暗灰褐色土
15．暗茶褐色土
16．褐灰色粘質土
17．灰褐色粘質土
18．黄褐色粘土斑淡褐色粘質土
19．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘性微砂
20．暗灰褐色粘性微砂斑黄褐色粘性微砂
21．黄茶褐色土
22．暗茶褐色土
23．褐灰色粘質土
24．黄褐色粘質土
25．暗黄灰色土

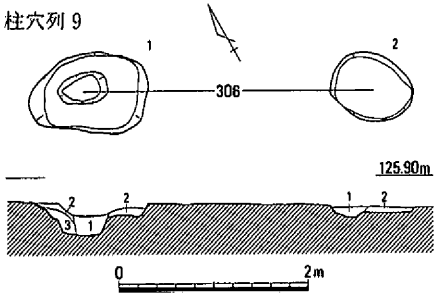


第314図　柵6 (1)(1/100)

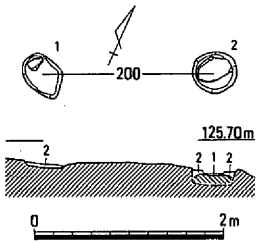


第315図　柵６(２)(1/100)・出土遺物(1/4)

柱穴列9

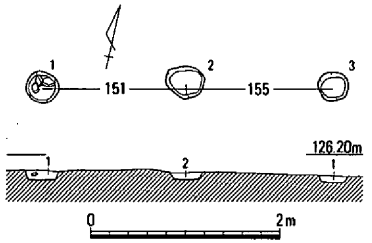


柱穴列10



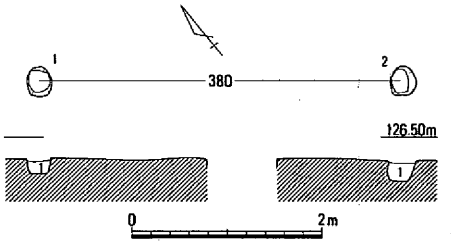
1．赤褐色土斑灰褐色粘質土
2．赤褐色粘質土

柱穴列11



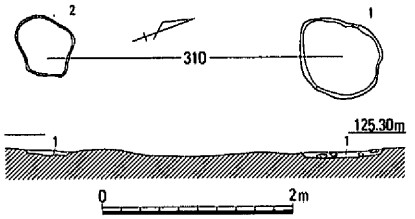
1．暗灰褐色粘質土
2．暗黄灰褐色粘質土

柱穴列12



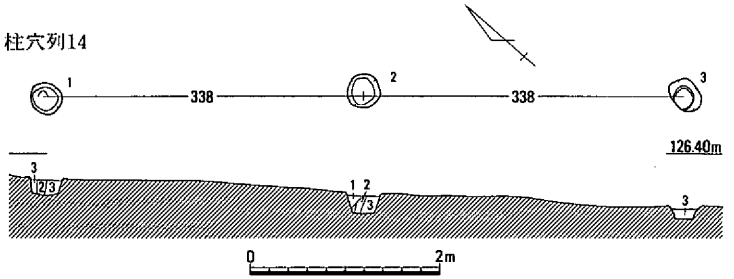
1．赤褐色粘質土斑茶灰褐色粘質土(含木炭)

柱穴列13



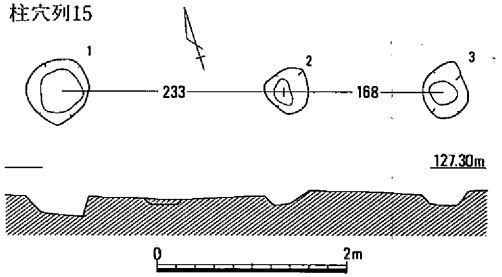
1．茶灰褐色粘質土(礫含)

柱穴列14

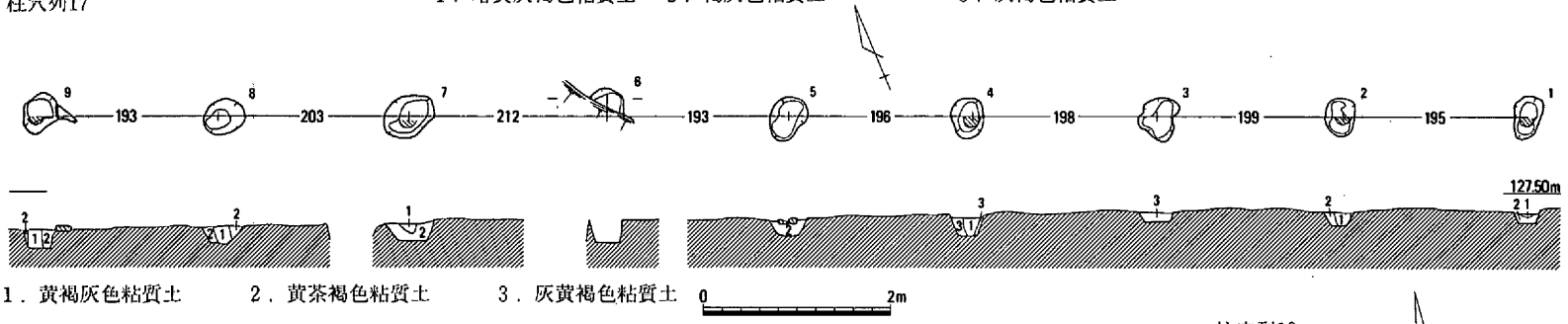


1．暗黄灰褐色粘質土　2．褐灰色粘質土　3．灰褐色粘質土

柱穴列15

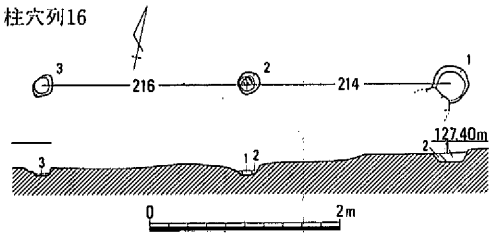


柱穴列17



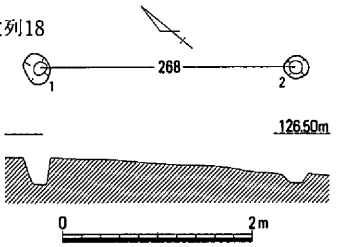
1．黄褐灰色粘質土　2．黄茶褐色粘質土　3．灰黄褐色粘質土

柱穴列16

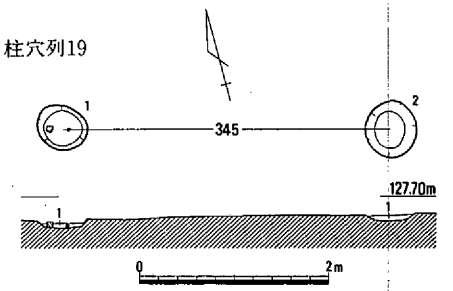


1．褐灰色粘質土　3．褐灰色粘質土斑黄灰色粘質土
2．黄褐灰色粘性砂質土

柱穴列18

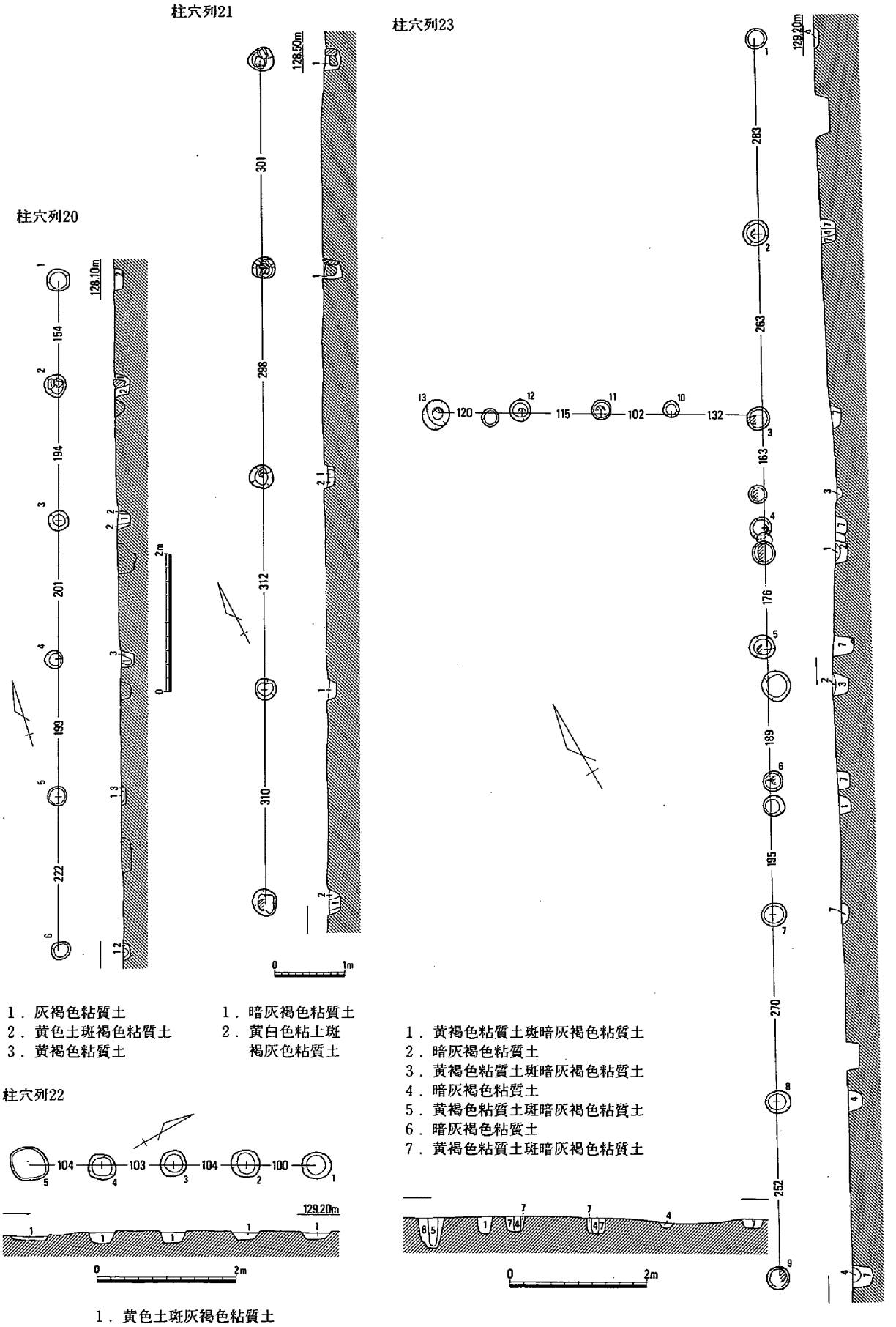


柱穴列19

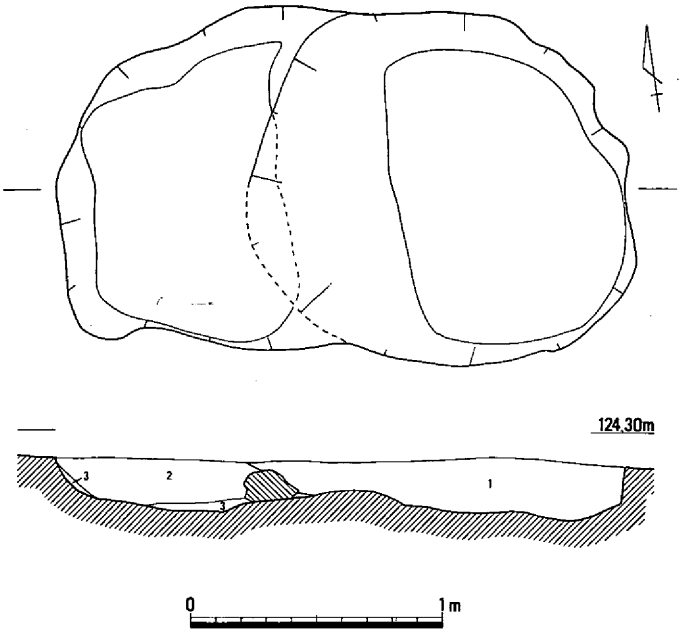


1．暗茶褐色粘性微砂

第316図　柱穴列 9 ～19(1/80)

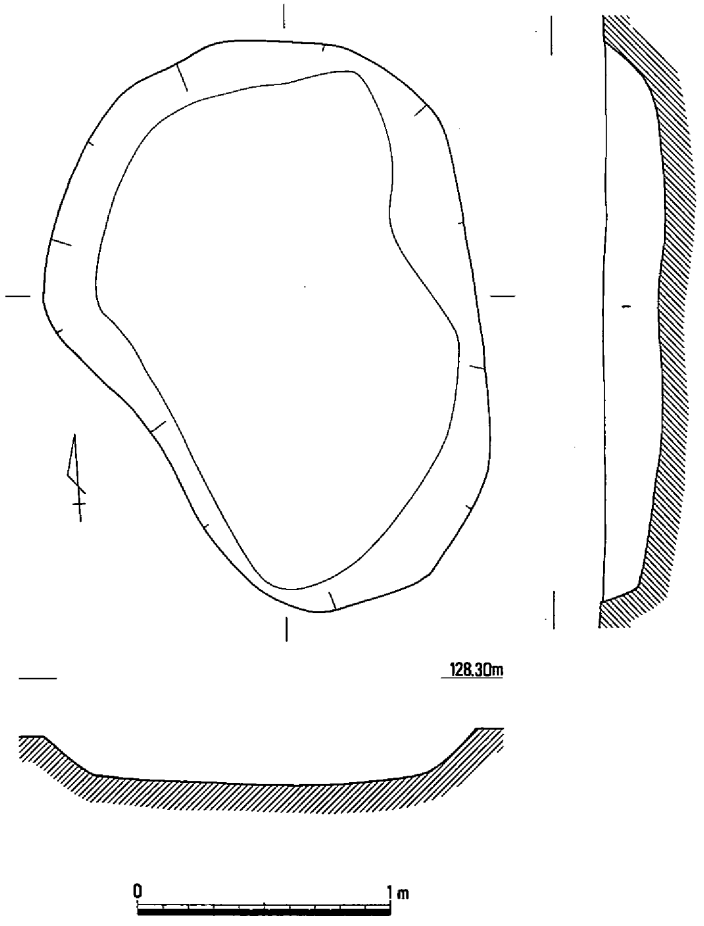


第317図　柱穴列20～23(1/80)



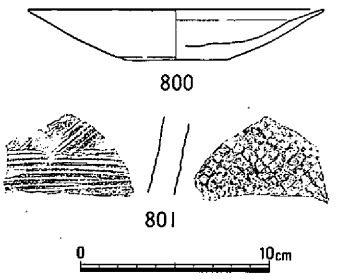
１．黄灰色粘土斑暗灰色粘土
２．黄灰色粘土斑暗褐灰色粘土(礫含)
３．黄灰色粘土

第318図　土壙57(1/30)・出土遺物(1/4)



１．暗茶褐色粘質土

第319図　土壙58(1/30)



土壙57（No88）(第318図)

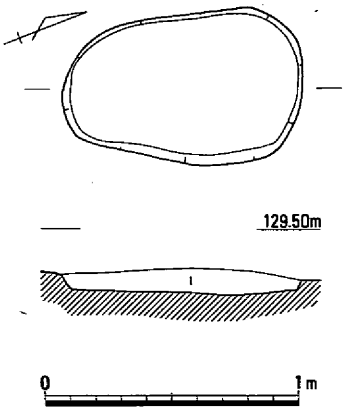
12Ｇ区に位置する不整楕円形の土壙である。長径226cm、短径140cm、深さ23cmを測る。平面・断面の状況からみて、２基の土壙が重複しているようである。出土遺物には、土師器の皿**800**、勝間田焼の甕**801**があり、土壙の時期は平安時代末頃と思われる。　　(岡本泰)

土壙61（No222）(第322図)

27Ｒ区において確認された。南北方向に主軸を有する土壙である。ほぼ長方形を呈する。埋積土中からは、中世の羽釜片が１点出土している。性格は不明である。　　(島崎)

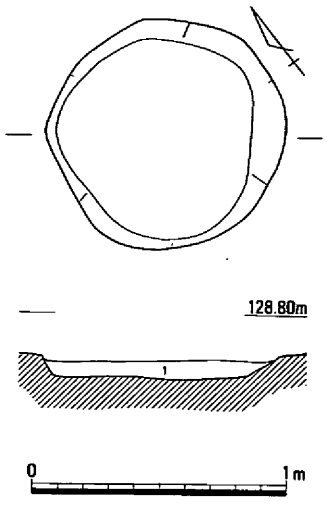
溝10（No21）(第324図)

４，５Ｋ区に位置するＬ字形の溝である。最大幅は24cm、深さは４cm



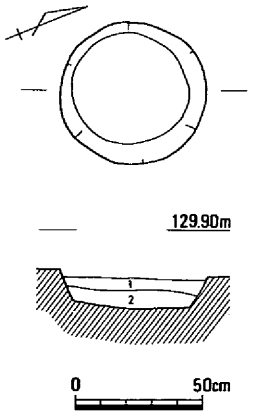
１．黄色土斑暗褐色粘質土

第320図　土壙59(1/30)



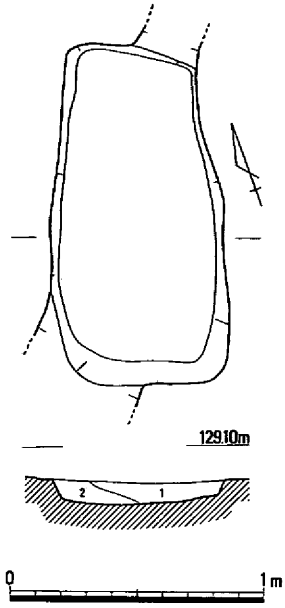
1．黄色土斑灰褐色粘質土

第321図　土壙60(1/30)

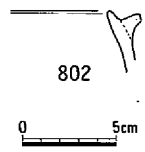


1．黄色土斑灰褐色粘質土
2．赤褐色土斑黄褐色粘質土

第323図　土壙62(1/30)



1．黄褐色土斑褐灰色粘質土
2．暗褐色土斑灰褐色粘質土



第322図　土壙64(1/30)・出土遺物(1/4)

とごく浅い。遺物はないが、その方向が古代末の柵群とほぼ一致することから、一応同時期の遺構と判断しておく。　　(岡本泰)

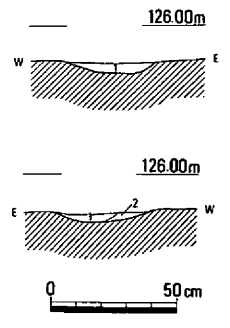
包含層出土遺物（第325・326図、図版22）

ここでは包含層と柱穴から出土した遺物について述べる。第325図**803～831**は土師器、**832～839**は瓦質土器、**840～854**が勝間田焼、**855**は備前焼、**856**は須恵質土器である。輸入磁器もいくらか出土していて、第326図**857～859・861～863・865**は青磁、**860・864**は白磁、**866・867**は青白磁の合子である。出土地点で分けると、東地区から出土したのは**803・805・810・814・815・823・834・846・849・850・856・857**で、他は西地点から出土した。なお、建物47周辺から奈良時代の瓦と共伴して出土したのは**806・807・824・833・840・847**である。

第325図には古代末から中世の遺物を掲載するつもりであったが、図を作成する段階では筆者の管見が乏しく、類例のあまりみあたらない土師器をここに入れたため、混乱を生じている。８世紀後半から９世紀前半のものとみられる小形の土師器杯がかなり出土していて、土壙49では鉄鉢形の須恵器と共伴していた。**816～818・821・823・826～830**がそれである。平坦な底部は回転ヘラ切りである。口縁部の内面にタール状の煤を付けたものが多く灯明皿として使用されたものとみられ、**816・821・827・828**で認められた。11世紀あるいは10世紀に遡るかと思われる**803～808**もみられる。**809**は12世紀前葉のものとみられる。

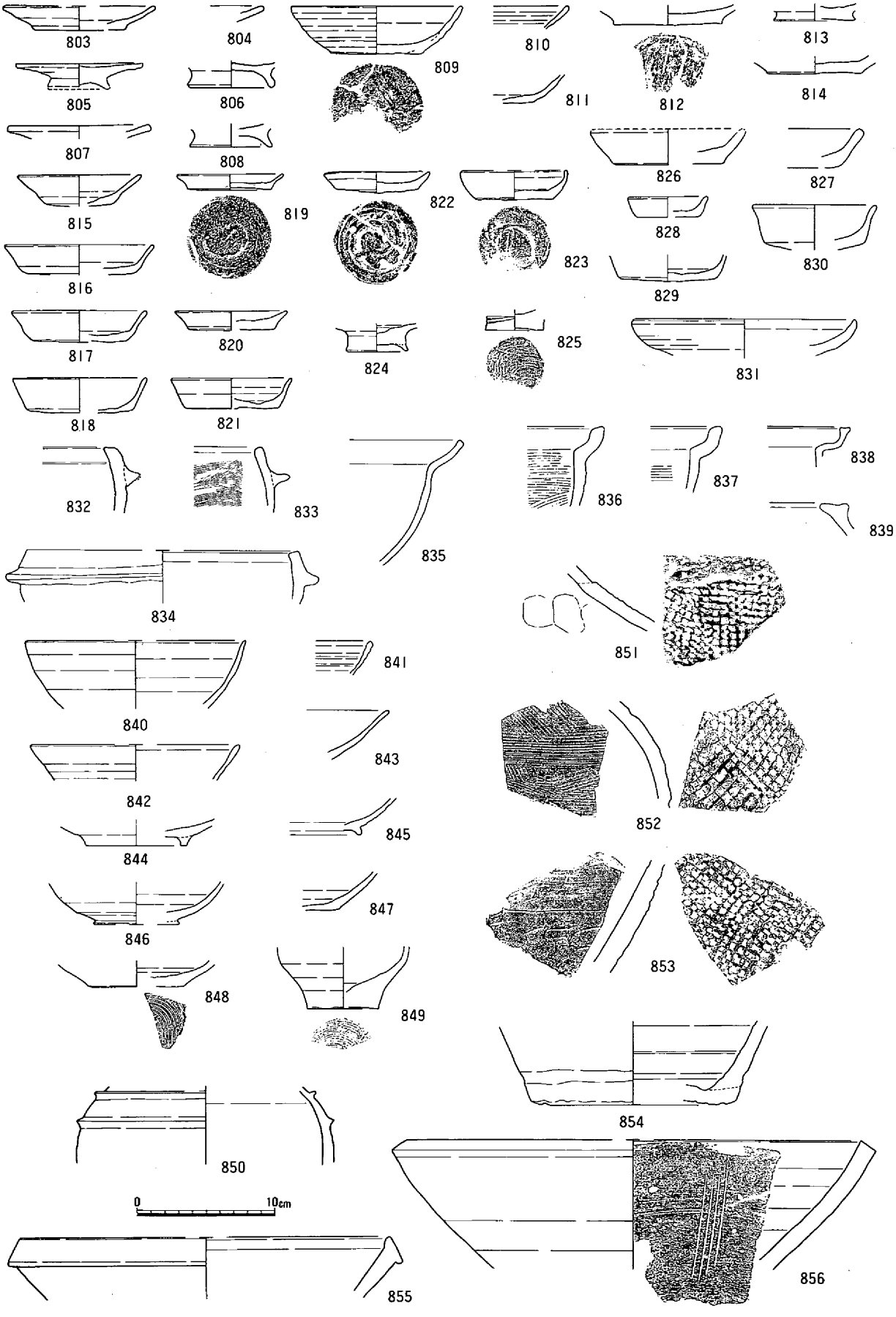
掲載した土師器や勝間田焼には12世紀から13世紀前半頃のものが多いが、14世紀から15世紀にかけてのものとして瓦質土器や備前焼、それに輸入磁器がみられる。**825**の土師器の底部は糸切りである。青磁碗には鎬蓮弁文（**857・863**）や雷文（**858・859**）を施すものがある。**862・865**は青磁皿で、**862**には双魚文が飾られる。**860・861**の見込みには線刻の花文が認められる。**866**の合子は上から見ると五弁花を表現するようである。

868は土錘である。６区の表土から出土した。出土地点から中世のものとみられる。長さ59㎜、外径41㎜、重さ90.2ｇを測る。　　(岡本寛)

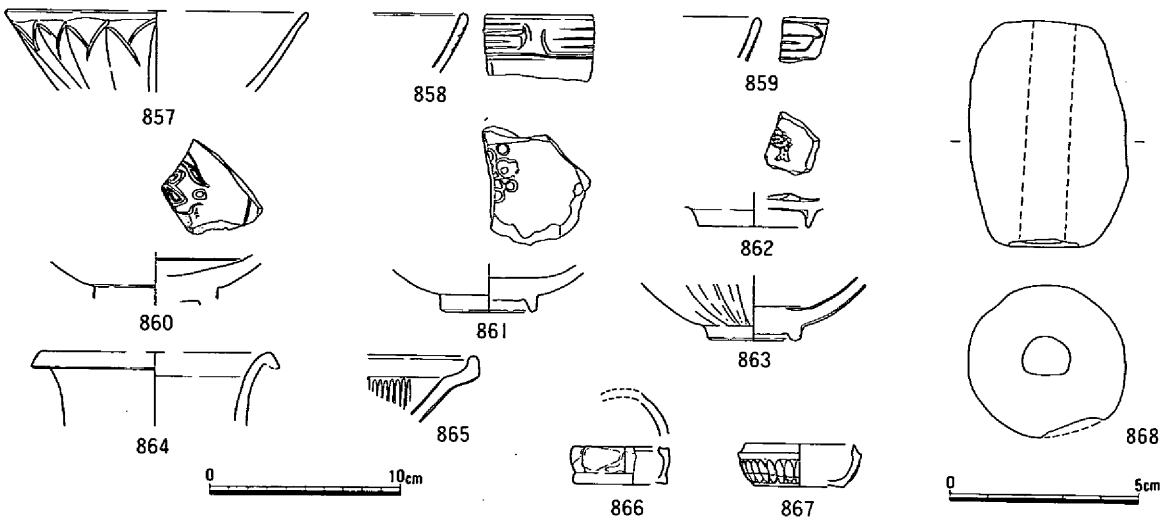


1．灰褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質土

第324図　溝10(1/30)



第325図　大田茶屋遺跡出土古代～中世遺物(1)(1/4)



第326図　大田茶屋遺跡出土古代～中世遺物(2)(1/4・1/2)

３．小結

ここでは時代ごとの遺構の共存関係と、その配置状況を確認しておきたい。

丘陵頂部の平坦面を取り巻く長大な柵列は12世紀代のものと考えられる。この柵列に伴う建物は、東地区では２カ所に群集している。１カ所は建物101を中心建物とし、前面に設けられた柱穴列23の塀と建物102と建物99か建物100が伴う。柱穴列23と重複する建物103が存在するため、建て替えがなされたとみられ、建物101と建物103、それに建物100か建物99が共存するとみられる。どちらの組が古いかは不明である。もう１カ所は棟方向から建物82・83・84が共存する時と建物85に建物86が伴う時のやはり２時期に分かれる。総柱建物を新しい傾向とすれば、前者が古いと考えられる。東地区では柵列に伴う建物として、棟方向からみれば建物73・74・77・78・87・96が候補に挙げられる。

西地区では建物64が柵列に伴うとみられ、それと類似した構造の建物67と隣接して棟方向を等しくする建物68が考えられる。さらに建物67・68と棟方向をほぼ直交させる建物14・70が中心建物群として浮上してくる。３区の建物22も存在する。さらに、１区から５区にかけての丘陵端部に群集していた小形建物群であるが、柵４でみられたように、柵が地形にしたがって折れていくとすると、柵１が１区の南西端に沿って延びていた可能性があり、その際には、これらの建物は柵と棟方向を等しくすることになる。案外、これらの小建物群が柵に伴う施設であたことも考えられる。

13世紀後葉からの集落は、建物59・60、建物62・63という２組の重複関係から２時期に分けられる。建物62は出土遺物から15世紀にかかる可能性があり、集落の継続期間を考えると建物63はそれより古いとみられる。建物63と規模の類似した建物66は14世紀前半頃とみられる。他に同規模の建物として建物65・18・20があり、似たような間隔で配置され、同時に存在した可能性が高い。建物69は大形建物であるが総柱ではなく、集落の前半期の建物かもしれない。住居の拡大が時代の流れとすれば、建物60も前半期の建物とされる。したがって、後半の建物は建物59・62・17と考えられる。

13世紀後葉以降の東地区での建物の配置にはあまりまとまりがなく、屋敷地の存在もつかめない。建物71・89は棟方向や出土遺物からみれば弥生時代のものに近いが、規模の大きさと、東地区からの14～15世紀代の遺物の出土から考えて集落の一部を構成するものとみている。　　(岡本寛)

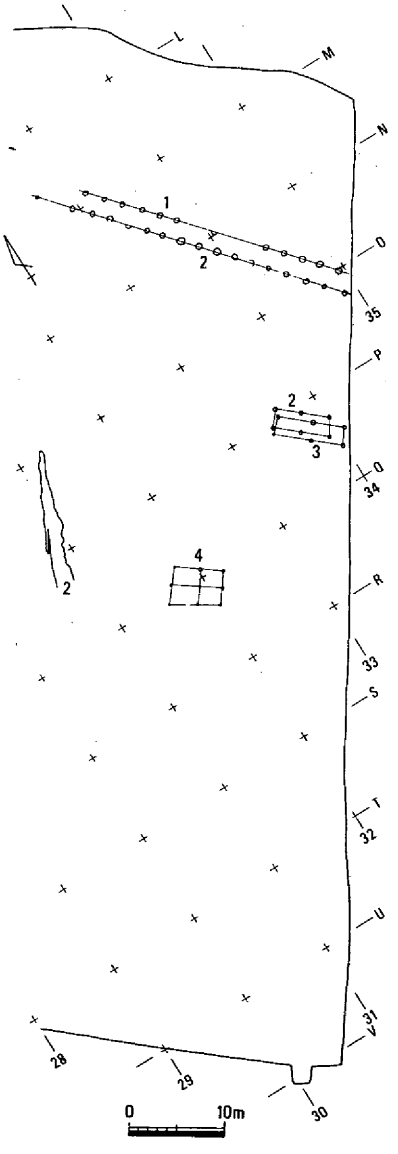
第３節　大田障子遺跡

１．遺構配置

古代末～中世に比定した遺構は主として調査区北半部で検出されている。その内訳は、建物３棟・柵２列・溝１条である。このほかに、調査区中央部で多数検出されたピット群の中にも、当時期に所属するものが含まれていると思われる。これらの遺構は、いずれも出土遺物に乏しく、その遺物も多くは小片で、正確な時期を特定するのは困難であった。そのため時期決定は主軸方向や埋土の特徴等に基づかざるを得なかった。

柵２列は、調査区の北部を平行して走っている。その諸特徴は大田茶屋遺跡で検出された柵群と一致し、ほぼ同時期として差し支えない。性格としては、北側の大田大正開遺跡に展開する遺構群の南端を画する施設の可能性もあるものの、具体的な用途は明確にしがたい。３棟検出された建物のうち、重複する２棟は本来の規模は不明であるが、いずれもさほど大規模な建物にはならないと思われる。

このように遺構密度は薄く、近現代の造成や水田耕作による削平の影響も当然考えられるにしても、集落の中心は西側の大田茶屋遺跡にあったと推定される。（岡本泰）



第327図　古代末～中世主要遺構配置図(1/800)

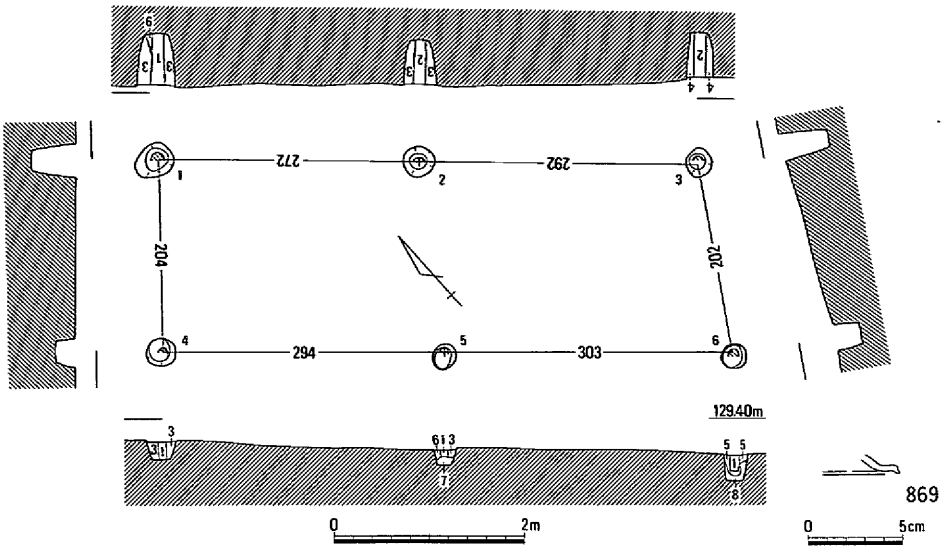
２．遺構・遺物

建物２（No ２）（第328図）

33O，P・34P区で検出された掘立柱建物で、建物３と重複し、棟方向もほとんど同じである。調査区の東端に位置し、かつすぐ南側が後世の段によってカットされるため、本来の規模・形状を保持しているかは不明で、検出部分についていえば２×１間、桁行全長597cm、梁間全長204cm、面積11.7m²となる。柱穴は円形で、径27～42cm、深さ18～56cmを測り、底面標高は北側のほうが低い。柱痕は全柱穴で明瞭に認められ、径は８～14cmを測った。遺物としては飛鳥～奈良期と思われる須恵器片が若干出土しているが、遺構の時期は棟方向などから中世と考えている。（岡本泰）

建物３（No ３）（第329図）

33，34P区で検出された、建物２と重複する掘立柱建物である。建物２と同様の事情により本来の規模・形状は不明で、現状では２×１間、桁行全長734cm、梁間全長195cm、面積13.6m²の細長い建物となっている。桁行の柱間距離は建物１に比べて長い。柱穴は円形で、径23～38cm、深さ13～49cmを測り、底面



1．暗褐灰色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．黄褐色粘質土斑暗褐灰色粘質土
4．黄褐色粘質土斑暗黄灰褐色粘質土
5．褐灰色粘質土斑黄褐色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
8．暗褐灰色粘質土
9．暗灰色粘質土

第328図　建物２(1/80)・出土遺物(1/4)

の標高は東ほど低くなる。柱痕は全柱穴に残存しており、径は14～18cmで建物２と比較して太めであった。遺物としては、平安時代と考えられる須恵器片が若干出土しているが、棟方向などを考慮すると、時期は建物２と同じく中世と推定される。建物２との新旧関係については定かでない。（岡本泰）

建物４（No13）（第330図）

31Ｐ～32Ｑ区にまたがる掘立柱建物である。規格は２×２間で、中央にも１基の柱穴を有する。規模は桁行全長542cm、梁間全長401cm、面積20.1㎡を測る。柱間は桁行で237～305cm、梁間で179～210cmと不揃いで、どちらも西側のほうが大きくなる傾向があり、建物の形はやや歪んでいる。柱穴は円形で、径16～40cm、深さ９～27cmを測る。このように柱穴の規模が不揃いで残りも悪く、配置も均整でないため当初は建物とするのに疑問もあったが、埋土その他の検討から１棟の建物と認定した。

出土遺物は全くなく、時期判定は困難だが、棟方向などから中世に比定したい。（岡本泰）

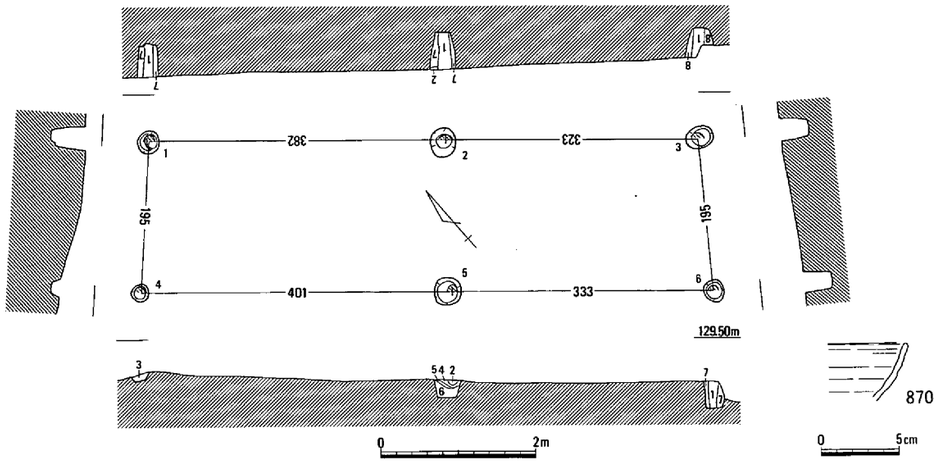
柵１・２（No５・６）（第331図）

32Ｌ～34Ｏ区にかけて検出された、北西－南東方向に走る２列の柵である。検出総延長は柵１が27.8m、柵２が33.6mで、北西端は削平のためか途切れるが、東側はさらに調査区外に続くと考えられる。２列の間隔は200cmで、各々の中軸線はほぼ完全な平行線をなす。軸方向は等高線とはややずれている。柱穴の心々距離は長短あるが、平均すると柵１が200cm、柵２が199cmとほとんど一致する。

柱穴は円形で、径は48～74cmを測り、柱痕の遺存も認められる。削平のため、柱穴の深さは最大でも25cmにとどまる。柵２西端の柱穴29は底面中央部のみがかろうじて検出された。柱穴断面は台形を呈し、底面は平坦である。埋土の状況は柱穴ごとに様々であるが、１～２層残存するものが多い。

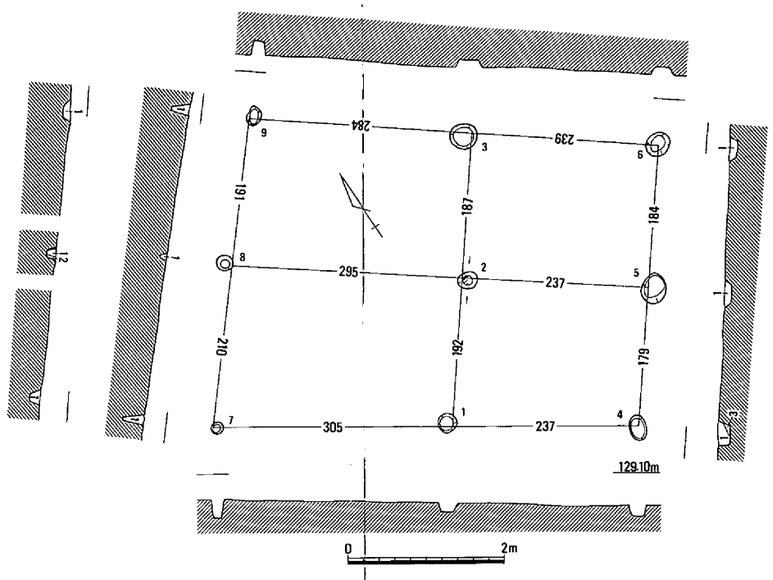
この２列の柵は、軸線が平行で、柱穴が正確に互い違いに配されることから、２列が同時期に機能していたものと考えられる。大田茶屋遺跡の柵群も同様で、柱穴を交互にして複数の柵を平行線状に設けるのが、当時期のこの丘陵上における土地区画の特徴と考えられる。性格としては、北側の大田大正開遺跡に存在が予想される遺構群の南端を区画する施設の可能性も指摘できるが、具体的な用途については不明と言わざるをえない。

埋土中から遺物は全く出土しなかったが、平安時代末に比定される大田茶屋遺跡の柵群と特徴を同じくすることから、同時期の遺構と判断できよう。（岡本泰）



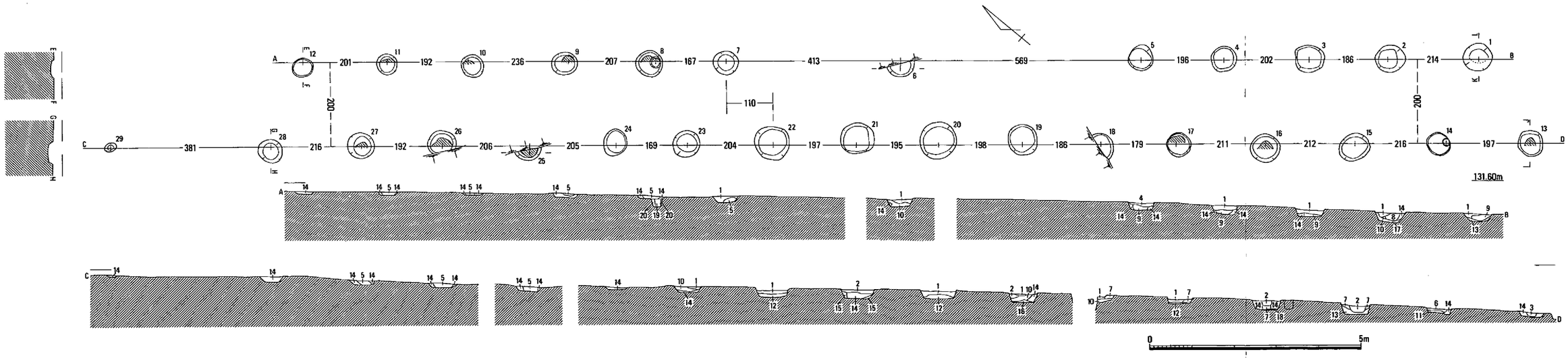
1．暗灰色粘質土　　4．黄褐色粘質土　　7．暗褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土　　5．暗黄褐灰色粘質土　　8．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．灰褐色粘質土　　6．暗灰色粘質土

第329図　建物３（1/80）・出土遺物(1/4)



1．暗褐色土
2．黄色土斑暗褐色土
3．黒褐色粘質土

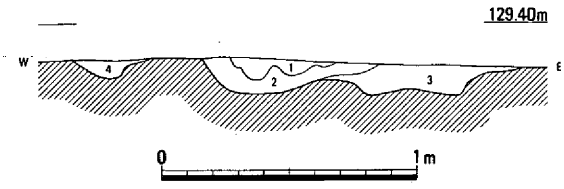
第330図　建物４（1/80）



1．灰褐色砂質土
2．灰黄褐色粘性砂質土
3．灰黒色砂質土
4．黄白色粘質土斑褐灰色砂質土
5．黒褐色粘性砂質土
6．灰黄褐色砂質土
7．暗灰褐色粘質土
8．白色粘質土
9．青灰色砂質土
10．褐灰色砂質土
11．灰褐色粘質土
12．灰黄褐色粘質土
13．淡黄褐色粘質土
14．灰褐色砂質土
15．淡黄灰色粘質土
16．淡灰黄色粘質土
17．青灰色砂質土
18．淡灰色粘質土
19．暗褐色土
20．黄褐色土斑暗褐色土

第331図　柵１・２(1/100)

溝２（No14）（第332図）



1．黄褐色・黒褐色土斑灰褐色砂質土
2．黄褐色粘土斑褐灰色砂質土
3．黄褐色粘土斑灰褐色砂質土
4．淡褐灰色砂質土

第332図　溝２（1/30）

31Ｏ～30Ｐ区にかけて直線的に延びる南北方向の溝である。流路方向は北北東から南南西で、検出総延長は14.6ｍを測り、南側が広がった形態である。調査時には一括して完掘したが、断面や底面の状況から、実際には複数の溝が重複したものと考えられる。南端部は奈良時代の土壙４の上面を切り、それ以南は削平のためか途切れて検出できなかった。検出面上での幅は最大で177㎝、深さは16㎝を測る。底面は数度にわたる重複のため、波打ったような形であった。

遺物としては、古代～中世の須恵器・土師器・青磁等の小片が出土しており、これをもって溝の時期は中世と考えている。　（岡本泰）

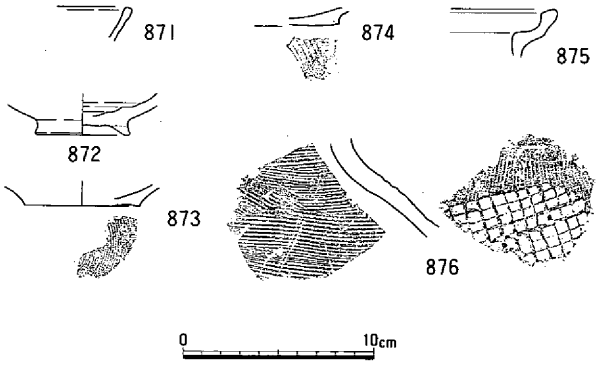
包含層出土遺物（第333図）

奈良時代までの包含層遺物は、調査区中央部に堆積する暗褐色系粘質土（第260図の８・９層）からの出土であったが、当時期のそれは全て表土から出土したものである。

871～**874**は須恵質の椀で、勝間田焼と思われる。**871**の外面口縁端部は重ね焼きによって黒変している。**872**は底部で、径49.0㎜の高台を有する。内面にはヨコナデ痕が顕著に認められる。**873・874**は平高台状を呈する底部である。底面の切り離しは糸切りによる。椀の年代は、**872**が11世紀後半～12世紀前半、**871・873・874**が12世紀代に置くことができよう。**875**は瓦質土鍋の口縁部と考えられる。**876**は勝間田焼甕の頸～肩部の破片である。内面は強いヨコナデ、外面はタテハケ後格子叩き目を加える。12世紀後半に属すものである。　（岡本泰）

３．小結

古代末～中世初頭に比定できる遺構は少なく、検出された建物も小規模なものであった。削平の影響も大きいと思われるが、当時期においても集落の中心部分は大田茶屋遺跡の側にあったとみるのが妥当であろう。北端近くで検出された柵２列は、大田茶屋遺跡のものと一連と考えられ、丘陵一帯がこの種の柵で区画されていたことが窺える。　（岡本泰）



第333図　大田障子遺跡出土遺物(8)(1/4)

第４節　大田大正開遺跡

１．遺構配置

調査区内からは古代末～中世の遺構として掘立柱建物５棟を検出した。

調査区が限定されているため、遺跡全体の状況や南に隣接する大田茶屋遺跡で検出されている遺構との関係は不明瞭であるが、遺構密度は薄く、出土した遺物の量もわずかであることから、散在的なあり方をしているものと考えられる。（佐藤）

２．遺構・遺物

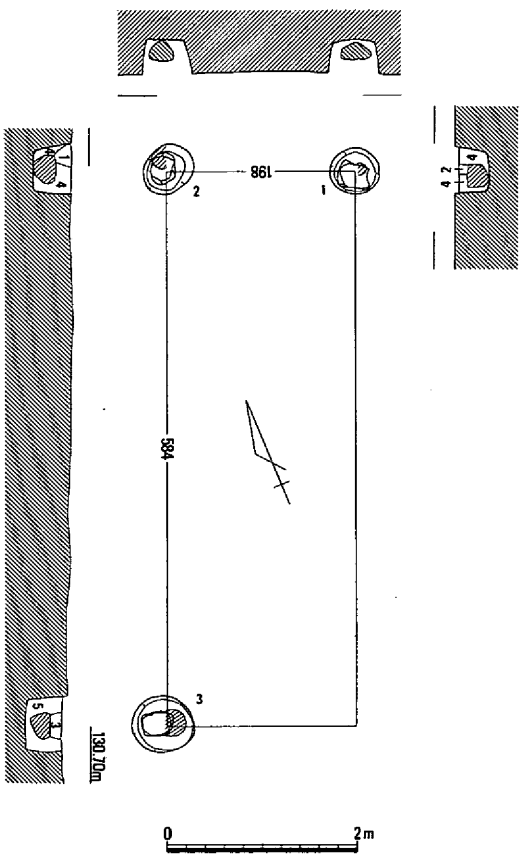
建物７（No11）（第334図）

35，36XX，YY区に位置する。１×１間の掘立柱建物で、検出面での平面形は梁間と桁行の比率が１：2.95を測る長方形を呈し、床面積は11.6㎡である。各柱穴は検出面で径51～66cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さは40cm前後を測る。各柱穴の底面には礎石が据えられている。各柱穴の土層断面で認められた柱痕跡から、径13～28cmの木材が柱として使用されたものと考えられる。

出土遺物がないため、時期は断定できないが建物・柱穴の規模、棟方向から古代末期の遺構と判断した。（佐藤）

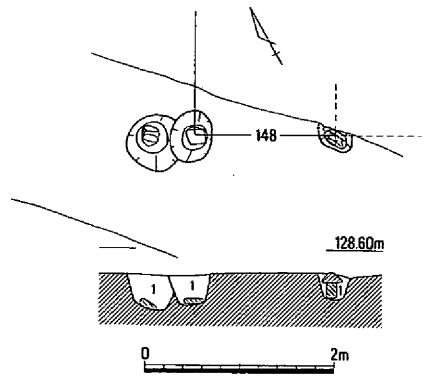
建物８（P10－12）（第335図）

第２次調査の第14トレンチで３基の柱穴を検出した。柱穴は円形に近く、長径が55～60cmであった。各柱穴ともに底面に石を据え、東側の柱穴では石が二段になっていた。この柱穴の状況は前述の建物７と類似し、西側の２基の柱穴は建て替えを示すものとみられる。推定される建物の棟方向はＮ－30°－Ｅである。（岡本寛）



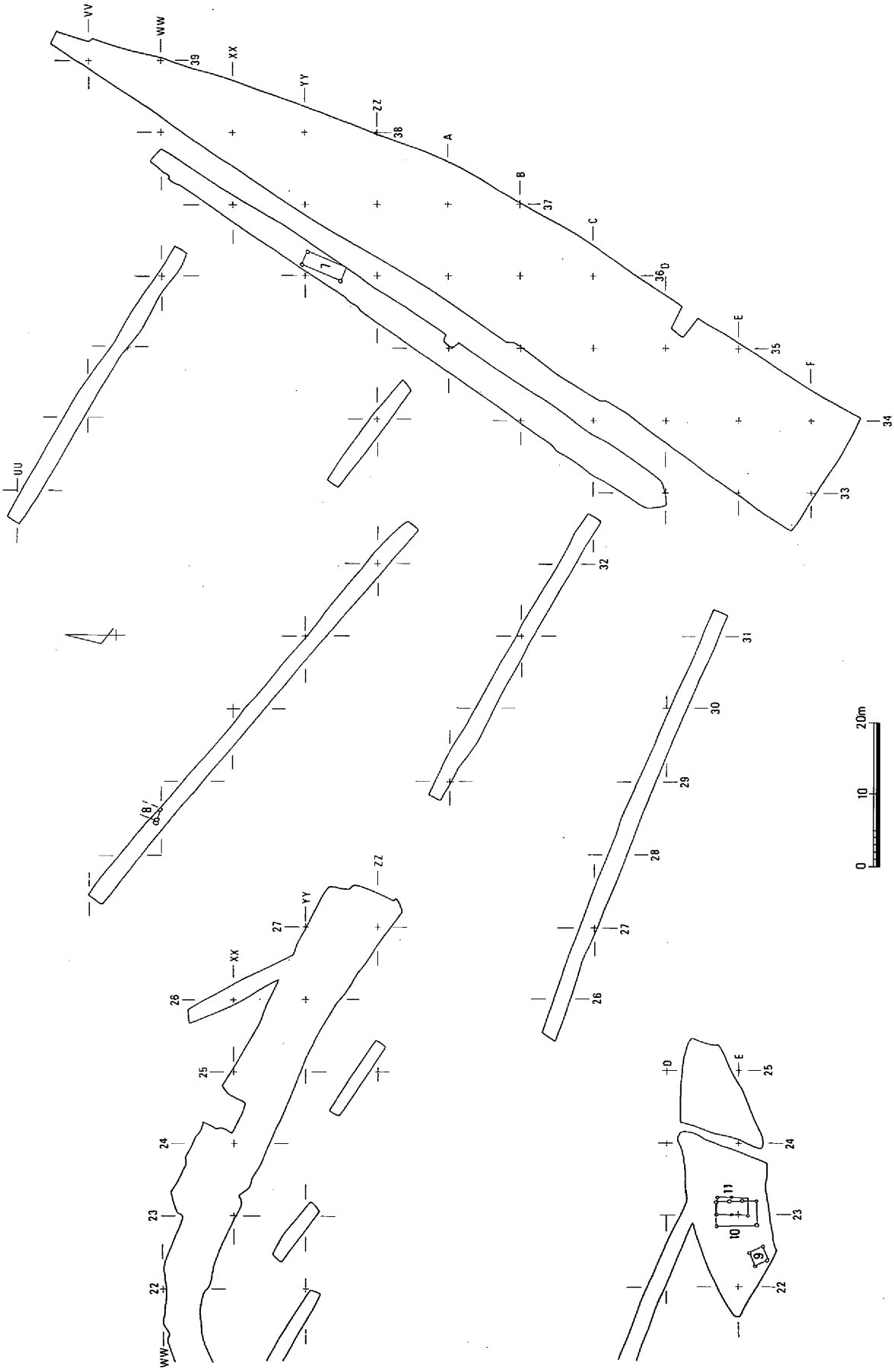
１．褐色粘質土　　３．褐色微砂（黄土塊若干有）
２．褐色微砂　　４．灰色粘土斑褐色土
５．明褐色微砂（黄土塊混じる）

第334図　建物７（1/80）

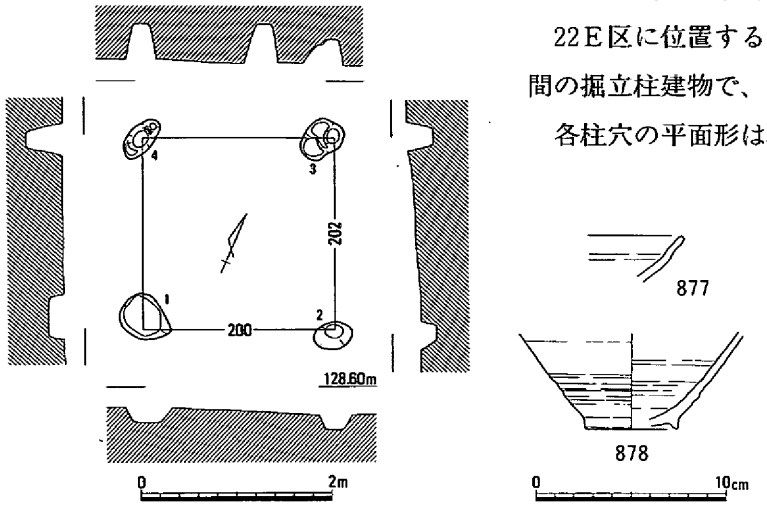


１．黄色粘土斑黒褐色粘質土

第335図　建物８（1/80）



第336図　大田大正開遺跡古代末～中世主要遺構配置図(1/800)



第337図　建物９(1/80)・出土遺物(1/4)

建物９（No16）（第337図）

22E区に位置する。平面形がほぼ正方形を呈す１×１間の掘立柱建物で、床面積は４㎡を測る。

各柱穴の平面形は検出面で径41～56㎝の不整形な円形を呈し、検出面からの深さ16～35㎝を測る。

遺物は柱穴１から**877・878**が出土している。**877**は土師質の坏の口縁部で内外面はヨコナデで仕上げられる。**878**は須恵質の椀または坏である。内外面はヨコナデにより仕上られ、底部は貼付により高台を成形している。これらの遺物から、建物９の時期は中世前半と考えられる。（佐藤）

建物10（No18）（第338図）

22,23D,E区に位置する。３×１間の掘立柱建物で、建物11と重複している。

平面形は梁間と桁行の比率が１：1.66を測る長方形を呈し、床面積は19.0㎡を測る。

各柱穴の平面形は検出面で径25～50㎝の不整形な円形を呈し、検出面からの深さ10～25㎝を測る。

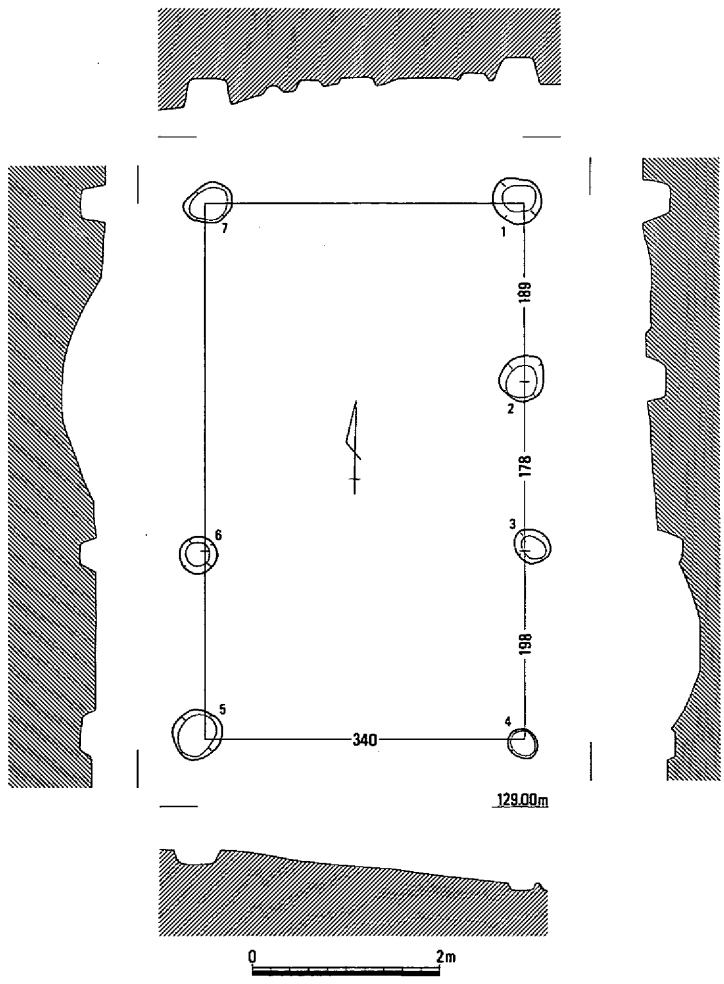
出土遺物がないため、時期は断定できないが、建物・柱穴の規模や棟方向から中世の遺構と考えられる。（佐藤）

建物11（No19）（第339図）

22,23D,E区に位置する。２×１間の掘立柱建物で、建物10と重複している。

平面形は梁間と桁行の比率が１：1.78を測る長方形を呈し、床面積は10.3㎡を測る。

各柱穴の平面形は検出面で径22～40㎝の不整形な円形を呈し、検出面からの深さ15～28㎝を測る。



第338図　建物10(1/80)

出土遺物がないため、時期は断定できないが建物・柱穴の規模や棟方向から中世の遺構と判断した。（佐藤）

包含層出土遺物（第340図）

包含層中より古代末～中世の遺物が若干出土している。

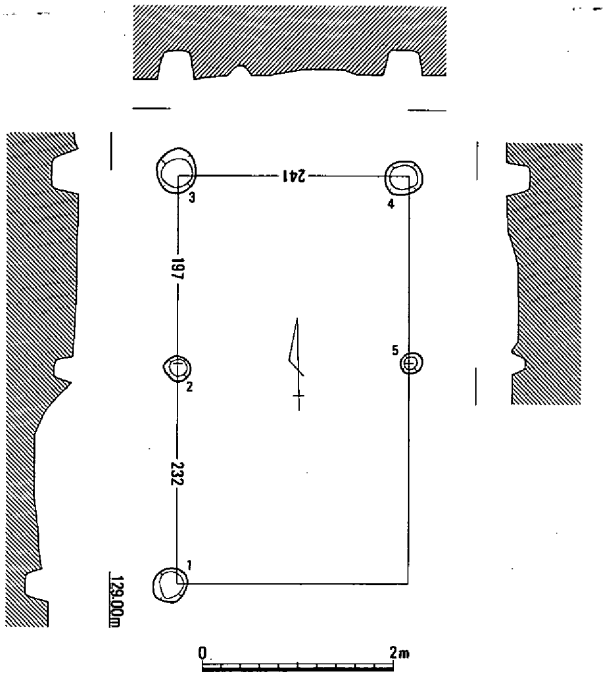
879は須恵質の壺の口縁部である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、内面には自然釉が付着している。

880は須恵質の椀である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、底径は51㎜を測る。

881は須恵質の椀あるいは杯である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、外面の一部には自然釉や灰粉が付着している。口径は推定で187㎜を測る。

882は勝間田焼の小皿である。

883は土師質の椀である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、口径は推定で130㎜を測る。



第339図　建物11(1/80)

884は土師質の小皿である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、底面にはヘラ切り痕が残る。口径73㎜、底径59㎜、器高11.5㎜を測る。

885は土師質の鍋である。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。口縁部以下の調整は内面が横方向のハケメで仕上げられ、外面には押圧痕が認められる。

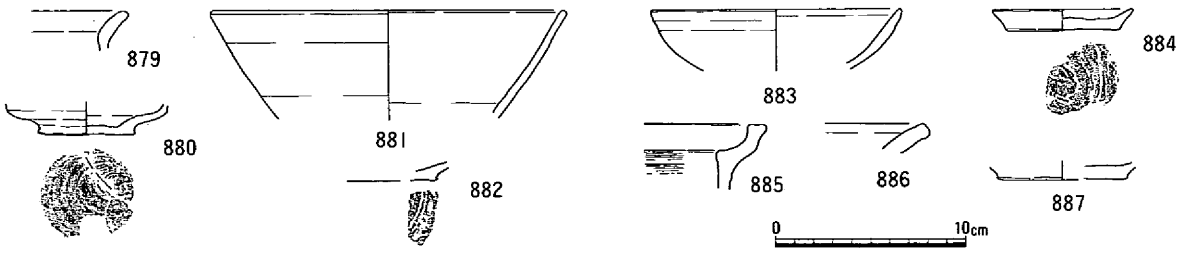
886は土鍋の口縁部である。内外面ともヨコナデで仕上げられ、外面には煤が付着している。

887は土師質の小皿である。調整は磨耗のためはっきりしない。底径は推定で63㎜を測る。（佐藤）

3．小結

以上、大田大正開遺跡で検出された遺構と出土遺物について述べた。調査区が限定されていたこともあり、遺跡全体の様相や南に隣接する大田茶屋遺跡との関係は不明瞭である。

ただ、同時期の大田茶屋遺跡における遺構・遺物のあり方と比べ、遺構密度は薄く散在的で、遺物の出土量も少ないことから、集落の縁辺部分にあたるものと考えられる。（佐藤）



第340図　大田大正開遺跡出土遺物(5)(1/4)

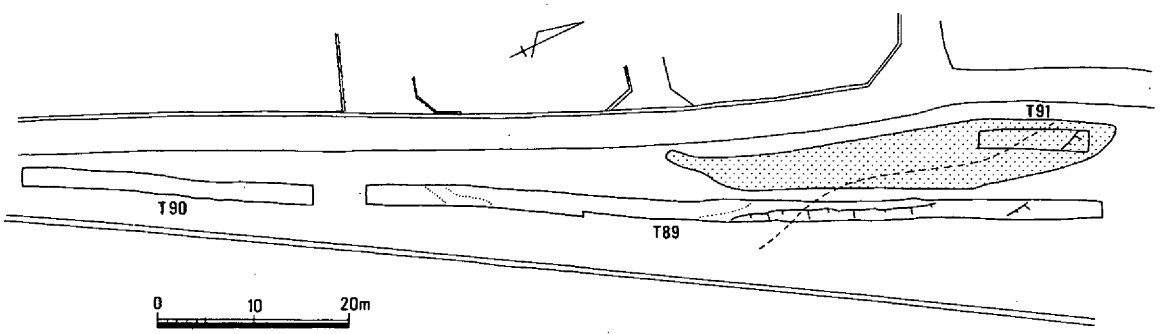
第５節　大田西奥田遺跡

１．遺構配置

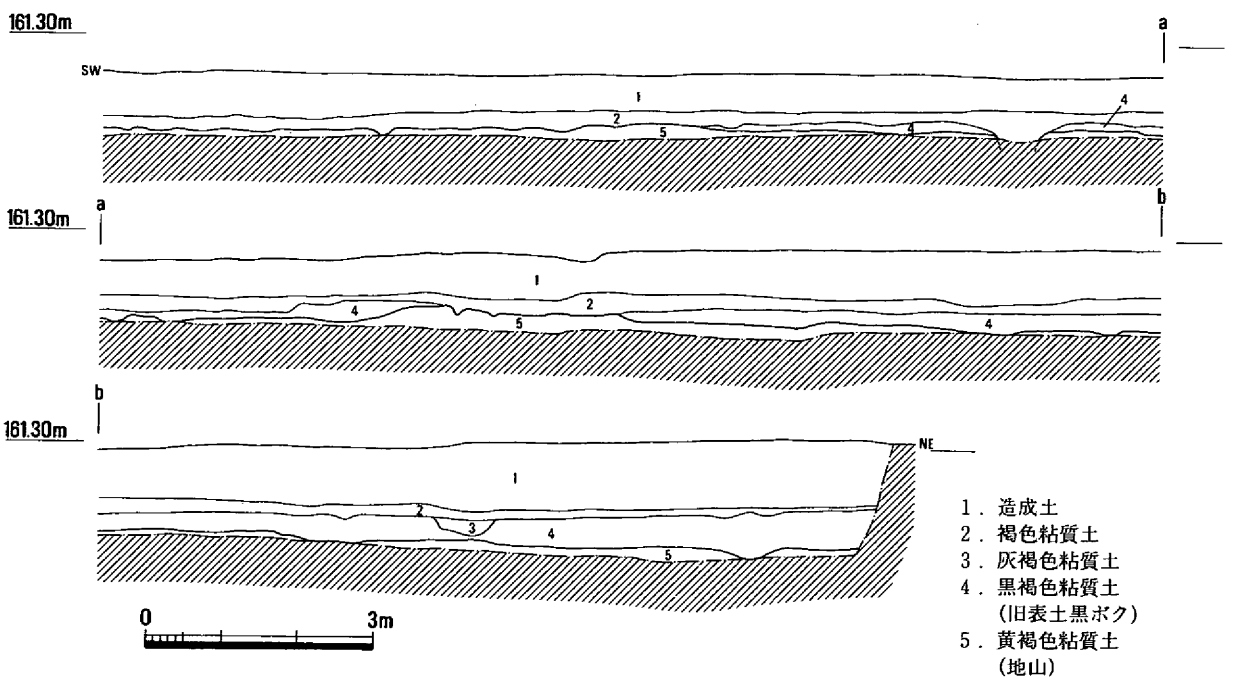
中世の遺構は１区で認められた。調査区周辺の地形はほぼ平坦で、集落等の存在も予想されたが、実際には柱穴群を検出したに留まる。トレンチ調査時にＴ91において柱穴を確認したため、その周囲を追加調査した結果、総数８基が検出された。柱穴は調査区の北端近くに集中し、その配置から建物を想定することも可能ではある。しかし調査範囲の制約のため確定はできなかった。なお直接遺構と関係はないが、Ｔ89からＴ91の北端部にかけては自然の谷状地形の肩が通っている。

調査区基本層序は第342図に示す通りである。近世以降の造成・削平により旧表土（黒ボク）の残りは悪く、主に北側の谷の部分に残存していたにすぎない。第341図に示す、Ｔ89・91を横断する破線の右側がその範囲である。

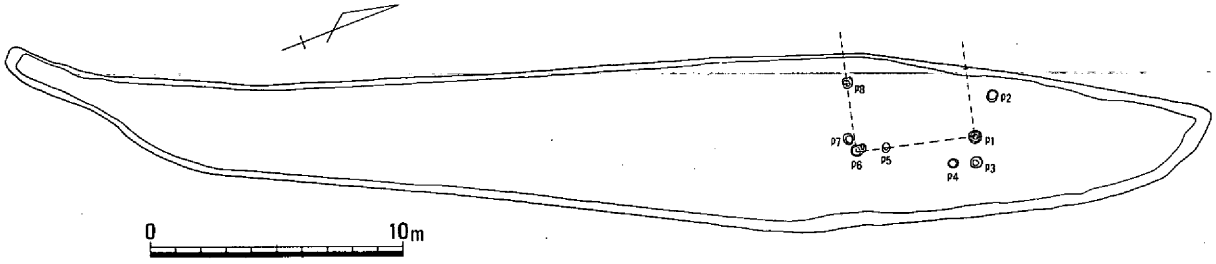
（岡本泰）



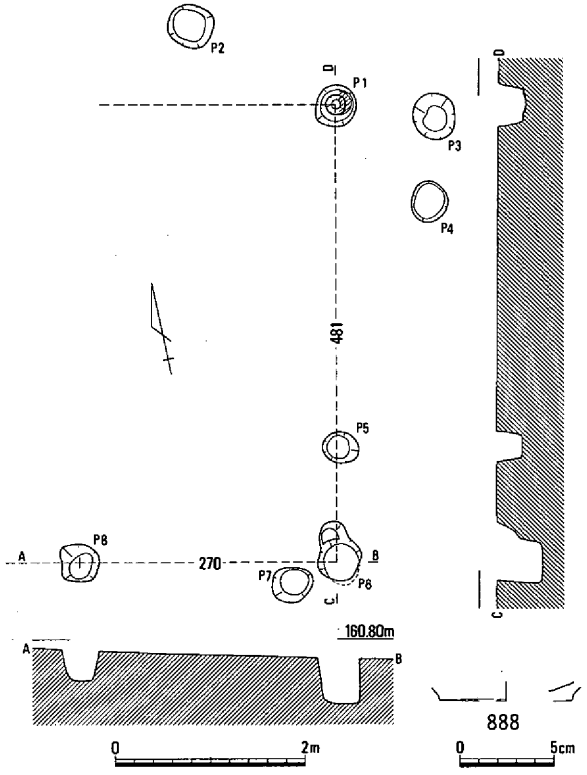
第341図　大田西奥田遺跡１区調査範囲及びトレンチ位置図(1/800)



第342図　トレンチ89西壁土層断面図(1/100)



第343図　大田西奥田遺跡１区全遺構配置図(1/300)



第344図　１区柱穴群(1/80)・出土遺物(1/4)

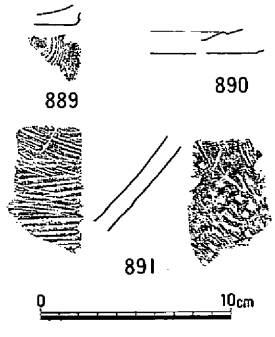
２．遺構・遺物

１区で検出された柱穴８基はいずれも円形で、径は38～53cm、深さは20～52cmを測る。Ｐ１には柱痕が認められた。これらの柱穴は、北側に偏在するその分布状況からみても十分に建物の存在を予想させ、とくにＰ１とＰ６・８は同一建物の可能性も高いが、残りの柱穴は調査区外のため確証を得るに至らなかった。Ｐ５から出土した土師質小皿の底部片**888**により、時期は中世の範囲と考えられる。柱穴群以外には、近世を含め何らの遺構も認められなかった。また、１区の表土や包含層からの出土遺物には中世のものは含まれていない。

２区では、包含層から少量の遺物のみが出土した。３点とも勝間田焼の小片である。**889**は椀で、底部は糸切り痕を残す。**890**は壺の底部と思われる。**891**は甕の胴～底部で、外面には格子叩き目、内面には板状工具による強いハケ目が残存している。　(岡本泰)

３．小結

以上のように、中世の遺構は柱穴群のみで、遺物も少なく、性格を明確にするには至っていない。しかしその配置状況は建物の存在を示唆するものとも考えられ、調査区外に更に当該時期の遺構群が存在する可能性は高いといえる。　(岡本泰)



第345図　大田西奥田遺跡２区包含層出土遺物(4)(1/4)

注

（注１）平井泰男・光永真一『荒神風呂遺跡　荒神風呂古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告76　岡山県教育委員会　1990年

（注２）福田正継・高畑知功「野田畝遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査11』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21　岡山県教育委員会　1977年

第８章　近世の遺構と遺物

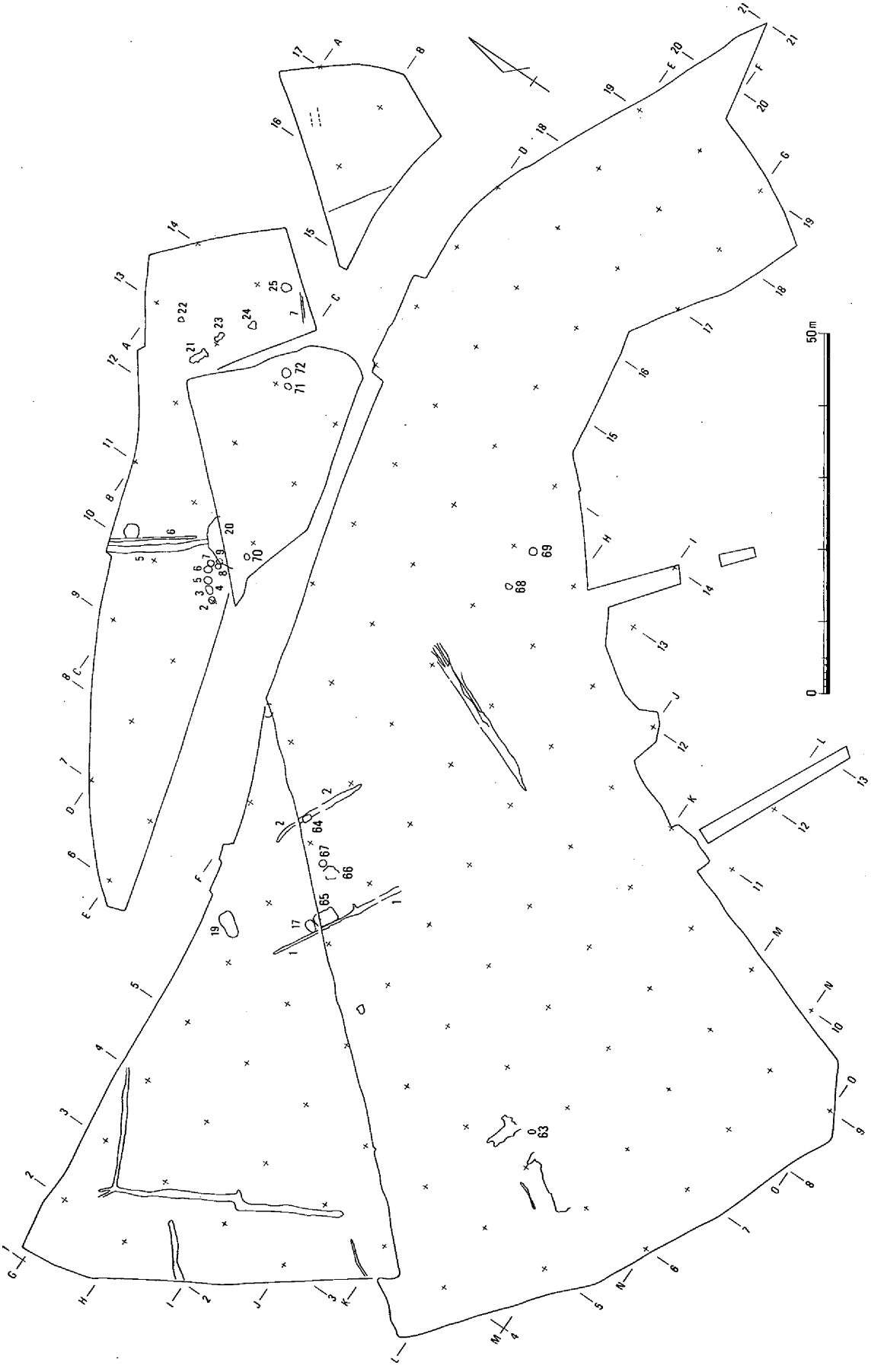
第１節　概要

調査対象地内で近世の遺構が多数検出されたのは、南部の丘陵尾根筋の末端に形成された広い平坦部上である。遺跡名でいえば大田茶屋遺跡・大田大正開遺跡・大田障子遺跡である。３遺跡は広い平坦部上に隣接していて、遺構の配置から考えれば、一つの集落として捉えることが可能と判断される。集落の中心部は大田茶屋遺跡の東地区にあったとみられるが、西地区においても各種の遺構が検出され、家屋が存在したものと推定される。大田大正開遺跡では、南端の２区で掘立柱建物が検出され、居住域がこの付近まで広がっていたことを示している。大田大正開遺跡の全容は不明であるが、３区でも墓があり、溝からは遺物が出土するなど、日常の生活領域にあったことは確かである。大田障子遺跡の近世遺構はきわめて少ない。これは後世の開墾の影響も大きかったと思われるが、もともと集落の縁辺部にあたっていたものとみられる。大田障子遺跡から東へ向かっては丘陵の裾部となり、斜面の傾斜もやや急になっていくようである。

北部の大田西奥田遺跡では、今回の発掘調査では遺物しか出土しなかったが、市道の拡幅工事に伴って津山市教育委員会が実施した発掘調査によって近世の火葬墓群が検出された（注１）。調査対象地内の墓地としては、県道の新設工事に伴って発掘調査を実施した大田茶屋遺跡２区でも木棺墓群が検出されている。この墓地は居住域に近接しているため、大田西奥田遺跡１区で中世の柱穴群が検出されていることも考え合わせ、大田西奥田遺跡の火葬墓群の周辺に集落の存在した可能性がある。

大田茶屋遺跡では近世に入っても掘立柱建物が数多く建築される。掘立柱建物であるために建て替えが行われるが、同一地点における建て替えが頻繁に認められる。このことは、屋敷地が固定されていることを意味するものと考えられる。このような視点で建物の配置状況を眺めると、４ないし５棟の中心建物を抽出することができる。この中心建物に数棟の小形建物が付属するが、中心建物の規模に差があるように、小形建物をもたない屋敷地も存在する。この屋敷地の分布と中世の建物の配置を重ねると、かなり類似していることがわかる。中世の大形建物が近世のそれぞれの屋敷地付近に位置している。空白期がありながら、近世集落が中世集落と何らかの関係をもっていた可能性もある。大田茶屋遺跡からは17世紀後半の肥前染付が出土していて、ある程度の高級品とされる。一般の農村集落ではなく、ある程度の身分をもった階層の人々が居住していたものと考えられる。

江戸時代の後期、19世紀に入ると、桟瓦が大量に出土するようになる。それ以前にも軒丸瓦が出土することから瓦葺きの建物が若干存在していたとみられるが、この時点になって多くの建物が瓦葺きに変わったと考えられる。瓦片を出土する掘立柱建物はほとんど認められないことから、建物の構造も礎石建物に変化したと推定される。後世の削平のために、これ以降の建物の検出は不可能となるが、江戸時代後期の土壙は遺跡全域に分布し、集落が継続していたことは明らかである。土壙から出土する遺物は19世紀前半から幕末までのものは多く認められるが、明治以後のものはほとんどみられなくなる。この変革の時代に集落は終末を迎えたものと思われる。（岡本寛）



第346図　大田茶屋遺跡西地区（4－6・11区）近世主要遺構配置図(1/800)

第２節　大田茶屋遺跡

１．遺構配置

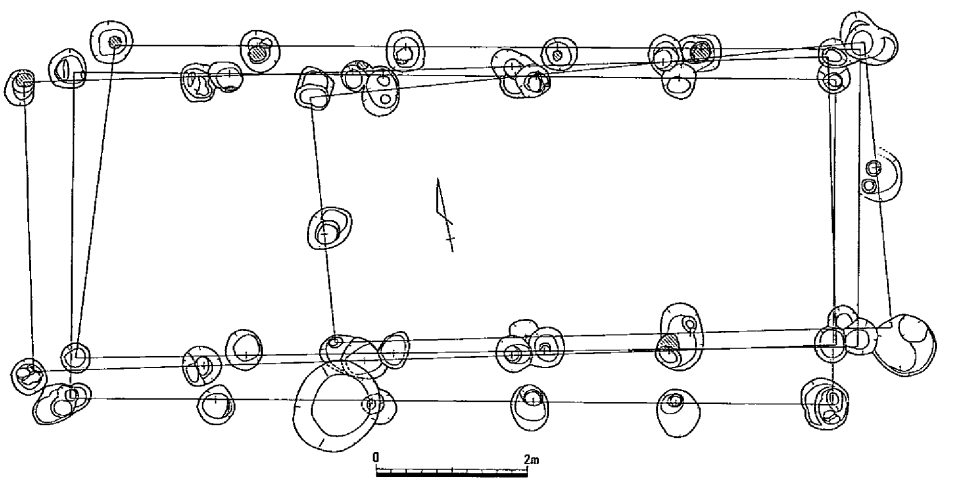
近世の遺構と遺物は大田茶屋遺跡の全域で検出された。掘立柱建物43棟、柱穴列12列、瓦窯１基、池１カ所、穴蔵３基、墓６基、土壙79基などである。しかし、その密度については地区ごとの差が大きい。掘立柱建物が検出されたのは東地区のみで、それも北半に集中していた。

西地区では掘立柱建物は検出されなかったが、丘陵頂部では江戸時代後期の土壙が複数存在し、県道部分の２区でも石組みの溝が検出された。この地区には中世の大形建物が存在していたため、その頃から屋敷地として意識されていたと思われ、礎石建物が存在していた可能性は高い。

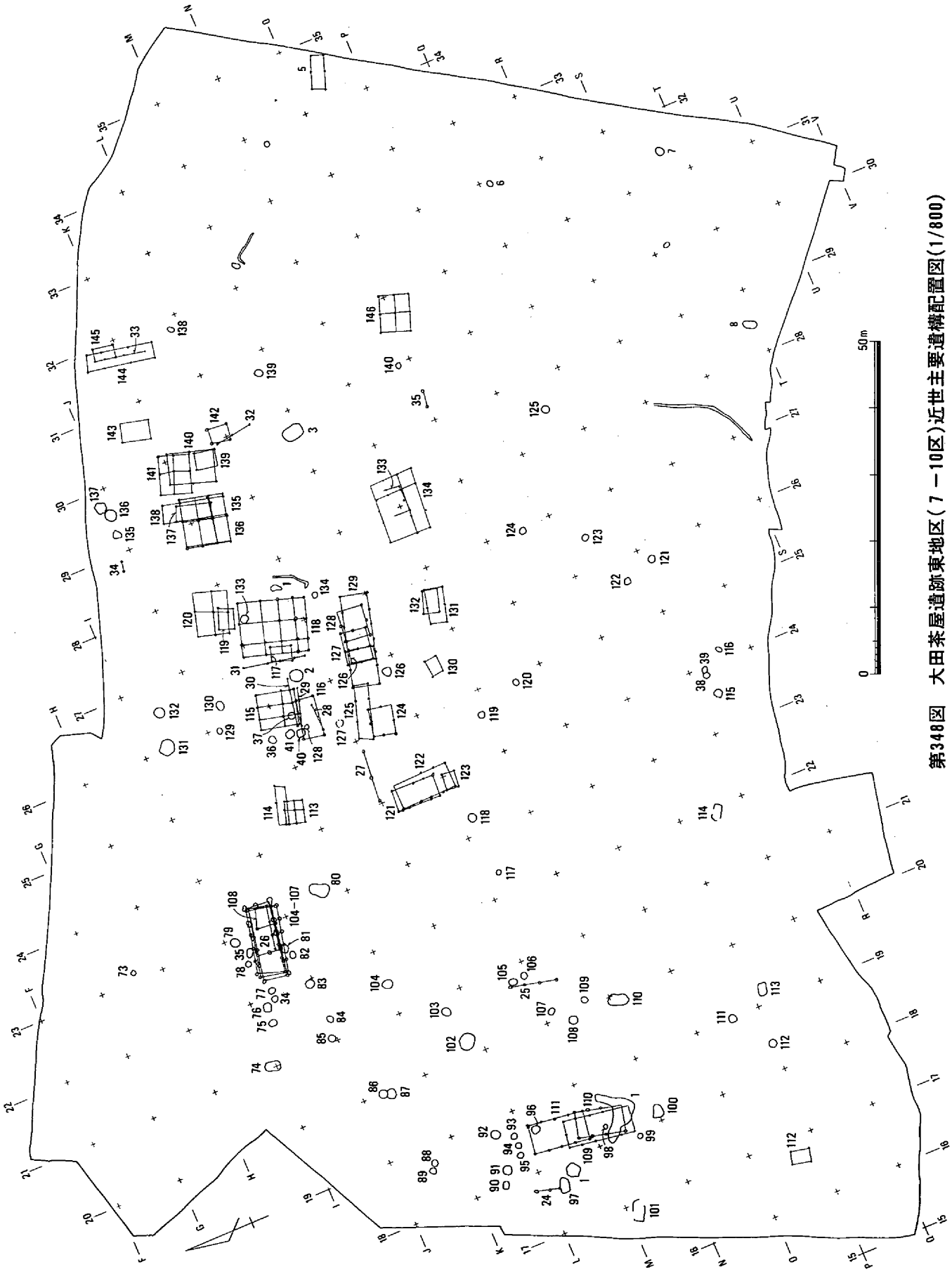
東地区の掘立柱建物では同一地点での建て替えが多く認められ、屋敷地が固定化している。大形の建物を抽出することによって、その屋敷地の範囲を推定することができる。もっとも西に位置しているのは18Ｌ，Ｍ区のあたりで、建物109～111が存在する。Ａ地点と呼ぶ。穴蔵１があり、時代が下って池１も設けられる。土壙110のような桶を２個並べて埋置したものは便所の可能性が指摘される（注２）。高級品とされる肥前染付や丸瓦を出土した土壙102は、この地点の北東角に位置する。22，23Ｉ区には建物104～107が所在する。Ｂ地点と呼ぶ。桶が２個埋置される状態になる土壙86・87や方形の大形土壙74が周辺にある。墓34・35が建物に近接するが、墓34は遺物が出土せず、墓35も方形で石組みがあり、他の墓と形態を異にしていることから、墓とすることに少し疑問がある。Ａ地点、Ｂ地点ともに付属する小形建物は検出されていない。

Ｃ地点の中心建物は26，27Ｋ，Ｌ区に所在する建物118である。方形に近い大形建物で、やや特殊な形態をしている。周辺には建物115・120・122・129などの大形建物が集中し、特異な空間を形作っている。小形建物も多く付属する。時代は下るが、瓦窯１は建物118と重複関係にある。墓36・37があり、建物115と近接ないしは重複する。建物115と建物118の間には穴蔵２が掘られている。便所になりそうな遺構は周辺にはみられず、かなり南東に離れるが、21Ｐ区に２個の桶が埋置されている土壙114が検出されている。土壙114から20ｍ東南東には連接した墓38・39があり、墓39からは副葬品を入れた小箱が出土している。なお、江戸時代後期のものだが、Ｃ地点から２個体分の鯱瓦片が出土している。

28，29Ｊ，Ｋ区に位置する建物135・136は方形の平面形で、Ｃ地点に含まれる可能性もあるが、南に穴蔵



第347図　建物104～107重複関係(1/100)



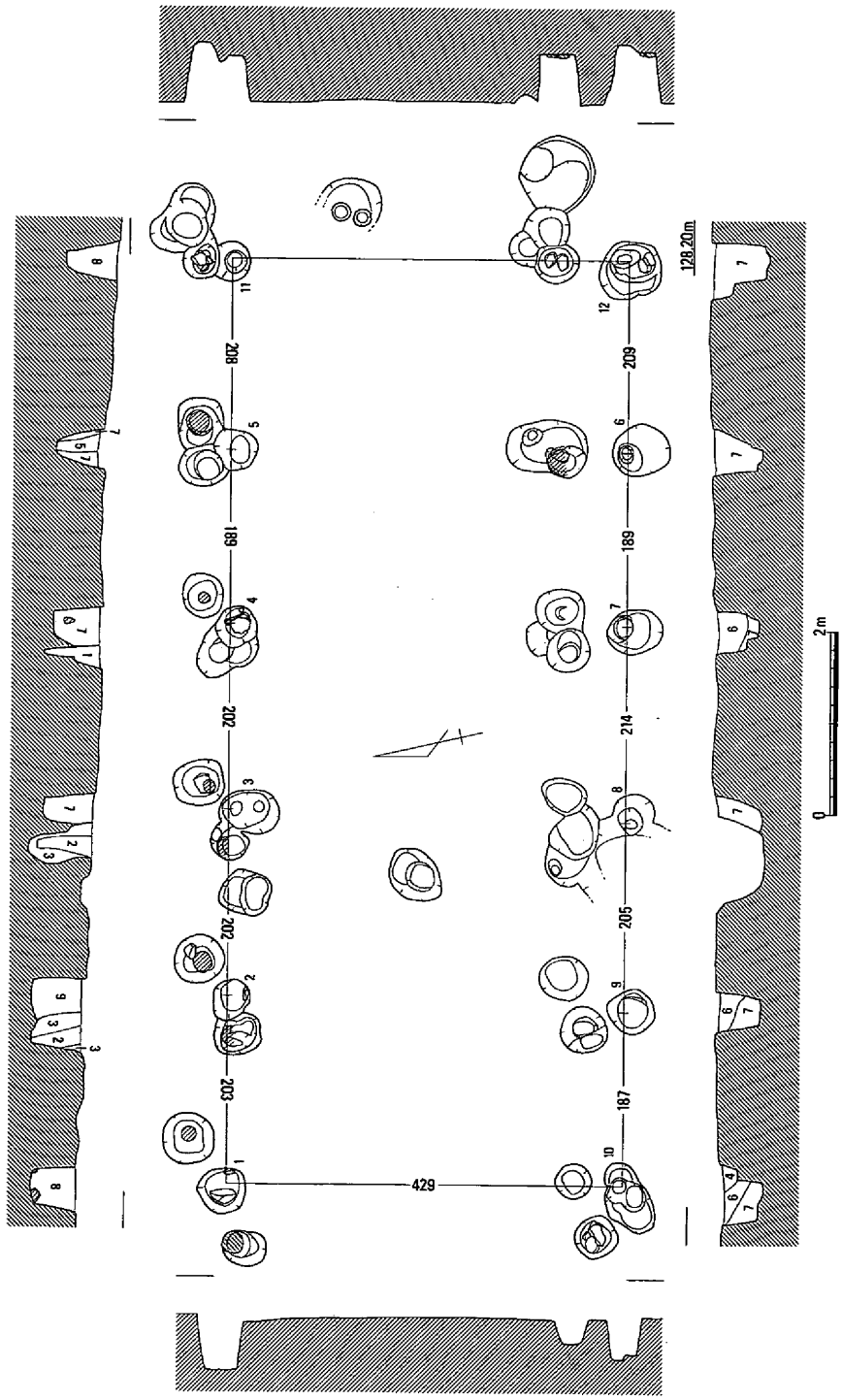
第348図　大田茶屋遺跡東地区（7－10区）近世主要遺構配置図(1/800)

３を伴い、東には付属建物も存在することから、Ｄ地点とする。Ｄ地点の南22ｍに建物133がある。大形の建物ではあるが、平面形がかなり歪み、柱穴も少し小さく、中心建物とはいいにくい。周囲には穴蔵のような大形の土壙もないことから、Ｄ地点に含まれるものと考えておく。　　（岡本寛）

２．遺構・遺物

建物104（No257）（第349図、図版９）

22，23Ｉ区に位置する。３回の建て替えにより、４棟の建物が重複しており、建物104はその最初

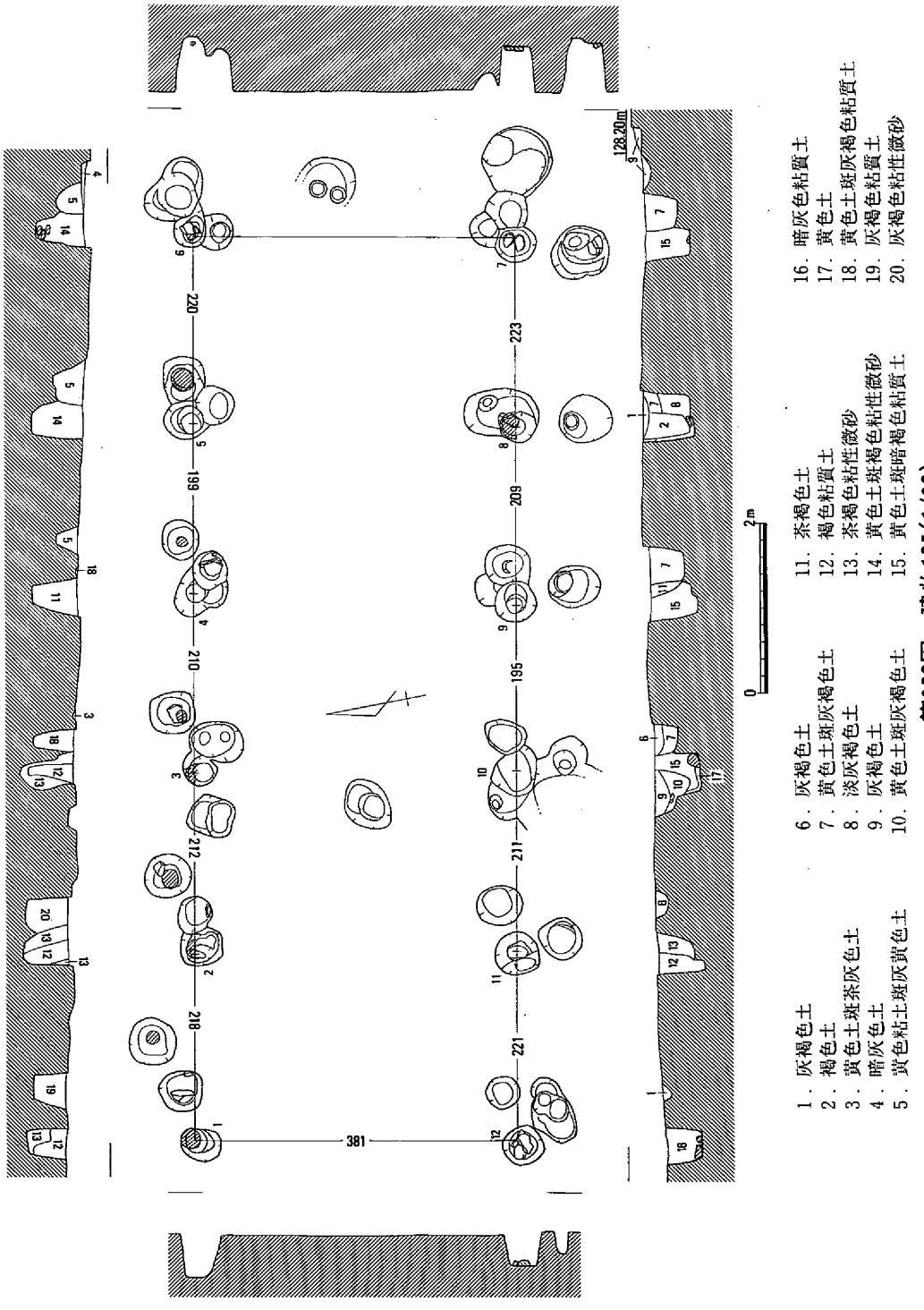


第349図　建物104(1/80)

に建てられた５×１間の掘立柱建物である。平面形は梁間と桁行の比率が１：2.34を測る長方形を呈し、床面積は43.1㎡である。各柱穴の平面形は検出面で径39～82cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ44～65cmを測る。柱穴の土層断面に残された柱痕跡から、径13～24cmの木材を柱材として使用していたものと考えられる。出土遺物として磁器片と鉄滓等があり、建物・柱穴の規模や棟方向、さらに建物106との重複関係から江戸時代前期の遺構と考えられる。（佐藤）

建物105（No262）（第350図、図版９）

22，23Ｉ区に位置する。重複する４棟のうち２番目に建てられた５×１間の掘立柱建物である。平

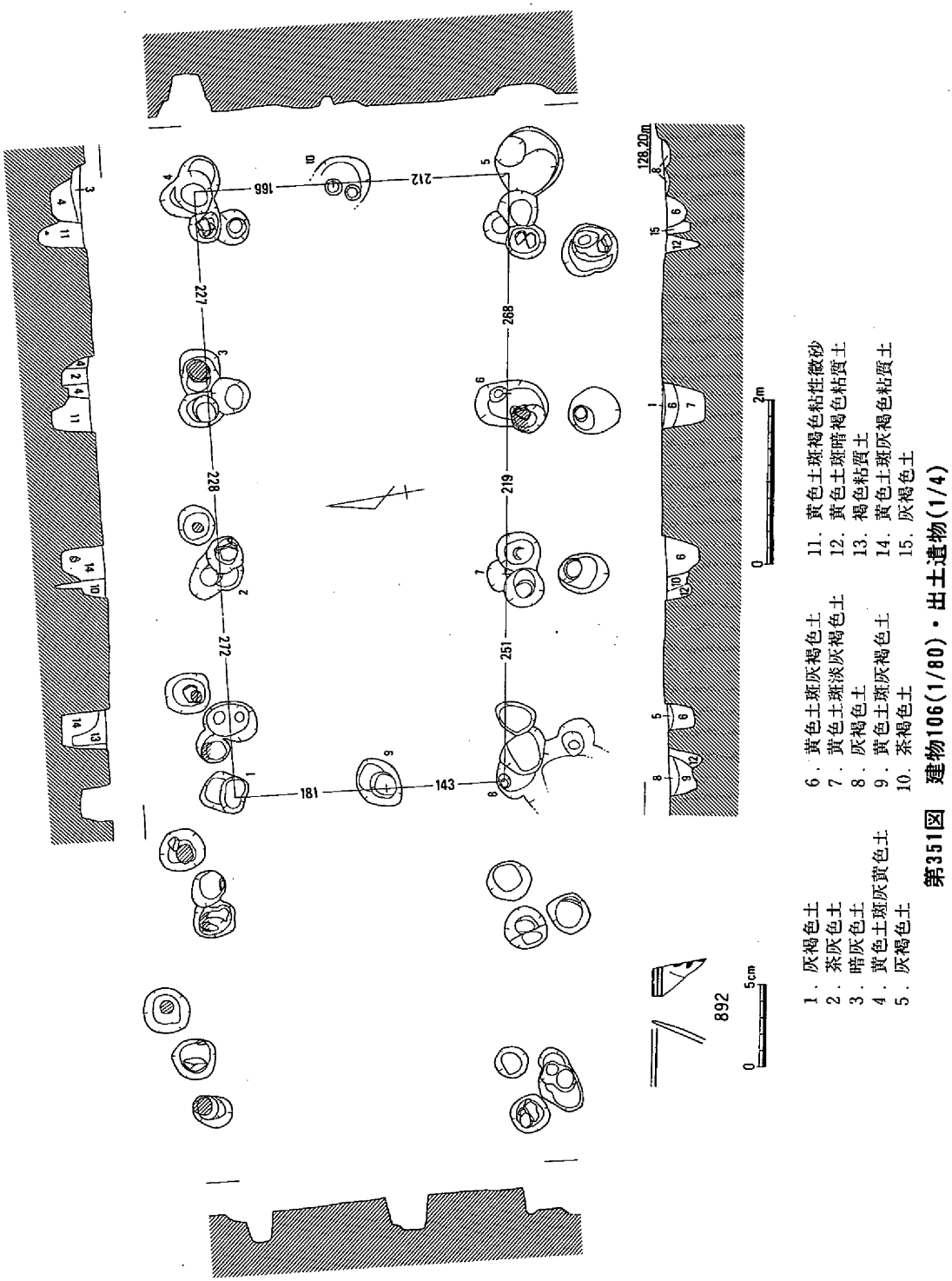


第350図　建物105(1/80)

面形は梁間と桁行の比率が１：2.78を測る長方形を呈し、床面積は40.3㎡を測る。各柱穴の平面形は検出面で径47～87cmの不整形な楕円形を呈し、検出面からの深さ40～62cmを測る。柱穴６・８・12では礎石が据えられ、柱痕跡から径13～29cmの柱材を使用していたと考えられる。出土遺物に鉄釘がある。時期は断定できないが、建物104の建て替えであることから江戸時代前期と考えられる。（佐藤）

建物106（No277）（第351図、図版９）

22，23Ｉ区に位置する。重複する４棟の建物のうち、３番目に建てられた３×２間の掘立柱建物で

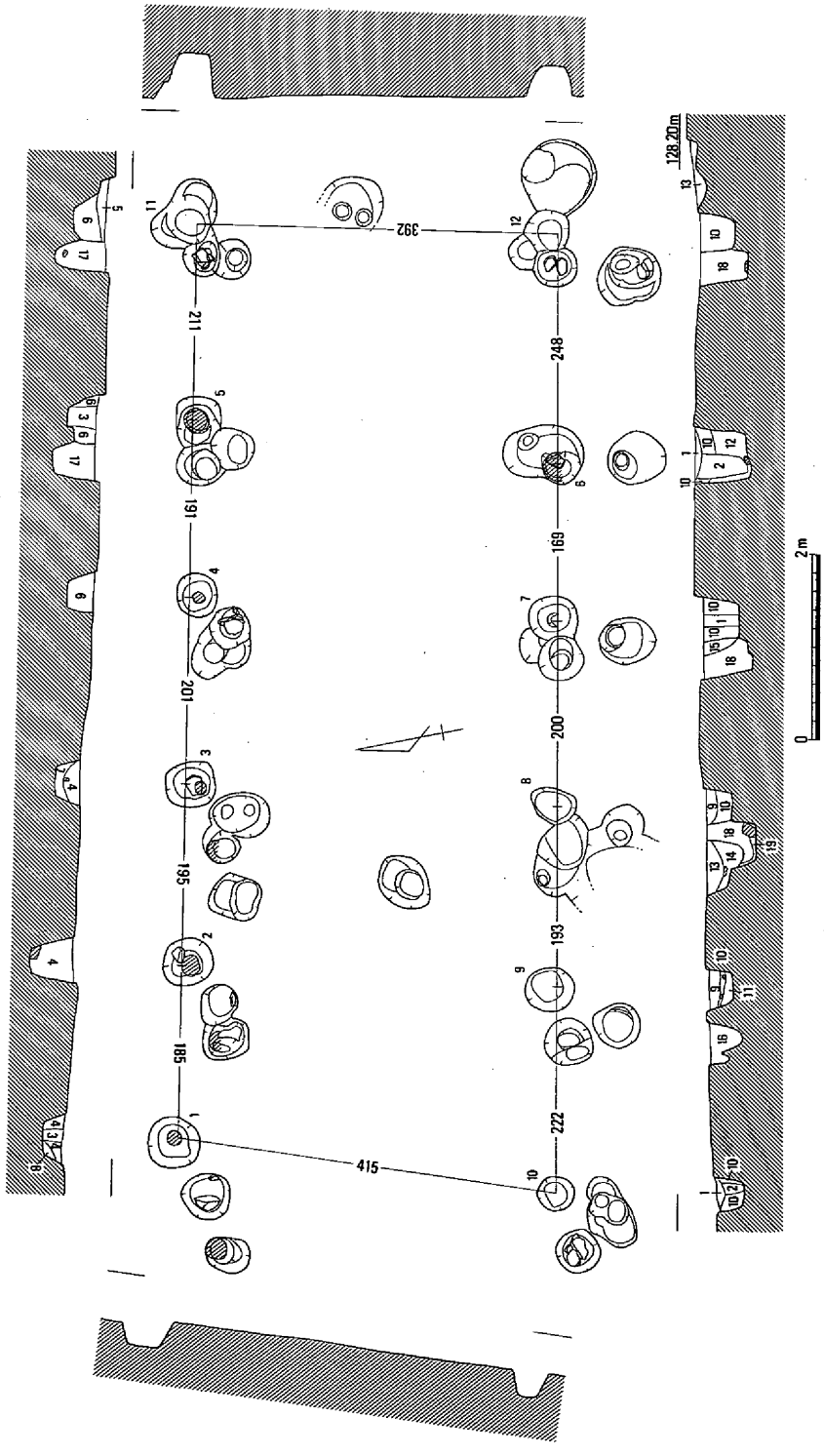


第351図　建物106(1/80)・出土遺物(1/4)

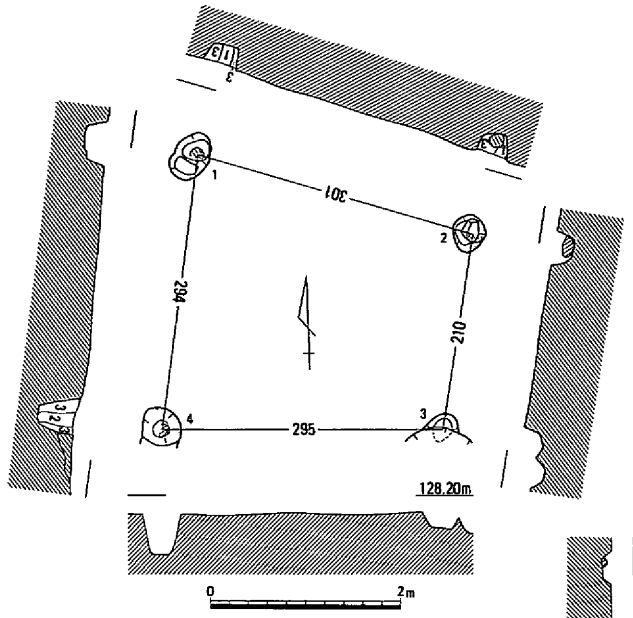
ある。平面形は梁間と桁行の比率が１：1.95を測るやや歪んだ長方形を呈し床面積は23.7㎡である。各柱穴の平面形は検出面で径20～87cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ10～50cmを測る。柱痕跡から16～29cmの柱材を使用していたと考えられる。柱穴２から出土した**892**は肥前の染付碗で、外面には花の文様の一部が認められる。大橋康二氏によると、17世紀後半のものとのことである。　（佐藤）

建物107（No255）（第352図、図版９）

22，23Ｉ区に位置する。重複する４棟のうち、最後に建てられた５×１間の掘立柱建物である。平



第352図　建物107(1/80)



1．灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．白黄色粘土斑褐灰色粘質土

第353図　建物108(1/80)

建物108（No263）（第353図）

22，23Ｉ区に位置する１×１間の掘立柱建物である。柱穴２には礎石が据えられている。

出土遺物がないため時期は断定できないが、建物104～107と前後関係は不明ながらも重複していることから、江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

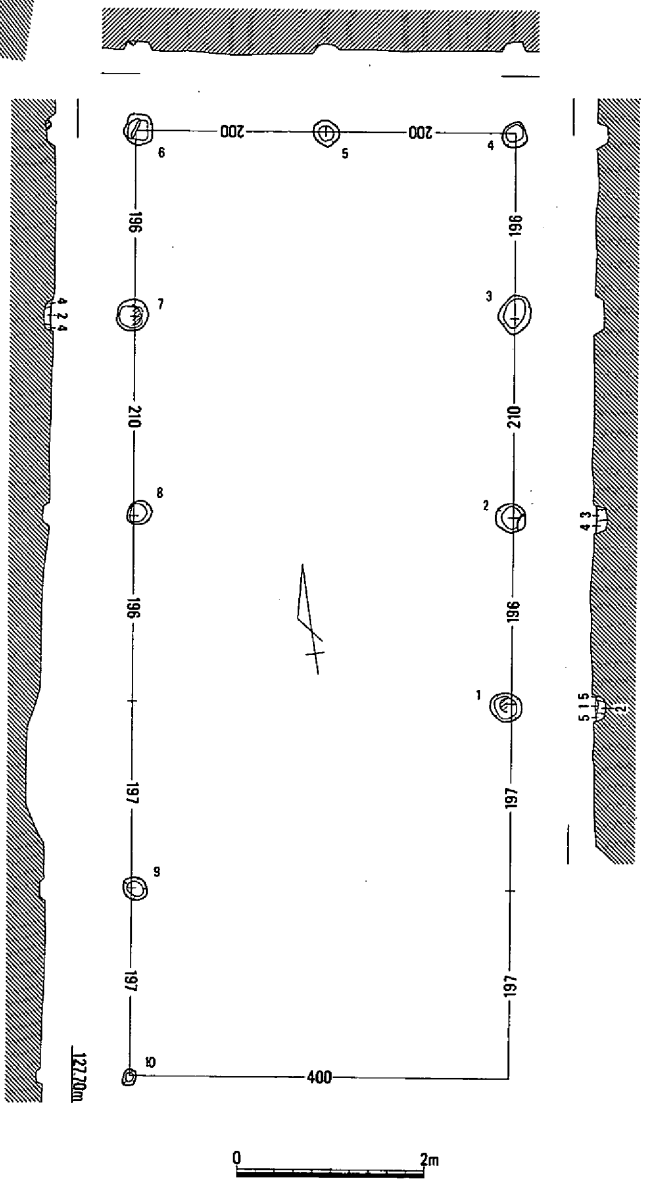
建物109（No148）（第354図）

18Ｌ・Ｍ区に位置する５×２間の建物である。建物110・111、土壙98、池１と重複し、池１よりも古い。建物の規模は、桁行996cm、梁間400cm、面積39.8㎡を測る。柱穴は円形で、径18～41cmを測り、柱痕の遺存も認められるが、削平のため残りは悪く、深さは最大のものでも15cmにすぎない。一部の柱穴は完全に消失している。

遺物は出土せず、時期決定の根拠に乏しいが、棟方向や埋土の類似から、江戸時代の建物と判断した。　（岡本泰）

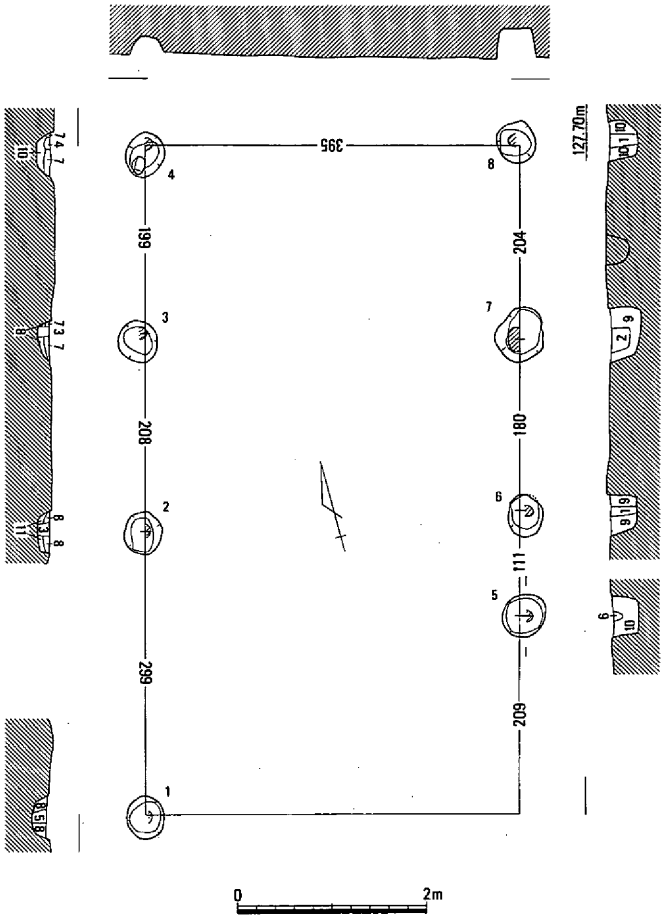
面形は梁間と桁行の比率が１：2.49を測るやや歪んだ長方形を呈し、床面積は40.4㎡である。各柱穴の平面形は検出面で径40～87cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ10～50cmを測る。柱痕跡から径15～29cmの柱材を使用していたと考えられる。

出土遺物に備前焼のすり鉢片がある。建物104～106の建て替えであることから江戸時代前期の遺構と考えられる。　（佐藤）



1．褐灰色粘質土
2．黄茶褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．黄茶褐色粘質土斑淡褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘質土
5．褐灰色粘質土斑明黄茶褐色粘質土

第354図　建物109(1/80)



1．黄褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土斑黄灰褐色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．黄茶褐色粘質土斑褐灰色粘質土
7．黄茶褐色粘質土斑褐灰色粘質土
8．黄茶褐色粘質土斑灰褐色粘質土
9．褐灰色粘質土斑灰黄褐色粘質土
10．明黄茶褐色粘質土
11．黄茶褐色粘質土斑黄灰褐色粘質土

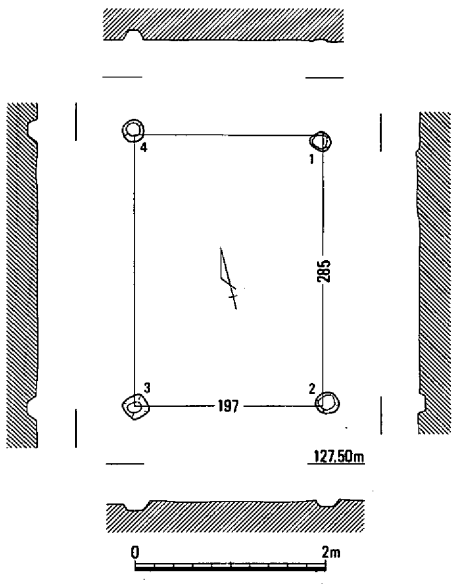
第355図　建物110(1/80)

少量出土した遺物から、時期は江戸時代に比定される。(岡本泰)

建物111（No132）（第358図）

18L区に位置する４×１間の建物である。建物109・110、土壙96と重複するが新旧関係は不明。規模は、桁行843cm、梁間445cm、面積36.8㎡を測る。柱穴は円～楕円形で、径は34～39cmを測り、柱痕も認められた。

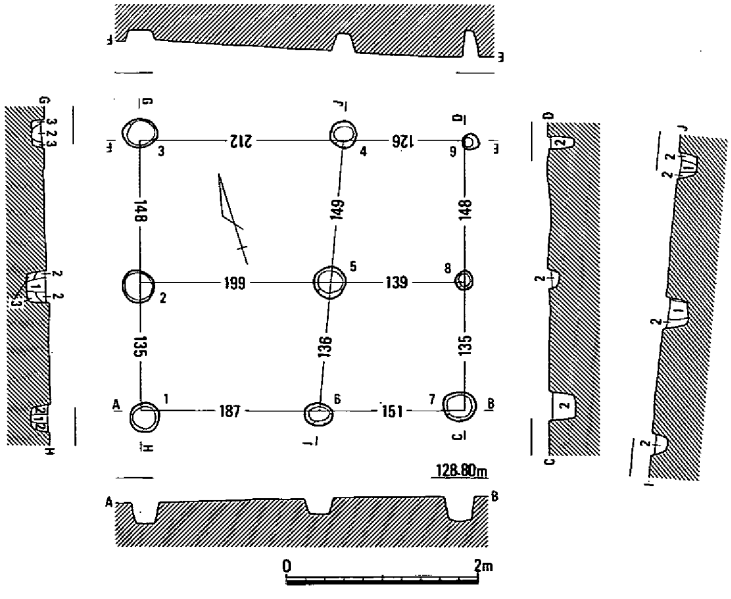
遺物はないが、棟方向や埋土か



第356図　建物112(1/80)

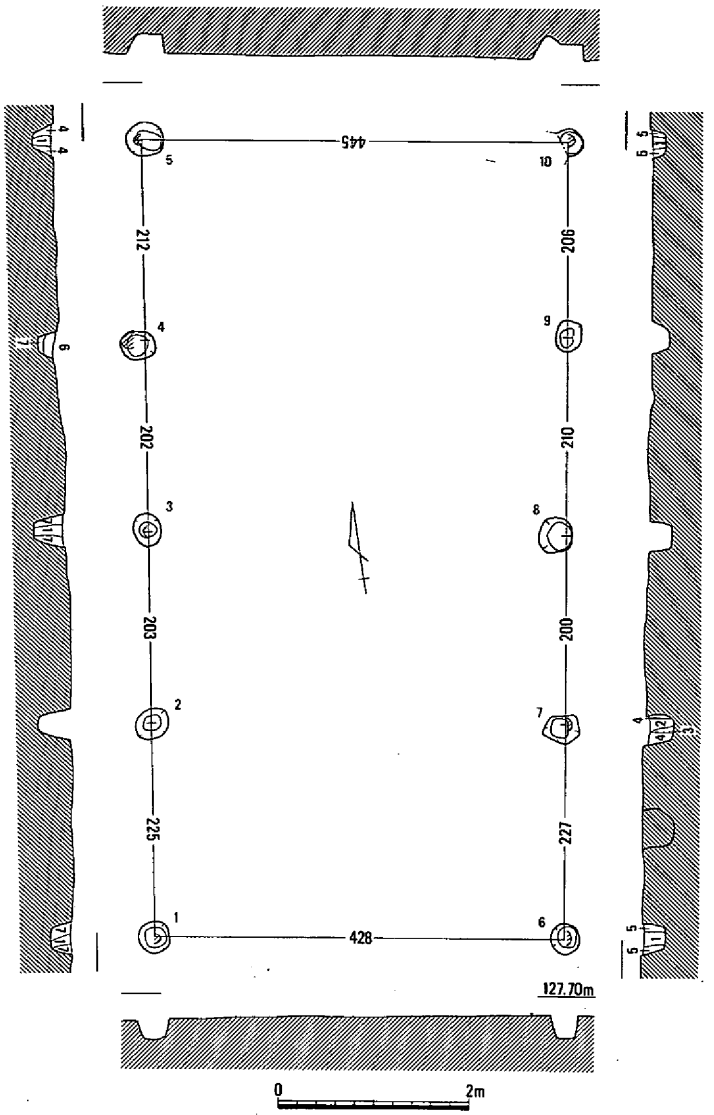
建物110（No139）（第355図）

18L・M区に位置する３ないし４×１間の建物である。建物109・111、土壙98・池１と重複し、池１より古い。規模は、桁行706cm、梁間395cm、面積27.9㎡を測る。東桁行の柱穴５・６間の距離は111cmと極めて近接し、変則的な配置となっている。



1．暗褐色粘質土
2．黄色土斑灰褐色粘質土
3．黄褐色粘質土

第357図　建物113(1/80)



1．褐灰色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．淡灰黄褐色粘質土
4．黄茶褐色粘質土斑灰褐色粘質土
5．黄茶褐色粘質土斑黄褐灰色粘質土
6．褐灰色粘質土
7．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘質土

第358図　建物111(1/80)

建物115（No303.305.308）

（第360図）

25,26Ｊ,Ｋ区に位置する２×３間の掘立柱建物で、平面方形を呈し床面積は31.5㎡である。各柱穴は検出面で径22～45cm、深さ10～32cmを測る。建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

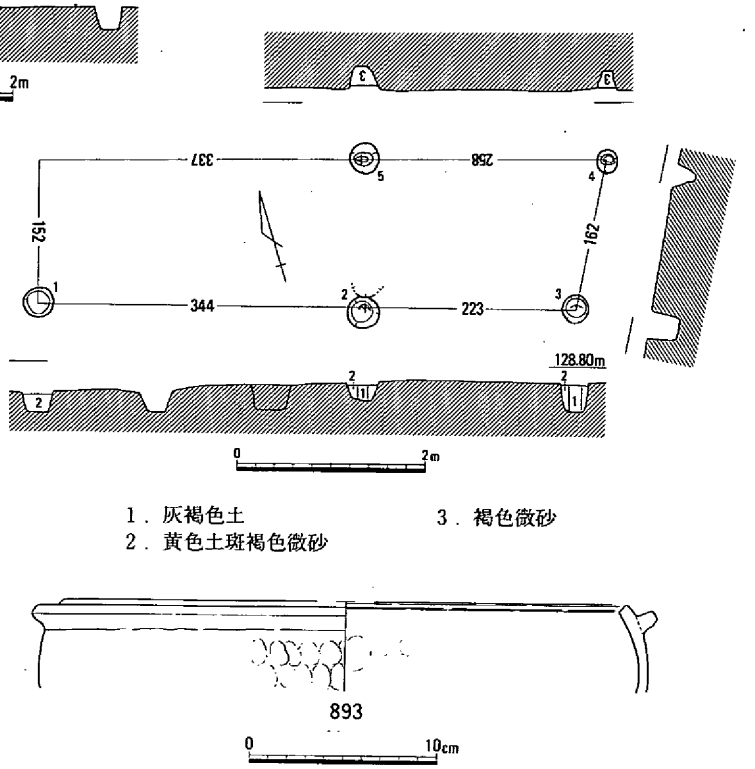
ら江戸時代に比定され、その中でも後期に属すると思われる。　（岡本泰）

建物113（No280）（第357図）

24Ｊ区に位置し、建物114と一部重複する。２×２間の掘立柱建物で平面形は梁間と桁行の比率が１：1.19を測る長方形を呈し、床面積は9.6㎡である。各柱穴の規模は検出面で径18～38cm、深さ15～30cmを測る。出土遺物に鉄釘や少量の土器片がある。建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

建物114（No365）（第359図）

24Ｊ区に位置し、建物113と一部重複する。２×１間の掘立柱建物で平面形は梁間と桁行の比率が１：3.91を測る長方形を呈し、床面積は9.0㎡である。各柱穴の規模は検出面で径24～34cm、深さ20～30cmを測る。柱穴３から瓦質の羽釜が出土したが、棟方向から江戸時代の遺構と判断した。（佐藤）



1．灰褐色土
2．黄色土斑褐色微砂
3．褐色微砂

第359図　建物114(1/80)・出土遺物(1/4)

建物116（No309）

（第361図）

26K区に位置する１×１間の掘立柱建物である。

平面形は梁間と桁行の比率が１：1.96を測るやや歪んだ長方形を呈し、床面積は17.3㎡である。

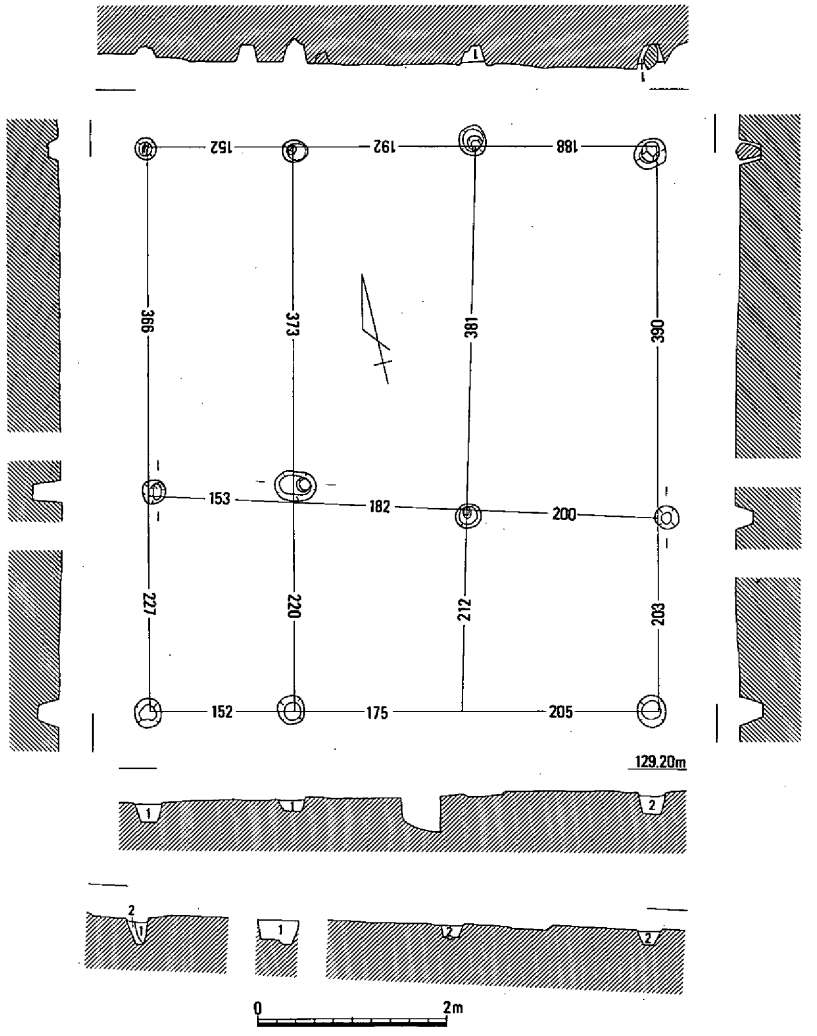
各柱穴は検出面で径29～40cm、深さ８～32cmを測る。

出土遺物として弥生土器の破片があるが、建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

建物117（No344）

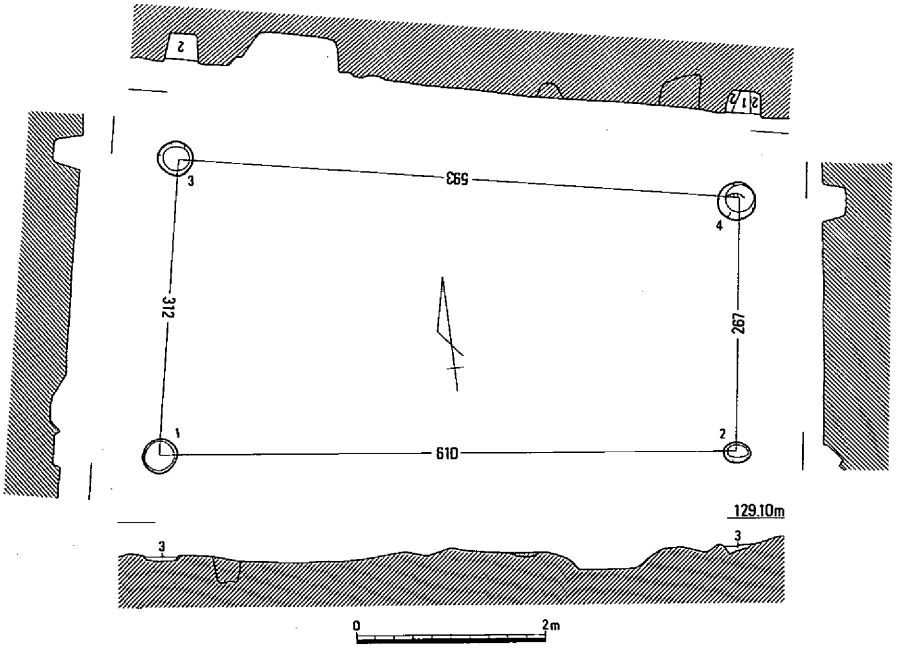
（第363図）

26K区に位置する１×１間の掘立柱建物である。平面形は梁間と桁行の比率が１：1.36を測る長方形を呈し、床面積は7.0㎡である。



１．黄色土斑黒灰色土　　２．褐色粘性微砂

第360図　建物115(1/80)



１．黒灰色土　　２．黄色土斑黒灰色土　　３．黄色土斑褐色土

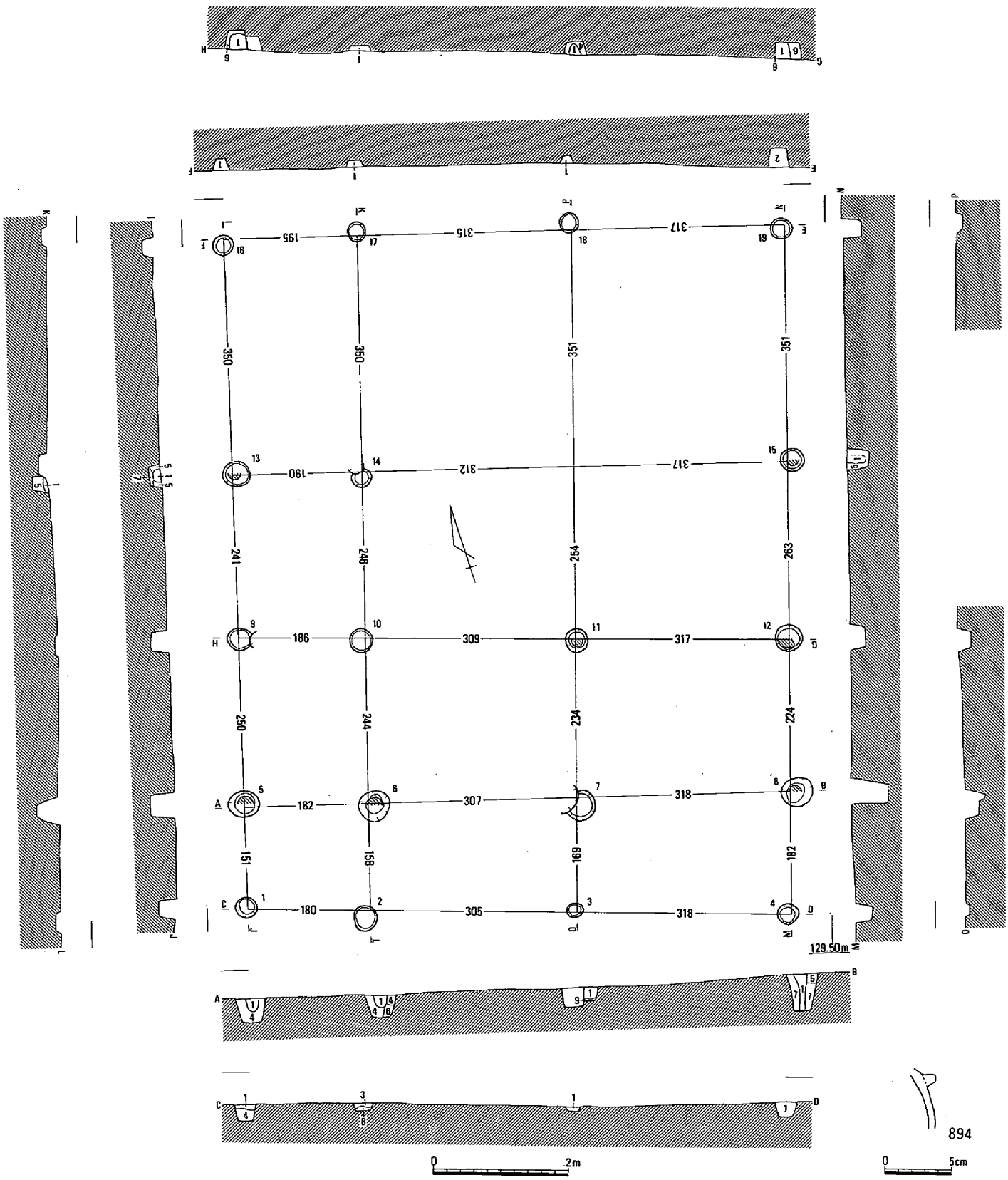
第361図　建物116(1/80)

各柱穴は検出面で径25～27cm、深さ16～20cmを測る。

遺物は柱穴から須恵質の**895**が出土しているが、混入の可能性があり、確実に建物に伴うものか断定できない。

このため、建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と判断した。

（佐藤）



1．暗褐色粘性微砂
2．暗灰褐色粘性微砂
3．茶褐色粘性微砂
4．暗褐色粘性微砂
5．灰褐色粘性微砂
6．褐色粘性微砂
7．暗褐色粘性微砂
8．茶褐色粘性微砂
9．黄褐色粘性微砂

第362図　建物118(1/80)・出土遺物(1/4)

建物118（No310）（第362図、図版９）

26，27K，Ｌ区に位置する。４×３間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.23を測る方形を呈し、床面積は81.7㎡である。各柱穴は検出面で径24～48cm、深さ10～46cmを測る。部分的に確認できた柱痕跡から径19～24cmの柱材を使用していたと考えられる。

柱穴６から出土した瓦質の羽釜**894**は中世のものと考えられるが、混入の可能性があり、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と判断した。（佐藤）

建物119（No353）（第364図）

27Ｊ，Ｋ区に位置する１×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.36を測る長方形を呈し、床面積は7.2㎡である。各柱穴は検出面で径26～34cm、深さ８～40cmを測る。

出土遺物として時期不明の土器片があり、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

建物120（No347）（第365図）

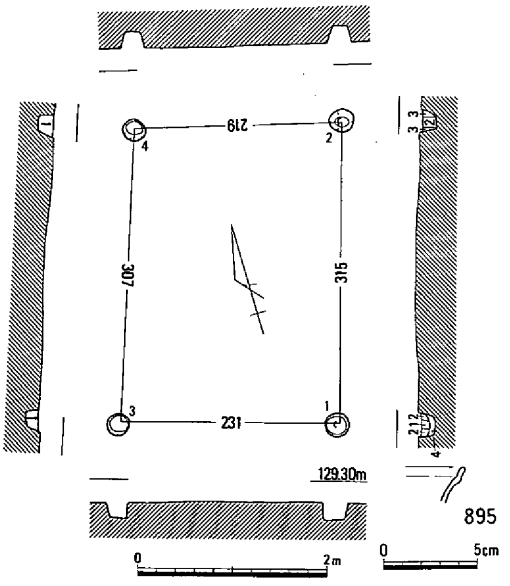
27，28Ｊ，Ｋ区に位置する２×２間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.23を測る方形を呈し、床面積は32.2㎡である。各柱穴は検出面で径26～37cm、深さ８～36cmを測る。

出土遺物がないため時期は断定できないが、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

建物121（No282・361）（第366図）

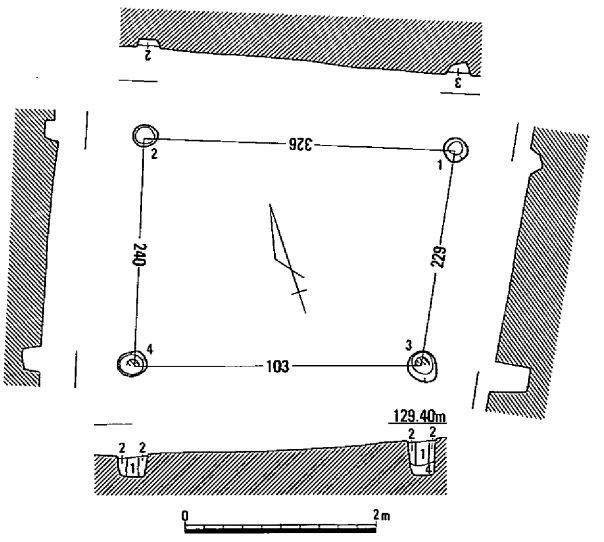
23，24Ｌ区に位置する４×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：2.13を測る長方形を呈し、床面積は21.8㎡である。各柱穴は検出面で径23～40cm、深さ８～20cmを測る。

弥生土器片が出土しているが、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）



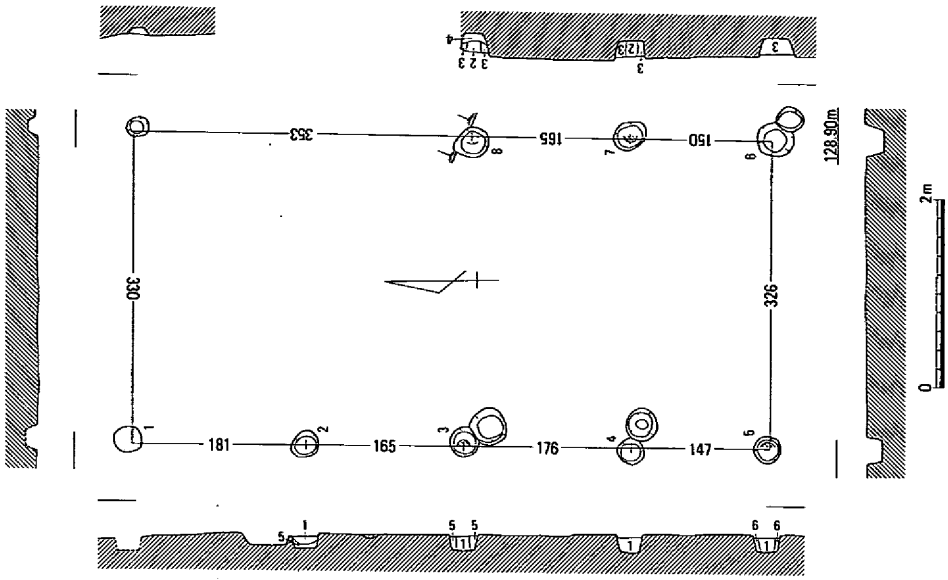
1．暗灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．淡赤褐色粘土斑灰褐色粘質土

第363図　建物117(1/80)・出土遺物(1/4)



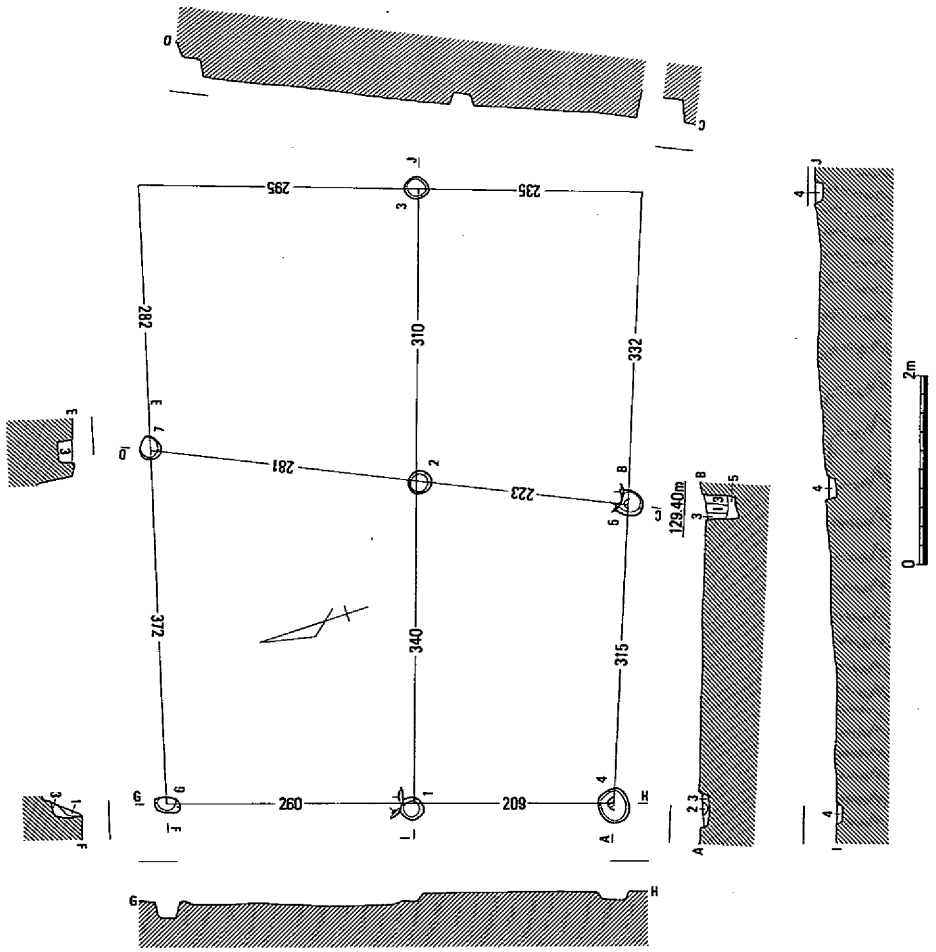
1．暗灰褐色粘質土
2．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
3．黄褐色粘土斑褐灰色粘質土
4．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土

第364図　建物119(1/80)



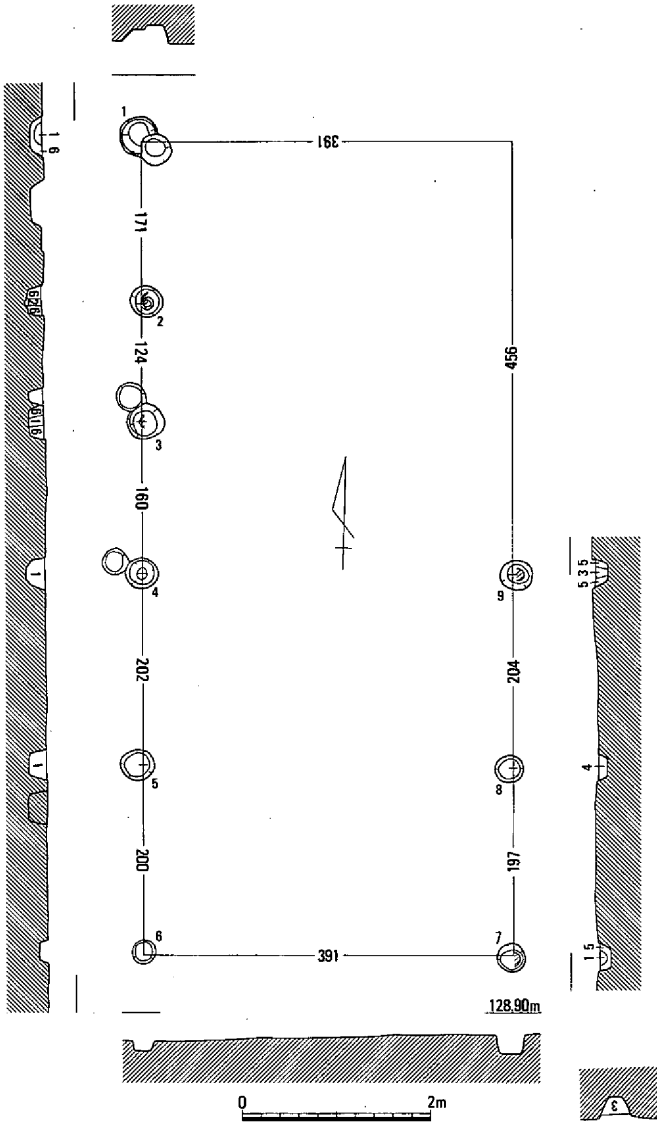
1．黒灰色土　　4．褐灰色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　　5．黄色土斑灰褐色土
3．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土　　6．茶褐色土

第366図　建物121(1/80)



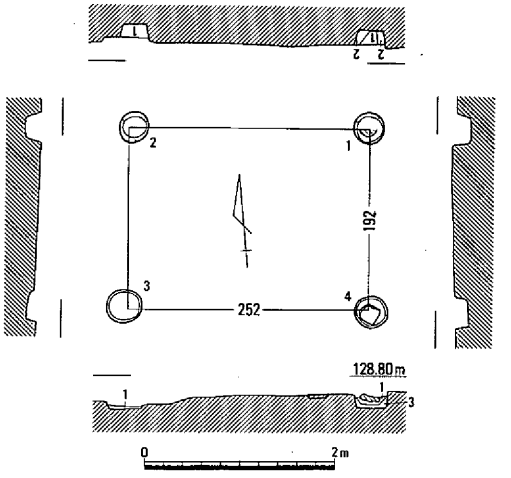
1．暗灰褐色粘質土　　4．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土　　5．黄褐色粘土斑褐灰色粘質土
3．黄褐色粘土斑褐灰色粘質土

第365図　建物120(1/80)



1．黒灰色土　　4．褐色土
2．暗灰褐色粘質土　5．黄色土斑暗灰褐色土
3．褐色土　　6．黒灰色土

第367図　建物122(1/80)



1．黄色土斑黒灰色土　　3．黄色土
2．茶褐色土

第368図　建物123(1/80)

建物122（No281・364）（第367図）

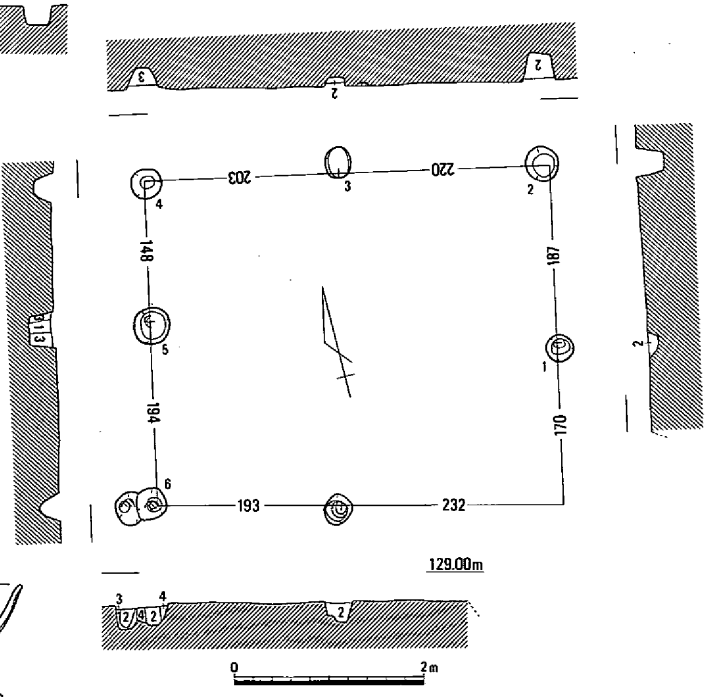
23，24Ｌ，Ｍ区に位置する５×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：2.19を測る長方形を呈し、床面積は33.5㎡である。各柱穴は検出面で径16～39cm、深さ10～20cmを測る。

瓦と磁器片が出土し、建物・柱穴の規模、棟方向からも江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

建物124（No290）（第369図）

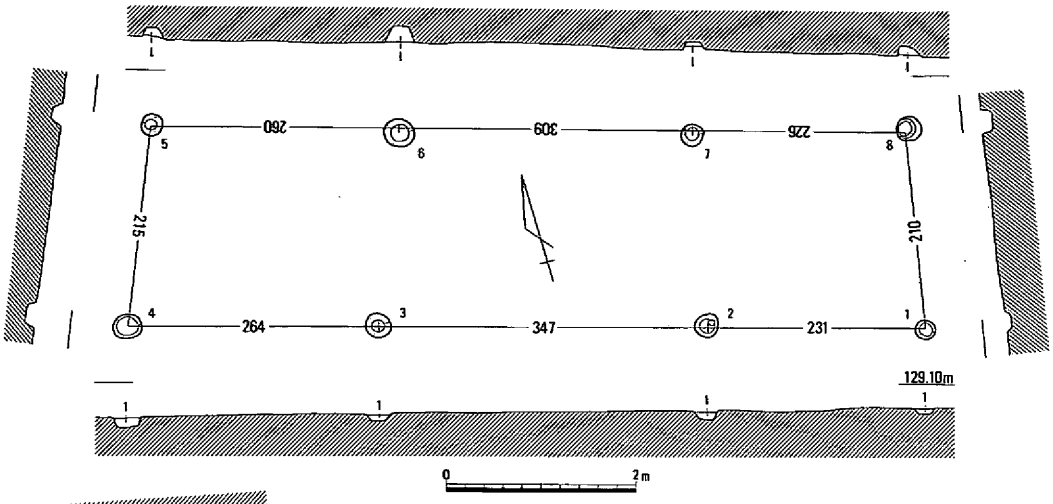
24，25Ｌ区に位置する掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率1:1.19を測る方形を呈し床面積は33.5㎡である。各柱穴は検出面で径22～38cm、深さ９～28cmを測る。

遺物は柱穴２から



1．黒灰色粘質土　　3．褐色粘質土
2．黄色土斑褐色粘質土　4．褐色土

第369図　建物124(1/80)・出土遺物(1/4)



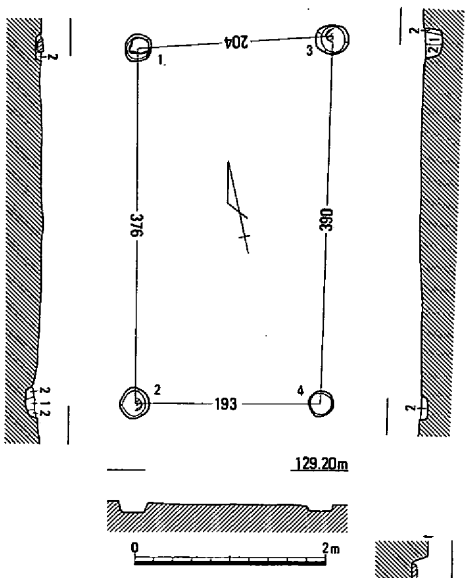
１．黄色土斑黒灰色土

第370図　建物125(1/80)

青磁の碗**896**が出土している。鎬蓮弁は不明瞭で、推定口径は117.5㎜を測る。遺物の時期は14世紀後半と考えられるが、混入の可能性があり、建物自体は建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と判断した。　（佐藤）

建物125（No288）（第370図）

24，25Ｌ区に位置する３×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：3.92を測る長方形を呈し、床面積は17.2㎡である。各柱穴は検出面で径22～32cm、深さ８～16cm



１．暗灰褐色粘質土
２．白黄色粘土斑灰褐色粘質土

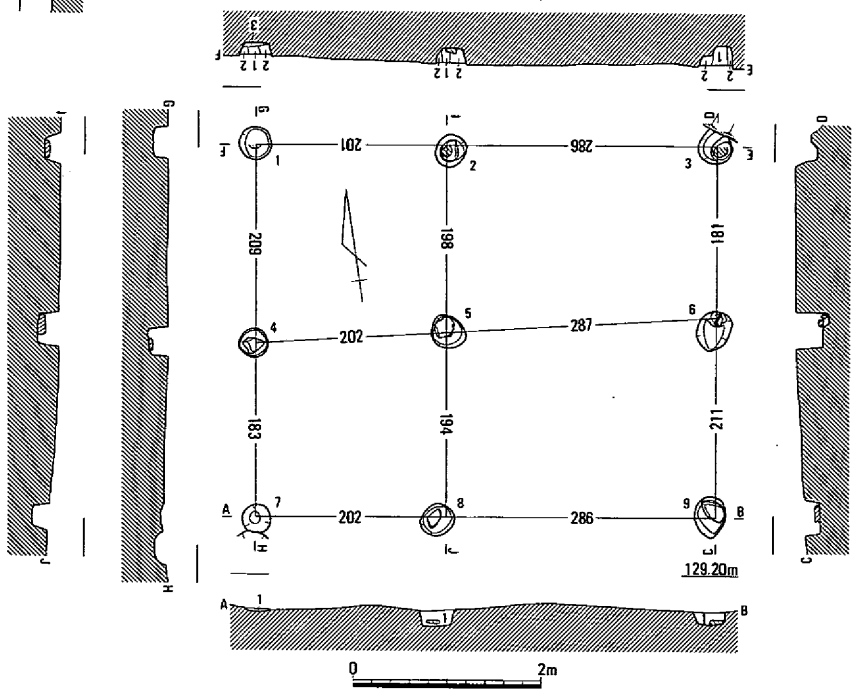
第371図　建物126(1/80)

を測る。建物・柱穴の規模や棟方行から江戸時代の遺構と判断した。（佐藤）

建物127（No294）

（第372図）

26Ｌ区に位置する２×２間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.24を測る方形を呈し、床面積は21.6㎡で



１．灰褐色粘質土
２．白黄色粘土斑灰褐色粘質土
３．白黄色粘土斑灰褐色粘質土

第372図　建物127(1/80)

ある。各柱穴は検出面で径31～44cm、深さ４～28cmを測る。柱穴２・４・５・６・８・９には礎石がある。出土遺物はないが、建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

建物128（No295）（第374図）

26Ｌ区に位置する２×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が1:1.17を測る方形を呈し、床面積は18.5㎡である。

各柱穴は検出面で径40～46cm、深さ10～24cmを測る。鉄釘が出土し、建物・柱穴の規模や棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。　（佐藤）

建物129（No292）

（第373図）

25－27Ｌ，Ｍ区に位置する。６×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が1:3.40を測る長方形を呈し、床面積55.8㎡である。各柱穴は検出面で径25～43cm、深さ４～25cmを測る。柱穴５・11には礎石がある。出土遺物として陶器片がある。（佐藤）

建物130（No359）

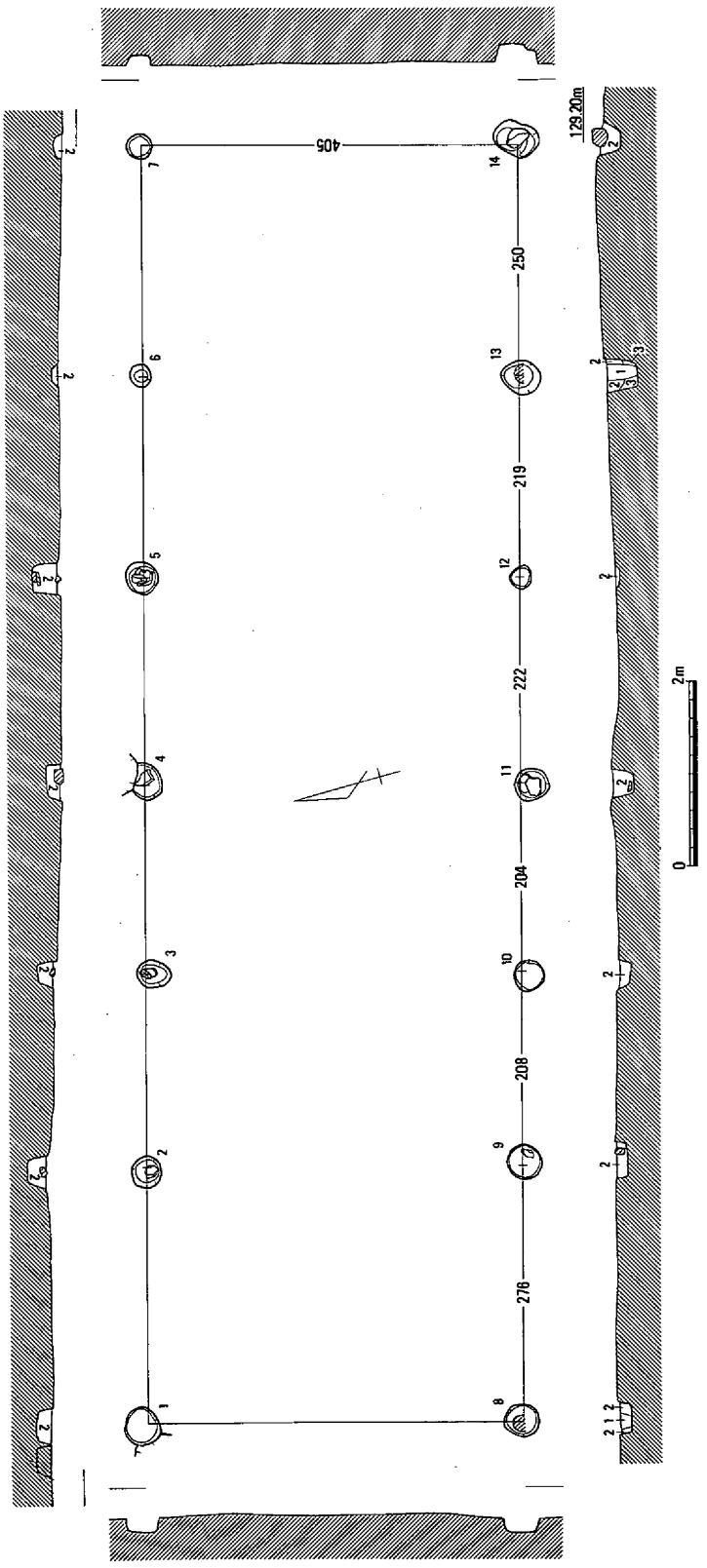
（第374図）

25Ｍ区に位置する。梁間と桁行の比率は１：1.37で、床面積4.0㎡を測る。各柱穴は検出面で径24～28cm、深さ10～36cmを測る。出土遺物として弥生土器片がある。（佐藤）

建物131（No368）

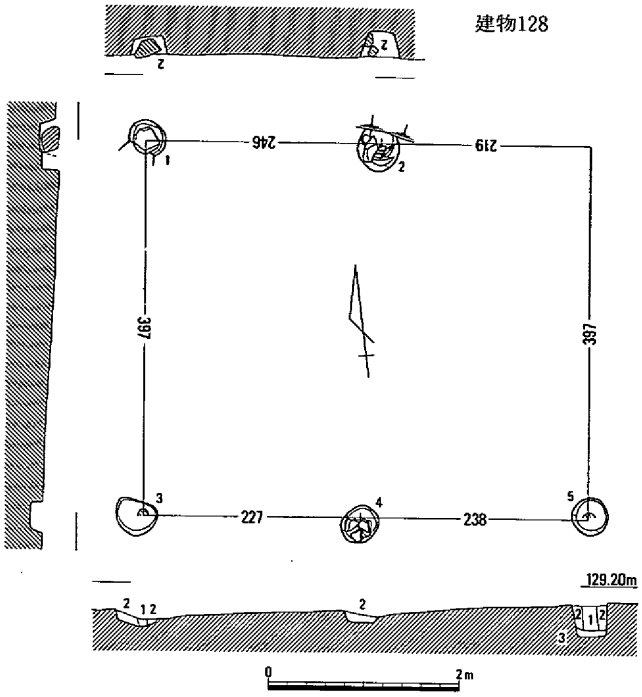
（第374図）

26Ｍ，Ｎ区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が1:1.88を測る長方形を呈し、床面積は14.2㎡である。各柱穴は検出面で径21～36cm、深さ10～21cmを測る。出土遺物として鉄片がある。　（佐藤）

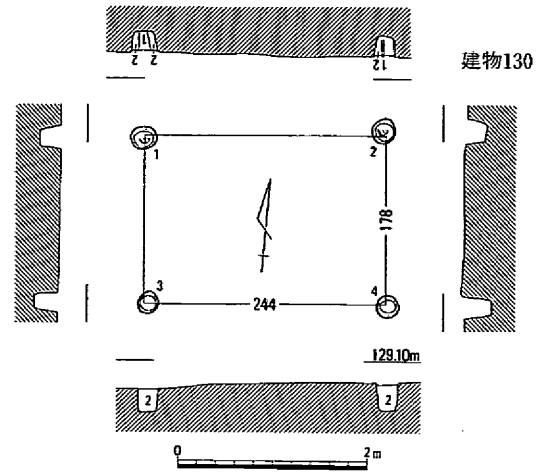


1．暗灰褐色粘質土　2．白黄色粘土斑灰褐色粘質土
3．白黄色粘土斑灰褐色粘質土

第373図　建物129(1/80)



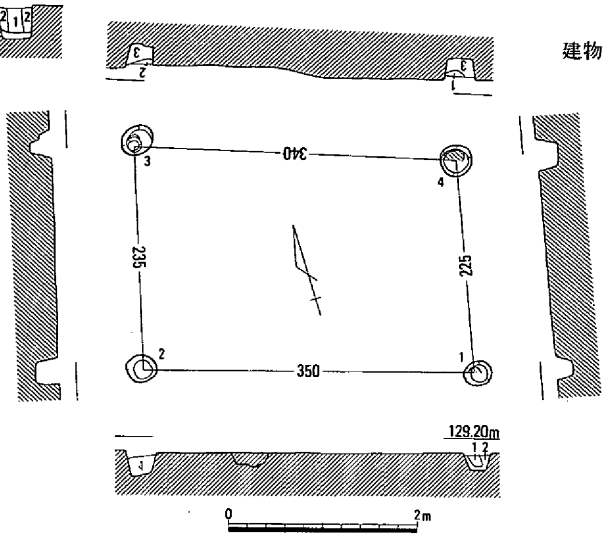
1．褐灰色粘質土　　3．黄白色粘土
2．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土



1．暗灰褐色粘質土　　2．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土

建物132（No367）（第374図）

26M，N区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が１：1.49を測る長方形を呈し、床面積は7.9㎡である。各柱穴は検出面で径29～35cm、深さ20～25cmを測る。出土遺物に弥生土器片がある。　（佐藤）



1．黄色土斑黒灰色粘質土　　3．黄色土斑褐色土
2．黄褐色土斑褐色土

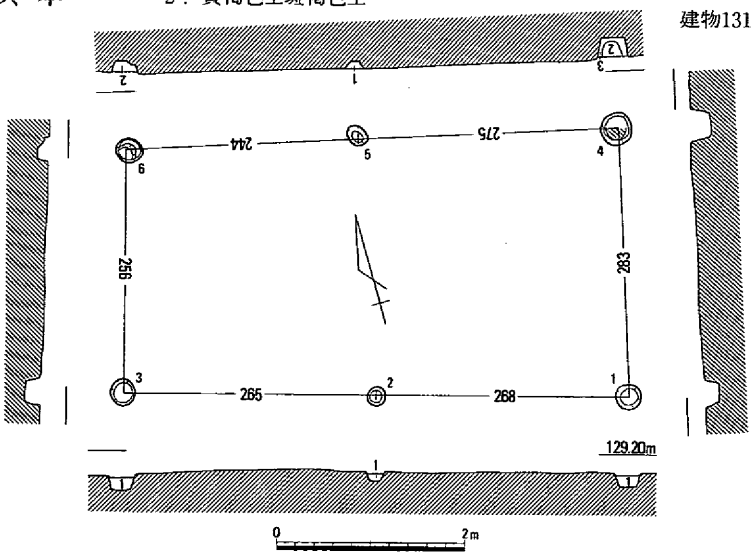
建物133（No420）（第375図）

28M，N区に位置する。削平のため、本来の規模は不明である。各柱穴は検出面で径25cm、深さ10～28cmを測る。出土遺物はない。（佐藤）

建物134（No410）（第376図）

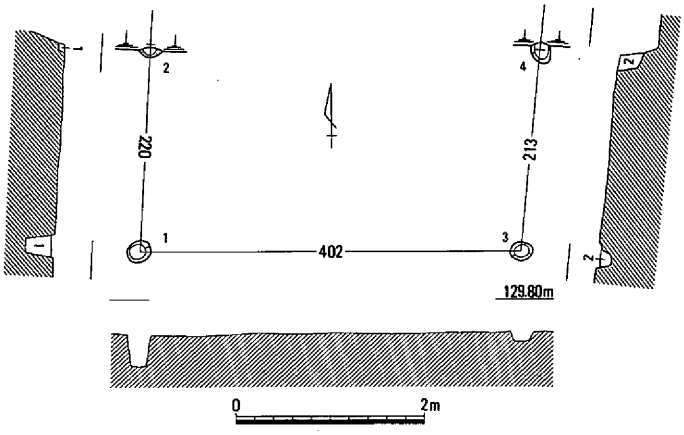
27，28M，N区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が1:1.40を測る長方形を呈し、床面積は60.9㎡である。各柱穴は検出面で径29～35cm、深さ８～24cmを測る。

柱穴15より出土した**897**は小壺の体部である。にぶい褐色の胎土で外面には灰白色釉を施し、底部は糸切りである。　（佐藤）



1．黒灰色粘質土　　3．黄色土斑黒灰色土
2．黒灰色土

第374図　建物128・130・131・132(1/80)



１．暗灰褐色粘質土　　２．黄色土斑暗褐色粘質土

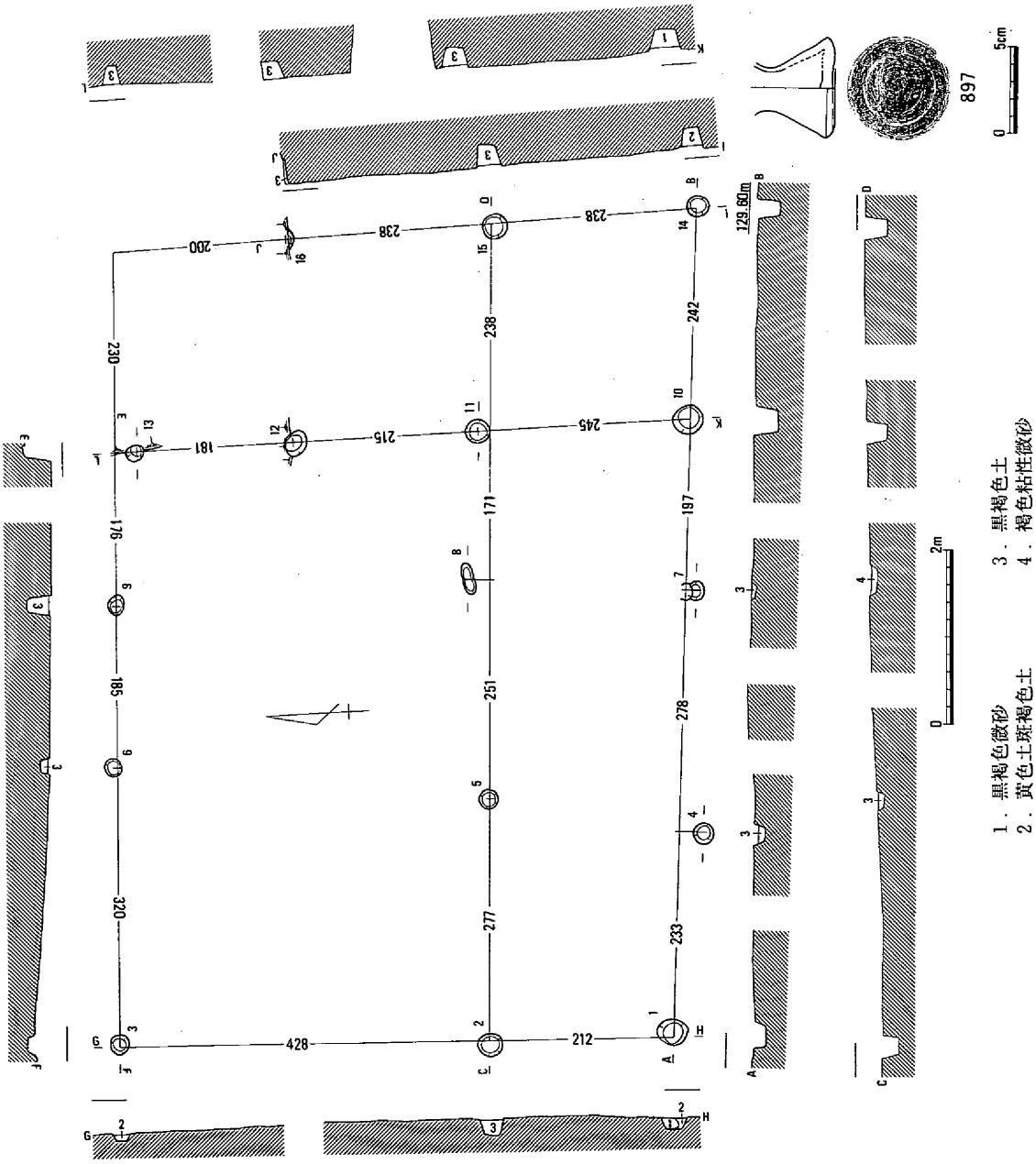
第375図　建物133(1/80)

建物135（No378）（第377図）

28，29Ｊ，Ｋ区に位置する。３×２間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.11を測る方形を呈し、床面積48.0㎡である。

１回の建て替えが行われており、一部の柱穴に重複が認められる。

各柱穴の規模は平面形が検出面で径28～36cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ12～32cmを測る。



１．黒褐色微砂　　３．黒褐色土
２．黄色土斑褐色土　　４．褐色粘性微砂

第376図　建物134(1/80)・出土遺物(1/4)

出土遺物がないため時期は断定できないが、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

建物136（No377）（第378図）

28，29Ｊ，Ｋ区に位置する。建物135を建て替えた３×２間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：1.07を測る方形を呈し、床面積46.5㎡である。各柱穴の規模は平面形が検出面で径29～35cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さ15～32cmを測る。

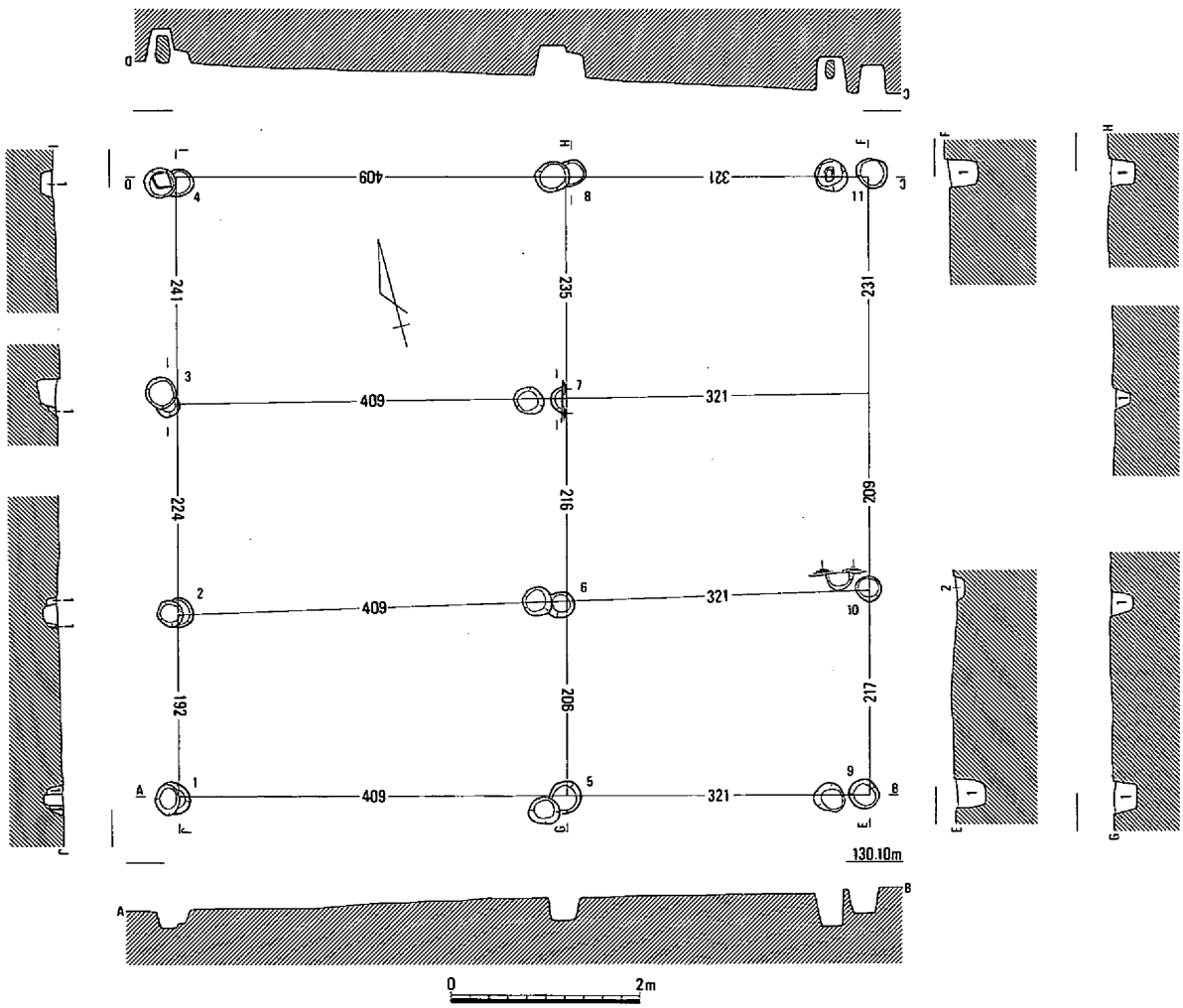
出土遺物として環状鉄製品や中世の土器片などがあり、建物・柱穴の規模、棟方向から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

建物137（No396）（第379図）

28，29Ｊ，Ｋ区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が１：2.20を測る長方形を呈し、床面積12.5㎡である。各柱穴の規模は検出面で径22～31cm、深さ８～25cmを測る。出土遺物はない。（佐藤）

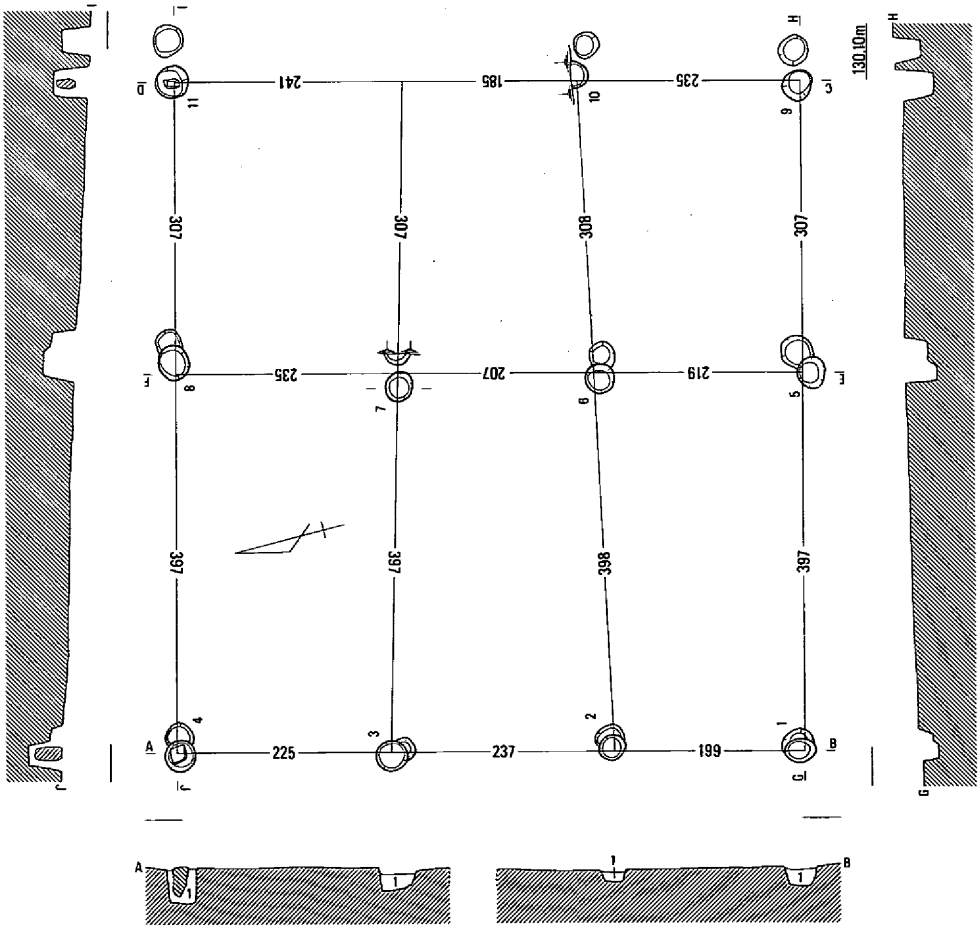
建物138（No398）（第380図）

29Ｊ区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が１：1.02を測る方形を呈し、床面積7.4㎡である。各柱穴の規模は検出面で径33～39cm、深さ16～40cmを測る。出土遺物はない。（佐藤）



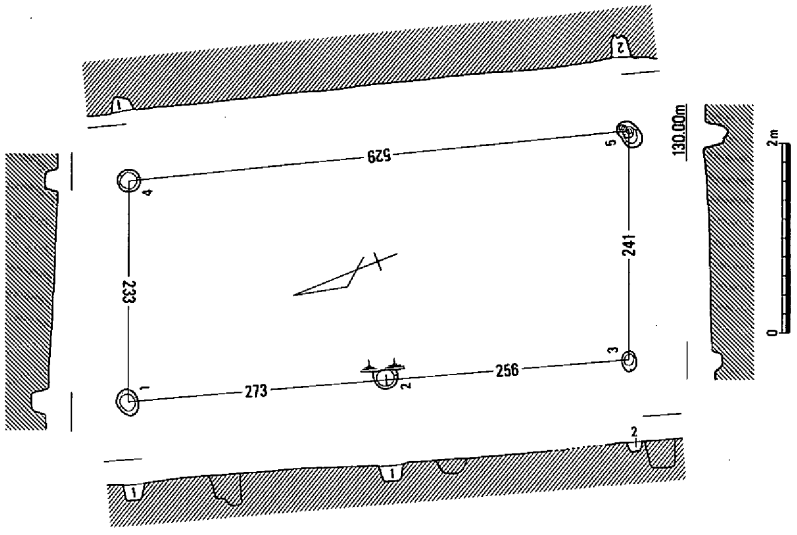
１．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土

第377図　建物135(1/80)



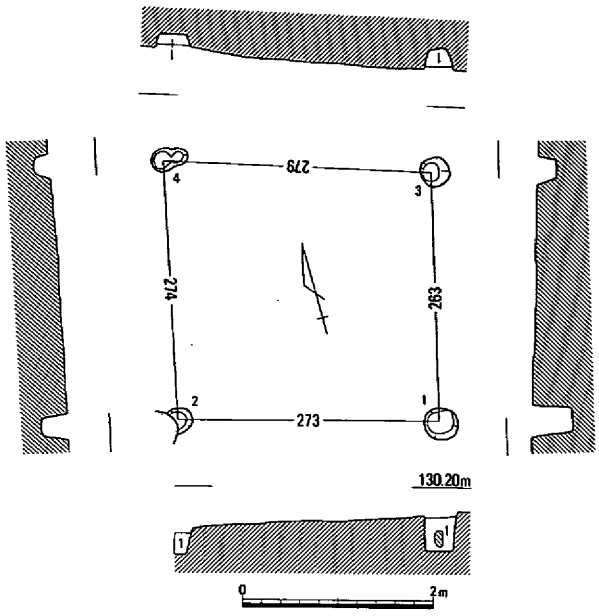
1．暗灰褐色粘質土
2．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土

第378図　建物136(1/80)



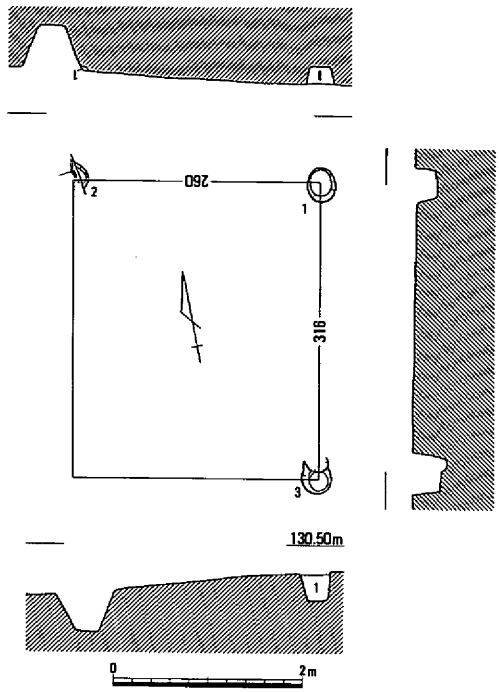
1．褐色土　　2．黄色土斑褐色土

第379図　建物137(1/80)



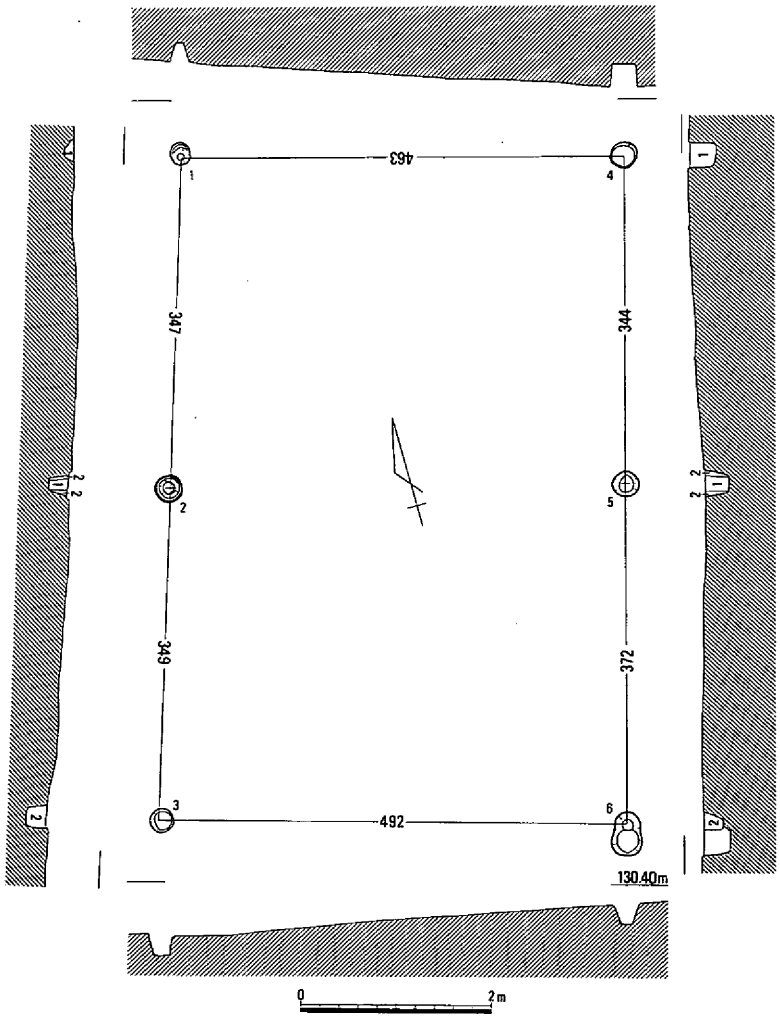
１．白黄色粘土斑暗灰褐色粘質土

第380図　建物138(1/80)



１．黄色土斑褐色粘質土

第381図　建物139(1/80)



１．黄色土斑暗褐色粘質土　　２．黄色土斑灰褐色粘質土

第382図　建物140(1/80)

建物140（No386）

（第382図）

29，30Ｊ，Ｋ区に位置する。２×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が1:1.55を測る長方形を呈し、床面積33.2㎡である。

各柱穴の規模は検出面で径23～46cm、深さ12～24cmを測る。

出土遺物はない。　（佐藤）

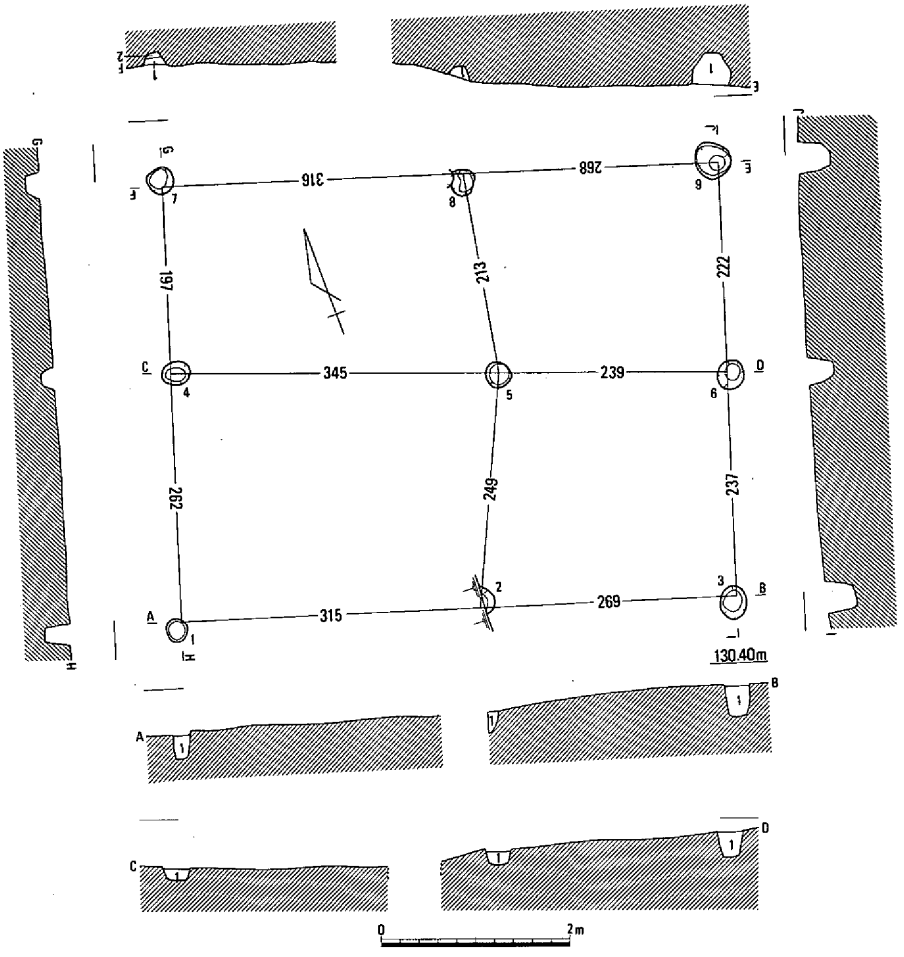
建物141（No385）

（第383図）

29，30Ｊ，Ｋ区に位置する。２×２間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が1:1.27を測る長方形を呈し、床面積26.8㎡である。

各柱穴の規模は検出面で径25～40cm、深さ12～25cmを測る。

出土遺物はない。　（佐藤）



１．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

第383図　建物141(1/80)

建物142 (No390)

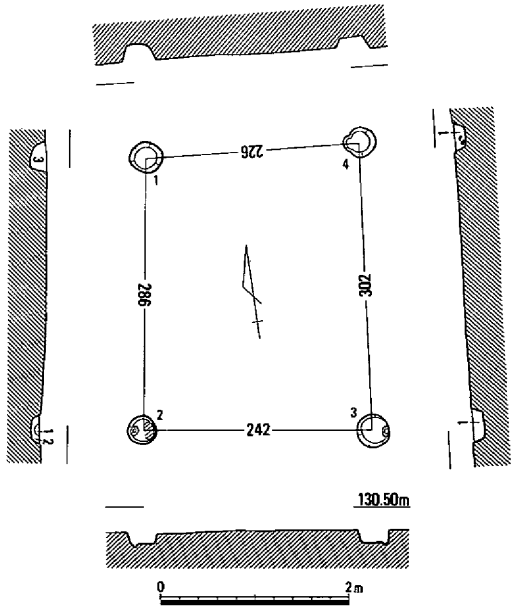
(第384図)

29，30K，L区に位置し、平面形は梁間と桁行の比率１：1.25を測る長方形で、床面積25.1㎡である。各柱穴は検出面で径27～38cm、深さ８～68cmを測る。弥生土器片が出土。(佐藤)

建物143 (No393)

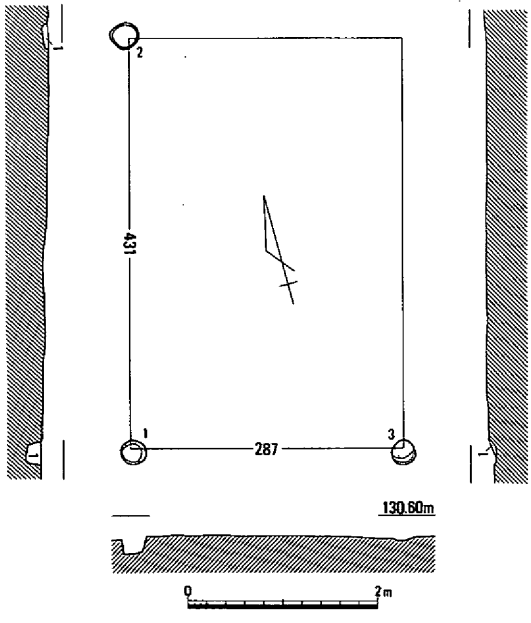
(第385図)

30J，K区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率1:1.50の長方形で、床面積12.4㎡である。各柱穴は検出面で径26～30cm、深さ５～16cmを測る。出土遺物はない。　(佐藤)



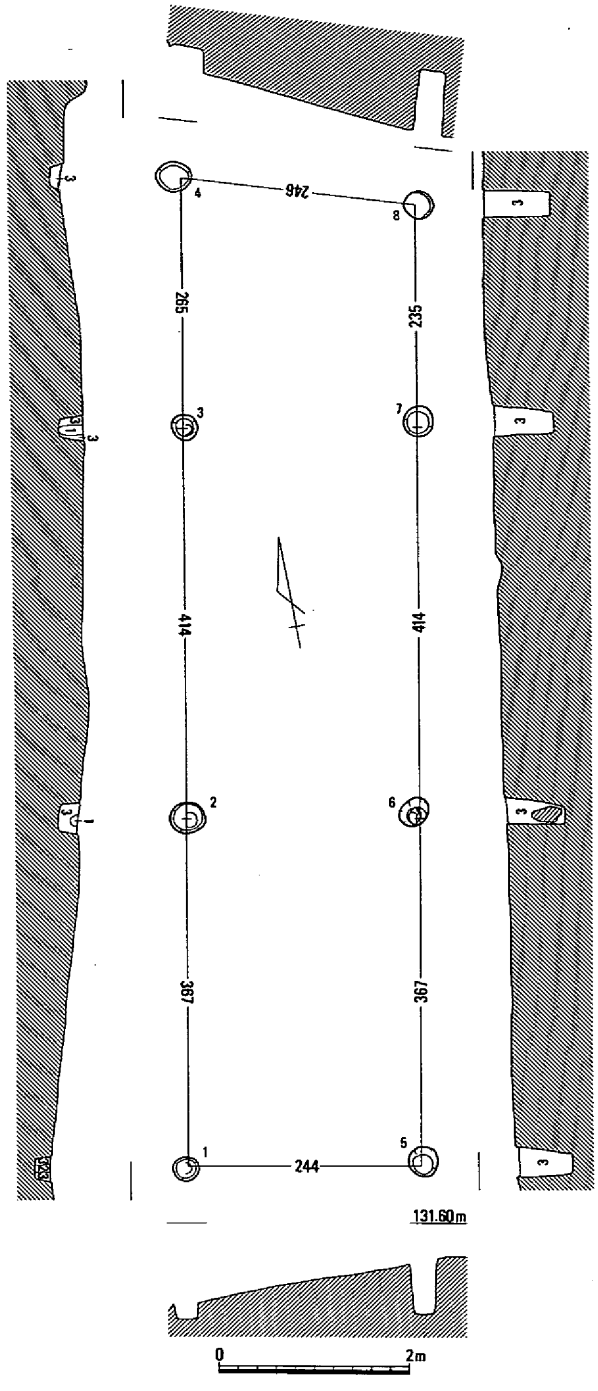
１．黒灰色粘質土
２．黄色粘質土
３．黄色土斑黒灰色粘質土

第384図　建物142(1/80)

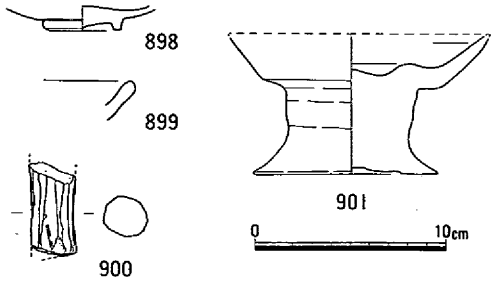


１．黄色土斑暗褐色粘質土

第385図　建物143(1/80)



1．褐色粘性微砂　　3．黄色土斑褐色粘質土
2．褐色粘質土



第386図　建物144(1/80)・出土遺物(1/4)

建物144（No382）（第386図、図版22）

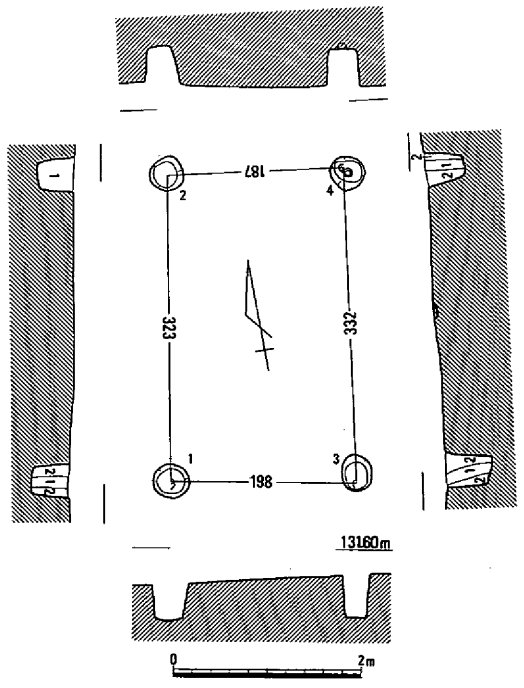
31Ｊ，Ｋ区に位置する。３×１間の掘立柱建物で、平面形は梁間と桁行の比率が１：4.25を測る長方形を呈し、床面積は25.1㎡である。各柱穴の規模は検出面で径27～38㎝、深さ８～68㎝を測る。遺物は柱穴７から**898**～**901**が出土している。**898**は白磁の皿である。**900**は須恵質で土鍋の脚と考えられるが、焼成が極めて堅緻なことから獣脚の類の可能性もある。**901**は土師質の高杯あるいは燭台である。　（佐藤）

建物145（No429）（第387図）

31Ｊ区に位置する。平面形は梁間と桁行の比率が１：1.68を測る長方形を呈し、床面積6.3㎡である。各柱穴は検出面で径37～39㎝、深さ36～45㎝を測る。出土遺物はない。　（佐藤）

建物146（No417）（第388図）

30,31Ｎ,Ｏ区に位置し、平面形は梁間と桁行の比率が1:1.23を測る方形で、床面積は25.2㎡である。各柱穴は検出面で径19～25㎝、深さ５～24㎝を測る。出土遺物はない。　（佐藤）



1．褐灰色粘質土　　2．淡灰色粘質土斑白黄色粘質土

第387図　建物145(1/80)

瓦窯１(No313)

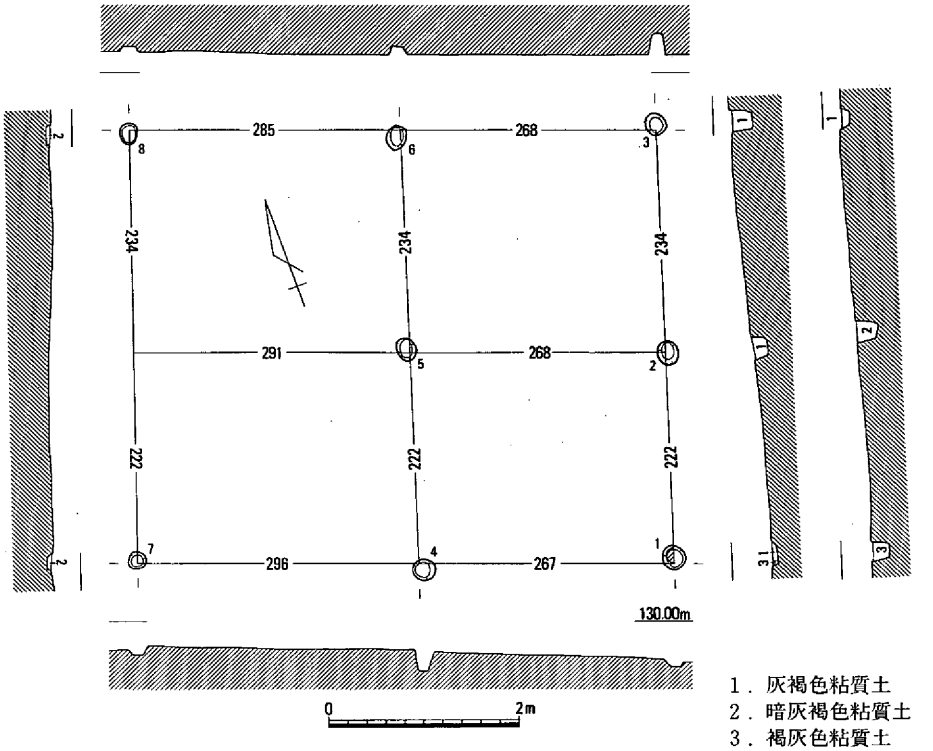
(第389・390図、図版10)

27K，L区に位置する。桟瓦を焼成した、いわゆる「だるま窯」の焼成室の床面と、窯の周囲を巡る排水溝を検出した。

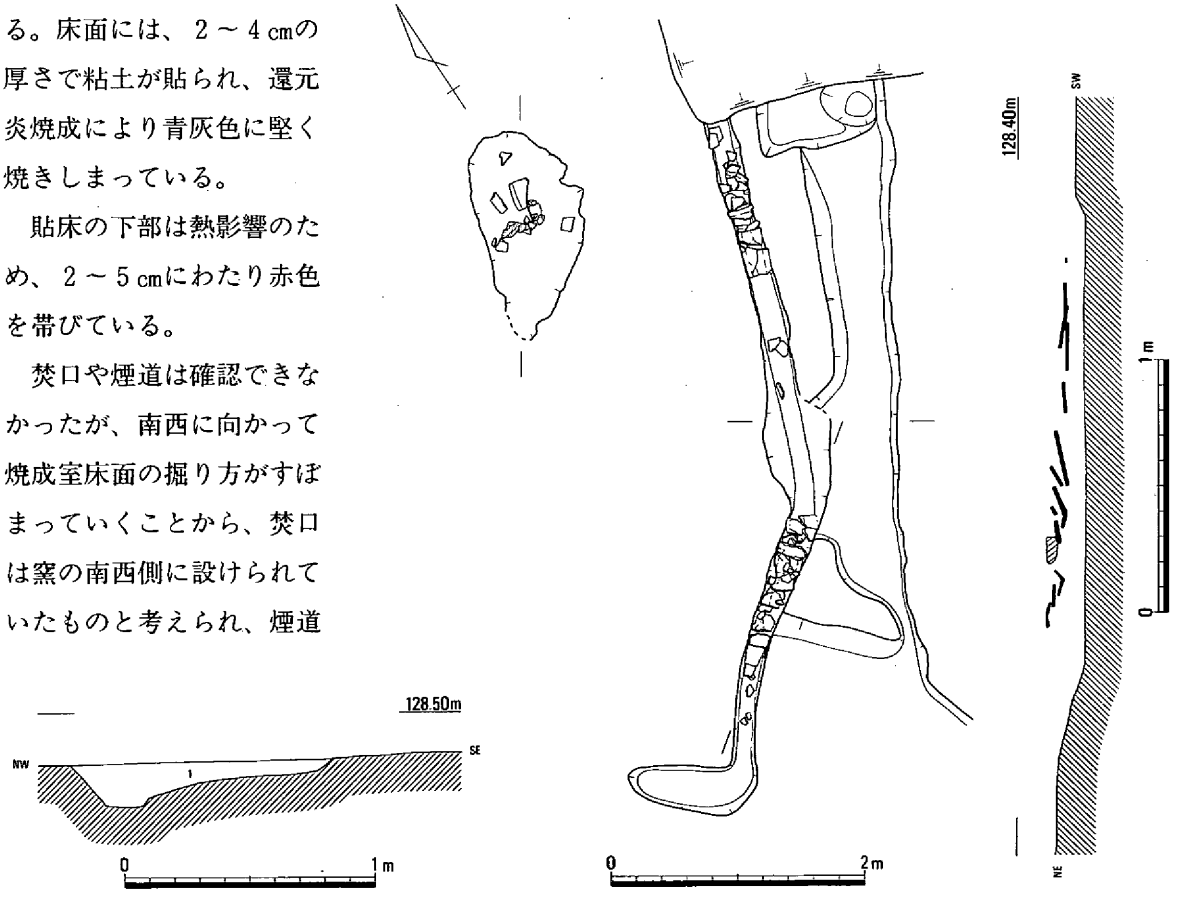
瓦窯の本来の規模は削平のため不明であるが、現存する焼成室床面の掘り方は検出面で長径165cm、短径80cm、深さ10cmを測る不整形な倒卵形を呈する。床面には、２～４cmの厚さで粘土が貼られ、還元炎焼成により青灰色に堅く焼きしまっている。

貼床の下部は熱影響のため、２～５cmにわたり赤色を帯びている。

焚口や煙道は確認できなかったが、南西に向かって焼成室床面の掘り方がすぼまっていくことから、焚口は窯の南西側に設けられていたものと考えられ、煙道



第388図　建物146(1/80)



1．暗茶褐色土(炭・瓦小片・焼土塊多含)

第389図　瓦窯１・排水溝(1/60・1/30)

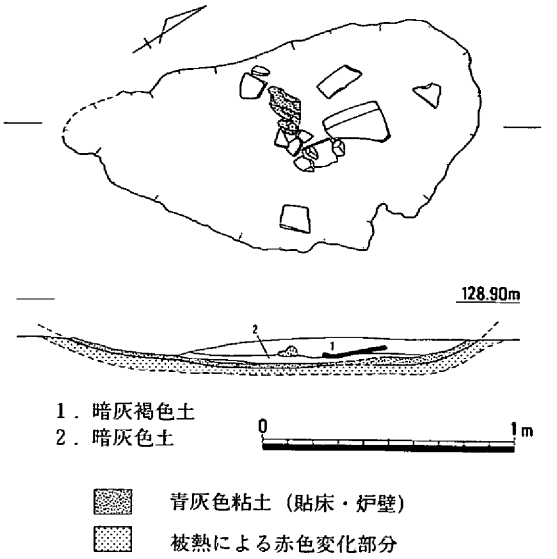
は床面にタール等の付着が認められないことから『和国諸職尽』に描かれている瓦窯と同様に、天井部に設けられていたものと思われる。

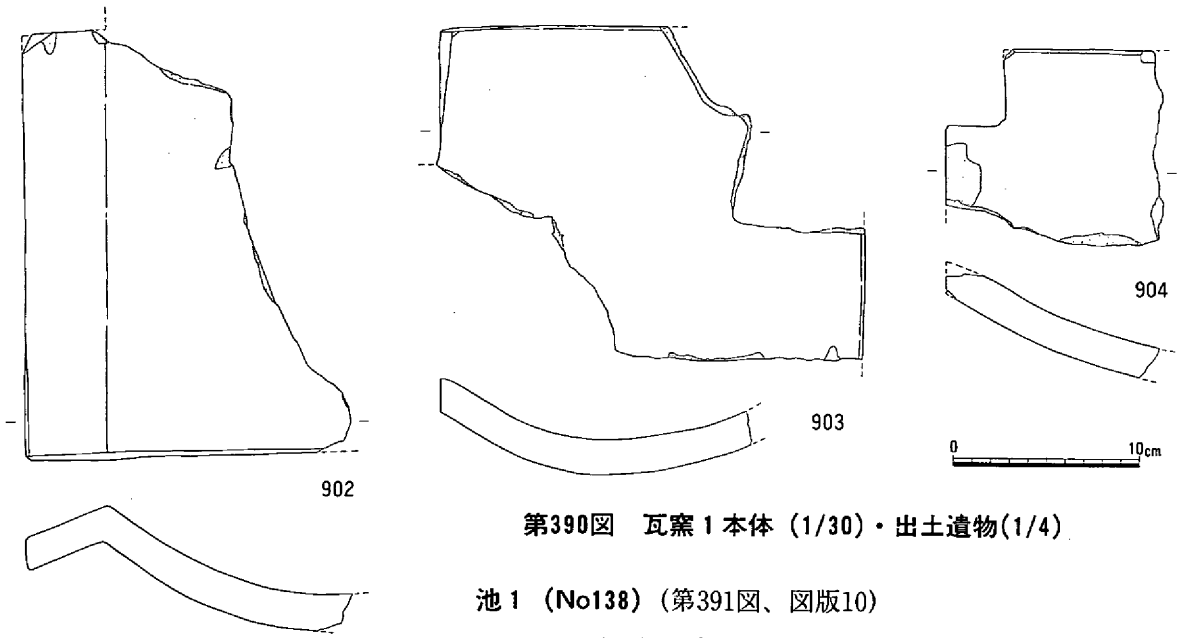
埋土中からは炭粒や炉壁と思われる焼土塊とともに、数点の桟瓦が出土している。

排水溝は窯の南から東にかけて検出したが、削平を受けており、本来の規模は不明である。

検出面で幅20～50cm、深さ10～20cmを測り、北から南に向かって傾斜している。また、桟瓦の破片を用いて天井を設け、暗渠としている。

これらの遺物から、瓦窯１・排水溝の時期は江戸時代後期と考えられる。　　（佐藤）





第390図　瓦窯１本体（1/30）・出土遺物(1/4)

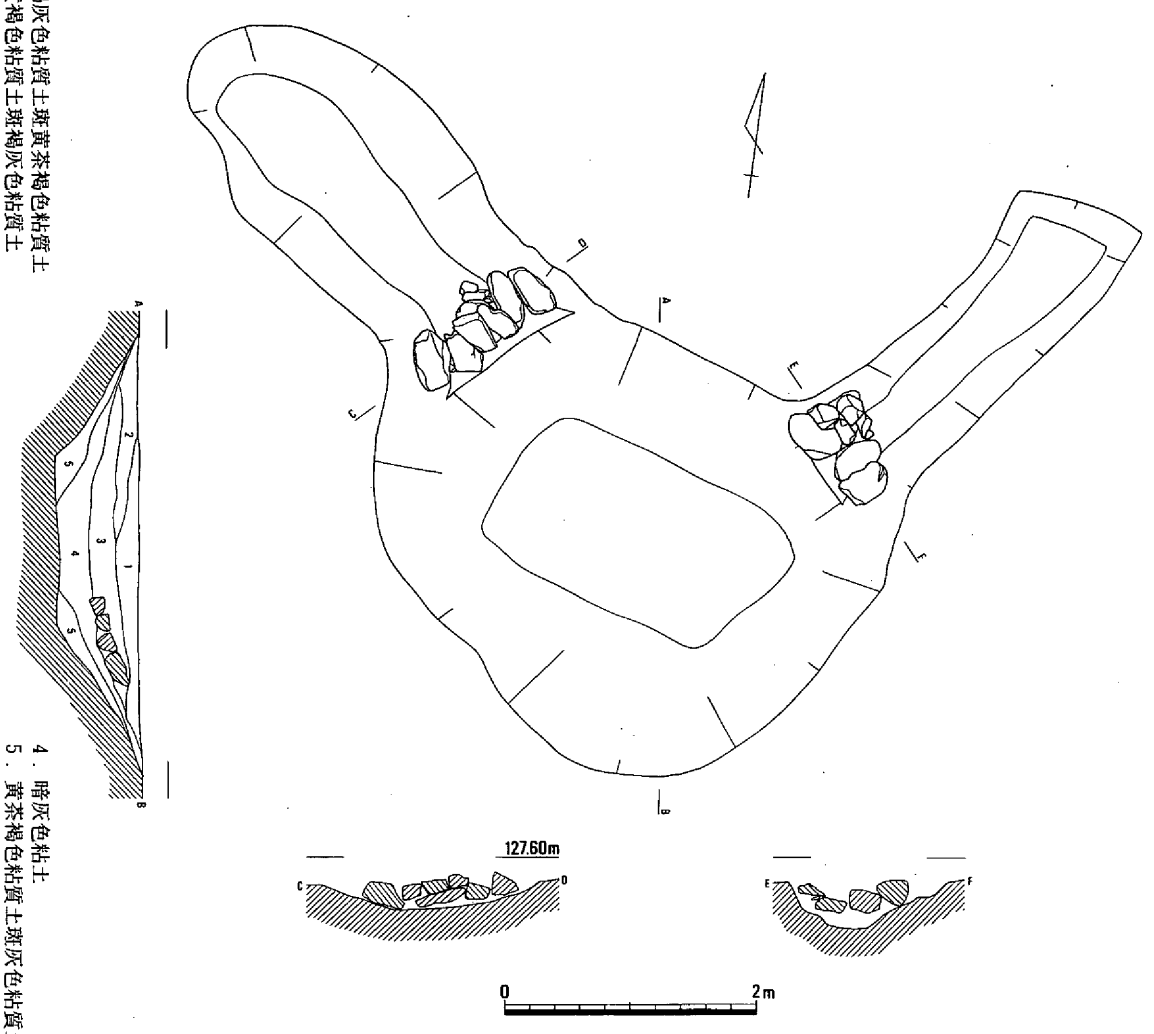
池１（No138）（第391図、図版10）

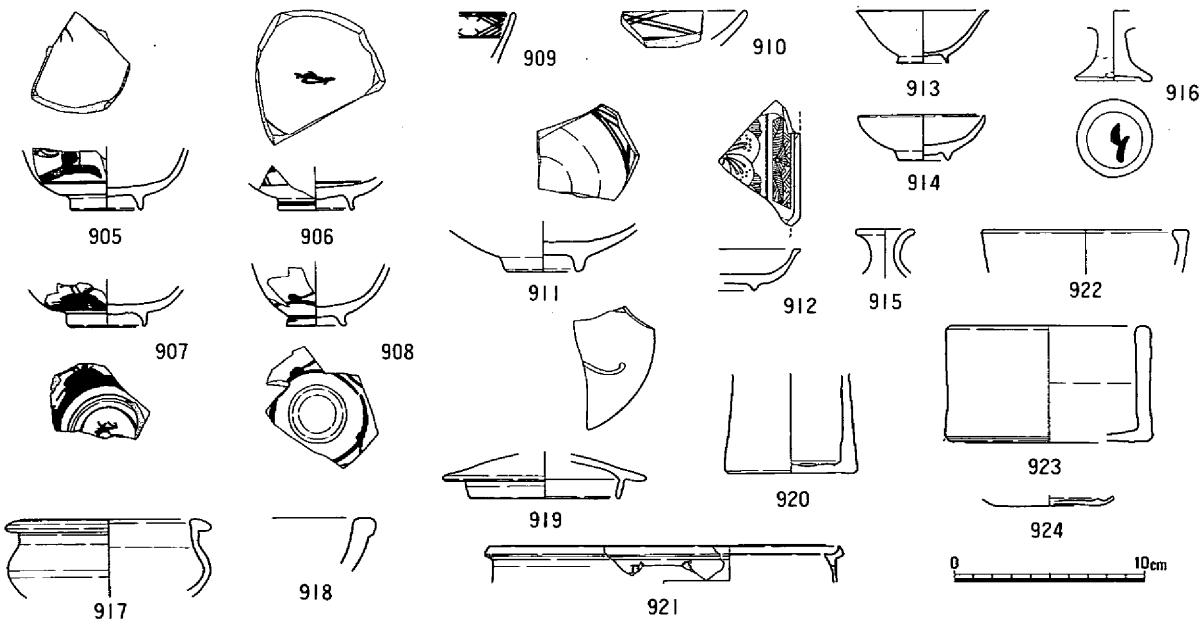
17・18M区に位置する遺構である。建物109・110と重複し、それらより新しい。遺構の形状は、長径405cm、短径330cm、深さ57cmの不整長方形の土壙に２条の溝が接続したＬ字状を呈する。土壙の底面は平坦で、壁面との境は明瞭であった。溝は土壙への導水施設と考えられ、土壙との接続部には自然礫を用いて堰状の施設が設けられている。遺構の名称は池としたが、具体的な用途は不明である。本来の機能を停止した後には、ごみ穴として埋められている。

埋土中から多数の陶磁器片が出土した。**905～916**は磁器で、肥前系および瀬戸・美濃系の製品と考えられる。**912**は白磁の角皿で、いわゆる手塩皿と思われる。**915**は油壺の口縁～頸部である。**916**は仏飯器で、底面には片仮名の「イ」と読める墨書がある。**917～923**は陶器で、備前焼の鉢**923**以外は施釉陶器である。**924**は土師質皿である。

これらの遺物は、18世紀から幕末までの幅があるため、完全に埋められたのは幕末としても、池自体の存続時期はそれより遡る可能性が高い。　　（岡本泰）

1．褐灰色粘質土斑黄茶褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑灰色粘質土（礫多）
4．暗灰色粘土
5．黄茶褐色粘質土斑灰色粘質土



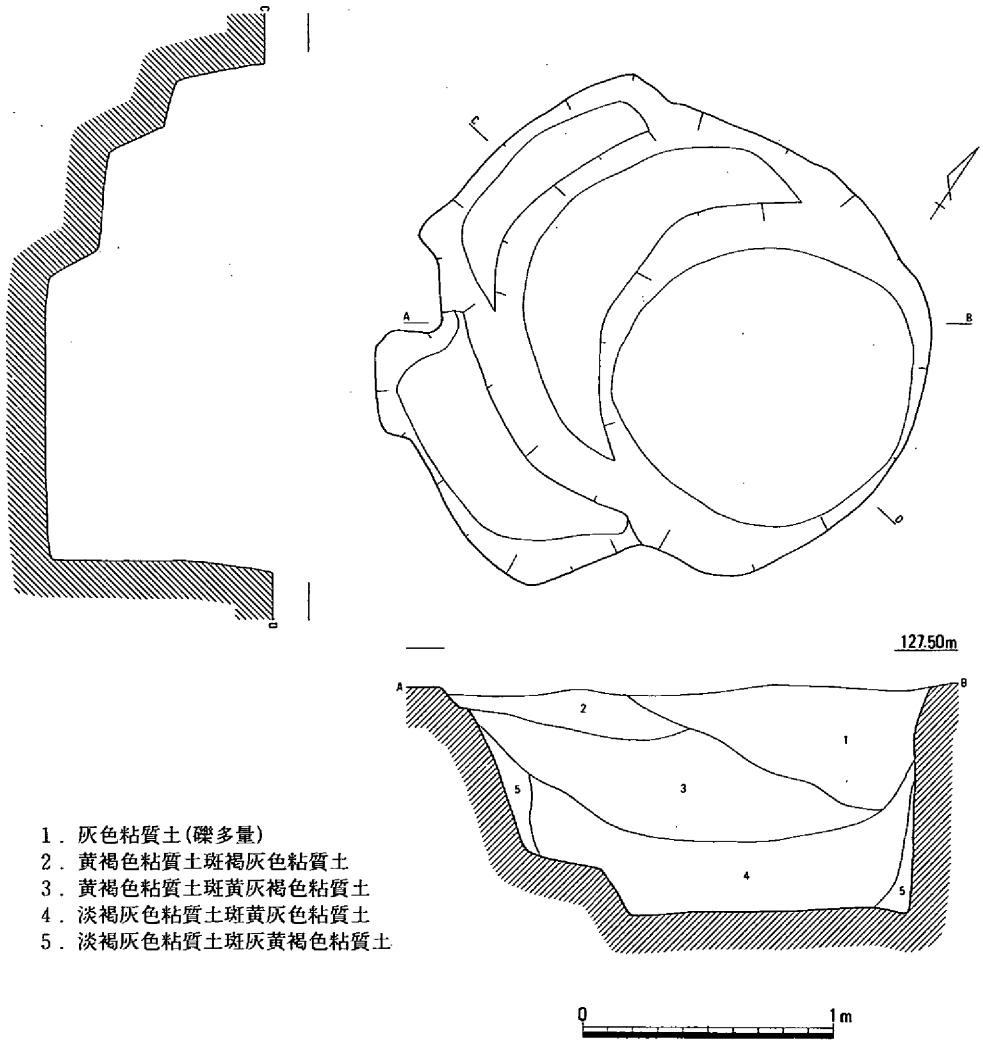


第391図　池１(1/60)・出土遺物(1/4)

穴倉１（No137）（第392～396図、図版10・22・23）

17Ｌ区に位置する土壙である。形状は長径201cm、短径166cm、深さ89cmを測る不整な楕円形を呈し、南側には用途不明の浅い張り出し部が取り付く。東壁はほぼ垂直で、西壁には地山を削り出した２段の階段が設けられている。壁面は素掘りのままであったと思われる。底面は平坦で、ほぼ正円形を呈する。この遺構は、その形態から家財や食物等の収納に用いられた穴倉（貯蔵穴）と判断でき、階段は出入りに使用されたと考えられる。上部構造については、周囲に該当する柱穴がないため存在しても大がかりなものではなかったと思われる。穴倉としての機能を失って後は、ごみ穴として埋められたようである。

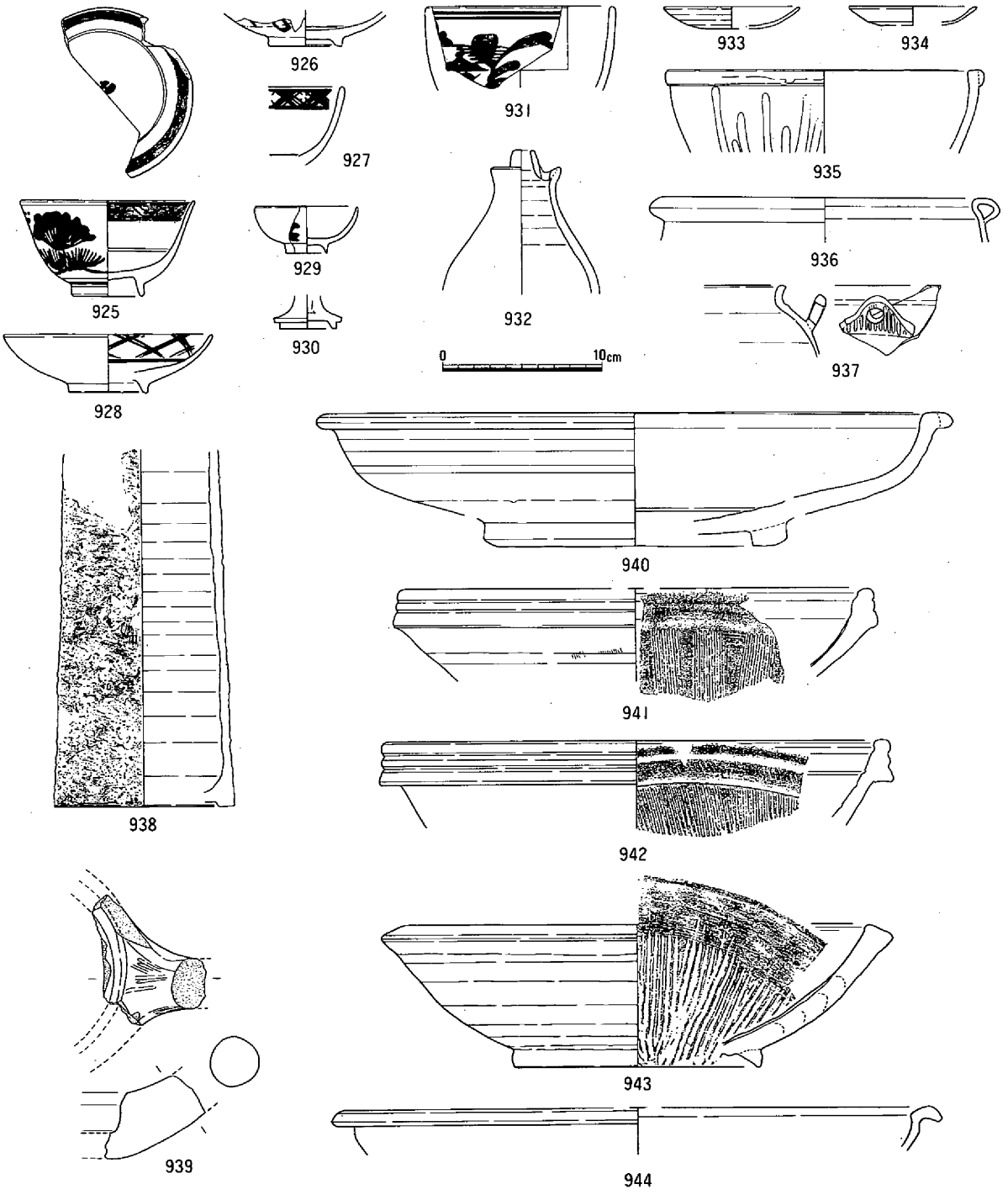
埋土中からは多量の陶磁器・瓦が出土し、その内容も多種多様である。屋敷の廃絶に伴って穴倉内にごみを一括廃棄したような出土状況であった。一部の遺物が20Ｋ区の土壙102・103と接合している。**925**は瀬戸・美濃系の碗で、外面に松の文様が描かれている。1820～60年代。**926**は施釉陶器の皿である。**927**は肥前の染付青磁の碗、**928**は内面に格子目文を描く肥前・波佐見窯の皿で、ともに18世紀後半のもの。**930**は施釉陶器の燭台と思われる。**931**は肥前の陶胎染付の碗である。**932**は施釉陶器の壺で、口頸部と肩部の接合部は上にせり出し、境の蓋受け状の箇所に１個の穿孔が認められる。**933**・



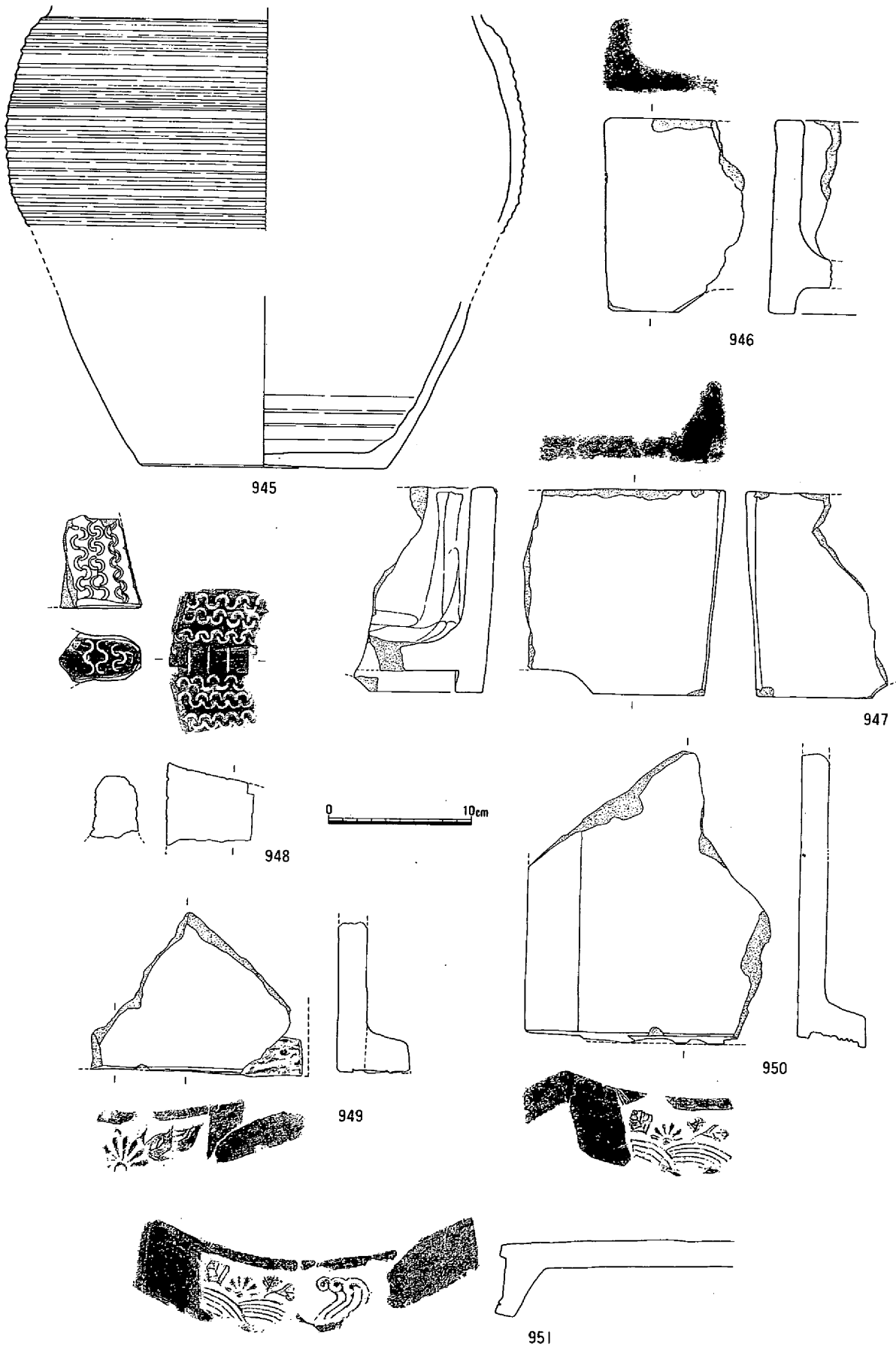
1．灰色粘質土(礫多量)
2．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
3．黄褐色粘質土斑黄灰褐色粘質土
4．淡褐灰色粘質土斑黄灰色粘質土
5．淡褐灰色粘質土斑灰黄褐色粘質土

第392図　穴蔵１（1/30）

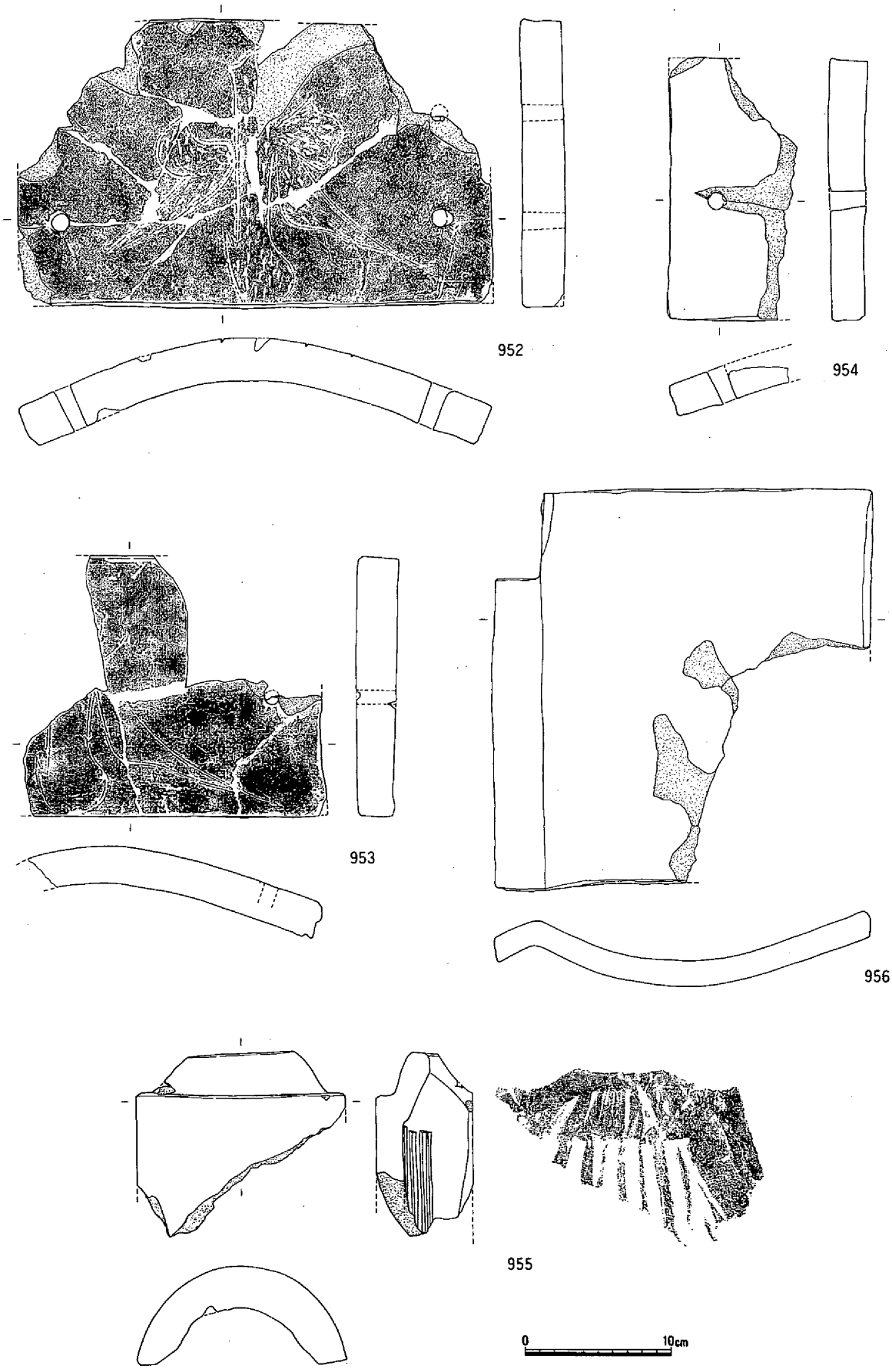
934は備前焼の灯明皿である。935～937は施釉陶器で、それぞれ片口鉢・甕・土瓶の破片である。938は丹波焼の花生と思われる。939・944は土師質の焙烙で、939は把手部分である。940は施釉陶器の高台付大皿で、釉は浅黄色を呈する。941～943は備前焼のすり鉢で、943は口縁部が拡張しない特異な形態である。945は備前焼の甕で、外面上半部には強いヨコナデによって凹線文を施している。946は陶器、947は瓦質の角火鉢である。947の内面にはユビナデ痕がみられる。948は「宝殿」と通称される瓦質の祠の大棟部分の破片と思われる。側面には棟込瓦の一種である輪違い瓦が連なる様が表現さ



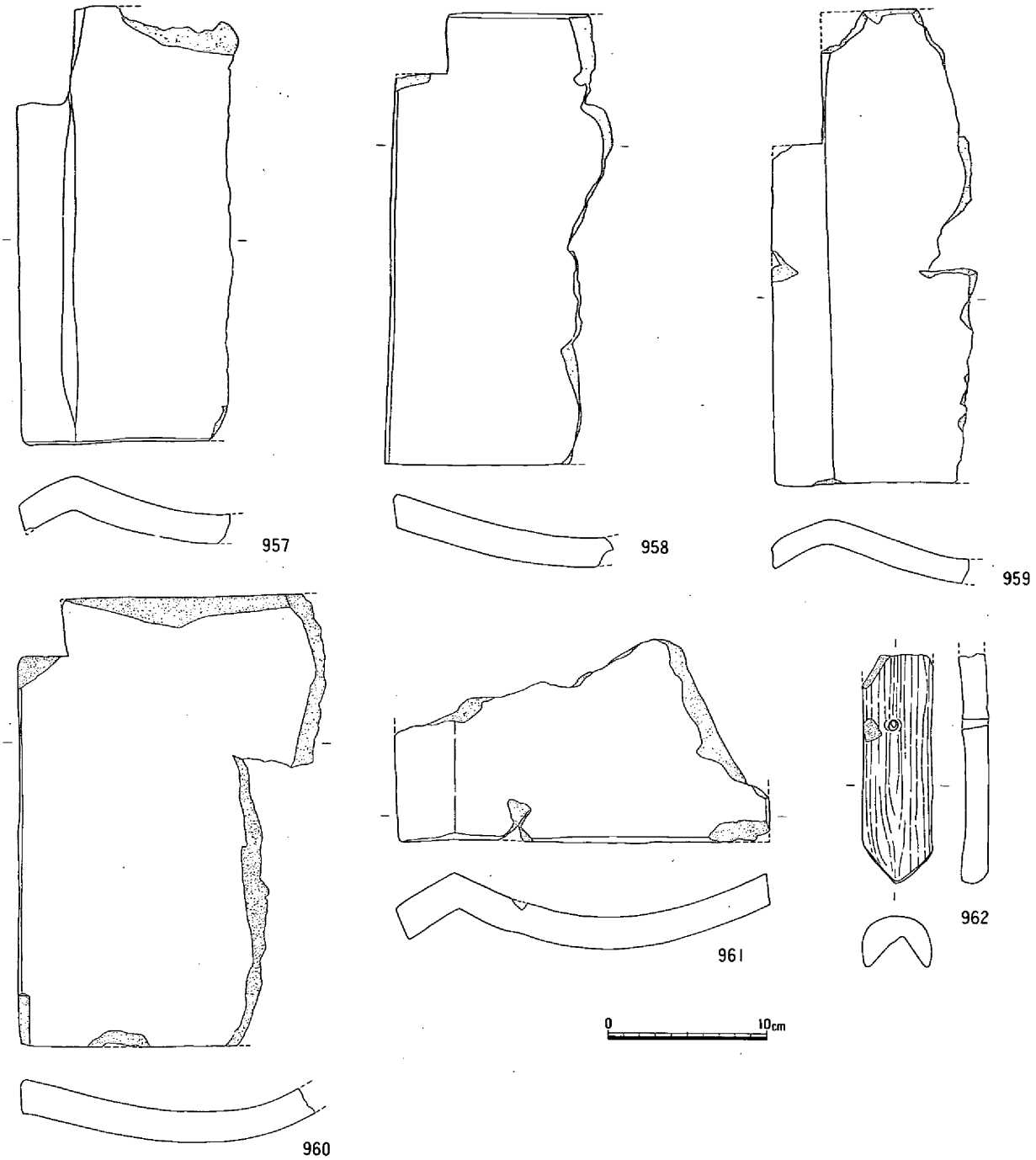
第393図　穴蔵１出土遺物(1)(1/4)



第394図　穴蔵1出土遺物(2)(1/4)



第395図　穴蔵1出土遺物(3)(1/4)



第396図　穴蔵１出土遺物(4)(1/4)

れている。**949～962**は瓦類である。軒平瓦・桟瓦などは凸・凹面ともナデで仕上げる。軒平瓦・軒桟瓦**949～951**の瓦当面には菊花や波頭の文様がある。**952～954**は雁振瓦と考えられ、**952・953**の凸面には「水」の字が装飾的な書体でヘラ描きされる。火難除けのまじないとして屋根にのせられたものであろう。**952**には４カ所、**953・954**には２カ所の穿孔がある。丸瓦**955**の凹面には布目と棒状の圧痕が認められる。**962**は道具瓦の一種と思われるが、名称は不明である。

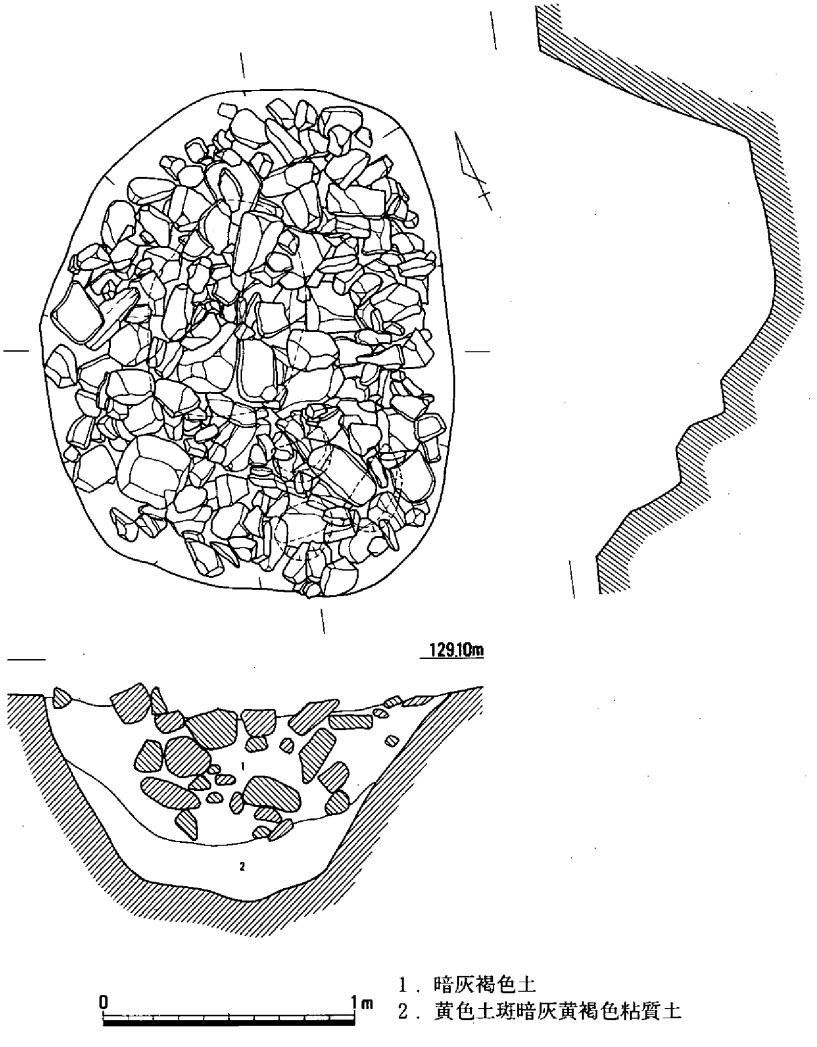
以上の遺物、特に陶磁器の時期は18世紀から幕末までにわたり、穴倉の廃絶時期は幕末に置くことができる。存続期間については、陶磁器の時期幅だけからは断定できない。　　(岡本泰)

穴倉２（No231）（第397図）

26K区に位置する。平面形は検出面で長径198cm、短径163cmを測る楕円形を呈し、断面形は検出面からの深さ84cmを測るすり鉢状を呈する。掘り方の南壁を２段の階段状に掘削し、上部構造の痕跡は認められない。埋土中には遺物とともに多量の礫が廃棄されていた。

遺物は**963～966**の他、陶磁器の細片や鉄滓が出土している。**963**は土師質の器台である。**264**は瓦質の羽釜である。**965、966**は備前焼のすり鉢で、よく使い込まれている。これらの遺物の内、すり鉢や羽釜は室町時代の後半のものと考えられることから、この遺構の時期が中世までさかのぼる可能性もあるが、周囲の江戸時代の建物に伴う可能性が高いことや同種の遺構が江戸時代に限られることから、江戸時代の遺構と判断した。

（佐藤）



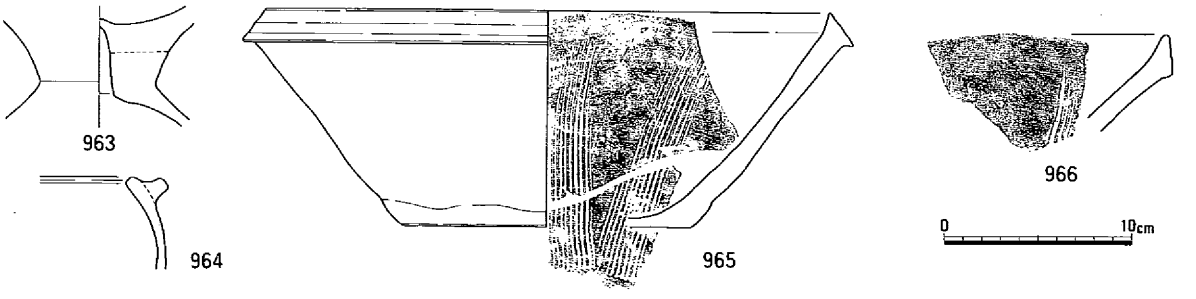
穴倉３（No409）

（第398図）

29L，M区に位置する。検出面での平面形は長径304cm、短径220cmを測る隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦に掘削され、平面形は長径160cm、短径150cmを測る方形を呈し、検出面からの深さ80cmを測る。

掘り方の北壁を２段の階段状に掘削し、上部構造の痕跡は認められない。

埋土中に桟瓦が廃棄されていることから、江戸時代後期の遺構と考えられる。



第397図　穴蔵２（1/30）・出土遺物（1/4）

墓34（No264）（第399図）

21Ｉ区に位置する。墓壙の掘り方は検出面で径102cmの円形を呈し、深さ48cmを測る。底面には厚さ８cmの整地層があり、土層断面から径80cm前後の円形座棺が納められたものと考えられる。（易伯通）

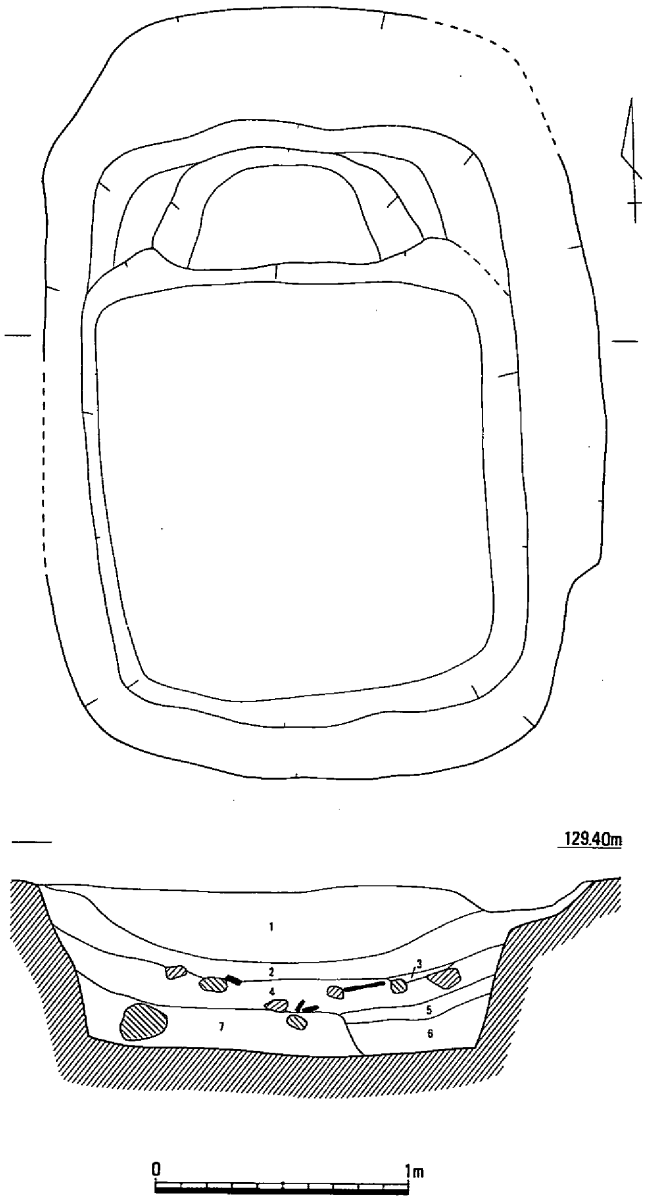
墓35（No242）（第400図）

22Ｉ区に位置する。墓壙の掘り方は検出面で長さ130cm、幅95cm、深さ40cmを測る。両長辺に沿って河原石で２～３段の荒い石組みを構築し石組みの間隔は30cmを測る。棺の痕跡は認められなかった。

出土遺物のうち**967**は土師質の３足香炉の脚部である。脚の底面は磨滅により平坦になっている。**M23**は銅環である。全体に緑青に被われ、環の太さ4.5mm、環の外径30mmを測る。（易）

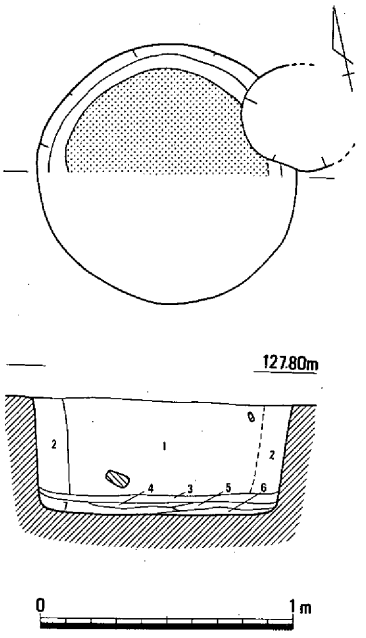
墓36（No230）（第401図、図版24）

25Ｊ区に位置する。土層断面から径60cm前後の座棺が納められていたものと考えられる。出土した



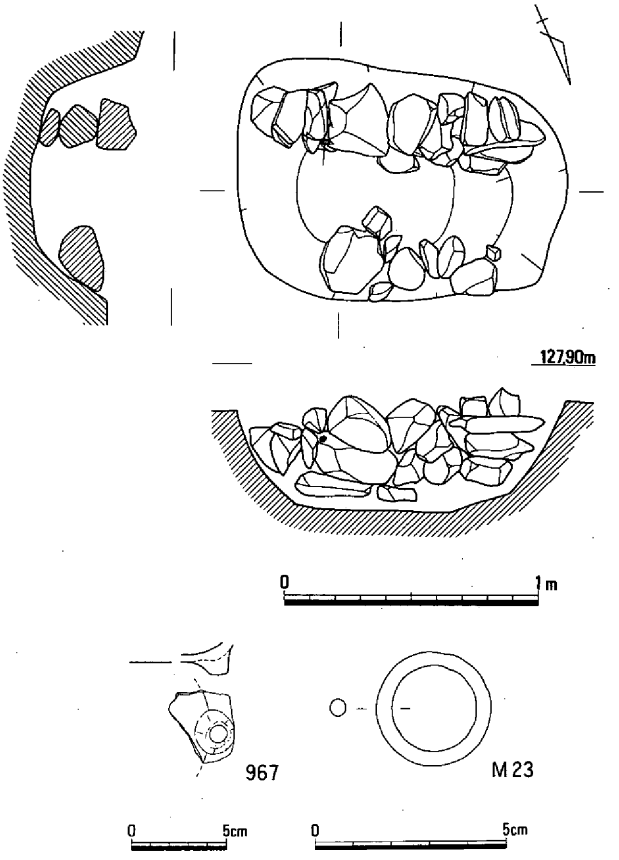
1．黄色土斑灰黄色土
2．灰茶色土
3．黄色粘土
4．灰色粘質土(包瓦)
5．暗青灰色粘土
6．暗青灰色粘土
7．黄色土斑灰黄色土

第398図　穴蔵３（1/30）



1．黄色土斑灰色土　　4．黄色土
2．黄色粘土斑黒色土　　5．黄色土
3．黒ボク　　6．黄色土

第399図　墓34(1/30)



第400図　墓35(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

遺物のうちM24は鋏の握り部分、M25・M26は刀子である。M25は底板上に置かれていたためか片面に木質が付着している。M26の刃部には漆膜が付着し、先端付近には布目の痕跡が一部認められる。　（易）

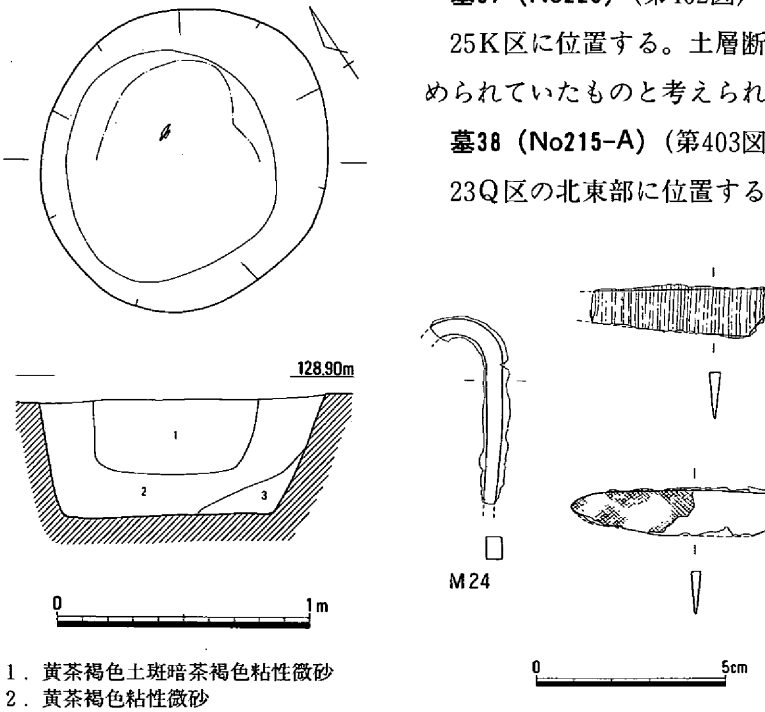
墓37（No228）（第402図）

25K区に位置する。土層断面から径50cm前後の円形座棺が納められていたものと考えられる。出土遺物はない。　（易）

墓38（No215-A）（第403図、図版10・24）

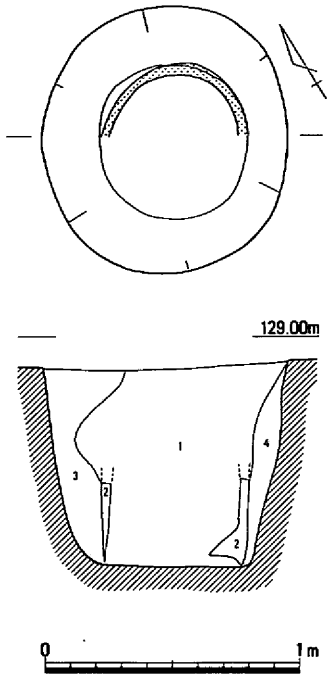
23Q区の北東部に位置する。墓壙は墓39の東側と一部重複して掘削されており、墓壙内に納められた円形座棺の底板と側板の一部が残存している。棺は杉板を用いて竹製のたがと竹釘で桶状に組んで作られており、底板の径は52cmを測る。

出土遺物には土師質の小皿1点、寛永



1．黄茶褐色土斑暗茶褐色粘性微砂
2．黄茶褐色粘性微砂

第401図　墓36(1/30)・出土遺物(1/2)



1．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘性微砂
2．暗灰褐色粘質土(座棺痕跡)
3．黄茶褐色粘質土斑暗茶褐色粘性微砂
4．黄褐色粘性微砂

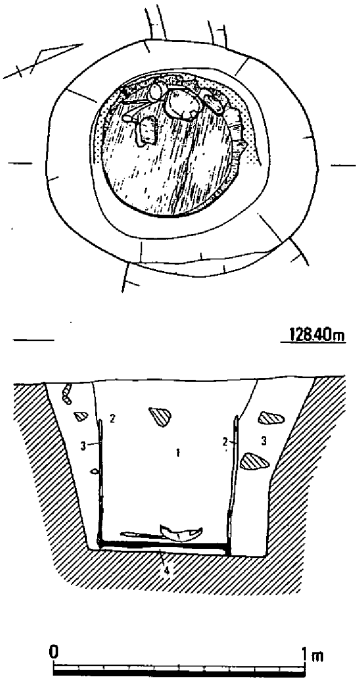
第402図　墓37(1/30)

通寶３点、煙管１点がある。寛永通寶は新寛永である。煙管M30の雁首と吸口の接合部にはラウの一部が残存している。脂返しの湾曲は小さく、火皿径12㎜、ラウ径９㎜を測る。　（易）

墓39（No220）（第404図、図版10・24）

23Q区の北東部、墓38の東隣に位置する。墓壙は西端を墓38に削られているが、平面形は検出面で長径95㎝、短径80㎝の長方形を呈し深さ18㎝を測る。土層断面から長辺60㎝、短辺45㎝の方形の座棺が納められていたと考えられ、底板の一部が残存している。出土遺物のうち、火打ち石S73、毛抜きM32、銭貨M34～40は、中央を間仕切りした木箱に納められた状態で出土した。S73は碧玉製の火打ち石で一部に使用痕が認められる。

煙管M31は竹製の筒に納められた状態で出土した。雁首、吸口ともに緑青におおわれており、接合部にはラウが一部残存している。

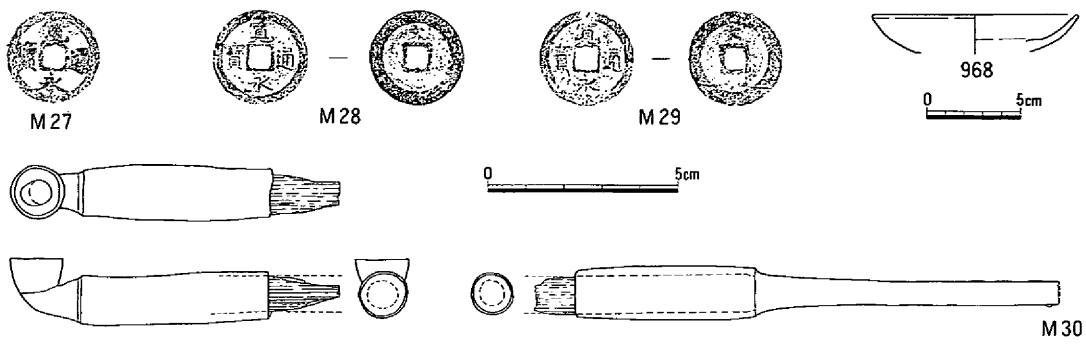


1．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土
2．灰褐色粘質土(木棺痕跡)
3．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土(礫多)
4．暗灰色粘質土

火皿径14.5㎜、ラウ径11.0㎜を測る。毛抜きM32は先端が一部欠損するがほぼ完形品である。M33は鉄釘あるいは鋏の握り部の一部と考えられる。銭貨７点のうちM34～M39は新寛永で、M37にはわずかに布目の圧痕が認められる。M40は念仏銭で、時計回りに「南無阿弥陀仏」の６文字が鋳出されている。また、棺外から漆椀が１点出土しているが、腐食が激しく図化しえなかった。　（易）

土壙64（No37）（第405図、図版22）

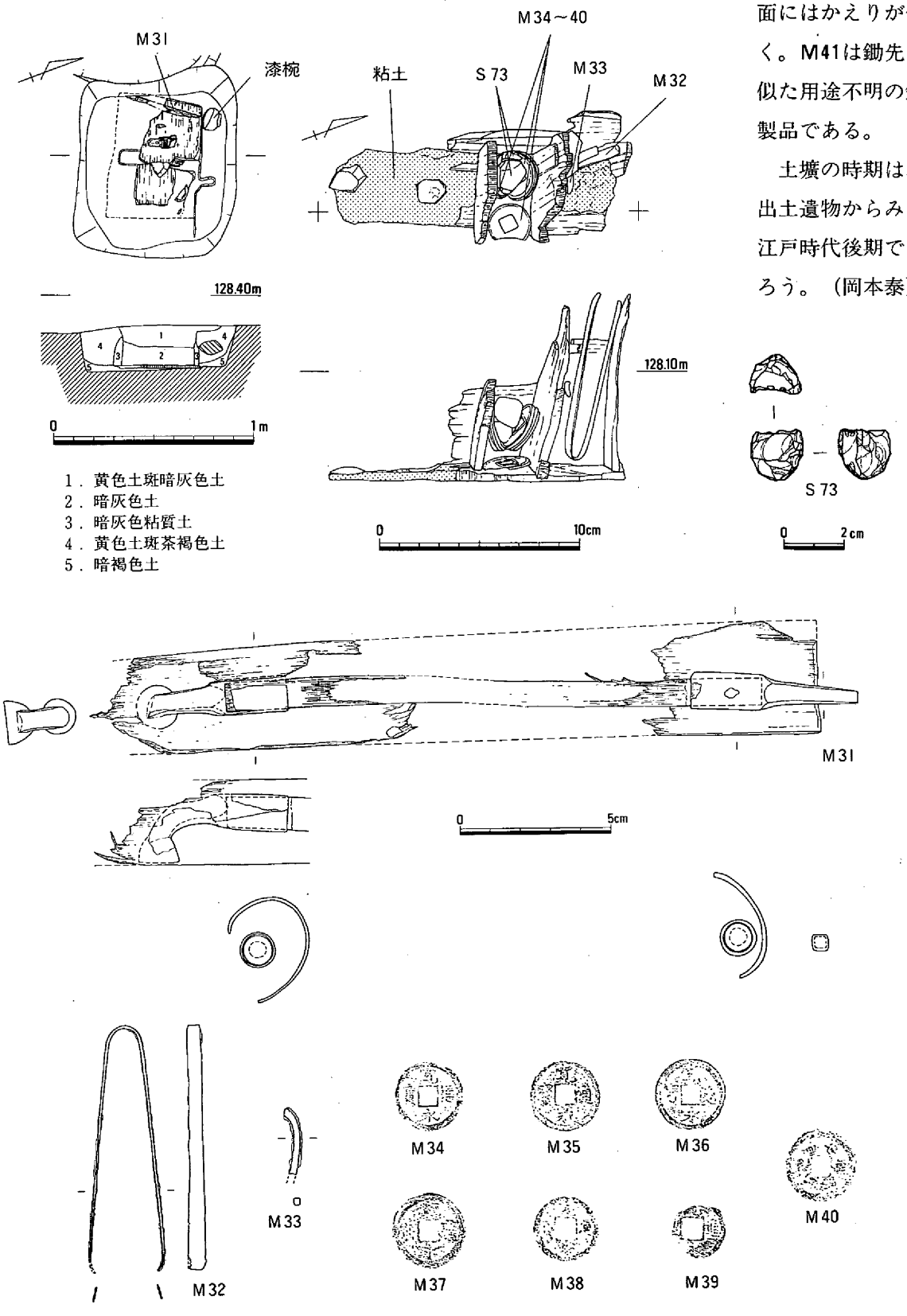
８Ｆ区に位置する長方形の土壙で、長径115㎝、短径85㎝、深さ30㎝を測る。重複する溝２より新しい。断面形は台形を呈し、埋土には多量の礫が含まれる。



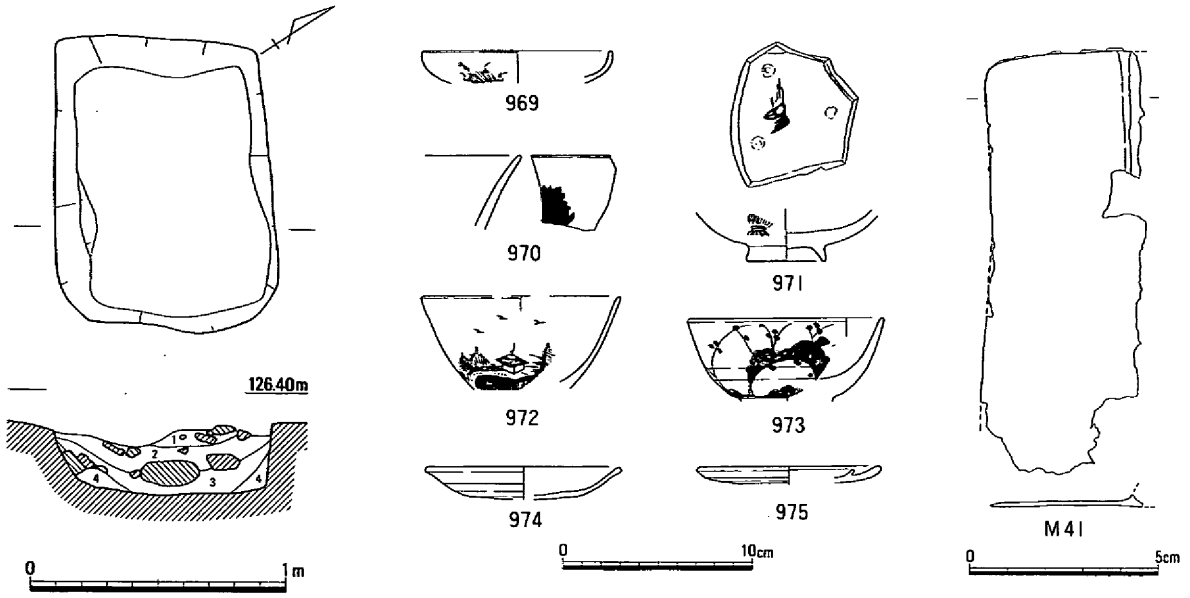
第403図　墓38(1/30)・出土遺物(1/2・1/4)

遺物は陶磁器が主体である。969～973は染付磁器で、969が皿、他は碗である。972は外面に山水画風の文様が描かれた碗で、形態から広東碗かと思われる。973は肥前・波佐見窯の、「くらわんか碗」と通称される粗製の碗で、外面に簡略化された梅樹を描く。974・975は備前焼の灯明皿で、975の内面にはかえりが付く。M41は鋤先に似た用途不明の鉄製品である。

土壙の時期は、出土遺物からみて江戸時代後期であろう。（岡本泰）



第404図　墓39(1/30・1/3)・出土遺物(1/2)



1．黄褐色粘質土斑淡褐灰色粘質土
2．暗青褐灰色粘質土(炭含)
3．淡灰黄褐色粘質土
4．黄褐色粘質土

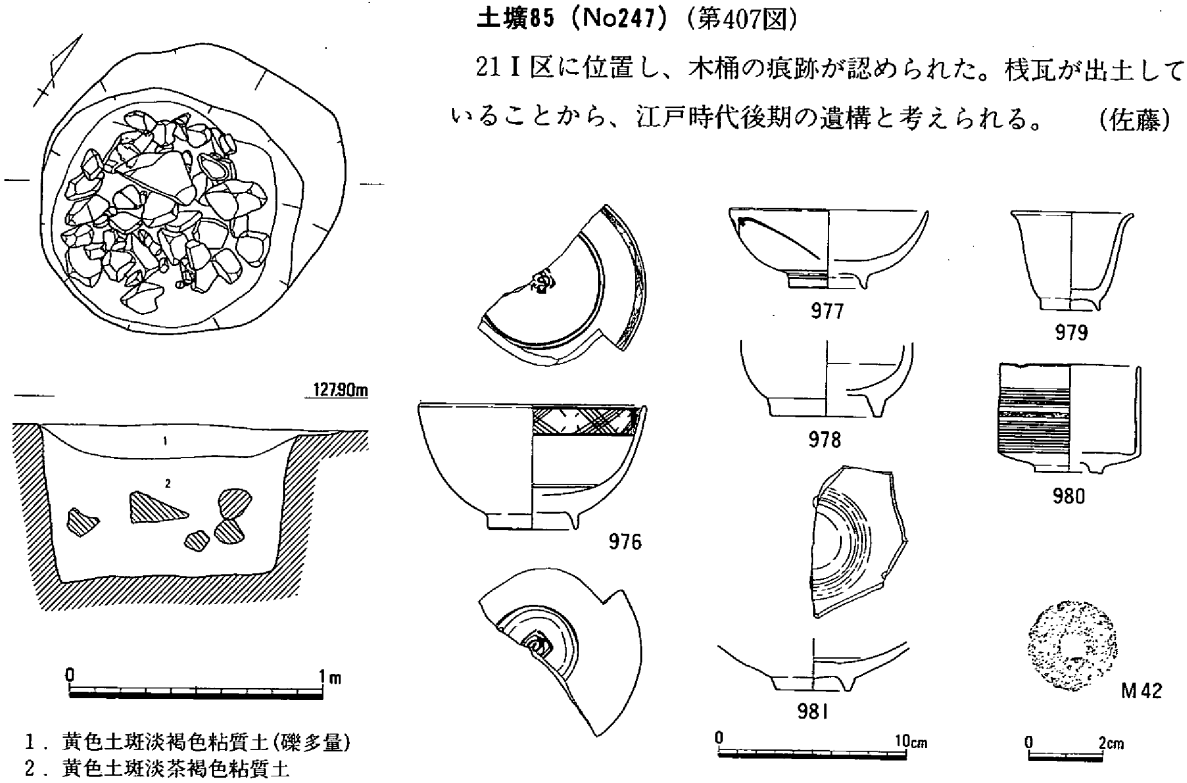
第405図　土壙64(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

土壙84（No249）（第406図、図版22）

21Ⅰ，Ｊ区に位置する。埋土中には多量の礫が廃棄され、肥前磁器を中心とした遺物が出土している。**976**は碗で口縁部内面に四方襷文、見込に手書きの五弁花が描かれ渦福の裏銘が施される。**977**は波佐見型の碗である。**978**は天目碗で内外面に鉄釉が施されている。**979**は白磁の杯である。**980**は筒形湯飲み椀で、側面に沈線を彫り、中央には鉄錆を巡らす。**981**は白磁の皿で、見込は蛇ノ目状に釉剝ぎされている。この他、チャート製の火打ち石、黒曜石の細片、新寛永**M42**などが出土している。これらの遺物から土壙84の時期は18世紀後半と考えられる。（佐藤）

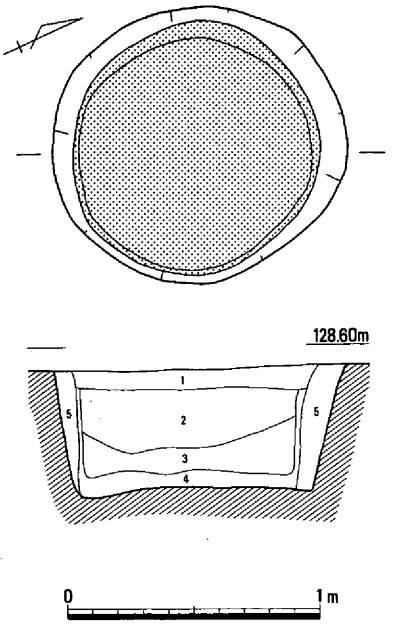
土壙85（No247）（第407図）

21Ⅰ区に位置し、木桶の痕跡が認められた。桟瓦が出土していることから、江戸時代後期の遺構と考えられる。　（佐藤）



1．黄色土斑淡褐色粘質土(礫多量)
2．黄色土斑淡茶褐色粘質土

第406図　土壙84(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)



1．黄色粘土斑淡茶褐色粘質土(礫多量)
2．淡褐色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．青灰褐色粘質土
5．淡褐色粘質土

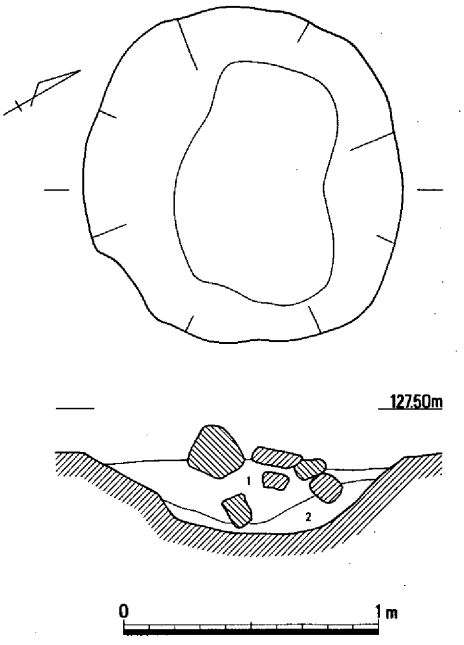
第407図　土壙85(1/30)

土壙91（No130）（第408図）

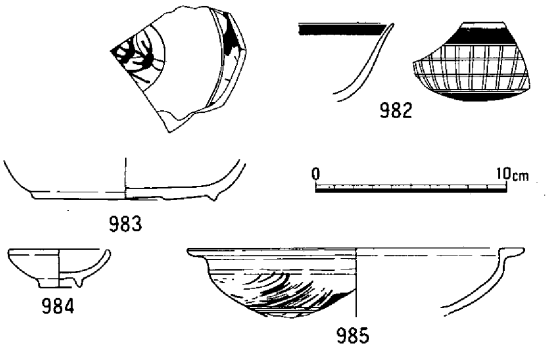
18K区南半・18L区北半に、江戸時代前～後期の土壙90～96が群在しており、うち土壙91は最大のものである。不整円形を呈し、長径133cm、短径126cm、深さ33cmを測り、埋土に大形の礫を含む。

982～984は肥前磁器。**983**は18世紀末～19世紀前半の染付皿である。**984**は完形の白磁小皿。**985**は陶器の鉢である。

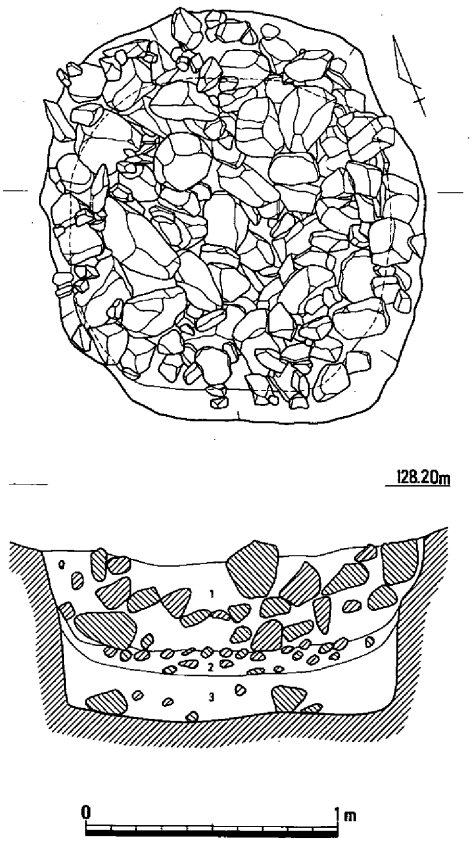
これらの遺物から



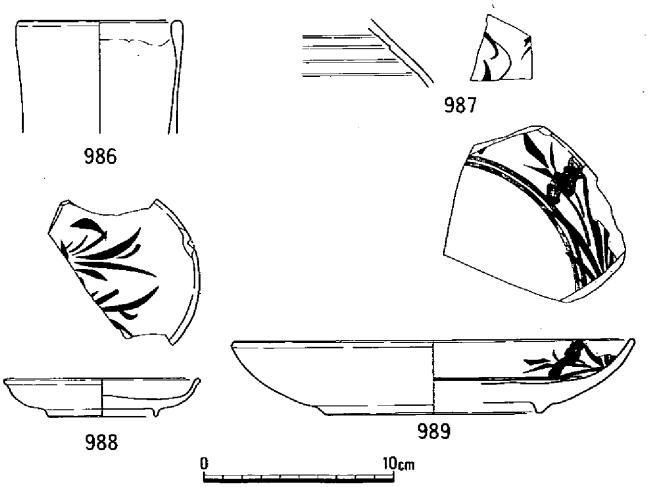
1．灰黄褐色粘性砂質土
2．灰色粘質土



第408図　土壙91(1/30)・出土遺物(1/4)



1．灰色土(大礫多)
2．灰色土(小礫多)
3．灰色粘質土(大小礫多)



第409図　土壙104(1/30)・出土遺物(1/4)

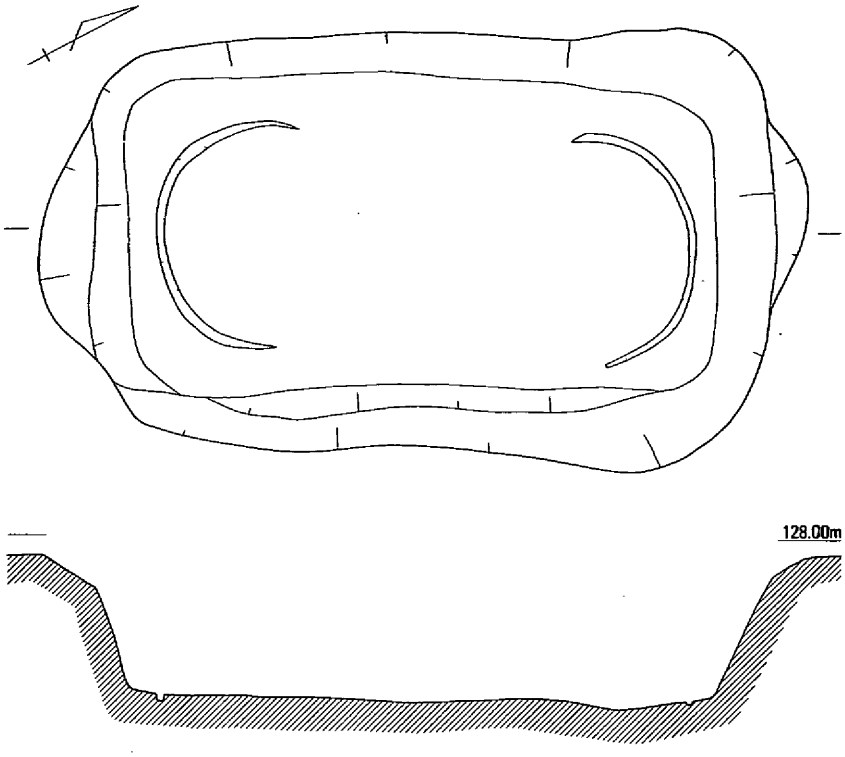
みて、土壙の時期は江戸時代後期である。（岡本泰）

土壙104（No251）

（第409図）

21J，K区に位置する。埋土中には多量の礫が廃棄され肥前磁器を中心とした遺物が出土している。

986は筒形陶器で、黄灰色の素地に白色釉を施し、口唇部を口禿げにする。**987**は染付の瓶の肩部である。**988**は染付の皿で、見込には草が描かれる。**989**は染付の波佐見型皿で、口縁部内面に



第410図　土壙110(1/30)

は菖蒲が描かれる。これらの遺物から土壙104の時期は江戸時代中期と考えられる。（佐藤）

土壙110（No275）（第410図）

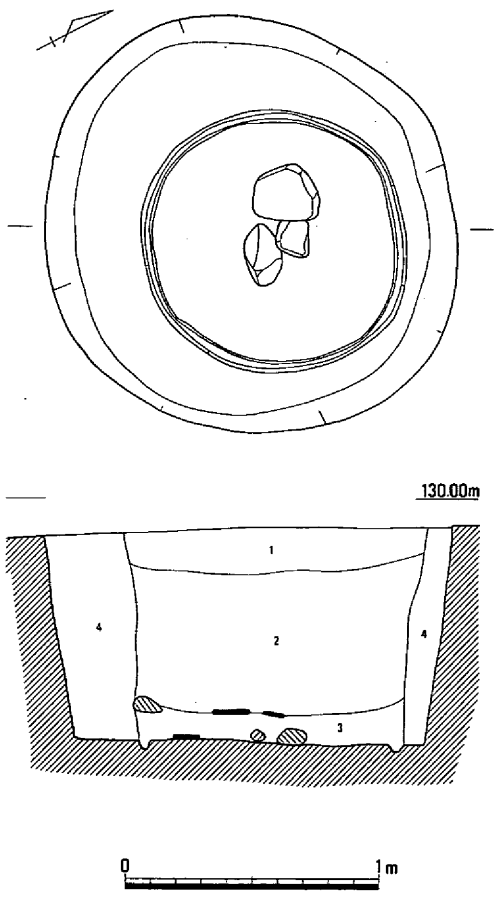
19M，N・20N区に位置する。平面形は検出面で長径300cm、短径165cmの長方形を呈し、深さ65cmを測る。平坦に掘削された底面には径90cm程の弧状の溝が2条向かい合っており、この位置に木桶が並べて設置されていたものと思われる。出土遺物はないが、周囲の遺構の状況から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

土壙136（No380）（第411図）

29I，J区に位置する。平面形は検出面で径160cm程の円形を呈し、深さ85cmを測る。底面には径1m程の溝が巡り、土層断面からこの位置に木桶が設置されていたものと思われる。出土遺物はないが、周囲の遺構の状況から江戸時代の遺構と考えられる。（佐藤）

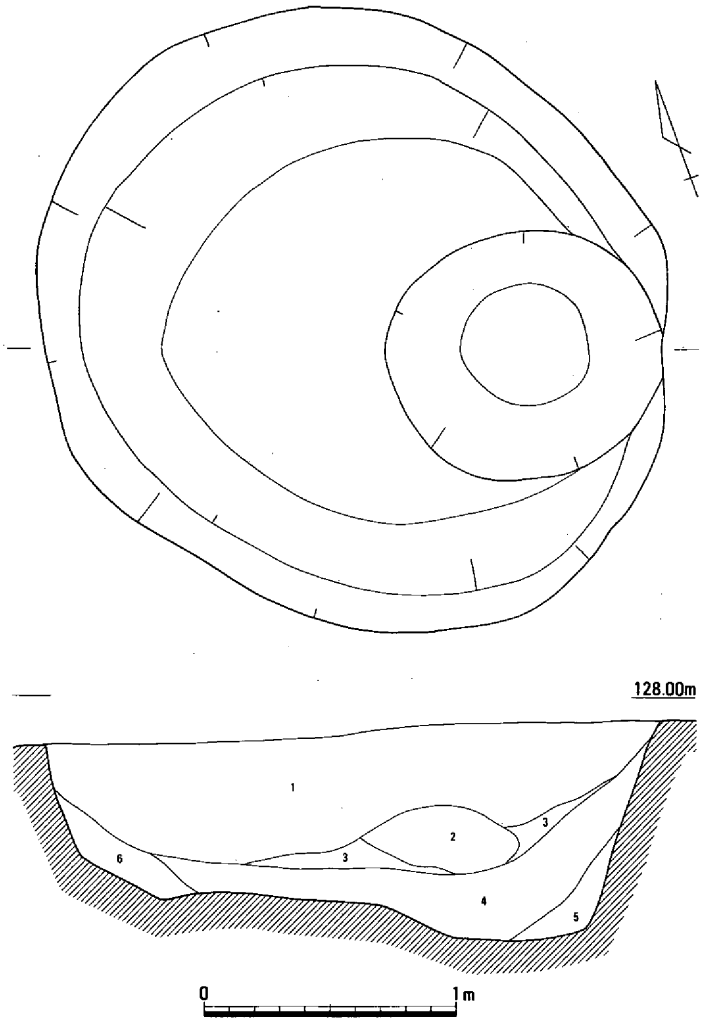
土壙102（No219）（第412～414図、図版22）

20K区に位置する。平面形は検出面で長径250cm、短径225cmを測る楕円形を呈する。

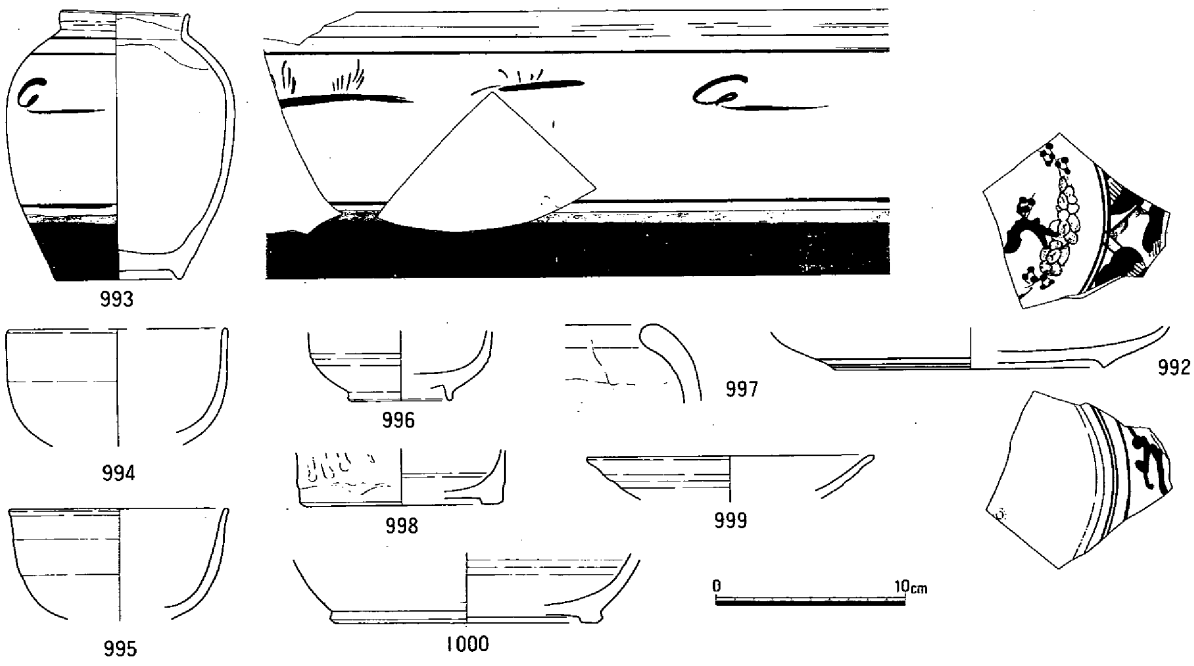


1．灰茶色土　　3．黄色土斑暗灰色粘質土
2．灰黄色土　　4．黄色粘質土

第411図　土壙136(1/30)



1．礫(円礫多)
2．黄色粘土
3．暗灰色粘土
4．暗灰色粘土(礫多含)
5．黄灰色砂礫



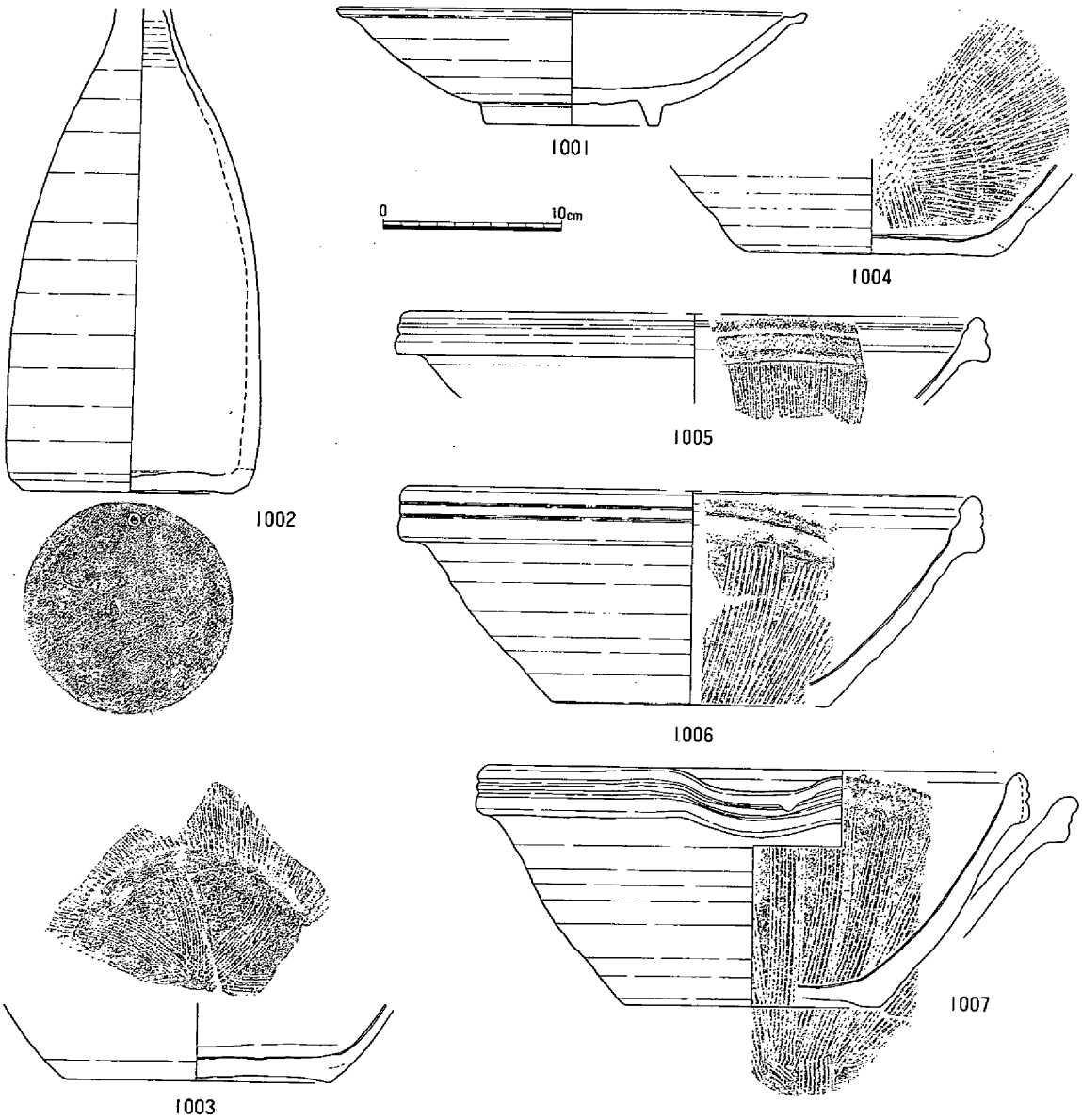
第412図　土壙102(1/30)・出土遺物(1)(1/4)

底面はほぼ平坦に掘削され、検出面からの深さは60～85cmを測る。埋土中には多量の礫が廃棄され、肥前磁器や備前焼、瓦などを中心に多くの遺物が出土した。

990は染付の瓶である。外面にはうすい呉須で草花（蘭？）が描かれ、白濁色の釉薬が全面に施されている。1650～1670年の製作と考えられる。**991**は染付の皿である。見込には呉須で折枝梅が描かれ、透明釉が全面に施される。1660～1680年の製作と考えられる。**992**は染付の皿である。見込には呉須で、松竹梅円形文が描かれ、高台内にはハリ支えの痕跡が１ヶ所認められる。**993**は染付の蓋付壺である。外面にはうすい灰色の顔料で山水画が描かれ、内面の上から1／4と外面の上から3／4に透明釉が、外面の下半1／4に鉄錆が施されている。1640～70年の製作と考えられる。

994～1001は施釉陶器の碗または皿である。いずれも素地は灰白色を呈する。**994・995**にはにぶい黄橙色の釉薬が、**996～998**には緑釉が、**999～1001**には透明釉がほぼ全面に施される。

1002～1007は備前焼である。**1002**は徳利で内外面とも時計回りの丁寧なナデ上げにより仕上げ、体部と底面の屈曲部はヘラ切りする。底面は丁寧なヨコナデにより仕上げ、竹管による窯印が施される。



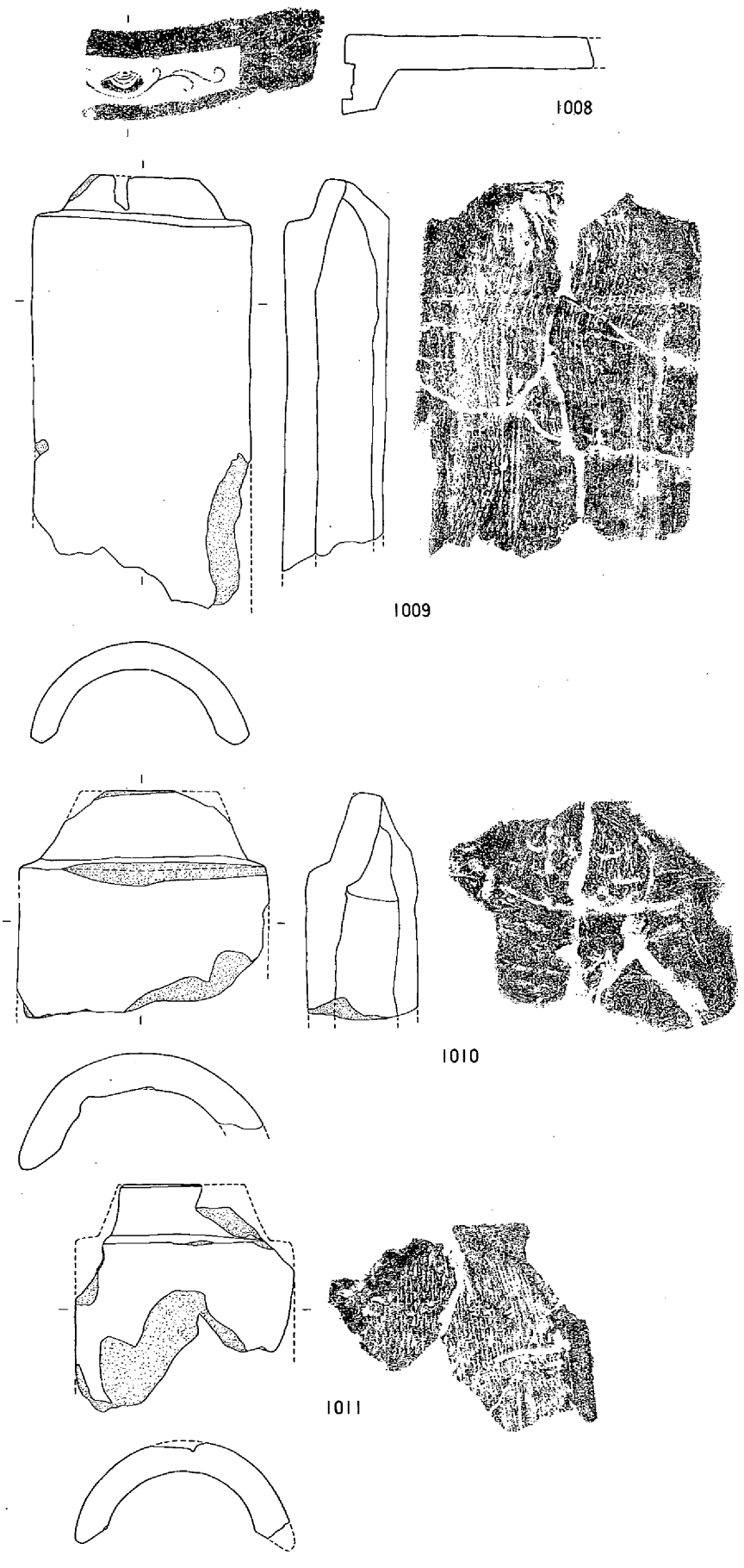
第413図　土壙102出土遺物(2)(1/4)

1003～1007は擂鉢である。肥厚した口縁部外面は下端を三角形状に誇張し、端面には２条の凹線を巡らせている。内面には櫛描条線を全面にわたって施している。

1008は軒平瓦で、全面ナデで仕上げられ、瓦当面は宝珠文、唐草文で飾られる。色調は灰白色を呈する。

1009～1011は丸瓦である。いずれも玉縁付きの丸瓦で、内面には鉄線によるコビキ痕が直線的に認められる。その上には筵のような縄目が全面に残り、ごく部分的に布目圧痕が認められる。凸面はかなり風化して、表面の剝落部分が広い。

出土した遺物の内、**990・991・993**は肥前磁器の中でもいわゆる上手物であり、伝世品と考えられる。その他の遺物については、おおむね18世紀後半のものと考えられる。また、出土遺物が穴蔵１の遺物と接合関係にあったことから、土壙102の時期は、江戸時代後期から幕末にかけてとみられる。　　（佐藤）



第414図　土壙102出土遺物(3)(1/4)

３．小結

近世の大田茶屋遺跡は、遺構や遺物の内容から判断して、一般農民の集落とは思われない面がいくつも見出される。この点に考慮をはらいつつ、いま一度、遺跡全体を見まわしてみたい。

西地区では２カ所の屋敷地が確認される。１カ所は県道部分の２区で、池状の大形土壙と石組みの溝が伴い、礎石建物の存在が推定される（注３）。もう１カ所は１区と５区の境界付近にあたる丘陵頂部で、土壙が６基検出された。このうち県道部分の１区に所在した土壙19は大形で、底部が「８」の字状を呈して桶を２個並べて埋置したものとみることができ、現時点で考えれば便所の可能性も無視できない。また、６Ｋ区の土壙63の北西に近接する不定型な落ち込みから出土した土器片が、７Ｇ区の土壙17から出土した土器片と接合し、この広い丘陵頂部先端にも礎石建物のあった可能性が高い。２区で木棺土葬墓９基を検出した墓地が発見されているが、ほとんどの墓から六道銭が出土し、なかには銅銭・鉄銭あわせて22枚、29枚という岡山県下でも類例の少ない出土量（注４）をもつものがあって注意される。この墓地が２カ所の屋敷地に近接することから、どちらかの家と関係するものとすれば、その屋敷地に居住した人々の階層をある程度反映していると考えることができる。

東地区では、まず、もっとも西の屋敷地（Ａ地点）が注目される。池１とする大形土壙があり、その北側に大形建物が所在する。池１の出土土器の年代は18世紀後半から幕末までと、掘立柱建物とは共存しない可能性が高いが、江戸時代後期の礎石建物を推定し、建物111も共存しうるかもしれない。土壙102から出土した、17世紀後半のものである**990・991・993**は、雑器ではなくて、ある程度の高級品とされ、共伴土器が18世紀後半のものであることから伝世品とみられる。丸瓦も出土していることから、この遺跡における初期の瓦葺き建物が存在していたことも考えられ、この屋敷地の主がそれなりの階層にあったことを思わせる。穴蔵１から出土した土器片は土壙102・103から出土した土器片と接合関係が認められ、この範囲が一つの屋敷地であったことを示す。また、池１出土土器の年代も穴蔵１のそれと等しいことから、屋敷地の廃絶が幕末から明治初期にあったことを知ることができる。

Ａ地点の北東に位置するＢ地点では、建物104～107が同じ規模で何度も建て替えられている。建物の床面積はＡ地点の建物と変わらないが、穴蔵や池状遺構は検出されず、いくらかの格差が存在したかもしれない。土壙86・87をＢ地点の便所とみれば、これと土壙102との間が屋敷地の境となる。

東地区の中央をしめるＣ地点では建物118・115・120という方形に近い平面形をもつ大形建物が存在する。Ａ地点の建物109が1:2.49、Ｂ地点の建物104が1:2.34の比率であるのに、建物118は1:1.23を示す。さらに、建物118の南に配置されている建物129は1:3.40と長大である。これらの建物を、村の中で飛び抜けて有力な、庄屋のような人物の屋敷と理解する方法もあるが、ここでは鯱瓦の出土に注目したい。紙数の都合で掲載していないが、1／2弱に復元できた個体があり、さらに各部の小片が出土し、最低で２個体分の破片がＣ地点から出土している。鯱を飾る建物は城や寺院（注５）の建物に多く、江戸時代に一般の民家に使用されたかは疑問である。これらのことからすれば、Ｃ地点の建物群は寺院の可能性が高く、複数の堂舎が建てられていたとみられる。Ｃ地点の南西端に位置する建物121・122はＡ地点・Ｂ地点の建物と類似していて、棟方向が建物118とは異なり、Ａ地点との間に広い空閑地があるため、別の屋敷地の中心建物であることが考えられる。

Ｄ地点の建物135・136についても方形であることから寺院に関係した建物である可能性があるが、穴蔵３の存在や建物140を中心建物とみて民家の屋敷地と考えておきたい。　　（岡本寛）

第３節　大田障子遺跡

１．遺構配置

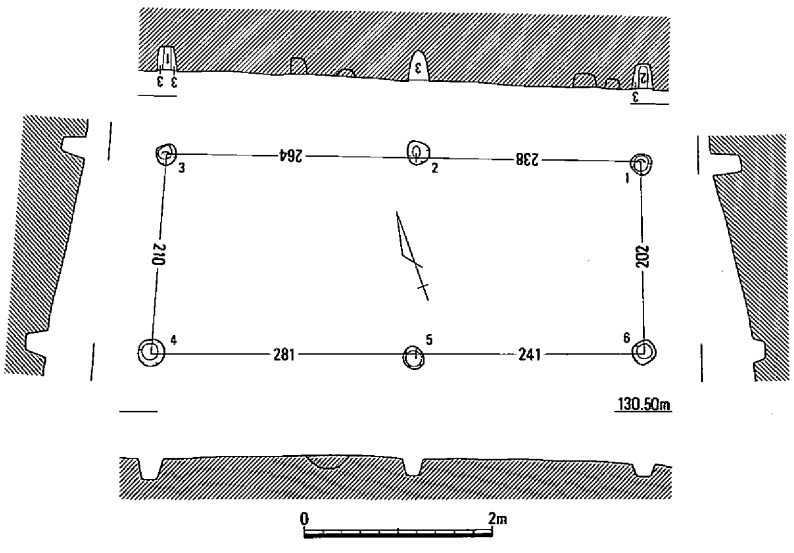
江戸時代の遺構としては、建物１棟・土壙６基・溝１条が検出されている。遺構密度は薄く、各遺構は調査区内に散在してまとまりを欠き、相互に関連して何らかの空間を形成していたとは思えない。同時期の大田茶屋遺跡が屋敷地や墓地となっていたのとは対照的である。これらの遺構のうち、特徴に乏しく遺物も出土していない土壙や溝については、遺構配置図には記載したが個別の説明は行っていない。（岡本泰）

２．遺構・遺物

建物５（No ８）（第416図）

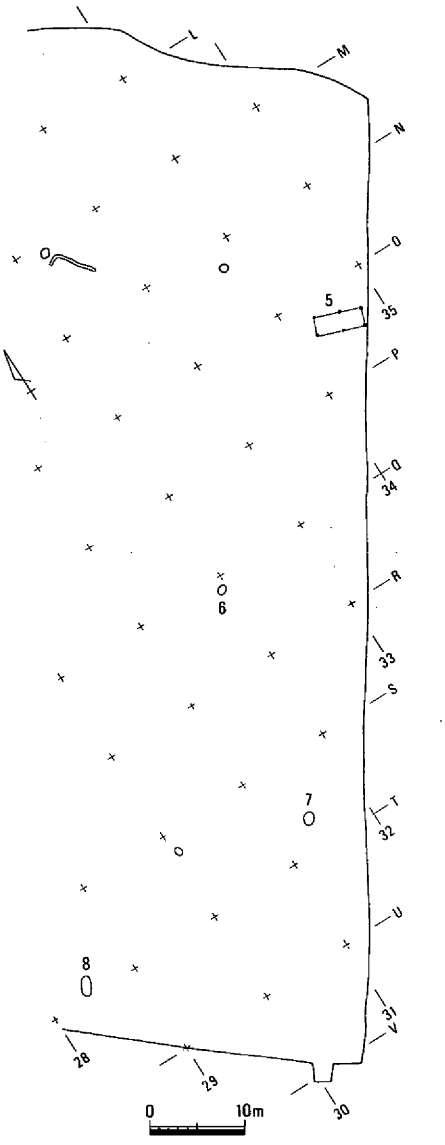
34O区で検出された梁間１間の掘立柱建物である。桁行はさらに東へ延びる可能性もあるが、現状では２×１間となっている。建物の規模は、桁行522cm、梁間210cm、面積10.5m²を測る。柱穴は円形で、径23～27cm、深さは13～34cmである。南向きの斜面上に位置するため、底面の標高は南側のほうが低い。柱痕は北側の柱穴１・３で認められた。

時期については、土師質の土器小片が出土したにすぎないため正確には決定できないが、埋土の質と棟方向から近世であろうと考えている。（岡本泰）



１．黄褐色粘土斑褐灰色砂質土　　３．黄褐色粘土斑灰褐色砂質土
２．灰褐色砂質土

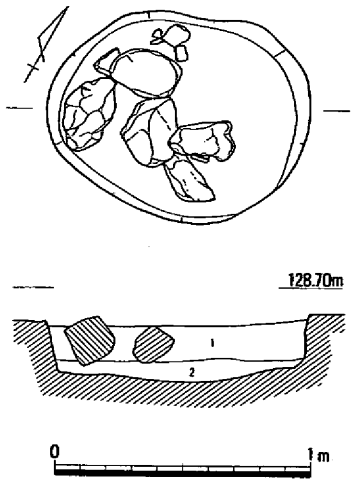
第416図　建物５（1/80）



第415図　近世主要遺構配置図（1/800）

土壙６（No20）（第417図）

31Q区に位置する、楕円形を呈する土壙である。検出面での規模は、長径103cm、短径81cm、深さ24cmを測る。壙壁の傾斜は垂直に近く、底面は平坦である。埋土中に大形の礫が含まれていたが、置かれたというよりは土壙を埋め



1．暗褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土斑黒褐灰色粘質土

第417図　土壙６(1/30)

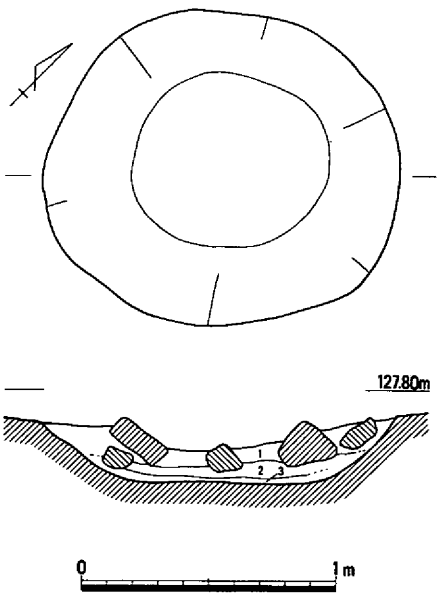
る際に投げ込まれたような状態であった。遺物としては、古代から近世にかけての土師器・勝間田焼・磁器等の破片が多数出土している。　(岡本泰)

土壙７（No19）（第418図）

31Ｓ区に位置する円形の土壙である。検出面での規模は、長径140cm、短径124cm、深さ24cmを測る。壙壁は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。埋土中から土師器・須恵器のほか近世の陶器片も出土している。また大形の礫も多数出土しており、土壙の性格はごみ穴と推定される。　(岡本泰)

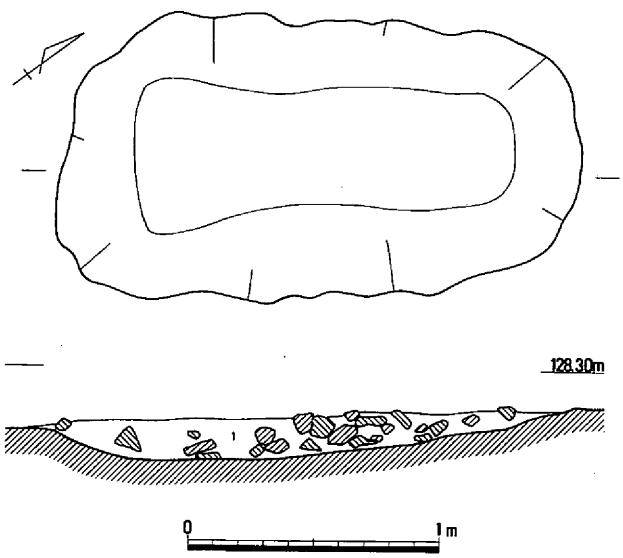
土壙８（No18）（第419図）

28Ｓ区に位置する、不整な隅丸長方形の土壙である。規模は、長径206cm、短径115cm、深さ16cmを測る。壙壁の傾斜は緩く、底面との境は不明確である。埋土中には多数の礫が含まれていたが、遺物は全く出土していない。　(岡本泰)



1．黄褐色土　2．茶褐色土　3．暗褐色土

第418図　土壙７(1/30)



1．黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土(礫多含)

第419図　土壙８(1/30)

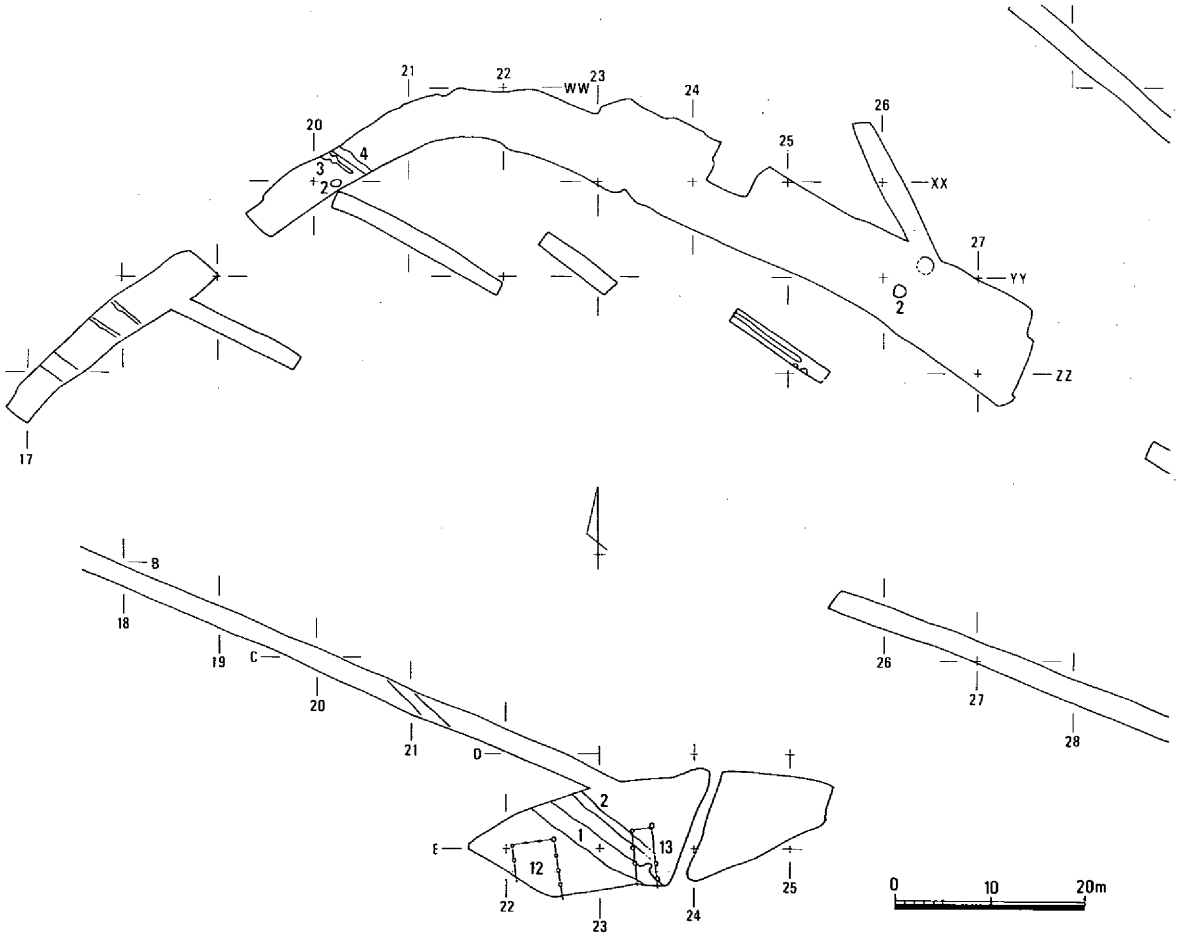
３．小結

大田障子遺跡の江戸時代の遺構は数が少なく、その分布もまばらで特に規則性はみられなかった。１棟のみ検出された建物も小規模で、土壙もごみ穴の類と考えられる。この点は西に隣接する大田茶屋遺跡で屋敷地や墓地に伴う多数の遺構が検出されているのと好対照で、当時の障子遺跡は集落の縁辺部であったと考えられる。　(岡本泰)

第４節　大田大正開遺跡

１．遺構配置

大田大正開遺跡において発掘調査を実施したのは一部の地区に限られる。このうちで近世の遺構が検出されたのは、第２次調査のトレンチ部分と２区・３区である。４区で柱穴列が平行して検出され、戸を備えた柵（第14図Ｆ１）と判断したが、出土遺物から近代以降の遺構ではないかと考えている。近世の遺構は掘立柱建物２棟、墓１基、土壙１基、溝数条であった。建物については、出土遺物はなかったが、重複関係にある前代の建物の存在や、その棟方向と構造から近世の遺構と考えた。２棟の建物は棟方向をほぼ等しくして近接することから、同時に存在していた可能性が強い。その場合には、主屋と副屋の関係になり、１区画の屋敷地内に複数の建物がある企画で配置されていたことが考えられる。墓は調査区の中央部で検出され、近接した墓が他にないことから、一定の区画をもった墓地は存在せず、単独で営まれたものとみられる。溝はいずれも直線的で、北西－南東方向で平行していた。溝１は２区から第11トレンチを経て、３区まで延びているようである。建物と重なることから時代を異にし、水田に関係する遺構と考えれば、近代以降の開墾に関係する可能性もある。　　（岡本寛）



第420図　近世主要遺構配置図(1/800)

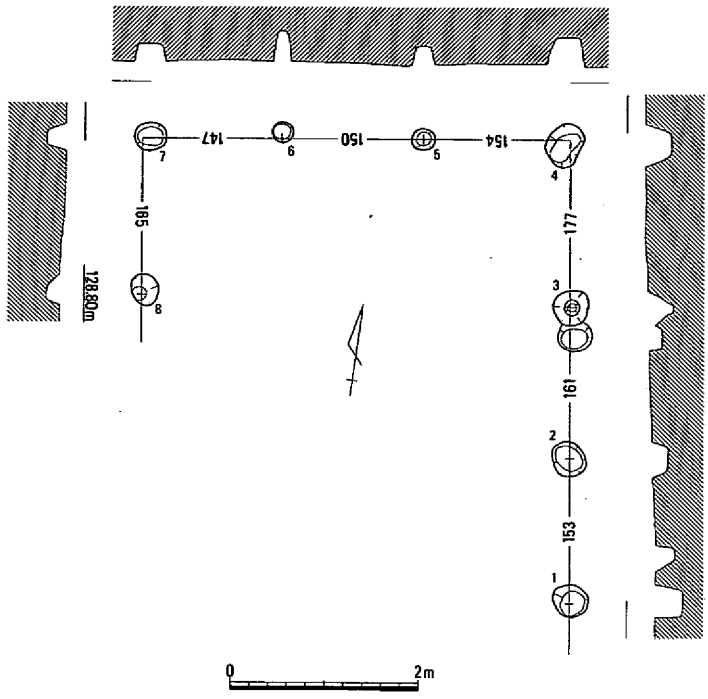
２．遺構・遺物

建物12（No15）（第421図）

22D，E区に位置する。南半が調査区外にあたるため、建物全体の規模は不明である。

各柱穴の規模は平面形が検出面で径22～46cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ20～32cmを測る。

出土遺物がないため、時期は断定できないが、建物・柱穴の規模や、棟方向が南に隣接する大田茶屋遺跡の江戸時代の建物に類似していることから、当該期の遺構と判断した。　（佐藤）

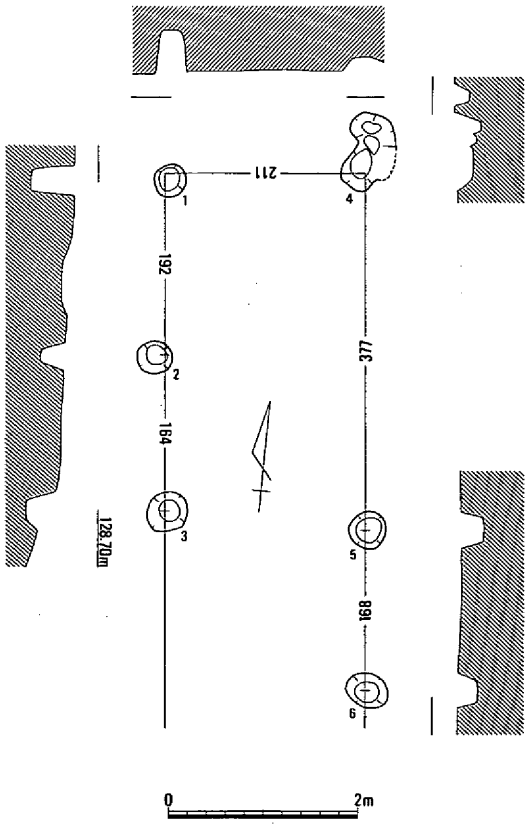


第421図　建物12(1/80)

建物13（No22）（第422図）

23D，E区に位置する。南半が調査区外にあたるため、建物全体の規模は不明である。各柱穴の規模は平面形が検出面で径37～47cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さ16～44cmを測る。

出土遺物がないため、時期は断定はできないが、建物・柱穴の規模や棟方向が南に隣接する大田茶屋遺跡の江戸時代の建物に類似していることから当該期の遺構と判断した。　（佐藤）



第422図　建物13(1/80)

墓２（No ６）（第423図、図版24）

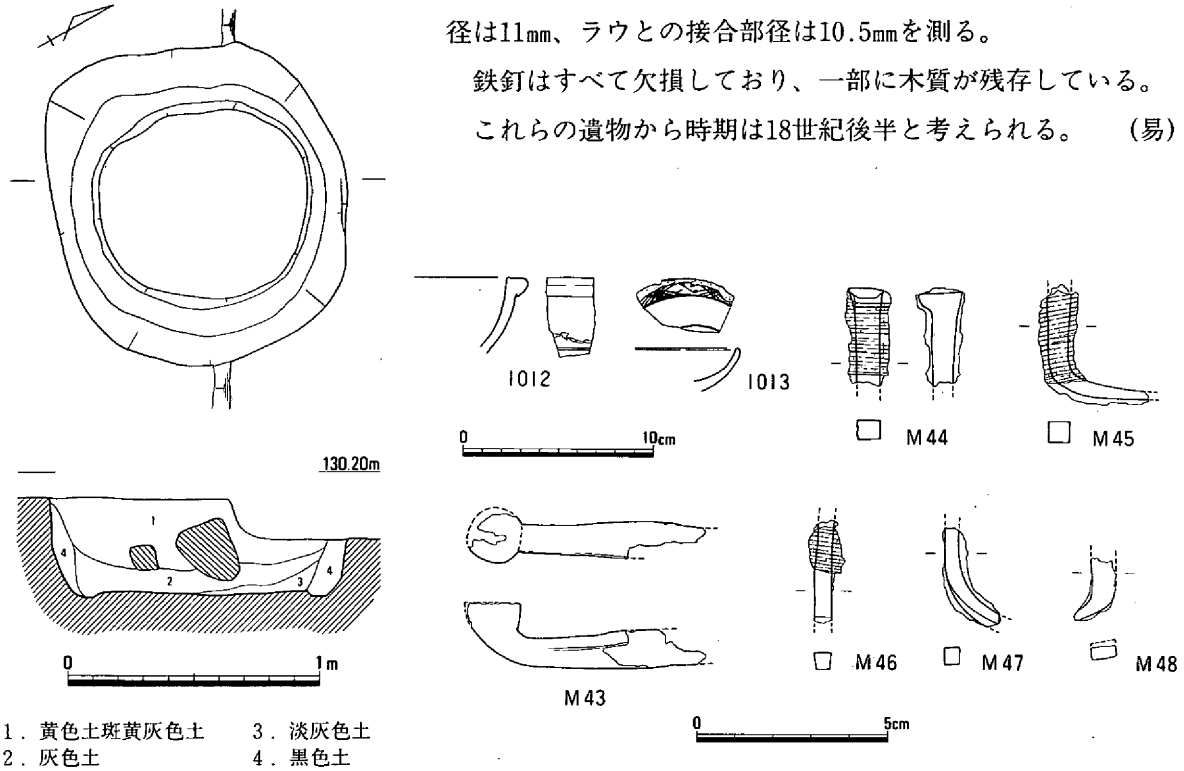
26YY区に位置する。上面は大きく削平を受けており本来の規模は不明であるが、墓壙の平面形は検出面で径120cmを測る不整形な円形を呈し、深さ38cmを測る。底面には側壁に沿って幅５cm、深さ４cm程の溝が巡らされており、土層の堆積状況からこの溝に沿って円形座棺の側板が巡らされていたものと考えられる。

出土遺物には陶磁器２点、煙管の雁首１点、鉄釘５点がある。**1012**は施釉陶器の鉢である。灰赤色の素地の内外面に透明釉を施し、口唇部は露胎としている。外面には一条の凹線が巡らされ、白色土による文様の一部が認められる。**1013**は染付青磁の蓋と考えられる。内外面には灰白色の釉薬が施され、内側面には濃藍色の顔料で四方襷文が描かれている。

M43は煙管の雁首で、全体に厚く緑青に覆われている。火皿径は11㎜、ラウとの接合部径は10.5㎜を測る。

鉄釘はすべて欠損しており、一部に木質が残存している。

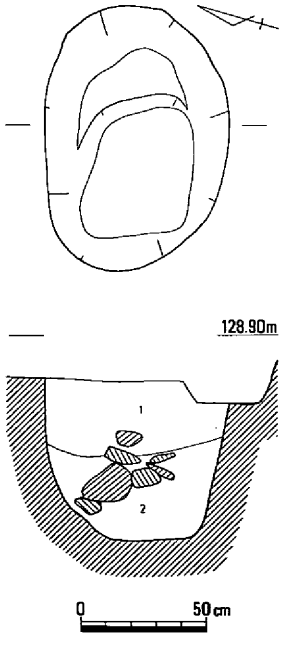
これらの遺物から時期は18世紀後半と考えられる。　（易）



第423図　墓２(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

土壙２（No ３）（第424図）

20XX区に位置する。平面形は検出面で長径104㎝、短径74㎝を測る不整形な楕円形を呈し、検出面からの深さ62㎝を測る。出土遺物がないため時期は断定できないが、形態や規模、埋土の状況から近世の遺構と判断した。　（佐藤）

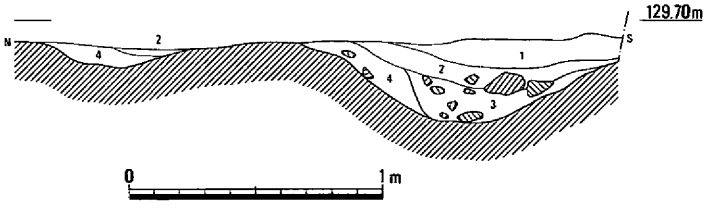


第424図　土壙２(1/30)

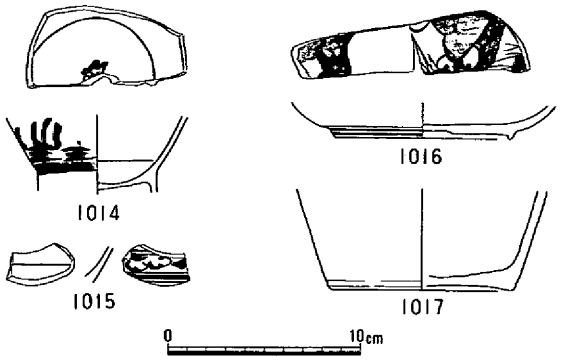
溝１・２（No ２・１）（第425図）

溝１は調査区外へと続くため、全体の規模は不明であるが22D区、20C区、17YY区の３ヶ所で部分的に検出されていることから、少なくとも85m以上にわたって、ほぼ直線的に掘削されているようである。検出面で幅1.2～２m、深さ30㎝前後を測り、断面形はなだらかなすり鉢状を呈する。埋土中には多量の礫が廃棄され、肥前磁器を中心とした遺物がわずかながら出土している。

1014～1016は染付磁器で、呉須により各種の文様が描かれる。



第425図　溝１・２(1/30)



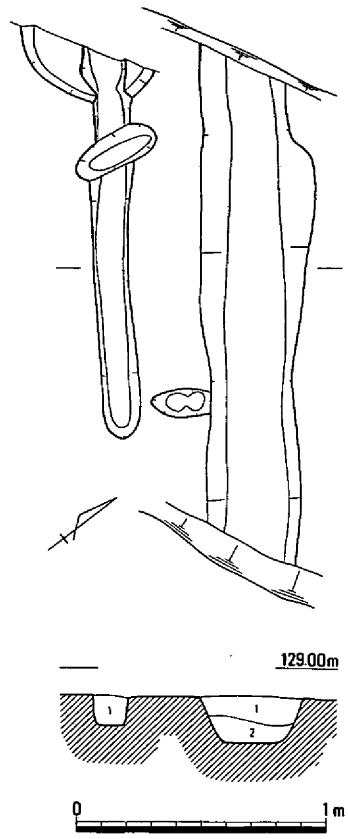
第426図　溝１出土遺物(1/4)

1014・1015は広東形碗である。**1016**は蛇ノ目凹形高台の皿で、竜が描かれる。**1017**は施釉陶器の徳利の底部と考えられ、素地はにぶい赤褐色を呈し、内外面には透明釉が施される。底面は回転ヘラ削りにより上げ底に仕上げられ、無釉である。

これらの遺物から溝１は江戸時代後期以降に掘削され、比較的短期間で埋没したものと考えられる。

溝２は22Ｄ区に位置し、調査区外に続く。検出面で幅50cm前後、深さ10cm前後を測り、断面形は浅いボウル状を呈する。

出土遺物がないため時期は断定できないが、溝１と平行していることから、ほぼ同時期と考えられる。　（佐藤）



１．黄色土斑暗灰色土　　２．暗灰色土

第427図　溝３・４(1/30)

溝３・４（No ５・４）（第427図）

20WW区に位置する。溝３・４とも調査区外に続いていくため、全長は不明である。溝３は検出面で幅15cm前後、深さ10cm前後を測る。壁面はほぼ垂直に掘削され、底面はほぼ平坦である。溝４は検出面で幅40cm前後、深さ20cm前後を測る。壁面は斜めに直線的に掘削され、底面はほぼ平坦である。

溝３・４とも出土遺物がないため、時期は断定できないが、溝１・２とほぼ平行していることや、埋土の状況から、江戸時代後期以降のものと考えられる。　（佐藤）

３．小結

以上、大田大正開遺跡で検出された遺構・遺物について述べた。調査区が限られていることもあり遺跡全体の様相は不明である。

ただ、南に隣接する大田茶屋遺跡の遺構・遺物のあり方と比べ、遺構の密度は薄く散在的で、遺物の出土量も少ないことから、集落の縁辺部に位置するものと考えられる。　（佐藤）

注

（注１）安川豊史「西奥田遺跡発掘調査概要」『年報　津山弥生の里』２　津山弥生の里文化財センター　1995年

（注２）尾崎光伸・小都隆・田邊英男・木村信幸・武知秀樹『吉川元春館跡－第１次発掘調査概要－』広島県教育委員会　1994年

（注３）岡本寛久『大田茶屋遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96　岡山県教育委員会　1994年

（注４）岡本泰典「岡山県内の近世墓の様相」『西日本近世墓の諸様相』関西近世考古学研究会　1997年

（注５）例えば岡山県久米郡久米南町誕生寺御影堂・山門など

第9章　考察とまとめ

第1節　考察

1．弥生時代の掘立柱建物について

今回の調査で検出された弥生時代中・後期の集落は、大田茶屋遺跡では住居10軒に対し建物23棟、大田大正開遺跡では建物のみ6棟、大田松山久保遺跡では住居2軒に建物24棟という数字が示すように、掘立柱建物の比率が非常に高いことを特徴とする。建物の多くは長方形を呈し、壁面の削平された竪穴住居とは明確に区別される。この集落構造は、中期後葉に出現し、後期前葉に最盛期を迎え、後期前半のうちに消滅したようである。

同様に建物の多い例を近隣で探してみると、中期後葉の津山市・押入西遺跡（注1）、中期後半の奈義町・野田遺跡（注2）などが挙げられる。前者は丘陵上に三つの小住居群が併存し、建物は各群内の一定位置に集中的に配置される。後者では住居6軒に対し建物は18棟検出され、同時存在はそれぞれ5軒・5棟、住居1軒に建物1棟が対応するとの推定がなされている。しかし、これらの掘立柱建物を全て高床倉庫と想定しては集落内で数が多すぎるため、一部には住居の機能を想定すべきであろう（注3）。以上のような例を参考にすれば、本丘陵上の建物群にも、同様に住居として機能したものが含まれると考えるのが妥当といえる。

次に、各遺跡の掘立柱建物を比較してみると、茶屋遺跡と大正開遺跡では全て1×1ないし2×1間であるのに対し、松山久保遺跡では桁行3間以上のものが6棟も含まれている。平均面積は、茶屋遺跡7.5㎡、大正開遺跡8.0㎡に対し松山久保遺跡13.7㎡となり、両者間の格差の存在が明瞭に見てとれる。松山久保遺跡は、丘陵頂部という立地条件も併せ、他からやや隔絶した位置を占めていたと考えられる。特に、平均面積を引き上げる要因ともなった15㎡以上の大形建物は、丘陵頂部を「コ」の字形に取り囲む配置状況からしても、単純に住居や倉庫と言い切れない面がある。後期前葉のある時期に、何らかの祭祀に関わる施設として機能した可能性もあるのではなかろうか。

このような建物中心の構造は、本丘陵上に特徴的なものであるが、周辺の丘陵上に立地する中期後葉の小住居群については、中山俊紀氏によりその構成要素の分析がなされている（注4）。それによると、小住居群は複数の竪穴住居、長方形竪穴住居状遺構、掘立柱建物、柱列等が地形に沿って弧状に配置されるという群把握が可能であるとされる。本丘陵上の集落は、そうした中期後葉の集落構造が、後期前葉に至って長方形竪穴住居状遺構等が消失するとともに、建物中心のものへと独自に変化を遂げた結果とみることもできよう。

（岡本泰）

2．弥生時代の石器について

グリーンヒルズ津山建設に伴う発掘調査では旧石器時代から江戸時代まで計80点の石器あるいは石製品が出土している。その多くは弥生時代の石器であるが、このうち遺構から出土した時期の限定で

きる資料は少なく、遺跡自体大きく削平を受けているため、本来の石器組成は失われているものと考えられる。そこで今回は出土石器の多くを占める石包丁とその未成品から、石包丁の製作と岡山県北部における石包丁の編年について検討を加えることとする。

岡山県北部における弥生時代の石器は近年発掘調査の増加により資料の蓄積が進んでおり、各遺跡報告書の中で個別に検討が加えられている他、安川豊史氏による総括的な論考があり、石器組成の変遷と地域的な特徴が述べられている（注5）。こうした資料の増加にも関わらず、石包丁を始めとする石器の生産については製作状況を示す資料が少ない（注6）ことから、ほとんど検討されていないのが現状である。今回の調査で出土した石包丁未成品16点についても建物34から出土したS30以外はすべて河道埋土あるいは包含層からの出土であり、製作時の具体的な状況は不明である。

これらの未成品は製作工程別に分けると打裂工程が9点、穿孔工程が5点、研磨工程が2点あり、剥片や塊石は出土していない。また、今回の調査では出土していないが、石器製作具のうち集落内で出土するのが小型の敲打器、石錐、砥石等に限られることから、石包丁の製作工程のうち荒割は石材採集地で行い、打裂成形・研磨・穿孔は集落内で行っていたことがわかる。

また、穿孔工程の未成品はすべて打裂成形の後、穿孔しているが、研磨工程の未成品S30は未穿孔であり、石包丁の製作工程に穿孔→研磨と研磨→穿孔の2通りがあることを確認することができた。

石材には流紋岩、結晶片岩、頁岩、凝灰岩等、岡山県北部で広く産出する石材（注7）が利用されている。現在でも吉井川や宮川など中小河川敷ではこれらの石材が手頃な転石として容易に採取できることから、石包丁の製作にもこうした転石が多用されていたものと考えられる。

次に石包丁の編年についてであるが、岡山県北部では弥生時代前期から中期前葉の遺跡調査例がほとんどないことから、稲作受容期の石器の様相は不明と言わざるを得ない。この状況は津山盆地においても同様で（注8）、遺跡数が増加する中期中葉以降がその対象となる（第428図参照）。

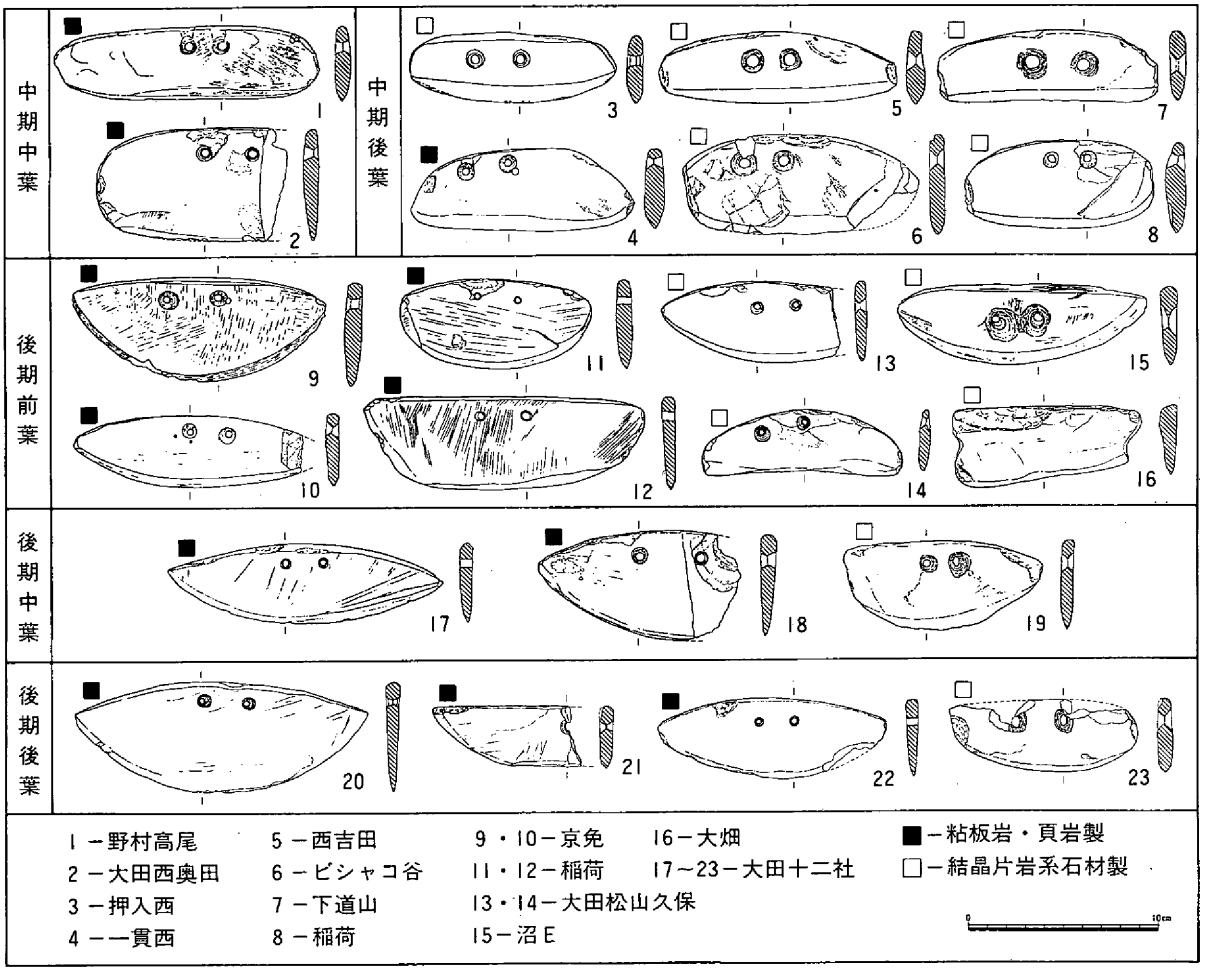
弥生時代中期の石器は下條信行氏により地域毎に在地性が現れ、各地域の石器文化圏が形成されると指摘されている（注9）。岡山県北部の石器は瀬戸内文化圏と共通する特徴をもち、石包丁については楕円形、直線刃半月形（注10）が主体を占めている。また、中期の石包丁の特徴として一定の形式を指向しているものの、不整形で、丸みを帯び、やや厚みがあることが指摘できる。

弥生時代後期には鉄器の段階的な普及に伴い石器組成が大きく変化していき（注11）、石包丁の形態にも大きな画期が認められる。後期前葉には中期の主流であった楕円形、直線刃半月形が減少し、代わって外湾刃半月形（注12）、杏仁形が現れ、主体を占めるようになる。また、中期後葉から後期前葉にはサヌカイト製打製石包丁の出土例が若干あり（注13）、その影響を受けた有抉方形の磨製石包丁も数例認められる（注14）。後期中葉から後葉は資料が少ないため全体の様相が今一つ不明瞭であるが、現在得られている資料から判断する限り、ほぼ外湾刃半月形、杏仁形に統一されていくようである。そして後期終末には岡山県北部においても石包丁はほとんど認められなくなる。

この中期から後期における石包丁の形式変化の契機やその系譜は明らかにし得ないが、一つには独自の土器様式の確立によって現される岡山県北部の地域性（注15）が石包丁の形態にも現れていることが考えられる。また、後期の石包丁は中期のものに比べ薄手で、形態の整ったものが多い。

さらに、今回の調査では出土していないが、弥生時代後期の津山盆地内に限られた分布状況を示す特徴的な石包丁として、粘板岩・頁岩製（注16）の外湾刃半月形・杏仁形石包丁がある（第428図9～12、17・18、20～22）。これらの石包丁は形態が非常に整っていることや作りが丁寧なことに加え、

集落内から未成品や剥片が出土しないことから製品による搬入品と考えられており（注17）、弥生時代後期の津山盆地において自給自足的な石包丁の生産に加え、製品としてこれらの石包丁が流通していた可能性も考えられる。（佐藤）



第428図　津山盆地内出土石包丁時期別変遷図（一部改変）

〈出典　1.(注18)　3.(注1)　4.(注19)　5.(注20)　6.(注21)　7.(注22)
8・11・12.(注23)　9・10.(注17)　15.(注24)　16.(注13)　17～23.(注17)〉

3．弥生時代の集落について

調査対象地の南西端部にあたる大田茶屋遺跡から大田大正開遺跡、さらには大田松山久保遺跡にかけての一帯は、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての時期には複数の集落が併立していたと考えられる。これらの集落は、それぞれが一つの生活単位であったとみられ、1ないし2軒の竪穴住居と数棟の掘立柱建物から構成され、近接して墓地を伴っていた。掘立柱建物は、その数から考えて本節の第1項で述べたように、住居として存在していたものが多かったとみられる。墓地は木棺墓をほぼ重複することなく等高線と平行あるいは直交するように配置していた。土器棺墓は認められず、乳幼児は異なった地点に埋葬されたことが考えられる。墓地について注目される事実として、特別な埋葬の行われた墓が1基存在することがある。大田茶屋遺跡の西地区の南端に位置する墓1は配石を伴い、朱が棺内に残存していた。同遺跡の東地区の南西端部で検出された墓28は1基だけ主軸の方向を他の

墓とは異にし、棺の埋設方法が丁寧で、やはり棺内から朱が確認された。この墓地3の西隣の墓地2でも墓22という大形のものが存在し、さらに、大田大正開遺跡1区の墓1の存在も注意される。このような特別な墓の存在は、共同墓地の中にありながらも、一般の成員とは異なった埋葬をされる人物がいたことを意味し、集落内において首長と呼ばれるべき人々が現れていたことを示している。

これらの集落は近接していることから、互いに関係を持ち合って存在していたと考えられるが、その中にあって、大田松山久保遺跡の掘立柱建物群の存在は特別である。大形の建物が中央の広場を取り囲むように配置され、建物1の柱穴は直径90cmの掘り方をもって直径30cmの柱痕が認められ、かなり背の高い建物であったことが推定される。建物群から離れて竪穴住居が検出されたが、通常の集落とは考えられず、本節の第1項では祭祀の場ではないかという見解も提出されている。このような掘立柱建物中心の集落は大田茶屋遺跡・大田大正開遺跡でも共通するものだが、それぞれの集落で建物の規模が異なり、階層性が形成されているようである。その頂点に位置するのが大田松山久保遺跡の集落と考えることができる。このような掘立柱建物中心の集落は宮川流域ではあまり類例がなく、沼E遺跡（注25）にその可能性がみられる程度である。宮川流域を南に広く望む丘陵端部に位置する大田松山久保遺跡の集落に居住した人々は、その建物の規模から考えれば、弥生社会のかなり上層に属していたのではないかとみられ、一段下の丘陵平坦部に散らばる大田茶屋遺跡・大田大正開遺跡の集落も、その形態からすればある程度の特殊性を備えているかもしれない。このようなことから、この調査対象地の南西端部を宮川流域の弥生社会において特別な空間と捉えることもできそうである。しかし、弥生時代後期には平野部の中心に位置する京免遺跡（注17）において大規模な環濠集落が出現する。京免遺跡の全体像はまだ明らかではないが、この遺跡との関係をどのように考えるかがこれからの課題となろう。

（岡本寛）

4．古代の官衙について

大田茶屋遺跡の西地区で検出された古代の建物群は、その規模と配置、さらには出土遺物などから判断して、国府と関係のある官衙施設の一つと考えられる。それでは具体的にどのような施設が考えられるだろうか。まず、中心建物の性格であるが、これについては二つの視点からの接近が可能である。一つは遺構の在り方から、いま一つは遺物の内容から考えてみるという方法である。

遺構の在り方では、建物53とそれを囲むように三方に配置された塀の存在、そして、その南前面に東西対称に建てられた建物47と建物50の並置をどのように捉えるかである。塀で囲い込まれた空間というのは、いわば一般の日常世界から遮断された特別な空間とみることができ、場合によっては聖なる空間と考えることも可能である。南前面にある2棟の建物はその配置から建物53に伴うことは明らかで、その柱構造から倉としての機能が考えられる。このような中心建物とその前面に左右対称に倉を配置した例として、同じ中国地方の山間部に所在する広島県東広島市西本6号遺跡がある（注26）。その中心建物ＳＢ109は独立した棟持柱をもつ総柱建物で、白鳳時代の社殿とみられ、前面の2棟の建物ＳＢ112・ＳＢ113は宝蔵とされている（注27）。

遺物の面からは多量の瓦の出土がまずあり、このことから中心建物が瓦葺きであったことが考えられる。瓦の出土はこの地点に限られ、このことは、中心建物が瓦葺き建物でなければならなかったとも考えられる。次に注目される遺物として瓦塔と灯明痕のある杯がある。瓦塔はいうまでもなく寺院建造物の模造品であり、仏教の象徴として堂内に安置され、信仰の対象とされたものである。灯明痕

のある杯は仏事によって生じた可能性が高く、木立雅朗氏によって灯明痕の土器の出土が著しい場合には「寺」的な性格を考慮する必要が指摘されている。木立雅朗氏の仏教遺跡の分類に従えば、大田茶屋遺跡は瓦と瓦塔の出土からBランクの小規模な「地方寺院」とされる（注28）。

このように、遺構と遺物の両面から考えて、大田茶屋遺跡の古代建物群の中心建物を宗教的施設とみなすことは妥当と思われるが、問題は、遺構からは社殿との類似がみられるにもかかわらず、遺物の面からは寺とされることである。このことに関しては、中心建物がまったく形式の異なる建物に建て替えられているという事実が存在する。初期の建物52は身舎が4×2間で、二面に庇を備えた大形建物であり、塀のような区画施設は伴っていなかった。建物53の柱穴から瓦が出土したため、建物52が瓦葺きの建物であった可能性が高く、「寺」は建物52であったと考えられる。建物53は3×2間と小規模で、三方を塀で区画し、前面に2棟の倉を配置するするという構造から「社」ではないかとみられる。ただし、建物53の構造に社殿を思わせる独立棟持柱のようなものの存在は確認されていない。同じ宗教施設とはいいながら、仏教から神道へという極端な転換が実際にあり得たものかどうか、いささか疑問も大きい。今後の類例の増加に期待したい。

それでは他の建物もすべて宗教施設とみなしていいのかどうか、それはまた大きな問題である。古代の建物群は溝8の存在から、この溝によって区画された中に配置されていたと考えられ、前述の中心建物はその区画の北西隅に位置し、中心に位置した西本6号遺跡とは異なる。中心建物の南に位置していた建物43・45・48・49は南北棟の建物で、棟の方向は中心建物とはかなり相違していた。これらのことからすれば、南側の建物45を始めとする建物群は中心建物には従属しない配置構造をとっていたと考えられる。また、西地区の丘陵南端には建物52に匹敵する大形の建物40が単独で建っていた。このようにみていくと、中心建物の建物52・53とそれに付属する建物47・50以外は、宗教施設とは異なる機能をもった建物群と考えられる。むしろ、官衙施設の一隅に宗教施設が付随していたとみるべきではなかろうか。官衙と宗教施設との併存は久米町の宮尾遺跡と久米廃寺の例（注29）のように、しばしば見受けられるところであり、その縮小版と考えられるのではなかろうか。

中心建物が宗教施設ということになると、それが付随した建物群はいよいよ官衙的な性格が濃厚となるが、その機能が何であったかについての手がかりは別の方向から求めざるをえなくなる。残された物証は東地区における広い空閑地の存在と河道2や大田障子遺跡の土壙1などから出土したかなりの量の鉄滓と土壙55・56から多量に出土した焼土塊の存在、それに、一定の形をもった土壙53・54の検出と鞴羽口片の共伴である。鉄滓や羽口の出土は鍛冶工房の存在を推測させるものであり、焼土塊の存在もそれを裏付けている。この官衙が鍛冶工房を伴っていた可能性はかなり高い。古代末期において大規模な柵列が構築されたことや、国府の北方の高台にあって、交通の要衝に位置しているという立地条件も考慮すると、軍事的な施設が置かれたのではないかと考えるのがもっとも適当と思われる。広い空閑地については、馬場か牧としての機能が想定される。ただ、藤原宮の馬寮や平城宮の馬寮でみられたような長大な方形土壙（注30）の検出はなく、馬具や武器の直接的な遺物も出土せず、推測の域をでない。『続日本紀』天応元年の記事で、苫田郡に兵庫があったとされる。

なお、余談ではあるが、中心建物52・53の棟方向と直交する方向は美作国府Ⅰ期（下層遺構）の建物棟方向であるN－8°35'－E（注31）と近似し、大形建物40の棟方向は美作国府Ⅱ期（上層遺構）の建物棟方向N－1°58'－Eにきわめて近くなっている。建物52に葺かれたとみられる瓦は国分寺の瓦と同じで、8世紀前半には遡らない。瓦葺きの建物に改めたか、ただの偶然の一致か。（岡本寛）

5．柵列について

柵列を第3次調査の時点では長大な掘立柱建物と考え、柵2や柵3のような4列の柱穴列については、1列おきに柱穴の対応関係が認められたことから、建て替えによる重複と解釈していた。また年代についても、大規模で規格性をもち、奈良時代の土器が出土していたことから、その時代の遺構と考えていた。このため、この長大な建物については、馬屋説や兵舎説が出され、そこから牧や軍団ではないかという考えが生まれつつあった（注32）。ところが、第4次調査によって判明した新しい事実によって、平安時代末期、12世紀代の柵列と考えるに至った。

もっとも大きな修正を必要とすることになった知見は柵5・6の間に検出された出入口の存在である。出入口の両側では柱穴列の端を揃え、5本ないしは4本の柱穴は列と直交する直線上に並んでいた。このことから建物の建て替えという解釈は否定され、4ないし5列の柱穴列はすべて同時に立てられたことが明らかになった。ついで、柵4の観察によって、東半の屈折した部分では、第1列と第3列、第2列と第4列の対応関係にある柱穴を結んだ線が柱穴列の方向とは直交せず、むしろ、西半のそれと平行したままで続いていくという柱穴の配置が判明し、建物の柱の配置状態とは考えられなくなった。このことは、柵6の屈折部分についても同様で、南北列の柱穴列が外側と内側の屈折点を結んだ線上で曲がるのではなく、南端近くまで延びて、東西列の柱穴列との間に断絶が認められた。そこで、あらためて柵2・3を観察し直すと、各柱穴列の柱間はきわめて不規則で、第1列と第3列、第2列と第4列の対応関係にある柱穴を結んだ線は柱穴列の方向とはほとんど直交しないことが確認された。さらに、この柱穴列と同じものとみられる列が大田障子遺跡でも検出され、建物とすればあまりにも長大に過ぎ、量的にも過多であると感じられた。このようなことから、これらの柱穴列は建物ではなく、柵と考えるのが妥当と判断した。

また、年代については、出入口を入ったところに、棟の方向を柵列と等しくする一群の建物が検出され、そこから40m西でも同じ棟方向の一群の建物があり、ともに柱穴から勝間田焼の破片を出土した。これらの建物の棟方向は中世や江戸時代のそれとは異なり、柵の柱穴列の中からも勝間田焼が出土したことから、柵の年代を平安時代末期まで引き下げることとした。

柵の構造については推測の域を出ないが、柱穴の土層断面の観察から、長期間存続したものではなく、簡易的なものであったことが考えられる。柱穴の土層では明瞭な柱痕をもつものはほとんど認められず、多くは1層ないしは2層がレンズ状に堆積するものであった。また、柱穴は建物に比べてかなり浅かった。このようなことから、柵の柱はあまり深くは埋められず、しばらくして抜き取られたものとみられる。このような柵を安定させるためには、それぞれの柵の図に示したように、第1列と第3列さらには第5列、第2列と第4列の間で対応関係にある柱を横木を渡して縛るのが有効であったと思われる。それぞれの柱穴列に横木を渡した後に、前列の柱と1列とばして後列の柱の間にも横木を渡すという井桁の構造を単位にしていたものと推定している。

最後に、この柵の用途であるが、簡便な作りではあっても、何重にも巡らされ、かなり厳重な施設と考えられる。ただの放牧場の柵とは思われない。大形の建物を中心とする建物群が数カ所に分かれて配置され、西地区の南西端では小形の建物群が伴う可能性がある。出土遺物もかなりみられ、日常的に人々が生活していたと考えられる。時代的には武士の台頭がめざましく、やがて源平の混乱期に至る。国府一帯の盆地を望む城砦的な施設の一つとみておきたい。　（岡本寛）

6．近世墓について

検出された近世墓は大田茶屋遺跡西地区で8基、東地区で8基、大田大正開遺跡で1基の合計17基である。しかし、副葬品のない墓壙と他の土壙との区別が困難なため、この数値が墓壙の実数とは限らない（注33)。時期は、18世紀後半から19世紀初頭頃と推定される。

大田茶屋遺跡の近世墓群は、西地区の2区で屋敷地の脇に並ぶ8基、東地区B地点の建物に近接する2基、東地区C地点の大形建物に近接する4基、東地区南端部に建物群から離れて位置する2基、の群分けが可能である。西区の8基は、屋敷地の脇に密集して設けられた、典型的な屋敷墓の特徴を示しており、同様の例は津山市二宮遺跡でも検出されている（注34)。いずれの例も、基本的に墓壙が重複せず、何らかの墓上施設を伴って継続的に造営・供養が行われたことが示唆される。東区C地点の4基も建物に近接するが、この建物には寺院の可能性があり、むしろ寺院に付属する墓地と考えるべきかもしれない。南端の2基と大正開遺跡の1基は、屋敷地外に設けられた墓とみられる。このように、同一集落内でも墓地の在り方は変化に富んでいるが、時期や階層との関連は特に見出せない。

埋葬方法は、円形または方形の木棺を用いた土葬で、近世では一般的なものである。一方、津山市教育委員会の調査で検出された大田西奥田遺跡の近世墓群は、近世では例外的な火葬墓で、墓壙内に炭灰が充満した状況から、火葬場をも兼ねていたと推定される（注35)。時期は大田茶屋遺跡とも重複するが、造営開始は17世紀前半まで遡るため、火葬という中世的な葬制を引き継いでいたとも考えられる。しかし、大田茶屋遺跡を含む一般的な傾向に反して火葬が継続された背景には、所属する宗派ないし集団の性格も反映されていると考えられ、その解明は今後の課題である。

次に、最も普遍的な副葬品である六道銭について述べたい。構成銭種をみると、東区では新寛永通寶（1697初鋳)、西区では寛永通寶鉄銭（1739初鋳）が最新銭だが、直ちに時期差と解釈できるほどではない。副葬枚数は0から29枚までの開きがある一方で6枚副葬が1例もなく、6枚一組の副葬が一般的でなかったようである。西区の墓3では、元祐通寶（北宋銭、1086初鋳）と鉄銭が伴出していることに注意しておきたい。近年の研究により、渡来銭と寛永通寶の交替は急速であったことが明らかにされたが（注36)、18世紀に至ってもわずかながら渡来銭が流通していたことを示す1例といえよう。また、墓39から出土した「念仏銭」も注目される。これは「題目銭」とともに副葬専用に鋳造された銭貨で（注37)、県内では賀陽町大村遺跡で1点出土している（注38)。これらの特殊な銭貨は、近年各地の調査で出土例が増加しつつあり、被葬者の宗旨を推定しうるとの指摘もある（注39)。

最後に、副葬品と被葬者の階層・性別との関係について触れる。副葬銭貨数に着目すると、同じ津山市内の二宮遺跡と比較して圧倒的に多く、階層差と解釈することもできる。大田茶屋遺跡の近世集落はある程度の階層に属する人々の居住地であったと推定されるが、六道銭の枚数にもそれが表れているようである。性別については、西区の対をなす墓を夫婦のものとみることも可能だが（注40)、単独の場合、鋏・煙管といった一般的な副葬品だけで判定するのは困難である。　（岡本泰）

第2節　ま　と　め

今回の発掘調査は4haを超える広大な面積に及び、多種多様な遺構・遺物が出土した。ここであらためて時代を追って全体を眺め、注目される成果について再び略述し、まとめにかえたい。

縄文時代以前では、まず旧石器の出土があげられる。上斎原村恩原高原や川上村・八束村蒜山高原などでは旧石器時代の遺跡がかなり知られているが、津山盆地一帯も旧石器人の活動範囲に含まれていたことがわかる。縄文時代早期になると、津山盆地周辺の遺跡は急増するが、大田西奥田遺跡では竪穴住居跡が検出された。床面に残された遺物から時代が限定できるため重要である。定住化への動きの一つと理解すべきであろうか。縄文時代晩期になると大田茶屋遺跡で集落が形成され、石鍬の出土から農耕が行われていたことが推測される。集落は弥生時代前期まで継続した可能性がある。

弥生時代中期中葉から本格的な水田農耕を生業の中心とした集落が大田西奥田遺跡と大田大正開遺跡に形成される。大田西奥田遺跡の集落は一時期で終わるが、大田大正開遺跡の集落は発展を続け、大田茶屋遺跡まで拡大される。この発展の流れの中で、後期前葉になると大田松山久保遺跡に大形の建物群からなる集落が出現する。調査対象地内の遺跡が重層的な構造をもち、社会的な格差が生じていることを示している。後期後半には、対象地内の遺跡は消滅する。

古墳時代の遺跡は希薄で、後期に小規模な集落が存在した可能性が考えられる程度にすぎない。丘陵の裾部分で小規模な横穴式石室を埋葬主体とした7世紀前半の古墳が1基検出された。

奈良時代に入ると大田茶屋遺跡を中心に官衙が設置される。官衙の性格は調査成果からは確実に捉えることができなかったが、一隅に寺または神社とみられる宗教施設を備え、鍛冶工房と広い空閑地をもっていた。出土した軒瓦は美作国府・国分寺出土のものと同笵で、国府の施設の一つではないかとみられる。立地的には軍事施設の可能性も否定できない。

平安時代末期の12世紀代（注41）には大規模な柵列が構築され、城砦的な施設が立地していたものと考えられる。柵は一時的なものだったようで、しばらく期間をおいた13世紀の後半に入って集落が形成され、柵のあった場所にも掘立柱建物が建てられる。集落内では、主屋がある距離をもって配置され、一定の屋敷地を備えた家が隣接していたものと考えられる。中世の集落は15世紀前半には終わりを迎えたようである。

江戸時代になって大田茶屋遺跡では再び集落が形成される。前期の建物は掘立柱建物で、同一地点での建て替えが多くみられ、やはり屋敷地が固定されていたと考えられる。大田茶屋遺跡東地区の中央部には寺が建立されていたと推定され、後期には鯱瓦の破片が出土し、また、前期の高級な磁器の出土も寺に関わるものかもしれない。後期になると桟瓦が多量に出土することから、集落内の建物は礎石建ちの瓦葺きに変わったものとみられる。江戸時代の集落は明治の始めに消滅したようである。

このように、今回の調査では旧石器時代を始めとして各時代の多様な遺構が検出され、きわめて長期間にわたって頻繁に人々の活動が展開されたことが明らかとなった。できる限り多くの資料を提示することに努めたが、紙数にも限りがあり、資料を網羅するには至らなかった。とくに近世の資料の多くは掲載できなかった。今後、何らかの機会を得て公表に努力していきたい。　　（岡本寛）

注

（注1）井上弘・柳瀬昭彦・下澤公明・橋本惣司「押入西遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3　岡山県教育委員会　1973年
安川豊史「押入西遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986年
（注2）浅倉秀昭『野田遺跡』野田遺跡調査委員会　1984年
（注3）正岡睦夫「山陽の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会　1992年
（注4）中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』第15集　古代吉備研究会　1993年
（注5）安川豊史「岡山県北部の石器組成の変遷」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書7』国立歴史民俗博物館　1996年
（注6）旦原遺跡竪穴住居11、弥平治遺跡竪穴住居5で扁平片刃石斧の未成品、剝片が多量に出土しているが、前者については上方からの流れ込み、あるいは一括廃棄の可能性があり、後者については埋土中からの出土であ

ることから、製作状況を直接示しているものではないと考えられる。
高畑知功・山磨康平・秀島貞康「旦原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告14　岡山県教育委員会　1977年。中野雅美・山磨康平・河本清『弥平治・能部遺跡』広域農道美作台地地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会　1983年
(注7)『土地分類基本調査　津山西部』経済企画庁・岡山県　1962年
光野千春「II．表層地質」『土地分類基本調査　津山東部』岡山県　1980年
(注8) 中山俊紀「津山盆地の弥生時代」『吉備の考古学』角川書店　1987年
(注9) 下條信行『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作成と地域間の比較研究』　1994年
(注10) 平井　勝『弥生時代の石器』ニューサイエンス社　1991年。石包丁の各部名称、形式分類は本書に依る。
(注11) 前掲注5
(注12) 厳密には背部が直線的なものとゆるやかに湾曲するものとがあるが、分類基準が明確ではないため、今回は同一形式として扱った。
(注13) 哲西町山根屋遺跡・野田畝遺跡、久米町稼山遺跡、津山市大畑遺跡出土石包丁等
竹田勝・岡本寛久「山根屋遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22　岡山県教育委員会　1977年。福田正継・高畑知功「野田畝遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査11』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21　岡山県教育委員会　1977年。村上幸雄・橋本惣司『稼山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979年。行田裕美・小郷利幸・平岡正宏『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告47　津山市教育委員会　1993年
(注14) 哲西町塚の峰遺跡・山根屋遺跡、津山市大畑遺跡出土石包丁等
福田正継・中野雅美・高畑知功「塚の峰遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22　岡山県教育委員会　1977年
(注15) 前掲注8
(注16) 粘板岩と頁岩はほぼ同質の岩石であることから、同じ一群として扱っている。
(注17) 中山俊紀・河本清・安川豊史・行田裕美『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10　津山市教育委員会　1981年。中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告11　津山市教育委員会　1982年
(注18) 行田裕美・平岡正宏・坂本心平『野村高尾遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告55　津山市教育委員会　1995年
(注19) 行田裕美『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告33　津山市教育委員会　1990年
(注20) 行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告17　津山市教育委員会　1985年
(注21) 行田裕美『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告16　津山市教育委員会　1984年
(注22) 栗野克己・岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17 岡山県教育委員会　1977年
(注23) 中山俊紀・保田義治『小原B・稲荷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告35 津山市教育委員会　1990年
(注24) 中山俊紀・行田裕美『沼E遺跡II』津山市埋蔵文化財発掘調査報告8　津山市教育委員会　1981年
(注25) 河本清・柳瀬昭彦「津山市沼E遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』9　岡山県教育委員会　1979年
(注26) 最初にこの類似を指摘されたのは亀田修一氏である。
(注27) 妹尾周三・中山学「広島県東広島市西本6号遺跡」『日本考古学年報46（1993年度版）』日本考古学協会　1995年。中山学・松村恵司・宮本長二郎・山野善郎・松原弘宣『第4回安芸のまほろばフォーラム　発掘された古代の「神殿」を検討する　資料集』東広島市教育委員会・財団法人東広島市教育文化振興事業団　1997年
(注28) 木立雅朗「北陸」『古代寺院の出現とその背景』埋蔵文化財研究会第42回研究集会実行委員会　1997年
(注29) 橋本惣司・山磨康平・岡田博・井上弘「宮尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4　岡山県教育委員会　1973年
(注30) 横山浩一・宮沢智士・山田猛・菅原正明・小笠原好彦・西弘海・鬼頭清明・大脇潔・山中敏史『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所学報31　奈良国立文化財研究所　1978年。岡田英男・山本忠尚・高瀬要一・亀井伸雄・上野邦一・清田善樹・岩永省三・巽淳一郎・杉山洋・佐藤信・光谷拓実・内田昭人『平城宮発掘調査報告XII』奈良国立文化財研究所学報42　奈良国立文化財研究所　1985年
(注31) 安川豊史『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告50　津山市教育委員会　1994年
(注32) 岡本寛久「岡山県津山市大田茶屋遺跡」『日本考古学年報47（1994年度版）』日本考古学協会　1996年
古代建物群II期の記述は本報告書をもって訂正にあてる。
(注33) たとえば、大田茶屋遺跡東地区の墓34・35は他遺構の可能性がある。
(注34) 高畑知功・二宮治夫『二宮遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28　岡山県教育委員会　1978年
(注35) 安川豊史「西奥田遺跡発掘調査概要」『年報　津山弥生の里』2　津山弥生の里文化財センター　1995年
(注36) 鈴木公雄「出土六道銭の分析」『増上寺子院群』東京都港区教育委員会　1988年　ほか
(注37) 鈴木公雄「念仏銭・題目銭と六道銭」『史学』第63巻第3号　三田史学会　1994年
(注38) 江見正己・柴田英樹・井上弘・大橋雅也「粧田山城・大村遺跡」『宮地遺跡　大木遺跡　大木古墳群　粧田山城跡　大村遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113　岡山県教育委員会　1996年
(注39) 鳴谷和彦「出土六道銭からみた近世・堺の墓地と三昧」『江戸時代の墓と葬制』江戸遺跡研究会　1996年
(注40) 岡本寛久『大田茶屋遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96　岡山県教育委員会　1994年
(注41) 本報告書における勝間田焼の編年については、平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』IX　日本中世土器研究会　1993年　に準拠した。

本報告書の作成にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターの職員諸氏から多くの指導と援助をいただいた。記して厚く感謝申し上げる。　（執筆者一同）

名称	遺跡名	検出地区	時代	規格	全長(cm) 桁行	全長(cm) 梁間	床面積(㎡)	棟方向	柱間(cm) 桁行	柱間(cm) 梁間	柱穴形状	柱穴径(cm)	柱痕径(cm)	礎石	遺物	備考
建物 24	大田茶屋	17P	弥生	1×1間	355	250	8.8	E-17°-N	355	250	円	42-48	————	無	有	
建物 25	大田茶屋	22,23J	弥生？	1×1間	458	263	11.6	N-14°-W	455,458	246,263	円	37-57	————	無	無	
建物 26	大田茶屋	23J	弥生？	1×1間	246	205	4.9	N-27°-W	246	193,205	円	36-45	————	無	無	
建物 27	大田茶屋	23,24I	弥生中期	1×1間	411	236	9.7	N-26°-W	411	236	円	39,48	18,21	無	有	
建物 28	大田茶屋	23,24K,L	弥生？	2×1間	718	203	13.9	N-15°-E	316-388	190,203	円	42-66	15-26	無	有	
建物 29	大田茶屋	24,25K,L	弥生	2×1間	781	226	17.7	N-1°-E	384,397	226	円	43-50	16-27	無	有	
建物 30	大田茶屋	25K,L	弥生	1×1間	348	206	7.2	N-8.5°-W	348	206	円	34,47,48	15	無	有	
建物 31	大田茶屋	25K,L	弥生	2×1間	653	236	15.4	N-5°-W	310,343	236	円	46-51	18-24	無	有	
建物 32	大田茶屋	25K	弥生	1×1間	423	231	9.8	E-2°-N	423	231	円	34,45,49	23-35	無	有	
建物 33	大田茶屋	25K	弥生	1×1間	370	226	8.7	E-35°-S	369,370	226	円	43,46,49	16,21	無	有	
建物 34	大田茶屋	26,27K	弥生？	1×1間	432	169	7.3	N-42°-W	422,432	163,169	円	34	12,14,16	無	無	
建物 35	大田茶屋	24,25M	弥生	1×1間	336	186	6.1	N-23°-W	332,336	183,186	円	45-48	14,17	無	有	
建物 36	大田茶屋	25,26M	弥生？	1×1間	310	167	5.2	E-0.5°-S	310	167	円	47,53	————	無	無	
建物 37	大田茶屋	26M	弥生	1×1間	310	207	6.4	N-10.5°-E	310	207	円	28-40	————	無	有	
建物 38	大田茶屋	29N	弥生	1×1間	449	225	10.1	N-3°-W	449	225	円	54,64,66	27,31	無	有	
柱穴列 6	大田茶屋	23K	弥生	1間	190	——	———	N-48°-E	190	———	円	40,43	12	無	有	
柱穴列 7	大田茶屋	25M	弥生？	1間	227	——	———	E-3°-N	227	———	円	52,56	15-21	無	無	
柱穴列 8	大田茶屋	28,29K	弥生？	1間	275	——	———	E-6.5°-N	275	———	円	37,42	————	有	無	
建物 39	大田茶屋	6M	奈良	2×1間	427	264	11.3	N-2°-W	246,181	264	円	61-76	————	無	無	
建物 40	大田茶屋	7K,L,M	奈良	5×2間	1241	501	62.2	N-3°-E	215-288	231-270	円	60-105	15-26	無	有	
建物 41	大田茶屋	7K	奈良	2×1間	366	230	7.9	N-41°-E	161-205	200,230	円	45-58	17-25	無	無	
建物 42	大田茶屋	7H	奈良？	1×1間	349	210	8.0	N-7.5°-E	349,331	210,209	円	36,75	————	無	無	
建物 43	大田茶屋	9,10J,K	奈良	5×2間	965	449	43.3	N-15.5°-E	185-201	207-242	円	52-84	14-47	無	有	
建物 44	大田茶屋	9,10I,J	奈良	3×2間	597	436	25.7	N-6.5°-E	155-246	209,221	円	35-53	30,37	無	有	
建物 45	大田茶屋	9,10I	奈良	3×2間	610	374	22.3	N-14.5°-E	179-213	177-194	円	33-68	17-26	無	有	
建物 46	大田茶屋	9,10I	奈良	3×2間	565	405	21.8	N-9°-E	180-202	186-205	円	26-56	————	無	有	
建物 47	大田茶屋	9,10H	奈良	2×2間	368	299	11.0	N-8.5°-E	184	145,155	円	84-134	18-46	無	有	
建物 48	大田茶屋	10K	奈良	3間	526	——	———	N-22.5°-E	175,176	———	円	65-89	18,22,26	無	有	
建物 49	大田茶屋	11I,J	奈良	3×2間	465	259	———	N-16.5°-E	164,160,141	133,126	円	69-106	15-28	無	有	
建物 50	大田茶屋	11H	奈良	2×2間	384	290	10.7	N-10°-E	190,194	139,151	円	38-90	31-35	無	有	
建物 51	大田茶屋	11H	奈良	1×1間	305	158	5.0	E-6.5°-S	294,305	138,158	円	39-46	15,16,23	無	有	
建物 52	大田茶屋	10,11G	奈良	5×2間	1093	668	73.0	E-7°-S	205-240	217,219,232	方	65-102	22-45	無	有	北・西面庇
建物 53	大田茶屋	10,11F,G	奈良	3×2間	579	400	23.2	E-6°-S	163,201,215	200	円	65-70	15-40	無	有	目隠塀伴う
建物 54	大田茶屋	11E,F	奈良？	2×1間	365	304	11.1	N-9.5°-E	181,184	304	円	40-55	————	無	有	
建物 55	大田茶屋	11,12E	奈良？	2×1間	415	255	10.6	E-0.5°-S	204,211	255	円	23-27	8	無	無	
塀 1	大田茶屋	10F,G	奈良	5間	1019	——	———	N-7°-E	188-237	———	円	56-80	23-31	無	有	
塀 2	大田茶屋	11G	奈良	5間	994	——	———	N-9°-E	183-234	———	円	61-68	————	無	無	
建物 17	大田茶屋	7,8F	中世	3×2間	766	498	38.1	E-20.5°-S	194-321	248,250	円	35-50	————	有	無	
建物 56	大田茶屋	5J	中世？	1×1間	300	280	8.2	N-30°-W	295,300	274,280	円	27-32	14,18,19	無	無	
建物 57	大田茶屋	6,7K	中世？	2×1間	357	232	8.3	N-9°-W	175,182	232	円	17-28	————	無	無	
建物 58	大田茶屋	7J	中世？	1×1間	355	235	8.3	N-45°-E	355	235	円	26-34	14,18	無	無	
建物 59	大田茶屋	7G 6,7H	中世	4×3間	843	582	47.0	N-16.5°-E	131-309	141-212	円	20-55	19,20	無	有	
建物 60	大田茶屋	7G	中世	2×3間	629	595	36.2	N-15.5°-E	302,309,322	114-269	円	24-59	————	無	無	
建物 61	大田茶屋	8,9G	中世	2×1間	298	295	8.8	E-28°-S	191-207	295	円	21-39	————	無	無	
建物 62	大田茶屋	9,10F-H	室町	3×4間	1196	683	81.7	N-23°-E	384,399,413	62-220	円	31-86	12-30	無	有	東面庇
建物 63	大田茶屋	9,10F 9G	鎌倉？	3×2間	776	337	24.7	N-18.5°-E	218-273	158-172	円	24-60	————	無	有	
建物 64	大田茶屋	10G	古代末？	2×1間	502	261	13.6	N-20°-E	245-257	261,284	円	33-54	13,15	有	有	
建物 65	大田茶屋	8L 9K,L	鎌倉？	5×2間	926	431	39.9	N-21°-E	177-199	173-194	円	24-47	————	無	無	縁付き
建物 66	大田茶屋	10I 11H,I	鎌倉？	5×2間	907	383	34.7	N-29°-E	172-185	191,192	円	34-60	13-29	無	有	
建物 67	大田茶屋	14D	古代末？	1×1間	417	205	8.0	N-18.5°-W	410,417	183,205	円	40-48	16-18	無	有	
建物 68	大田茶屋	14,15D	古代末？	3×1間	655	211	13.8	N-19.5°-W	207,219,229	211	円	23-40	12-20	無	有	
建物 69	大田茶屋	16F 17F,G	鎌倉？	4×3間	915	599	53.6	E-19.5°-S	221-239	164-216	円	23-54	16,18	有	有	北面庇
建物 70	大田茶屋	12B	古代末？	3×2間	556	374	20.8	E-13.5°-N	174,188,194	184,190	円	190,184	37-87	無	無	
建物 71	大田茶屋	17K 18J,K	中世？	6×1間	1297	391	50.7	E-15°-N	198-260	391	円	35-48	13-20	無	無	

第2表　建物・柱穴列一覧表(1)

名称	遺跡名	検出地区	時代	規格	全長(cm) 桁行	全長(cm) 梁間	床面積 (m²)	棟方向	柱間(cm) 桁行	柱間(cm) 梁間	柱穴形状	柱穴径 (cm)	柱痕径 (cm)	礎石	遺物	備考
建物 72	大田茶屋	18J,K	中世?	2×1間	355	327	11.6	N-13°-W	124-231	327	円	21-36	13,16,18	無	無	
建物 73	大田茶屋	17L	古代末?	1×1間	531	110	5.8	N-25°-E	531	110	円	50-62	18,21,31	無	無	
建物 74	大田茶屋	17L;M	古代末?	4間	960	100	----	N-24.5°-E	200-267	100	円	37-53	12,17,18	有	無	
建物 75	大田茶屋	16M	中世?	2×1間	327	171	5.2	N-32°-E	145-177	156,171	円	37-53	35	有	無	
建物 76	大田茶屋	16N,O	中世?	2×1間	348	200	7.0	N-4°-W	137-211	200	円	18-34	-----	無	無	
建物 77	大田茶屋	17O	古代末?	1×1間	194	190	3.7	N-16.5°-E	194	190	円	33,43	-----	無	無	
建物 78	大田茶屋	16O,P	古代末?	3×1間	565	221	12.5	N-20°-E	166-211	221	円	23-33	-----	無	無	
建物 79	大田茶屋	16OP,17P	中世?	1×1間	188	175	2.8	N-26°-W	174,188	143,175	円	24-44	-----	無	無	
建物 80	大田茶屋	15P	中世?	1×1間	202	175	3.2	E-42.5°-S	181,202	162,175	円	26-54	-----	無	有	
建物 81	大田茶屋	17P,Q	中世?	2×1間	526	223	11.7	E-39.5°-S	254,272	223	円	25-40	-----	無	無	
建物 82	大田茶屋	19M,N 20N	古代末?	3×1間	657	416	27.3	N-29°-E	201-245	416	円	33-61	10-18	無	無	
建物 83	大田茶屋	20K,L 21L	古代末?	5×2間	892	406	36.2	E-14°-S	191-254	193-213	円	27-67	-----	有	無	
建物 84	大田茶屋	20O 21N,O	古代末?	4×1間	794	347	27.6	E-15°-S	182-212	347	円	34-69	10,20	無	無	
建物 85	大田茶屋	20M,N 21M	古代末?	4×2間	792	505	40.0	N-21.5°-E	195-200	224-281	円	26-41	14,18	有	無	
建物 86	大田茶屋	21,22M,N	古代末?	3×2間	605	409	24.7	N-21.5°-E	193-209	201-208	円	35-48	14-18	有	無	
建物 87	大田茶屋	24H	古代末?	2×2間	459	425	19.5	E-20°-S	140,149,155	156	円	22-45	-----	無	有	
建物 88	大田茶屋	23K,L 24K	中世?	1×1間	346	215	7.4	N-24°-W	215,220	338,346	円	24-28	-----	無	有	
建物 89	大田茶屋	24J,K	中世?	6×1間	1165	250	29.1	N-17°-W	176-214	250	円	30-55	15-30	無	有	
建物 90	大田茶屋	25,26M	中世?	1×1間	385	254	9.8	E-1.5°-N	385	254	円	29	-----	無	無	
建物 91	大田茶屋	26,27K	鎌倉?	1×1間	417	310	12.3	E-8.5°-S	414,417	284,310	円	32,33,37	13,14	無	有	
建物 92	大田茶屋	26K	中世?	1×1間	327	201	6.0	E-27°-S	312,327	181,201	円	26-33	12-16	無	無	
建物 93	大田茶屋	26,27K 27J	中世?	1×1間	381	252	9.6	E-29.5°-N	381	252	円	31-41	-----	無	有	
建物 94	大田茶屋	26,27K	中世?	2×1間	615	300	18.5	N-7°-E	307,308	300	円	29-35	13,15,18	無	有	
建物 95	大田茶屋	27,28J	中世?	2×2間	479	373	16.4	E-3°-N	208-258	157-215	円	35-46	-----	無	無	
建物 96	大田茶屋	28J 29I,J	古代末?	1×1間	344	213	7.3	N-26°-E	344	213	円	33,34,37	-----	無	無	
建物 97	大田茶屋	28,29J	中世?	1×1間	436	219	8.9	E-3.5°-N	426,436	197,219	円	18-23	-----	無	無	
建物 98	大田茶屋	31N	中世	1×1間	322	169	5.0	N-30°-W	284,322	158,169	円	20-31	17	有	無	
建物 99	大田茶屋	27,28O	古代末?	1×1間	393	270	10.6	N-24°-E	393	270	円	43,47	-----	無	無	
建物 100	大田茶屋	27O	古代末?	1×1間	456	190	8.7	N-25.5°-E	456	190	円	43,44	-----	無	有	
建物 101	大田茶屋	25,26O,P	古代末?	8×3間	1257	502	62.5	N-28.5°-E	163-200	251	円	26-62	11	有	無	
建物 102	大田茶屋	26,27P,Q	古代末?	3×2間	603	408	23.8	E-28.5°-S	197-205	182-226	円	38-53	15-22	無	無	
建物 103	大田茶屋	26P,Q	古代末?	3×2間	599	340	22.6	N-28°-E	188-205	162-177	円	31-98	16	有	無	
柱穴列 9	大田茶屋	5L	古代末?	1間	306	--	---	E-30.5°-S	306	------	円	97-124	-----	無	無	
柱穴列10	大田茶屋	7K	中世?	1間	200	--	---	E-26°-N	200	------	円	47-52	-----	無	無	
柱穴列11	大田茶屋	6J	中世?	2間	306	--	---	E-13°-N	151,155	------	円	32,45,51	-----	無	無	
柱穴列12	大田茶屋	7H,I	中世?	1間	380	--	---	E-39.5°-S	380	------	円	32,33	-----	無	無	
柱穴列13	大田茶屋	8H,I	中世?	1間	310	--	---	N-19.5°-E	310	------	円	70,98	-----	無	無	
柱穴列14	大田茶屋	10E	中世?	2間	676	--	---	N-41°-W	338	------	円	36,37,39	-----	無	無	
柱穴列15	大田茶屋	16,17F	中世	2間	401	--	---	E-17°-S	401	------	円	46,47,66	-----	無	有	
柱穴列16	大田茶屋	18J 17K	中世?	2間	430	--	---	E-12°-N	214,216	------	円	24,27,39	11	無	無	
柱穴列17	大田茶屋	16-18M	古代末?	8間	1589	--	---	E-24°-S	193-212	------	円	40-58	15,18	無	無	
柱穴列18	大田茶屋	15P,Q	中世?	1間	268	--	---	N-40°-W	268	------	円	26,34	-----	無	無	
柱穴列19	大田茶屋	18,19P	古代末?	1間	345	--	---	E-15°-S	345	------	円	54,59	-----	無	無	
柱穴列20	大田茶屋	19M,N	古代末?	5間	970	--	---	N-17.5°-E	154-222	------	円	26-36	-----	無	無	
柱穴列21	大田茶屋	23I 24H,I	古代末?	4間	1221	--	---	N-27°-E	298-312	------	円	32-40	-----	有	有	
柱穴列22	大田茶屋	26Q,R	中世?	4間	411	--	---	N-30°-E	100-104	------	円	40-58	-----	無	無	
柱穴列23	大田茶屋	26O-Q 27O	古代末?	8間	1791	--	---	N-28.5°-E	163-283	------	円	30-39	12-20	有	有	
建物 104	大田茶屋	22,23I	江戸前期	5×1間	1004	429	43.1	E-13.5°-S	187-214	429	円	39-82	13-24	無	有	
建物 105	大田茶屋	22,23I	江戸前期	5×1間	1059	381	40.3	E-10°-S	195-223	381	円	47-87	13-29	有	有	
建物 106	大田茶屋	22,23I	江戸前期	3×2間	738	378	23.7	E-8.5°-S	219-272	143-212	円	20-87	16-26	無	有	
建物 107	大田茶屋	22,23I	江戸前期	5×1間	1032	415	40.4	E-11.5°-S	169-248	392,415	円	40-87	15-29	無	有	
建物 108	大田茶屋	22,23I	近世?	1×1間	301	294	7.4	E-42°-S	295,301	210,294	円	40,45,53	12,13	有	有	
建物 109	大田茶屋	18L,M	江戸?	5×2間	996	400	39.7	N-9°-E	196-210	200	円	18-41	15,22	無	無	
建物 110	大田茶屋	18L,M	江戸	3×1間	706	395	27.7	N-14.5°-E	180-208	395	円	45-54	12-25	無	無	

第3表　建物・柱穴列一覧表(2)

名称	遺跡名	検出地区	時代	規格	全長(cm) 桁行	全長(cm) 梁間	床面積(㎡)	棟方向	柱間(cm) 桁行	柱間(cm) 梁間	柱穴形状	柱穴径(cm)	柱痕径(cm)	礎石	遺物	備考
建物 111	大田茶屋	18L	江戸後期	4×1間	843	445	36.7	N-8°-E	200-227	428,445	円	34-39	10-19	無	無	
建物 112	大田茶屋	16O	近世？	1×1間	285	197	5.6	N-15°-E	285	197	円	22-28	———	無	無	
建物 113	大田茶屋	24J	近世？	2×2間	338	283	9.6	E-16.5°-S	126-212	135-148	円	18-38	———	無	有	
建物 114	大田茶屋	24J	江戸？	2×1間	595	152	9.0	E-17°-S	223-344	152,162	円	24-34	13,14	無	有	
建物 115	大田茶屋	25,26J,K	江戸？	2×3間	593	532	31.5	E-13.5°-S	203-390	152-205	円	22-45	16	無	有	
建物 116	大田茶屋	25K	江戸？	1×1間	610	312	17.3	E-9°-S	593,610	267,312	円	29-40	20	無	有	
建物 117	大田茶屋	26K	江戸？	1×1間	315	231	7.0	N-18°-E	307,315	219,231	円	25-27	———	無	有	
建物 118	大田茶屋	26,27J-L	江戸？	4×3間	1020	827	81.7	N-16.5°-E	151-351	180-318	円	24-48	19-24	無	有	南・西面庇
建物 119	大田茶屋	27J,K	江戸？	1×1間	326	240	7.2	E-19.5°-S	300,326	229,240	円	26-34	12,15	無	有	
建物 120	大田茶屋	27J,K	江戸？	2×2間	654	530	32.2	E-18°-S	282-372	209-295	円	26-37	11,14	無	無	
建物 121	大田茶屋	23,24L	江戸	4×1間	703	330	21.8	N-15°-E	147-181	326,330	円	23-40	12-16	無	有	
建物 122	大田茶屋	23,24L,M	江戸	5×1間	857	391	33.5	N-25°-W	124-204	391	円	16-39	13-21	無	有	
建物 123	大田茶屋	23,24L,M	江戸？	1×1間	252	192	4.8	E-5°-S	252	192	円	34-38	10	有	有	
建物 124	大田茶屋	24,25L	江戸	2×2間	425	357	14.8	E-13°-S	193-232	148-194	円	22-38	12,15,16	無	有	
建物 125	大田茶屋	24,25L	江戸？	3×1間	842	215	17.2	E-14.5°-S	226-347	210,215	円	22-32	———	無	有	
建物 126	大田茶屋	26L	江戸？	1×1間	376	193	7.6	N-13.5°-E	376,390	193,204	円	28-36	14	有	無	
建物 127	大田茶屋	26L	江戸？	2×2間	488	392	21.6	E-8.5°-S	201-286	181-211	円	31-44	12,13,17	有	無	
建物 128	大田茶屋	26L	江戸？	2×1間	465	397	18.5	E-7°-S	219-246	397	円	40-46	11,14	有	有	
建物 129	大田茶屋	25-27L,M	江戸	6×1間	1379	405	55.8	E-15°-S	204-276	405	円	25-43	17,22	無	有	
建物 130	大田茶屋	25M	江戸？	1×1間	244	178	4.0	E-5.5°-N	244	178	円	24-28	11,12	無	有	
建物 131	大田茶屋	26M,N	江戸？	2×1間	533	283	14.2	E-14.5°-S	244-275	256,283	円	21-36	22	無	有	
建物 132	大田茶屋	26M,N	江戸？	1×1間	350	235	7.9	E-18°-S	340,350	225,235	円	29-35	14,23	無	有	
建物 133	大田茶屋	27,28M,N	江戸？	?×1間	220	402	———	N-5°-E	213,220	402	円	25	———	無	無	
建物 134	大田茶屋	27,28M,N	江戸	4×3間	950	676	60.9	E-4.5°-S	176-320	200-245	円	21-36	———	無	有	
建物 135	大田茶屋	28,29J,K	江戸	3×2間	730	657	48.0	E-15°-S	321,409	192-241	円	28-36	———	無	無	
建物 136	大田茶屋	28,29J,K	江戸	2×3間	704	661	46.5	E-14°-S	307,397	185-241	円	29-35	———	有	有	
建物 137	大田茶屋	28K 29J,K	江戸？	2×1間	529	241	12.5	N-16.5°-E	256,273	233,241	円	22-31	———	無	無	
建物 138	大田茶屋	29J	江戸？	1×1間	279	274	7.4	E-16°-S	273,279	263,274	円	33,37,39	———	無	無	
建物 139	大田茶屋	29K	江戸？	1×1間	316	260	8.2	N-11°-E	316	260	円	37	———	無	有	
建物 140	大田茶屋	29,30J,K	江戸	2×1間	716	463	33.2	N-16.5°-E	344-372	463,492	円	23-46	———	無	無	
建物 141	大田茶屋	29,30J,K	江戸？	2×2間	584	459	26.8	E-18°-S	268-316	197,262	円	25-40	———	無	無	
建物 142	大田茶屋	29,30K,L	近世？	1×1間	302	242	6.8	N-8°-E	286,302	226,242	円	30-36	18	無	有	
建物 143	大田茶屋	30J,K	江戸？	1×1間	431	287	12.4	N-15.5°-E	431	287	円	26,27,30	———	無	無	
建物 144	大田茶屋	31J,K	江戸前期？	3×1間	1046	246	25.1	N-14.5°-E	235-414	244,246	円	27-38	———	有	有	
建物 145	大田茶屋	31J	江戸？	1×1間	332	198	6.3	N-30°-E	323,332	187,198	円	37-39	10,12	有	無	
建物 146	大田茶屋	30,31N,O	江戸	2×2間	563	456	25.2	E-21°-S	267-296	222,234	円	19-25	18	無	無	
柱穴列24	大田茶屋	17K,L	江戸？	2間	337			N-15°-E	150,187	———	円	28,45	17,23	無	無	
柱穴列25	大田茶屋	20L,M	江戸？	3間	690			N-14°-E	208,225,257	———	円	42-45	———	無	無	
柱穴列26	大田茶屋	22,23I	江戸	3間	637			E-11.5°-S	220,217,200	———	円	45-34	———	無	有	
柱穴列27	大田茶屋	24K,L	江戸？	2間	765	——	———	E-5.5°-S	346,419	———	円	34-54	22,23	無	無	
柱穴列28	大田茶屋	25K	江戸	2間	412	——	———	E-1.5°-N	203,209	———	円	29,30,41	———	無	有	
柱穴列29	大田茶屋	25,26K	江戸？	4間	719	——	———	E-16°-S	141-212	———	円	22-31	———	無	有	
柱穴列30	大田茶屋	25,26K	江戸？	3間	735	——	———	E-11°-S	178,187,370	———	円	28-34	12,24	無	有	
柱穴列31	大田茶屋	26J,K	江戸？	5間	945	——	———	N-12°-E	162-218	———	円	20-35	16,18	無	有	
柱穴列32	大田茶屋	29,30K,L	江戸？	2間	564	——	———	N-8.5°-W	257,307	———	円	27,28,30	———	無	無	
柱穴列33	大田茶屋	31J,K	江戸？	2間	620	——	———	N-12°-E	295,325	———	円	12,14	———	無	有	
柱穴列34	大田茶屋	28I	江戸後期？	1間	153	——	———	E-9.5°-S	153	———	円	38,42	———	無	有	
柱穴列35	大田茶屋	29N,O	近世？	1間	244	——	———	E-6.5°-S	244	———	円	45	———	無	有	
建物 1	大田松山久保	59TT,UU	弥生後期	2×1間	567	287	16.3	N-22.5°-E	275-292	267	円	61-93	21-29	無	有	大規模柱穴
建物 2	大田松山久保	57,58TT,UU	弥生後期	3×2間	610	389	22.6	N-18°-E	186-227	168-207	円	35-86	9-21	無	有	土器片埋納
建物 3	大田松山久保	57,58SS,TT	弥生	4×2間	816	425	33.5	N-24°-E	196-210	189-220	円	35-86	15-27	無	有	
建物 4	大田松山久保	58,59RR,SS	弥生後期？	4×2間	821	455	36.3	N-26°-E	192-215	199-240	円	33-64	12-23	無	有	土器片埋納
建物 5	大田松山久保	59RR	弥生	4×2間	667	372	24.9	E-22°-S	150-181	180,192,371	円	35-66	14-26	無	有	
建物 6	大田松山久保	59TT,UU	弥生？	1×1間	320	197	6.3	N-23.5°-E	320	197	円	35-64	16	無	無	

第4表　建物・柱穴列一覧表(3)

名称	遺跡名	検出地区	時代	規格	全長(cm) 桁行	全長(cm) 梁間	床面積(㎡)	棟方向	柱間(cm) 桁行	柱間(cm) 梁間	柱穴形状	柱穴径(cm)	柱痕径(cm)	礎石	遺物	備考
建物 7	大田松山久保	59TT	弥生?	1×1間	430	288	11.9	N-27.5°-E	402,430	287,288	円	39,44,46	14,17	無	無	
建物 8	大田松山久保	59,60SS,TT	弥生後期	1×1間	332	264	8.8	N-26°-E	332	264	円	41,57	16	無	有	
建物 9	大田松山久保	59RR	弥生?	1×1間	323	236	7.6	E-25.5°-S	323	236	円	39,40,51	24,25	無	無	
建物 10	大田松山久保	59RR	弥生後期	1×1間	399	262	9.0	N-27°-E	599	239,262	円	38-63	17	無	有	
建物 11	大田松山久保	58,59RR,SS	弥生?	2×2間	585	342	19.6	N-28°-E	280-293	166-175	円	26-59	13-28	有	有	
建物 12	大田松山久保	58,59RR,SS	弥生?	1×1間	282	185	5.0	E-30°-S	274,282	177,185	円	33-40	12-15	無	無	
建物 13	大田松山久保	58RR,SS	弥生	3×1間	502	253	11.7	N-28°-E	147-190	219,253	円	31-44	14-19	無	有	
建物 14	大田松山久保	58SS	弥生	1×1間	337	230	7.5	N-33.5°-E	330,337	220,230	円	33-39	12-17	無	有	
建物 15	大田松山久保	58SS	弥生	2×1間	379	328	11.9	N-33°-E	178-201	302,328	円	35-41	20,30	無	有	
建物 16	大田松山久保	58SS,TT	弥生後期	1×1間	358	232	7.8	N-29.5°-E	350,358	218,232	円	32-38	14,15,32	無	有	
建物 17	大田松山久保	58,59SS	弥生?	1×1間	359	206	7.1	E-17.5°-S	352,359	192,206	円	32-35	16	無	無	
建物 18	大田松山久保	59TT,UU	弥生後期	4×1間	715	280	19.7	N-14°-E	139-152	273,280	円	33-66	13-22	無	無	
建物 19	大田松山久保	59RR	弥生後期	1×1間	406	222	9.0	N-28°-E	406	222	円	39,48	16,17	無	有	
建物 20	大田松山久保	60RR,SS	弥生?	?×1間	258	——	——	N-16°-E	258	———	円	32,33	12,14	無	無	
建物 21	大田松山久保	58TT	弥生?	1×1間	300	188	7.2	E-13.5°-S	284,300	181,188	円	27-38	11	無	無	
建物 22	大田松山久保	58,59SS	弥生?	2×1間	340	277	9.4	E-4.5°-N	168-172	277	円	32-44	14,17	無	無	
建物 23	大田松山久保	58RR	弥生後期	1×1間	398	280	10.3	N-37°-E	398	280	円	46-55	18-31	無	有	
建物 24	大田松山久保	59RR	弥生後期	2×2間	384	301	11.6	E-38.5°-S	182-202	143-158	円	34-65	11-29	無	有	
柱穴列 1	大田松山久保	56UU,VV	弥生?	1間	205	——	——	N-8°-E	2	———	円	37,39	18,19	無	無	
柱穴列 2	大田松山久保	58UU	弥生?	1間	256	——	——	N-7.5°-E	256	———	円	47,45	25	無	無	
柱穴列 3	大田松山久保	57TT,UU	弥生?	2間	258	——	——	N-18°-E	172,186	———	円	31-42	———	無	無	
柱穴列 4	大田松山久保	57,58TT	弥生?	2間	324	——	——	N-23°-S	160,164	———	円	35,38,39	15,16,17	無	無	
柱穴列 5	大田松山久保	59RR	弥生後期	1間	337	——	——	N-36°-E	337	———	円	30,34	18	無	有	
建物 1	大田障子	30,31Q,R	奈良	2×2間	473	385	18.2	N-7°-W	246,227	195,190	円	54-17	———	無	有	
建物 2	大田障子	33,34O,P	平安末期	2×1間	597	204	10.6	E-42°-S	272-303	202-204	円	27-42	9-14	無	有	
建物 3	大田障子	33,34P	平安末期	2×1間	734	195	13.9	E-41.5°-S	323-401	195	円	22-38	12-18	無	有	
建物 4	大田障子	31,32P,Q	中世?	2×2間	542	401	20.2	E-37°-S	237-305	179-210	円	16-35	———	無	無	
建物 5	大田障子	34O	近世?	2×1間	522	210	10.4	E-21.5°-S	238-281	202,210	円	21-29	8,9	無	有	
建物 1	大田大正開	22D,E	弥生?	1×1間	442	250	11.1	N-9°-W	442	250	円	46-52	———	無	有	
建物 2	大田大正開	22,23E	弥生?	1×1間	277	236	6.3	N-12°-W	277	236	円	64,73	———	無	無	
建物 3	大田大正開	23D,E	弥生?	1×1間	221	169	3.7	N-13°-E	221	169	円	20-40	———	無	無	
建物 4	大田大正開	23D,E	弥生?	1×1間	257	238	5.7	N-11.5°-E	257,251	238,216	円	27-53	———	無	有	
建物 5	大田大正開	23WW	弥生?	1×1間	451	271	12.3	E-10°-N	451	271	円	39-73	———	無	有	
建物 6	大田大正開	27YY	弥生?	1×1間	342	261	(8.9)	E-15.5°-N	342	262	円	46-57	———	無	有	
建物 7	大田大正開	35,36XX,YY	平安末期?	1×1間	584	198	11.6	N-22.5°-E	584	198	円	51-66	13-28	有	無	
建物 8	大田大正開	28VV	平安末期?	?×1間	——	148	——	N-30°-E	———	148	円	55-60	———	有	有	
建物 9	大田大正開	22E	中世?	1×1間	202	200	4.0	N-23°-W	202	200	円	41-56	———	無	有	
建物 10	大田大正開	22,23D,E	中世?	3×1間	565	340	19.0	N-2°-W	198,189,178	340	円	34-53	———	無	無	
建物 11	大田大正開	22,23D,E	中世?	2×1間	429	241	10.3	N-1°-E	232,197	241	円	21-48	———	無	無	
建物 12	大田大正開	22D,E	近世?	?×3間	——	451	——	N-8°-W	153-177	147,150,154	円	22-46	15	無	無	
建物 13	大田大正開	23D,E	近世?	?×1間	——	211	——	N-6°-W	192,168,164	211	円	37-47	———	無	無	

第5表　建物・柱穴列一覧表(4)

大田茶屋遺跡近世土壙一覧表凡例

1．土壙の型式
- A1：大形方形　断面箱形　桶2個埋置
- A2：大形方形　断面箱形
- B1：円形　断面箱形　桶埋置
- B2：円形　断面箱形
- B3：円形　断面箱形　礫多量包含
- C：円形　断面椀形
- D：方形　断面箱形
- E：大形円形　断面箱形
- F：大形不整　断面椀形

2．断面形
- 箱形：壁急傾斜　底部平面
- 椀形：壁緩傾斜　底部凹面
- 桶：桶痕跡有無
- 礫：包含礫多少
- 物：遺物有無

名称	旧No.	地区	期	平面形	断面形	長径cm	短径cm	深cm	型式	桶	礫	物	名称	旧No.	地区	期	平面形	断面形	長径cm	短径cm	深cm	型式	桶	礫	物
土壙 63	69	6K		方	箱	93	63	32	D			無	土壙 102	219	20K	末	楕円	椀	250	225	85	F			
土壙 64	37	8F		方	箱	115	85	30	D		多		土壙 103	218	20K	末	円	箱	138	133	63	B 3		多	
土壙 65	39	7G	後	方	椀	(277)	206	21	F				土壙 104	251	21J,K	中	円	箱	140	137	75	B 3		多	
土壙 66	55	7G		円	箱	187	179	43	B 1	有		無	土壙 105	215	20L	前	円	箱	123	106	15	B 2			
土壙 67	40	7G		円	箱	120	113	48	B 3		多	無	土壙 106	216	20L	前	円	箱	110	107	28	B 2			
土壙 68	94	12G		円	箱	99	81	56	B 2			無	土壙 107	208	20M		楕円	箱	105	85	22	B 1	有		無
土壙 69	90	13G		方	箱	105	97	14	D			無	土壙 108	207	19M		円	箱	131	128	53	B 1	有		
土壙 70	319	10D		円	箱	89	87	34	B 2			無	土壙 109	206	20M		円	箱	99	85	13	B 2			無
土壙 71	321	13C		円	箱	95	94	35	B 2			無	土壙 110	275	19,20M,N		方	箱	300	165	63	A 1	有		無
土壙 72	320	13B,C	中	円	箱	130	122	59	B 3		多		土壙 111	157	18,19O		円	箱	128	119	33	B 3		多	無
土壙 73	268	23G	後	方	箱	71	64	24	D		多		土壙 112	159	18O,P	後	円	箱	115	110	52	B 3		多	
土壙 74	297	20,21H,I		方	箱	231	133	54	A 2				土壙 113	158	19P	後	方	箱	193	125	10	D			
土壙 75	239	21I		円	箱	110	101	16	B 2				土壙 114	199	21,22P		方	箱	246	131	19	A 2	有		
土壙 76	240	21I		円	箱	145	129	56	B 1	有			土壙 115	214	23Q		楕円	椀	123	99	36	C			無
土壙 77	243	22I		円	箱	101	97	45	B 1	有			土壙 116	213	24Q		楕円	椀	94	72	20	C			無
土壙 78	241	22I		円	椀	92	84	9	C			無	土壙 117	232	22M		円	箱	91	85	16	B 2			無
土壙 79	278	22I		円	箱	142	133	17	B 2			無	土壙 118	399	23M	後	円	箱	137	136	57	B 1	有		
土壙 80	259	23I	後	楕円	椀	297	203	42	F		多		土壙 119	374	24M		円	箱	106	101	35	B 1	有		
土壙 81	253	22I		円	箱	122	107	53	B 3		多		土壙 120	343	24N	中	円	箱	108	100	37	B 2			
土壙 82	252	22I		楕円	箱	103	87	34	B 3		多	無	土壙 121	339	25Q	後	円	椀	113	110	31	C			
土壙 83	250	21I,J		楕円	椀	138	117	33	C			無	土壙 122	338	25P	前	円	箱	115	98	14	B 1	有		
土壙 84	249	21I,J	中	円	箱	110	100	63	B 3		多		土壙 123	340	26P		円	箱	106	103	20	B 1	有		
土壙 85	247	21I	後	円	箱	117	111	51	B 1	有			土壙 124	341	26O		円	箱	108	98	24	B 2			無
土壙 86	246	19,20J		円	箱	133	132	56	B 1	有		無	土壙 125	342	28P		円	箱	123	116	23	B 2			無
土壙 87	245	19,20J		円	箱	149	147	73	B 1	有		無	土壙 126	301	25L		円	椀	144	136	22	C			無
土壙 88	127	18J		円	箱	108	101	26	B 2			無	土壙 127	358	25K		円	箱	228	173	26	B 2			無
土壙 89	128	18J		円	箱	109	102	10	B 2			無	土壙 128	226	25K		円	椀	75	70	15	C			無
土壙 90	133	17,18K	前	方	箱	116	93	23	D		多		土壙 129	234	25J	後	円	箱	93	84	51	B 2			
土壙 91	130	18K	後	楕円	椀	133	126	33	C				土壙 130	233	26J		円	箱	131	129	18	B 2			
土壙 92	123	18K		円	椀	144	140	33	C			無	土壙 131	238	25,26I	後	楕円	椀	253	217	26	F			
土壙 93	124	18K	前	円	箱	109	101	18	B 2				土壙 132	237	26I	後	円	箱	152	134	16	B 2			
土壙 94	125	18K	前	円	箱	107	98	18	B 2				土壙 133	317	27K		円	箱	118	113	52	B 2			無
土壙 95	126	18K		円	箱	118	104	28	B 2				土壙 134	314	27L		円	椀	106	93	36	C		多	
土壙 96	129	18L	後	円	箱	122	118	39	B 2				土壙 135	379	29I		円	箱	164	142	69	E			無
土壙 97	134	17L		方	箱	225	138	47	A 2			無	土壙 136	380	29I		円	箱	174	164	90	B 1	有		無
土壙 98	146	18M		円	椀	77	72	24	C			無	土壙 137		29I		方	椀	167	165	19	F			無
土壙 99	144	17M		円	箱	83	80	18	B 2			無	土壙 138	384	31K		楕円	椀	112	87	47	C		多	無
土壙 100	147	18M,N	後	方	箱	194	146	37	D		多		土壙 139	383	30L		円	箱	125	108	15	B 2			無
土壙 101	122	16,17M	前	方	椀	330	180	25	F				土壙 140	366	29N		方	箱	86	78	34	D			無

第 6 表　大田茶屋遺跡近世土壙一覧表

番号	挿図番号	遺物番号	遺跡名	遺構名	時期	種別	形式	材質	法量(mm) 長さ	幅(径)	厚み	重量(g)	残存	備考
1	22	S 1	大田茶屋	5区南側包含層	旧石器	細石核?		黒曜石	19.0	14.5	13.5	3.0	完	
2	22	S 2	大田茶屋	5区表土	旧石器	細石刃		黒曜石	17.5	7.0	2.3	0.3	完	
3	28	S 3	大田茶屋	土壙26	縄文晩期	鏃	打製凹基	サヌカイト	22.0	17.0	3.0	1.0	欠	
4	37	S 4	大田茶屋	土壙35	縄文晩期	スクレイパー?	打製	サヌカイト	22.0	36.0	7.8	6.3	欠	
5	41	S 5	大田茶屋	6区包含層	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	11.0	11.5	2.7	0.2	完	
6	41	S 6	大田茶屋	5区　10I区P-2	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	21.5	16.0	3.0	0.6	欠	
7	41	S 7	大田茶屋	5区表採	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	24.0	17.0	3.2	0.7	欠	
8	41	S 8	大田茶屋	5区包含層 (暗褐色土	縄文	鏃	打製平基?	サヌカイト	29.5	15.0	4.2	1.1	欠	
9	41	S 9	大田茶屋	4区　P-106	縄文	楔形	打製	サヌカイト	36.0	17.5	11.5	8.2	完?	
10	41	S10	大田茶屋	8区北包含層	縄文?	?	打製	サヌカイト	36.0	26.5	4.5	4.1	完?	穿孔途中?

第 7 表　石器一覧表(1)

番号	挿図番号	遺物番号	遺跡名	遺構名	時期	種別	形式	材質	法量(mm) 長さ	幅(径)	厚み	重量(g)	残存	備考
11	41	S11	大田茶屋	建物56柱穴3	縄文晩期	石匙	打製	サヌカイト	56.0	35.0	10.0	12.0	完	
12	42	S12	大田茶屋	5区包含層（暗褐色土	縄文？	磨石		流紋岩	98.0	79.0	40.0	464.2	完	全面使用
13	42	S13	大田茶屋	西地区南東側溝内	縄文？	鏃？	磨製	緑色片岩	115.0	74.5	22.5	228.6	完	刃部欠損
14	42	S14	大田茶屋	8区包含層	縄文	鏃	打製		102.5	52.5	15.0	112.4	完	
15	42	S15	大田茶屋	5区東端包含層	縄文	鏃	打製	流紋岩	98.0	47.5	12.2	55.1	完	
16	44	S16	大田障子	包含層	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	19.0	14.0	4.0	0.9	完	
17	44	S17	大田障子	包含層	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	22.0	19.5	3.5	1.1	欠	
18	44	S18	大田障子	第2次T-21 No1（土壙）	縄文？	敲石		花崗岩	104.0	88.0	55.5	719.1	完	
19	45	S19	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	流紋岩	109.5	49.0	18.5	147.6	完	
20	45	S20	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	流紋岩	88.5	52.0	17.0	95.4	完	
21	45	S21	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	流紋岩	97.0	50.0	14.0	93.5	完	
22	45	S22	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	頁岩	112.0	48.0	16.0	82.1	欠	
23	45	S23	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	流紋岩（緑色	102.5	44.0	16.0	83.0	欠	
24	45	S24	大田障子	包含層	縄文	鏃	打製	流紋岩	110.0	50.5	17.0	110.4	欠	
25	45	S25	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	安山岩	76.0	62.5	12.0	63.4	欠	
26	45	S26	大田障子	包含層	縄文？	鏃	打製	流紋岩	77.5	60.0	9.0	59.0	欠	
27	46	S27	大田大正開	4区包含層	縄文	鏃	打製凹基	サヌカイト	22.5	17.0	3.5	0.9	完	
28	46	S28	大田大正開	3区包含層（黒ボク	縄文早期	鏃	打製凹基	黒曜岩	24.0	17.5	4.0	1.1	完	
29	46	S29	大田大正開	3区包含層	縄文？	剥片		黒曜石	18.0	21.5	4.2	1.2	完	使用痕？
30	67	S30	大田茶屋	建物34柱穴1	弥生	石包丁	未製品外湾刃	緑色片岩	108.0	53.0	9.0	86.2	完	研磨段階
31	80	S31	大田茶屋	土壙43	弥生？	鏃？	打製		67.0	42.5	12.0	46.5	完	
32	112	S32	大田茶屋	河道1埋土	弥生	斧？		流紋岩	104.5	57.0	38.5	305.4	欠	柄部
33	112	S33	大田茶屋	河道1埋土（黒ボク	弥生	斧	磨製扁平	流紋岩	72.5	36.5	8.0	32.0	完	
34	112	S34	大田茶屋	河道1埋土（黒ボク	弥生	斧	磨製扁平片刃	安山岩	115.5	74.0	15.5	236.7	完	
35	112	S35	大田茶屋	河道1埋土	弥生	錘	自然石	流紋岩	89.5	58.0	16.0	118.1	完	四方打欠
36	113	S36	大田茶屋	河道1埋土（黒ボク	弥生	石包丁	磨製外湾刃	頁岩	106.0	47.5	8.0	57.9	完	
37	113	S37	大田茶屋	河道1埋土（黒ボク	弥生	石包丁	磨製外湾刃	熔結凝灰岩	90.5	56.0	7.7	51.3	欠	
38	113	S38	大田茶屋	河道1埋土	弥生	石包丁	未製品外湾刃	流紋岩	88.5	60.5	10.0	56.6	欠	
39	113	S39	大田茶屋	河道1埋土	弥生	石包丁	未製品	熔結凝灰岩	112.0	65.5	15.5	114.6	欠	穿孔段階
40	113	S40	大田茶屋	河道1埋土	弥生	石包丁	未製品	熔結凝灰岩	76.5	64.5	6.8	42.3	欠	穿孔段階
41	116	S41	大田茶屋	5区表土	弥生	斧	磨製太型蛤刃	砂岩	133.0	74.5	52.0	856.9	完	表面風化
42	116	S42	大田茶屋	土壙46	弥生	鏃	打製平基	サヌカイト	25.0	17.0	3.6	1.4	完	
43	116	S43	大田茶屋	建物40柱穴10	弥生	鏃	打製平基	サヌカイト	18.0	21.5	3.8	1.2	欠	
44	116	S44	大田茶屋	4区 P-44	弥生？	スクレイパー？	打製	サヌカイト	49.0	13.0	6.8	3.8	欠	
45	116	S45	大田茶屋	7区包含層	弥生	石包丁	未製品？	流紋岩	45.0	49.5	10.0	23.0	欠	
46	116	S46	大田茶屋	10区包含層	弥生	石包丁	磨製外湾刃	熔結凝灰岩	42.0	54.5	7.0	19.0	欠	
47	116	S47	大田茶屋	建物126柱穴13	弥生？	錘？	打製	熔結凝灰岩	73.0		18.5	121.1	完	四方打欠
48	131	S48	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	斧	磨製扁平片刃	サヌカイト	82.0	44.5	9.0	56.7	完	刃部研磨
49	131	S49	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	敲石？		流紋岩	106.5	50.0	29.0	262.4	完	石斧転用？
50	131	S50	大田西奥田	第2次T-70 包含層	弥生中期	石包丁	磨製直刃	頁岩	101.0	60.0	8.0	72.1	欠	
51	131	S51	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	石包丁	未製品	流紋岩	67.5	43.0	6.7	22.1	欠	
52	131	S52	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	石包丁	未製品	熔結凝灰岩	73.5	51.5	15.0	81.3	欠	錘に転用？
53	131	S53	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	石包丁	未製品	熔結凝灰岩	58.0	52.0	12.5	45.4	欠	
54	131	S54	大田西奥田	2区包含層	弥生中期	石包丁	未製品	流紋岩	108.5	49.5	15.5	83.0	完	荒割段階
55	168	S55	大田松山久保	土壙3	弥生後期	石包丁	磨製直線刃	緑色片岩	106.5	35.5	6.5	31.2	完	
56	168	S56	大田松山久保	土壙3	弥生後期	石包丁	磨製外湾刃	緑色片岩	94.0	43.0	6.3	38.4	欠	
57	194	S57	大田大正開	包含層（黒ボク	弥生	石包丁	磨製直線刃	緑色片岩	56.0	35.5	6.5	22.0	欠	
58	194	S58	大田大正開	3区包含層	弥生中期	石包丁	未製品	黒色片岩	54.5	52.0	9.5	31.7	欠	穿孔段階
59	194	S59	大田大正開	包含層（黒ボク	弥生？	斧？		熔結凝灰岩？	81.0	46.0	29.5	162.9	欠	柄部
60	194	S60	大田大正開	中央部包含層（黒ボク	弥生？	斧？	蛤刃	熔結凝灰岩？	82.5	38.0	25.3	119.2	完	刃部欠損
61	196	S61	大田障子	包含層	弥生	石包丁	磨製外湾刃	熔結凝灰岩	130.5	60.5	10.0	86.6	完	
62	196	S62	大田障子	包含層	弥生	石包丁	磨製直線刃	熔結凝灰岩	115.5	55.0	10.0	92.5	完	
63	196	S63	大田障子	包含層	弥生	石包丁	未製品外湾刃	緑色凝灰岩	62.5	46.0	9.0	32.2	欠	研磨段階
64	196	S64	大田障子	包含層	弥生	石包丁	未製品	熔結凝灰岩	84.0	63.0	8.0	68.3	欠	

第8表　石器一覧表(2)

番号	挿図番号	遺物番号	遺跡名	遺構名	時期	種別	形式	材質	法量(cm) 長さ	幅(径)	厚み	重量(g)	残存	備考
65	196	S65	大田障子	包含層	弥生	石包丁	未製品	流紋岩	112.0	60.0	13.0	105.2	欠	穿孔段階
66	197	S66	大田障子	包含層	弥生	石包丁	未製品	流紋岩	82.0	43.0	7.2	31.3	欠	
67	197	S67	大田障子	包含層	弥生	石包丁	未製品	緑色凝灰岩	76.0	48.5	12.0	59.7	欠	
68	197	S68	大田障子	包含層	弥生？	磨製品？	扁平鏃形	緑色片岩	73.0	33.5	5.5	22.5	完	研磨途中
69	197	S69	大田障子	包含層	弥生？	錘	自然石	流紋岩	95.0	59.0	20.0	138.9	完	四方打欠
70	197	S70	大田障子	包含層	弥生？	錘？	自然石		98.5	74.0	10.0	115.2	完	三方打欠
71	201	S71	大田茶屋	第2次 T-24　南半表採	古墳？	模造品？	勾玉形		46.0	23.0	7.5	9.6	完	両面研磨
72	201	S72	大田茶屋	表土	？	砥石	自然石	安山岩	220.5	68.0	36.5	838.6	完	1面使用
73	404	S73	大田茶屋	墓39	江戸中期	火打石		碧玉	17.0	17.0	13.0	3.5	完	使用痕
74			大田茶屋	10区包含層	弥生？	スクレイパー？	打製	サヌカイト	54.5	42.0	10.0	18.4	欠	
75			大田茶屋	6区南拡張部包含層（灰色土	中世	鍋		滑石			15.0	82.4	欠	底部
76			大田大正開	第2次 T-16　No1（土壙）	近世	磨石		安山岩？	84.5	76.5	50.0	574.8	完	1面使用
77			大田茶屋	8区包含層	江戸	白（上）			250.0		73.0	1010.3	欠	
78			大田茶屋	土壙105	江戸	白（上）			280.0		104.0	(4000.0)	欠	
79			大田茶屋	8区近世古道	江戸	白（下）			260.0	15.0	73.0	(3000.0)	欠	
80			大田茶屋	東地区表採	江戸	火鉢			195.0	258.0	133.0	(7800.0)	欠	

第9表　石器一覧表(3)

No	遺跡名	地区	出土遺構	出土年月日	鑑定結果
1	大田茶屋	8区	土壙106	1995. 8. 7	鍛冶滓
2	大田茶屋	7区	河道上方包含層	1995. 9.13	金属鉄（鉄の塊）
3	大田茶屋	7区	河道上方包含層	1995. 9.13	ガラス質滓
4	大田茶屋	7区	河道上方包含層	1995. 9.13	鍛冶滓
5	大田茶屋	7区	河道上方包含層	1995. 9.13	鍛冶滓
6	大田茶屋	7区	河道上方包含層	1995. 9.13	鍛冶滓
7	大田茶屋	8区	河道2	1995. 9. 7	鍛冶滓
8	大田茶屋	8区	近世古道	1995. 7.10	鍛冶滓
9	大田茶屋	8区	近現代暗渠	1995. 7.18	椀型鍛冶滓の破損したもの
10	大田茶屋	8区	包含層	1995. 9. 6	鍛錬鍛冶滓（鍛造剥片付着）
11	大田茶屋	7区	包含層	1995. 9.12	鍛冶滓の破片
12	大田茶屋	7区	包含層	1995. 9.12	精錬鍛冶滓か精錬滓
13	大田茶屋	9区	遺構検出面直上	1995.10.20	精錬鍛冶滓か精錬滓
14	大田茶屋	9区	近現代水田埋土	1995. 9.27	椀型鍛冶滓の小破片
15	大田障子		包含層	1995. 4. 7	椀型鍛冶滓
16	大田障子		包含層	1995. 4. 7	不定形滓
17	大田障子		包含層	1995. 4. 7	不定形滓
18	大田障子		包含層	1995. 4.17	ガラス質椀型鍛冶滓？
19	大田障子		包含層	1995. 5.10	小型椀型鍛冶滓（木炭痕有り）

第10表　鉄滓鑑定結果一覧表

大澤正己氏コメント「大田茶屋遺跡、大田障子遺跡から出土した鉄滓の特徴として、精錬滓と鍛冶滓の両者が認められる点があげられる。このことは鍛冶の第一段階である精錬鍛冶と第二段階である鍛錬鍛冶が同じ工房内で行われていた可能性を示している。」

No	遺跡名	出土遺構	遺物NO	器　形	鑑　定　結　果	年　代
1	大田茶屋	建物106	892	碗	花模様。肥前染付。	17C 後半
2	大田茶屋	池 1	905	丸型湯飲碗	色絵。肥前ではない。瀬戸・美濃か。	幕末～明治
3	大田茶屋	池 1	907	小皿	高台に『大明年製』。肥前。外面にコンニャク印と手書き。	1690～18C 前半
4	大田茶屋	穴蔵 1	925	碗	外面に松か笹。瀬戸・美濃。	1820～1860
5	大田茶屋	穴蔵 1	928	小皿	格子目。肥前。波佐見型。	18C 後半
6	大田茶屋	土壙65		碗	外面青磁。見込にコンニャク印。内面口縁に四方襷。肥前。	18C 後半
7	大田茶屋	土壙65		広東型茶碗	見込に昆虫状の文。梵字文。肥前系。焼成不良。	1780～1810
8	大田茶屋	土壙84	976	碗	外面青磁。見込に手書き五弁花。内面口縁に四方襷。高台に渦福。肥前。	18C 後半
9	大田茶屋	土壙84	977	小皿	肥前染付。波佐見型。重ね焼きの跡。	18C 後半
10	大田茶屋	土壙84	980	筒型湯飲碗	側面に沈線。中央に鉄錆。	1780～1810
11	大田茶屋	土壙91	983	小皿	見込に雪持ち笹。肥前染付。	18C 末～19C 前半
12	大田茶屋	土壙100		皿	外面に花唐草。肥前染付。針支え。	18C 後半
13	大田茶屋	土壙101		瓶	色絵。	17C 後半
14	大田茶屋	土壙102	990	瓶	肥前染付。雑器ではない。ある程度の高級品。	1650～1670
15	大田茶屋	土壙102	991	皿	見込に折枝梅。肥前染付。雑器ではない。ある程度の高級品	1660～1680
16	大田茶屋	土壙102	993	蓋付壺	山水画。肥前染付。下部を鉄で塗っているのが特徴的で珍しい。雑器ではない。ある程度の高級品。	1640～1670
17	大田茶屋	土壙104	987	瓶	肥前染付。	17C 後半
18	大田茶屋	土壙104	988	皿	見込に草。肥前。	1780～19C 前半
19	大田茶屋	土壙104	989	大皿	内面口縁に菖蒲？。肥前染付。波佐見型。	18C 後半
20	大田茶屋	旧 No142		端反碗の蓋	見込に岩波文の崩れ。外面に竹。肥前系。	明治
21	大田茶屋	近世古道		碗の蓋	外面青磁。見込に手書きの五弁花。内面口縁に四方襷。肥前。	18C 後半
22	大田茶屋	近世古道			肥前。	1630～1650
23	大田茶屋	近世古道			肥前。	17C 後半～18C 後半
24	大田茶屋	近世古道		皿	肥前染付。波佐見型。	18C 後半
25	大田茶屋	近世古道			肥前。	18C 後半～19C 前半
26	大田茶屋	近世古道			肥前。波佐見型。	1820～1860
27	大田茶屋	表土		碗	二重網目文。肥前系。	18C 前半～中葉
28	大田茶屋	表土			肥前。	18C 後半
29	大田茶屋	表土		碗	肥前系染付。	18C 後半～1810
30	大田茶屋	表土		瓶	蛸唐草。一筆書き。	18C 後半～19C 前半
31	大田茶屋	表土		碗	肥前系染付。	1780～19C 前半
32	大田茶屋	表土		碗	肥前系染付。	1780～19C 前半
33	大田茶屋	表土			肥前系染付。	1780～19C 前半
34	大田西奥田	黒ボク		端反碗の蓋	外面に麻の葉。見込に岩波。肥前系。	1820～1860
35	大田西奥田	黒ボク		小皿	見込に『大化年製』。肥前ではない。関西か瀬戸・美濃の系統	1820～1860

第11表　近世磁器鑑定結果一覧表

報告書抄録

ふりがな	おおだちゃやいせき　おおだしょうじいせき　おおだまつやまくぼいせき　おおだたいしょうびらきいせき　おおだにしおくだいせき
書名	大田茶屋遺跡2　大田障子遺跡　大田松山久保遺跡　大田大正開遺跡　大田西奥田遺跡
副書名	グリーンヒルズ津山建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	129
編著者名	岡本寛久・岡本泰典・佐藤寛介・島崎東・易伯通・柳瀬昭彦・松本和男
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査面積 m²	調査原因
おおだちゃやいせき 大田茶屋遺跡	おかやまけん 岡山県			35度5分17秒	134度0分22秒	第1次 710	グリーンヒルズ津山建設に伴う事前調査
おおだしょうじいせき 大田障子遺跡	つやましし 津山市	33203		35度5分15秒	134度0分25秒	第2次 9,097	
おおだまつやまくぼいせき 大田松山久保遺跡				35度5分24秒	134度0分32秒	第3次 12,640	
おおだたいしょうびらきいせき 大田大正開遺跡	おおだ 大田			35度5分22秒	134度0分18秒	第4次 21,177	
おおだにしおくだいせき 大田西奥田遺跡				35度5分41秒	134度0分45秒	合計 43,624	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大田茶屋遺跡	集落跡 官衙跡 城砦跡	旧石器時代 縄文時代早期・晩期 弥生時代前期～江戸時代	竪穴住居 8　古墳 1 掘立柱建物 124 土壙 105　柵 7 木棺墓 24　河道 2 近世墓 8　穴蔵 3	細石刃・細石核？ 縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 瓦・勝間田焼 備前焼・瓦質土器 輸入磁器 近世陶磁器	奈良時代の特殊建物を中心とする建物群
大田障子遺跡	集落跡 城砦跡	縄文時代晩期 弥生時代中期・後期 奈良時代～江戸時代	掘立柱建物 5 柵 2　土壙 8　溝 2		丘陵頂部平坦面を取り巻く大規模な柵列
大田松山久保遺跡	集落跡	弥生時代中期・後期	竪穴住居 2 掘立柱建物 24 土壙 8　溝 1	押型文土器 木葉文土器	弥生時代の大規模建物群
大田大正開遺跡	集落跡	縄文時代早期・晩期 弥生時代中期・後期 奈良時代～江戸時代	掘立柱建物 13 貯蔵穴 1　木棺墓 1 土壙 2　近世墓 1	打製石鏃・石鏃 磨製石斧・石包丁 石錘・砥石	底面に柱穴をもつ貯蔵穴
大田西奥田遺跡	集落跡	縄文時代早期 弥生時代中期 奈良時代・中世	竪穴住居 1 落とし穴 1　井戸 1 土壙 6　溝 1	土馬・瓦塔・鉄釘 平城宮式軒瓦 煙管・銭貨	縄文時代早期の竪穴住居跡の検出

1．調査地遠景(西から)

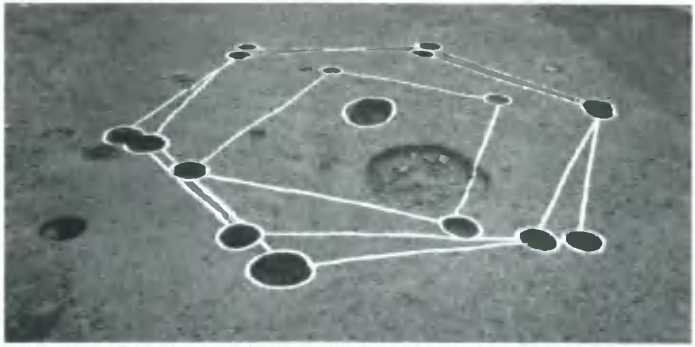
2．大田西奥田遺跡・住居 1 (南から)

3．大田茶屋遺跡・土壙35(北から)

4．同・落とし穴 2 (西から)

5．同・住居 4 ・ 5 (東から)

図版 2



1．大田茶屋遺跡・
住居 8（北から）

2．同・河道 1 土層
断面(北東から)

3．同・墓22
（南東から）

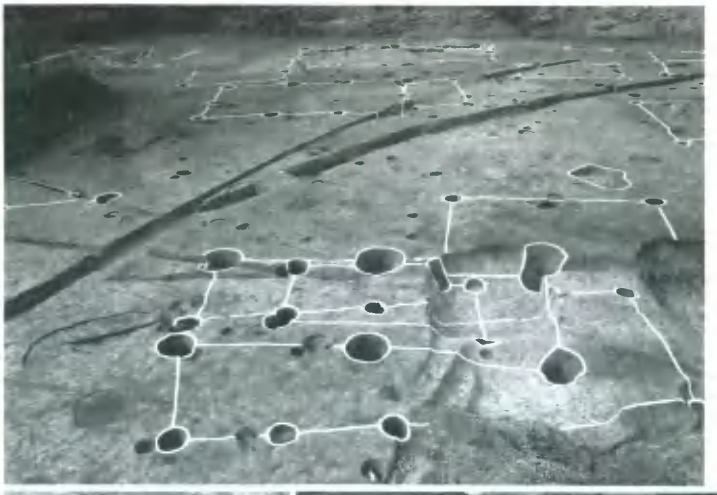
4．同・墓28(東から)

5　同・土壙43(南から)

1．大田松山久保遺跡全景（北東から）

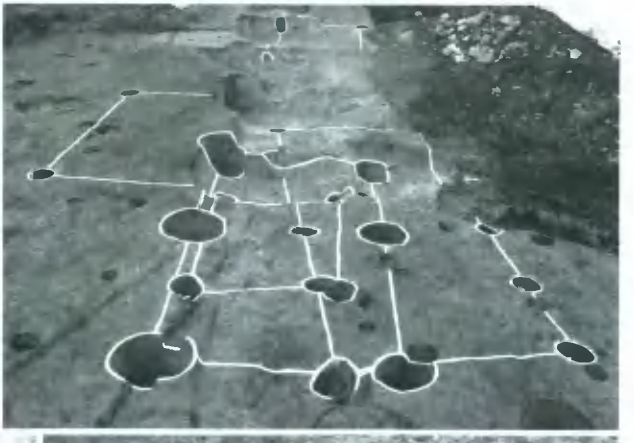
2．同・住居１・２（北から）

図版 4



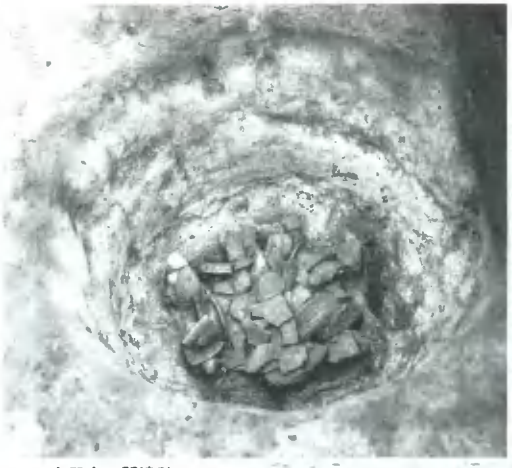
1．大田松山久保遺跡
・建物群南半
（東から）

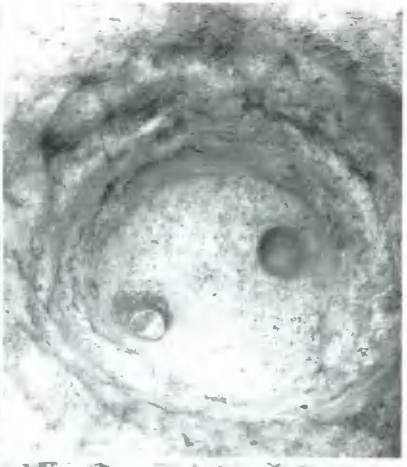
2．同・建物 1・
6～8・18
（南から）



3．同・建物 2 柱穴 2（北から）

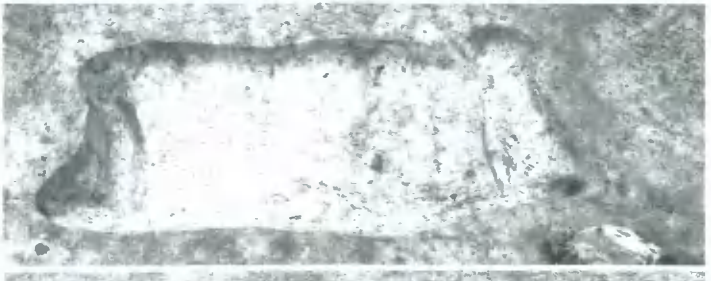
4．同・建物 4 柱穴 3（南東から）
5．同・土壙 3（南西から）





1．大田大正開遺跡・
貯蔵穴 1
（西から）

2．同・土壙 1
（北から）



3．同・墓 1
（東から）

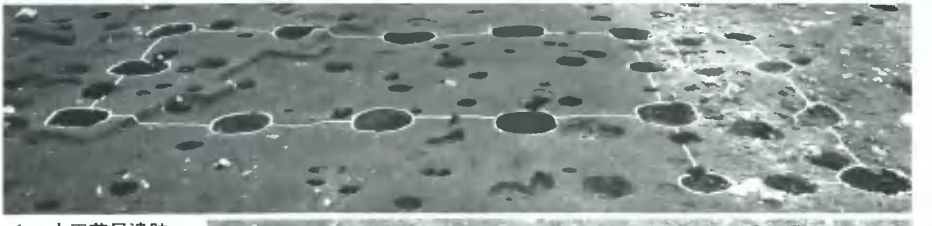
4．大田西奥田遺跡・
土壙 4
（西から）

図版 6

1．大田茶屋古墳
横穴式石室
（南東から）

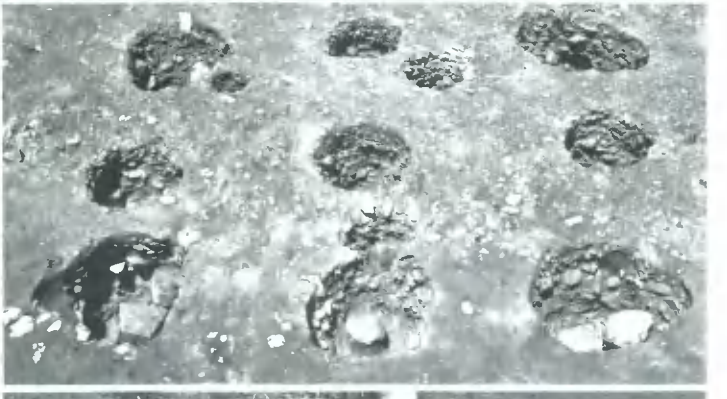
2．同・遺物出土
状態（南東から）

3．大田茶屋遺跡・
住居11
（南東から）



1．大田茶屋遺跡・
古代建物群
（北から）

2．同・建物52
（北から）



3．同・建物47
（東から）

4．同・建物49
（北から）

図版 8

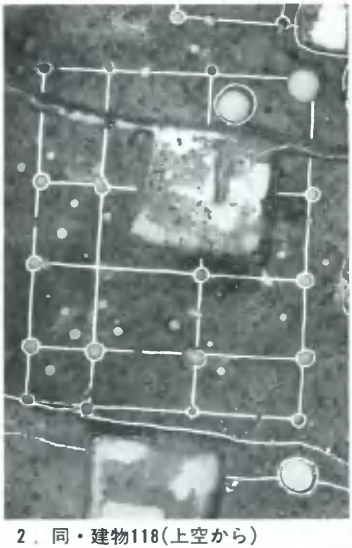
1．大田茶屋遺跡・柵1（南東から）

2．同・柵2・3（南西から）

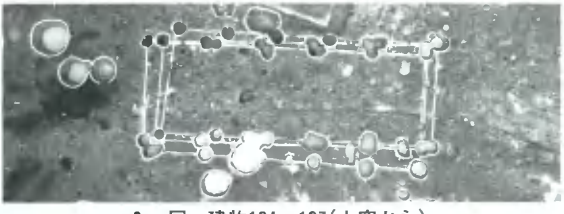
3．大田茶屋遺跡・西地区中世建物群（上空から）

4．同・建物62（南東から）

1．大田茶屋遺跡・東地区近世建物群(南上空から)



2．同・建物118(上空から)



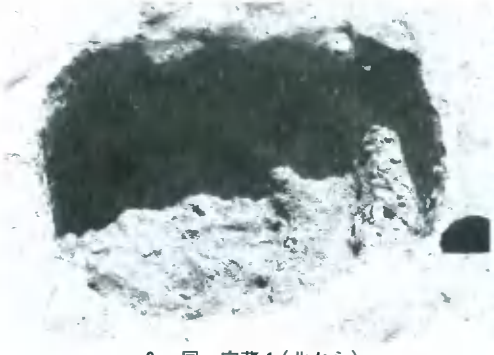
3．同・建物104～107(上空から)

4．同・建物71・72(東から)

5．同・7区中・近世遺構群(北西から)

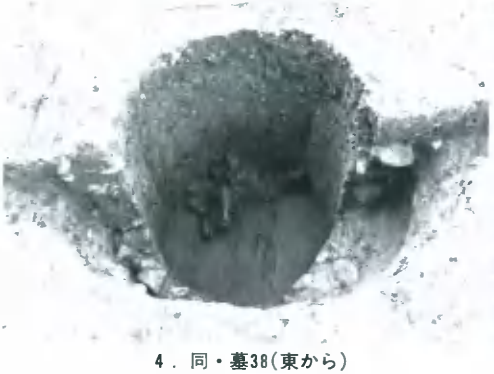
図版10

1．大田茶屋遺跡・池1（東から）



2．同・穴蔵1（北から）

3．同・瓦窯1（南西から）



4．同・墓38（東から）

5．同・墓39（東から）

18

1．大田西奥田遺跡・住居1出土縄文土器

29

28

2．大田茶屋遺跡出土縄文土器

S2　S2　S5

S3　S6

S7　S8

S11　S11

S13　S12

3．大田茶屋遺跡出土縄文時代石器

S16　S17

4．大田障子遺跡出土縄文時代石器

図版12

1．大田障子遺跡出土縄文時代石器

2．大田大正開遺跡出土縄文時代石器

3．大田茶屋遺跡出土弥生時代石器

S 36

S 36

S 32

S 37

S 34

S 33

S 47

S 38

S 35

90

S 39

147

149

1．大田茶屋遺跡出土弥生時代石器・土器

図版14

224

225

226

S 48

S 48

S 50

S 50

S 49

S 52

S 54

1．大田西奥田遺跡出土弥生時代土器・石器

1．大田松山久保遺跡出土弥生時代土器・石器

2．大田大正開遺跡・土壙1出土土器

351

352

353

356

S 57

S 59

S 60

S 58

1 大田大正開遺跡出土弥生時代土器・石器

S 61

S 61

S 62

S 62

S 64

S 70

S 65

S 68

S 69

S 69

1．大田障子遺跡出土弥生時代石器

図版18

1．大田茶屋古墳・大田茶屋遺跡出土古墳時代～古代土器・石器・鉄器

638

638

639

639

647

641

647

647

1．大田茶屋遺跡出土奈良時代軒丸瓦・軒平瓦

図版20

648

650

652

648

649

648

623

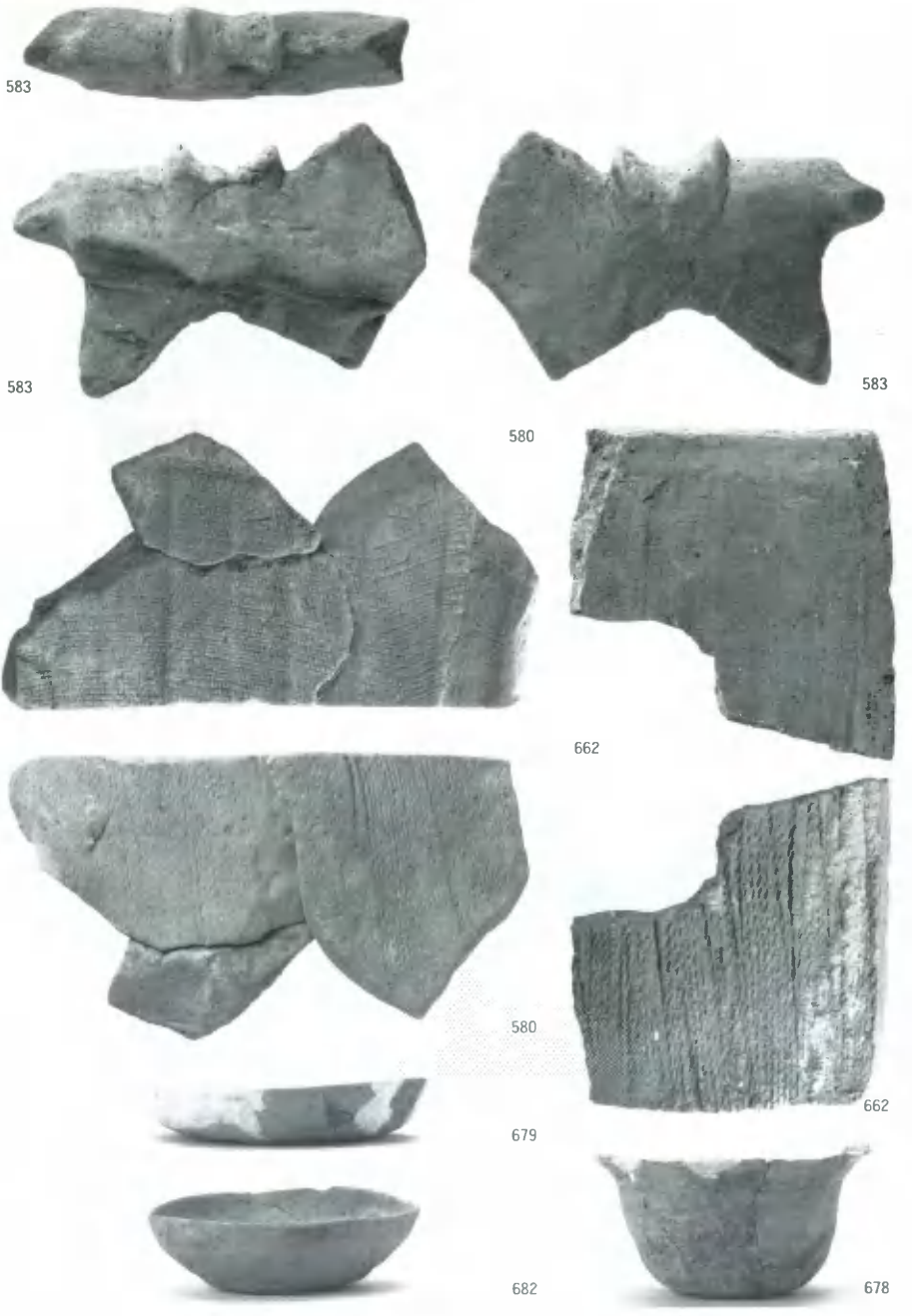
623

624

624

624

1．大田茶屋遺跡出土奈良時代軒平瓦・瓦塔



1．大田茶屋遺跡出土土馬・平瓦、大田障子遺跡出土古代土器

図版22

1．大田障子遺跡・土壙5出土土器

2．大田茶屋遺跡出土中・近世鉄器・土器

953

952

1008

949

948

951

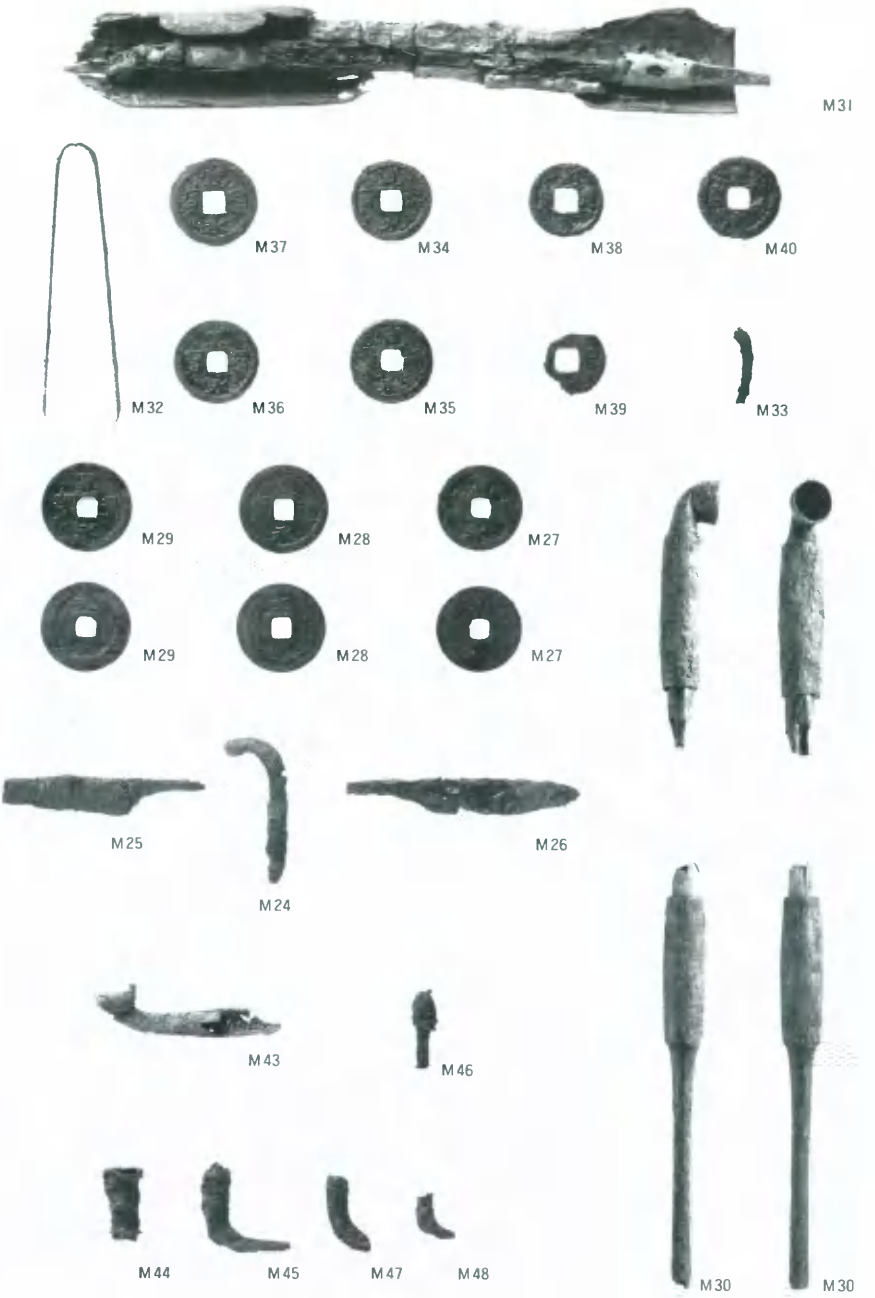
948

948

950

1．大田茶屋遺跡出土近世軒瓦・雁振瓦・瓦質宝殿

図版24



1．大田茶屋遺跡・墓39・38・36出土遺物、大田大正開遺跡・墓2出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　129

大田茶屋遺跡 2
大田障子遺跡　大田松山久保遺跡
大田大正開遺跡　大田西奥田遺跡

グリーンヒルズ津山建設に伴う発掘調査

1998年 3 月13日　印刷
1998年 3 月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行　岡 山 県 教 育 委 員 会
岡山市内山下2-4-6
印刷　山 陽 印 刷 株 式 会 社
岡山市富吉3098-1